



# 深を射す

---

—青潟大学附属シリーズ—  
高校編  
第五シーズン 2

---

舞夜じよんぬ

---

野に下りて三ヶ月目に入ろうとしている。

「また何のご用ですか」

抑揚のない口調で上総を迎えたのは、まったく三ヶ月前と変わっていない杉本梨南だった。いっそう長くのびた髪をポニーテールに結い上げて、半袖のブラウスと襟元の赤いりぼんを品よくまとめている。目につくのはやはり胸もとの透けるなにかだが、それが「何」のかわからない。

「修学旅行、どうだった」

単刀直入に尋ねた。中学三年生はおとといまで四泊五日の修学旅行に出かけたはずである。上総が聞くところによると去年と行き先など予定はたいして変わらないらしい。ただまるまる一日の自由行動が減らされたという話を耳にしている。昨年、上総たちの代がやりたい放題やらかしたつけが杉本たちに回ったのだろう。

「それなりに堪能いたしました」

「クラスの奴らとは、トラブル起こさなかつただろうな」

起こさないわけがない、とは思いますが杉本は冷静に答えた。

「向こうからつかかかれたというのがありますが、私には関係ございません」

「先生を間に挟むような騒ぎはなかったんだな」

「当たり前です。失礼なことをおっしゃらないでください」

表情はさほど変えず、ぴしゃりと言り返された。

——と、いうことは。

杉本もなんとか無事に修学旅行を乗り切ったということか。自然と肩から力が抜けた。

去年の三学期以降、上総はずっと杉本のそばに張り付いていられた。当然、高校進学に伴い校舎が分かると、同じ敷地内にある高校校舎・中学校舎、自然と気配を感じられなくなる。その一方で口伝えに杉本梨南のあまりよくない言動は聞こえてくる。

それが真実か嘘か判断は上総自身がすることであり、そのためには直接会って確認する必要がある。だからこうやって顔を合わせるため毎日中学校舎を訪れるというわけだ。

真実を、深く。見極めるために。

上総は校門から離れた場所を探してみた。どうも他の生徒たち……ほとんどが下級生だが……が出入りする場所は落ち着かない。決して悪いことをしているわけではないのだが、今までの経緯を知る教師や下級生からは冷たい視線で射られるだろう。生徒会役員、および委員会関係者ともできれば知らん顔をしたいところだ。

不純異性交遊とまではいかないが、一步踏み外したら自分がまた、数ヶ月前にやらかしたようなわけのわからない行動をとってしまうかもしれない。二月のあの頃はまだ、自分もその衝動がどこから出てきているのかわからず戸惑うだけだった。でも、今は。

——自分が押さえられないかもしれない。

静かに、自覚がある。

上総も中学時代とは違った感情のうごめきが芽生え出しているのを感じている。

無理にその感情に名前をつけたくはない。ただその巨大な蛇にも似た感覚に、上総は日々押しやられている。波の打ち寄せにも似ている。たどり着く先がなぜ杉本梨南なのかも今はどうでもいいことだ。

高校に入りもっとも楽になったことのひとつは、無理に自分の気持ちにレッテルを貼られなくなったことにある。

「お話が終わりましたら、私、先約がございますので帰らせていただきます」

「誰とだよ、先約って」

いらだちを隠す必要も杉本に対してはなかった。

あいかわらず杉本はつんと澄ましているだけ。

面倒なことなど心配しなくてもいい。

杉本はぴんと背を伸ばし、言い放った。

「私にも友だちがおりますので」

ぴんときた。また、例の集まりなのか？ 即、確認が必要だ。畳み掛けた。

「また集まっているのか。その女子たちは」

心配はないとは思いますが、いかんせん噂の対象だ。確認はしておきたい。

「東堂の彼女と、だろう？」

「はい、桜田さんの友だちも一緒です」

やはりそうだった。桜田という苗字だけは知っていた。

「なにをしてるんだ」

「予習復習とお茶会です」

少し前に聞いた答えと同じだった。

桜田という他クラスの女子と中学三年の春以降親しくなり、最近はほとんど行動を共にしているとは杉本自身から説明を受けていた。本来ならばそれはよいことだろう。杉本の心許せる友だちは現在、青大附中にほとんどいないはずだから。修学旅行を含め集団活動の多いこの時期、たったひとりぼっちでいるのは辛すぎる。それをとやかく言う気はない。ないのだがしかし、上総が自分の同学年サイドから小耳に挟んだ情報によると、決して喜ぶべきものではなかった。むしろ、眉をひそめざるを得ない事実が多々現れてくる。

上総は黙って杉本の目を見つめた。じっと動かさずに。返した杉本の表情にはためらいもとまどいも浮かんでこない。

「立村先輩は人を、先入観でもって判断されるのですか」

「いや、それは」

口にするとまた糾弾されそうなので控える。その間にも杉本はまっすぐまくし立てる。

「桜田さんは誤解されているようですが、きちんと物事を正確に理解してくれます。確かにいわゆる不純異性交遊などの経験は否定できないようですが、だからといって人間性を過去の行動だ

けで決めつける訳にはまいりません」

「俺はわかってるよ。杉本がそういうことにかかわらないってさ。ただ周りが」

例えば、生徒会長としてただいまスター街道ばく進中の佐賀はるみあたりとか。

心配そうな顔をして近づいてくるなんてことはないだろうか。

もちろん「心配」してはいるのだろうが、他の連中はそう取らないだろう。「不良化した杉本梨南を救おうとする、心優しき親友」として佐賀はるみの株があがる一方、杉本はどうしようもなく惨めな女子として見られるだけだ。

杉本は首を振った。

「周りがなんと言おうとも、私も桜田さんも、やましいことはなにひとつしてません。桜田さんの部屋に集まり、私が部屋を整えて、私が彼女たちの補習を手伝い、私がお茶を準備して、話をするだけです。桜田さんの友だちは公立中学の人なので、授業の進度が若干遅れています。また今のうちに準備しないと公立入試が大変なことになるとも聞いています。私が彼女たちにできることをしてどこが悪いのですか！」

——どちらにしても問題児なんだしな。

一方は優等生、もう片方は不純異性交遊常連

の札付き。不思議なコンビに見えるが杉本の場合、一年の頃仲良かった相手が、やはり花森なつめの様な癖ある女子だったことを考えると、自然なことなのかもしれない。杉本梨南は決して、言動だけで人を評価したりはしない。うそをつかないまっすぐな女子。

「まさかとは思いますが、妙なことに誘われてなんかいないだろうな」

「ばかばかしいことを！失礼な！」

もちろん上総もそう思うのだが、頭にはやはり、「朱に交われば……」の諺が浮かぶ。

たとえ杉本がそう思わなくとも、周りの連中にまた揚げ足を取られたらどうするのだ。花森なつめの時は、もともと母を通じて上総も面識があったし事情も知っていたから取り立てて問題もなかった。

だが、桜田については、

「東堂が命がけで更正させようとしている不良少女」

とか

「駅前のホテル近くの喫茶店で中学生売春の客を拾っていた。それも一人や二人ではない」とか、よい噂を聞かない。杉本もそれを事実として認識しているようだ。

果たして東堂は彼女を更正させられるのだろうか？

元三年D組クラスメートとの間では賭けすらおこなわれているこの現実、どう説明すればよいのだろう。

杉本はロボットじみた身のこなしで、ぺたっと上総の両腕を押さえた。

素肌に張り付く温もりに全身が硬直する

。杉本はこういったさりげない接触を無意識にする。

「立村先輩、お伺いします」

正面から、怒りにみちた瞳で。両目からドリル二本突き出して穴を開けられそうなほどに。

「あれだけ立村先輩は人から干渉されることを嫌っておられたというのに、なぜいきなり方針を変えようとなさるのでしょうか」

言葉に詰まった。

——確かに。

菱本先生との中学時代三年来のバトルを初めとする、上総の戦いの日々。それはしつこく善意の手を押し付けようとする連中との格闘の記録でもある。杉本の言う通り、上総のしていることはいわば過干渉と言われても否定できない。かといって干渉しないでいられる自分ではない。本能でもってしていること、身体の奥に潜む蛇が舌をちろちろ出して、杉本の背後にたむろしている何かを威嚇しようとしている。

喉の真ん中を丸く掘り進められたかのように、声が出ない。

「私も、不必要に干渉されるのは好きではありません。ましてや個人的交遊関係を詮索されたくはありません！失礼です！」

「いや、俺はただ」

早めの話題方向転換が必要だ。急いで上総は先手を打った。まずはあやまるが勝ちだ。

「ごめん、言いすぎた」

頭を下げて杉本の手は離れなかった。まだ、全身が硬直している。いいかげん手を外してもらいたいのだが、かえってだんだん強く押さえつけてくる。

「申し訳ない、杉本の言う通りだよ、あのさ、その手、そろそろ離してもらえるかな」

「お黙りなさいまし！」

指が食い込んだ。ひっかかれそうだ。

「私よりも、桜田さんに失礼です。修学旅行中、わけのわからない言い掛かりをつけてきた愚かな女子たちに対抗してくれたのは、彼女だけです」

「言い掛かり？」

気になる。深追いしてみる。

「そうです。帰りの船の中で、わけのわからない噂を立てようとした生徒会の女子たちに言いかえしてくれたのです。私の味方をすれば恐らく村八分になるでしょうが、真実を主張する勇気を持っていたのは桜田さん、彼女だけです」

「やはりいざこざがあったんだな」

本人はさほど問題とも思っていないようだった。よくある感情の行き違いだろう。

「佐賀さんあたりに何か言われたのか」

「たいしたことではありません。そのことよりも、たくさんの敵を作るという場において、桜田さんは私の味方でいてくれました。そのことに私は感謝したいのです」

杉本は敵をつくりやすい性格だが、一度心を許した女子に対してはそれこそ命がけで友情を捧げる。桜田の彼氏である東堂も相当なものだが、杉本の一途さを知る上総には、今後の桜田がどういうことを思うかが気がかりだった。

——佐賀さんと同じことにならなければいいが。

その友情が深ければ深いほど、裏切られたと感じた時の衝撃も大きく、悲しい。

「もし私の前で今後、桜田さんの悪口をおっしゃることがございましたら、私は立村先輩との縁を切らせていただきますので、ご理解のほどを」

「わかった、俺が悪かった」

しばらく頭を下げ続けているうちに、杉本の指先に目が留まった。

人指し指になにか色鮮やかな赤いビニールテープの様なものが巻き付いている。首の皮を引きつらせながら観察してみたところ、どうやら指輪のようだ。指輪というよりも裁縫で使う指抜きに近い。赤い和紙の上に金銀の雪が降り注いだような柄だった。きらら紙というのだろうか。よく和歌を書く時に使うような色紙の柄に似ている。

「杉本、指輪してきたのか」

当然、校則違反だろう。普段の杉本ならありえない。つっこんでやった。

杉本はさっと手を離し、指輪のはまった人指し指を首傾げて見つめた。

「修学旅行の体験実習で製作したものです」

「なんで？」

「千代紙細工を体験する工場に回されました。その場所では菓子箱を組み立てましたが、帰りにいくつか指輪用のキットを渡されました。宿でいくつかこしらえた次第です」

——そうか、そういうわけか。

思い当たる節があった。

——だから東堂の奴、指輪なんかつけてきて捕まったんだな。

今朝、東堂が規律委員にも関わらず、アクセサリーを身に付けてきたとして捕まり没収されたが、あとで先生から大笑いされつつ返されたという話を耳にした。

情報発生地は東堂の大親友である南雲からだ。間違いではない。

もともと東堂はくそまじめでもなくかといっておちゃらけでもない。中学三年間保健委員をきっちり勤めてきて、きちんと仕事はこなす性格だが、いかにも女子カラーの千代紙細工の指輪なんぞをつけたがる性格とは思えない。

南雲曰く、

「東堂大先生、初めて彼女に尽されちゃって舞い上がっちゃったらしいよ。修学旅行の土産らしくてさ」

先生たちもまた、東堂の彼女に対する更生への路と奮闘ぶりを知っていたらしく、見逃したという。笑い話でその場は終わったが、はたと気付く。

——そういえばまだ、杉本から修学旅行の土産もらってないな。

杉本は義理堅い子だ。付き合いのある人たちには必ず用意してくるのが常だった。昨日の段階で古川こずえや清坂美里には杉本から絵葉書つきのにおい袋が届いたという。もちろん女子限定だということは承知しているが、すでにあの卒業式以来公認の関係と誤解されっぱなしの上総に、なにも持ってこないことはないだろう。におい袋を贈られても困る……とは正直思うが、もし

それで迷っているのならばこちらから要求してやろうか。

いたずら心がわいた。その気持ちは、杉本にだけ、いつも感じる。

「杉本、修学旅行の土産物、俺にはないの」

さっきまでにらまれた大きな瞳を覗きこんだ。とまどっているのがかすかな口許の動きで伝わる。

「おみやげ……」

「俺が修学旅行に行った時は、手鏡持ってきただろう」

「西月先輩と一緒に、です」

細かいことは気にしない。あとに繋げたいだけの言い掛かり。

「待ってたんだけどな、いつ高校の校舎にくるかなってさ」

——絶対に来るわけないけどな。関崎のいる高校は、絶対に。

事情は重々承知している。言わずにいられないのは上総にひそむ巨大な蛇の頭か。さっき触れられた手のあとは残ってなんていないのに、じんわり感触だけが染み入り、上総を突き上げていく。

「そうか、用意してこなかったんだな」

「義務なんてありませんから」

きつく言い返された。責めるつもりはない。土産が今、手元にないのならば奪うだけだ。上総は口許に拳をつくり、何かを言いあぐねている杉本ににっこり微笑んだ。

もちろん狙うのだ。

「その指輪、ほしいな」

「どういうことですか」

「だから、修学旅行のお土産にさ、その指輪なら、いいかなと思ってさ」

杉本の戸惑いは当然だろう。上総も杉本をいじめたくてつついているわけではない。ただ、このままなにももらえないまま帰りたくない。押さえられないのは何故だろう。こんなだだっ子みたいなことを、なぜしてしまいたくなるのだろう。目の前で黙ったまま上総を見上げている杉本、その眼差しはかすかに揺れていた。他の奴らには見出せないかもしれないが、上総にはわかる。困っているんだということが。

「東堂みたいに人前で見せびらかしたりしないし、それに」

勢いつきすぎて言葉が止まらなかった。

「関崎の前ではもらったなんて絶対言わないからさ」

杉本の反応をみるよりも先に、自分の言葉で打ち砕かれた。

——何言ってるんだ、俺は。

杉本が関崎乙彦のことを今だ想っていることは十分承知しているはずなのに。

たとえ周囲ではあの卒業式でやらかした英語答辞の一件以降、上総と杉本梨南を公認のカップルとして決め付けていたとしても、当の本人同士はそれが存在し得ないことを知っていることを。だからこそ、こうやってふたりは一緒にいられる。こうやって、わけのわからないだだっ子に

なり、杉本を困らせようとしている自分を、受け入れてもらえている。

——関崎を想うからこそ、俺は杉本の側にいられる、ただそれだけだ。わかっている。

わかっている、言葉のかけらが激しく鼓動を打つ。飲み込むのみ。でくの坊のように上総はただ、突っ立ったままだった。

杉本は横を向いた。人指し指の指抜きっぽい指輪をそっと抜き取り、もう片方の掌にのせた。しばらく視線を指輪に落とし、人形のように正確に九十度方向転換した。

ドリルのような眼差しはそのままに、

「あの方には、見せないと約束していただけますか」

相変わらずまっすぐな口調で。

「使い古しのものでよろしければ、どうぞ」

両手で差し出された。

小さな千代紙細工の指輪を受取り初めて気が付いた。

金具に丁寧にはりつけられていて、縁には金メッキがほどこされていた。紙の間に空気の入った形跡もなく、細かい皺ひとつない。杉本の指先の器用さが窺い知れる。小物だからと馬鹿にはできない。それなりに時間もかかる品物と見た。

——東堂が舞い上がるわけだ。

ひとりで納得し、上総は杉本梨南に礼を伝えた。

指輪を握りしめた。かたく手のひらの奥に響いた。

「ありがとう、満足だよ、杉本」

今度は自然と笑みがこぼれた。杉本と過ごす時、かならずこんな瞬間と出会える。杉本の無表情さの奥に潜む、どうしていいかわからないような揺れ方。今、この時見せた顔もそうだった。そっと上総の顔を伺うようにして見あげた後、

「では、失礼します」

そそくさと背を向けた。上総は見送った。

掌の奥の堅いものをもう一度握り締めた時、上総の身体に潜む大蛇はおとなしく首を垂れたようだった。これからゆっくり、飼いならさねばならない。

意識の上にはっきりとあがってきた気持ちをコントロールする術を一刻も早く知りたかった。

——杉本から修学旅行の土産をもらった男子は、俺だけだな。

上総はその指輪をハンカチに包み、かばんの奥に押し込んだ。誰にも見せる気はない。

当然、杉本の想うたったひとりの男にも。

——関崎にも、決して。

朝っぱらからみな元気でよいことだ。

いつものように上総が生徒玄関をくぐるとロビーの柱回りに備え付けられている椅子に座り語り合う連中がいる。陰では「外部三人組」とささやかれている。男ふたりに女ひとりという絶妙なバランスだ。夏服のYシャツをほとんど着崩さず、なにが面白いのか時折膝を打って笑っている。上総がいることに気が付いたひとりが、脳天気には挨拶する。

「立村、おはよう！」

英語科一年A組、同級生の関崎乙彦だ。シャツこそきちんとボタンをかけたままだが、汗っかきなのかやたらと手で空気を喉元に送っている。ちらと他のふたりも上総に視線を向けたがすぐ、共通の話題へと戻っていった。六月第二週、まだまだ涼しいはずなのに。

——そういえば関崎は、朝バイトをしているんだよな。

上総は挨拶代わりに軽く頷いてみせさっさと教室に向かった。

一年A組の教室は一階の玄関すぐそば、昼休みは菓子パンの販売も行われる場所がロビー。昼休みすぐに買いに行けるのが育ち盛りの男子には嬉しい話だ。

——あと、遅刻しないですむ程度か、メリットは。

英語科A組に所属することの利点を上総はあまり感じることはない。むしろかばんをおいたのち、友だちの固まっているC組に潜り込むことが多い。すぐに教室へ入ることができるというのは、居心地のよさにもよるが、なかなかしんどい。

「おはよ、立村くん」

早めに集まっているのは男子よりも女子のほうが多い。中学の頃からその傾向は全く変わっていなかった。教室でちろと上総をねめつける視線が圧倒的に多い中、明るく声をかけてくれるのは、中学時代の同級生たちだった。

「おはよう、早いな」

古川こずえと清坂美里くらいのものだ。ただし、古川がもともと英語科のクラスメートであるのに対し、美里は隣のB組所属だった。中学時代三年間、泣き笑いを共有してきた仲間たちが、クラス分かれした今でも自然に繋がっていられるのが上総には心地好い。

美里はこずえと顔を見合わせた。

「だって今日、朝の週番だから。規律委員は大変なのよ」

「朝早いわけか、でも玄関にはいなくていいのか」

「うん、大丈夫。玄関がしまる直前に集まっていればいいから。まだ時間あるしね」

上総は納得しかばんを机においた。確か規律委員の場合、遅刻者に違反カードを切る義務があるはずと聞いている。だがまだ一年の美里には、あまり面倒なお役目は回ってこないようだ。比較的規律委員会は、仕事の内容と相反して自由なところがあると、中学時代規律委員長を務めていた南雲秋世は語っていたが、高校はどうなのだろう。少し気に掛かる。

「立村、わりい、今日のグラマーの予習、ノート見せろよ」

「適当に見といてくれ」

集まっていた数少ない男子たちにも軽くあいさつをし、ノートを手渡した。

さほど話すわけでもないが関係悪化しているわけではないクラスメートとはうまく付き合っていきたい。英語科と銘打たれているだけあって非常に授業はハードだと言われている。上総自身はあまり感じたこともないが同級生たちはみなひいひい言っている。ノートを差し出すだけで人間関係がうまくいくのなら、それに越したことはない。

「あのさ立村、関崎に会わなかった？」

かばんから教科書とノートを取り出しながらこずえが問掛ける。机にもたれて、腕の週番ワッペンをいじっている美里も含め、今来たばかりのようだった。まだ八時を少し回ったところだ。

「玄関にいたけどな」

「やっぱりね」

なにがやっぱりなのかはわからないが話を合わせておく。

「また外部の子たちと固まっているんでしょうよ、ね、美里」

美里はしばらく返事をしなかった。こずえの支度する様子を眺め、

「関崎くん、そんなに外部同士のほうが落ち着くのかなあ」

しょんぼり呟いていた。

上総は聞こえないふりをした。答えは心の中にとどめておく。

——たぶん、な。

いつからかはわからない。

きっかけが新入生合宿の辺りからと情報はもらっているが、上総は確認していない。関崎がやたらと外部三人組でつるむようになったのは合宿第一日目のドッジボール大会でのご褒美、高級中華料理をいただいた際、たまたま関崎と外部生の女子が隣り合ってからと聞いている。現場を確認した一部の男子から聞くところによると、ほぼ初対面にも関わらず食事の席では、関崎とその女子、ふたりの世界をしっかりと構築し、誰も入ってこれないバリアを張っていたという。。

残念ながら上総は行きバスで車酔いしてしまい、そのまま一日宿で死んだようにひっくり返っていたため、ふたりのいちゃつきぶり……と解釈しておこう……を確認はしていない。ただ、その日を境にやたらと楽しげに盛り上がっている外部三人組を見掛けるようになったわけだ。もともと外部生は放課後、補習授業が用意されているため、まとまりやすい環境下には置かれているのだが、それにしてもああしょっちゅうだべっているといやでも目立つ。外部生で必ずメンバーに加わっている女子が、静内さんというB組女子評議委員というところまでは聞いているが、それ以上は今のところ噂のみ。美里を通じて聞き知るB組事情で推測するだけだ。

——気の合う同士、語り合うのは別にかまわないが。

上総はちらりと清坂美里を見た。

元気がなさそうなのは単なる寝不足だけではなさそうだ。

「清坂氏、ちょっと」

呼び掛けた。すぐに近付いてきた。

「なあに」

「これ、あげる」

これから週番を控えている規律委員に渡してよいのかと思うが、今渡しておかないとタイミングがずれてしまう。A4版の大きめ封筒にまとめておいたスクラップノートを用意しておいた。空気が紙と紙の間に入らないよう丁寧に処理したので、綺麗には収まっているはずだ。

「こういうの、好きかなと思ってさ」

覗きこみ美里は小さく、歓声に似たなにかを声にした。

「うわあ、これ全部、外国の雑誌でしょ！凄い！立村くん、これ全部集めてくれたの？」

「うん、フランスなら清坂氏の好みかなとか思った」

当然、そう答えた。

「もしかして、これって、バースディプレゼントってこと？」

「かなり遅れたけど」

美里の顔に浮かんだのは、軽やかな満面の笑顔だった。

この表情が心地好かった。

たぶん、中学時代には感じなかった感情だろう。余計なものを求めてこないと知っているから、上総もめいっばい美里にまっすぐ気持ちを伝えられる。

「ありがとう！これでまた、おしゃれ研究できちゃう。フランスの着こなして日本と違って、ちょっとさりげなくせに可愛いの！」

美里のおしゃれ談義は半分以上わからないので相槌だけ打っていた。

すると聞き付けたこずえの茶々がやっぱり入った。

「ちょっとあんたたち、なあにエロ本の交換会やってんの！いくらお年頃でもねえ、朝っばらからさあ」

下ネタ女王の名をはせた古川こずえ健在である。大抵朝っばらから身も心も立ち上がるような下ネタ挨拶をしてくるのは古川のほうが多いはず。最近は哀れにも関崎に矛先がむいている。耳には入っているが男子である以上しっかり言い返すのが義務。上総はいつも知らんぷりを決めこんでいた。当然ただいまの勘違い発言も無視をする。

「こずえ、変なこと言わないでよ！立村くんいやがってるでしょ！」

「関崎はまだ来てないから大丈夫」

「そんなんじゃなくて！」

美里はいきり立った風に言い放ち、時間割の隣に張り付いている時計を見あげた。

「あ、そろそろ行かなくっちゃ！ 週番の時間！」

すばやくかばんに上総の渡した封筒を押し込んだ。

「立村くんありがと！じゃあまたね！」

急ぎ早にA組から飛び出していった。

——そうか、やはりな。

関崎の前では、上総との過去を匂わせたくない、そういうわけだ。

修学旅行最後の夜にあわや不純異性交遊すれすれの行為をふたりでやらかし、その後何度もぶつかり合い、やっとたどり着いたふたりの場所。

もちろん美里と「付き合い」を経験したから得られたたくさんの思い出や感情もあるけれど、今、ようやく友だちという場所でおだやかに語り合えることに感謝している。

他の生徒たちからは

「立村は清坂に愛想つかされて逃げられた。今はお情けで友だち付き合いしてもらっているだけ」

という見方をされているがそんなのは気にならない。

上総からすると「付き合っ」いた頃よりもずっと、美里を身近に感じる。好きだ嫌いだと言いつい合うよりも、三年間で集めた美里情報をもとに喜ばせたいと思う。そして美里も素直に両手を出して受け取ってくれる。気持ちの往復が行われて完結し、めんどろなことはなにひとつない。与えたものを受け取ってもらえることが、こんなに嬉しいとは中学時代考えてもみなかった。

「立村、ちょっと聞いてよい？ 杉本さんから修学旅行の報告は受けたの？」

こずえが上総のノートを手勝手に持ち出している。英語のリーダー訳だから別にかまわないのだが、下ネタ襲撃を覚悟しておいたほうがよい。こずえと語る際には欠かせないチェック項目である。

「関崎のこと、相変わらずなのかねえ」

「そんなの知るか」

こずえには過去三年のこっ恥ずかしい事件をしられているわけだから、隠すことはほとんどない。かといって大声で言い返す必要もない。ぼそりつつぶやくだけだ。

「で、聞きたいんだけど立村さ、最近いろいろ噂を聞いてないかなあ」

「なんの」

「ほらさ、中学の生徒会とか、杉本さんと佐賀さんたちとの戦い状況とか」

「俺の仕入れる情報は片寄ってるから役立たないだろう」

さりげなく交した。こずえの意図するところはだいたい読めていた。

かつては評議委員として動き回っていた上総には、それなりに附属中学上がりのネットワークを握っている。杉本梨南がらみの出来事もそうだが、それ以上に本条先輩のワンツーマン教育を受けた唯一の生徒だ。たとえものにならずとも、いざという時のために準備だけはしている。たとえばある日、担当委員が転校したりして空席になったら、上総の集めてきたデータはおそらく役立つだろう。元評議委員長だった天羽あたりに……もちろんA組の委員連中も対象ではあるが、おそらく呼びはかからないだろう。

上総のかつての経験を、高校入学後初めて評議委員を務めるはめとなったこずえはかなり欲しているようだ。こちらから無理には教えないけれども、頼られたらやっぱり協力したいと思う、それも本心だった。

「だからあんた、そう卑屈になるのいいかげんやめな！ ったくいつまでたっても本当に成長しないねえ」

嫌味をひとくさり。すぐに続けた。

「いやね、ちょっと気になることあるんだけどさあ、たいしたことないんだけど」

こずえの勘は鋭い。鼻が利く。最近何か事件が起こったとは聞いていないが、こずえが第六勘で感じるなにかがあるのだろう。今後のために情報収集したい。さりげなく尋ねた。

「たとえば」

「ほら、最近男子たちがさ、千代紙細工のアクセサリーとか指輪とかちらつかせてるじゃない、あれ、なんなのさ」

——やっぱり流行り出したのか。

二週間前に上総が杉本梨南から奪い取った品の類らしい。もっとも上総は学校に持ち込むようなことはしない。我が家の机の引き出しの中に鎮座ましている。

「この前、東堂が没収された指輪のことか」

「そうそう、あいつが中学の不良彼女からもらったって奴。あれからやたらとね、男子連中が赤とか黄色とか乙女チックな花柄を指先やらノートやらいろんなところにちらつかせてるのよね」

「それは中学の修学旅行がきっかけだろう」

一応、そしらぬ顔で続けた。

「なんでも体験実習とかで千代紙細工の講習があったらしい。それを土産にただけだろうな」  
やっと合点がいったのか、こずえは三回手を打った。何度も頷いた。

「そっか、そういうことかあ。だから南雲が大量に千代紙グッズを押し付けられていたって訳かあ」

「中学三年の南雲ファンが渡したんだろうな」

上総は強引に奪い取ったが。

「恋が実るおまじないってとこね。いいじゃんそれ。だからかねえ」

「何が」

まさかとは思うがかぎつけられたのだろうか。気になるがポーカーフェイスを決めこんだ。

「なんで藤冲もあんな千代紙細工の指輪もっているんだかって思ってたけど、そうか、中学に彼女ができたか」

藤冲については上総としてはノーコメントである。

知ってか知らずかこずえはノートを写しながら続けた。

「まあね、おくれればせながらあいつにも春が来たのはめでたいことだけど、評議委員会をああおっぴらにさぼるのはどんなもんかと思ってね」

——そうか、探りをいれたいというわけか。

もう少しつつこんでみた。

「今の時期さぼると、上から目をつけられないのか」

「つけられまくりに決まってるじゃんよ。まあね、あいつも最近やる気ないのかなとも思うけどね。で、最近流行りの千代紙手帳なんか持ってるし」

——相手は誰なのか確認していないのか。

その点だけ気になった。古川こずえの性格で、そのことを調べ尽くさないわけがないと思う。

まだ確認できていないのだろうか。

「そんなに気になるのなら、聞いてみたらいいだろ。ここで俺に文句いってないでさ」

意外そうな顔でこずえは見返した。

「立村かまさかそんなこといとはねえ。みんなからさ、あれだけべたべたされたくないとか騒いでるくせに」

「あのさ、今の問題は評議としての活動を手抜きしているということだろう？」

痛いところを突かれたがあえて流す。話を逸らさないのがコツだ。

「俺の言いたいのは評議委員という立場から見た上で、どうすべきかってことなんだ。もちろん、誰かと付き合っただうのこうのという話は立ち入らなくとも、委員会活動をないがしろにする訳は聞いてみる必要があると思う。俺が古川さんの立場なら、そうするな」

「なるほどね、そういう訳かあ」

「それとついでに」

上総はもうひとつ付け加えた。

「複雑な事情があるようなら古川さんの胸一寸に押さえておいてその上で放置するというのも手だよ」

「複雑なことってなによ」

「たとえばその相手の事情、いじめられていて仕方なく守っているとか、その他いろいろあるだろう。評議連中には話せないことならあえて放っておいてもらった方が助かる。とりあえず今古川さんがすることは事実関係の確認だけじゃないかな」

こずえは上総の意見を珍しく黙って聞いていた。

眉間に皺までこしらえている。

耳年増なのはいつものことだがまだ十五、十六のみそらでそんなに老け込んでどうするのだ。

「立村、あんたも鋭いこと言うね」

少し言葉をくぐもらせたが、すぐにきっぱりと割りきった口調で。

「けどさあんた、今のままで本当にいいわけ？ 私にアドバイスして、今の意見をすべて私の手柄にされてさ、それで満足できるわけ？」

いきなり真面目に問い掛けられた。言われた意味がわからず問い返すしかなかった。

「なにがだよ」

「なんでもないよ。ちょっと思いついただけ。いろいろサンキュ。助かるね」

それ以上こずえは何も言わずに、戸口を見つめた。会話の対象その二、の登場だ。

——今日もあいつに朝から下ネタ攻撃するってことだな。

上総はひそかに心の中、合掌した。関崎もこの三ヶ月、たっぷり古川こずえ下ネタ女王様の洗礼を受けているのだ。

「立村、おはよう」

毎日、よせばいいのに元気なあいさつだ。

上総がため息まじりに小声で答えるといつものようおになにか話したさそうな顔をし、近寄ってくる。

しかしそれが果たせたことはほとんどない。関崎の周りにはすぐに、

「ねえ関崎、今日の朝の一発。しっかり実がつまっていた？ それとも出しちゃった？」

さっさと席を移動したこずえが話しかけているし、

「関崎、今日はひまか？ また結城先輩にとつつかまっていたのか？それは災難だ」

などと兄貴風ふかせて話しかけるいかつい顔の藤冲が、

さらに、

「関崎、これ、ベースボールカードの本、入ってきてないかなあ」

とぼよんと張り付く片岡がいる。

——兄と弟とお姉さんにかこまれた擬似兄弟の図。

とてもだが嫌われものの上総は近付けないし、その気もない。

——それでいいんだ。

外部入学生というハンデを考えるならば、関崎のためにも近寄るべきではない。

関崎乙彦が入学してくるとわかった日から、上総は覚悟していた。

公立中学から入学してきた関崎にいかにも旧知の親友面して近づくよりも、最初から嫌われ者のひとりとしてそっと距離を置くのがお互いのためにもよいことなのだ。

——清坂氏、もうそろそろB組に戻った頃か。

これから先、美里が関崎への想いをあからさまにするであろう日のためにも、かつての交際相手だった自分が目立つのは決して、許されないことだ。

家に戻り、まずは留守電を確認する。五件入っているが、そのうち四件はすぐに切れた後。たぶんセールスの電話だろう。そして五件目、いきなり受話器から響いた声は、

——関崎です。また電話します。

簡単な一言だった。

上総は即、消去ボタンを押した。アナウンスで「ゼロ件です」のしゃちほこぼった声が流れた。折り返しの電話をかけることはしなかった。

——たぶん、今の時間は居ないだろうし。

父の仕事上、留守番電話を設置せざるを得ず、仕方なく今年の春から使っているのだが、実は上総宛のメッセージばかりで頭が痛い。

——セットし忘れたことにしておこうか。

特に、関崎の声が入っている時はそう思う。

——それにしても関崎って、こんな奴だったろうか。

部屋に戻り、窓を開け放ち制服のままベッドに横たわった。もう六時半過ぎなのに空はまだ明るい。六月中旬ともなるとだんだん日の落ちるのが遅くなるようで、風がまだやんわり冷たく感じる程度。庭にはあじさいの花が緑色のつぼみを少しずつ膨らませているようだ。まだ、夏には遠い。

——俺の知っている関崎とは、やはり違う。

上総は目を開けたまま、天井を見上げた。

——いくらなんでも、毎日留守電にメッセージを入れるような奴には思えなかったが。

自分自身の感覚で考えても、少し、何か、違う。

上総の知る限り、大抵の男子はあまり電話を好まない。もちろん何か用事があり相談しなくてはならないことがあればかけるが、それ以外は極力避ける。家族の居る部屋に大抵の場合電話機は設置されているし、そこで変な話をするわけにもいかない。何よりも長電話で怒られるケースの方が多い。一度上総も、たまたま誰かと長話をするはめになった時、母からの連絡を受けることができず思いっきりひっぱたかれたことがあった。

よっぽどのこと、用件がなければかけてこないものなのだ。

しかも、関崎とは。

——あれだけ俺と関わらない方がいいって言うておいたのにな。

できる限り上総は話し掛けないように心がけていた。挨拶はもちろんするけれども、それだけだ。関崎もあらゆるやり方で上総にアプローチしてくるが、それもさらっと流すようにしていた。うっかり変なことを口にして、関崎へなんらかの理由を与えてしまうのは避けたかった。

——また、かかってくるんだろうか。

父は今日も遅い。電話が鳴り響いた時に気が付いたら出なくてはならないだろう。

上総が関崎乙彦と初めて顔を合わせたのは、中学二年の学校祭でだった。

当時、本条先輩にべったりくっついて評議委員長教育なるものをみっちり受けていた時期だった。評議委員長だった本条先輩のお供として、生徒会室で他校の生徒会役員たちと挨拶する程度のものであった。その頃はまだ改選が行われておらず、生徒会副会長だった藤沖も同席していたはずだ。

何校か生徒会役員グループが訪れては挨拶し、言葉を交わしたが内容は殆ど覚えていない。当然、関崎が生徒会副会長として所属していた水鳥中学のグループとも何かかしら話をしたはずだが、全く記憶になかった。上総はどうも人の顔と名前を一致させるのが苦手だった。

その後、両校の生徒会顧問教師が意気投合したらしく、いつのまにか交流会を行うことが決まっていた。話自体は生徒会から流れてきたのだが、青大附中の場合どちらかというの評議委員会が優先される形となっていたので、いつのまにか上総が渉外という形で担当することとなってしまった。最初のうちは本条先輩がどんどん進めてくれていたが、評議委員長に指名されてからは自分ひとりでやらざるを得なかった。

何度か水鳥中學生徒会役員たちと顔を合わせて、両校の交流会を開くためのさまざまな準備を行い、とんでもないハプニングも乗り越えていくうちにいつのまにか、関崎と親しく交わるようになった。もともと水鳥中學生徒会役員の連中が、少し不良じみた……というか、いわゆるヤンキー風ということもあって、正直苦手な感じもしたのだ。その中で唯一、同じ感覚で話をすることができたのが、関崎だった。

——確か、「シーラカンス」だとか言われていたんだろ？

いろいろな出来事の合間に関崎の人柄を知ることもできた。

幼なじみの親友のためならば、土下座することも厭わない。

堅物で融通が利かないガリ勉野郎でありながら、どこか抜けてて憎めない。好きな女子……別に関崎がそんなことを言ったわけではないが……の前ではゆで蛸さながらに真っ赤な頬を膨らませ、意味もなくぐるぐる回ったりもする。

怒鳴る時は怒鳴り、喜ぶ時には素直に万歳する。

非常にわかりやすい感情表現をする男だとは、もちろん感じていた。

しかし、こういったらなんだが、女子受けはしないだろう。

——制服をきちんと着たほうがおしゃれに見えるから、制服厳守を主張した。

などという全くわけのわからないエピソードを耳にするにつれ、上総の中では関崎の性格がどちらかという内に籠るタイプなのではというイメージが湧いていた。だからこそ、うまが合う。そんな気がしていた。

——青大附高に入ってからいったい、何があいつを目覚めさせたんだ？

正直、上総にとって現在関崎の置かれている立場には信じ難いものがある。

なによりもまず、女子たちからの絶大なる人気。あれはいったいなんなんだろう？

もちろん、外部生だからというのもあるのかもしれない。もともと青大附高に受験で入ってくる数少ない外部生は、どうしても興味の的となる。附属上がりの生徒たちは合格発表の直後、すぐに外部生の仔細についてありとあらゆるネットワークを集めて調べ上げるのが常だった。公立中学の友だちに少し動いてもらえればあっさり情報は入るし、彼ら彼女ら外部生がオリエンテーションで青大附高にやってきた段階で完璧に知り尽くされていると言ってもよい。もちろん外部生たちがそのことをどこまで気付いているかはわからない。しかし、関崎の性格や噂話などを聞く限り、女子たちの人気者になるとは思えなかった。むしろ、堅物すぎる関崎にとって、脳天気な青大附高は居心地が悪いのではないかと密かに心配すらしていたくらいだ。

なのに、あれはなんだろう？

オリエンテーション当日から、いきなり直球そのものの自己紹介をやってのけた関崎は、あっという間にクラスのヒーローとして祭り上げられてしまったではないか！

ちゃんと前もって関崎には、上総との交遊を話さないようにと釘をさしておいたにも関わらず、あっさり「俺は立村くと友だちで」とばらしてしまい、上総としてはひやひやものだったのだ。上総自身は女子にどう思われようが知ったことじゃないし、最初から嫌われ者の道をそのまま歩いていくつもりだったのでどうでもよかったのだが、関崎まで最初からそんな扱いをさせるつもりはなかった。だから、絶対に言うな、とあれだけ言うておいたのに。

——俺と友だちだとか言って、それで嫌われなかつただけでも奇跡なのにな。

上総の危惧は幸い、取り越し苦労に終わった。

入学当時から世話役として付き添った藤沖の存在も大きかったのだろう。

元・青大附中学生徒会長で、当然A組の評議委員を早い段階で打診されたと聞く。高校のクラス自体は早い段階で決まるので、クラス委員関係は四月を待たずにある程度決定するのが常だという。最初からみそをつけていた上総には、一切お声がかりなどなかった。

——だから、それがよかったのかもしれないな。

淡々とそれを受け入れる。今ならそれが、たやすくできる。

三ヶ月前の卒業式から、何かがゆっくりと変わっていった。

自分の思っていた通り、一年A組では存在があるのかないのかわからなくなり、同時に担任の麻生先生からも無視に近い扱いを受けていた。それはそれで構わない。中学時代やたらとしつこくまとわりついてきた菱本先生に比べたら楽だった。

だからこそ、関崎と多少縁があったとしても、周囲からは……特に女子たち……全く見えないものとして扱われ、迷惑にもならず居座ってられるわけだ。

かつての堅物ど真面目秀才野郎は、青大附高において、もはや誰もが知らぬものなし新しいヒーローとして熱い視線を浴びている。たぶん戸惑っているのは関崎自身だろう。

——いい奴なんだが、けどな。

上総は起き上がり、机に向かった。予習復習なんてする気はない。

引き出しからノートを取り出した。購買部で手に入るタイプの、A5版のノートで表紙に浮き彫りの校章が浮かんでいる。一センチくらいの厚みがある。

開いてみた。書き込みはすべてドイツ語で行っている。英語なら両親もそれなりに読めるのでへたなことを書けないが、ドイツ語ならばうまくごまかせる。ドイツ語の文法は若干、英語に近いところがあるので上総も短期間でなんとか、マスターできた。もちろん大学の語学の授業、および辞書頼りなので正しい文章なのかはわからない。別にいいのだ。日記用なのだから。それも極秘の。

高校進学時、「おちうど」のおかみさんがお祝いに贈ってくれた万年筆を使う。

綴り始めた。だいが筆先も自分なりにしなってきた。インクの出すぎることもない。

——関崎の件で天羽と話をする。天羽の考えとしては、今のうちに青大附属の基準を関崎に話しておくべきだという。難波、更科も同意見だ。しかし、五月の新歓合宿が終わった段階で関崎のポジションがA組の中で確固たる場所にあることを説明し、行動を慎んでもらうように話をつけた。天羽たちは納得いかないようだったが、まずは前期の改選が終わるまで様子を見るということでもまとまった。

現段階において、天羽たちの不満を押さえることが僕のできる唯一の方法だ。

元・青大附中評議委員長だった天羽にとって、体育委員というポジションは納得のいかないものだというのは承知している。また、中学時代全く委員会を経験したことのない羽飛が評議委員を務めているのも、不可解だろう。僕自身は羽飛で問題ないと考えているが、それはまた別の問題だろう。羽飛についてはこれ以上何も言う気はない。

だが、これから先、A組の関崎の言動によっては、天羽たちC組チームがなんらかの行動を起こさないと限らない。関崎については僕なりに、折りを見て話をしていくつもりだが、今の段階では情報収集に止めたほうが良いと考えている。

もちろん、個人名はイニシャルだ。

万が一ノートを盗まれたりしても、ドイツ語堪能な人間でなければ内容がばれることはほとんどないだろう。その点、自分に与えられた語学習得能力には感謝している。うっかり本音を書いて自分の首をしめるはめにはならないだろう。

——万が一のことも考えて、フランス語で書くことも考えた方がいいかな。

放課後はほとんど語学の授業を受けに大学へ出かけることについてやされていた。中学二年の頃から英語の講義を週一の割合で受けることは許可されていたが、高校進学後は一気にその科目が増えた。同じ立場で、美術関連の講義を受けに通う金沢も、似たような状況らしい。

もともと部活に入る気もなかったし、委員会活動も一切手を出さなかつたの上総にとってはそれほど負担ではなかった。もっとも面倒なのはそれプラス、理数科目の補習も加えられた点だ。はっきり言って、これは苦痛以外の何者でもない。中学時代狩野先生の下で、いろいろと指導されていた頃は相性もあったのだろう、さほどでもなかったのだが、どうも担当の先生とうまが合わない。顔色を見ながら必死に問題を解き、「こんなのもできないのか」とか言わんばかり

の表情を伺っては落ち込む、の繰り返しだ。

もっともこれは、上総も最初から覚悟していたことだった。

もともと、本来自分があるべきポジションなのだから。

落ちこぼれで嫌われ者、それでいい。まかり間違っても評議委員長になんて復活するなんてことはありえない。

上総はノートを閉じた。

卒業後しばらくして、狩野先生と一対一でゆっくり話をする機会を得た。その際いろいろと語るべきことを語った後、言われたことは、

「立村くん、差し出がましいようだけれども、高校に入ってから日記をつける習慣をつけた方がいいですよ」

だった。日記なんて女子の書くものだ……とまでは言わないが、かつて「班ノート」記入を無理やり押し付けられた過去が今だに響き、日記というものに拒絶反応を起こしていた。狩野先生は、

「男子と女子の違いは、自分の内面にどこまでたどり着けるかでしょう。他の男子生徒たちにはこういうことを話しません。まだ今の段階では、無理に自分を見つめる必要もないからです。しかし、立村くんに対してだけは、あえて自分という人間が何を感じ、考えているかをじっと見据えてほしいと思わずには居られません。今まで無意識のうちに行ってきたことが実は、自分の思ってもみない感情のほとばしりから出たものだとか、なぜか人を傷つけてしまった、傷ついてしまった場合において、何がきっかけだったのかを粒さに観察することができます。繰り返しますが、これは他の生徒たちには勧めません。自分自身を見つめるよりもまずは体験する方が先決というタイプの生徒が殆どだからです。しかし、立村くんは自分自身を掘り下げる段階に今、来ているような気がします。つまり、精神的に、他の生徒たちよりも早く青春期に入ったからかもしれませんが」

珍しく熱く上総を説得してきた。その他、ドイツ文学のヘッセやゲーテ、およびロマン・ロランなどの作品を読み返すよう……一応上総はすでに、そのあたりの世界名作は読破していたので……勧めてきたのも驚いた。

天敵・菱本先生の言葉ならば無視してゴミ箱、だろうが、狩野先生の勧めることならば素直に受け入れてもいいだろう。どうせ人にも見せるものでもない。

珍しく上総は、人の助言を受け入れることにした。「他の生徒たちよりも早く青春期に入ったから」という、少々優越感をくすぐられるような言葉が心に響いたのも、事実ではあるが。

とはいえ日記といっても、実際は記録に近かった。

日記ではないけれども、評議委員時代に上総は本条先輩からいわゆる「評議委員教育」なるものを受けていたため、メモだけはしっかりつける習慣を身に付けていた。父からもらった黒皮の手帳に、しっかりと予定から他クラス、および他校の生徒の電話番号、その他本条先輩から教えられたテクニックなどなど。評議委員長の座を追われた段階で、その手帳は天羽に渡ったが、そ

れが役立ったかどうかは定かではない。ないが、本条先輩の教えてくれた方法に関しては上総の身体にいつのまにかしみついていた。

すでに委員会から距離を置いた上総ではあるけれども、学校内の出来事に関するメモはこれから先、つけておいた方がいいとも思っていた。もちろんふたたび委員会に復活したいとはさらさら思っていないが、もし何らかの形で事件が起こった場合、過去データをもとに少しでも協力できるのではないか、という目論見もあった。

——これから先、いろいろありそうだからな。

天羽、難波、更科、南雲、さらには羽飛。こいつらが全員なぜか、C組にまわされた段階で上総もいろいろ危険を感じてはいた。ちよくちよくC組に顔を出しては様子を伺っているのだが、今のところ南雲と羽飛との間ではトラブルはないようだ。評議委員である羽飛をうまくあしらう形で、元規律委員長だった南雲が通しているのが理由だろう。一番心配だったことでもあるのでその点はほっとしている。

しかし、問題は別のところから湧き上がっていた。

——まさか、関崎とあそこまでこじれそうになるとは。

新歓合宿の際の出来事は非常に頭の痛いことだった。五月の新歓合宿後、一気に書きなぐった後死んだように眠ったことを、よく覚えている。

——朝一番ならみな寝ているだろうと考えて、外の空気を吸いに出かけたが、まさかあんな早くに関崎がジョギングをやらかすとは思ってもみなかった。しかも先生までお供につけてだ。何よりも驚いたのは、関崎が直接朝、麻生先生に談判して早朝ジョギングの許可を得たという点だ。信じられないことだが、事実である。

関崎に関しては今までの経緯もあり注目はしていたが、ここまで自分の意志を貫き通す男子とは思わなかった。本来ならば許可がなかなか下りないアルバイトに関しても、入学オリエンテーションの段階で麻生先生に話をし、藤沖を味方につけて許可を得たと聞く。また、アルバイト先でたまたま見かけた轟さんの仕事を告げ口し、そのために彼女は特待生からはずされたというのもまた事実だ。

関崎は自分の意志で、自分が正しいと判断したことは他人がどう言おうとやり通すタイプの男子だ。それは僕も、交流会を通じて感じていた。また嘘を全く言わない男であるとも気付いていた。もちろんそれは長所だろう。しかし、それによってとばっちりを受けている人間がいるのも事実だ。轟さんのように、本来受けるべき特待生奨学金を受けられなくなったために、仕事をこれから別の場所で探さなくてはならない生徒も出てきている。

また、それを発端として、天羽たちC組グループの間から不満・不平も出てきている。

天羽たちも交流会を通じて、関崎と話す機会があったはずだ。関崎が入学を決めた時もさほどいやがってはいなかったようだ。それなりの噂も耳にはしていたはずだが、轟さんの事件が起こるまでは、別に気にもしていなかったようだ。

それが轟さんの出来事をきっかけに、一気に外部生に対しての不満が噴出した。

関崎だけではなく、他の外部生たちへの不満もあるのだろう。

関崎が、入学後一ヶ月も経たないうちに、女子たちおよび教師たちの支持を得たために、いつのまにか内部進学生たちの評価が下がっているように感じたらしい。実際、同じことはB組でも起きている。外部生たちが人一倍努力をして入学してきたことに敬意は表すが、だからといって内部進学生をないがしろにされるのはたまったものではない、という考えだ。

僕もこの件については、例の早朝ジョギングの件さえなければ、大して気にはしなかったろう。だが、あまりにも関崎の言動がよい形で目立ち、その反面内部進学生たちの立場が危うくなっているという現状は確かに感じている。

天羽たちの気持ちがわかる反面、関崎の人柄のよさも理解しているだけに悩むところである。

この日、本来書きたかったことの半分も綴っていない。そう感じる。

——なんであいつ、よりによって俺のことに首をつっこんできたんだろう！

新歓合宿の最終日早朝、ひとりにどうしてもなりたくなり抜け出した自分が悪いのは承知している。麻生先生にとつつかまり、人間性を否定されるような罵倒を受けたのも仕方ないことだ。それが自分の立ち位置である以上、甘んじて受け止めるしかない。他人に迷惑はかけていないつもりだし、言い訳もする気はなかった。

しかし、まさか関崎に、

「俺が事情を立村から聞き出します！」

などとかわわれて面目なくするとは思っても見なかった。

——あれは、してはならないことだろう。男子の世界では。

少なくとも関崎も、そのあたりの決まりは理解していると思っていたのだが、なぜいきなり割り込んできているいろいろ言われねばならなかったのだろう。

関崎が、上総に対し、深い友情を感じているのは理解できる。上総も関崎のことは決して嫌いではない。

また、決してそれが悪意でないことも頭ではわかっている。

しかし、

——まさか、同級生に天敵・菱本ばりの奴が混じっているとは。

あの時、誰もいなかったら殴りつけていたかもしれない。合宿中そんな衝動に駆られたことが、少なくとも三回ほどはあった。

なぜか天羽がうまく立ち回ってくれて、嘘みえみえの理由を述べてかばってはくれた。おそらく麻生先生も見抜いていたろう。天羽の性格を考えればそれは理解できなくもない。だが、ふたりのしてくれたことが結局は、A組の上総の立場をぐらぐら揺らしているのが現状だ。人を恨んではいけないと思うものの、やはり腹立たしく思ったりもする。

——だがどうすればいいだろう。

それとは別に、天羽たちがもし、なんらかのいちゃもんをつけに関崎にぶつかってきたとしたら。今、一番恐れているのはそこだった。

関崎は今、評議委員の藤沖と一緒に行動している。藤沖は比較的関崎とうまが合うらしく、しょっちゅうなにかかしら兄貴風吹かせてアドバイスをしている。関崎も時々うんざりした顔を見せたりするものの、さほど文句を言うこともなく流している。

今はまだ、規律委員でおさまっているからよいものの、これから先が問題だ。

——天羽たちも今はまだ大人しくしているが、これから先、先生たちや女子たちの態度が外部生寄りになってきたらプライドを傷つけられて憤るに決まっている。元・青大附属中学の評議委員チームが、外部生の足元で平伏すなんてこと耐えられないだろう。

上総のように最初から捨てているなら、構わない。

しかし天羽や難波、更科たちにとっての元・評議委員という肩書は、本来もっと大切にされねばならないもの。それを一切、ゼロに戻され、格下扱いされているという思いがこのまま何も起こさずにすむとは思えない。特に轟さんの事件は、元・評議委員たちにとって最大の憤りであったことは想像に難くない。女子というよりも「仲間」としてうけいれられている轟さんの身を、友情でもって守ってやりたいと感じる天羽の心意気には共感するものの、関崎のまっすぐな魅力を理解する上総には同調することができない。

なんとかしてうまく、やり過ぎさねばなるまい。

仲良くなれ、とは思わないが、せめて何事もなくすれ違わせるだけでも。

電話が鳴った。聞こえた以上出ねばならない。予想はつく。

「はい、立村です」

——立村か！

ほっとした声と、深みのある短い区切り。

「関崎、だろう」

——そうだ。元気か。

元気もなにも、つい数時間前教室で顔を合わせたはずだ。

「何か用か」

男子は用事がない限り、電話をかけないのが普通。

——ああ、立村、今週の土曜、空いているか。

まただ。先週も、その前の週も。そう、あの新歓合宿以降かならず週一回かかってくる。

「いや、大学の講義があるんだ。ごめん」

——そうか。なら来週また誘うからな。俺のうちに飯食わないか。

「ありがとう。また今度」

適当に礼を言って後、切ろうとすると関崎が続けた。とつとつとだが、決して受話器を置かせないという迫力を感じた。指先が重たくなる。

——立村、俺はお前の味方だ。忘れるな。じゃ、また。

別にそんなこと、毎回毎回、どしっと付け加えなくてもいいのに。

いつも上総に電話をよこす時、関崎はその言葉を付け加える。

——俺はお前の味方だ。

それが関崎の、上総に対する友情表現だと、理解はしている。しているのだが、

——あいつはそういう人間だったろうか。

思わずにはいられない。もしそういう奴だと、一年前に気が付いていたとしたら、上総はこうやって関崎を青大附高に合格させようとしていただろうか。自分でもわからなかった。

受話器を置き、ふと思った。

——こういう男を、杉本も、清坂氏も、好んだのだろうか。

同じ附属といっても、青大附属中学と高校とでは委員会活動の盛り上がり方が雲泥の差だ。

——本条先輩がなぜ、青大附高に進学しなかったのか？

さまざまな事情は知っているけれども、一番の理由はその辺にあるんじゃないだろうか。上総は入学してからつくづく思った。もちろん最初から委員会活動に参加するつもりはさらさらなかったし、高校入学以前の段階で大学講義を少し多めに受講するよう指示を受けていたりしたので、自分自身は気にならない。ならないのだが、しかし。

——これなら、天羽たちも面白くないだろうな。

「立村、どした」

羽飛貴史のいるC組を訪問し、挨拶代わりにトランプへお付き合いし、その後大学の講義に向かうつもりでいた。思ったよりも大学の講義数は多く、はっきり言って委員会活動に参加していたらたぶんぶっ倒れるだろう。部活動……特に体育系……は絶対無理だ。良好な人間関係を保ちたい気持ちはおおいにあるのだが、いかんせん時間が思ったよりもない。結局、休み時間と放課後のかなり遅い時間帯を狙って話をするしかない。

貴史が白のポロシャツ姿で現れた。六月以降、運動部の生徒に限って放課後、ポロシャツ着用が許されている。シャツではもう、動きづらいたらありゃしないのだ。

「これから部活か」

「まあなあ、出ねばな」

髪の毛はだいぶ伸びたようだ。中学卒業式前にある程度髪型を整えていたが、高校に入るやいなやもうやりたい放題。制服は違反にならない程度にいいかげんな着くずし方だし、ネクタイはいつのまにか緩んでいる……意識的ではないが、結び目が解けていることもある……し、シャツはウエストから出っばなし。不良っぽくはないのだが、いいかげんではある。

「お前も、これから大学か？」

「うん、英文学史の授業があるから、六時半まではいるけど、今はまだ四時限目だから時間はあるよ」

わけのわかりにくい説明になってしまう。顔をしかめる貴史に追加説明をする。

「大学の授業は五時から始まるから、終わるのがだいたい六時半くらいってことだけど」

「今は四時前だから、一時間くらい余裕ありってことな」

飲み込んでくれたらしく、腕時計を覗き込んだ。中学と同じ形のもので、黒いベルトだけ新調したらしい。艶がてかてか光っている。

「もし少し早めに終わったら、体育館に寄れよ。なんか食って帰ろう」

先回りされたのが照れくさいが、上総は頷いた。こちらから話を持ちかけるまでもなく、羽飛貴史はすぐに飲み込んでくれる。三年間の蓄積が、ここにある。

まだ一時間余裕があるということもあり、まずはC組で時間をつぶそうと思っていた。残っているのは天羽と難波、そして更科の三名だ。他のC組連中もそれなりにたむろってはいるのだが、それぞれ部活動なりなんなりに消えていく。南雲は放課後バイトだと聞いているので最初から数には入っていない。

「立村、悪いけどな、ちょっと付き合ってもらえないかねえ」

相変わらず脳天気な口調で天羽忠文が上総を手招きした。最近は少々女っぽいしゃべりをする人が多いのだが、あまり女子たちからの受けはよくなさそうだ。もともと天羽は、中学三年のさまざまな出来事をきっかけに、大幅な株の下落を経験しているはずだ。そのことは気にしていないらしい。

「トランプやるのか」

「うんにゃ、ちょいとな、元評議同士の密会なんてどうっすか」

なあ、と難波、そして更科に頷いてみせる。難波は相変わらず黒いめがねをかけたまま、腕組みして頷いている。高校に入り三ヶ月ほどの間に、なぜか難波の背がぐんと伸びているのに気がついてた。決して中学の頃は、上総と殆ど背丈が変わらなかったのにだ。更科を除くと今のところ、上総はちびの部類に入ってしまう。難波は茶色の自前手帳を開きながら、何かを書き込むふりをしている。相変わらずのシャーロック・ホームズ気取りのつもりなのだろう。内面は変わっていないと思いたい。

「いっすねえ、旦那」

脳天気な返事は更科だ。こいつの事情も中学時代から聞き知ってはいたが、高校に入ってからかなりおおっぴらとなりつつある。こうやって子犬のごとくじゃれついているように見えるが、実は年上キラの禁断の恋真っ最中なんてことは、口が裂けても言えない。男子同士でも滅多に口には出せない秘密。本当に中学養護教諭だった都築先生との関係が続いているのか、気になるところでもある。

「立村も、ちょっと付き合ってもらえないっすかねえ」

「かまわないよ。でも五時少し前には大学についていたいんだ」

「じゃあ、学食がベストだな」

難波が手を打ち机から立ち上がった。さっさと出て行こうとする。天羽がどっころしよと腰をあげ、その後からちょこまかと更科がくっついていく。締めが上総となるらしい。この日は雨が降っているせいか、廊下には細かな泥の後があちらこちらに残っていた。

中学時代と同じようにジュースと菓子パンをそれぞれ用意し、まずは食べ始める。

みな必死に口へ押し込むのが、はたから観ていて面白かった。

「立村だけなんでそう上品に食うわけなんだ？」

難波につっこまれた。

「いや、上品も何も」

考えていないつもりなのだが、やはり目立つようだ。

「おぼっちゃまは辛いねえ」

さらりと一言、天羽はパンの端っこを一気にジュースで喉に流し込んだ。

「実はだ諸君、本日集まっていたのにはわけがある」

「だろうとは思っていた」

上総が答えると、満足げに天羽は頷いた。相変わらずの気取った口調なのだが、難波がホームズなのに対して天羽は怪盗ルパンだろう。きざでロマンチスト。上総からすると天羽も難波も、結局やることは愛に生きることだけじゃないかと思える。

「本当はトドさんも呼び出すつもりだったんだが、いかんせん彼女は評議だ」

「確かにな」

相槌を打つ難波。ずいぶんこいつも性格が丸くなったものだ。

「正式声明を出すことにする」

「あまりもったいぶるな」

時間制限のある上総は少々せかす。

「青大附高の委員会活動復興に備えて、勇士たちよ、立ち上がる時がきたのだよ、諸君」

さらにもったいぶる口調で天羽は続けた。爪楊枝を葉巻に見立ててくゆらせる仕種。

——とうとう決断したのか。

難波と更科はふたり、水の入ったコップを持ち上げ、何も言わずにこぶしを振り上げる仕種をした。上総はぼんやりと、気合の入った天羽の言葉を聞いていた。

こうなることは、時間の問題だったのだから。

C組に元評議委員出身者が固められ、かつ規律委員長だった南雲、そして今までさんざん評議委員かバスケット部所属を薦められていた貴史が放りこまれたクラス構成。これを見た段階で、高校の教師側が何をもくろんでいるのかだいたい読めていた。少なくとも委員会経験者の殆どは、このクラス分けが「過去の栄光をすべて白紙に戻す」ことを意味していると判断するだろう。

さらに、B組へよりによって、美里をひとり引き離すというのも思惑が見え見えだ。

羽飛貴史と清坂美里、このふたりの関係を知るからこそだろう。

しかも美里のクラス女子に関して言えば、ほとんどが元三年C組出身者だ。

美里とはどうも、肌の合わなかった女子たちの集まりとは、いろいろな場面で目にしている。唯一仲良しだった評議仲間の霧島ゆいも今は他の高校に進学している。味方はいないに等しいわけだ。

もともと女子とは、古川こずえなどの一部を除いて、あまり受けのよろしくなかった美里だ。言いたいことを何でも言い放つ一方で、男子たちとも比較的仲良く、なによりも「クラスのヒーロー」たる貴史と大親友だというこの事実が、女子たちから総すかんを買ったのだろう。上総の見る限り、今までは極端な嫌がらせなどなかったはずだが、その理由ははっきりしている。クラスの昼行灯で、かつ実力なくせに評議委員長に任命されてしまった立村上総の彼女だからだ。周囲の蔑視がそれなりにあったから、見逃されていたに違いない。

しかし、今は上総とも、単なる友だちに戻り、あとはレベルの高い男子を選び放題の時期。し

かもこの三ヶ月でターゲットはひとりに絞られていて、相手がいかに、だ。

女子たちの反応が芳しくないのは、分析しなくてもわかる。

——仮に評議委員を別々のクラスに配置した場合、よほどのことがない限り自動選出される確率が高い。それを避けたいという意向なんだろう。

英語科だけはクラス分けの範疇にないのでどうしようもないが、学校側としてはあまり心配していなかったに違いない。元評議委員長の立村上総がいたとしても、元生徒会長の藤沖が入っていれば特に問題なし。さらに。

「俺たちがなぜ、こうも軽く扱われねばならんのか！ みな、その点はよくご存知だな」

天羽の口調は相変わらず熱い。

「まあな」

短く、難波が答える。

「俺たちが今まで積み重ねてきた、評議委員会の経験をもなぜ、こうもあっさり切り捨てられねばならんのだ！」

「体育委員というのがなんだかなあ」

音楽委員になぜか回されてしまった難波が茶々を入れる。天羽は無視した。更科がアピールする。

「美化委員もまずくはないけどね。楽だし、掃除するだけだしね」

後期評議委員長を務めた天羽は当然、C組においても評議委員の座を狙っていたようだ。口には出さなくとも意志は持っていたに違いない。同時に難波、更科も心の奥になんらかの気持ちはあったのだろう。

——だが、羽飛が入ったなら話は別だ。

委員会に一切関わったことのない……上総が放棄した三学期後半は別としても……貴史が、なぜか評議委員に選出されたのか、本人の口からは詳しいことを聞き出していない。ただ、受ける以上はそれなりの覚悟もしていたようだ。貴史の性格上、敵を恐れることもなさそうだし、もともと天羽たちとは友だち付き合いもしている。気の合わない南雲を除けばほぼ、良好な人間関係を保っているといえるだろう。当然、教師たちからの受けも悪くない。バスケット部と美術部を兼部することにしたのも、プラス要因だったのだろう。

「南雲がいる以上、規律ももぐりこめないと」

「それは、犯してはいけないルールだよ」

更科が頷いた。少なくともC組の連中内には、もともと立候補するつもり委員に無理やり足を突っ込むのはご法度だという価値観が培われている。

「まかりまちがっても、外部生がいきなり立候補するもんじゃない」

「個人の自由だからなあ、そればかりは」

——とか言いながら、やはり不愉快なんだろう。

上総も天羽たちの気持ちがわからないわけではない。だから黙って聞いていた。

——せめて、委員連中が内部生でまとまってくれていれば、すべてが丸く収まったはずなんだ。

関崎さえいなければ。

上総の知る限り、天羽、難波、更科三人とも、決して他を排するタイプの男子ではない。むしろ、違った個性を喜んで受け止め、なんとか友情を培おうと考える、きわめて心の広い奴らだったはずだ。上総のようないじけた性格の奴を、曲りなりにも受け止めてくれた場所はどこよりも評議委員会、ここに他ならない。本条先輩の庇護があったとはいえ、同学年でとりあえず無事に、前期だけにしろ評議委員長に選んでもらえたことがすべてを表している。

そういう奴らだったのに、だ。

——何でいきなり、内向きの価値観を持ちはじめたんだらう。

この三ヶ月間で、上総にはだいたい見えてきている。

——関崎登場につき、附属上がりの奴らが危機感を感じているんだ。

交流会を通じて関崎の性格はだいたい理解していたはずなのだが、青大附高でここまで活躍するとは、誰も思っていなかったのだらう。上総も想像していなかった。

さらに、迎え入れる立場である教師たちの態度が、外部生最優先の方向を向いている。

露骨に附属時代の蓄積したものを否定されるのも、そう珍しくはない。

「言っとくが、俺は決して羽飛から後期、評議委員の座を奪いたいなどとは思っていないから安心しろ、立村。でなければお前をここに呼んだりしない」

——そうだな、それは言えてる。

天羽の野心が不安なところもあっただけに、少し安心した。

「ついでに、附高でいきなり評議委員会を乗っ取ることも考えちゃあいない」

「違うのか？」

難波が不思議そうに問い掛けた。めがねを指先で直した。

「そんなことしちゃあ、ああた、即刻俺たち袋のねずみっしょーが！」

次の天羽の言葉を待つ一同。

「つまりだな、諸君。今のポジションをもう一度考えてみるとするよ。俺はC組体育委員、難波は音楽委員、更科が美化委員、そして立村が……」

「どうせ俺は何にも関わっていないからな」

言われる前に宣言しておく。

「みな、それぞれ、ばらばらってことよ、諸君。かつては評議委員会を舞台に隠れ演劇部として活躍し、みなのかみ采を浴びていた俺たちがだ、このままくすぶっててよいと思うか？」

ずいぶん天羽も強気である。

「ビデオ演劇はもうやりたくないよ」

上総なりに一言突っ込んでおく。

「そういう、内輪受けはもうせんでよろしいの、立村ちゃん。もう高校生だろ、俺たち大人だろ？ ならやることはもうちっと、大人の感覚でよろしいんでないの？」

「大人の感覚ってなに？」

更科が相変わらずの子犬笑顔で質問する。このあどけない表情の裏で愛欲の日々が繰り広げられているなんて誰も思わないだろう。上総もまだ、更科の本性を理解していないような気がしている。見た目子どもで、内面大人。

「せっかくだ、俺たちのフィールドでもって、まずは足元から変えて行こうじゃないの。いわゆる内部生の革命ってとこよ」

ジュースと水を半々に飲む天羽。

「ご存知の通り、青大附高の委員会活動は現在、結城先輩が元締めとなる形で動いているがいかにせん去勢されてる状態だってことは、一年坊主の俺たちにもわかる」

「ちょんぎられてるってわけか」

冷静に難波が呟く。

「そ、玉を抜かれてる。まず俺たち一年はどの委員会においても、全く活動に参加させてもらえない。体育委員もそうだ。俺がやってることったら、球技大会のボール整理とか、グラウンドの線引きとか、時計を貴重品箱に突っ込んで先生に預けるとか、その程度だ。もちろん二年以降は少しずつ変わってくるんだろうが、活動の拠点ほとんどはクラス内の業務ばかりというのは、先が見えてるだろ」

「そうだな、天羽の言う通りだ」

言いたいことがあるらしく難波が、間髪入れずに続けた。

「音楽委員会も似たようなものだぞ。第一、委員会に出てくる奴がほとんどいない」

「いないってどういうこと？」

更科の問いに難波は答えた。

「ほとんどが音大への進学を目指しているか、もしくは吹奏楽部員か、そのどちらかだ。二年以上はほとんどそうだ。仕事たって音楽室の掃除と準備室の整理整頓、秋に入れば今度は合唱コンクールの手伝いくらいはあるだろうが、まず暇の一言につきる」

——暇なんて言葉、青大附中の委員会活動には存在しなかったよな。

「で、美化委員会はどうなんだよ」

更科に上総が今度は問うた。あまり更科の活躍した情報を耳にしない。

「美化委員会は、もうお気楽だよ。規律委員会とタッグ組んで、規則をそのまま守るように話をしなさいとかさ、とにかくお掃除の毎日。あ、でも花の活け方は教わったよ」

「誰にだよ、都築先生にか」

難波の鋭い質問に、更科は満面の笑顔を浮かべた。

「そ、玄関の花をいける担当は俺になっちゃった」

——玄関って……。

つまりなにか、更科はすでに、都築先生の家に住座っているってことか。

噂には聞いていたが。上総は改めて更科の子犬笑顔をじっくりと見つめることにした。

「ま、そういう状態が三年間続くってのはどんなもんかと、俺も思うわけだ」

脱線しそうになったところを、天羽はすぐに立て直した。そのところがさすが、後期評議委員長たるところ。

「だが幸い、今のところ何事も起こっちゃあいない。生徒会にも俺なりに探りを入れてみたが、中学時代のようにアグレッシブな日々を送ることはなさそうだし、評議委員会も現在は委員長たる結城先輩の趣味実践の場となっているわけだ。早い話、毎日のようにアイドル研究会化しているということだなあ」

——相変わらず、「日本少女宮」に嵌っているというわけか。

上総の呟きは心の中のみ。

「本来ならば、上の代に本条先輩がいて、そこでいろいろかちゃまわしてもらえるはずだったんだがいかんせん、それもできない。となると、望みは俺たちのみ。特に俺たちの世代は中学時代、とことん評議でやりたい放題の素晴らしい経験を積んできたわけだ。なあ、立村、俺たちだけだよな、ビデオ演劇やら茶会やら交流会やら企画した世代は！」

「確かにその通りだ」

このあたりは自分でも誇っていいだろう。

「ほとんど教師連中なんぞ当てにせずに、本条先輩たちの下でとことんしごかれてきた俺たちがだ。なんでこのまま、くすぶってなくちゃなんねえのって俺は言いたいんだわよ、な、わかるだろ、難波、更科」

「そうだな、確かにな」

難波は腕組みをし、何度も頷いた。

「うちのクラスだけかもしれないが、あまりにも外部生に対するひいきが酷すぎる」

C組に外部生がいたかどうか思い出してみたが、記憶になかった。

「誰かいたか？」

「俺が言っているのは、外部三人組のことだ」

難波は繰り返した。

「何かがあると『あいつらの懸命な努力を見ろ！』と引き合いに出されることの、多いこと多いことったらないぞ。『外部生は補習をしたり、部活動参加も諦めて必死についていこうとしている。そして少しずつ内部生連中に追いついて来ている。なのに内部生は外部生たちを馬鹿にするような態度をとっている』とか。俺たちそんなこと、いつした？」

「馴染んでいないのは向こうの方だろってつっこみたくなるよなあ、わかる、わかる」

更科と頷きあう難波。

「もちろん、補習地獄に追われたり、アルバイトをしっかりとったり、いろいろ努力しているのは俺たちもよーくわかるさ、ああ、そうだよなあ。金かかる学校だ、学費を出したい気持ちもわかるぞ。だがな、何も、俺たちの今まで積み重ねてきた血と涙の結晶すら、否定されるってのはどういうことよ？ なあ、立村、どう思う？」

「わからなくはないが」

何度も、この三ヶ月ほど繰り返されてきた言葉だった。その通り、なのだ。

天羽が後期評議委員長だったこともあり、C組の評議は自動的に指名されるものだとみな思っていたらしい。しかし学校側では、内部生入学が決定した段階で、一方的に委員選出の際に裏工作を行っていたようだ。英語科の評議委員が、すでに藤沖と古川こずえのふたりに決定していたのも上総は知っている。とにかく評議委員だけでも教師の息の掛かった面子にしておけば、あとはいくらでも調節ができる。

もっとも、関崎が外部生にも関わらず規律委員に選ばれたのは、あいつのパワフルな根性だけではない。後ろ盾として藤沖がついていたこともあるだろう。確認したわけではないのだが、入学前から関崎の手伝い係として藤沖が指名されていたことも事実らしい。学校側では、交流会を通じて上総が付き合いを持っていたことくらい気付いていてもおかしくないはずなのに、だ。一切上総の存在は無視された。

——委員会最優先主義を排他し、その代わりに優秀な外部生をカンフル剤として活用。

もちろんその意味は理解できなくもない。しかし、あまりにも露骨だ。

完璧骨抜き教師ご用期間と成り下がった委員会活動。

評議委員会に関してはそれほどでもないと聞いているが、他の委員会は三人が語るようにほとんど時間つぶしの世界らしい。退屈だろう。とは思う。

「だからだ、俺はあえてこの、すかすか状態の委員会をとことん利用させてもらい、内部生の底力を見せてやりたいってのが、今回の趣旨だ」

天羽は繰り返した。

「内部生だから苦労知らずだと？ 内部生だから楽してるだと？ ふざけるなって言いたいだろう？ 悪いが俺たちもそれぞれ、青大附中時代いかに戦いを繰り広げてきたのか、よくよくわかるだろう？ 難波、そーいやあ、キリコはどうしてる？」

言葉に詰まったようだが、あえてポーカーフェイスで交わす難波。

「相変わらずだ」

「そうか、生きてるな」

天羽は即、更科に振った。

「都築先生の件、ばれてないだろ」

「ありがたいことに」

短くもにこやかに更科は答える。一体何があったんだろう。

「そして立村」

覚悟はしている。何が飛んでくるか。

「お前、関崎はいい奴なのかもしれんが、いつかはお前を食いつぶすぞ。宿泊研修のジョギング事件もそうだが、あの暑苦しいほどの情熱でいつか溶かされるぞ。南極の氷が溶けちゃったら地球がひでえことになるって、地学でも習っただろ」

「洪水、だな」

「そ、大洪水で飲み込まれちゃう。麻生先生の考えでは、お前を一切無視して、関崎と藤沖のふたりを引き立てる形を取りたいらしい。そんなことされちゃったらどうする？ お前は単なる自動翻訳機になっちゃってそれで終わるわけだぞ。それでいいのか？」

「いいよ、そんなの」

適当に流した。

「トドさんの一件がいい例だ。俺たちもトドさんの生活苦は承知していたからな。粗大ゴミコーナーに本雑誌が出ていたら、即連絡を入れて古本屋で稼げるようにしていたんだしな。ところが、あいつのせいで」

「正義感だけで決め付けられたらたまったもんじゃない」

轟琴音が関崎の告げ口により、決まりかけた奨学生の座も奪われたというのが定説だ。

古本をゴミ置き場から持ち出し、それを古本屋に売って、いくばくかの小遣いを手に入れるという方法がよいのか悪いのか、その判断は難しい。

「たかがそのくらいで奨学生を取り消されるってのは俺もどうかと思うぞ」

難波も手に拳固を押し付けながら呟いた。

「なんでも、そういうみみっちいことをするのに嫌悪感を感じる先生連中がいたという話と聞いたがなあ。正々堂々と、きちんと、合法的に。ああ、そうだな、合法的にだな。だが実際金がない場合、どうすりゃいいんだよなあ」

「轟さんは今、どうやってお金を稼いでいるんだ？」

上総が尋ねると、即、返事が返ってきた。天羽と難波だった。

「学校内のネットワークを使って、古い教科書の斡旋をし、その手数料を稼いでいる。あまった奴は俺たちが古本屋に持って行って売る。俺たちは面が割れてねえから、大丈夫だ」

「まだトドさんも、シマを変えていろいろとゴミをあさる努力はしているようだ。まさかな、関崎が見張ってるとは思わなかったらしいんで、別の古本屋を開拓している」

——すごい。

外部生がいくら正義を振りかざしたところで、みな、裏ではやりたいことをやっている。

「具体的には何をするつもりなんだ」

上総が一番知りたいのは、その方法だった。天羽がすぐに答えた。

「まず、後期の委員会活動でどの分野に回されても即、役付きを目指す。やはりな、役付きになると身動きしやすいからな」

「どの委員会でもか」

「そういうこと。どうやら学校側としては、同じ委員に三年間部活動感覚で携わるのをやめていただきたいらしいんでな。その後は、できれば生徒会にもぐりこむか何かしたいんだがな」

「生徒会？」

「完璧ご用期間になっちゃうことを考えるとそれはまたあとで考える」

なんだ、まだ具体的にことは決まっていないのか。

「とにかく俺たちが言いたいのは、『外部生ばかりひいきするんじゃねえ！』の一言だ。俺たち

にしてみれば、もちろんあいつらの力量がすごいのは否定しない。だが、俺たちがやってきたことをすべて否定した後で、どんどん体制側に近づけていくような管理を行うってのはなんか、間違ってると思うんだ。本来なら、青大附中時代のように、完璧自主性を保った形での委員会があってしかるべきだったのに、完全に今は、やる気のない連中と教師の言うことをそのまま鵜呑みにするいい子ちゃんばかり。あとはやりたいことをこっそりやる奴ら。それでいいと思うか？ 俺だけじゃねえ、他にも同じことを考えている奴はどっさりいると思う」

「いたとしても、声は出せない状態だな」

難波は頷いた。引き継いで続けた。

「今の『外部生人気』を応援しているのは、皮肉にも女子連中だ。俺たち男子が今まで苦勞してきたことを、この代の女子たちは大して評価しようとしないのはどういうことだ。女子連中が外部生を応援しだしてから、男子たちの間でも不満は高まっているはずだ」

「一言言わせてくれ」

どうしてもがまんできなくなり、上総は自分なりに感じたことを伝えた。

「外部生、というよりも、関崎、だろう」

一同黙り込んだ。

天羽たちが過剰に反応しているのは、外部生というよりも、関崎乙彦に対してだけだ。

「立村、何、言いたい？」

「俺の知る限り、外部生といっても目立っているのは関崎だけであって、あとはあまりいてもいなくても変わらない存在のように感じている。もちろん天羽の言うように、内部生を無視する学校側には腹も立つが、無理に外部生を攻め立てる必要はないんじゃないか。それぞれやりたいことがあるだろうしさ」

「今はまだいいぞ、立村。だがこれから先」

「何があるっていう？」

上総が問い返すと、難波はためらいながら天羽と更科の顔を見た。

「言っちゃえよ」

「言っちゃまえよ」

ふたりに押される形で難波が答えた。

「もしもだ、関崎と清坂が付き合っちゃったら、お前の立場どうするんだ？」

——やはり気付いているのか。

こいつら三人が心配しているのは、上総が傷つくかどうかという問題ではない。

——かつての恋人が外部生の彼氏をこしらえた場合、さらに立場が悪化する。

内部生を見下されるきっかけをつくる、その恐れだろう。

「別にそれは気にしないよ」

あっさり答えるのが一番よい。三人の生真面目な瞳に恐れず答える。

「俺には最初から立場なんてない。委員になる気なんてないし。とりあえずは何事もなく無事に

三年間が終わればいいと思っている。友だちと仲良くやっていければそれ以上望まない」

「はあ？ 立村、本気でそんなこと言ってるのか？」

天羽が口を細長く開けて尋ねてきた。

「本気だけど」

「前からお前に何度も言ってるが、このままだと立村、A組のやっかいもの扱いされて終わっちゃうだろう？ お前には人間自動翻訳機的能力があるからまあ無視はされないだろうがな、外部の奴らに馬鹿にされて、女子たちには軽く見られて、最愛の清坂ちゃんまで取られてさあ」

「取られたと思ったことないけどな」

あっさり返す。天羽はもちろん納得いかぬ顔のままだ。

「立村、お前はまだ気付いちゃいないな。清坂ちゃんが今までお前のハニーだったからこそ、だいぶ救われてきたところあったんじゃないのか。今もまあ、別れたといえそうだがな、お互いフリーだからこそ、まだまだみな一目置いてくれてるんじゃないか？ 人間関係崩壊させずに友だちづきあい出来ているからこそな。それがこれから先、関崎といちゃつかれてみる。どうするんだあ？」

「どうも、しないけど」

いらいらしてくる。天羽たちにもそうだが、だんだん美里に対して苛立ちすら感じてくる。もちろん上総は早い段階から、美里の心が関崎に向いてきているのを見て取っていた。それを責める気なんて全くなかったし、むしろお互いそれがいいのかもしれないとさえ思った。関崎は暑苦しいところもあるが、基本としていい奴だ。もしも何かの協力が必要なら、喜んで手を差し伸べるのもよいだろう。だが、今の段階でそれを求めるのは危険だろう。関崎が今だに恋愛感情らしきものを美里に感じていないのは明白。しかも「外部三人組」の一員であるB組の女子・静内菜種と関崎とはかなり熱々の関係と噂されている。そういう段階で、なぜ想いをこうも露わにするのだろう。ただでさえ上総の元彼女という汚点が残っているというのに、明らかに美里の立場は不利だ。

——今の段階では絶対に、隠すべきだろう。

もし上総が、羽飛貴史の立場だったとしたらそう助言したに違いない。

評議委員チームにばればれの態度を取っている美里には、貴史に忠告させることが必要に思う

。

「単刀直入に言おう。立村、よりを戻す気ないのか？」

今度は難波だ。いらだちを隠さずに上総も答えた。

「ない。友だちでどこが悪い？」

「まさかと思うんだけど、立村？」

今までにここにこしてただけの更科が、放った。

「あの、修学旅行でおねしょしちゃった子のことが、まだ好きなんだ？」

——何言ってるんだ？ 更科？

呆気を取られて口が開いたままふさがらない。いや、口を開けるもなにも、言われた意味が把握できなかった。てっきり更科の奴、杉本梨南のことを突っ込んできたのかと身構えて、答えすら用意していたというのに。「そういう恋愛感情だけで人間関係を決め付けるな！」と怒鳴ってやるつもりだったのに。

「誰だそれ、俺の知っている女子か？」

「当たり前だろう？　なあ、難波？」

難波に更科が、また子犬の笑顔を振り向けた。無表情のまま流そうとする難波に、天羽がいきなり、

「まあまあまあ」

と割って入ってきた。

「更科、お前ちょっとそれ、やばいネタだろが」

「ごめん、まずかった？」

「当たり前だろう！」

びしっと叱るそぶりを見せる天羽。しかし上総にはまだ、言われた意味が不明だ。いったいなんだろうかその、「修学旅行でおねしょしちゃった子」とかいうのは。第一、一年前の修学旅行ではいわゆる、布団に地図を描いた女子の存在なんて聞いたこともない。

「立村、お前、中学の話聞いてないのか？」

天羽は打って変わって小声で尋ね、身をかがめた。それにつられるように難波と更科も同じ格好をした。

「聞いてない。少なくとも今更科が誰を指したのかわからない」

頭の中がフル稼働している。いや、もしかして……いや、ありえない。答えが出てきそうまで出てこない。

「じゃあ、今年の中学修学旅行で起こった出来事、何も聞いてないのか？」

「杉本に聞いたら、全く問題なかったと話していたが」

なぜか自分の口調が、杉本に触れるところだけかちんと響いた。自分でもそれがわかった。

「それはいつだ」

「修学旅行が終わってからすぐだ」

更科が今度は、難波と顔を見合わせ肩を竦めた。気取ったホームズ難波はポーカーフェイスのまま。嫌な予感がする。天羽の言葉は続いた。

「立村、杉本以外の女子から、何も聞いてないのか」

「俺が中学で用事あるのは、今のところ杉本だけだ」

断言した。そのつもりだった。

天羽たち三人が大きな溜息を吐いたのはその後だった。

「もう、打つ手はないのかよ……こいつ」

「俺たち元評議チームがこんなに考えてるってのに」

「もう少し選びようがあるよね」

上総が言い返す前に、天羽は首を振り、大袈裟に頭を抱えた。

「あのなあ、立村。中学修学旅行三週間経って、今何が起きているかなにも知らないのかよ。まさか、杉本の報告以外何も聞いてないなんて、言わないだろうなあ？」

「ないよ。中学のことなんて、もう役なしの俺には関係ない」

——杉本に関係がなければ、だが。

杉本がこれから先、佐賀はるみをはじめとする生徒会グループに嫌がらせをされたとか、桜田さんという不良女子の悪影響を受けているとか、そういう事情については調べたい気持ちもある。しかしもう、それ以外の情報は切り捨てて構わない。高校と中学をつなぐ鏝は杉本と狩野先生だけだ。後は何も用がない。

「念のため、確認するが、その修学旅行の際になにかをしたというのは、まさか杉本のことを指しているのか？」

ありえない。更科に向かい、詰問した。真正面から見つめるとすぐ更科は目を逸らした。また難波と「どうする？」と確認し合っている。天羽は腕を組み、毛深い二の腕を掻き毟った後、ふたりに手を伏せる合図をした。黙れ、との指示だろう。

「お前のクラスには下ネタ女王様いるだろ？ 古川にまず聞け。あいつなら知っている」

「天羽が答えられないようなことには思えないが」

首を振った天羽。立ち上がった。

「俺たちもお年頃なんでね。修学旅行中、女子が布団で世界地図なんて話、できるわけないだろう」

「どういうことだよ、それ、まさか杉本が？」

「あとは自分で確認しろ。その後で考えろ！」

難波が吐き捨てるように言い放った。

更科も同じく呟いた。

「あそこまで噂が広がっているのになんで立村、気付かないんだろうなあ。ほんとに、杉本の言い分しか聞いてなかったのかなあ。このままだと、おねしょした女子と付き合うことになっちゃうのに、大変だよ」

もうこれ以上話をする事はなかった。上総は立ち上がった。時計はそろそろ五時十五分前。大学校舎に入ったほうがいい時間だ。

「悪い、先に行く。天羽、さっきの件についてはきちんと話をしよう」

喉から上だけ活動しているようだ。その下は完全に石と化している感覚がある。

「ああ、連絡よこせよ」

背を向けたとたん、三人がまた固まってわやくちゃ語り合おうとする気配を感じた。そんなの知るか。上総は一度ぎゅっと目を閉じて呼吸を整えた。

——杉本は、やはり、何かをしてしまったのか！

杉本梨南は、修学旅行で何が起こったか、今まで何も言わなかった。

上総も全く、修学旅行の話など、他の連中からは聞こうとしなかった。

——なんで気付かなかったんだ、俺は！

高校の連中が知っているような大事件を、何も気付かずにいた自分。どこで天羽たちが情報を得たのかは聞きそびれた。古川こずえが知っているらしいということは、もうかなり広まっているのだろう。

なのになぜ、上総だけが取り残されたのか。

学食を出ると、広がる大学校舎の向こうに色濃い夕陽が落ちていた。高校方面を眺め遣るとサッカー部と野球部が元気に試合形式の練習を行っていた。掛け声なく、球の打たれる音が響き渡った。

学校で起こったとんでもない事件を知らずに三週間も過ごしたことは、評議委員時代一度もなかった。委員会にも、生徒会にも参加しないとは、つまり、こういうことだ。

——「野に下りた」ということなんだ。

英文学の講義は何事もなく教授の話をお聴きだけで終わった。機械的にノートを取っていただけで、頭の中には何も残らなかった。

かといって、何かを考えていたわけでもなかった。

さっき天羽たちと会話していた内容が蠢くわけでもなく、その張本人らしい杉本梨南のことにも思いは巡らず、ただ真空のまま、座っていたにすぎなかった。

鞆をかかえ、大学校舎から出る。私服姿の大学生に混じって制服姿の自分だけ目立つ。

ジーンズとTシャツのみの格好で、自動販売機のジュースを手に一気飲みしている学生たちの前を通り過ぎ、上総はそのまま高校校舎へ向かった。まだ外は明るかった。

「おせえよ、立村」

呼びかけられた。貴史の声だった。完全に男子として形づくられた声だった。

「ごめん、悪かった」

「バスケット部の練習、今日はちょっと早く終わったからな」

運動部の練習が六時前に終わるとは正直考えられない。何かあったのかもしれない。ちらと思っただけであえて知らん振りをした。ポロシャツのボタンを三個とも外した貴史は、まだ乾ききっていない髪を何度も振った。シャワーを浴びる時間があったということは、そうとう早く片付いたのだろう。

まずは自転車置き場へと向かった。

「お前今日、なんか食ってくか」

「そうする」

「学食にするか」

「そうだね」

父の居ない日は時々こうやって手抜きをする。

元評議委員連中の姿は見えなかった。カフェテリアで茶碗一杯のご飯と酢豚のあんかけ、そして味噌汁を選んだ。計350円なり。貴史は貴史でカツ丼を注文している。こちらも同じ値段だ。さらに小ぶりの椀に入ったうどんまで選んでいる。よく食えるものだ。上総が感心していると、

「お前こそさあ、これでほんと、足りるのかよ」

真顔で問い返された。

「足りるよ」

「信じらんねえ」

一刻も早く腹に収めたかったらしく、席に着くやいなや貴史は一気に喉へ流し込んだ。「流し

込んだ」とは液状のものを言うのだろうが、貴史の食欲は固形物すらも流れてしまう何かがあった。迫力のある食い方だ。

「立村、お前どうして卓球やらねえの？」

上総が静かに箸であんかけの酢豚を口に運んでいると、あっというまに平らげた貴史がもぐもぐ言わせながら問い掛けた。

「運動部は嫌いだし」

「けど、今、暇なんだろう？ 放課後お前何やってんの」

「やってないよ」

「つまらねえの」

「そうでもないよ」

何度か繰り返されたやり取りだった。上総からすれば最初から「部活動に参加する」という選択肢は持っておらず、自然と帰宅部へ収まる形を取っていて、別に不都合はない。もちろん評議委員時代のように学校へ居ずっぱりということは少なくなったが、附属中学から上がってきた友だちとこうやってしゃべるだけでも十分だ。

「卓球やりゃあいいのに。川田が言ってたぞ。立村なら結構インターハイくらいまでいけるんじゃないかねえのってさ」

「冗談じゃない」

聞き流した。卓球限定でなら、人並みの技量があることは自覚もしている。球技大会において卓球さえ選んでおけば、あとは余計な口出しをされずにすむことも気付いている。しかし、あくまでもそれは身を守るための武器であって、それをもって外に打ち出そうとする気はさらさら。第一、身体をいじめるだけいじめて試合をすることに意義などあるのか。

「悪いけど地球が滅びてもそれはありえない」

「あっそっか。じゃあ、文化部だったらいいのか」

貴史はいきなり矛先を向けてきた。まだ半分も手をつけていない酢豚と茶碗を見下ろしながら上総は首を振った。

「いや、それもないな。やりたいことがない」

「図書館とかどうなんだよ。お前本読むの好きだからさあ、ややこしい原書とか読んでるしな。古川が言ってたぞ。休み時間と放課後は本を何冊でも借り放題だから、読書マニアには居心地のいい環境だってな」

確かに惹かれるところもあるのだが、それも考えられなかった。

「羽飛、古川さんが入っているということは、どういう話題になるかは想像つくよな」

「.....ああ、まあな。エロ本仕入れていきなり渡される可能性大だなあ」

「だろう？ クラスの中だけでそういう話は十分だな」

黙った貴史を目の前に、上総はいそいで残りの食事を平らげた。

——やはり、羽飛も何か先生方から言われているんだろうな。

想像はついていた。

かつて三年間中学時代を過ごし、ぶつかり合った関係だったから。貴史の友情あふれる態度が、当時の上総にはありがたくもあり、また重たくもあった。間に美里が入り、ちょうど奇妙な三角関係を形作ったことも、混乱の原因だったのかもしれない。

——もし、清坂氏と付き合ってなければ。

もっと楽に貴史ともばかやれたのかもしれない。

貴史と美里が物心ついた頃からの幼なじみで、周囲からは誤解されることもあるとはいえ、「親友」としての繋がりを保っていることも、上総は知っていた。本来ならばその「誤解」こそ「真実」なのではないかと上総は思ったりもするのだが、あえて口には出さなかった。

本当の意味で、貴史と向きあえるようになったのは、卒業式直後からだろう。

貴史も今は、余計な説教をかましてくることもなく、ただ自然に語りあうのみ。評議委員としての活動も、特に問題なくこなしているようだし、不必要に上総の方からアドバイスすることも無い。いわば、完全に学校とは別の世界で語っている感じがする。それが心地いい。

部活動の件については貴史もこれ以上深く追求することはなく、

「アイス買って来る、食いたりねえ」

信じ難い胃袋を見せつけるように立ち上がった。戻ってくる間に食器を片付け、上総はぼんやりとコップの水を見つめて座っていた。

完全に真空だった。

アイスバーを渡され、溶けないうちにまずはかぶりついた。貴史ほど食べたりないところはないのだが、冷たいものを口にするのは嬉しかった。ちゃんとその分小銭で支払った。

「あのな、立村、最近美里と会ってるか」

歯型をアイスバーにくっきりつけたまま、貴史が尋ねてきた。

「会うもなにも、毎朝英語科の教室に来ているから、話はしていくよ」

「ああ、A、B教室隣りだもんな」

「たぶん古川さん目当てだと思う」

「女子つつうのはなんでああもひつつきたがるんだろくなあ」

のんびり語る貴史。また一口、大きくかじりとり、

「まあ、しゃあねえよな。B組がああいう状態だったらな」

しゃきしゃき勢いよく食いついていく。

「ああいう状態というと、やはり、女子たちと清坂氏はうまく行っていないということか」

「お前知ってるだろ？」

「根掘り葉掘り聞くのもな」

C組にたまたま元評議連中、および貴史、南雲が配置されたこともあって、上総も休み時間はほとんど一緒に過ごしている。美里もちょくちょく顔を出している。話すことといえばテレビ番組やらファッションやら、他愛のないことばかりだ。自分のクラスにいたがらないという点だけははっきりしているので、居心地よくないのだろうとは感じていた。

「まあなあ。B組の評議女子見ている感じだと、ありゃあ美里とは天敵になるだろうって感じだ

しな」

「外部生の、確か静内さん、だったか」

名前は知っている。関崎と噂のある女子だ。

「お前よく知ってるなあ」

「多少は。評議委員だろう？」

誰もがB組の女子評議委員は美里に決まると思っていたのに、いざ蓋を開けてみると圧倒的多数で静内という女子に軍配が挙げたという信じ難い出来事だった。あとで詳しく聞いてみると、美里が何気なく静内にアドバイスしたところ、きっぱりと突っぱねたところにみな、感じるものがあつたらしい。仮に中学時代だったら、美里よりも静内の方に矛先が向いていただろうが、そこらへんはやはりいろいろある。

「まあなあ、ただ、評議ったって、たいしたことやってねえぞ。立村のイメージしている評議委員会とは全然違うしなあ。第一部活動が続けたままやれるってことが、すべてを物語ってるってわけじゃねえの？」

「そうだな、確かに」

貴史が美術部とバスケット部を兼部していることがすべてを物語っているように思える。しかも今はわりと、真面目に活動しているようだ。上総からすると体力的にも無理なものがあるように思えるのだが、そんなのお茶の子さいさいらしい。

「たーだ集まって、たーだ先輩方の話聞いて、たーだ結城先輩のアイドル談義を聞いて、それで終わりだぞ。立村みたいに、本条先輩みたいな先輩にこき使われることもねえし、せっかく楽しみにしてた演劇もねえみたいだし、ほんとつまらん」

評議委員会に限らず、他の委員会もその傾向は強いようだった。規律委員の南雲もまた、同じことを話していた。

「最後は古川にエロエロ話持ちかけられてちゃんちゃん、っての。すげえ虚しいぜ」

「それはご愁傷様だな」

古川こずえの愛に満ちた下ネタ攻撃に、まだ貴史は陥落していないようである。

「ところで立村、お前美里のことなんか聞いてねえか？」

アイスバーが一本の骨だけになり、しばらくもてあそびながら貴史が尋ねた。

「何かって？ 話は毎日してるし」

「じゃあ、噂なんか聞いてねえのか？」

「なにが？」

すぐにぴんとくるものがなく問い返した。貴史は口端にバーをくわえた。

「まあ聞いてねえんならいいんだ」

一度区切った後、また聞いてきた。

「お前はもう、美里に未練、ねえの？」

「なんだよいきなり」

これも何度か繰り返された質問だった。無理にくっつけようとはしない、と貴史は卒業式の後

手紙に書いてよこしたけれども、やはり守られないようだった。ただ、今の上総はあまり気にもならない。無理に返事をしなくても、三人の関係は崩れない自信が形作られていた。

「俺は今は、一番楽だから」

「楽、なあ」

ひとりごちた。貴史はバーを指先でくるくるまわした。

「お前は楽かもしれねえけどな、美里は」

「清坂氏ならたぶん俺よりも別の」

言いかけた。卑屈になってしまいそうな言葉を口走りそうになる。

「ちょい待て、お前より別のってなんだ？」

バーを手のひらに隠し、貴史が上総をじっと見据えた。ぷつと、空気が切れたようだ。

「そういう付き合いしたい奴がいると思うよ」

しかたなく最後まで言い切った。そう思ったことは事実、個人名は出していない。

「誰だよ相手は」

知らないのだろうか。あれだけおおっぴらになっているというのに。天羽たちも知っているはずなのに。幼なじみの新しい恋心を見抜いていないとは、正直、信じ難い。

改めて貴史の表情を伺った。妙に真面目だ。貴史が堅い表情を見せる時は、一発張り倒されるか怒鳴られるかのどちらかだった。そんな表情が何故浮かぶのか？

念のため、聞いてみる。

「羽飛、まさか知らないなんてことないよな」

「だから言ったろ！ 噂だけ一人歩きしてるんだ」

「どんな噂がだ？」

「美里が男漁りしてるっていう、アホすぎる噂がだよ。学校内だけなら笑えるけどな、いくらなんでも美里の母ちゃんにそういう話告げ口されたら、そりゃあまずいわな」

——清坂氏が男漁りしている？ なんだろうそれ。そんな噂は聞いたことない。

いくら上総が野に下りたとはいえ、そんなえげつない噂ならばもっと早く広まるはずだ。

「もっと詳しく教えてくれないか」

上総もこれは、真面目に向きあって話をしたい内容だった。

「やっぱり気になるだろ、簡単に説明するぞ、いいか」

もし上総ならば周囲を見渡して様子を伺ってから語るのだが、貴史は全く気にしない。さすがに大音量で語ることはしなかったが、一目を忍ぶ気はさらさらなさそうだった。

「美里がB組の女子連中とうまく行ってねえことは、お前も知ってるだろ？ どうやら評議委員選挙バトルに負けたことがきっかけだったらしいんだが、どうも美里にはあの教室内に居場所がないようなんだ。だから俺たちC組に長居してねばってる」

「それはわかるな」

「代わりに入った規律委員も、朝の遅刻者つるし上げ当番しかやることねえみたいだし、そうと

うストレスが溜まっているだろうとは、思う。んで、相棒規律委員の東堂ともこの前、例の彼女のことで口出ししちまってあいつを怒らせちまった始末だし。とにかく美里、今踏んだり蹴ったりなんだ」

比較的男子とは仲良くやっていたはずなのに、なぜ東堂ともめたのだろう。聞いていない。「あいつもやめときゃよかったのになあ。よけいなおせっかいだよな。いくら東堂の彼女がばりばりのアウトローだとしても、それはあいつの趣味だろ？ 口出すことじゃあねえよ」

例の桜田さんという後輩女子のことだ。ついでに、杉本梨南の現在一番の友だちでもある。「美里の奴、親切のつもりなのかもしれんけどな、東堂を捕まえて説教したらしいんだ。あのまま不良のまんまだと、周囲が迷惑するんだからなんとかしなさいってな。余計なお世話だよなあ。俺もそう思うぞ。ぶん殴られても文句は言えないわな」

「そんなこと言ったのか……」

もっともだ、それは怒られても文句言えない。頷いた。

「まあ、東堂もぶん殴りはしなかったが、かなりぶち切れてな」

貴史は溜息をつきつつ、手の平をバーでつついた。

「それまではB組の女子連中がいろいろ嫌がらせするのを押さえるよう、それなりに気を遣ったようなんだが、その一件がきっかけで東堂の奴、仲間連中に言いたい放題言いやがったんだな。自然と連鎖反応で美里に対する悪印象ひろがりまくり。結局美里の居場所はB組の男子女子どちらにもなくなっちゃったってわけだ」

——そんなすごいことになっていたのか？

気付かなかった。上総が勘付いていたことはひとつだけ。関崎乙彦への片想いだけ。

「叩けば埃もうもうの過去、美里をふくめ俺たちどっさりあるからなあ。女子連中の悪口だけならまだしも、男子連中の本音トークもすべて流れ出しちまって、そこから一方的に美里の酷い噂が広がり始めたってわけなんだ」

「どういう内容なんだろう」

「修学旅行で男子と一発やらかしたとか、なあ。しかもその相手が立村ならまだしも、別の男子らしいとか、先生がたに色目使ったとか、他の中学の奴らと色仕掛けしたとか、ありとあらゆる話題が溢れかえちまって、もう、大変だわ。最後にその噂をな、ご丁寧にも知らせてくださるB組生徒のどこぞの親御さまがいらして、今もう、美里の母ちゃん仰天。俺の母ちゃん通して、美里を見張るようにただいま指示が出ているつうわけなんだ」

すねに傷のあるわが身ゆえに何も言えない。「一発」はやらかしていないが、多少心の奥にある罪悪感がむらむらする。確かに美里とは、修学旅行最終日の夜、いわゆる「一夜を共にした」経験はある。単に文字通り、一夜を過ごしただけでありそれ以上何もない。ないが、やましい気持ちを感じなかったわけではない。しかし、それがばれているというのが信じられない。あれだけ人に見られないよう、ばれないように注意を払ったというのに。知っているのは貴史、美里、こずえ、そして南雲だけのはずだ。

「あのさ、羽飛。清坂氏は東堂にどんなこと言って怒らせたんだろう？ それが気になる」

「まあな、あいつの性格上、間違ったことは許せないってのはあるだろうなあ」

次に飛び出した貴史の説明に、上総は息を飲み込んだ。

「ほら、お前知ってるだろ、この前中学の修学旅行があって、そこでねしょんべんしちゃってふとん押入れに押し込んでとんずらした女子がいて、学校側ではただいま犯人探しやってるって話。ふたり犯人候補がいて、そのうちのひとりが東堂の彼女と親友らしいんだ。お前も知ってる通り、東堂の彼女は札付きだから一緒にいられるとどうしても、一緒にいる奴は色眼鏡で見られてしまうって言うんだ。どうも美里の奴、犯人候補の一人が疑われた理由のひとつとして、東堂の彼女と友だちだったのが一番の理由だと思い込んで、すげえ文句言ったらしいんだよな。後輩いじめはしない奴だが、一方的にかばうってのも、俺は先輩としてちょっとまずいと思うぞ」

貴史はそこまで一気にしゃべり、最後の結論に持っていかうとしていた。

「だから俺が思うに、美里をまずは東堂に謝らせるのが先決かと思うんだよなあ」

これ以上上総は聞いていなかった。

——やはり、その事件は起きていたんだ。

ずっと、頭の中から消そうとしていた出来事。

美里が懸命にかばっていた「修学旅行おねしょ事件」の犯人候補である女子。

東堂の彼女が親友づきあいしているその女子。

繋がっていく。

三時間近く前に天羽たちから聞いた噂は、やはり事実だった。

——杉本、いったいどうして。

今まで感じたことのない奇妙な感情が身体を駆け巡っていた。つい最近会ったばかりの杉本は一切、引け目も感じさせず、日々堂々と背を伸ばして歩いていた。修学旅行でよりによって世界地図を描いてしまうような失敗をしてしまった女子には見えなかった。

でも、ここまで噂が広がっているということは、恐らく出来事そのものは事実なのだろう。

——清坂氏がかばおうとしたのは、きっと杉本だ。杉本を守ろうとしたんだ。フォローしきれない失敗をしてしまった杉本を助けようとしてくれたんだ。杉本のことでは俺が、清坂氏の気持ちをさんざん逆撫でしてしまったことを、許してくれたんだ。

つきあう、つきあわないの二者選択だけで片付けたくないその気持ちに、なんと名前をつければいいのか。友情だけではありふれていて、愛情では色が濃すぎる。ただやすらいだその空気をくれる、大切な女子の友だち。

——そんな彼女に、俺は何ができる？

何かをしなくてはならない。

美里のために。

決めるより先に口が勝手に動いていた。

「わかった、東堂に一度話を聞いてみるよ」

きっぱり約束した。

貴史はぼかんとして手元のバーを取り落とした。わかりやす過ぎる驚きだった。

「お前、あいつと話すのか？」

「東堂にもいろいろと思うところがあったと思うし。けど清坂氏もただ謝るのはいやだろうな。まず、事情を確認して、清坂氏にも東堂にも一番よい形で解決できるかどうか、やってみるよ」

貴史には聞かれたら話すつもりでいた。

——たぶん、清坂氏のつきあいたい相手は、A組の関崎だと思う。

——関崎はたぶん、B組評議の静内さんと付き合いがっている。

——関崎はいい奴だから、いい友だちづきあいできるようなんとかしたい。

——羽飛は、清坂氏が関崎にこまめなアプローチをしているのを、本当に知らないのか？ あんなに近くにいるのに？

貴史が美里の話をする際に見せる生真面目な表情をどう受け止めていいか、今の上総にはわからなかった。少なくとも、今は伝えられそうにない。

「あれ、りっちゃんおひさ！」

南雲に電話をかけたのは、貴史と別れて家に戻り、すぐだった。

「めずらしいなあ」

相変わらずのさらっとした口調で、楽しげに南雲は尋ねてきた。

「りっちゃんから電話をかけてくるなんてさ」

上総がもともと電話を苦手としていることは、南雲も知っているようだった。

「ちょっとだけ頼みたいことがあるんだ」

いくら気兼ねのいない南雲相手とはいえ、やはり早く切りたいのも事実。上総は即、用件に移った。

「明日、東堂と話をしたいんだけどさ、なぐちゃん悪いけど一緒に来てもらえないかな」

「東堂大先生と！ それはなぜに？」

南雲は親友・東堂のことを「大先生」といつも呼ぶ。

「いや、俺と一対一だと向こうも話しづらいと思ってさ」

「別に俺はいいけど、ただ、なんで？」

ここが南雲のうまいところだ。「なんで？」が押し付けがましくない。知らない振りして聞き流しても構わない、許してくれる。

「ちょっとだけ聞きたいことがあるんだ。けどあまり人のいるところでは聞きたくないし」

「俺には聞かれていいの」

「かまわないよ」

——いや、いてもらわないと、困るんだ。

口には出さなかった。

「そうかあ、じゃありっちゃん、とりあえず場所は俺の下宿でどう？ そこだと東堂もちょくちよく来ているから道もわかるしさ。あ、りっちゃんは？」

——悪かったな、俺はとてつもない方向音痴だ。

これもおなかに飲み込んで、上総は答えた。

「いいよ。そのくらいわかる」

南雲が高校入学後、家庭の複雑な事情によりひとり暮らしをしているのは聞いていた。また、その下宿先というのがとてつもなく厳しい方針のもと運営されているとかで、自由になる時間というのはほんのわずか。夕食後は夜十一時過ぎまで下宿生全員が一室に集められて勉強させられるという強制手段を取るといった場所だ。

どう考えても南雲の性格向きとは思えない学生下宿だ。

いやなによりも、そんなところをなぜ選んだのだろう。

疑問は感じるが、あえて聞かなかった。

「家庭の事情」が軽いわけがない。重たい話を聞きだすのは、南雲には似合わない。

南雲からOKをもらい、これで半分仕事は終わったようなものだ。受話器を置いた後上総は部屋に戻った。父が帰ってくるまでにある程度の段取りは立てておきたかった。

もちろんばれちゃまずい。ドイツ語で書く。ノートを取り出した。

——聞くべきこと。

- ・ B組規律委員同士のトラブルについて
- ・ 中学修学旅行の状況について。

要点を絞ってしまえばこの二点より他にない。

——単純に東堂がしゃべってくれればいいんだが。

もちろんそれに越したことはない。上総があえて南雲を挟み込む形で計画したのは、東堂という奴がそう簡単にぺらぺらしゃべくる奴ではないと、過去三年間感じていたからだった。

東堂は三年間同級生だったということ以外に、上総との接点はほとんどない。

医学部希望でもないのになぜか、保健委員を努めていたということもあり、貧血を起こしやすい上総はしょっちゅう保健室へ運ばれていたが、その程度だ。

南雲がもともと貴史と折り合いが悪いのは周知の事実だが、自然とその親友である東堂、また上総もどうしても距離を置く形となる。もちろん露骨に嫌悪されるわけでもないし、にこやかな挨拶くらいはするけれども、それ以上用事がなければ語りかけることもない。

そんな奴に、改めて「話がある」と持ちかけるには、ハードルが高すぎる。

——せめて評議だったら。

野に下りた上総には、そこまで持っていくためのはしごすらない。

貴史と犬猿の仲たる南雲だが、上総とは親しい関係だった。

若干、弱みを握られていたりもするのだが、そのことすらあまり気にならなくなる。どうしても上総の場合、人との付き合いに貸し借りを意識したりするのだが、南雲に関してはそんな余計な心配ご無用、とばかりに流してくれる懐の深さがある。

またその「懐の深さ」と外見の軽そうなアイドル顔とがつりあわないのもご愛嬌である。

かつては青大附属中学全学年女子たちからアイドルとして追いかけられたこともある。今だにファンクラブが存在する男子も、上総の知る限り南雲と貴史のみだ。もっとも今の南雲には、ファンの存在すら気にしていられないくらい忙しいはずだ。

——バイトのあと、食事してから寝るまで勉強だものな。これはきついよな。

家庭の事情は、お気楽性格の南雲にも、かなり影響を及ぼしているのだろう。

ちらっと聞いた話によると、知り合いの大学教授の口利きで、ある意味全寮制の予備校的環境に身を置いて将来に備えるよう説教されたそうだ。南雲の父は確か、会計士だったはずだ。周りからは公認会計士の資格を将来取得し、両親の経営する事務所を継ぐよう期待されているのだ

とか。

——それをすんなり受け入れるなぐちゃんとも思えないが。  
これもいろいろあるのだろう。

南雲の家庭事情はともかくとして、ここで重要なことは、三人で一部屋、他の連中に聞きつけられない場所で話ができるという点だった。上総なりにいくつか案を考えてはいたのだが、やはり同じ学校の連中が顔を合わせる可能性の高い場所は避けたかった。学食もそうだし、学校近くの喫茶店もまずい。「おちうど」は論外。さすがにあまり親しくない東堂を品山に連れて行くことは抵抗がある。となると、思いつくのは、東堂と親しい南雲の一室だ。放課後直後から夕食六時前までなら、たぶん下宿先の六畳間にもぐりこむことができるだろう。事情を詳しく語らなくとも、南雲なら許してくれるだろう。

——清坂氏といったい何を言い合いしたのかということがひとつ。

——あいつの彼女を通じて、中学の修学旅行で何が起こったかを確認することがひとつ。  
事情が下ネタだけに、いきなり張本人らしい杉本を問い詰めるのは気が引ける。  
むしろ男子は男子同士で、エロ話全開で勧めていくのも一案だ。

話が収まったところで上総は机の中にノートをしまいこんだ。ぱちんと引き出しの閉まる音と同時に、不思議な昂揚を感じていた。心臓の音がことごとと高鳴るような感覚だ。グラウンドを走った後の息切れとは違う、心地よさだった。

次の日、いつものように早めに教室へ入った上総は、他の連中にリーダーのノートを渡し……もちろん宿題の答えを写させるためだ……さっさと席についた。朝はまだ、それほど暑苦しさも感じずに自転車を漕いでこれた。さすがに上に羽織るものは必要なくなった初夏の気温。手首から指先までが薄茶色に焼けている。

「立村、おはよう」

珍しく今日は関崎も教室にいた。いつもならば例の「外部三人組」と生徒玄関で盛り上がっているのが常なのに。はにかむような笑顔を向けてきた。まだ藤沖は到着していないようだ。いつもならばさらりと挨拶して流すのだが、今日は少し様子を変えてみた。

「関崎、早いな」

「ああ、バイトが終わったらすぐ来るんだ」

関崎と南雲のバイト先が、学校側の「みつや書店」というのもすでに聞いていた。南雲経由でいろいろと噂も耳にしているが、それを確認する必要はない。

「大変だな」

「いや、仕事は面白い。身体が動く」

よく見ると関崎は全身もう真っ黒だ。指先が汚いのは古本をさわって続けたからだろう。

「午前中だけか」

「ああ、朝だけだ。放課後は時間がない」

——だから規律委員会に時間を割く余裕があるんだな。

同じバイト先にも関わらず、今のところ南雲と関崎とは直接仕事をする機会がないと聞いていた。朝、関崎が入荷してきた古本を棚に並べ、放課後南雲がレジ台に居座るという次第だ。見事な分業である。

「立村もバイトしないのか？」

「時間がないから」

流した。関崎と比較すれば暇かもしれないが、認めるのは抵抗がある。

「関崎、今日は週番か」

話を逸らしてみた。ここいらで規律委員会に関して情報を集めておきたい。できれば古川こずえや清坂美里が顔を出さないうちに。関崎は頷いた。

「ああ、そうだ。これからだ」

さらに週番の詳しいなりたちまで説明しようとしたのを上総は制した。

「規律委員同士で、集まったりなんなりしないのか？ ほら、俺が中学の頃は、委員会同士でみな集まって、図書館に行ったり遠足したりしたからさ」

「それはない。時間があまり取れないのもあるが、そんなにひつつくこともない」

ということは、仮に美里が東堂とやりあっていただけとしても、さほど目立っているわけではないのだろう。関崎にとって美里が規律委員としてどこまでの存在として映っているのか、そこまでは読み取れなかった。

「立村は規律委員会に興味があるのか」

いきなり問い返され、戸惑った。まさかとは思うが、上総の目論見を勘付かれているのだろうか。あまりそのあたりの感情の機微に鋭い男ではないと思うのだが。

「いや、別にそういうわけじゃない」

「もし知りたいなら、いくらでも話すが」

話したがっているのは関崎、お前だろう。そうつつこみたいのをがまんし、上総はすぐに席へ戻った。しっぽを出す前に退散するのが一番だ。タイミングよく藤沖が後ろの戸口から陰鬱な顔で入ってきたので、露骨に避けたとは思われずにすみそうだった。

——以前の委員会活動と違い、淡白な繋がりだということはよくわかった。

天羽たちも似たようなことを話していた。ということは、あまり酷い関係に発展する前になんともできるということだろう。

もう少し時間を練ろうと思った。

南雲とは特に連絡を取っていない。男子連中同士はなんとかなるだろう。むしろ気になるのは杉本梨南の件だ。あえて頭に浮かべぬようにしていたのは無意識からか。上総なりにもやはり、美学というものがある。

——直接聞き出すべきなのか。

さすがにいくらなんでも、「お前さ、修学旅行で布団に地図描いたって噂あるけどそれほんと？」とかデリカシーのないことを尋ねる気はない。

——かといって、事実関係をつかまないことにはどうにもならない。

上総の悩んでいる点はそこだった。考えなかったわけではない。ずっと頭の中で泳がせていたら、とてつもなく汚らしい想像に繋がってしまいそうで吐き気がしただけだ。

天羽と貴史のふたりから得た、途切れ途切れの情報をつなぎ合わせてみる。

まず、六月初旬に行われた中学の修学旅行において、杉本らしき女子がおねしょをしてしまったという事実の検証だ。貴史が言うには「東堂の彼女と仲良しの友だち」だそうだから、高い確率で杉本の名が挙がるだろう。。

天羽を始め高校の連中が知っているということは、中学内では誰もが知らぬものなしだろう。当然一緒に修学旅行へ向かった新井林健吾や佐賀はるみも逐一聞き知っているに違いない。

しかもその際、杉本らしき女子はその失敗を誰にも相談せずに自分で始末しようとしたという。これも貴史からの情報だが「押入れの中に隠そうとした」のだという。

——杉本がそんなことするだろうか。

上総がまずひっかかったのはそこだった。

二年以上、杉本梨南の性格を粒さに見つめてきた。性格の良し悪しはともかく、杉本が決してしないこと、どんなに罵倒されてもすることはだいたい理解してきたつもりだ。そのうちのひとつに、「決して嘘をつかない」ところが挙げられる。本人ももちろん、杉本を嫌う連中すらもそれを否定はできないだろう。

仮に杉本がそういうことをしでかしてしまったとしたら、どういう行動を取るのか。

どう考えても、他人の罪として押し付けるとか、濡れた布団を隠して知らん振りするとか、そういう行動は考えられなかった。それ以前に賢く立ち回るなんてできないだろう。顔にすぐに出てしまい、ばれて一貫の終わり。

本人がどんなに隠そうとしても、尻尾は丸見え。それが杉本梨南なのだから。

おねしょ事件が明るみに出た段階で、犯人探しが始まったという。貴史の話だと、犯人が杉本だというのはかなり高い確率らしいが、その一方でまだ曖昧模様な状況も伝わってくる。もちろん貴史の焦点が杉本ではなく美里に向いているという事情も割り引いて考えねばならないにしてもだ。

しかし、天羽たちの言い分は違う。

百パーセント、杉本がその当人と決め付けている。

天羽たち元評議委員連中は杉本梨南本人を直接知っているし、全くもって迷惑をかけられっぱなしだったからなおのこと、辛い点をつけるところはあるのだろう。

その一方で美里は懸命に杉本をかばおうとしている。

——あんなことがあったっていうのになぜ。

かつての交際相手が可愛がっていた後輩。

上総の無神経な言動に、美里は傷ついていたに違いない。

当然、杉本に対して怒りの矛先が向いても不思議ではないのに、それでも美里は杉本を可愛がっている。懸命に、守ろうとしてくれた。東堂の彼女と杉本との関係を引っ張り出して、東堂に噛み付いたというのも、美里らしい言動だ。

——清坂氏については東堂と話をすることでなんとかなるにしても、だ。

またひとつ、疑問が生じてくる。

——杉本はいったい、本当はどうしたんだろう？ あれだけ清坂氏にかばわれていて、それでもずっと知らん振りを決め込むとは、考えづらい。かといって噂がこれだけ広がっているということは、根も葉もないわけではないだろうし。いったいどう考えればいいんだ。

上総はしばらく、目を背け続けた。

逸らしているのは自分が一番よく承知していた。

——まさかそれはないだろう。

美里のようにまっすぐ杉本をかばえる女子はすごい。どういう事情を聞き知っているのかは知らないが、少なくとも杉本を百パーセント信じられたというところが偉いと思う。女子同士、また別ルートから情報を得ているのかもしれない。杉本が潔白であると断言する事実を知っているのかもしれない。

しかしそこでもまた、足にまとわりつく紐のようなものがある。

——現場を見てもいないのに、百パーセント杉本を信じるのが、できるのか？

上総はもう一度、目を閉じた。授業がつまらないからだけではない。

——仮にだ。杉本がその布団に地図を描いた張本人だったとして、もし清坂氏がかばってくれたことを知ったら、どう思うだろうか？

すべては「仮定」として考えざるを得ない。

今集まっている情報を照らし合わせてみても、やはり違うと感じる。杉本がしでかしたという噂は嘘っぽく思える。本来なら上総も、美里を含めて味方になりたいと思う。思うがしかし、どんなに考えても上総には、決定的な答えが見つからなかった。

——もしも、杉本でなければ、誰がやったんだ？

その答えにたどり着かない限り、現段階において杉本を百パーセント受け止めてかばうことは不可能だ。どんなに杉本を守りたくとも、答えがイエスかノーか出てこない限り動きようがない。美里のようにがむしゃらに突っ走ることはできない。

もしも杉本が、本当に修学旅行中、おねしょをしてしまったとしたら。

ふだんの自分の価値観を壊されるくらいの衝撃を受けたとしても不思議ではない。

——杉本は絶対に嘘をつかない。ただし、そのプライドをひっくり返すような出来事がもし起こったとしたら。男女関係なく修学旅行という場で、絶対にしたくなかった大失態をしでかしてしまっただとしたら。あと半年間、「やーい、ねしょんべんたれ！」と馬鹿にされる日々を覚悟

しなくてはならないことに気付いたら。

パニックを起こし、どうすればいいかわからなくて、何よりも。

——関崎にその事実を知られたくなかったとしたら。

校舎は違って噂は流れる。杉本は決して、他の連中が思っているほど鋼鉄の心をもった女子ではない。上総の知っている杉本梨南は、誰よりも幼くて、怖がり、不器用で、それでも自分の価値をなんとかして手に入れたいとあがいている十五歳の少女なのだ。

——もし、隠してしまったとしたら。秘密を隠さねばならないと決めていたとしたら。思わぬ大事になってしまい、表面では知らん振りを決め込んでも心中いつばれるかびくびくしていたとしたら。それに、清坂氏のように無条件で信じてくれている人がいたとして、その事実を打ち明けられずに苦しんでいたとしたら？

——まずは、事実関係を知りたい。それからどうすべきか考えよう。

かといって、なにをどうすればいいのだろう？

まずは東堂と話をするのが先決だ。奴の彼女でかつ杉本の新しい親友から情報を得ているはずだ。その情報を元に、杉本へどう接するべきかを考えよう。同時に美里の突っ走った先が正しいのか、それとも間違っているのかも判断できるはずだ。上総なりの判断で美里がなぜ、そんな言動を取ってしまったのかを説明できれば、東堂も少しは理解してくれるだろう。あまり話をしない奴ではあるが、聞く耳もたない奴ではない。

——もし、杉本が本当に修学旅行で、だったら。

かつて、自分が犯した罪に似たものを感じてしまう。杉本がもし、かつての上総のように追い詰められていたとしたら、決してしないとは言い切れない。自分の罪から目を逸らしつづけ、結局ばれてしまいすべてを失う。この場所を守りたい。自分ひとりしか、この場所を守れない。そのためならば自分はどんなあくどい手も使う。

美里のように上総を信じてくれる女子もいたけれど、結局三年間受け入れられず逃げ回っていた。わかっている、一番自分が嘘つきなのだとは理解しているのは、上総自身だったからだ。保身のためにはどんな汚い手も使う、それは上総のかつての常套手段だった。

もし杉本が、あの頃の上総と同じ気持ちを共有していたとしたら。

——俺は、決して、清坂氏と同じ行動を取ってはならないんだ。事実を知ってからでないと、何もかもぶち壊してしまう。

——俺は、杉本を嘘つき呼ばわりする権利なんて、これっぽっちもない。

南雲から、三頭対談……とは勝手に上総が名づけたもの……の延期を申し入れられたのは帰り際だった。

「りっちゃん、悪い！ これから規律委員会がらみでちょいと呼び出されちまってさあ。なんだよって感じなんだけど、次、必ず埋め合わせするからさ、ごめんごめん！」

「それは大変だな」

委員会活動がいくらおなざりのものになったとはいえ、いろいろと面倒なことがあるのは上総も熟知している。規律委員会がらみとなれば、当然東堂もいるだろう。それは仕方ない。残念だが、

「できるだけ早めに予定を組んでおきたいけどさ、いいかな」

「もちろんだって。明日やろっか、りっちゃんの都合はいかに？」

帰宅部オンリーの上総には特に予定などない。

「じゃあ、この埋め合わせはちゃんと、ポテトチップス一袋用意しとくんで、そこんところよろしく！ ごめん」

相変わらず形の崩れないきつねっぽい髪型をなびかせながら、南雲は階段を勢いよく駆け上がっていった。

特に用事もないのでさっさと家に戻り、早めに夕食を済ませた。

風呂に入ろうとして、湯船の蛇口をひねろうとし、ふと手が止まった。

——もう、限界だな。

この一週間、誰かに要求されたわけでもないのに自分ひとりで守っているひとつの「禁忌」。どうも今夜が限度らしい。

——寝ている間にしでかしたら、洗濯するのも面倒だしな。

それに、ひとつの疑問もある。

——本当に、あれを我慢していたら、背が伸びるんだらうか？

雑誌やスケベ話レベルの噂を、思いっきり信じてしまった上総の一週間。自分でも馬鹿だと思ふ。女子がダイエットに燃えるのと同じニュアンスで、上総はこの一週間、わが身に禁欲生活を強いていた。

——ちっとも伸びる気配ないだろ？ 嘘つけ！

風呂はまた後で焚こう。まずは、この悶々たる精神状態をすっきりさせるのが先決だ。

上総は部屋に戻り、デニムの半そでシャツと黒ぶちのガラス入りめがねを用意した。いわゆる「伊達めがね」だ。これをかけると貴史や美里でもそれが上総だと気づかない。変装するにはうってつけの小道具だった。

財布もしっかり持ち、生徒手帳はもちろん置いていく。

何よりも忘れてはならないのは、シャツの裾をふわりとベルトとチャックにかかるくらい長く

出すことだった。たぶん人前でみっともない真似はさらさないと思うのだが、男子の自然現象をコントロールするのはやはり、難しい。一週間我慢しつづけた分、猛烈に「溜まっている」のは感覚でもよくわかる。健康な十五歳の男子には、やはり苛酷だった。

——効果がないんだったら、さっさとやめよう。こんなことは！

こういう時本条先輩がいれば、「夜、抜きすぎると背が伸びなくなる」という俗説が本当なのか聞くこともできるのだがそれもいかない。背丈が165センチから一切伸びなくなった上総にとって、この問題は切実なことなのだ。背丈に悩む必要のない貴史や南雲にもそんなこと相談できるわけがない。結局、自分で試すしかないわけだ。

風呂場であやうく手が動いてしまいそうになるのを必死に堪えるのも、限界に近い。

こうなったらやけだ。

——思いっきり好みの本を買ってきて、一晩中やりたいただけやってやる！ どうせ俺は背が伸びないんだし、なにやったって無駄なんだって！

禁欲生活は、無意識のうちに上総を狂暴にしているような気もしていた。自分でもこれはまずいと思う。人さまに迷惑かけないうちに、気持ちよく果てようと決めた。

夜の七時過ぎ、藍色の空に丸いお月さまが浮かんでいた。自転車で駅前まで漕ぐつもりでいた。いわゆる「実用本」と呼ばれるグラビア雑誌なら近所のコンビニにも並んでいるのだが、さすがに知り合いと顔を合わせる可能性のある場所で買う気はしない。また、正直なところ上総の好みとして、ただ明るい可愛いだけのグラビアアイドルでは気持ちよく……というのが感じられなかったのも一因だった。好みがうるさい性格なのだ。

——少し年上に見えて、ほっそりしていて、上品な感じで、静かそうに見えるタイプ。

この好みは性に目覚めてからほとんど変わらない。

また、そういう女性の載っている雑誌はあまりない。写真集が中心となる。

上総も最近ほっそり、知り合いと顔を合わせないであろう書店を選び手に入れるようにしていた。やはり見られるのは恥ずかしい。男子ならまだしも、女子と顔を合わせた日にはもう二度と学校に通えなくなるんじゃないかと思うくらいだ。

——また、変な趣向の写真集じゃないといいんだけどな。

一度、ものすごく好みの女性モデルの写真集を入手したことがあった。顔もスタイルも雰囲気もぴったり、上総好みだったのだが唯一その写真集のテーマが、叩いたり吊るしたり縛ったりという、どう考えても拷問としか思えない内容だったのが誤算だった。もちろん壮絶なシーンだけではないので活用させてもらったが、やはり、後で、苦いものが残る。

——自然に、何も着てなくて、自然に、寝ているだけでもいいんだけどな。

まずい、こんなことを外で考えるようになっていてこと自体、禁欲で気が触れそうになっている証拠だ。やはり早く、自分で処理してスッキリした方がいい。鼻血ふいてぶっ倒れたり、布団の中であわやおねしょかとどっきりしたりするよりは、何千倍もましだ。

夜はやはり冷えた。こいでいるうちに自然と汗が流れてくるものの、やはり触れる風は冷たか

った。すっかり黒空にネオンの漂う青湯駅に到着し、上総が向かったのは深夜まで開いているビル地下の古本屋だった。知る人ぞ知る、ここはグラビア写真集および十八歳未満お断りの雑誌がてんこもりの名店なのだ。本条先輩に教えてもらった。もちろん、十八歳未満お断り……のはずなのだが、よくよく見るとアニメ雑誌とか一般書などもおかげり程度に備えられている。ということは、そのあたりの健全な本を買いにきてたまたまひょいとみたら、年齢制限の雑誌がいっぱい……ということでごまかしもきくというわけだ。

まさかとは思いますが、捕まることはないだろう。階段をゆっくり降りていき、ガラス戸に大量のピンクチラシが張り巡らされた戸口をそっとあけた。八時過ぎだと来店者のほとんどはサラリーマンらしい男性客が中心だった。背広にネクタイ。中にはTシャツとジーンズの学生っぽい風情の人もいる。幸い青大附属の関係者と顔を合わせたことは今日までなかった。

棚にだいたいふたりぐらい張り付き、ぺらぺら雑誌をめくっている。

特に何かというわけでもなく、時間つぶしといった感じか。

がつつくように見入っている奴は見かけなかった。

——少しゆっくり見られそうだな。

学生の多い古本屋だとそうはいかない。まかり間違っても学校近くの「みつや書店」でエロ本調達など考えることはできない。関崎は古本整理しながら、やはりエロ本の一冊か二冊、覗き込むことなどあるのだろうか。

ぱらぱら、興味があるなし関係なく手にとり眺めていく。この古本屋でありがたいのは、写真集にカバーがほとんど掛かっていないことだった。ある程度中を見て選べるわけだ。結構新刊書店の場合、表紙でひっかかって買った方がいいが、開いてみてげんなりというパターンが多々ある。たとえば上総の場合だと、清楚なワンピース姿の旅姿写真に心惹かれて購入したら、中は真っ赤なビキニ姿オンリーだったことがあった。かなり高い買い物だっただけにあの時は後悔した。なお、その本は高校に入ってから貴史にただで譲った。感謝されたのは言うまでもない。

まず、よさそうな写真集を手にとってみた。

表紙はもとより、ページの中もチェックする。妙な汚れや手垢ができるだけついていないものを選ぶのは本音。本当なら新刊を買いたい。他人の欲望がくっついている古本を手にしたくないのだが、そこが高校生経済の哀しいところ。切迫感と価格は比例してしまう。

めくってみても、ずんと激しくそそられるものは感じなかった。

仕方ないので別の棚に移動した。

めがねをかけなおし、シャツの裾を改めて伸ばし、先客の隣りに並ぼうとした。息を呑んだ。

——こいつは……！

伊達めがねをしてきて正解だった。

ぴっちりしすぎたスリムジーンズに、同じく小さめの白いTシャツ姿。

食い入るように両手で表紙を支えて見入っている。

しかも、上総と同じく、めがねをかけて変装している。

変装しているとわかるのは、自分よりほんの少し背の低い彼の普段の顔を知っているからだ。隣に立たれても、気付かずにページをめくり、口を半開きにしている。

こういう店では滅多に見かけない「がつつくように見る」タイプの客だった。

——霧島さんの弟だよ、こいつは……！

現生徒会副会長でかつ、秀才の誉れ高い美少年。

実姉の霧島ゆいとは瓜二つ、制服を着ている時は実にりりしい。

——霧島さんがアリスだとしたら、この弟は誰だろう？

イメージするならば、欧米の上流階級子息が集う学校ドラマに出てきそうな、気品のある王子様だろうか。青大附属でならそれも簡単にイメージできる。

がしかし。この場所で、キリオ……と、難波更科コンビは呼び習わしていた……は掃溜めに鶴状態。いや、鶴には見えないくらい、写真集にのめりこんでいる姿は滑稽だった。

——さっさと姿を消すことにしよう。気づかれないうちに。

上総はそっと背を向けようとした。ふと、霧島の横顔をちらりと目に留めた瞬間、鼻の穴付近にちらつく赤いものを見た。

——なんだ、あれは？

口紅でないことだけは確かだった。霧島は気付かずにひたすらページをめくっている。端正な顔立ちがどことなく間抜けに見えるのは口が開いて鼻の下が伸びているからだだろう。そのえくぼに近いところに、またつつと鼻血のようなものが下りてきた。いわゆる興奮して鼻血を噴いたという風には見えない。むしろ、青っ漬に色をつけたようなもの。自然にこぼれたようなもの。

——チョコレートを食べ過ぎたんでなければ、やはり、そうか。

男子の本能がどこで疼いているかは、ジーンズのシルエットを見ればだいたいわかる。やはりそのようだ。完全に「テントを張った」状態と化している。

ひとりの世界にこもってどうやら霧島は、背の高いハイヒール、およびスーツ姿のOLに妄想を膨らませているらしかった。こういう場合は知らん振りをするに限る。限るのだが。

「ああ、あ」

いきなり霧島がかすかな声を挙げた。鼻をすすり、初めて違和感に気づいたらしい。ぱたっと本を平台に取り落とし、手の甲で血をこすり、改めて見入った。

「血……」

小さく呟いた。手の甲を見つめ、いきなり怖気づいたらしい。たかが鼻血の一滴二滴で動揺する奴には見えないのだが、今上総の目の前で霧島はがたがた震えている。足元が見た目でもわかるほど揺れている。

考える間もなく、上総はポケットからハンカチを取り出していた。

霧島の目の前にそれを差し出し、握らせた。

「捨てていい。早く拭け」

初めて霧島は上総の顔を見上げた。黒ぶち伊達めがねに最初戸惑っていたようだった。それでもすぐに、めがねの奥にいるのがかつての評議委員長・立村だということに気付いたらしい。

「あ、あ」

短く、何かを発するだけ。いつか生徒会関係の出来事で見かけたような、生意気すぎる態度はおろか、甲高い声で人を軽蔑する言葉も出てこなかった。完全に硬直しているらしい。血を見たのがそんなに怖かったのだろうか。

次に上総は、霧島が手から落としたキャリアOL主演の写真集を拾い上げた。ちらとめくると、皮肉にもモデルさんは上総の好みそのものだった。まあ、真っ赤なスーツ姿というどうしても母を思い出すのでそそのものは、正直ない。だがそれ以外の写真もそれなりに入っている。もしかしたら霧島は、上総と女性好みがかぶっているのかもしれない。

「外に出よう」

霧島の耳元に囁き、素早く腕を引いた。強引だったが霧島は逆らわなかった。硬直したまま上総に従った。反抗しなかったのが何故なのか、それが不思議だった。何も言えないままだった。

レジに立ち寄り、黙って写真集を差し出した。

「千円です」

ぶっきらぼうに店員が紙袋に包んでくれた。すぐに支払った。後ろで呆然としたまま、ハンカチを握り締めている霧島の背を押し、先に外へ出した。階段を昇りつつ、途中でふたたび立ち止まる霧島の腕を上総は引いた。そのまま、霧島は素直に従った。

——なんでこんなことをしたんだろう。

結局、自分の買いたい本は買えなかった。

よりによってなぜ、軽蔑されている自分が、青大附中副会長によけいなおせっかいをしてしまったのか、自分でも説明がつかなかった。

第一、こういうエロ本が並んだ古本屋を知っていること自体、あとでばれたらろくでもないことになるってわかっているのにだ。しかも、後輩とはいえ懐かれているわけではない。かえって嫌われているはずだ。なのに、なんで。

——身体が動いてしまった、それだけだ。

戸惑っているのは上総も一緒だった。霧島といえば、姉のゆいを罵倒するとともに、男尊女卑思想の猛々しさが目に余る奴ときいていた。プライドが高く神経質で、姉を心より憎んでいる。難波や更科からも彼の言動については頭の痛い事を聞いていた。とはいえ、外見の整っていることと、賢いこと、いわゆる「王子様」雰囲気であることなどもあり、学校内での評判はよい。

しかしなぜ、こんなところで、ひとり、パニックに陥ってしまったのだろう。

たかが鼻血くらいで、なぜ。

——あのまま放置しておけば一番良かったとは思うけどさ。

なぜか、そうできなかった。上総の中でスイッチが入ってしまった。

やはりまずいだろう。いくら青大附中がオープンな学校とはいえ、青少年に悪影響を及ぼすとされている写真集を手に見られているのを見られるのは。上総からしたら、ああいう場所で違和感なく振舞えるのは本条先輩ひとりだけだと思う。

——さて、どうするか。

階段を昇りきり、霧島を改めて観察した。

上総の記憶する霧島副会長というのは、やたら甲高い声で相手を攻撃し、姉を罵倒している姿しか思い浮かばない。しかも自信ありげにだ。自分自身の中学二年時代を思い返しても、あそこまで自信まんまんに振舞うことはできなかったと思う。いや、今でも似たようなものだが。

しかし、その一方で「張子の虎」に似たものを感じたりもする。

姉のゆいが、青大附高への進学を拒絶された時の変貌を同学年として見つめてきた上総には、霧島弟にも同じ傾向があるように思えてならなかった。たった今、エロ本一冊で鼻血流した程度でこんなに動揺している姿を見ると、なおのことだ。

——おそらく、プライドはずたずただろうな。知らん振りして去ろうか。

素早く霧島弟の心情を感じ取ってみた。上総に与えられた数少ない能力のひとつだ。

見るからにしょぼくれている姿に、自信に満ちた生徒会副会長の面影を見出すことはできない。できないのだが、朝が来て学校に向かう頃には復活しているに違いない。いわば上総は霧島の隠された一面を発見したに過ぎない。もし何か脅迫するようなことがあれば話は別だが、それ以上何かをするつもりもない。野に下りた上総には、霧島弟と直接接点を持つ必要も全くない。

上総は伊達めがねを外さず、本の入った紙袋を差し出した。

「勝手に処分していい」

一言だけ告げた。すっかりびくついていた霧島が、身体をこわばらせて首を振った。

「俺と趣味が近かったから買っただけだが、こういうタイプのモデルは好みじゃない」

また霧島は口を半開きにして何かを訴えようとした。まるで別人を見ているようだった。制服を着ていない霧島がこんなに変わるとは、上総も想像していなかった。

「あ、あの」

「何か」

「持って、帰れない、帰れないんです」

改めて上総は霧島の顔を見つめなおした。王子様めいたその顔が、完全に崩れている風にも見えた。もちろん造作が変わったわけではないのだが、どこことなくたるんでいる。

持って帰れない。

——そういうことか。

すぐに察した。特に女性の家族には見られたくない代物だろう。わかる、わかる。

「隠す場所はないのか」

「……はい」

想像はついた。そういうことなら仕方あるまい。

「それなら、明日の放課後、表紙をうまくごまかした形で渡すよ」

「ごまかす？」

言われた意味がわからないようだった。鼻をかきながら霧島が問うた。

「うちにある本の表紙で、ちょうど大きさが合いそうなのがあるから、それをかけておけば当座はしのげるだろう。放課後に青大附中へ持っていく」

ひくり、霧島が身体を震わせて俯いた。なぜこんなにか弱くなるのだろう。

「あの、僕が、取りにいけます」

やはりとんがった声だった。そこから搾り出される言葉の弱さ。

「先輩の教室、わかります。英語科、A組」

そこまで口にした後、霧島が突っ立ったまましゃくりあげ始めたのを、上総はなすすべもなく見つめていた。人通りの多い駅前とはいえ、書店の色合いゆえに誰もいない。おそらく上総しかこの、崩れ果てた霧島を見かけることはないだろう。

——中学二年か。

ちょうどこの時期だった。思い出しふと、はにかみを覚えた。

——同じ時期だったな。

母にいわゆるその手の本を見られないよう父より忠告を受け、本条先輩に慌てて預かってもらうよう頼んだことがあった。当然本条先輩だからさんざんからかわれたけれど、今思えば上総のかたくなな性格を慮って言ってくれたのだとわかる。同期の評議連中から距離をおき、いわゆる猥談を嫌悪する振りをして、実は興味津々だったことを隠していた自分だった。二年経ち、上総の中で沸き立つ激しい欲望のようなものともなんとか折り合いをつけられるようになり、友だちともさらりと交わし合えるようになった。

そこまでたどり着くまでの時間が、二年だった。

——二年前の俺も、本条先輩からしたら、あいつのように見えたんだろうな。

なにか、許せた。

「お互い見られたくないところを見られたただけだ、俺も口外するつもりはない。お前も言うなよ、霧島」

上総はそれだけ言い残し背を向けた。駅前の自転車置き場へ歩いていった。蛇の激しいうねりもいつのまにか落ち着いていた。もし上総が夜にエロ本を仕入れに出かけたことがばれたとしても、女子たちから軽蔑されるのが関の山。まあ杉本がどういうかは別としても男子はみな腹のうち分かり合っているから、人間関係が崩壊することもないだろう。気にせねばならない肩書もない。野に下りた以上、何も気にすることはなかった。

霧島は朝も昼休みも姿を現さなかった。

——そりゃあそうだろうな。

きちんと「大学受験用模擬試験集」の表紙をかぶせ、念を入れてビニールをかぶせて学校に例の本を持ってきた。上総が家に帰ってその本の内容を一通り目通ししたところ、「キャリアOLの禁じられた遊び」とかいうやはり趣味の疑われそうな内容に気がついた。

プライドの高い仕事のできるキャリアウーマンが、夜は派手なスーツ姿のまま平伏したり叩かれたりいろいろ屈辱ポーズを取っているものだ。こういってはなんだが、家には持ち込むのにかなり勇気が必要だろう。上総も一夜だけとはいえ、かなり心に負担がかかった。

——そういう趣味なのか。

気の強かった霧島の姉・ゆいを知っている上総としては、非常に複雑なものがある。

巷では、姉を心より嫌悪しているマザコンの弟らしいが。

——いや、相当ストレスが溜まっているんだだろうな。

預かり物の本で自分の欲求を解消しようとは思わない。内容もとてもだが、上総には向かないものだった。何よりも赤いスーツ姿のモデルが、上総にはどう見ても母と重なってしょうがなかった。

——まあいいか。取りにきたら渡すだけだ。

本条先輩から習った、エロ本を隠す術を教える程度のこと。

——普段から写真集を隠すことのできるような大きめの参考書を買集めておき、そのカバーを使うこと。

男子の後輩たちに口伝えで語り継がれてきた、男子の心得。

霧島もおそらく知っているとは思うのだが。

「りっちゃん、悪い。ちょっといい？」

上総が数学のプリントをまっさらなまま机に広げていると、南雲がいきなり教室に現れた。

「どうした？」

「宿題の真っ最中だったりする？」

「いや、あとで教えてもらうものだからいい」

南雲は襟のボタンをひとつ開けたまま、手で「あちーあちー」と繰り返しながら上総の前に前かがみとなった。

「東堂大先生の件なんだけどさ、あいつが直々りっちゃんと語りたことあるらしいんだ」

それは上総の方からもちかけたことである。頷くと、

「ちょっとさー、なんかあいつにしてはいろいろストレス溜まってるとみたくてさ。俺もちょいとすっきりしたらあ？なんてお勧めしたりするんだけどね」

肩を竦めてにやっと笑った。

「なんかさ、あいつもりっちゃんに相談したいらしいんだけど、俺の家よか学校内でやる方がいい

いんじゃないのってことでさあ」

「それはまずいよ」

上総は言い返した。

「あまり、人前で知られたくないことだから」

「知られたくない気持ちもわかるんだけど、東堂大先生、ちょっとね、どうしてもね、中学で語りたいらしいんだ」

「中学？」

「つまり、中学の校舎内で、きちんと話をしたいんだって。よっくわからねえなあ」

わざとくだけた口調で続ける南雲だが、その言葉の裏にはかなりの重たいものがあるようだ。上総の見たところ、どうも東堂がぶちぎれているらしい。一日空いたその間、何か上総に対し不快感ものを感じたのか、それとも違うのか。その辺はわからない。ただ、相当言いたいことがあって、それが中学とかかわりあるということ、またその件がおそらくだが杉本にもかかわりあるのでは、というのは感じられる。桜田という東堂の彼女の件も含めて、だ。

「中学校舎内でか」

「高校の連中には知られたくないらしいんだけどね。ほら、あいつの彼女のこともあるって、帰り一緒に帰りたいじゃんってこと」

不良少女の彼女を持つといろいろ大変なこともあるらしい。

「ちゃんと俺も間に入るから、その点は安心してよしよし」

「何がよしよしだよ」

とはいえ、南雲がいるならぶん殴り合いにはならないだろう。

「てなわけで、よろしゅうに」

南雲は軽く手を振って教室を出て行った。

ふと隣を見ると、後ろの席から藤沖と古川こずえのふたりが上総に視線を送っている。こずえだけなら聞いてもいいけれども、藤沖とはあまり関わりたくない。

東堂としっかり話をしたいと考えたのにはいくつか理由がある。

まず、貴史から聞いた、美里の件。

杉本の問題もさることながら、そこから派生して美里と険悪になってしまった理由を直接問いただしたかった。美里の性格上、かなり余計なおせっかいだったことは想像がつく。気持ちがわからないでもない。しかし、

——以前の清坂氏とは別なんだから、それは考えてもらいたい。

かつての美里のごとく、貴史が側にいてこずえがフォローしてという関係がクラス内に存在すれば、さほど問題は起こらないだろう。しかし今は、四面楚歌。本来手に入れるべき評議委員の座も奪われている。女子たちからは総すかんを買っている。どうも担任ともうまく行っていないようす。そういう美里を、元D組メンバーだった東堂がないがしろにするとすると、もう居場所がなくなってしまう。

——羽飛と離れている以上どうしようもないってことを、わかってもらわないとまずいよな。

事情は理解している旨伝え、東堂に頭を下げて我慢していただこうと、まずは考えている。

と同時に、もうひとつ。これは頭を下げられない。

——杉本の件だ。

はたして杉本の修学旅行おねしょ事件が、東堂にも流れているかは不明だ。杉本の新しい親友・桜田が口の軽い女子ならともかくもだ。ただ、もし知っている とすれば、かなり生々しい情報が手に入るだろう。実際杉本が本当に、やっちゃったのか、それとも噂なのか、ある程度の判断はできそうだ。

もちろん最終的には杉本を捕まえて、ある程度かまをかける必要もあるかもしれない。

——最後は事実関係を確認して、それからだ。

できればそんなことありえないという答えを見出したいのだが、そうでないという覚悟も上総はしていた。万が一、嘘をついて布団を隠していたとしたら、これから上総はどういう態度で杉本に接すればいいかを考えるだけのこと。方向性は見出せる。

少しずつだが、上総なりに杉本梨南への今後について、形作りはしていた。

——してても、してなくても。どちらにしても。

どの答えが出たとしても、上総のスタンスに変わりはない。

——俺は杉本を嫌ったりはしない。

中学時代の約束は、まだ上総の心に生きていた。中学二年、やはり初夏のことだった。

長い長い数学の授業が終わり、もう一時限の授業が入り、ようやく放課後だった。

鞆に荷物を整理していたが、やはり霧島は来なかった。

「じゃあな、立村！」

明るく関崎に声をかけられ、頷くだけで教室を出た。いったいこいつは落ち込むことがあるのだろうか。少なくとも青大附属に入ってから一度もないような気がする。校風がたった三ヶ月で人格を変えてしまう稀有な例だと思う。

南雲を通じて約束した通り、上総は中学校舎の玄関口へと急いだ。

東堂直々のご希望とのことだ。

——何言われるんだろうか。

見当がつきそうでつかなかった。南雲がどのように上総の意向を伝えているかは定かではないけれども、おそらく最近の出来事を鑑みていろいろ想像しているような気はする。南雲と東堂とは、上総とまったく別の点からなる親友同士。理解できそうになかった。

珍しくこの日は太陽が弱めで冷えを感じる。こういう時羽織もののパーカーかジャケットが欲しいところだ。二の腕を片手でこすりあげ、上総は軽く身震いをした。

「りっちゃん、こっちだよ！」

あいかわらずさらとした口調の南雲。大声で呼ばれて思わず戸惑う。

三ヶ月前まで自分の庭だった中学校舎だが、すでに別宅のようだ。

杉本に会うため通ってはいるけれども、自分から少しずつ離れている感覚。

「遅くなり悪かった」

「いいよ、それよか東堂大先生はまだかねえ」

とぼけた口調できょろきょろ見渡す南雲。どうやら東堂とは別行動で待ち合わせ場所に来たらしい。

「なんかさ、昨日の規律委員会でさ、いろいろ疲れてるみたいでさ」

区切りながら、それでも明るく南雲は伝えた。

「まあ、規律自体の仕事は朝夕の週番くらいで、一年ペーパー連中はたいしたことないんだけどね。けど、いろいろと人間関係がさ」

「清坂さんのことか」

ここでは「氏」を使わずに尋ねた。

「あ、ああそっか。りっちゃん清坂さんから聞いているの」

「少しは、いや、伝聞で」

わけのわからない答え方をしてしまった。

「あっそうか。でもまあ、大丈夫だよ」

南雲の答え方からすると、若干の事情は把握しているのだろう。

「俺もいろいろと気になったことあったしね。りっちゃん、けどまあ、女子たちのことはあんまし気にしないほうがいいよ。めんどううじゃん」

「まあ、面倒だよな」

本当だったら触れたくないけれども、美里は上総にとって、大切な友人のひとりだ。

彼女がピンチに立たされているのなら、なんらかのことはせねばなるまい。

「東堂先生もさ、りっちゃんが話したがっているって伝えたら、あああれかって顔してたしさあ。ま、しょうがないよ。東堂にとってはアキレス腱切られたようなもん」

「悪いことは確かに悪いよな」

ほぼ事情を把握していると判断してよさそうだと。上総は話を「関係者」向けに切り替えた。

「人のことに口出ししたがる人だというのは三年間よくわかっていたし、東堂が迷惑がるのは理解できなくもないんだ。だから、それで東堂がなんとかしたいと思っているなら協力しようかな、とか思っているところなんだ」

「そうか、考えてるんだなありっちゃん」

茶化すわけでもないのだが、重たくない返し方をする南雲。

「やはりそういうのはあるよなあ」

「だから今回、東堂とその事情について」

上総がそこまで言いかけた時、南雲の表情がふと、真面目に固まった。

「あらら、噂をすればなんとやら、あすこにいるじゃん東堂が！」

南雲の指差す方向は、なんと生徒玄関だった。

上総たちが待ち合わせた時間帯は、大半の生徒たちが下校しているはずだった。もちろん生徒会や部活動、委員会で残る奴もいるだろうが、そろそろ期末試験の準備も重なる頃だし、わりと残っている生徒は少ないのではないだろうか。

「どこにいる？」

「ほら、三人で固まってるだろ？ やたらと四角い顔している奴が美女二人にかこまれてまっせ」

美女かどうかは別として、確かに東堂はふたりの女子中学生に囲まれていた。入り口でどうやら二対一に分かれ、なにやら語らっているようだ。女子たちの様子は遠すぎてわからないのだが、ひとりがなんとなく見覚えある子に見えるのはなぜだろう。

「東堂も待ち合わせ、このあたりだと把握しているだろう」

「いやね、例の彼女に少々あいつ、過保護の嫌いが無きにしも非ず」

南雲は肩を竦めた。白いシャツに少し張りの出てきた肩が上下する。逆三角形を形作りつつあるその体格、やはり中学生とは違う。

「りっちゃん、悪いけど、東堂がエキセントリックに騒ぎ出しても、まあ大目に見てやってもらえるとありがたいなあ。なんせさ、あいつ例の彼女をなんとかしてまっとうな道に戻そうとがんばってる所なんよ。ほんと、あいつ真面目だからさ。けどね」

そこで言葉を区切った。

「けど、よりによってあそこまで、なあ」

言いたいことはわかるのだが、たぶん東堂も南雲にだけは言われたくないと思っているだろう。

「りっちゃん、行く？」

「行く」

上総は南雲の返事を待たず、東堂たちの居る場所へと向かった。

あの中にいる女子が、上総の一番よく接している中学生だということにやっと気付いたからだった。

——東堂の奴、いったい杉本に何話をしてるんだ？

東堂が杉本に向かって、何かを訴えている様子だった。

駆け寄ると、曇り空の下三人がこちらを見た。杉本が軽く一礼をし、東堂が「やあ」と片手を挙げた。間に挟まれる格好の、少し茶色っぽい髪型の女子がふくれっつらをしている。見た感じ、小鳥、ふくら雀といった雰囲気だった。髪の毛を染めているということ自体、まず優等生ではないだろうと判断した。

「立村、どうもどうも、悪かった。待ってた待ってた」

「何を待ってたんだ」

無然と上総が言い返すと、東堂はいかにも即製笑顔といわんばかりににやけた。

「いやいやね、この機会だからな」

元D組同士、会話は和やかだ。

「彼女に伝えてもらえるとありがたいんだけどね」

彼女とは、おそらく杉本のことだ。不承不承ながらも杉本は頷いた。言い返した。

「ですから、なんの御用ですか。私と桜田さんはこれから帰宅予定です。なぜ東堂先輩が話し掛けてくるのですか」

上総も素早く杉本の背に立った。

「何があったんだ」

「私にはよくわかりませんが、東堂先輩は私と桜田さんに干渉したいようです」

小声で返してきた。

「干渉だって？」

聞きつけた東堂がすぐに補足し始めた。もちろんもうひとりの女子……桜田さんを支えるような格好でだった。

「お互いべったりしすぎるのは、よくないと言うことを伝えただけなんだけど、やっぱしわかってもらいづらいよなあ」

「よくわからないな。女子同士の話になぜ東堂が割り込んでくるんだ？」

全くつかめず、上総は問い返した。

「せっかくだ、立村もいることだしきちんと話そう」

おちゃらけ口調ながらも東堂は続けた。

「どういう立場にいるのかふたりとも理解しているだろう？ 教師連中からお前なんと言われてるか、わかるだろ？ そんな目をつけられたもの同士でべったりしていたら、痛くない腹を探られるだけだ。ふたりとも、幸い味方になるお兄さんがいるんだか、そいつに助けてもらえばいいんだ。何もふたりでくっつきあう必要はないだろう？」

言葉を返せなかったのは、何度理解しようとしても東堂の言葉が把握できなかったから。

ひっそりと様子を伺っている南雲が、困った顔で頭を搔いているのだけがやたらめだった。

通り過ぎる生徒たちが上総と杉本たちを蔑視した後、「南雲先輩だ！」とか囁くのが聞こえる。このあたりは変わっていない。

——いったい東堂の奴、何を言いたいんだ？

全く脈略がないその言葉。杉本と桜田さんとの繋がりを快く思っていないのだろうということくらいはわかる。しかし、だからといってなぜ、ふたりに割り込む必要があるのだろう。いやなによりも、なぜ上総を前にして、証人の南雲もセットに用意して、演説する必要があるのだろう。

「東堂、申し訳ない、何を言いたいか全然わからないんだ」

仕方なく上総は白旗を揚げた。

「杉本が何か、お前にしたのか？」

「いや」

言葉短く答えた東堂。

「だったら、なぜ」

黙ったまま返ってこない。そのかわり、桜田という女子がきつと東堂の顔を見据えて罵った。「あのねえ、なんであんた私の友だちにけちつけたがるわけ？ 私はあんたの妹なんかじゃないってのに！」

「俺はお前のご両親からお墨付きをもらっているんだ。言うこと聞けよ！」

「はあ？ 何考えてるのよ。あんな勘違い連中の言うことを鵜呑みにしてる馬鹿のくせにさ。第一あんた、杉本さんのことをちっとも知らないくせに何考えてるのよ」

なんとこの女子、東堂のことを「あんた」呼ばわりしている。

「男子ってほんっと馬鹿よね。やることばかりやりたがって、そのくせ自分の気に入らないことしようもんなら文句たらたらだし。ばっかみたい。ねえ、杉本さん」

「男子が馬鹿なのは今に始まったことではありません」

杉本の言葉と同時に、ちらと上総を見たのはどういうことだろう。ちりりと響くもの、心にある。その後杉本はまっすぐ東堂をねめつけるように見返した。

「もしも、私に関する修学旅行関係の噂で桜田さんがとぼっちりを受けることを懸念されてらっしゃるのでしたら、ご安心ください、ご迷惑は決しておかけしませんので」

「いや、そういうことを言っているんじゃないんだよ、だから、立村と」

いきなりしどろもどろになる東堂を冷たく見返して、

「立村先輩とも関係ございません。ただし、私が桜田さんと人目につくところで友人付き合いをすることが不快なのであれば、隠れて語ることにいたします。桜田さん、それによろしいですか？」

——杉本、おい、友だちに言う言葉じゃないだろう？

つい先日、上総に文句を言った時、杉本は桜田を素晴らしい友人として守る発言をしたはずだ。しかし杉本の口調はどうもその友情をドライに捉えすぎているようにも思う。これで傷ついたりしないのだろうか？

「オーケー！ もうね、馬鹿は馬鹿よ。何言ったって馬鹿。言っとくけど杉本さんがおねしょしたって噂を間に受けてる馬鹿男なんて、誰が信じるってのよ！ねえ」

「貴女がそうおっしゃってくださるだけで、嬉しいわ」

杉本は穏やかにそう答えた。

——杉本はやはり、例の噂を意識しているのか？

いつか本人を前にしてはっきりと確認しなくてはならない。そう思っていた。

もしかしたら杉本は、そんなの知らないと思ひ込もうとしているのではと感じていた。

杉本ならば、あまりにも辛い現実から逃げたくなるのもわからなくもないから。

——でも、なんでこんなに落ち着いてる？

いつも見ていた杉本の姿とは違う。

こういう「ありもしない噂」を立てられたら、以前の杉本なら激しく罵倒し、相手が反省するまでの間しつこく攻め立てることだろう。

なのに、今は。

——東堂を最低限の罵倒しかしてないよ、いったいどうしたんだ杉本は。  
上総の知る杉本梨南とは違う、何かだった。

「立村先輩、よろしいですか」

いきなり杉本は上総に近づき、片手でまっすぐ校門を指差した。

「東堂先輩がお感じのことも想像できないわけではないので、私は仰る通り立村先輩と一緒に帰らせていただきます。ただし、桜田さんを一方的に所有物とするのはやめていただきたいと存じます」

「所有物？」

上総が呟いただけ。東堂が黙って聞いているだけ。

「私が見る限り、東堂先輩の言動は、桜田さんを人形化しているように思えます。守りたいからといって、ご自分の一方的な感情を押し付けることは、暴力です」

最後まで東堂の目的はわからなかった。それ以前に、美里の話もできなかった。何一つ上総も伝えることができなかった。杉本の静かな瞳に逆らうことが出来ず、上総は東堂へ一言挨拶した。

「悪かった、また後で続きを話そう」

東堂はまたにやにや笑いで両手を合わせた。

「立村、ごめんな、あとでまたな」

その視線ですぐに、南雲を呼んでいる。どうやらこの茶番劇、上総と杉本はお役ごめんのようだった。

——いったいなんだったんだろう？

唯一収穫だったのは、杉本の新しい親友・桜田の顔をまじまじと眺めることができたことだろうか。見た目は子どもっぽい、口の悪さはどうみても杉本にふさわしいと思えなかった。こういう性格の女子をなぜ、杉本は佐賀はるみの後釜として選んだのだろうか。東堂が杉本と付き合い合うことを避けさせようとしているのだとしたら、上総もむしろ、なぜ杉本が桜田を親友に選んだのか、その理由を聞き出したかった。

「杉本、今日は付き合えよ」

校門から足を踏み出す寸前杉本へはっきり伝えた。

「これから『おちうど』に行くからな」

しばらく黙っていた杉本は、溜息を小さくついて答えた。

「かしこまりました」

その後すぐ、また上総の目をじっと見据えた。にらみつけるような眼差しはやはり、数ヶ月前のかたくなな杉本梨南のものだった。

本当は理由をつけて杉本梨南を連れ出したかったというのが本音だった。

東堂のわけわからない言い分を聞かされているよりも、いやそれ以上に杉本が仲良くしているという不良女子の顔を眺めているのがいらいらするだけだった。

どう考えても、不釣合いに思えてしまう。

——杉本に気付かれたら、半殺しに遭うな。

わかっている、感情が流れ出すのだ、しょうがない。

「立村先輩、どうしてまたわけのわからぬことをなさるのですか」

校門を離れ、いつもの校舎間にある森を潜り抜けながら杉本が尋ねてきた。

「本日の状況を鑑みれば、私が姿を消すべきところだとは思いますが、それでも立村先輩の言動は不可解です。今に始まったことではありません」

「悪かったな」

どうせ、今年の冬にかけて杉本をかつさらった時のことを指しているのだろう。

「でも、『今』は、納得しているだろ？」

「はい。あの場は東堂先輩と桜田さんをふたりにすべき場面と判断いたしました。南雲先輩がどうなさるのかまではわかりませんが」

——なぐちゃんはきっと、そのまま見送るだろうな。

南雲の性格は上総もだいたい熟知しているつもりだ。たぶん何もすまい。

——しかしだ。

上総はあらためて東堂の言動について首を傾げた。

「杉本、前から東堂の奴、あんな風にお前に文句を言ってきたのか？」

ほとんど上総には伝えてこなかったのが驚いているのが現実でもある。杉本はしばらく黙った後、頷き、言葉を継いだ。

「はい。相当、私を誤解されてらっしゃるようです」

「言い返さなかったのか？」

「はい、時間の浪費ですから」

——なんで言わないんだよ。まったく。

青天の霹靂、とまでは言わないが、それでもやはり驚いたことは事実だ。何よりもあの杉本が、何も言い返さずに黙っていたこともまた信じ難いことである。

「生徒会グループが私に対してありもしない噂を触れ回っているのは知っています。だからこそ私は、軽蔑し無視すべきことだと考えておりました。わかる方がわかればそれ以上のことは求めません。桜田さんもそのおひとりです」

「だが、さ」

——東堂の一方的な態度はあれなんとかならないのか？

ぶつかった、巨木の枝を片手で叩きつつ上総は思った。

「杉本がすべて悪いと決め付けられているような言い方じゃないか。文句言うべきはお前の方だろう？ ありもしない噂を盾にして、害虫のような言い方をされるのはちょっとな」

「しかたありません、私は所詮、この学校の害虫です」

さらりと杉本は述べた。上総は黙った。大きな瞳に揺れはなかった。その横顔を「害虫」を害虫と決め付けようとする何者かを、まとわりつく蚊と同じように思った。

「おちうど」に到着し、上総はいつものようにおかみさんへ挨拶をした。

「あら、かあさくん。お母さんとね今度また、上の部屋で会を行うことになったのよ」

何度か杉本を連れてきている場所だ。自然に受け入れられている。おかみさんは杉本にも軽く声をかけ、「お茶がよろしい？」と尋ねた。

「はい、それで結構です」

それだけ答えておけば、黙っていてもお汁粉かあんみつが出てくるはずだ。料金は要らない。そのことは説明してあるのだけれども、何度教えても杉本は財布を出そうとする。

「今度、お手伝い、してくれるわよね」

「まだ、聞いていないので」

言葉を濁した。また母から強引に呼び出されることがあれば、行かざるを得まい。以前は評議委員会の行事を盾に断ることもできたのだが、いかんせん「野に下りた」わが身。暇を持て余していることを知られている以上、言い返すこともできない。

すぐに席へ運ばれたあんみつを、杉本はじっと見下ろした。正面にいる上総を見返した。

「ここのあんみつは美味しいですね」

「そうだよな」

気のない返事を返しつつ、上総は冷たいお茶を一気に飲み乾した。

「食べれば」

「はい」

喉もとに冷たい感覚が走ると同時に、上総の頭の中ではいくつかの言葉が回転した。

——さて、何から始めたらいいんだ。

尋ねるべきことはたくさんある。まずは杉本自身の問題と、東堂の彼女の問題とだ。

まず杉本が巻き込まれたのかしでかしたのかわからない、例の「修学旅行おねしょ事件」だが、これはあんみつを食べ終えるまで待ったほうがよさそうだ。まずくなる。

そして東堂の彼女についてだが、これも美里のからみもあるので口に出すのは難しい。

杉本がかつて「親友」と信じていた佐賀はるみに関してはすでに幻だったのだと判明している。同時に桜田という不良女子が杉本とくつつきあうようになり、周囲では高校内も含め「やっぱりね、あのレベル同士がつりあっているのよ」と見られているのもまた確かだ。

おそらくだが東堂は、自分のいとおしい彼女が、嫌われ者の杉本梨南と同等の扱いをされるのが耐えられなかったのだろう。もちろん上総が三年間同じクラスであり、かつ杉本を可愛がって

いることを知らないことはないだろう。上総も、

——知らない奴と売春行為なんかやらかしている女子なんかと同等に、杉本を見てほしくない。

という本音が隠れているのも事実。できればもっと、何事もない女子と仲良くしてほしいという身勝手な願望はある。

ただし、そんなことを口にしたら最後だともよくよく理解しているつもりだ。

ところが東堂は、そこまで全く考えることもなく、よりによって上総の付き添いがある中で、はっきりと「桜田と別れて欲しい」と言い放ったわけだ。ずいぶんなやり方である。

——てっきり俺が泣き崩れた杉本の面倒を見るとでも思ったんだろうか。

「おちうど」の美味しいお菓子を口にしながら上総は、ゆっくりと頭の中を整理した。

——あの場でもっと早くそこにたどり着いていたら。

きっと東堂を目の前にして罵倒していたかもしれない。そこまでの根性はなかったかもしれないが、一言二言は皮肉をぶつけていただろう。むしろそこまで気がつかなかったのが、杉本にとっても運がよかったのかもしれない。

どちらにしても、東堂とは南雲を挟まずに話をもちかけたほうが良いような気がしてきた。美里のことも今回は全く持ち出すことができなかつたし、なによりも。

——なぐちゃんには悪いことしたな。

取り残されて、「あらら」とか言いながら場を持たせようとする南雲のことにようやく思いあつた。今度南雲には、ジュース一本おごろうと決めた。

あんみつがだいぶ杉本の口に運ばれたのを確認し、上総は声をかけた。

「杉本、あのさ。少しだけ、いいか」

「何がですか」

「なんか凄い噂流れてるよな」

いつかはきちんと話をすべきことだ。イエスカノーかはともかくとして。

杉本もさっきは桜田に対してその件に関する感謝の意を示していた。緊張はする。でも持ちかけてすぐ、あんみつをばら撒かれることはないだろう。

思った通り杉本は、まずガラスの器をテーブルに置き、正面から答えた。

「なんでも、私が修学旅行中粗相をしたとかいう噂がありますね」

表情が全く変わらなかった。他人事のようにだった。

「どうなの、それ」

何事もない顔をしたほうがよさそうだ。上総はまだ皿に残っている冷たい羊羹を一口でほうばった。杉本の返事はやはり、あっさりしていた。

「まさか」

「でもお前、全然言い返してないんだろう」

「ばかばかしくて、話す気にもなれません」

「どうして言い返さないんだ？」

自分の問題が取り上げられているのに、動揺ひとつしない杉本。

——どうみてもこれは、杉本が無罪だろう。

ふだんの自分ならそう感じるだろう。上総は奥歯で何度も羊羹をかみ締めながら思った。杉本は決して嘘の言える子ではない。少しでも心に引っかかるものがあれば、顔に出る。

——だが、俺は現場を確認したわけじゃない。

——明確な証拠ってないのか？

今回、上総が「おちうど」に杉本を連れてきたのは、その明確な証拠を手に入れたかったからだ。どう考えても、自分ひとりの考えだけでは堂堂巡りになるばかり。それよりは当事者たる杉本に事情をすべて説明してもらい、そこから納得すべき答えを見出したかった。

それに、

——万が一、それが、事実だったとしたら。

そのこともじっくり考えた。可能性がゼロではない。

杉本の性格上、あまりにも衝撃が大きすぎた場合、無意識のうちに防禦体制をとってしまうところがある。以前、水鳥中学生徒会を訪問した際、佐賀はるみとのトラブルが原因で体調を崩し、保健室ならぬ用務員室のお世話になったことがある。理由は深く聞かなかったがいろいろとあったのだろう。杉本も誇り高い女子ゆえに、決して口には出さなかった。

あまりにも自分の理解できる以上の出来事がもし、起こってしまった場合、全くないとは考えられないだろう。ふとんを押し入れに隠してしまう可能性だってある。知らない女子に押し付けてなんとかしようと考えなくもない。そう考える可能性すら、すべて否定することは、かえって杉本自身を拒絶することのように思えてならなかった。

- ・ 誰かの失敗をかばって、あえて知らん振りを決め込んでいる。
- ・ 女子特有の体調の変化で、緊急事態が起きてしまいショックのあまり。
- ・ 単純に……ジュースやお茶の飲みすぎで翌朝失敗してしまった。
- ・ 他の生徒にいやがらせされて、つまらぬ意地を張ってしまった。

可能性としてはこのあたりだろうか。

——さて、どうやって伝えればいだろうか。

上総はゆっくり練った。のこりのあんみつを杉本がひとつぶひとつぶ運んでいった。

小首を傾げてまた答えた。

「私が真実を知ってますから、他の狂った連中に何を思われても、全く気になりません」

「そうか、真実か」

「当たり前のことです。第一、証拠があるのでしょうか。すでに時間が経ってますので物質的証拠を挙げることはむずかしく、しかも事件現場は船でいかなるをえない場所です。本当でしたら私が直接、旅館の方に事情聴取して、真相を明らかにしたいのですが」

黙っていたら杉本の方から行動を開始するかもしれない。これはまずい。

「あのさ、杉本、聞いてくれるか」

「おちうど」のおかみさんが冷たい番茶をグラスで運んできてくれた。おかわりだ。

「俺も杉本の話は聞いているんだ、だからさ」

「確認したいわけですか、私がそんな無責任なことをしたのかと」

「いや、確認したって本当のことはわからないだろ」

「立村先輩は私のことを疑っているのですか！」

「疑うもなにも、俺は杉本がそうしてないという証拠を見せてもらってないから」

「先輩、そういう下品な趣味をお持ちだったのですか！」

甲高い声に首を振って否定するが、なかなかそれも難しい。言わねばならないから。

「そういうわけじゃない。俺が言いたいのは、杉本を信じることと、無実だと判断を下すのとは全く別だってことなんだ。イエスかノーか、それは俺にとってどうでもいいんだって」

「失礼すぎます。私が仮に、そのような失敗をしたとして、先生たちにも伝えず、旅館の方々へクリーニング代を払わずに犯罪者のような言動をすとお思いですか！」

——やはりそうだよ、杉本の奴、布団に地図描いたってことよか、それを隠すという責任回避ってところに憤っているというわけだ。やはり、九十九パーセント、無実だろ。

そこまで言うのなら信じたい気もするのだが、やはりどうしてもひっかかる。

事実関係を百パーセントつかんでいないからなおのこと。

杉本梨南というのがとてつもなく頭の働く女子だとは上総も重々承知しているのだが、万が一の可能性として、自分のしたことを受け入れられないだけということも考えられなくはない。命がけで嘘を言いつづけようと覚悟をしたとすれば、この対応も不思議ではない。もう居場所を失いたくないために、すべてを嘘で固めてしまおうと心に決めた可能性だってある。

そこまで辿り付いた瞬間、上総の中で何かが疼いた。

——そうだ、すべてを嘘で固めてしまおうとする可能性。

ある、確かに自分にも、あった。なぜ忘れてしまっていたのだろうか？

小学校の修学旅行前のこと。

——俺も似たようなこと考えたじゃないか。

上総はゆっくりと目を閉じた。杉本とかつての自分を重ね合わせた。

——逃げるためなら、手段を選ばないのは俺も同じことだ。たとえプライドをずたずたにしても、目的を達するためならどんなこともするのは、俺だって同じだ。

素早く上総は決断した。

杉本があんみつをすべて片付けるまで待った。

事実関係どうこうは関係ない。杉本梨南がこれから先、たとえ自分の「真」を曲げざるを得なかったとしても、上総は味方にいるという約束。中学二年の初夏、杉本の前で教室の中で告げた言葉だった。

——でも、俺は杉本のことを嫌いにはならないよ。行こうか。

どちらが真実なのか、そんなのはどうでもいい。

ただ自分は、何時であっても、杉本梨南の味方であることを。

「今、俺が話すこと、絶対他の奴には言うなよ」

前置きして続けた。

「約束はします」

あっさり答えられて一安心だ。上総は声を潜めた。

「俺は、小学校の修学旅行、行ってないんだ」

「そうですか」

「何でだと思う？」

「いじめられたからですか」

さらに声を小さくし、やはり落ち着かなくて耳を持ってくるよう身振りで指示した。素直に杉本は窓際を向き、こぶりの耳をしっかりと向けた。

深呼吸して、息を止める。上総はかすれた声で囁いた。

「修学旅行前日の夜に、あれ、やらかしたんだ、その、つまりさ」

「おふとんに、まさか」

「そう、いわゆる、その、地図というか」

杉本の顔を見るのが正直怖かった。俯き加減で話を進めざるをえない。

覚悟して話し始めたはずなのに、まだ上総の中では四年前の出来事が時効になっていない。

杉本の顔なんか見られない。

前後で知らない年配の女性客が話しこんでいるのが聞こえる。たぶん、こちらの話には関心持たれていないはずだと信じたい。

「杉本も知っている通り、俺は小学校六年の頃、かなりいろいろあって、今思えば精神的にやられてたんだと思う。でも、修学旅行は義務でいかなくってはならないし、かなりしんどかったんだ。それまでは、というよりも、そういう失敗は、本当に全くなかったんだ。これは本当なんだ。だけど、よりによって修学旅行前の日に、なんか変だと思って目が覚めて、青ざめた。今でもあの時のことははっきり覚えてる」

「そうでしたか」

低い声で杉本が答える。

——頼むから軽蔑の眼差しを投げないで欲しい。

下から顔色をうかがうと冷たい視線でにらみつけてきた。

「言っとくけど、本当にこれが、最初で最後だったんだ」

「強調しなくてもわかります」

「ただ、やっぱりあの時は、人生終わったと思ってさ。しかたないから親を起こして、かくかくしかじかと説明して、その後で後始末してもらって」

「六年生だというのに、自分で出来なかったわけですか、後始末くらい！ 事そのものよりも私は、立村先輩のその幼さに呆れます」

——やっぱり、呆れられたかよ。

人生、目の前、真っ暗とはこのことだ。

もう顔を覗き込む度胸などない。しかたない、話しつづけるしかない。俯いたまま。

「まったくだよな。とにかく、その時に、親に泣きついた」

「泣きついたのですか？」

「そう。一度あることは二度やらかさないと限らないと思ったんで、頼むから修学旅行休ませてくれって」

「……よくそんな情けない言い訳、聞いてくださいましたね」

——全くだ。あれだけは奇跡だと俺も思った。

上総は頷きながら、残りの羊羹を平らげた。味がしない。皿を見つめていたら、すぐに持っていかれてしまい、目のやりどころがなくなってしまった。

「杉本、俺が言いたいのはさ」

「立村先輩ならありえないこともないでしょう」

——何もそこまで言うことは。

自業自得なので何も言い返せない。

「何度も言うようだけど、俺がしくじったのは、十五年生きて来て、本当に最初で最後だったんだってこと」

「しつこいくらい繰り返されてますが、そんなに強調されるのはなぜですか」

「だから、その夜目が覚めるまで、まさかその場でやっちまうなんて思ってなかったんだよ！」

もうやけっぱちで不良っぽい言葉を遣ってやる。

「絶対大丈夫だと思っていても、ある時全く予告もなしにしでかすって可能性は、全くないわけじゃないってこと、俺は言いたいんだって」

「確かに、『絶対』という言葉はありえません」

なぜかそのあたりだけ、納得顔で頷いた。

「俺が杉本を信じたい気持ちはあるけど、絶対にそういうことありえないってのは、そのあたりが理由なんだ。杉本だって熱を出した日に、『杉本さんなら絶対に風邪を引かない』とか言われて決めつけられるのはいやだろ？ それと同じだよ」

覚悟を決めて、顔を挙げてみる。

なんと杉本は、上総を真正面から見つめて、真剣な顔で頷いている。

——話は、伝わっている……。

人間性まで否定されてはいないようだ。安堵する。。

「例えがわかりにくいのはあやまる。とにかく俺は、杉本に対しての噂が事実であろうがなかろうがどうだっていい。どっちであっても、すべきことをまずしようか、って考えるだけだ。わかるか、その意味」

驚くことに杉本、恐ろしいほど素直に頷いた。

——繋がったよ……。

気付いていないわけではない。上総たちが卒業した後、杉本の置かれる状況は多々変化して

いる。E組へ隔離されていたのが、学校方針も変わったのかB組に戻され、表面上はクラスとうまくやっていくように仕向けられている。もちろん上総がその状況をすべて知ることはできないが、なんとか杉本が生き残っていることだけは感じている。例の桜田という不良女子を含め、味方がゼロではないという現状は、救われているのだろうとも思う。

ただ、決して楽ではないはずだ。

先ほど東堂にいちゃもんつけられたように、杉本をできるだけ「関係のない存在」として遠ざけたいという動きがどこかかしこにあるのは自然だろう。

杉本もあれだけかしこい子だ。気付かないわけがない。

佐賀はるみや新井林健吾の天下となった青大附中で戦いを挑まないわけがない。

なのにだ。

なぜか、杉本の言葉や態度が、少しずつだがやわらかなものになってきている。ちょうど冬の風がゆっくりと春風に、また春の冷たい風がゆっくりと太陽に照らされて熱せられてきた初夏の風のように。

——関崎が同じ青潟大学附属高校の英語科にいるからかもしれないな。

かつての杉本だったら今の情けない上総の語りをあきれ果てた顔で見下し、

「立村先輩はきちんとおむつのトレーニングをされてこられたのですか！ 情けない！」くらい罵りそう。織り込み済、覚悟の上だったのだが、妙にやんわりと交わされこちらが戸惑う。

実は、何事も起こっていないのではないだろうか。上総がひとりあたふたしているだけで、杉本梨南自体は何一つ、動揺していないのではないだろうか？

穏やかに時を過ごしている。よい流れに、乗っている。

——そうさせたのは、俺じゃないんだな。

それだけが残念だった。

「立村先輩、私はおねしょをしてしまった人を責めているのではありません」

しばらく手をテーブルの下に置き、身体を一切動かさずに考えこむそぶりをしていたが、ふっと顔を挙げた。

「先輩のおっしゃる通り、『絶対にしない』ことはありえません。私も絶対に今後、同じ失敗をしないとは限りません。先輩の過去については今後、一切、責めたりしませんのでご安心ください。ただこれからはきちんと水分を寝る前二時間は控えることと、みみずになんかされたり、火遊びなどは謹んでください」

——杉本、いったい何考えてるんだ。第一その、みみずってなんなんだ？

言い訳できるわけもなく拝聴するしかない。

「ですが、私が許せないのは、隠すという行為です」

相変わらずしゃちほこばった口調で、ポニーテールをまっすぐたらしただけのまま杉本は続ける。

「弁償をする、先生に対処を相談する、などその場合にすべきことはたくさんあります。さらに、事前準備として学校側へ提出する書類などもあるはずですよ」

「書類？」

「はい。先輩たちの頃はなかったのですか？ 修学旅行および宿泊研修前の提出書類で必ず、夜尿症の有無といった欄に丸をつけるところがあつたはずですよ。仮に私が一度でもおねしょをすることを自覚していたら、ためらうことなく『有』の欄につけたはずですよ。少しでも思い当たる節があれば、私は決して隠しません」

証拠になぜ自分が拘ったのか、そんなことすらばかばかしい。上総からふと、力が抜けた。

——証拠なんて知ったことか！

「わかった、ごめん。俺が悪かった」

上総は静かに頭を下げた。疑うも何もない。杉本は上総の助けなど必要のない、確かな力を備えている。自分ひとりですべてに立ち向かえる女子だ。余計なことに気を回した自分を恥じた。

当然罵倒されるかと思いきや、杉本はさらに冷静に答えた。

「いえ、立村先輩のおっしゃるのはごもつともです。私は自分がそういうことをしておりませんので、学校側が私に罪をなすりつけても、堂々と申し開きいたします。なんなら私は、その当事者とされている渋谷さんと話をつけます。ただし、渋谷さんも何かのトラブルに巻き込まれている恐れがあるので、もちろん注意いたします」

「渋谷？ もしかしてそれ、生徒会の女子のことか？」

もうひとりの容疑者……もう上総の中では真犯人として認識されるべき女子……の名が、はっきりした。少し驚いた。確か渋谷といえば、やたらときんきん声で、当時生徒会長だった藤沖も扱い方を持て余していた、かなり切れ者の女子と聞いている。また、上総の過去を暴露した風見という女子とも仲良く、当然、佐賀はるみとも親しいはずだ。

その、渋谷が、なのか？

「はい、そのような話です。こちらには全く思い当たる節のない以上、当事者同士で話をすべきだと私は考えております」

「でも、そのトラブルってなんだ？」

だんだん上総の中で答えがつかってきたような気がする。

「はい、渋谷さんが今、生徒会から追い出されようとしているとかいないとか、いろいろな噂が飛び交っております。私でしたらそんなくだらないことで差別するほどくだらないことはないと思いますが、生徒会の者たちは幼いのですね。もちろん私に今までしてきたことを許す気はございません。殺したい気持ちも多いにあります。しかし、それと事情とは別ですので、まずは直接、一対一でどういうことなのかを問いただしたいと考えております。立村先輩、私の考えは間違っておりますか？」

あいかわらずしゃちほこばった口調。でもその奥に潜む弱さ。いやそれ以上に凜と真を持った杉本梨南の矜持。

——こうさせたのは、俺ではない、関崎なんだ。

激しく、ちりちりと心の奥で音がする。

——たった三ヶ月なのに、こんなに。

大人になっている。追いつかれるかもしれない。いや、越されるかもしれない。中学時代の、

やみくもに戦いつづけて来ていた杉本ではない。勝ちを信じて、負けない戦を余裕もってかます、そういった強さだ。

今の杉本なら、仮にこの前の新歓合宿で上総が関崎に厳しくつっこまれたり、麻生先生にまた嫌がらせをされたとしても、佐賀はるみほどではないにしても冷静に交わすことができるような気がする。

堂々と、恐れることなく、自分の真実を武器に。

——俺は、杉本を心配する必要なんて、本当はなかったのかもしれない。

杉本をバス停まで送り、上総は自転車で家まで向かった。

さっき、杉本に語ったことは有る意味真実だ。

両親も上総が小学の修学旅行前に布団をびしょぬれにしまい、泣きながら訴えたのをしっかり見ているわけだし、「ある意味」事実である。

——だが。

上総しか知らない真実が隠れていることを、誰も知らない。

杉本にも言えない、本当のこと。

あれは、上総が修学旅行に行きたくないがために演じた、芝居だったということ。

何よりも嘘を嫌う杉本に、上総は大嘘を伝えてしまった。

修学旅行に行けば、かならず夜が来る。夜がくれば即、男子部屋で行われるのは

「お前、誰が好きなんだ？」

「お前、もうそろそろ毛、生えてるのか。むけてるのか。立つのか」

「女子風呂覗きに行こうぜ」

だいたいこのあたりの話題だ。学校なら必死に教室から逃げればいいが、密室ならば僕は逃げ場所がない。

リーダーの浜野は、どんなことがあっても上総を肉体解剖の材料にしたいくてならないようで、前もって、

「立村、修学旅行ではちゃんと、見せるところ見せろよ。わかったな」

とそれなりの宣戦布告をされていた。

どうやって逃げればよかったのだろう。

今思えば、もっと恥ずかしくないやりかただってあったのに。

小学生の浅知恵と言われればそれまでだ。

仮病をつかっても、あの母親が許してくれるわけもない。一発でばれる。いじめられていると訴えても「やりかえしなさいよ！」と怒鳴られるのがおち。

上総が一ヶ月悩み続けて結局選んだのが、それだった。

緑茶を選んで真夜中やかんでお湯を沸かし、何杯か出がらしになるまで急須で煮出し、布団と

寝間着に注意深くかけた。どうせベットは自分で使うものだから、決して汚したくなかった。お茶なら汚くないし、自分だけわかっていればそれ以降使っても気持ち悪くはない。ただ、お茶の香りだけがやたらと漂い、ばれるんじゃないかと冷や汗ものではあった。

あっさり母は、修学旅行への欠席を認めてくれた。

その間、ひたすら自宅学習をさせられたが、浜野たちにすっぱだかにされる恐怖に比べたらたいしたことではない。もっともその後、

「上総、もしまたおねしょなんてやらかしたら、あんたにお灸据えるからね！ どこに据えるかは、わかってるでしょうね！」

しっかり脅されてはいた。もちろん、そのようなことはない。冗談じゃない。

どこかでわかっていた。

上総が知られなくなかったのは、六年にもなっていきなり布団に大きな世界地図を描いてしまい泣きじゃくる過去の自分でなく、「いやなことを回避するためなら、どんな汚い手でも使い、立ち向かうことなく逃げ続ける自分」なのだということ。

杉本に物語った小学校六年の上総は、臆病者のまま、今だ変わっちゃいない。

布団を隠して旅館を後にした誰かと、同じ事をしている上総が、四年後の今もそこにいる。

——杉本には決して、知られたくない。

上総は鞆から、霧島に渡すつもりだった問題集もどきの「キャリアOL写真集」を取り出した。机の上に置いた。曇り空がやがて細かい雨として降り注ぎ、外の草木が濡れていた。

——生徒会か。

霧島は確か、生徒会副会長のはず。次期生徒会長を狙っているとも聞いている。本来の上総ならばためらうことなく、写真集の縁を利用して渋谷の件を霧島に確認するだろう。杉本のために、何かをしなくてはとも思うだろう、しかし。

——そんなことをしようと考えること自体、杉本の能力を馬鹿にしていることになる。それに霧島だって、あんな場面を見られたことなんて思い出したくもないだろう。

野に下りたまま、杉本を支えることは、いくらでもできる。

——東堂のように彼女がひとりでは何もできないと決め付けてかばうのではなくて、杉本の力をすべて認める形で応援することがベストだ。

もちろん、誰かに刃向かわれた時には、全力で守る覚悟を用意してはいるけれど。

むしろ、心配せねばならないのは美里の方かもしれない。どちらにしても東堂とは早く話をつけようと決めた。こちらはいざとなったら貴史の力添えが必要かもしれない。

——清坂氏は、俺が思っているよりもはるかに弱いのかもしれない。杉本よりもはるかに。

しかし、委員会に入っていないとなると、なかなか身動きとりづらいものだ。

東堂を捕まえて約束を取り付けることすら、しんどい。

「東堂、悪い、少し時間もらえるか」

次の日から何度も上総は、B組の教室から離れたところ……体育前の更衣室や技術の授業中など……で声をかけてみるのだが、なんせ人がたくさんいる。

「立村、ごめんごめん、ちょっと忙しいんだよね。また南雲経由で声かけてよ」

かえって具体的な話のできない場所だからこそ、上総もそれ以上追えない。逃げられる。

——なんとかできないものかな。

かつて評議委員だった頃は、気軽に声をかけあえて、用事があればかならず捕まえられた。そんなごくごく簡単なことがかなり難しい。

「どうしたよ、立村」

休み時間、C組を訪れると、扉の脇で貴史が待ち受けていた。

どうやら、上総に東堂との首尾を確認したらしい。

心が重い、なんてったって何もないのだから。

貴史は軽く肩を叩きながら、それでも小声で尋ねた。

「なにその、あやまらねばって顔」

「悪い、その通り」

上目遣いで貴史に呟く。

「野郎に色目遣われてもうれしかねえよ、で、どうした」

「まだ話ができていないんだ。例の件」

「美里のことか」

わずかに声が硬くなったように聞こえたが、すぐに指先でぼんぼん叩きつつ。

「あ、それじゃ俺から言っとく。どっちにせよ、俺は清坂家と羽飛家の両方から頼まれてるもんでな」

なんなんだろう、その「家」とは。繋がりの濃さよ。

「いや、東堂と時間がなかなか合わなくてさ」

大嘘だ。実際逢ったのに美里の話を持ち出す間がなかっただけだ。謝らねば。慌てる上総に、貴史はあっさり笑った。

「俺もあとでちょこっと思ったんだ。立村より俺の方が適任だろ」

「なんで？」

少し刺があるように聞こえ、顔を眺めなおしたが、貴史に悪意の欠片は見当たらない。気のせいだろう。何にも考えていないように見える。

「曲がりなりにもお前、美里と付き合ってたことあるしさ。まあ、いろいろと向こうさんも誤解曲解しまくる可能性あるよなあ。お前の方にそんなスケベ心なくても、なんせあの南雲から吹き

込まれている可能性大だし」

「南雲は別に」

言いかけた。貴史と南雲が天敵というのは中学時代から重々承知していたのだが、やはり関係氷解はしていないらしい。上総に首を小さく振りながら、貴史はC組の教室へ押しやった。中では天羽たちが花札に興じている。

「立村、お前も混じれや」

手招きする天羽に誘われて適当に椅子を引っ張り出し座った。貴史は上総と入れ違いに廊下へ出て行ったようだ。南雲相手ほどではないが、実は天羽たちとも不協和音があるのかもしれないとふと感じた。

——ぶつかりあっているんだらうな。

リーダーが二人以上いるのはやはり、やりづらいだろう。特に貴史は高校からいきなり評議委員をまかされ、しかもしっかりこなしてしまっている。直接聞いたわけではないが、教師たちの受けもよいという。元・評議委員チームが干からびているのとは対照的でもある。さらに規律委員の南雲もいるとあってはこれは、大変だろう。できれば顔も合わせたくないだろう。

「あれ、難波はどこ行った」

長方形のいろっぽい札を配られ、指先で整える。いつもの面子が足りないのに気づき尋ねると、更科が子犬の笑顔でまた答えた。

「中学校舎。なんかキリオ君に用事があるみたいだよ」

「霧島さんの弟か」

どうも口に出してみると、エロ本見つめておろおろしておていた霧島弟と重ならない。もちろん誰にもそんなことは言えないが、難波がなぜ霧島弟に声をかけたのか、その理由はわからなくもないので、お互い問わずにおいた。

——難波と霧島さんは、やはり繋がっているんだらうか。

天羽や更科は詳しい事情を知っているだろうが、上総はあえて知らないふりをすることにしていた。中学三年の秋から冬にかけて起こった評議委員会内部の動乱と終息、そのひとつの事件に難波が深く関わり、最後の最後まで霧島ゆいを守ろうとしていたことを、上総は轟さんを通じて聞いていた。

上総が花札を選びはじめたタイミングで、難波が戻ってきた。随分早かった。中学校舎から高校校舎までかなり距離があるはずなのに、走ったのだろうか。

「どうだった難波」

どうした、でないところに事情通の天羽の顔が浮かび上がる。難波はめがねを外し指で拭きながら、

「ちくしょう」

小声で罵った。

「キリオくんになんかされたの？」

更科の座る椅子を半分尻でぶんどるようにして、腰を下ろした。かなり無理のある態勢だ。上

総の顔を見て、「来てたか」とだけ尋ねた。

「あの野郎、生徒会役員だからって威張りやがって」

「今に始まったことじゃあねえだろ」

天羽がいなく、元評議委員グループの中では難波のお守を預かるのが主に更科、つつこむのが轟さん、最後に止めを刺すのが天羽と役割が決まっている。

「やっぱり姉ちゃんとうまく行ってねえようだな、弟も」

「あの女が性悪なのはわかるが、何も俺まであんな言い方することねえだろうが！」

花札に混じる気があまりなさそうだ。しかたないので天羽も花札を並べる手を休めた。

「上級生に対する言動ではなさそうだな」

「なんだよあいつ！ 仮にも先輩だぞ、それも評議だぞ」

難波は拳固を何度も手のひらにぶつけた。

「『僕はあの女に味方する人間を先輩とは思っておりません。お引き上げください』だとさ」

「ひえー、それってもう、先輩と思われてねえだろ、虫けら同然？」

手を打って大笑いする天羽。これは笑い事ではないと思うのだが、上総も霧島弟の顔が思い浮かぶだけに黙っていた。

「なんでだ？ 俺は別に味方しているわけじゃあねえだろ！ むしろあいつの助けになればって近づいただけだ。それをだなんて、いきなりあんなこと言われねばなんねえんだ！ 弟だからあんな馬鹿に振り回されるのは面倒だろうってことで、俺が少しなんか言っておくかって、聞いただけだってのにだ！」

上総は理解できていないことを、ひとつ尋ねた。

「申し訳ない、ひとつ確認してよいか」

「なんだ」

ぶっきらぼうに、難波が鼻をかきつつ答える。

「霧島さんに何を言っておこうと思ったんだ？」

言った後で、失言を思い知る。

——俺以外の奴、みな知ってるわけだな、これは。

更科も天羽も、気まずそうに顔を見合わせている。難波だけが口を尖らせたまま、手元の花札をいじくっていた。襟元をみな、ネクタイ緩めてだらだらさせている中、難波はいきなりそれを締め直し始めた。

難波が、霧島ゆいに過剰なほど執着していたのは知っていた。

中学三年の冬、上総が自分のことで手一杯だった時期、彼女が自殺未遂事件を起こしたことも、またそのきっかけとなった西月小春が「転校」という形で学校を追い出されたことも。ついでに言うなら現在西月は、上総の英語科同級生である片岡司の実家に居候しているということも。

あれは事件だった。一步間違えば傷害事件。

西月小春の担任だった狩野先生が、あえて転校という、ほぼ退学すれすれの決断を下したのもそのあたりの事情があるのだろう。卒業間際、しかも縁故入学クラス。もみ消しがお得意の青大

附中でありながら、最後の最後で大蛇をふるったその理由とはなんだろうか。被害者が狩野先生の義妹である、近江紡であったのもまた理由なのだろうか。

正直、上総は人のことより杉本梨南のことで何も考える余裕がなく、それ以上の事情を聞くことはなかった。だが、その際に、難波が必死に霧島ゆいを止めようとし、向こうが求めているのに見張り役を引き受け、現在にいたるまで目を光らせているということは知っている。そこに恋情があるのかどうか、判断はできないが。

「身の程を知って、キリオをもっと敬って頭を下げろって、言えば終わりだろうが」

吐き出すように難波は呟いた。

「受け入れると思うか？」

上総が尋ね返すと、

「それ以前の問題だ」

きっぱり答えた。

「俺の顔なんか、あいつ、見やしねえ」

それってどういうことなんだ？と本当なら聞きたい。しかし仮にも一年C組の教室内、花札に興じるのは四人だが、ギャラリーだってそれなりにいる。聞き耳立てている奴もいるかもしれない。尋ねるのに迷う。天羽が助け舟を出してくれた。

「学校ではうまくやってるって話だがなあ」

「頭のレベルはとんとんかもしれないが、青大附属で知恵をつけてしまったあいつに、自分の位置水準がわかるかっての」

とにかく霧島ゆいの現状が、決して明るいものでないことだけは確認した。

人一倍努力家で、おそらく青大附属中学生の中で一番勉強していたはずなのに、最後まで学年最下位の成績しか取れなかった霧島ゆい。周知の事実として、金が動く形で入学を許され三年間青大附中に通っていった。

もちろん、裏金の問題なのだから、家族が許せばそのまま高校へも進学は可能だっただろう。本人もそのつもりだったに違いない。もっとも霧島ゆい自身は一瞬たりとも自分が裏金入学者だということに気づいていなかったらしい。奇跡的に試験当日頭が冴え、その力で合格できたことを疑っていなかった。三年間、「不思議の国のアリス」に登場するアリスのような愛らしさと相反する気の強さ、その一方で見せるきっぷのよさなども相まって、かなり人気を博した人だった。

しかし、現実は厳しい。

教師たちの間でどのようなやり取りが行われたのかはわからないが、当時担任だった都築先生が、霧島ゆいの家族を説得し、青潟市内の私立高校では底辺ともいえる可南女子高校への進学を勧めた。このままでは、学業についていけないあまり自分自身を肯定できなくなってしまい、後々の人格形成に支障をきたすこと、そして霧島ゆいにとっての幸せは、決して学業のみではないということを知ってほしいというゆえのことと聞いている。

霧島ゆいはその事実を受け入れることができず、近所のスーパー屋上から親友の西月小春と一

緒に飛び降り自殺を凶ろうと決意する。その前段階で、西月小春は何を考えたのか学校に顔を出し、同じ評議委員だった近江紡に対し、傘を振り回して追い掛け回したという。彼女たちの事情はまた別にあり、別の形で処理をされた。轟さんの推理によれば、西月がそういう狂気を振りかざしたのには、おそらく霧島ゆいを止めてもらうための魂胆があったのではという話だったが、本当のところはわからない。

その間を縫う形で、難波が登場する。

難波が霧島ゆいの状況を知り、西月に成り代わりスーパー屋上に駆け込んだという話も後日耳にした。何事もなく、霧島ゆいはそれ以降学校を休み卒業式まで家に閉じこもった。それでもしつこく通いつめたのが難波ということも、上総は知っている。

どうしてそこまで拘れるのか。

あえて何も聞かないのが、友情の証。

「あのさあのさ、難波。つまり、キリオの機嫌をうまくとって、できれば姉弟仲良く過ごしてほしいってのが本音だろ？」

「人のことなんか知ったことか！」

更科は難波の怒鳴り口調を全く意に介さず続けた。

「だってさ、俺たちの代ってキリオファンが多いから、もしキリオがこのまんま高校に入学して来たら総すかんだよ。女子は顔がいい奴に弱いからまだいいけど、男子は怖いだろうな。キリオきつと、陰でリンチされちまうと思うよ」

あどけない口調で、結構すごいことを言う。天羽が後を引き取った。

「更科の言う通りだ。まあな。俺も霧島姐御には世話になったしな。だがまあ、キリオの態度に関してはあのまんまじゃあ、高校で餌食になるなというのは容易に想像がつくってことよ。それを難波は何とかしてやりたいってわけだな、ええ？」

いきなりの方向転換に、上総はついていくのに苦労した。

——難波は霧島さんの弟の機嫌を取って、霧島さん本人の居場所を作ってやりたいんだろう。なのに、なんで天羽の奴、霧島さんの弟が餌食になるとかわけのわからないこと言ってるんだ？

悔しいことに、評議C組集団、ちっとも訳のわからぬ顔をしていない。理解している。取り残されたのは上総のみだった。

「だったら、お前ひとりじゃねえ、更科と、ついでに俺もくっついてキリオくんにアドバイスしてやるってのはどうだ？ お前の姉貴がアホなのはわかるが、それ以上にこのままだとお前の方がやばいぞってな。今はまだ中学だからさほど問題はないにしても、お前の姉ちゃんは美人だから、ファンも上の代にはたくさんいる。できるだけ姉弟仲良くしているイメージを知らしめた方が、今後生徒会役員を高校で狙うに当たっては有利だぞ、とな」

「なーるほど、天羽、賢い！」

お上手なのはやはり更科だ。

「善は急げだ。難波、さっそく放課後、キリオを待ち伏せて話し合いだ。やるぞ」

「わかった」

一言呟き、難波は指先で机の真中に積んだ花札をひっくり返した。同時にチャイムが鳴った。C組の人間だったらもう少し時間もあるのかもしれないが、A組に戻らねばならない上総にこれ以上情報を集めるのは無理だった。

現役の青大附中生徒会役員である霧島弟に対し、難波が懸命に訴えていることは理解した。決して仲良しではない姉弟であることも重々承知している。さまざまな場面で、やたらととんがって人を見下す態度を取っているのも上総は見てきた。自分から好んで交流を取りたいタイプの後輩ではない。

——けどなんでだろう。

どうもひっかかる。天羽がなぜ、難波の不器用な行動を支持するのがだ。

難波が霧島ゆいへの想いをうまく表現できず、ただ陰で守ろうとする行為に出ているのは、恋愛に疎い上総もわからなくはない。どうしようもないのだ。何かをしないと自分が壊れそうになる瞬間、それは上総も何度も経験している。

だけど、それは難波本人の問題であって天羽が割り込むべき話でないような気もする。

第一、天羽は西月小春にからむいくつかの問題の当事者だ。当然、霧島ゆいもからんでいて、その傷はまだ癒えていない。西月がその事件以来言葉を発することができなくなるくらいの衝撃を受けたことも、上総は知っている。

——なら、天羽は控えるべきじゃないのか。

百歩譲って、難波と親しい更科……霧島ゆいとは同じクラスで三年間評議コンビを組んできた……を連れていくならわかるが、天羽までというのは何か違うような気がする。いや、天羽はさらに深いことを考えているのではないだろうか。

——そういえば天羽の奴、この前も関崎がらみの件で気炎を揚げていたな。

細かく考えすぎなのかもしれないが、どうも天羽の言動に関しては気に掛かるものがある。まさかとは思うが、「外部生ばかりを評価する学校側へのアンチテーゼ」として霧島弟を早いうちに手懐けたいのではないだろうか。

現役生徒会副会長で、おそらく次期生徒会長に推されるのは決定している。

現在の生徒会長である佐賀はるみの腹心とも言われ、実質動かしているのは霧島とも聞く。

もっとも佐賀はるみに関しては、現在評議委員長である新井林健吾の彼女なわけだから、中学時代バトルを繰り返してきた天羽が手出しをすることはできない。しかし、霧島弟だったら？一年、間を空けているのと、頭の悪い姉貴との関係もあって繋がりをこしらえることはできる。姉、ゆいに迷惑をかけられた先輩たちの顔をして、共感させ、同時に天羽たちの陣地に早い段階で取り込むというのが奴らの魂胆としたら。

——俺の考えすぎかもしれないけどさ。

どうも本条先輩に仕込まれた、勘繰り専用思考回路が勝手に動いているようだった。

——別にそれはそれでもかまわないんだけどな。ただ。

英語の授業はほとんど聞かなくてもなんとかなる。上総はノートに要点だけ写した後、数回シャープの芯を押し出した。長く、書きづらくなった。

——天羽たちの気持ちはわかる。なんとか自分らの居場所を作りたいのもわかる。だが、今から後輩たちを取り込む必要があるのだろうか。

仮に相手が、例の佐賀はるみ生徒会長だとしたら上総は何も思わない。相性が合わないからというのではなくて、速攻で佐賀本人から断りの返事がくるだろうと予想されるからだ。何を言ったとて、佐賀はるみにとってはたいしたことではない。か弱そうな演技をしているが、結局のところ周囲には惑わされない女子だ。過去二回ほど、上総が杉本梨南のことでねじ込んだ時ですら、余裕で交わされ結局いなされてしまった。こちらとしては佐川雅弘の件でしっかり弱みを握っていたにも関わらず、要求を呑ませることができなかった。天羽ができないとは思わないが、少なくともこちら側の「外部生との対決」をモットーとした提案を一瞬のうちに見抜くに違いない。勝ち目はない。むしろ手玉に取られるだろう。

しかし、霧島弟は。

——あいつは何か違う匂いがする。

これも上総の直感に過ぎない。だから誰にも言うつもりはない。

もちろん優等生で、青大附中の王子様イメージの美少年であることは認める。姉以上の頭脳明晰さをひけらかす態度が鼻につくものの、それなりの力はあるだろう。

しかし、例の一件……「キャリアOLの禁じられた遊び」……で発見した霧島弟の、生々しい一面に何かを感じたのも事実だ。

男子の本能として、もちろんもやもやするものを解消したい気持ちはよくわかる。それが霧島弟以外の男子であっても当然だとは思う。上総が驚いたのはむしろ、その後、鼻血を噴いただけでおろおろしてしまうような言動の幼さだった。あの時無視して帰ってもよかったのに、なぜか余計なお世話をしてしまった上総自身、理解できないところもあるのだが。もし普段の性格がしっかり根付いているとすれば、彼も冷静に鼻の穴をティッシュで拭き取り、礼のひとつと「先輩も こういうのがお好きなんですね」と皮肉のひとつでも言って終わらせただろう。男子同士ならば、性欲の存在を受け入れることは恥でもなんでもないのである。

——周りで思われているほど、霧島さんの弟は、強くないんじゃないだろうか。

上総が直感したのはそこだった。

うまく言えないのだが、霧島弟は姉のゆいにそっくりだ。頭的能力については別にしても、外見の美貌も、また妙につっかかって高圧的に喋りたがるところも、そのくせ自分のプライドがずたずたにされたとたん空気が抜けたように小さくいじけてしまうところも。

大きな風船の中に隠れた小さなねずみに近い、そんな存在に見える。

たまたま上総は「エロ本」というモチーフから偶然、霧島弟のそういった一面を見出してしま

ったわけだが、それはイコール自分にも繋がる。中学一年から二年にかけて、本条先輩にさんざんおちょくられつつ、少しずつ自分の中の「性」を受け入れる道を辿った記憶が、恥ずかしながら今だに残っている。

——しかし、自分は通り過ぎたからまだいいとしても、第三者から見るとこれって、間抜けだな。本当に。

本条先輩から見て、わざとらしく興味のない振りしつつ勝手に体が反応しているのに動揺している自分とか、鼻血を出す寸前で慌てつつ、「この人たち怪我しないんですか」なんて冷めた振りをしてエロビデオを一緒に見たりしていた自分は、どう映っていたのだろう。笑うしかない。

それでも本条先輩は露骨に馬鹿にしたりはしなかった。何かかしらきっかけを与えては、「いいか立村、いきなりおったちまうってのは、恥ずかしいことでもなんでもねえんだから、堂々としろよったく！ まったくなあ、もう少し評議連中相手にスケベ話とか自分の持ち物のレベルとか自慢してみろ。この前ちらと見たけどな、お前も人並みのもん持ってるんだからな。ったく、お前をこのまんま中学に置いていっちまうと考えると、兄貴は頭が痛てえよ」

今ならよく理解できる。本条先輩は近いうち学校を離れるゆえに、なんとか弟分の上総を余計な悩みから解放してやりたいという兄心から、懸命に策を練っていたことを。はたしてそれは成功したのかどうかかわからないが、少なくともそのあたりで余計な悩みを抱えることはなくなった。過去、本条先輩がしでかした派手な恋愛沙汰話を素直に聞き、感じるできるようになったのも、思えばつい最近のことだ。ちょうど半年前。

——霧島弟を笑える立場じゃないんだけどな、俺も。

そこではたと気がつく。

——あいつには、そういう先輩がいるのか？

知ったことではない。だが気になった。

——ああいうエロ本売り場で、いきなり鼻血出して動揺するような奴とは、誰も思っていないだろうし、持ち帰ることすらできないお坊ちゃんだということすら、たぶん誰も気付いていないんだろう。誰か、ああいう時にどういう行動をしたりいいかとか、教えてやる友だちとかいなかったのか？ それとも。

シャープの芯をノートに押し付けすぎて、ぽきんと折れた。

——あいつには、本条先輩のような人がいないんだな。

一瞬、上総の目の前でいきなりしゃくりあげて泣きだした霧島弟がフラッシュバックした。

上総はさすがに、ああいう場面で泣き出すことはなかった。戸惑った時には求めなくても本条先輩が側にいて指図してくれた。

霧島弟には、そういう人がいない。たぶん求めてもいないだろう。

——俺には、本条先輩がいてくれた。

突然、息苦しくなった。訳もわからず泣きたくなった。もちろん泣かなかった。ただシャープ

の芯をひたすら押し付け、息を詰めるだけだった。

——もし本条先輩だったら、こういう時、どうしてくれたらろう？

天羽たちは霧島弟を放課後、捕獲しようとしている。

少なくとも意識の中では、そうしようとしている。

——中学校舎でかな。

別に関係ないことだと、上総は思うし、声をかけてどうするという気もする。なのにやたらとひっかかるのはなぜだろう。自分ひとりの想像で物事を決め付けるのはあまりよくないのではないかとか、迷ったりもする。

——難波が霧島さんのことを気にしてうろうろするのはいつものことだ。家に通いつめているんだって知っている。天羽はただ、それを応援するだけだろ。更科だって難波と親しいからそれを後押しするだけだろ。

たかがそれだけのことだ。天羽たちがひそかに「委員会最優先主義復活の烽火」を掲げているのを知っているからつい、気になってしまうだけのこと。いつもの上総の考え過ぎと割り切れればいいだけだろう。

——でも、やっぱり気になるよな。

六時間目の鐘が鳴った。みな、藤沖の号令で「起立・礼・着席」を行い一気にばらける。

帰りのホームルームが終われば今日は終わりだ。鞆に荷物をまとめ、上総は窓側から流れる生暖かい風を頬で感じた。

——まだ時間もあるし、今日は大学の講義もないし、杉本の顔を見るために中学校舎いったって、おかしくないだろ？

まあ、会える可能性は低いのだが。たぶん杉本は例の桜田さんとかいう不良少女とどこかに流れてしまうだろうが。捕まえられればそれはラッキーなことだ。それだけだ。

元・評議委員チームの行動パターンは決まっていた。

まず、生徒玄関あたりで目的の相手をつまみ、二言三言声をかけた後、学生食堂に連れ込む。機密情報が含まれている場合はその限りにあらず。気心しれた連中ならば、天羽のアジトとも言うべき建物があるし、反対に敵相手ならば近所の神社、中途半端ならば大型スーパー「リーズン」の階段席か。

——霧島だったらどのあたりに位置するだろう？

少なくとも「味方」ではないだろう。

元・評議委員長だった天羽にとってはうっとおしい存在だっただろう。難波にとっては姉・霧島ゆいへの気持ちも消せないだろうし、更科についてはただつきあいだけ。

——難波を軽蔑するような発言をした、ということは天羽、どう出るだろう。

天羽の立場に立って考えてみる。

難波が屈辱的な扱いを二年後輩の霧島にされてしまい、同期の天羽としては黙っているわけにはいかない。がしかし、順調にいけば霧島は次期生徒会長に選出されるはず。学校内で異論はないだろうし、すでに陰の生徒会長として認識されている事実を認めぬわけにはいかない。とな

ると、こいつを宥めすかして天羽一派につけておくのが得策、と考えても不思議はない。

——宥めるか、それとも脅すか。

上総には、はたして天羽がどちらの形で霧島に接するか読みきれなかった。

——いや、読んでどうする。

いったい自分が何しに行きたいのか、上総自身の心すら読みきれなかった。ただ、足が、身体が、動くだけ。

まず中学校舎の生徒玄関に回ってみた。杉本を最初に探したがやはり見当たらなかった。本日の目的は杉本ではないし、そのあたりはざっと眺めたにすぎない。

次に、自転車置き場をうろついてみたが、やはり見当たらない。そこからまっすぐ突き当たりの窓に向かうが、当然いる由もない。

——生徒会室に向かったのか？

それはまず、ありえないことだった。

基本としてよほどの理由がない限り、高校生は中学の委員会活動に顔を出すことはない。もちろん、学外で本条先輩と連絡を取り相談しあったりすることはあるけれども、完全に校内活動とは切り離されているはずだ。

ただし、生徒会は確認していないのでわからない。元・生徒会長の藤沖が中学の生徒会連中と連絡を取り合っているかどうかは謎だ。

はたして天羽たち三人が、因縁深い生徒会室に向かうとは、よほどのことがない限りありえないし、そんなことしたら他の生徒会役員たちから怪しまれるに違いない。

上総が暫く首をひねりつつ、校門へ歩いていくと、

「おーい、立村、どうした？」

背中から声をかけられた。駆け寄ってくる気配と同時に振り返ると、探していた三人衆がいるではないか。天羽が額にたっぷり汗をかき、髪の毛を振り乱して飛んでくる。

「お前すたすたひとりで行っちゃうから、追っかけてたんだぞ」

「追っかけてた？」

問い返すと天羽が、隣の難波、後ろの更科にも頷きながら続けた。

「そうそう。お前も一緒にキリオ対談に付き合ってもらいたいんでさ」

難波と更科は黙っている。どうやらこの二人は納得していないらしい。

「立村、来るのか？」

ぼそりと難波が尋ねてきた。黒ぶちめがねの奥で、「来たらただじゃおかねえぞ」と言わんばかりの目つきに思わずひく。

「いや、そういうわけじゃないんだ」

天羽たちが霧島弟を捕まえる様子が気になってはいた。だがそれだけであってそれ以上のことはない。上総がしばらく口籠もると、更科が割って入った。

「今からさ、キリオにキリオ対策の術を授けようって天羽が話してたんだよ。ホームズだって先

輩だし、あんなこと言われたら立場ないしね。けどホームズだけだったらキリオもまた馬鹿にした言い方するだろうし、それなら集団でじっくり話をしたほうがいいんじゃないかって」

——やはり天羽は、霧島取り込みを考えているんだな。

すぐに判断した。ただ難波の機嫌悪そうな様子からすると、「余計なお世話」という気持ちも強いのかも知れない。

「キリオは口が達者だからなあ。集団で勝負をかけたほうが俺はよいと思ってな。難波は納得いかんようだが、まあ、同期の俺に任せとけ」

明るく軽く交わす天羽だが、やっぱり難波は黙ったままだった。

さてどうするか。

天羽の考えはこれで把握した。元・評議チームで霧島弟を囲み、姉の事情を汲み取りつつも「もしなんとかしたいようだったら、俺たちがいくらでも力になるから仲間に入れ」とくどくつもりなのだろう。それから先、どうするのかは天羽の胸一寸。

「あのさ、天羽、ちょっといいか」

ひっかかるまま尋ねてみた。

「悪いけど、今日は俺は混じれないんだ」

「え？ そのつもりで中学校舎に来たんじゃないの？」

更科がきょとんとした顔で聞いてきた。上総は頷いた。

「実はちょっと、用事があったんだけどさ、あまり人には言えないしさ」

歯切れ悪く時間稼ぎをした。難波が機嫌悪げに文句を言う。

「なんだよ立村、はっきり言え」

しばらく口籠もり、素早く案を練る。

——天羽たちより前に、霧島に話をしておいたほうがいいと思うんだよな。

何を、とは自分でも判断がつかないが、なぜか気が騒ぐ。霧島弟との接点をなぜか作っておきたい自分の本心が、上総にはまだつかめない。でも展開だけはたったか進んでいる以上、とにかく一歩踏み出すしかなかった。

「お前らだから言うんだけどさ、実は」

嘘をつくののためらいはない。

上総は一呼吸置いて、まず始めた。

「俺、霧島さんの弟に、とんでもない弱み握られているんだ」

男子連中みな、一歩、また一歩と上総を囲み、顔をまじまじと見つめてきた。

「何やらかしたんだよ」

「さてはまた杉本がらみか」

「キリオのことでホームズみたいなこと言われたの？」

三人三様に問い掛けてくる。上総は首を振った。時間がない、言うしかない。

「ほんと情けないんだけどさ」

「前置きはいいい、早く言え」

難波にぴしゃっと叩かれる。肩をすくめ、片方の手をポケットに突っ込み何度か指を弾いた。

「単刀直入に言うと、本を買っているところを、見られた」

「本？ 本屋でか？ 本屋では本を買わないでどうする」

天羽がきょとんとした顔でさらに続きを促した。

「それと弱みとどう関係あるんだ？」

「その本がまずかったんだ。いわゆる、その、あの、なんというか」

口籠もるふりをした。すぐに難波が切り込んでくる。読み通りだ。

「もしかしてお前、エロ本をか」

目と目で通じる何かがある。男子もそうだ。黙って顔を見る。反論しないことでイエスが通じる。天羽が上総の頭を軽く叩いた。からかい調子だった。

「いやまあ、お前も男だから、そりゃあな、ないとはいわんが、どこで見られたんだ」

「駅前の……」

ここで慌てて方向転換した。天羽たちももちろん本条先輩たちからいろいろと、エロ本入手の方法などをマスターしているはず。実際、あのピンクチラシいっばいの書店で購入しているといっても違和感を感じることはない。しかし、話の展開上まずいところもある。

「ふつうの本屋で」

今度は難波が思いっきり上総の額をはたいた。

「ポケが！ そういうのをなんで普通の、よりによって人目につくような場所を買うんだ！」

難波の言い分は正しい。上総も反対の立場ならそう思うに違いない。

「駅前奥の、地下の本屋だったらまずばれねえだろ？ なんでよりによってなあ」

しかし信じてはくれたようだ。安心する。自分の恥をさらけ出しているようで実はそうではない。だから簡単に語ることができる。

「魔が差したんだ」

「万引きしたわけじゃあねえから別に悪いことじゃないよね」

更科が知った風に語る。

「で、その現場をキリオに押さえられたと」

上総は頷いた。

「よりによって、俺も体調が悪くてさ、あんまり見られたくないところも見られたわけで」

「なんだよそりゃ。まさか鼻血噴いたとか」

「そのまさか。情けないったらないよな」

天羽のつつこみが鋭すぎて、上総も余計な言い訳をする必要がなくなった。勝手に思いつくまま続けるだけでよい。嘘八百、実際あったことを、登場人物さかさまに語ることにする。

「選んだ本も、まずかった。いわゆるその、縛ったりなんなりするタイプの」

「ああ、立村そういうの好きだからな」

妙に納得している難波。完全に誤解されているがしかたない。目的に手段は選ばない。

「で、ティッシュで後始末したりなんかして、本屋を出たところで見咎められた」

「え？ ちゃんと本を買ったんだろ？ 万引きしてないのにそんなやましいことしてないのか？」

「霧島さんの弟がそのあたりをチェックしていたようで、そういう本を未成年の俺が購入するのは間違っているのではないかと、あの口調で指摘してきた」

突然みな、黙った。納得している様子だ。

——なんとか嘘が通じそうか。

口がくるくる回る。

「退学になるような悪さをしたとは思わないが、やはり学校にばれたらろくなことはない。だからさっそく、こちらから何かできることはないかとお伺いを立てているところだ。幸い俺は今、委員会からも離れているし、もし何か脅されたり頭を下げたりすることがあったとしても、お前らに迷惑をかけることはないと思う。ただ、お前らが動く前に、俺のすべきことはきちんとけりをつけておくべきだと思ったんだ。だからまず、難波には悪いけど、霧島さんの弟とまず、最初に俺が話をしたいんだ」

「話をしてどうすんの」

天羽が不思議そうに尋ねる。どうも納得していないようすだ。

「俺が何をすればいいのか、霧島が要求してくるものをまず、確認しておきたいんだ。その上で天羽たちが一番いいやり方で話を進められるように、下地を作っておきたいだけなんだ」

自分でない奴が話をしているようで、どことなく気持ち悪いが、止まらないのだからしかたない。

「下地？ もっとはっきりわかりやすく言えよ」

難波がびしりと割って入った。

「お前ら知ってる通り、中学時代にいろいろ生徒会とやりあった過去もあるし、俺に声をかけてきたということは、何か考えていることがあるんじゃないかと思うんだ。たとえば今の評議委員会を大人しくさせてほしいとか、その他いろいろ、高校生だからこそできる裏取引とか。まあそんなことがあるのかないのかを確認したい。その上で、俺だけが責任を取ればいいことだったらそれで片をつけるしさ」

はったりもいいとこだ。なんだか本当のことがばれたら、とんでもないことになりそうだ。それでも言わずにいられないのはなぜだろう。霧島弟にどうしてそんなに連絡をせねばとあせっているのだろう。自分で自分を捕獲することが、どうしてもできない。

——ばれてないよな。

ちらりと天羽の顔を覗き込む。特段、何かを言いたい顔ではなかった。ただ、首をひねっている。疑わしいのか。

「わかった。じゃあ、そんなに言うならお前が先に行け」

断を下したのは天羽だった。ひくりと喉もとをびくつかせた難波と、

「ええ？ なんかよくわからないけどいいのかなあ」

鋭くとぼけた質問をする更科を片手で制して、

「まあ、男として気持ちはわかる。立村、運が悪かったよなあ」

「わかってくれるか」

「まあ、一応な」

へたなウインクの真似をする。顔をしかめてみせる。

「とにかく話をつけたら、俺たちに報告な。それと、もしお前の手に負えないようなら深追いするな。一緒に考えろ」

——天羽の奴、なんか変だな。

直感でぴんとくるものがあるのだが、それがどこから届くのかわからない。

わからないことだらけだ。

「とかなんとか噂しているうちに、来たぞ奴が」

気の抜けた声で、更科が指を指した。

「じゃあ今日は俺たちは用無しだな、あとは任せたぞ立村」

心なしか、難波の言葉が棒読み聞こえた。

「じゃあ、俺たちは仕切り直しだな、学食に行くぞ難波、更科」

やはりリーダーの天羽らしく、片腕掲げ、一本指を立てたまま背を向けた。

天羽が心底上総の言葉に騙されたとは思えなかった。脳天気に見せておいて、実はしたたかに周囲を見渡しているのが天羽の性格と知っている以上、そのままのほほんと受け入れる気はない。ただ、どちらにしても、霧島と連絡を取ることができるのはありがたかった。

——あのままだと、絶対にあいつは本を取りにこないだろう。

構わないし、他の奴なら自然消滅にしても不思議ではないと思うのだが、どうもそれだとまずいような気がするだけのこと。

——まず、直接話をしてみても、こちらから取引を持ちかけてみよう。

上総なりに案として急いで考えたのは以下の通りだった。

- ・霧島にはエロ本で取り乱した姿を見られたという引け目があるはずだ。  
また上総が他人にそのことをばらさないとも限らない。そんな不安があるはずだ。  
だから、そんな心配する必要はないと繰り返し言い聞かせておく。
- ・ただし、それだけだと口約束で心配なのも当然のこと。  
そのために、上総としては霧島から取引を持ちかけることが必要。  
相手側から隠すための抵当みたいなものをもらい、口止めしたということにする。  
霧島の噂に聞く性格から鑑みて、そのあたりでクールに取引した方が安心しそうな気もする。  
情よりも理で動かすほうがよさそうだ。
- ・その取引の内容として、可能ならば、例の一件……修学旅行のおねしょ事件に関する情報など……を聞きだせればベストだが、なにせ上総は元・評議委員長だ。天敵・生徒会役員たるも

のが弱みをそう簡単にさらけ出すとは思えない。話の内容によって選ぶことも必要だろう。杉本があれだけ冷静に交わしているのだから、上総が無理やり話を持ち出さなくてもよさそうな気もするし、これは流れで決める。

以下、三点。

頭のすみっこに置いて、上総は改めて霧島を迎える準備を始めた。

ちょうど生徒玄関から姿を現した霧島が、ふと立ち止まっているのが見えた。

さっき更科が指を指した時は気がついていなかったのだろうが、天羽たち三人が背を向け、上総一人が残っているのを見つけて驚いたのかもしれない。

——とりあえずは、天羽たちにばらしていないことを伝えてからにしよう。

上総は一步、また一步と近づいた。まだ陽射しの強い昼下がり。半そでシャツ、律儀にネクタイをぶらさげたままの霧島が動かずにいる。すれ違う生徒たちの殆どは、霧島を単なる「生徒会副会長」としか見ていないらしい。一礼して追い越すものもいれば、一瞥して噂話に花を咲かせている者もいる。側で誰か仲間と語らう姿はなかった。

動かないのは上総が原因だと、もちろんすぐに気がついた。

じっと上総を見据えている。その瞳に何が浮かんでいるのかも、すぐに上総は見て取った。

「悪いけど、少し時間もらえるか」

斜に立ち、上総は霧島に囁きかけた。

「決して脅迫しにきたわけじゃない。すぐに話は終わる。そこの体育館脇でいい」

「脅迫、っていったい」

言葉の選び方を間違えたいらしい。上総はすぐに否定した。

「違う、この前の件のけりをつけにきただけなんだ」

「僕に、僕に、何をさせようっていうんですか！」

いきなり霧島が声を震わせた。いつもの甲高い声で、何かをわめき散らすつもりか。しかしその声は叫びではなかった。予想とは異なり、上総は戸惑った。

「違う、って言っているだろ。俺は誰にも話していない」

「僕、何もできませんよ！ なんも、ほんとになんも！」

「何かをしてほしいって言っているわけじゃないんだ」

完全に霧島は誤解しているらしい。上総としては何一つ、誤解されそうな言を発したつもりなどないのだが、口で説明しても無駄とすぐに気がついた。どうやら霧島、いったん自分が思った受け取り方をされていると気付いたとたん、それしか見えなくなる性格のようだ。

「脅されたって、僕、何も、何もできません」

「落ち着け、まず話を聞いてくれ」

「なんで、なんであんなところで、なんで、なんで、どうして」

目が血走っている、身体が震えている。

——なんでこんなにおびえてる？

本当は一番それを尋ねたい。しかし答えが返ってくるとは思えない。

——俺、そんなに下級生をおびえさせるようなこと言ったか？

その反対のことはあったが。

扱いかねてしばらく様子を見ようと決めた、その時だった。

「だって、仕方ないんだ、だって、僕、だって仕方なくて」

その言葉を呟いたとたん、霧島がいきなり顔を覆った。また鼻血を出したのかと顔を覗きこんでみたが、どうやら違うらしい。

「霧島、言っている意味がわからないんだが」

問い返してみたが、まともな返事は返ってこなかった。

「だって、だって、だって」

顔を覆ったまま、霧島は上総の前で嗚咽をもらしはじめた。

二度目だった。

——俺の言い方が悪かったのか？

決して脅すつもりではなかったし、霧島のプライドを傷つけるつもりもさらさらなかった。

しこりが残っているなら取り去りたいと思っただけだった。

いい感情を持たれていない後輩ではあるけれども、叩きのめす気なんてなかったのに。

責めるように泣かれると、こちらとしても困る。女子ならある程度覚悟もないわけではないが、相手は男子、それも決してこんな反応を示すとは思えない奴なのだ。

二度目とはいえ、やはり困る。

上総はそっと前後、左右を見回した。

幸い、嗚咽の声はかすれていて、周囲に広がるほどではない。顔を覆っているから音が消えるのかもしれない。

——霧島は生徒会副会長だ。それも、次期生徒会長だ。

そんな奴が、よりによってこんなところで、しくしく泣きじゃくっているさまを見られたら。

——プライドこなごなだろうに。

それも、先輩としてとことん馬鹿にされている、立村上総の前で醜態露わにしている姿など、霧島ならば見られたくもないはずだ。

一度目は幸い誰にも気付かれなかった。しかし今はまずい。霧島だって自分の立場を忘れたわけではあるまいに、それでも動揺を押し隠せないのだ。とにかく人前から隠さなくてはなるまい。なによりも霧島の、想像を絶するほど高いはずの自尊心を、なんとしても守ってやらないとまずいだろう。つぶしてやるのもひとつの手かもしれないが、そんな精神的な殺人をしてよいとは、上総は決して思わない。

「霧島」

目立たぬように、指先で顎をつついた。

「こっちを向け。このままでいい」

鼻血こそ混じっていないが、せっかくの端正な王子顔がただの鼻たれ小僧に早替わり。

自然な汗と目立たないこめかみに見えるにきびが浮かぶ。

上総は黙って顔をあげさせた。真正面に回った。小声で囁いた。

「いいか、まっすぐ、これから裏の林に向かって歩け。頭はあげたままでいい」

まだベソをかいている霧島に、もう一度はっきり告げた。

「次期生徒会長の顔をして、歩けば誰も気付かないからさ」

こんなみっともない顔していじけている霧島を、決して青大附中の生徒たちの前にさらけ出させることはしない。男子ならば、プライドというものが命の次に大切なものだということを知っているはず。たとえ嫌われていたとしても、ずたずたにプライドを傷つけるような言動だけはどんなことがあってもしてはならない。エロ本を読み耽って鼻血出したことで動揺して、激しく泣きじゃくる男子だということを、決して他の奴らに見せてはならない。

後輩という時代を過ごした上総は、先輩になった今でもそのことを何よりも大切にしていた。

——やはり、霧島さんの弟なんだ。血は争えない。

かつて姉のゆいは、青大附高進学を拒絶された時、担任の先生に人前はばからず土下座して、進学の許可を求めたという。それがたとえ、彼女のために行われた処置だったとしても、理解することはできず、ひたすら青大附属へ残りたいと涙ながらに訴えたという。

アマゾネスと呼ばれ、男子たちとは対等にぶつかり合い、大切な友だちのためには身体を張って守ろうとしたプライドの高い女子が、たったひとつの失敗によってプライドも何もかも失い、ぼろぼろに壊れていくさまを上総は見つめていた。

——どこがどう傷ついたのかはわからないけど、きっと俺は、霧島のアキレス腱を切ってしまうような何かをしてしまったんだろう。二回も。

「霧島、俺は自分がされたくないことは、しない。約束する」

聞こえていたかわからない。ただ霧島は涙顔を上げたまま、上総の引き寄せる方向へ引きずられていた。反抗すらしなかった。必死に、鼻だけすする音だけ聞こえた。

とりあえず霧島を「おちうど」に連れて行くしか、上総には答えが見つからなかった。

霧島を「おちうど」へ連れて行き、黙って珈琲を注文した。

和風喫茶だし、心だんなら抹茶か番茶を頼むものだが、どう考えても霧島向きとは思えない。

おかみさんも霧島のただならぬ様子と上総の目を見てすぐに注文をとり、奥へと消えた。

しばらく様子を見るべく、上総は珈琲をまず口にした。

——ここまでついてきたのだから、話を聞く気はあるんだろうな。

もし逃げたいのならば、上総の手を振り切って駆け出せばいいだけのことなのだから。霧島くらい賢い男子なら、たとえ二年上の先輩とはいえ、ある程度の口実もこしらえることができるだろうに。誘っておいて素直にくっついてきた霧島に、正直上総は戸惑っていた。

——霧島の顔を知っている人はいないかな。

これもひそかに心配の種だった。「霧島呉服店」の跡取息子らしいとは、姉のゆいの口から聞いていた。本来ならば姉の自分が継ぐべきところを、両親の意思で外されたと悔しがっていた。もっとも上総からすると、跡を継ぐということが必ずしもうれしいことではないと思う。

このあたりのずれが、もしかしたら霧島にはあるのかもしれない。

とにかく霧島が、呉服屋の息子という以上は和服と縁の深い世界の人々に顔を覚えられている可能性もある。様子を伺うが特段、上総たちを興味深げにチェックしている気配はない。

——とりあえずは大丈夫そうだな。

これから話す内容自体、お上品なものではない。気持ちを整える時間は上総にも必要だった。

「俺は決してお前のことを馬鹿にしたり脅迫しようと思ってきたわけではないんだ」

上総は切り出した。霧島はうつむいたままだった。

「この前のことをすべて清算したいというだけのことなんだ」

「清算？」

戸惑いを隠せず、うつむいたまま霧島がつぶやく。

「顔を合わせた場所が口に出せない本屋だったというだけで引け目感じる必要はないよ。俺もあそこにいたことを他人には気づかletたくないし、お互い黙っていればそれでいい。そうだろう？」

あまりうまい説明ではない。霧島は黙ったままだった。

「ただ俺を信用できない気持ちもわかる。反対の立場だったら俺もきっとそう思う。だから、ここで取引をしたらどうかと思ったわけなんだ」

すうっと顔を上げた。霧島が唇をかすかに動かした。

「取引ってなんですか」

「口止め料というのかな。そんなことしなくたって俺は言う気ないけど、霧島の方が落ち着かないかなって思ったんだ」

ゆっくりと続けた。

「これから俺が口止め料代わりにひとつ質問をするから、よかったら答えてほしい。俺はその情

報をもらったことによって、その反対に霧島はその情報を提供することによってこれ以上、余計な心配をしなくてもすむはずだ」

「やはり脅迫じゃないですか！」

甲高い声で、またぶるぶる震える霧島。さすがに声はあげなかった。

「ごめん、脅迫になってしまうかな」

自分でも納得してしまう。上総も頷いた。

「先に質問だけするから答えるかどうかを自分で判断するというのはどうかな。俺も正直なところ、いい質問かどうかわからないし、もし答えてもらわなくてもそんなに困ることじゃない。ただ、逆の立場だった場合、やはり心配になるかなという気はするんだ」

「心配とは」

「いつばらされるかという不安、そういうのがあると怖いかなと。特に信用していない相手だと、いつ手の平返してぺらぺらしゃべられるんじゃないかとか、弱み握られっぱなしなのはいろいろと落ち着かないんじゃないかな」

慎重に霧島は上総を見返していた。いきなりそう言われても戸惑うだろうし、それは上総も予想していた。単純に「俺は言わないから安心しろ」の一言で済ませても本当はいいんじゃないかと思う。

霧島は用心深い性格に見える。かえって疑惑の念にかられてしまいそうだ。単純に「わーそうですかーよかった！」と喜ぶタイプには思えない。

「繰り返すけど、俺はあの場で顔を合わせたことが、決して悪いことだとは思わない。校則にはたぶん触れると思うけどそれだけのことだしさ。ただせっかくだからひとつ質問してみようかなと思っただけ。でも、確かに、こうやって無理やり連れ込んだのは脅迫かもしれない。それは悪かった」

——けど、これ以外にいい方法、あるのか。

最初からなかったことにして無視すればいいだけのことだ。

たぶん、他の奴だったらそうしていただろう。

なんで霧島に対してだけ「取引」とか「気持ちを軽くしてやろう」とかいう、よけいなことを考えてしまったのか、自分でもわからない。

霧島はしばらく珈琲の湯気を見つめていた。

手をつけないうちに、おかみさんがそっと豆菓子テーブルの隅においてくれた。気遣いだろう。

上総はしょうゆ豆のお菓子を口に放り込み、時間を稼いだ。

「じゃあなぜ」

ようやく霧島が口を開いた。ゆっくりと顔を上げた。細い唇と切れ長の瞳、そして真っ白い肌。日本人離れしている。姉のゆいと瓜二つの造作。彼を追いかけるファンが多いのも頷ける。青大附中の元祖・アイドル・南雲秋世がミュージシャン風芸能人要素の強い顔とすれば、霧島はむしろモノクロの映画スターを思わせる浮世離れした気品をかもし出している顔だ。完全におびえて引きつっている。

「なぜ、そんなこと言うんですか」

「そう言わないと落ち着かないかなと思っただけなんだ」

「はっきり言えばいいじゃないですか！ 口止め料よこせとか、なんとか！」

「口止め料にはなと思うけど、もらわなくても言う気ないし」

「なんの意味があるんですか！」

「そういえば信用してもらえるかなと思って」

言葉を選ぶ余裕もない。目の前で動揺されると、こちらも正直困る場面だ。思ったことを言うしかない。

「とりあえずまず、質問なんだけど」

意識の方向を少し変えてみることにした。上総は切り出した。

「よかったら、この前起こったという修学旅行のトラブルの話で、生徒会役員として内部事情を教えてもらえると助かるな。いやなら言わなくてもいいし無理にとは言わないけど、俺個人としては前から気になっていたことなんで、もしよかったら」

しつこいくらい「よかったら」と続けてしまう。自分がいかに卑屈な性格かがよくわかる。でも言わずにはいられない。霧島の表情の変化を伺った。

「修学旅行のトラブルとは」

かすれた声で、霧島が受けた。

「修学旅行最終日に、誰かがとんでもないことをしたらしいという話を聞いたんだ。蒲団に、ほら地図を描いた人がいたとか。そのあと蒲団を別の女子の部屋に隠して、犯人候補がふたり出てきたとか。俺はその犯人が具体的に誰なのか、というのは興味ないし知る気もないけど、正確な事情は知っておきたいんだ。そうすることによってこれから先、相手にきちんとした対応がしやすくなるしさ。ただ、俺の耳に入ってくる情報はみなばらばらでどれを信じていいかわからないんだ。もちろん無理に知らなくてもいいことではあるけど、迷惑をこうむる人がいる以上ある程度のことは聞いておきたいと思っただけなんだ。本当だったら当事者に直接聞けと言われそうだけど」

ぽかんとしたまま霧島が口をあけている。

「生徒会の誰かがからんでいるという噂もあれば、別の女子がしでかしたことという話も出てきている。俺からしたら誰がやらかしたとしても関係はないんだ。ただ、そういう噂が流れている以上生徒会の人たちもいろいろと大変だろうし、どうしているのかを聞きたかったんだ。佐賀さんも苦労しているだろうし、それ以上に周りの霧島たちも対応が面倒だろうし」

「そんなことを聞いて」

どうしてなんだと聞きたいだろう。当然だ。上総は頷いて続けた。珈琲を合間に飲んだ。

「言っとくけど、俺はもう委員会にも生徒会にもかかわるつもりは全くないし、先輩面して口出しするつもりもない。ただ俺の知っている奴が巻き込まれてるようだったら、そちらには迷惑をかけない形で手助けするつもりはある。佐賀さんや新井林、もちろん生徒会にも迷惑かけるつもりはない。でも、信用できないよな、それはそうだと思うよ」

これも本音だった。とにかく言うだけ言ってあとは霧島の判断に任せようと決めた。

「信用しなくてもいいし、してもいい。俺が言いたいのはとにかく、この前のことを誰にも言う気はないってことだけ、伝えたいだけなんだ」

上総は珈琲を飲み干し、言い切った。

霧島の口元がゆっくり緩み、ぽつりと一言こぼれた。

「信用していてもいなくても、隠すような話ではありません。そんなことが口止め料ですか」

「まあ、そういうことだな」

「口止め料なんかじゃないです、こんな話が」

言いかけた霧島が、突然いきり立った。

「そんなこと、隠すことでもなんでもない！」

テーブルを両手で叩こうとし、身体を震わせた。

「そんなまどろっこしいことをするより、はっきりと聞けばいいじゃないですか！ 修学旅行のおろかな女子の失態について教えろと、それだけ言えばすむことじゃないですか！ なんで、なんで僕にそんな手を回して聞き出そうとするんですか！ 誰に聞かれたって僕は答えます。隠し事なんかじゃない！」

首を激しく振った。上総を見据えた。

「なんで、僕をそうやって」

「なんでだろうな」

自分でもわからないことを、無意識のうちに上総は答えていた。自分でも驚いた。

「たぶん、霧島と話をしたかったんだろうな」

毒気を抜かれてしまったのか、霧島はゆっくり口を閉じ、また首を振った。すぐに言葉が返ってこなかった。

——伝えたいものがある。

天羽たちと話をしている時から沸いてきたもやもやしたもの。

何かを霧島に伝えねばならない、そういう切迫したもの。

どこからそれが生まれたのかわからず、ごてごてと理由をくっつけてみたけれど、結局は「伝えなかった」それだけなのだろう。

——なら話は早いよな。

思わず飛び出た言葉に従い、上総は珈琲カップを手の平に載せた。そのまま語りかけた。

「この何日か、もし俺が霧島の立場だったらどうしてほしいか考えた、それだけなんだ。俺が勝

手に想像しただけで、余計なお世話だったら謝るよ。俺は中学時代、本条先輩から同じことをしてもらっていたし、そのおかげでなんとか足を踏み外さずにすんだ。だから、きっと同じことをしたら楽になるのかな、と思っただけさ。俺の勝手な思い込みだけで、嫌がられるのは当然だ。悪かった」

たったこれだけのことを、なんで自分はだらだらしゃべりつづけてきたのだろう。もし本条先輩だったらもっとわかりやすく説明していただろう。うざったがられるような表現なんてしなくても一行ですっぱり「気にするんじゃねえよ！」くらい言い放っていただろう。

まねごとしてみても上総はやはり、本条先輩になれなかった。

しばらく間があいた。会話はなし。霧島はしばらく上総の顔を見上げていた。同じ戸惑いの表情だったが、陰がとれていったように見えた。ゆっくりと珈琲に手を伸ばした。

上総と同じ形で、掌にカップを載せた。相似だった。

「聞かれたらいくらでも話せる内容です。他の先輩たちに対しても同じです」

声が低く、穏やかに聞こえた。

「そんなことで満足されるのなら、話しますが」

少しずつ、唇がまっすぐ整ってきているように見えた。さっきまではゆがんでいた。

「ひとつだけ聞かせてください」

「何を」

「もし、あの時、あの場にいたのがたとえば新井林先輩だとしたら、同じようになさいましたか」

即答した。

「いや、しなかった」

「なぜですか」

「新井林なら、こちらから余計なことしたいと思わなかったからだ」

「姉のことを知っていたからですか」

これも即答できる質問だった。

「いや、同じ評議委員同士だったけど、女子とはあまり接点がなかった。それ以上の興味はなかった」

「じゃあなんで、僕には」

「なんでだろう、俺もわからない」

本当にわからなかった。今でもつかめない。

「ただ、言いたかっただけなんだ。ごめん、悪かった」

これ以上、言うべきことはなかった。

「先に行く。今のことは絶対に誰にも言わない。それだけは守るから」

上総が腰を浮かせようとした時だった。

霧島がすっと立ち上がった。見下ろした。

「待ってください！」

一瞬店に響いた。みなが霧島の方を見た。

「話はまだ、終わってません」

小声で、うつむき加減で、あわてて。

「僕はまだ、返事をしていません」

端正な顔立ちにふたたび涙ぐみそうな表情が浮かぶ。

「無理にしなくてもいいから」

「いえ、聞かれたら答えられる内容です」

霧島の口が震えていた。上総が腰掛け直すと、ゆっくり霧島も席についた。うつむいたままだった。

「聞きたいことがあれば、答えます」

上総も次に問うべき言葉を失った。

「まだ、本、返していただいてませんから」

——なんでこいつ、話す気になったんだろう。

思わぬ展開に戸惑う。上総もまさか、霧島がこんな素直に言うことを聞くとは思わなかった。

しかも呼び止められてまで、とは。

いったい霧島は何を考えているのだろうか。

ともかくにも、霧島が何かを語りたがっているのだけは感じ取れる。修学旅行の、おそらく、生徒会役員の渋谷の件についてならいくらでも話ができる、ということなのだろう。それを口止め料に要求してもなんの意味もない、そう言いたいのだろうか。いや、わからない

——まず話をとことん聞こう。もしかしたらそれだけが、霧島の求めていることなのかもしれない。

上総は自分の形を、本条先輩のように整えた。自分がかつて中学二年の頃、目の前にいたはずの本条先輩はどんな顔をしていただろう。わけのわからないことを口走る上総を、どういう想いで受け止めてくれただろうか。

「わかった。ここでの話は、ここだけにしておくから」

上総の言葉を待っていたかのように、霧島はうつむいたまま語りだした。

「今年の修学旅行三日目の夜、仕組んだのは、生徒会書記の渋谷先輩です。知らぬものはおりません」

断言から始まった。

——仕組んだ？

その表現の意図を尋ねたかったが、霧島の話が終わるまでは黙っているつもりだったのでこらえた。頷くだけにした。

「修学旅行三日目の夜中、失敗したことを隠すために、別クラスの女子部屋へふとんを持ち込み

濡れ衣を着せようとしたのは渋谷先輩だと、誰もが知っています。ですが、それを学校側は懸命に隠しています」

「学校側がか」

「そうです。学校側は修学旅行終了後即、渋谷先輩および家族を呼び出し真相を質しました。養護教諭の都築先生を通じて事情聴取を行い、その場で厳しく叱咤したとのことでした」

「ならそれで話はついていないはずだな」

ひとりごちた。霧島と会話が成り立っているのがまだ上総は信じられなかった。

「はいその通りです。その状況を確認したものもおります。何よりもの証拠は渋谷先輩がその直後一週間欠席したということでもあります」

「なら、なぜそのあとごたごたしているんだ？ 杉本を噂の種にする理由がわからないな」

霧島はちらと上総の目を覗き込んだ。鋭いまなざしだった。

「ですが、学校側としては内密に処理をしたかったそうで、あえてうやむやにごまかす予定だったようです」

——それはそうだろうな。

そのあたり、納得はした。

霧島の言葉をそのまま信用するならば、すでに白黒はっきりしているわけだし、杉本に対していろいろと噂を撒き散らされるような理由などどこにもないはずだ。

なのに実際は、渋谷よりも杉本の方に疑いの比重がかかっている。それがなぞだ。

「僕の考えとしては本来ならば、自分でしたことへの責任を即とるべきです。人間として当然の行動です。しかし、渋谷先輩はそれを行いませんでした。それどころか相手に罪をなすりつけて逃げようとしたわけです。これは許されざることです」

このあたりから、霧島の口調は、青大附中の生徒会副会長の持つプライドに満ちてきた。視線もさっきまでのおどおどしたあぶなっかしい雰囲気とはうってかわり、まっすぐ上総を見据えようとしている。この二面性に正直上総は戸惑っている。

鼻血噴いておろおろして泣きじゃくる霧島と、今厳しく渋谷を断罪しているこの男子と。同一人物なのだろうか。

「だしかにそうだな」

相槌を打ってみた。霧島がぐいと前かがみになる姿勢で頷いた。

「そうです。だから僕は言ったのです」

「何を言ったんだ？」

この自信たっぷりの態度。ついていけなくなりつつも上総は問うた。

勝ち誇った風に霧島は言い放った。

「『お言葉ですが、自分の過ちをきちんと認められずしかも人に押し付けようとするような人と、僕は仕事をしたくありません。僕は、渋谷先輩と一緒に生徒会室にいることに耐えられません。もしこれから先、共同作業を一緒に行いたいならば、自分の立場を反省して、その上でこれからのことを考えてください。先輩であることと、能力の差とは、関係ありません』……以上です」

——そこまで言えるものなのか？

「なお、渋谷先輩は僕の言葉を受け入れたようで、その後またしばらく学校を休んでいます。真実を突きつけられた以上、逃げ場を失ったということです。僕は間違っただけなどひとつも行っておりません」

——聞いてはならないことを聞いてしまったのかもしれない。

霧島がきっぱり断言していることを素直に受け入れていいのかどうか、正直判断がつきかねる。

しかし、「渋谷が一週間学校を欠席した」「旅行直後に事情聴取を行い事実関係を確認した」「直接問いつめた霧島に反論できず、またも学校を休んでいる」などといった言動から、かなりの確率でそれが事実であることを推測できる。

——杉本が正真正銘の無実だということは確認できそうだな。

尋ね方によっては、霧島ももっとぺらぺらしゃべってくれそうな気はした。どうしてそこまでしゃべりたいのか判断に苦しむところはあるが、彼なりに何らかの計算はあるのだろう。また、あまり渋谷との人間関係がややこしいところもあるに違いない。

しかし、それ以上聞いてどうするということのだろう。

上総が知りたいのは、「杉本梨南がどのようにこの事件にかかわってたのか」だけであり、それ以上の人間模様には興味がない。むしろ知ることによって、余計な情報を得てしまい、その上で他の知らない女子たちを色眼鏡で見えてしまうのがいやだった。評議委員長の間ならば、もっと深く突き詰めて知り、杉本を相手から守ることも必要だろう。かつてのか弱い杉本をかばうことも必要だろう。しかし、上総は杉本がしっかりと冷静に対応できることを知っている。佐賀はるみ生徒会長を代表とする連中から叩きのめされたとしても、鼻で笑って受け流すべしを杉本は知っている。

それ以上、誰を叩けというのだ。上総は杉本の想いに従うだけ。野に降りた自分のすべきことはそれだけだ。

「ありがとう、だいたい事情を把握した」

上総は礼を述べた。今回霧島を通じて知りたかったことはすべて得ることができた。

要は、杉本が正真正銘無実であることを確認したかっただけのこと。

生徒会うんぬんのトラブルまで抱え込むつもりはさらさらしない。渋谷という女子がしでかしたことで、学校側もすでに状況を把握しているのならば、あとは時間の問題だ。真実は自然と明るみに出るだろう。高校に流れてくる噂がどのようなものであれ、上総は杉本梨南の訴えをそのまま信じて受け止めることができる。天羽たちから「あのおねしょした女子と付き合っているのか」と揶揄されようが、「噂なんかを鵜呑みにするのはどうかと思うよ」と切り返せば済む。

「霧島のおかげで、俺はこれで枕を高くして眠れる。感謝している」

「それだけですか」

不意に霧島が、か弱い声を出した。その落差に驚く。

「それを知りたいという、ただそれだけの理由で、立村先輩は僕を捕まえたのですか」

「ごめん、そうなんだ」

もう、よけいな肉付けは必要なかった。上総は頷いた。

「さっきも話したけれど、俺は事実関係だけ知りたかったんだ。果たして高校につたわってきている噂は本当なのか、だけを確認したかった。その段階で自分の行動を定めたかっただけなんだ」

「自分の行動？」

「正直、修学旅行で蒲団に地図を描いたのが誰なのか知りたいというよりも、特定の誰かではないという確信がほしかっただけなんだ」

「それは杉本先輩のことですか」

単刀直入すぎる。聞こえない振りをした。

「イエスカノーか、それさえわかればあとは相手を傷つけない方法をいくらでもとることができる。今の話を聞く限り、おそらく真実は時間の問題で明るみに出るだろうという気がするんだ。間違った噂は今流れてきているかもしれないけれども、隠せば隠すほど真実は顔を出すものだろう。霧島がさっき、渋谷さんにはっきり告げたというのがどういう理由なのかはあえて聞かないけれども、仮に霧島がそれを言わなかったとしても別のルートでばれるのは確実だろう。無理に否定するよりも、時間に任せたほうが良いような気が、俺はしている」

「能力のないおろか者に真実を告げるのが間違ったことですか」

すごい表現だとは思いますが、あえて何も言わなかった。続けた。

「無理に真実を証明しなくても、必ずわかる奴にはわかる。俺はそれを実際経験してきているから、よくわかるんだ」

上総はじっと霧島の顔を見つめ直した。渋谷について激しく罵倒している時とは違った、素直な表情の霧島がそこにいた。

エロ本をがつついて読みふけている間抜けな顔とも違っている。よけいなものをすべてとっぱらった、赤ん坊のような顔が近かった。

間を持たせるため珈琲を飲み干そうとしたら、目の前の霧島もカップに口をつけた。また相似となった。

「立村先輩」

珈琲を半分残したまま、霧島は改めて口を切った。すでにその顔は生徒会副会長たるクールなもの、上流階級の子息を思わせるような王子ぶりだった。

「取引の件ですが、僕はこの件以上にもっと正確かつ重要な情報をもっています」

「そうか」

いきなりの態度の変化にまた上総は言葉に迷った。変化が激しすぎる。霧島の口調は冷静だが、どこことなく様子を伺う空気が流れていた。

「今のお話を一通り伺いまして理解しました。僕の知っている限り、学校側の対応によっては、真実が明るみにされない可能性のほうが高いように思われます」

「真実が明るみにされない？」

堅苦しい言い方、しかし、どこかすると抜けたところのある口調。

「そうです。今、立村先輩は、真実が明るみに出るのは時間の問題だとおっしゃいましたが、学校側はひとりを犠牲にすることによって渋谷先輩を守ろうとしている嫌いがあります。僕はそれが許せません。もしそうなった場合、杉本先輩におそらく濡れ衣を着せられることになるでしょう。そして、それは卒業するまでそのまま『修学旅行で夜尿症をしでかした女子』としてのレッテルを貼られる恐れがあります」

「だからそれは」

言いかけたが、思わぬきつい口調でさえぎられた。

「その理由について、僕はまだまだたくさん情報提供ができます。正確な情報を用意できます」

「霧島？」

「恐れ入りますが、もう一度お時間をいただけませんか」

カップをソーサーに置き、やがて霧島は唇をぴんと引き締めた。

「だが、そんなことを話していいのか？ 俺はもう野に降りた人間だが、生徒会のイメージを悪くするような情報を無理に聞きたいとは」

「いえ、先輩は聞くべきです」

きっぱり言い切られた。

「でないとおそらく先輩は、杉本先輩を見捨てる形になるかもしれません」

「見捨てる？」

聞き捨てならないその言葉に、上総が身を乗り出したのを霧島に突かれた。

「はい、僕の情報は確実に先輩のお役に立てます」

言い切れ、最後には、

「さしあたっては、今度の土曜日、お時間いただきたいのですが。もちろん、人目につかない場所で」

——霧島、いったいこいつ、何をたくらみたいんだろうか？

上総はもう一度霧島の真意を探るべく、その顔を覗き込んだ。

仮にも霧島は生徒会副会長、そして同じ役員である渋谷は自分の先輩で書記。

いろいろ人間関係で複雑なものはあるのかもしれない。しかし同じ生徒会のメンバーである以上、ひとりの恥をさらけ出して言いふらすことにメリットがあるとは、上総にはどうしても思えなかった。これが評議委員会のメンバー相手に戦いたいというのなら、まだ理解できなくもない。しかし、自分から生徒会という「家族」の悪口を言いふらし、イメージを悪くしていくことに、何の意味があるのだろうか。

しかも、相手は、かつて評議委員長だった立村上総である。

——俺に、自分のホームである生徒会の悪口を伝えてどうしたいんだろう？

いろいろ問題を抱えていたにせよ、生徒会にとっては因縁ある相手のはず。姉のゆいとのかわわりを含めて考えても、まず好き好んで交流を求めたい先輩ではないはずだ。それは上総が一番

よく理解している。

今回、上総が半分強引に「おちうど」へ連れ込んだのは、エロ本事件におけるいろいろなしごらみをあえて断ち切ってやりたいと思った、意味のない親切心だけにすぎない。かつての自分を思わせる霧島に対して、同じ過ちを犯してほしくないという老婆心も混じっていたのだろう。

どんなに霧島が好意的に上総の提案を受け取ったとしても、せいぜい情報を一度、あたりさわりのない程度話してくれて、あとは「キャリアOL」の写真集を返して清算、それで終わりだと思っていた。エロ本見入って鼻血たらしてぐじぐじ泣いている姿を見られた相手と、わざわざ時間を作って話をしてほしいなどは、まず思わないはずだ。

——なのに、そうしてほしいと、言っているわけか。

——そんなに、その、渋谷という女子に恨みがあるのだろうか。

——もし悪い噂を広めたいのなら俺よりも天羽あたりにしゃべればいいことなのに。なんでだろう？

「それなら、この前の本なんだけどどうする？」

ためしに上総は尋ねてみた。その反応で判断を決めようと思った。霧島の瞳にかすかな揺れが走ったのを見た。

「まだ、先輩がお持ちになっていてください」

少しだけどもり、鼻をいきなり搔きながら霧島が小声で答えた。

「先輩にお話しすべきことは、まだ、これからたくさんあります。それまでは」

上総はよく知るひとりに霧島を重ねた。霧島の姉、ゆいではない。

「わかった。土曜の午後は空けておく」

「お迎えに参ります」

上総は了解した。そうせずにはいられなかった。

言い方だけきつく、瞳の奥でがたがたおびえながら訴えるその姿は。

——杉本に、似ている。

「立村先輩、いらっしゃいますか」

朝八時前だった。人前では堂々と背を伸ばし、霧島が一年A組の教室へと入ってくる。同時にちらと他の連中に礼をして上総の机の前に立った。

「ああ、おはよう」

間抜けな挨拶を返すと、

「お時間よろしいですか」

有無を言わず廊下へ連れ出そうとする。

「ああ、構わないよ」

これもまた、先輩らしからぬ、威厳のない答えでもって廊下へ向かう。そのまま霧島は生徒玄関をもう一度降りて、わざわざ体育館脇の影落ちる場所へ連れて行くわけだ。本来なら先輩が後輩を連れ出すパターンなのだろうが、霧島は全く逆転行動を気にしていないようだ。

「霧島、何の用だ」

「昨日の話の続きです。お時間をお願いいたします」

「まだ土曜日ではないはずだが」

本来なら、A組教室で了承を得るべき問題じゃないだろうか。悔しいが上総はこういう場合、むげに突っぱねるだけの根性がない。どうせ先輩風吹かせたってけっと笑われるのが関の山。黙って頷いた。腰の高さの階段に腰掛ける。それを見下ろす形となるのが霧島だ。

「実は昨日、あの後生徒会室にて動きがありました」

「動き？」

一応は関心ある風に尋ねてみる。きっかけを作ったのは上総なのだから、受け入れないとならない気持ちはある。全く興味がないわけではないし、杉本の今後を考える上でも情報は欲しい。しかし、

——ここまでしゃべっていいのか？ 霧島？ お前副会長だろう？

その疑問がどうしても消えない。

「僕が先輩とお会いして後、生徒会室に戻ったところ、藤沖先輩がいらっしゃいました。佐賀生徒会長と相談されていたようです」

「例の一件をか」

そういえばまだA組の教室には来ていなかった。

霧島は肩を無理やり怒らせるようにして、唇を結び直し、語り出した。

「そうです。どうも最近気になるのですが、藤沖先輩の言動に違和感がありまして、僕なりに様子を見ておりました」

「何か変わったことでもあったのか」

「はい、どうも最近、藤沖先輩は渋谷先輩と一緒に校門を出ているらしいとの情報がありました」

——やはり後輩のことは心配なんだな。

藤沖が元生徒会長であること、および生徒会が不穏な状況に置かれていることなどを考えると、心配したくなる気持ちもわからなくはなかった。仮に評議委員会が新井林以外の頼りない奴を中心に回っていたとしたら、先輩たる上総もやはり、声かけたくなるものだろう。

「俺の記憶だと、あまり藤沖と女子たちとはうまく行ってなかったらしいように聞いていたが」「はい、その通りです。ですが最近は方向展開されたようです。いろいろとお考えがあるようで」

皮肉っぽく、甲高い声で霧島は語った。

「事情を確認したんだろう。その後で佐賀さんと話をしたというわけか」

「はい、その点はよくわかりませんが、僕も今日放課後、佐賀生徒会長とお話しするつもりであります」

「何を話すんだ？」

「きっぱり跳ね返すようにとの助言です」

何か急展開があったようだ。佐賀がからむとなると、杉本梨南にも影響が出てくるのは必至だ。

「わかった、詳しく話してくれないか」

「かしこまりました」

今日の前にいる霧島は、明らかに青大附中生徒会副会長のプライドを保っている。

その顔でなぜ、あえて上総の元に情報を届けにきたのだろうか。

——何を考えて、何を企んでいるんだろうか。

上総はゆっくりと霧島を観察することにした。

杉本梨南はひとりでも大丈夫だ。問題は、こいつの方だ。

「まだ藤沖先輩はいらしてないようですね」

いきなりつぶやくように、高慢ちきに。

「僕が生徒会室に戻った時、藤沖先輩が話をしている様子でしたのでお声がけしましたが、どうも様子がおかしいのです」

「内密の話をしていたのかな」

「はい、しかし僕を待ち受けていたようでもあります」

昨日は確か、上総が生徒玄関で霧島を捕まえたはずだ。あの時まっすぐ自宅に帰るつもりではなかったのだろうか。上総が確認すると霧島は首を振った。

「いえ、諸般の事情がありまして」

無理に問うことはしない。促した。

「すでに渋谷先輩が学校を休んでいるという話は先日させていただきましたが、藤沖先輩が側にいていろいろ面倒を見ている点について僕は確認いたしました。すると」

言葉を区切って、唇をぎゅっと絞った。

「藤沖先輩がいきなり僕に土下座をしたのです」

——土下座？

男子同士の差しで勝負する際にはよく使われる「土下座」という言葉。  
しかし霧島のような端正な口許からすべり出る言葉には思えなかった。  
しかも、藤沖が。

「どういうことを質問したのかな」

「つまり、最近渋谷先輩をかばうそぶりを見せるのはなぜでしょうかということと、僕のいないところで佐賀生徒会長を丸め込もうとする行為に対しての疑問を呈したわけです」

噂では霧島が、生徒会長の佐賀をサポートし、実質的な操り者として存在していると聞いている。上総が想像する限り、霧島は自分のいないところで勝手に話を進められることがいやだったのだろう。だがまずは聞こうと思う。霧島の話内容よりも、霧島自身の身振りや表情を観察するために、だ。

「一年前の状況を鑑みると、渋谷先輩と藤沖先輩との間は決して友好的なものではありませんでした。渋谷先輩の能力が格段劣っていたのも事実でしたが、それ以上に生徒会長の藤沖先輩に対して非協力的だったというのがあります。本来でしたら改選の段階で追い出されるべきところを、たまたま諸事情により在籍を許され、いわばお情けで置いていただいた部分が強いのです」

「お情けか」

人のことは言えない。苦い笑いがこみ上げる。だから自分は野に下りたのだ。

「少なくとも卒業の段階では、険悪な関係でした。トラブルに発展しなかったのは、ひとえに僕と佐賀生徒会長のサポートがあればこそでした。しかし、それが」

また言葉を区切った。

「例の事件、つまり修学旅行が終わってからですが、いきなり藤沖先輩は渋谷先輩を誘って帰るようになりました。また僕の厳しい指摘に答えられずに自宅へ籠ってしまわれてからも、藤沖先輩は懸命に渋谷先輩のご自宅へ通われているようです。まるで、難波先輩のように。はっきり言って見苦しいです」

——そういうことか。

なんとなく合点がいった。

——霧島は、自分の姉さんと難波を重ねているんだな。

難波が、卒業間際から現在にいたるまで、霧島ゆいに張り付き、奴なりのやり方で守ろうと努力していることを上総は知っていた。第三者の上総ですらすごいと思うのだ、おそらく家族である霧島にとってはうざったいくらいにその想いを感じるのだろう。

「生徒会にとって、渋谷さんがいなくなったということはマイナスなのかな」

「いえ、とんでもありません」

きっぱり霧島は言い放った。

「プラスです。おそらく年間収支トータルで黒字が出ていることでしょう。まだ年末まで間がありますが、十分すぎるくらい利益が出ているはずですよ」

——すごい表現だな。

どういう道に進むにしても、この歳で経済観念をしっかりとくわえている霧島に上総は感嘆した。

「土下座した内容はなんなんだろう」

「はい、まず僕への謝罪。僕に対して渋谷先輩を許してほしいというお言葉、および今後、任期が満了するまでの間、渋谷先輩を書記のまま置いてほしいという嘆願です」

「土下座しなくても、改選が終わるまでは置かざるを得ないだろう？」

「はい、役員名簿には残ります。しかし、出入りに関してはどうしても参加しなくてはならない場合に限ることが可能です。たとえば全校集会の際などはしかたない、出ていただくしかありません。しかし普段の業務に関していえば、佐賀会長と僕のみで十分回ります。無理に渋谷先輩にいらしていただかなくても結構なのです」

——否定はしないが、そこまでしていいんだろうか……。

実際、去年の評議委員会だって上総がいなくても十分回ったわけだし、霧島の言わんとすること、わからなくもない。だがしかし。

「学校側が許さないだろうし、第一、佐賀さんは友だちを見捨てられないだろう」

「いえ、佐賀会長は女子なのに非常に現実をわきまえてらっしゃいます。一年先輩の佐賀会長に対して言うべきことではありませんが、感情のみで動く愚かな女子ではないことに、僕は感服いたしております」

——感情のみで動く、杉本みたいな女子とは違うというわけか、なるほどな。

上総は霧島の一方的な語りを聞きながら、いくつかの言葉パーツを組み立ててみた。

昨日、霧島に話した通り、「修学旅行おねしょ事件」をこれ以上知る気はなかったし、杉本が無実であるだけで十分だと考えている。

だが、藤沖が渋谷に絡んでいるということと、佐賀はるみがこの事件をどう捉えているかについては若干ながら興味が湧いていた。仮にもかつては杉本の親友だった佐賀はるみだ。生徒会を率いる立場となり、その部下にあたる渋谷名美子の失態をどうやってかばうつもりでいるのか、それを考えると必然、杉本への風当たりも強くなりそうな気がした。

少なくとも今は、杉本と敵対関係にあるはずだ。杉本もその点はわきまえているはずだ。

さらに学校側が事をうやむやにして終わらせようとしているという情報。

もし上総が佐賀はるみの立場だとしたら、どう行動していただろう。

得意のシュミレーションを速攻脳内で行ってみる。

——友だちとはいえ、すでに杉本とは切れたはずの佐賀さんだ。かばう優先順位はおそらく、渋谷さんの方が上だろう。どういう状況にあったのかは謎だが、まずその事実関係を確認した上で、渋谷さんをかばいかつ、できるだけ本当のことがばれないようにするだろう。

ちょうどよいところに杉本というダミーがいたとすれば。ためらうことなく利用するだろう。杉

本は運悪く疑われてもしかたない立場にいるわけだし、学校側も生徒会役員の恥よりは、学校を出て行く予定の女子を辱める方を選ぶだろう。特に問題が起こらなければ渋谷さんは高校も青大附属のままでしょうし、しくじりを延々と囁かれるのはごめんだらう。

しかし、霧島がすでに情報を得ていて、事実をきっぱりと告げている以上、渋谷さんに逃げ場はないはずだが……？

「霧島、ひとつ質問していいか？」

シュミレーションをし終えてすぐ上総は質問した。

「十分過ぎるほど証拠が揃っているのにまだひっばっているのはなぜなのかな」

「はい、昨日お話した通り学校側の対応がうやむやにしたがっている傾向ありということでしょう。なんでも藤沖先輩の話によれば引きこもったままの渋谷先輩はさまざまな問題を起こしていらっしゃるようですし」

鼻をひょいと上に向け、笑う。

「対応を間違えたら何を起こすかわからないという危惧もあるのでしょうか。うちの姉が愚かな行為をしでかしそうになったのと同じくですが、人を刺したりなんなりされたらたまったものではございません」

——西月さんの件を指してるのかな。

頷いたまま聞いていた。

「とにかく、藤沖先輩はかつての堂々たる態度をかなぐりすてて、恥も外聞もなく僕に対し、嘘で情報操作を行うよう頼み込んできました」

「情報操作だと？」

「そうです。今のうやむやな噂で留まっている状況をもっとはっきりさせてほしいということです。僕が昨日立村先輩に対しお話したのはその点であります。つまり、杉本先輩が夜尿症事件の犯人であり、渋谷先輩は噂で傷つけられた被害者である凶を僕にこしらえるよう頼み込まれたのです。どう思われますか、立村先輩？」

気品ある無表情、その瞳の奥に何かが揺れている。

上総はよっかかっていた背もたれから離れ、霧島をじっと見据えた。見つめあう形になる。

「杉本を意図的に、犯人に仕立て上げるというわけか」

「その通りです。藤沖先輩の言動については僕も以前よりアンテナを張ってましたが、直接こういう形で動き出すとは思ってもみませんでした」

自分の右手がゆっくりと握り締められていくのがわかる。

身体が熱くなってゆく。喉もとに何かがこみあげる。

「それが昨日ということか」

「はい」

霧島の言葉に揺るぎはなかった。

——藤沖は、そんな奴じゃなかった。

去年の秋、生徒会改選直前の杉本梨南を巡るトラブルが元で袂を分かった間柄。

それまでは穏やかな交流が互いに続いていた。

上総が評議委員長に指名される前から生徒会長をしっかり務めていた藤沖は、教師からもまた全校生徒たちからも信任が篤かった。応援団志望の硬派野郎だけに、どうしても男尊女卑的発言が目立つこともあったが、決して人を噂のみで片付けようとはせず、勝負をしようという奴には正々堂々立ち向かうべくエールを送る男でもあった。

縁を一方的に切られても、上総は決して恨まなかった。

むしろ藤沖の判断が正しいとすら思った。

——俺のような卑怯者は嫌われて当然だ。

四月からは英語科の同級生となり、かなり居心地悪い環境下ではあったけれども、評議委員としていろいろ戸惑うところの多そうな藤沖を、上総は密かに応援していたつもりだった。評議委員としてのしかかる責任は、おそらく生徒会長とは別個のものだろう。同じ比率では比べられないけれども、全く未知の世界、苦勞もあっただろう。

相棒にあたる古川こずえを通じて、少しでも楽な道が見つかるよう助言していたつもりだった。こずえならば嫌味なくあっさり、藤沖をサポートできただろうし、これからもそうだろうと安心していた。

外部生の関崎とコンビを組んで日ごろ行動している姿も見つめてきた。

関崎のためにも、おそらくベストな組み合わせだろう。

藤沖が関崎の持つ真っ正直な気性を好むのも、当たり前すぎる事実だと思えた。

自分がどういう扱いをされるにしろ、決して上総は藤沖の言動を憎く思ったことはなかった。

たった今までは。

「霧島、藤沖は渋谷さんと付き合っていたということか？」

「言葉では確認が取れませんでしたでしたが恐らくそういう形になるでしょう」

「だが、今までは犬猿の仲と聞いたけれどな」

「僕もつい先だってまではそう思っておりました。しかし」

こぶしをこしらえ、数回揺らすように振った。

「藤沖先輩は強きを挫き弱きを助く、をモットーとされてます。今までの渋谷先輩は不快感漂うほどの強さをアピールしようとする女子でした。九十九パーセントの男子は嫌悪を感じていたはずですが、しかし、例の事件をきっかけに弱い立場へと移動されたので、藤沖先輩もいろいろと考えるものがあつたのかもしれませんが、僕にはそれ以上の判断はつきかねます」

「そういうことか」

だいたい読めた。

つまり、藤沖は惚れた女子のために身体を張ったというわけだ。

硬派の藤沖なら考えられなくもない。

だが、しかし。

——その一方で杉本を生贄にするというわけか。

今、霧島が語っている内容を加味する限り、藤沖は佐賀はるみと組んで何らかの行動を起こそうとしているようだ。反・渋谷派……と勝手に命名してしまう……を自認する霧島に対し土下座して許しを乞うならまだわかる。霧島のやり方も決して褒められたものではない。一種のいじめと言われても否定できないだろう。

しかし、たまたま疑われている立場の杉本を利用して、罪をなすりつけるように頼み込むというのはどういうことだろうか。まだ確認が取れていないことだし判断は難しいが、佐賀はるみが杉本梨南のことを頭の隅において話し合いをしたことは明らかだ。その上で出た結論だとすれば、佐賀もまた、杉本を犠牲にしようとして企んでいることにある。

仮にも、かつては自分の親友だった女子をだ。

どの方向から見ても、許されることには思えない。上総が杉本梨南を特別の存在として見ていることをとっぴらっても、正当とみなすことはできない。

また佐賀がからんでいなかったとしても、藤沖の頼みごとというのは倫理に反している。

自分の想い人を守るため別の女子を犯人に仕立て上げて、それを生徒会の承認つきで学内に広めろというのが、どうして正々堂々たる正義と言えるだろうか。

——杉本を心の底から憎んでいる新井林すら、NOと言うはずだ。

「霧島、新井林にこの話はしたのか？」

「いえ」

あっさり答えた。

「佐賀生徒会長の立場を考えてあえてお話しておりません。もともと話す機会を無理に作りたいたとも思いません」

感情を無にした平べったい口調のまま霧島は目を逸らした。

——このままでは、藤沖と佐賀生徒会長とのたくらみに杉本が飲み込まれる。

この事件を聞いて後、上総のスタンスは「遠くから杉本梨南を見守る」に定めていた。

しつこくべったり守ることは、いわば過保護。

東堂の桜田さんに対する行動を見て、我が振りを見直した。

同時に杉本の強さをさまざまな場面で感じ、

——杉本は守られるよりも、自分に能力があると認められたいタイプなんだ。だから、俺はその証拠を杉本に渡すのが使命だ。杉本にはそれだけの力があるという事実を、伝えたい。

そう判断しあえて仔細を聞き出すことを避けていた。

風の噂も七十五日。杉本の堂々たる態度にいつしか相手は負け、真実は明るみとなるだろう。隠しつづけた渋谷の卑劣さだけが引き立つ結果となるだろう。心配していなかった。

しかし、この一件に生徒会および藤沖がからんだとしたらどうなるだろうか。

——少なくとも杉本は、佐賀さんにはかなわない。最初から勝負がついてしまっている。

杉本がずっと憧れつづけ、なりたくてならなくて、結局相手にしてもらえなかった存在、それが佐賀はるみだ。いじめという呼ばれ方をしたけれども、あれは杉本の惨めなまでのラブコールに過ぎない。それを見抜いた佐賀はるみと新井林健吾は勝負をさっさとつけて、リングから下りた。もう二度と、その力関係が逆転することはないだろう。杉本もそれを理解しているから、一切あの二人にはちょっかいを出そうとしない。別の場所に安らぎを見出した……まあそれが、不良少女の桜田さんというのは考え物だが……わけだ。

距離を置いてなんとか小康状態が続いている関係。しかし、もし本気で佐賀はるみが杉本を叩きのめすとしたら、もう手も足も出ないだろう。藤沖の頼みごとと、同じ生徒会内の役員である渋谷との友情関係を背負って勝負に出たら、もう杉本は浮き上がれない。

杉本梨南のアキレス腱を知りつくしている、それが佐賀はるみの強さ。

これからどう出るべきだろうか。

上総は霧島の、つんと済ました王子様面を見つめつつ、次の一手を考えた。

もちろん上総としてはこのまま杉本が溺れていくのを見捨てる気などさらさらない。

もう少し情報を集めたいところだが、確信が得られた段階で逆襲は当然行いたい。

幸か不幸か、企み人のひとりである藤沖とは絶縁状態だ。友情を復活させる気持ちさえなければどんな手でも使える。また、渋谷が生徒会役員としてさんざん杉本を馬鹿にしていたことも、これまた風の噂で聞いている。ならば、哀れみかける必要などない。

藤沖と佐賀がどういう形で杉本に濡れ衣を着せようとするのか。

まずはこの一点を調べ尽くさねばなるまい。

しかしその前にもうひとつ、片付けなくてはならない問題がある。

目の前にいる、霧島だ。

呼びかけた。

「霧島、なぜ俺に、こんな重要事項を話してくれたんだ」

「お知りになりたいでしょうから」

すまし顔で霧島は答えた。姉によく似た形のよい唇と二重の瞼がよく動いた。

「今日の話には感謝する。俺のずうずうしい願いをよくぞ聞いてくれた」

上総は霧島の目をじっと見つめた。それが礼儀だった。

「だけど、これ以上、青大附中の生徒会副会長を脅迫する気はないんだ。もし例の件が尾を引いているのなら、もう忘れていい。もうなかったことにして、知らん振りをしていいよ。俺も二度と話すことはないから」

「脅迫ですか」

ひとりごちた霧島。「脅迫」が何を意図しているのか、上総にはわからなかった。

「最初から脅迫する気はなかったけど、そうなってしまったな。ごめん」

「何をおっしゃるのですか」

少し気色ばんだ霧島に、さらに上総は戸惑った。全く反応が読めなかった。

「僕は立村先輩に脅迫されてお話ししたのではないと、先日も説明したはずです」

ぴんとアイロンの掛かった、生地よさそうなワイシャツの襟を撫でながら霧島は言い放った

。

「僕の方からぜひ、先輩のご協力を得られればと考えただけです」

「俺の協力？」

「そうです。立村先輩ならば、今の僕と同じ目的でもってお話ができるのではと考えたからです」

「なんだその、同じ目的とは」

問い詰めた段階で上総にはなんとなく、その意図がつかめてきた。

——利用しようとしていたのは、霧島、こいつの方からか！

「僕は、渋谷先輩にこの一年近くしつこく付きまとわれておりました」

口を切った霧島に、上総はそっと目を逸らし耳だけ澄ませた。

「嫌いな女子とはいえ先輩である以上、礼儀は保たねばなりません。生徒会役員を考えていた僕は、彼女のしつこさに閉口しつつも我慢すべきところは耐えようと心に決めて、改選に望みました。しかし、その後も渋谷先輩はことあるごとに僕へちょっかいを出しつつ、時には佐賀生徒会長にも注意されつつ、生徒会内を荒らしていたのです」

——確かに女子に人気があるのなら、当然かもな。

その顔ならば、と頷く。

「今回の一件で渋谷先輩が生徒会室に来なくなり、まず最初に感じたのは空気の清浄さです。苦手な先輩がいなくなると部屋が広く感じるというのも確かにありますが、話す言葉が自然に伝わるようになるのです。誰も誤解をすることなく、自然にです」

感覚としてはわかるような気もする。論理的な言い方が得意な霧島にしては珍しく、情緒的だ

。

「それはともかく、僕は人間として藤沖先輩の汚いやり方を許す気はありません。立村先輩は生贄にされそうな杉本先輩を守りたい。利害は一致しているはずですよ」

「いや、利害と言われても」

口籠もる上総に畳み掛けた。

「巷では僕の行為が女子に対するいじめだと言う人もいます。それは否定できません。また生徒会役員として追い出そうとも思っていない。ただ、藤沖先輩のやり方の汚さには正直吐き気がします。渋谷先輩への嫌悪感とは別として、何も知らない佐賀会長を丸め込み、別の人を犯人に仕立て上げようとするやり方でもって守ろうとするのは、お門違いに思えます」

「確かにそれはそうだ」

「結果として渋谷先輩が生徒会室に戻ってきたとしても、きちんと濡れ衣を着せようとした罪を償う意識を持っているのなら、僕は苦痛を耐え忍ぶ覚悟があります。きちんと彼女を受け入れて任期まで務めます。僕の目的は、きちんと罪を償うべき人間が、きっちり罰を受けてもらう

こと、一点に尽きます。それにより杉本先輩も守られますし、立村先輩の目的も達成されます。お互いにメリットがあるのではないですか」

勝ち誇った風に語るのは、かつて生徒会室で見かけた姿と一緒になのだが、どこかひっかかるのは時折びくっと上総の顔をうかがうように首を傾げるところだった。通常なら先輩としても腹立ちそうな内容を語っているのだが、時々素の表情が顔を出す。思わず本屋で泣き出してしまった時と同じような、不安げな顔が。

「霧島、お前の言うことはよくわかった。だが、これ以上俺と話をしているところを見られると、いろいろ立場が難しくなるんじゃないか」

上総が一番心配しているのはその点だった。

「何度も言う通り、無理に俺へ情報を持ち出して、引け目を感じる必要はないんだ。俺がこの点については切り出し方がまずかったと本当に反省している。こういう情報を要求することがそもそも間違いだったと思う。心配してくれている杉本の件については、今の情報をありがたく頂いて、あとは俺ひとりでなんとかするつもりでいる。決して霧島が出所だなどと言うつもりもない。あとはもう、知らん顔して、何もなかった風に振舞ったほうがいい」

「なぜですか？ なぜ、そんなにご自分を卑下されるのですか」

霧島の切り返しに息が詰まる。

「英語科の教室には藤沖先輩もおられました。すでに僕が何を目的で立村先輩と話をしていたかは、藤沖先輩もお気づきでしょう。それは承知の上です。一種の宣戦布告です」

そんな大袈裟な話になっていたのか。驚く。

「僕は人を見る目がある方です。姉を代表とする愚かな女子や低レベルな男子たちに囲まれて育ったせいか、否応なくその目は磨かれたものと思われます」

「それは言い過ぎじゃないか」

言い返しつつ思った。霧島、同年代の友だちいるんだろうか？

「今朝は僕の意味で先輩の下に参りました。お伝えしたいことはそれだけです」

しゃちほこばって言い放った後、霧島は腕時計を覗き込んだ。そろそろ校舎に戻らないとまずいだろう。

「では、土曜日にまた参ります。それとあの」

上総が言葉を捜しあぐねている間に霧島は小声で呟いた。

「本は、まだ、いいです」

そこまで言った後、霧島は深く一礼し、全速力でグラウンドを駆け抜けていった。

——何かを俺に伝えたいというのはわかるんだ。けどさ。

上総は暫く見送り、ゆっくりと高校校舎へ歩き始めた。高校校舎には二分もあれば戻ることができるので焦ることもない。ただ霧島が、時間のかかる中学校舎へ早朝わざわざやってくるとは思わなかった。決して呼び出したわけでもないのに。ましてや、

——もう気を遣わなくたっていいのに。

取引という言葉を使うべきではなかった。上総なりに霧島を楽にしてやろうと考えて使った「取引」だけでも、本人には反対にくびきとなったのだろう。もちろんそこで得られた情報についてはありがたく利用させてもらうけれども、これ以上霧島に「エロ本を見られた口止め料」としてその後の生徒会だよりを聞き出すのは、果たして許されることだろうか。

——俺も藤沖と同じことをしている可能性がある。

もし戦うとするならば、それは上総が杉本の背後に回って守る形になるだけのこと。

他人を巻き込む気はさらさらない。

ましてや霧島は、生徒会副会長。とんでもないしくじりをしてかして追い出された元評議委員長とくっついているわけにはいくまい。冷静に考えればそうだろう。

——でも、霧島はまた来るとか言ってるぞ？

——自分の意志でとか言ってるし。

渋谷をかばう藤沖と一緒に叩きのめしたい、それだけが目的なのだろうか。

わからなかった。上総はA組の教室の前に立った。まだ生徒たちは廊下でたむろいうろろしている。関崎の笑い声が教室の奥で聞こえた。と、同時に

「立村」

深く、濃い声がした。

振り返るとそこには、たった今から敵へと立場を変えた、藤沖がいた。

いかつい顔は相変わらずだが、目がうつろだった。

上総に話し掛けたのは、卒業式直前以来だろうか。

「何か？」

そっけなく答えた。

「さっき、青大附中の霧島と話していたな」

「話したけど、それが」

また片手こぶしをこしらえたくなった。今度は霧島のポーカーフェイスを上総がこしらえるはめになった。藤沖の表情は固かった。先に教室へ入ろうとする上総の腕を引きとめた。

「すべてを聞いたんだろう」

「何のことだ」

わざと冷たくあしらった。霧島が危険を冒して内部事情を教えてくれたことを、そう簡単に話すわけにはいかない。たとえ「宣戦布告」であろうとも、男同士の約束を破るわけにはいかない。

。

「一度、きちんと話を聞いてくれないか」

「断る」

隣からずっと古川こずえが「おっはよ！」と上総の頭と藤沖の股間を触って去っていた。そんな下ネタすらも反応できない。

「事情を説明させてほしい、もちろん、俺の身勝手だとわかっているんだ。だが」

「時間がない。先に失礼」

苛立ち思わず、真正面から藤沖をにらみすえた。腕を振り払い、背を向けた。

上総は背を伸ばし、自席に着いた。握り締めたままの片手をゆっくり開き、手のひらのくぼみに目を落とした。杉本梨南のくれた、千代紙細工の指輪の握り心地を甦らせた。

机の奥にしまいこんだ小さな千代紙細工、誰にも壊すことは許さない。

宣戦布告は、すでに終わっていた。

話すことはない。動くだけだ。

「立村、少し時間をもらいたい」

「断る」

あっさりとその一週間、上総は藤沖を交わしていた。間に球技大会が入ることもあったが、そんなこと関係なかった。自分の与えられたポジションを適当に守り、あっさりと終わらせることに専念していた。藤沖、および関崎とは別の種目だったこともあり、あまり接することはなかったように思えた。しかし、藤沖のアプローチはしつこかった。何度振り切っても、めげずに迫ってくる。

最初の三日くらいは藤沖も、少し踏ん反りかえった感じで上総に接して来ていた。やはりいきなり腰を低くすることに抵抗があったのだろう。しかし上総が一切態度を変えずにいると、いろいろ察したのだろう、頭低く近づいてくるようになった。

「霧島からいろいろ話を聞いているとは思うのだが、頼む、俺の方の事情も、話だけでも聞いてくれないか」

「俺は聞きたくて聞いているわけではない」

上総は突っぱねた。実際その通りなのだ。

霧島が「土曜日の放課後に」と約束をしたにも関わらず、待ちきれずに次の日、また次の日の朝と顔を出すようになり、しかたなく上総が相手をしているだけのこと。それも例の事件の話とは別に、最近霧島家の事情について頼みもしないのに語り始める。球技大会の当日もわざわざ現れたのには上総も驚いたが、

——きっと、後腐れなく話す相手がいないんだな。

そう察して、黙って受け止めることにしていた。

だが、それはわざわざ上総が聞きたくて聞いているわけではない。

藤沖が話すことといえば、渋谷名美子をかばうゆえのごたごただろうし、すでにそれは霧島から聞いている。霧島はもちろん偏りのある判断を下しているだろうが、同じことは藤沖にも言える。またどちらの観点からいっても、割を食うのは無実の杉本梨南であることが証明されている。上総のすることは、杉本梨南の正真正銘の無実を証明するだけであって、その後の生徒会内紛にまで口を出す気はさらさらない。

昼休みだった。だいぶ天気が持ち直してきた。先日まで少し雨が続き、球技大会中はどろんこサッカーをやらされたチームもあると聞く。

C組に向かおうとした上総を捕まえ、藤沖は再びくどきだした。

「俺は生徒会OBとして、これ以上の混乱を押さえる義務がある。もちろん、そのためにできるだけのことはするつもりだ。ただ、これ以上話が大きくなると、ただの生徒会内紛では済まなくなる。そのために、なんとかしたいんだ、頼む立村。まず話だけでも」

「女々しいな」

いらいらしてくる。思わず毒のある言葉を口走ってしまう。

今、目の前にいる、卑屈な態度ばりばりの藤沖を、どうにかして追っ払ってやりたく思う。

「話を聞いても、俺は態度を変える気などない」

「今までのことは、俺が悪かった。だから」

いきなり謝りの言葉が飛び出し、ぎよっとする。足が止まる。上総は静かに藤沖の手を外した

。

「藤沖、謝る必要はない」

「立村？」

「例の件で俺に腹を立てたのは正しいんだ」

「いや、俺は」

言いかける藤沖をぴしゃりと黙らせたかった。

「同時に俺が、あのことで考えを変えないのも正しいと思う」

「それは」

「言いたいことは以上だ」

さらに問いかけようとする藤沖を振り切り背を向けた。C組連中を捕まえてだべろうかとも思ったが、やめた。

球技大会にかまけて、忘れていたことがある。これをやらねばまずいだろう。

上総は高校校舎をまず出ることにした。すがりつくような藤沖など、振り返る気もなかった。

昼休みは二十分間。その間に高校と中学と往復するのはかなりぎりぎりラインだった。

——杉本、いるかな。

まずは全力で走りながら考えた。

——最近顔を見てないから、向こうが心配してくれてるんじゃないか。

まずありえないことも考えた。杉本とは霧島の訪問に伴い、どうしても顔を合わせる時間が取れなくなってきている。さすがに今のところ霧島は、放課後近づいてくることはない。仮にも生徒会副会長たるもの、放課後を自由時間にはできないらしい。いったい上総と先日「おちうど」でお茶した際は、どういう言い訳をして生徒会室に戻ったのか、気がかりなことではある。

——藤沖がどういう一手を打ったのかはまだ確認取れていないが、霧島が跳ね返したのは事実だろうな。それにうちのクラスへしよっちゅう顔を出しているのも、威圧条件になるだろう。

校舎を挟む林を抜け、急ぎ早に中学校舎へ向かう。すれ違いになぜか東堂と顔を合わせた。同じく時間を見つけては中学校舎へ走っていると噂のある御仁だ。

先日の、少し違和感あった対話を思い出しつつ、

「東堂」

声をかけた。グラウンドの入り口で足を留めた。

「立村も、用なのか？」

この前、貴史が美里の件について話をしたというはずだが、その件について問い合わせる暇はない。

「ああ、そうだ」

簡単に答えると東堂は頷いた。

「お兄さんとして、手のかかる妹を持つと大変だねえ」

これには答えないでおいた。東堂以上に苦勞をしているとは思えない。

「おたくの妹さんは、今、グラウンドにいるよ。鉢巻しめてる」

「五時間は体育か」

「そういうこと、じゃあねえ」

最後はやっぱりおちゃらけて林へもぐりこんでいった。めがねが随分曇っていたように見えたのは、別に空の雲が映ったわけではないだろう。どうでもいいようなことを思った。

——体育か、ならすぐ捕まるな。

方向転換をしつつ、まずは広いグラウンドを見渡した。わずかの休み時間を利用してサッカーしている連中に敬意を表しつつ、上総はまず、女子たちの群れを探した。杉本の所属するクラスはB組だから、AB組合同での活動となるだろう。この時期外で行う種目となると、ハードルとか走り幅跳びあたりだろうか。

杉本がやっぴいそんなことを頭の中で探す。

まず、一般的な女子たちと違い、いわゆるおしゃべりにうつつを抜かしているとは思えない。頼まれもしないのに用具を準備したり、ひとりでアキレス腱を伸ばしているようなことをしているのが杉本だ。そういう姿を探した。

——おそらく、あれだな。

すぐに発見した。上総の読み通り、杉本はひとりで白線引きチョークを引っ張り出し、もうひとりの女子と一緒に丁寧に引きなおしていた。どう考えても自主的な行動であって、教師の指示ではないだろう。お付き合いしてくれる女子が万が一佐賀はるみだったらどう行動すべきか少し迷ったが、幸い全く関係ないようだった。

上総は近づいた。気がついたのは杉本よりも先に、隣の女子だった。同じ白のポロシャツに、膝近いスカート風の青いショートパンツ。身体のラインは露骨に出ない格好だった。

「杉本さん、ほら」

先輩なんだから礼のひとつくらいでも、とも思うのだが、そんな気遣いは無用のようだ。

「立村先輩ですか」

杉本はそっとチョーク引き道具を足元に引き寄せ、ゆっくりと尋ねた。ポニーテールを高く結い上げた姿は今まで通りだった。

「それ以外誰に見える？」

「何か御用ですか」

いつものように、棒読み口調だった。全く変わっていない杉本梨南だった。

上総は腕時計を軽く持ち上げて目で追った。まだ五分弱残っている。高校校舎へ戻るならまだぎりぎりなんとかかなりそうだ。次に空を見上げると、慣らされた雲の間から鋭い光が濃い影をこ

しらえつつ射していた。熱中病にならないですみそうな、ぎりぎりの暑さだった。

「これから何やるんだ？ プールじゃないのか」

「はい、ハードルです」

「じゃあこれからハードル運ぶのか」

「お手伝いいただかなくて結構です」

そんな暇なんてない、と言いかけるが、その言葉自体が無駄と知る。時間がないのだ。

「いやさ、言いたいことあったから」

「今でなくてははいませんか」

どうやら杉本は律儀にも、ハードルを体育器具室から運んでこようと考えているらしい。

「先生から指示されたのか？ お前一人でやれって」

「いえ、私がやるべきと判断したからです」

「別にいいだろ。他の人も手伝ってくれるからさ」

授業中によほど指示を出された時でなければ、上総たちの頃は一切手を出したりしなかったのだが、杉本は唇を不満げにひねった後、上総に言い放った。

「お時間はあとでよろしくお願いします」

「いや、今でなくちゃだめなんだ」

上総は近づいた。隣で「杉本さん、いいよ、私代わりにやったげるよ」と囁いている桜田を見た。どうやら彼女はA組らしい。左胸に刺繍された校章ワッペンの下にAの文字があしらわれていた。

「すぐに終わる。君もそこにいてくれないか」

「へええ？」

桜田がぼかんとしながら、それでも杉本から線引き用具を受け取った。並んでみると体育着の上半身だけやたらとふっくらしてみえる杉本と、その足の細さとが際立っているのがよくわかった。それなりに全体に肉感ある桜田とは違う、人形っぽさに目が戸惑った。

「桜田さん、君は杉本の親友だろう？」

「はあ？」

まともな会話を上級生と話すことに、どうやら桜田は慣れていないようだった。上総の問いかけにも、ただにやにやするだけで言葉を返そうとしない。東堂はどういう風にこの女子と話をしているのだろうか、心と疑問を覚えた。

かまっている暇はなかった。杉本に向き直り、一步近づこうとしてやめた。やはり、胸のふくらみがTシャツ素材のものだと目立ちすぎるのが目に毒だ。全く意識していない杉本は軽くふたつの丸いくだもののようなものを、正面立つ拍子に揺らしていた。

「この前話したことなんだけどさ、杉本」

視線を口許に向けた。

「事情が変わった。例の修学旅行の濡れ衣の件んだけどさ」

今度は桜田を見た。訳のわからない顔をしていた桜田だが、いきなり目が真剣になったようだ。大きく頷いた。よしよし、やはり杉本の味方になってもらえそうだ。

「この前俺は、余計なことを言わずに噂を七十五日メにしておけば大丈夫だとか、わけわからないことを言ってしまったけど、取り消す」

「何を取り消そうとおっしゃるのですか」

言葉は棒読みのみまだけど、かすかに険しいものが混じった風に聞こえた。その杉本を訝しがるかのように背後へ、同じ青の夏体操服姿の白い脛を出した女子たちが群れ始めた。

上総が杉本に話し掛けている時から、集団の気配に気付いてはいた。

最初は二、三人程度だったが、やがてA、B組あわせてだろう、ほぼ二十人以上の女子が取り囲み始めていた。

女子がそれだけ集まっているということだから、副産物の噂、ひそひそ話もたんまりと。

上総はその女子たちをぐるりと見渡した。B組には佐賀はるみがいるはずだ。杉本を傷つけるな、とばかりに割って入れられないうちに帰るつもりでいた。しかしこれは神の配剤。またとないい好機。運が巡ってきた。

——ギャラリーが揃ったな。佐賀生徒会長もいる。

今、上総は杉本梨南と一対一。何も怖いものはない。

「杉本。最後の確認だ」

自分が知りたいからではない。杉本梨南を遠目に眺めている彼女たちに見せるための演出だ。杉本は真正面から頷いた。

「はい」

「お前、修学旅行四日目の夜に、ふとんに地図なんて、描いてないよな」

「当たり前です」

ごくごく自然に、杉本は言い切った。隣で桜田が、

「そうよ、私が証人になるよ！」

きっぱり第三者として証人の名乗りを挙げた。どういふことなのか調べておきたい気もするが、今は時間がない。また次回にしよう。

「証拠も、証人も揃ってるってことだな」

「はい。その通りです」

凜と、杉本梨南の声が雲を割った。

雲間より光がこぼれんばかりにグラウンドへ注がれた。

ギャラリーのざわめきが、ぴたりと止まり、ふたたび揺らぎ出した。もう一度上総はギャラリー一たちの面々を比べ見た。やはり佐賀はるみの姿が後ろから見えた。さすがに割って入ってはこなかったが、上総と杉本との対話について情報を他女子から得ている様子だった。面倒なことになるのはいやだ。退散しよう。

「以上だ。あとは任せた。いざとなったら俺も助太刀する。それと桜田さん……だったっか」

札付き不良少女にしてはちんまい感じの女子だが、確かに身体つきに他の女子とは違った雰囲気を感じた。うまく言えないのだが、ある種の「経験」によって得ているなまめかしいにおいと

いえばいいのか。身体つきの具体的な要素だけあげれば杉本の方がかなり胸のふくらみなどすごいものがあるのだが、それとはまた別の「何か」がある。

桜田はまた、上総の顔を真面目に見上げた。言葉は出てこないようだが、感じるものは確かにあったらしい。上総の心中で蠢いていた疑念のようなものも、さっきの証人出頭発言により払拭した。要は杉本の味方であればそれでよい。杉本の友だちを勘繰ることは、人をみる目を疑うこととイコールであり、すなわち杉本梨南を見下すことと同じである。

「今のこと、東堂に話してかまわないよ。隠すことでもなんでもないから」

「話すけど……？」

敬語を使おうとしない人なのだと、上総はあっさり納得した。時計の針はあと一分。もう授業にはまにあいっこない。ならば、言うべきことはすべて言い切って去ろう。

「杉本、いいか」

今度は一切他の連中を視界にいれず、杉本だけをじっと見つめた。はっと杉本が息を呑む気配がする。何か上総の顔に浮かんでいたものがあったのか。

「俺が許す。生徒会だろうが教師だろうが、とことん戦って来い」

「立村先輩、私は」

言いかけた杉本を遮った。きっと杉本はまだ、渋谷名美子ひとりを相手にすればいいと思っているに違いない。だったら一対一で話せばわかると信じているかもしれない。しかし、見えないところで糸を引き出した奴の存在を見つけた以上、奇麗事ではすまない。

「濡れ衣着せようとする連中は遠慮なく叩きのめせ。お前にはそうする権利がある」

「立村先輩、それは」

「あとでまた、詳しいこと話す」

遠くで高校校舎の鐘が鳴っているのが聞こえたような気がした。実際はよっぽど静かでない限り聞こえたりしないのだが。時計はちょうど休み時間二十分の終了を終えた時刻を指していた。上総は杉本にもう一度眼差しを送った。

「立村先輩」

ふたたび杉本が上総を呼び止めた。隣の桜田がなぜか手を小さく振っている。

「どうした」

「戦ってよいのですね」

言葉が震えていた。

「そうだよ」

「ありがとうございます」

上総は振り返った。ゆっくりと杉本が、「きょうつけ」の格好できちんと一礼をした。

その日の放課後、上総は古川こずえと関崎乙彦に待ち伏せられた。

大学の英文科講義に出席し、担当の大嶋教授と少しだけ話をし、全く関係ない霧島のことを考えていた時だった。完全に頭の中はお留守だった。

——「グレート・ギャツビー」において「僕」に対してどうしてギャツビーはあんなに執着し「僕の親友よ」とか呼んで呼びかけたんだろう？ ただ二言、三言パーティーで話をしただけなのにだ。もちろん利害関係として親戚筋のデイジーとのコネ作りもあったのかもしれないけれども、どうしてあんなに「僕」に対ししがみつくなければならぬ必要があったんだろう。少なくともギャツビーが殺されて葬式が行われるまでは、彼の友情というものははっきり伝わるものではなかっただろうし。

そんなことを何気なく教授に尋ねた。別に何か意味があるわけでもなかった。たまたま講義の合間にフィッシュジェラルドの「グレート・ギャツビー」を取り上げられていたからだ。中学時代からこの作品は上総にとって特別な意味を持つ物語だったけれども、どうして「僕」にギャツビーが拘るのか、どうしてひとりでいられなかったのか、そこだけがどうしてもわからなくてひっかかっていた。なぜ、「僕」はそこまで好かれたのか？

「立村くん、人を好きになることには同性異性関係なく、理由はないのですよ」

上総の質問を穏やかに聞いていた大嶋教授は、短く、しっかり答えてくれた。

「会った瞬間に自分と引き合うものがあれば、その瞬間『オールド・スポーツ』となるのですよ」

ということは、今朝もしつこく通い詰めてきた霧島の言動も、上総のことを「オールド・スポーツ」として認識したからなのだろうか？ 何か意図的に近づいてきて、藤沖や渋谷を陥れるためだけにしては、ずいぶんまとわりつきすぎる。彼の恥ずかしい過去……キャリアOLの写真集で鼻血を噴いたこと……を隠してもらうにしても、上総のほうからそんな必要はないとしっかり説明したにも関わらず、こうしてくるのだから、なんらかの意味があるのではと勘繰らずにはいられない。しかも、霧島家の事情まで頼みもしないのに語り出すとは、ますますわからない。すでに上総は、霧島ゆいのその後の痛々しい高校生活から、現在の親友の名前、およびどれだけ霧島と母親が姉の愚行によって迷惑を被ってきたかまで知っている。しかもまだ、彼には話すべきことがあるらしい。

全くもって、理解ができない。

——俺がなんらかの形で、霧島にお膳立てしてやる必要があるんだろうか。

「グレート・ギャツビー」の一場面で、「僕」がギャツビーとデイジーを再会させるため場所を提供したようなものを、だろうか。

理屈っぽく考えてみても頭が痛くなるだけ、わからない。また明日も来るだろう。黙って話を聞いて頷くのが一番なのかもしれない。思えばギャツビーの語りを「僕」は作中、ただ黙って聞いているだけだった。それが今の上総のしてやれることなのかもしれない。

とりとめなくも考えつつ上総は大学の校舎から出た。まだ空は明るかった。学生食堂で何か食べて帰ろうか、それとも体育館で羽飛のバスケ稽古風景でも眺めてようか。誰か友だちがいればその場で一緒にどこか街を彷徨ってもいい。どうせ期末試験の勉強なんて、英語しかする気がない。

薄い夏用のジャケットを羽織ったまま外に出ると、自然とじんわり汗が滲んでくる。寒がりの上総であっても、さすがに初夏の気配は身体に繋がってくる。

校舎内と外との温度差に目眩を感じたとたん、校門から誰かが走りよってくるのが見えた。

青大附属高校の制服で、二人組。

——羽飛と清坂氏か？

立ちすくんだままじっと見据えてみる。違った。美里とは違い髪の毛の短い女子だった。貴史とは違い、男子はもっとがっちりした体型だった。

近づいて来たのを見て、まず女子が古川こずえであることを確認した。

上総の片腕に飛びついてきた。相手を間違っているんじゃないかとおっこんでやりたいが、そんな軽口叩くような目つきではなかった。

「古川さん？」

「黙ってな。あんたに少し話があるんだから。それと」

こずえは顎でもうひとりの男子を呼ぶように合図を送った。

「関崎、か？」

「そうだよ。何の話か、わかってるよね、立村」

——藤沖の話が流れてきたのか。

予測していなかった自分が甘かった。単なる下ネタ女王ではない古川こずえ。現在一年A組の女子評議。かつ藤沖の相棒役。ともなれば例の修学旅行事件についても小耳に挟んでいるのは当然。

さらに関崎が絡んでくるのも、全く想像できないことではない。

——藤沖と関崎とは親しい間柄だ。気付かないわけがない。

つまり、上総はいつのまにかこずえと関崎を敵に回した可能性があるということだ。

藤沖ひとりを相手にするだけならば、一対一の勝負でけりがつく。

しかし、このふたりがからんできては……。

——落ち着け、まずひとつひとつ片付けていけ。

上総は自分に言い聞かせた。片手で抱えた英英辞典がどっしり重く感じた。

黙って関崎乙彦に目を向けた。

関崎は上総を、いつもの生真面目な表情でもって見返した。まず息を整え、「立村」と呼びかけてきた。

「言っとくが俺は事情がよくわからん。だが、話を聞いた上でお前が正しいと判断したら、すぐに味方につく。それだけは信じる」

——どこまで事情を知っているんだろうか。

天羽たちが杉本におけるねじまがった噂を聞き知っていたことを考えると、外部生であっても関崎が知らないとは考えづらい。もしかしたらこずえから情報を得ているのかもしれない。このあたりの事情は正直まだわからない。

「味方、か」

皮肉っぽく呟いた。気付いていないらしい。

「たとえ古川相手でもだ」

ふくれっつらでこずえが関崎をにらみつける。すぐにその視線を受け止め、関崎はすぐに質問を投げかけた。

「古川、事情をまず聞かせてくれ。その上で俺は、どちらの考えに与するかを判断する」

「あんた、私に協力してくれるんじゃないか？」

「俺は結局、お前からも立村からも、それと藤沖からも事実を聞かせてもらっていない。判断材料が少なすぎる」

——どこまで情報を集めたんだかわからないな。

ふたりの会話を注意深く聴きつつ思案した。関崎がなぜ、こずえと一緒に現れたのかその理由がまず判然としない。共通項は藤沖とよき繋がりがあるということくらいだ。上総の行動をこずえが鋭いアンテナで拾い上げて、すぐに手を打とうとしたのだろうか。いや、その前に関崎はどこまで事情を知っているのだろうか。それによっては下手なことを口にできない。用心せねば。

目と目が合ったが、無視した。

こずえがぴしりと言い放った。

「じゃあ、立村。言いたいことあるなら、とことん聞くよ。その代わり、デスマッチだから、その辺覚悟しときな」

デスマッチと来た。こずえもかなり本気のような。逃げるよりも、これは受けた方が勝ちかもしれない。上総のアンテナもぴんときた。

「どこで話すんだ」

「ベストなのはホテルだけどさ、誤解されたくないよね。関崎もいるし、この面子で3Pってのもね」

——ホテル、ってなんだよこの人。

どんな時でも下ネタを忘れない古川こずえ。それでいて顔は本気だから言い返せない。

「だからカラオケボックス行こう。歌い放題のそこ、見つけたからさ」

「了解」

人に気付かれない場所で話せるに越したことはない。覚悟した。

上総が頷くと、不意に関崎が戸惑い顔で首を振った。何を言い出すかと思いきや。

「ちょっと待て。カラオケボックスだと金が掛かるだろう」

——ああそうだな、関崎は苦学生なんだ。

即、頭の働くこずえが解決した。

「安心しな。学生は一時間九百円で歌い放題。三人でボックスに入るから三百円もらえれば終わ

るよ。ま、それ以上になったら誘った私が払うからさ」

こずえが提案したカラオケボックスは、上総の自宅すぐ近くだった。自転車で学校から漕いでいくと二十分から三十分くらいかかるのだが近道を通ればもう少し早く着く。

「悪いけどあんた真中で走りなよ」

肩に手を乗せられ、囁かれた。近道分かるのだろうか。

「逃げる気ないと思うけどさ」

——誰がそんな戦前逃亡みたいなことするかよ。

男子相手だったら平手でぱしんとはたいてやるところだが、女子相手に大人気ない。

後ろには関崎がしっかりハンドルを向けている。挟み込まれた感じだ。いつだったか誰かが長距離走の際、最初の一、二周くらいまでびたっと牽制しあい走っている様子を見るようだった。

それでもやはり、時間がかかるのは心配だった。車道を走ろうとしたこずえに慌てて声をかけた。

「古川さん、次、右曲がってから、そのくねくね道を辿って」

その後も途中何度か上総は、こずえの背中に声をかけた。そんな大きな声でなくてもきちんと聞こえたらしく、こずえは上総のナビゲート通り、しっかり近道を通して品山のカラオケボックスまで辿り付いた。まだ日は暮れていなかった。さすが早い。

いわゆる「カラオケボックス」とは、単に自己陶醉しつつカラオケを歌い上げるために存在するものではなかった。上総たちにとっては誰にも邪魔されないために集合するための溜まり場であり、大人たちには決して気付かれないようにしなくてはならない場所だった。

たとえば中学時代など、評議委員会の集まりでどうしても学校内では離せない話題が出てきた時などは、みなでお金を出し合って一時間くらい部屋を借りる。なんとなくだが原則として、二時間近く語り合う必要のある場合、最低三人以上で集まる場合に限られていた。

今までは特段、トラブルも起こらなかった。校則違反かどうかは微妙な部分もある。ある先生は「別に歌う程度だったら喫茶店と同じようなもんだ」といい、またある先生は「密室なのだから何かあったら責任取れない」ともいい、意見は分かれている。今のところは正式に「校則違反」という判断は出ていないので、上総たちは安心して利用している。

もっとも、死んだって歌うつもりはない。

周りで音程の外れた声が響きまわろうが、年がら年中ミラーボールが回っていようが、それはどうでもいいことだった。かえってそれらの雑音が、秘密を保持してくれる貴重な守り神でもあった。

特に、品山の元パチンコ屋の跡とされている空き地に出来たばかりのカラオケボックスは、貨物列車のコンテナを大量に並べて一部屋一部屋を完全に分けてあるものだった。もしレールがひいてあれば、すぐに出発してしまいそうな状態で並べられている。その中に入るとだいたい五人くらいは座れるスペースが広がっている。

「ここだったらあんたも安心して、語れるでしょ」

こずえはまず上総にはコンテナを指差した。その後、関崎に振り返り説明した。

「あの中がカラオケボックスになってるのよ。完全個室だからさ」

「いいのか完全個室なんて、法律に違反しないのか」

「大丈夫よ、少なくとも今のところ、校則違反にはならないと思うよ」

こずえはすばやく受付で手続きを済ませた。5番の札を持ってきた。上総にちらと見せ、そのまま関崎に話し掛けた。

「とりあえず入ろうよ。暑いね。それにしてもクーラー効いてないじゃん」

「暑いなあ」

確かに暑かった。上総たちが足を踏み入れると、ようやく一気に扇風機の風に似たものが部屋の中をぐるぐるし始めた。同時にミラーボールも激しく回り出す。

スカートをふわっと軽く持ち上げ、風を足の間に通すような仕種をし、こずえが尋ねた。

「面倒だから、とりあえずなんか一曲、歌ってみる？」

冗談じゃない。もちろん丁重にお断りすべく首を振った。まずは腰をクッション椅子に下ろした。吹き出しながらこずえは、次に関崎へお勧めしだした。

「あんたに歌えなんて誰も言ってないよ。関崎、とりあえず景気付けに、どう？」

「俺が歌うのか？ 何をだ」

——こいつ、本気なのか？

次の行動に上総は目を丸くした。

関崎はまずこずえに、黒いカバーのバインダーがなんなのかを尋ね、すぐに広げ出した。中には歌詞カードが入っている。もちろん歌うための場所だから当然 歌ってもいいのだが、こういう言動を見るたびに上総は「お前何しにきたのか自覚しているのか」と問い詰めたくなる。こずえがおもしろがるように、カラオケ 初心者らしい関崎に対して説明している。

「ここね、まだレーザーカラオケ、入ってないんだよね。でもまあいっか。歌い放題だしさ。関崎も歌いたくなったら勝手に機械を操作してくれればいいよ」

「あとで考える。やり方は本を読めば分かるな」

ひとりごちた関崎の顔に、上総はやはり本気の色を読み取った。

——関崎……やはり、カラオケ興味あるのか？

日常のささいな言動を見つけるにつけ、関崎乙彦という男にはやはり驚かされる。

五人くらい座れそうなスペースだが、まだクーラーが効いてないせいか息苦しさを感じた。てきぱきとこずえが飲み物の注文を取ったりいろいろ指示を出している。まずは上総が最奥に、隣にこずえが、入り口側に関崎が座った。

古川がまず口を切った。

「時間がもったいないから、さっさと話すよ立村」

同時に店員のノックする音が聞こえた。飲み物が届けられた合図だ。

並べられるウーロン茶を見つめ、店員がいなくなるのを待った。いきなり氷が溶け出し揺れていた。かなり室内が暑いのか、それとも飲み物がぬるいのか。

「あんた、藤沖の言い分を聞かないで逃げるのはいいかげんやめなよ」

くい、と眼差し鋭くこずえはさらに問い詰めた。

「あの藤沖がプライドかなぐり捨てて、あんたに頭下げてるんだよ。少しそれ、考えてやりなよ」

同時に派手にものが落ちる音がした。関崎がバインダーをテーブルの下に落っことしたのだ。わかりやすい動揺場面だった。立ち上がり、いきなり怒鳴った。

「藤沖が、頭下げてるってどういうことだ！」

「関崎、あんたにも説明するから、まずは私の話を聞きなさいよ」

夏のいらつく男子たちの扱いには慣れているこずえ。冷静に交わした。

「関崎にあえてついてきてもらったってのはね、単に立村、あんたを囲い込むためじゃないってことは、わかっているよね」

ようやく本題に入ってきたようだった。上総は黙ったままこずえの次の言葉を待った。

「この問題が、杉本さんに絡んでいるからってことだってこと」

——やはりそうなのか！

薄々予想はしていたのだが先を読み切れなかったのは、こずえが杉本梨南と藤沖と、どちらの味方でいてくれるのかを判断できなかったからだった。

以前からこずえは杉本のことを可愛がっていたし、おそらく何事もなければすぐに杉本の味方について戦ってくれただろう。藤沖と繋がりさえなければ。しかし、現在は一年A組の評議委員仲間。評議委員同士のコンビというのは、上総も経験あるのだが恋愛感情うんぬんはともかくとして、友情とも恋人ともいえない不思議な繋がりがある。美里相手に経験したことのある感情を、たまたま上総は「おつきあい」という形でまとめてしまったけれども、それ以外の形もあるのではないかと今は思っている。こずえと藤沖、またかつての難波と轟コンビ、というのもまた別の意味でベストコンビだったのではとも感じている。更科もいろいろ文句いいつつも、霧島ゆいの卒業間際の事件の際は奴なりに心配りをしていた。

それが、コンビの繋がりというものだ。

果たして後輩とその繋がりとどちらが優先されるのだろうか。

判断がつかなかった。

まずは、こちらから探りを入れてみよう。

上総なりの一言をまずはぶつけてみた。

「だったら俺が話すことは何もない。俺なりに、自分なりの考えで行動していることを、古川さんに責められる筋合いはない」

さて、どうなるか。デスマッチというだけあり、こずえはしっかり上総に向き直った。口が物凄い勢いで回り出した。上総はとことん聞き役に徹することにした。

「立村、あんたが杉本さんを守ってやりたい、ってのはよくわかるよ。あんないいかげんな噂に巻き込まれて傷ついているであろう、杉本さんの味方でありたいってのはね。私もこの前杉本さんに会ってきたけど、あの子は強いね。本当に可愛いよ。それに、言っちゃなんだけどあの渋谷

って子、今までの話を聞く限り 自業自得だって気がするね。おねしょしちゃったことはとにかくとして、よりによってなぜ、自分のやらかしたことをごまかそうとしてパニックになるかってね。悪いけど私があんたの立場だったらきっと、杉本さんの味方になったと思うよ。冗談じゃない。美里も言ってたけど、当然ぶちぎれてあたりまえ」

——やはりそうか、古川さんは杉本の味方か！

それなら話は早い。古川こずえ、下ネタ女王様を味方につけられれば、あとは怖いものなしだ。男子で手の回らないところをこずえによってフォローしてもらえればこれこそありがたいことだ。単純に喜びたいところだが、やはりどこかブレーキが心の奥で掛かっている。

「だろう？ 古川さん、そう思うだろ？ 俺の言い分は間違っていない」

「そうだよ、立村。正論だったら当然そうだよ」

嫌な予感がした。こずえは上総の発言をすでに読んでいるかのようだった。

「けど、それでもさ」

言葉をとぎらせ、一度くいと唇を一文字にした。

「それでも私は、あんたに言わなくちゃいけないと思ってるんだ」

真面目な顔を見せられて、思わず戸惑い言葉を飲み込む。心臓がいきなり不規則に動き出す。

「立村、あんたが杉本さんをかばって、事実関係を中学の生徒全員に報せた場合、人がひとり死ぬかもしれないんだよ」

「死ぬ？」

大袈裟な言葉を呟いたように聞こえた。しかし、針のようにちくりと刺さる感触が残る。

古川こずえの言葉に「死ぬ」なんてマイナスな言葉は、ありえなかった。

「あの藤沖がプライドかなぐり捨ててあんたに頼み込みにきたのはね、あの渋谷さんって生徒会書記の子を救いたいから、それだけなんだよ」

上総が考えを留める前に、関崎がふたたびテーブルを叩いた。もちろんバインダーは滑り落ちた。

「ちょっと待て！ 藤沖が、例の女子を、救いたいからということか！」

こずえはいったん黙った。振り返り関崎をちらっと見つめたが、すぐに上総へ向き直った。ゆっくり正面から上総の瞳を覗き込んだ。この表情は誰かに似ていた。美里かそれとも、また別の誰なのか。わからないが、そうされると上総は動けなかった。

「何度も言うけど、私は渋谷さんという子の味方になりたいから言ってるわけじゃない。なんで杉本さんの部屋におねしょふとんが持ち込まれていたのかとか、そういうわけのわかんないトリックが仕掛けられてたりしたもんだから、最初みな混乱してたらしいよね。もっとも心あたりなんて全然ない杉本さんからしたら、そんな濡れ衣、知ったことじゃなかったようだしさ。堂々としていたところもあるだろうし。でも、どっちにしても真実はひとつ。立村だってそれは信じていたでしょう。もし、渋谷さんが杉本さんみたいに強い根性持っている子だったら、たぶん立ち直れるんじゃないかって私も思う。自分で自分のしでかしたことを責任取って大切だよ。けど、

渋谷さんは、それができなかつたんだよ。それ、わかるでしょう。もちろん、私が聞いた内容は本当だかどうかかわからないよ。けど、少なくとも杉本さんは、同じ立場に置かれた時、決して死のうとは思わないよ。きちんと、責任を取ることができる子だよ。女子同士、可愛い後輩として、そう信じるよ。渋谷さんが自殺未遂をしでかしているとか、それでも学校には通おうとしていて、精神的にぼろぼろになっていて。そういう状態を学校側でほっとくわけ、いかないじゃないのさ」

——そんなことで、杉本に濡れ衣かけろって言うわけか！

藤沖の行動を知った時と似た黒い闇が目の前に広がった。

古川こずえの瞳の奥の闇と一緒に見えた。

——杉本は、強い根性を持っているように見えるのか。

——学校中の連中から叩きのめされて平気でいられる女子だと思っていたのか。

上総の目の前で震えていた、つめの引っ込め方を知らない子猫。それが杉本梨南の本質。

女子たちすらも、知っているようで知らないらしい。

瞳の闇を上総はじっと、押さえつけようとした。

「杉本さんを知っている人たちは、あの子がそんなことしでかすわけがないってわかっているよ。そう信じてくれている子がたくさんいる。あんただってそのひとりでしょう、立村。だから杉本さんならきっと、強く生きてくれる。噂なんてばかばかしいって無視してくれる。絶対に死のうなんて思ったりしない。杉本さんなら、絶対に大丈夫。だけど、あの渋谷さんは耐えられそうにないし、今この瞬間にも、藤沖が見張っていない限り、かみそりで手首を切ってしまうかもしれない、そんな状態なんだよ」

——その言葉は、杉本にも当てはまるんじゃないか。

同意なんかしない。

——杉本がいつ、あの学校の中で手首を切るか、包丁持って学校で振り回すか、そうしない保証なんてないんだ。どんなに強くあろうとしても、杉本の中の限界点を勝手に定めることなんてできない。誰も助けようとしないうちで、ひとりぼっちの杉本の方が、渋谷とかいう女子の立場よりもずっと息苦しいものだってこと、古川さんだって知っているはずだろ！

ぎりぎりまで言うつもりはなかった。でも、言わずにはいられなかった。

「古川さんは言っただろう。それは自業自得だってさ。それに、どうして杉本が、噂に負けないで自殺未遂なんてやらかさない強い女子だってこと、決め付けられる？」

「あんた、杉本さんのこと、信頼できないわけ？ あれだけ可愛がってたら、それだけあの子の強さ、わかるでしょうが」

わかってない、やはり誰もわかっていない。杉本梨南が一瞬のうちに壊れてしまいそうな、あやうい陶器の人形のようなことを。

「強いなら、ほっといてもいいってことか！」

上総は杉本梨南の強さを知っている。

誰よりも精一杯努力して、認められたくて、背伸びして、そしてその姿が滑稽に見えてしまう現実の姿も。同時に誰よりも一途に大好きな人たちに認められたくて、限界まで努力を繰り返す哀しさも。

憧れても、届かない哀しさに悔し涙を流したいのに、流せない。

理想の自分に届かず、醜い自分で妥協しろと駄目出しされる絶望感に打ちのめされている姿。

杉本はそれを耐えることができる。それは認める。

だからといって、当然必要のない重荷まで背負わせるというのは間違っている。

強いから、我慢できるから、もう少し背負ってね、と身に覚えのない罪を背負わせようとする藤沖たち、そして古川こずえ、さらに言うなら学校関係者たち。

限界まで背負わせて、つぶれてラッキーとでも思っているのか。

もしそうなら、上総は戦う。いくさおとめ杉本梨南の正義によって、すべての疑惑を明るみにし、正々堂々と戦わせよう。相手から奪うのではない、正当な権利を我が手に納めるために。

古川こずえは、「渋谷さんは手首を切った、死ぬかもしれない」と理由を述べる。

なら、杉本梨南がビルから飛び降りない保証なんてあるのか。

霧島ゆいと西月小春が、未遂にせよ自殺を図ったことを、こずえはどう捉えているのか？

忘れかけていた炎が身体の内奥、そして一番熱い場所から甦ってくるのが分かる。

——戦うのは、俺からだ。

一瞬にして敵と変貌した古川こずえに、まずは刃を向けた。

「最初に俺も言っておく。俺もその話を一番最初に聞かされた時、杉本にはっきり言ってある。現場の状況を確認できない以上、俺はその噂を否定はできない。イエスかノーか、その事実がどちらであっても、俺は杉本に対しての態度を変える気はない」

「あんた、それって女子の心を逆撫でしまくる内容じゃないのさ！」

こずえの後ろ側で関崎が頷いている。どちらの味方なのかわからないが、まずは置いておく。

「だから修学旅行で何が起こったかなんか、俺はそんなの関わる気なんてさらさらない。ただ、その噂を黙って耐え忍べと命令する奴らには、堂々と立ち向かえ、とだけ伝えてある。杉本の正義に基づいて、それは当然のことだろう」

「悪いけど立村、あんたの言ってること、全然わからないよ」

「古川さん、杉本が去年、どれだけ惨めな思いをさせられたか、話は聞いているだろう」

「もちろん、あんたからも美里からも」

「もしあの時、杉本が手首を切っていたら、同じようにみな、同情したか？」

「杉本さんは決して弱い子じゃない。そんなことするわけない。私はあの子を信じている」

「いいかげんにしろ！」

腹の底から怒鳴った。女子相手に怒鳴ったのは、杉本に対して一度きりだけ。留まらない。押

さえられない。自然と立ち上がっていた。ぐいと古川こずえを見下ろした。まったく動じる気配のないこずえに、自分自身が仁王様へ変化しそうだ。

「話は簡単だろう。杉本が何もしてないのに、濡れ衣着せられたから、どちらが白か黒かはっきりさせたいと思っている。そこでもうひとりの噂の張本人と一度さしで話をしたい。それできちんとけりをつけて、終わらせたい。そのどこがまずいんだ？ 相手が逃げ回っていて、それで曖昧なまま噂だけが飛び交っている。その間の杉本の、いわゆる精神的苦痛ってどうなるんだ？

学校側は杉本が青大附属から来年いなくなるとわかっているから、多少のことはがまんしてもらえばいいとでも思ってるんだろう。けどさ、杉本を勝手に強い女子扱いして、もし壊れたらどうする？ 古川さん、杉本が百パーセント、自殺しないと切り切れるその根拠ってなんだよ。ありもしない噂に耐えられるだけのずぶとい神経を持っているって、そう断言できるのはなんでだ？ 信じているからって言ったよな。信じているってその根拠はどこにある？ 見た目が強そうだから、たかがこの程度の悪口では傷つかないって決め付けてるのか？ 自分でもない相手を、勝手にそう決め付けられる、その根拠ってなんだよ。俺には全く理解できない」

言いたいことはすべて言い切った。

——俺の方が正しいはずだ。後ろの関崎も頷いている。

男女関係なく、古川こずえの方が間違っていると言い切ってもらえるはずだ。

嘘をつけ、と罵る連中よりも、真実を訴える杉本の方が断然正しいはず。

渋谷が死ぬかもしれないのなら、なぜ一年前杉本のことをそう心配しようとしなかったのだろうか？ なぜ、杉本だけ軽く見られるのか。杉本梨南なら、ちょっとくらいの濡れ衣は笑って流せるというのか。流せるならば、さらに重ねてやろうとでもいうのか。

悔しいくらい古川こずえは動じなかった。黙って上総の怒鳴り声を聞いていた。

弟の八つ当たりを受け流すなんてお手のものなんだろう。

「立村、あんた、自分で今、何言ったかよく、覚えておきな。それともうひとつ。」

ゆっくりと間を置き、片手でウーロン茶を一口飲み、

「藤沖と渋谷さんの関係、一年前の立村と杉本さんにそっくりだよ」

急所を突かれた。

何を言われたのか、一瞬わからなかった。

——俺と、藤沖と？

混乱して言葉が出てこない。かろうじて、

「どういうことだよ！」

立ち尽くしたまま、自分がやはり古川こずえの弟分だということに気付き、悔しさのあまり腰が抜けそうになる。

「話は簡単だってこと。あんたが一年前、必死になって杉本さんを守るため駆けずり回っているその姿が、今の藤沖とそっくりだってこと。藤沖はね、生徒会の後輩だった渋谷さんを守るため、他の後輩たちの軽蔑も覚悟の上で、あんたに土下座したんだよ。いい、わかる？ あんたが藤

沖の話を聞こうとしないのは、立村、あんたの逃げであり、みっともない復讐でしかないよ。立村と杉本さんを傷つけた奴らに対して、やっとざまあみろって言い放つチャンスを手放すもんかって意固地になってる、そっちの方がずっと醜いよ」

——復讐？ それのどこが悪い！

「醜い？ 復讐？ 俺はただ」

どこがそんな発想になるだろう。頭を振った。地震に近い足元の揺れを感じた。

こずえは宥めるように話を続けた。

「復讐したい気持ちはわかるよ。けど、全く理由も聞かないで一方的に藤沖を無視することはないじゃないって言いたい。藤沖が必死になってあんたと和解したい、あんたの気持ちをようやくわかったって、そう言いたいってこと、どうして想像できないわけ？ あんたと藤沖との間になにがあったかは聞かないけど、あいつが渋谷さんのことを通して、ようやく立村の気持ちを理解したと感じたんだったら、また新しい関係が作れるんじゃないの？ 私は女子だしさ、男子の気持ちなんて全然わからないよ。けどね、立村のように、やっといばれる立場になったから、藤沖の気持ちを蹴飛ばしたままでいるっていうんだったら、私は悪いけどあんたを軽蔑するよ」

——あいつが俺の気持ちを、理解しただと？

「そんなのは向こうの都合だろう。俺はただ、杉本に濡れ衣きせる権利なんてないと訴えているだけであって、どう考えたってそっちの方が正論だろうと知っているだけだ！」

「私はね、自分が有利に立ったとたん、大喜びで叩きのめそうとするあんたの根性がどうかしてるって言いたいよ。なによ、さっき昼休みに杉本さんの前で変なこと言い放ったんだってね。みんなが渋谷さんのおねしょのこと隠そうとしている中で、正々堂々戦って来いなんて言ってみなさいよ。もう、二度と渋谷さん家から出てこれなくなるんだよ。杉本さんのことだからきつと、戦うつもりでいるとは思うけどね。杉本さんだって、もし渋谷さんにまさかのことがあったらきつと、自分を責めちゃうよ。立村、杉本さんは強いよ、でもね、人のことを純粹に思っあげられる子でもあると思う。そんなやさしい子に、復讐させて、かえってずたずたに傷つけて、どうするのさ！ 復讐したってなんも始まらないんだよ！」

「人を殺したい復讐したいと思ったことが一度でもあれば、そんな白々しい答えなんて出せるもんか！ 古川さん、人を殺したいと思ったこと、一度でもあるか？ ないなら仮定で杉本の気持ちを語るのはやめてくれ。復讐することで、救われることだって確かにあるんだ！」

自分でも訳のわからない言葉を叫んでいるのは理解している。でも止まらなかった。

復讐することでしか救われない、そんな人間たちをこずえは理解しようとしなない。

上総は決して藤沖に意趣返ししようなんて思っはいなかったけれども、やられたことはやりかえすことだっ、決して間違っているとは思わない。杉本の純粹な憎しみも殺意も、上総はすべて受け止めたい。奇麗事で「そんなこと感じない」なんて誰にも言わせるものか。

こずえが何かを言いかえそうとした時だった。

「悪い、一曲、歌わせてくれ」

いきなり関崎が立ち上がった。

カラオケ装置の電源を入れ、カードファイルを拾い上げた。

さっきから黙りこくったまま、時折上総の言葉に頷いているようすを勘付いてはいた。

しかし、次の行動は想像できなかった。

素早くマイクの調子を整え、ファイルのページをめくった。片手でマイクを握り締め、選曲ボタンを注意深く押した。

「とりあえず、聞いてくれ、頭が冷えるだろう」

確かに、頭は完全に冷えた。古川こずえがぽかんとしたまま、上総への言葉の攻撃を中止した。腰を浮かせてファイルのページを覗き込んだ。

上総の側に戻って来て、いつものクラスメート口調で囁いた。

「砂のマレイの主題歌、歌うみたいだよ」

「羽飛たちの好きなアニメ番組か」

「あ、まじで歌ってる」

ギターと電子音の入り混じった、少し昔のハードメタル音曲が流れ出した。

きりりと関崎は、腰に手を当て、真上にマイクを支えるようなポーズを取り出した。

それから……。

——関崎……こいつ、何考えてるんだろう？

毒気を抜かれるとはこのことだ。

目の前でわざわざ両手をあげるポーズやら、指先でマイクをくるくる回してみせたり、最後は反対側の手にマイクを飛ばすという芸までやってのける、この関崎乙彦という男。しかも全部、リズムが合っている。

「関崎うまいね、歌」

「本当だ」

音程が外れていないというレベルの問題ではない。完璧、鍛えぬかれた響きあるボイスが響き渡った。関崎のくそまじめな性格上、カラオケボックスにひとりで入り浸ったとは考えられないが、音楽の授業や、校歌斉唱だけで磨かれたとは思えない。持ち前の音楽感性なのか、よくわからない。まさかとは思うがこいつが青大附属に合格したポイントは、目に見えないこういう部分なのかもしれない。

——杉本はこの姿を見たとしても、関崎を追いかけつづけるんだろうか。

サビののびある部分をしつこく歌いつづける関崎を眺め、上総は思った。

「オペラはうたわせないようにしないとまずいね。杉本さん、もうめろめろになっちゃって、ロ－エン格林さまどころの騒ぎじゃなくなるね」

「冗談じゃない」

完全に陰悪な空気は溶け去った中、上総はこずえと関崎の美声について感想を交し合った。これはある意味、才能だと思う。

「秋の合唱コンクールは、関崎に独唱パート与えてもいいかもな」

「私もそれ、考えてた。そうだね、そうしたら優勝できちゃうかもね」

アップテンポの強烈なハードメタルが終わり、礼儀以上の心からなる拍手を関崎に与えた。そうしたかった

「関崎、お世辞でなくて、本当に上手だ」

「私も同感。あんたってさあ、やっぱり」

その様子に関崎もかなりご満悦の様子だった。あれだけ派手に振り付けしながら踊るんだから、息も切れるだろう。そのままずっと、古川を押しよけるようにして上総の前に割り込んだ。

「古川、今の話を聞く限り、俺は立村の味方になるわけだが」

「あんた、せっかくだいいい歌歌ってくれたくせに、いきなり現実に戻すってことないっしょうが」

ここでクールダウンさせたかったのだが、どうやら中身の関崎乙彦は硬派のままのようだった。ほっとするのか、少し残念なのか自分でもわからなかった。真正面から見つけ返そうとする。

「だが、事情は大体把握した。俺も一年A組の規律委員として、一言言わせていただくが、すべてを丸く収める方法はあるんじゃないかと思う。あくまでも俺は立村の味方だが、藤沖にも並々ならぬ恩がある。だから、俺なりの案をひとつ、聞いてもらえないか」

真面目な顔して、話し掛けてくる。

答えを迷っているうちに、いきなり関崎は大きく深呼吸して満面の笑顔を見せた。

「あ、もしよければまた、あとで歌っていいか？ 腹から声を出すってのは、本当に気持ちいいな。部屋でパズルするよりも面白い」

——部屋でパズル？

爆笑した古川こずえが、しなくてもいいのにわざわざ上総の耳元にて解説してくれた。

「関崎、晩生だねえ。あいつまだ3P知らないんだよ。さっき私が言ったでしょ。ホテルで3Pって。あれ、あいつ、ホテルでジグソーパズル三人でやるもんだと思ってるみたいだよ」

——やっぱり下ネタかよ。

こちらには笑う気になれなかった。勘違いしている関崎には、今のところ訂正する必要はなさそうだった。真面目な顔で、それでも上総の味方に立ちたい……すなわち杉本の味方でもあるはずだが……と訴える関崎の話を、まずは聞こう、そう思った。

古川こずえが時間延長に出ている間、関崎はひたすら黒いバインダーに見入っていた。どうみても、選曲中としか思えない。その単純さというか、何も考えていないというか、やはり謎の男だと思う。上総はさりげなくからかってみることにした。

「関崎、音楽、いくつだった」

「もちろん五だ」

「だろうと思った」

げんな顔をして関崎は上総を見据えた。

「関崎」

ウーロン茶は半分減っていた。喉が渴いたのかかなり消費したんだろう。

背を正し、関崎に向き直った。関崎も上総の意志を読み取ったのか、すぐに正面に向いた。

「なんだ」

「ひとつだけ頼みたい」

「何をだ」

「信じてやってほしい」

ふたりきりの場所で、上総が言えることはひとつだけだった。

——杉本梨南の無実を、信じてほしい。

言葉をつむぎなおした。

「今日、ここに来たのは古川さんと不毛な言い合いをするためではないんだ。俺なりに、関崎に、真実と思われることを知ってもらいたい、そう考えたからなんだ」

「お前も真実だと思っているのだろう？」

「俺は、客観的にしか判断できない。現場にいない以上、どれが事実なのかわからない。その上で俺なりの判断で行動している。だが、噂だけが一方的に流れてきたらおそらく、多くの生徒は杉本を疑うだろう」

「俺も現場にはいなかった」

その通りだ。男子的発想、あっぱれだ。

「今から、俺は関崎にできる限りの説明をする。古川さんも言うことは言うが、根本的には杉本を信じていると思う。だから、関崎だけは、それを信じてもらえないか」

「なぜ……だ？」

「それは」

息を整えた。手元のウーロン茶で喉を潤さないと、痰がからまるようで声がでなかった。

「お前にだけは、信じてほしいと杉本が思っているからだ」

古川こずえは元気にポテトチップスを抱えてきた。まずは手持ちぶたさなのでばりばりといただいた。なんというか関崎も腹がすいていたのだろう、まずは一枚噛み砕いた後、

「古川、今始めて知ったことを、もう一度確認したいがいいか」

「いいよ」

さっそく事情聴取を開始した。こずえもそのあたりは了解済みらしい。さくさく答えた。

「藤沖がその、やらかした女子をかばっているというのはどういうことだ」

「ほら、あいつ元生徒会長だったでしょう。だからよ」

わかりきった事実ではあるけれども、外部生の関崎には分かりづらいところもあるだろう。上総はただ、感想を挟み込むだけだった。

「そんなに仲が良かったとは思わなかったな」

記憶する限り、藤沖は渋谷を代表とする生徒会女子のことを手厳しく評していた。

だからこそ、いきなり百八十度の転換は想像できなかった。

「ごもっとも。はっきり言って、私も、驚いたわよ」

内部生もやはり驚きを隠せない、その証拠。こずえはわざわざ一番大きいポテトチップスをつまみ、一気にごりごり噛み砕いた。

「関崎もわかっていると思うけどさ、藤沖は硬派野郎じゃん。秋にはなんとしても応援団を打ち立てようと燃えている熱血男。私の知る限り、女っ気も全然ないし、どこでストレス解消してるんだかってよく聞いたもんよ。だからさ、いきなり藤沖がああ彼女と一緒に図書館で勉強したりとかさ、一緒に帰り始めた時には驚いたわよ。とうとうあの藤沖にも春が来たのかって。でもよりによって嫌っていた渋谷さんに手を出すなんて、特に例の噂がある渋谷さんになんできて、みんな不思議がってたわけよ。基本としてうちの学年女子は、杉本さんびいき。渋谷さんの話にみなざまみろって思ったところあったみたいよ」

ありがたいことだ。杉本を守ってくれているようだ。その点確認できただけでもほっとした。さっきの言い合いを許してもいいと、一瞬だけ思った。

「藤沖もまあ、なんというか、女子たるものはやまとなでしこであるべきと信じていたところあったみたいでね。気が強くてうるさい子は苦手だって前々から宣言してたよ。私みたいな男のパーツについて詳しい女子はおよびじゃないんだってさ。ま、友だちとしてはいいけど、彼女にはねえって感じ」

返答に困っているのか、関崎が顔をしかめた。

「そんな奴がよ？ なぜいきなり、渋谷さんといちゃついているのかって不思議に思うじゃん。人様の恋愛沙汰には口出しなんてしたかないけど、まあ、状況チェックはしてたわけ。そしたら、ひよんなきっかけで渋谷さんの状況が判明しちゃって」

「状況？」

「手首切るのを繰り返してるって。それ心配で、見張ってるらしいって」

初めて聞いた、具体的状況だった。

——手首を切るということは。やはりかみそりで、静脈を切って、そして。

死にたいと思ったことはある。それこそ何度も、数限りなく。

死ぬための手段を何度もシュミレーションしたこともある。

葉がいいのか、刃物がいいのか、それともガスか、飛び降りか。

そうしなかったのはただ、上総が今まで運よく生き延びてこれたからだった。

喉の奥で、かちゃりと何か、外れたような感覚が残る。

認めたくはない。その行為まで進む距離が、上総にはまだ遠すぎて、おそらく渋谷名美子には近かったということなのだろうか。

完璧に対岸で眺めているような関崎の、脳天気な声が聞こえる。

「手首を切る、というのが、すなわち自殺未遂なのか？ 単に夕食の準備で指を切ったとか」

上総が口を挟む前にこずえがテーブル下で何かしている。ぼそっと音がしたので、たぶんけりを入れたに違いない。

「関崎、料理をする時手首に包丁、近づける？ あんたアホなこと言ったら男のシンボル切り落とすよ。なことはどうでもよくてさ、とにかく、藤沖はひとりの女子の命を守るがために毎日寄り添っているらしいのよ」

まくし立てながら、こずえは肩を竦めて首をぐるぐる回した。

「いったいどこでそんな殊勝な気持ちになったのかわからないけど、あのきんきんうるさかった渋谷さんが、とてつもない大失敗で一気にプライドも地に落ちてか弱くなったのを見て、感じる場所あったんでないの」

——プライドがずたずたで、地に落ちて、か弱くなって。

上総は天井のミラーボールを見つめた。天井のほの白い中でかすれたような影の破片が飛び散りまわっている。

——もし杉本だったら。

そんな想われ方を望むだろうか。すぐに否、と答えが出た。

——想われたくなくても、周りからはそう見られている。せめてそう思わせないように守る方法はなかったんだろうか。

「さらに言うとき、二年の霧島」

いきなりこずえの発した言葉に、また上総は心ざわつくものを感じた。

——霧島のことなんて、関崎に話していいのか？

すぐに疑問は解けた。

「ほら、この前会った子」

——この前会った？ まさか関崎、霧島と会っていたのか？

今朝も、「立村先輩、お待たせしました」などとちっともこちらは待っていないのに、待ち構えられて霧島家の事情を語られたわが身。てっきり霧島は、上総にだけ何かを訴えたくてそうしているのだと思っていたが、なんと関崎にも同じことをしていたというわけか。

——やっぱり何かあいつは企んでいたんだな。全く、騙されるところだった。

何が騙される？ 自分の思わぬ感情が浮かび上がり、あわてて消した。

「あいつにずっと渋谷さん恋焦がれていてしつこくアタックしていたみたいなのよ。けど霧島は最初からタイプじゃないって面しててさ、きつく無視。例の事件前からもともと渋谷さんのこと

なんか興味なかったのに、さらにばれちゃってからはそれプラス、『だらしのない女子』の烙印まで押されちゃったみたい。まあね、霧島はね、女子に関しては好みがるさい性格だしね。決して渋谷さんはブスだと思わないけど、霧島は女子のルックスなんて二の次って言い放ってるよ。姉貴で裏を見すぎたのかもね」

「よくわからないが、藤沖の言動は決して色恋沙汰ではないんじゃないのか」

奥の席で上総があえて言葉を飲み込んでいる中、関崎は単純にわかりやすい質問をこずえにしていく。

「仮にも生徒会活動に参加していた仲間だ。もちろん色々ぶつかり合うことはあつただろう。だが、それ以上の強い同盟意識があり、そこから何かを感じたとするならば、それは恋愛感情とは別のはずだぞ。後輩への思いやりだけだ」

「だよねえ、私も最初、そう思ったんだ。まずは藤沖の話はそっち置いとくとして、次、杉本さんのことね。ああ、あのさ立村、言いたいことないの」

すでに霧島関係の話題は本人から聞かせてもらったことばかりだ。

——どうせ関崎も霧島に直接聞けばいいことだ。懐かれているんだから。俺よりももっと、活用しがいのある先輩だろうしな。しかし霧島も、何を考えているんだろう。俺にしつこくまとわりついてくると思えば、今度は関崎か……。

正直、面白くない。もう少し黙っていたい。

「古川さんが言い終わってから言う」

上総はきっぱり告げた。すべて聞いてからにしよう。いや、頭の中を少し整理してからのほうがよさそうだ。杉本のこともそうだが、霧島も絡んでいるとあつては、下手なことを口に出せはしない。

こずえの立て板に水状態の説明はまだまだ続いた。

「杉本さんはね、最初はそんなの知ったことかかって顔して無視してたわけよ。すごいよ彼女。修学旅行後、杉本さんの泊まっていた部屋からおねしょふとんが発見されたって噂が派手に流れてさ。やはり話にみな飛びつくわけよ。杉本さんを嫌っている男子たちにとっては都合いい情報だしね。でも、思い当たる節なんて全然ないのになあに考えてるんだかって顔しつつづけていたのよね。ところがなんかあつたらしいのよね、生徒会がらみで。霧島もそのあたりは聞いてなかったみたいだけど、立村なら詳しいんでないの」

こずえがいったん言葉を区切りながら、上総を見やった。

——願わくば、この情報をもっと早く欲しかった。

今後、古川こずえとの友好関係は守りつづけねばなるまい。

こずえの発言を一通り聞く限り、完全に杉本梨南は渋谷名美子によっておねしょ事件の濡れ衣を着せられそうになった被害者である。

まず犯人説が流布された理由のひとつとして、

・杉本梨南の泊まっていた部屋から、おねしょ仕立ての布団が発見された。

という物的証拠が挙げられる。

周囲としては……特に杉本をとことん嫌う男子連中からしたら、これは叩ききかけになるだろうし、できれば杉本が犯人であってほしいと願っていたらう。

しかし、さまざまな証拠が現れて結局、渋谷名美子が犯人だと判明した。

生徒会役員を務め、しかもそんな失敗とは全く縁のなさそうな気の強い女子が、逃げ場のない大失敗をしてしまい、しかも誰かに押し付けようとする醜態までさらしてしまった。

そこまでばれているのだから、杉本に罪をなすりつけること自体が不可能にも思えるのだが、学校側が渋谷の精神状態を考慮してなんとかせねばと動いたことも不思議はない。もともと青大附属という学校は社会の法とは別の観点で物事を動かす傾向が強い。知る人ぞ知る縁故入学もそうだし、西月小春の事件を学内で処理して無理やり転校させたりしたことも、これはひとつの答えだろう。

——学校側がもし、渋谷さんを死なせないようにしたいと考えたとすれば、来年この学校を出て行く杉本梨南を生贄にして、渋谷さんを無実にするという手も、取らないとは限らない。

今までその恩恵を賜ってきた上総だが、今はその方針……もし事実とすればだが……に意地でも頷く気はない。杉本にも甘んじさせるつもりなんてさらさらしない。

しかし、ここで露骨に言い切るのは危険だ。用心深いこう。

「別にそんなことはない。俺はただ、これ以上誤解されるようだったら、白黒つけに行ったほうがいいのではないかと助言しただけだ」

「まあ、正論だわね。この際聞くけど、どうしてよ」

「お互い、きちんと話し合っておけば問題がないだろう。思い当たる節がない、と言い張っているのは杉本だし、イエスかノーかは直接顔を合わせればはっきりするだろう」

「じゃあ聞くけど、立村。あんたが杉本さんにそんな助言をしたばかりに、かの生徒会長・佐賀さんまで顔を突っ込んでくるってのはどういうことよ」

霧島が言うには「佐賀会長は藤沖先輩に丸め込まれている」らしいが、最初から上総はそんなこと信用していなかった。学校側の対応にしても、おそらくあの頭の切れる佐賀はるみのことだ。すべて計算済みだろう。きっぱり答えてやる。

「佐賀さんは杉本を疑ったらしいからな。それはきっちりと白黒つけておいた方がいいだろう。もっとも、なかなか相手が逃げ回って話にならないらしい。佐賀さんがかばって、かえって杉本が疑われるはめになっているはずだ」

「まあねえ、佐賀さんは生徒会仲間の渋谷さんの方が大事だろうしねえ。で、かつての親友に罪をなすりつけると、それは失礼よねえ」

——最初から親友じゃなかったんだからそれはしょうがない。

上総なりの結論は持っているが、今それを話す場ではない。

こずえも話が逸れると引き戻すのに時間がかかる。流しておく。

しかし外部生関崎の奴、上総の計算を一切読み取ろうとしない。

「罪をなすりつけたわけじゃないだろう。どちらが正しいか、情報が少なすぎて判断できなかっただけじゃないのか？」

「関崎、あんた、面食いかい？」

ずいぶんあっさり茶化すものだ。こずえにあしらわれている。

「とにかく、佐賀さんは渋谷さんをかばい、それが噂で流れ流れて、とうとう杉本さんの分が悪くなっちゃったわけよ。渋谷さんの精神ぼろぼろ状態も、周囲からはありもしないおねしょの噂でショックを受けたからだって解釈になりつつあるし。一部、霧島のように判断している奴もいるけど、結局みな、自分たちに都合のよい結論を求めるわけだから、もう八割方、杉本さんは不利」

真実は様々、入り乱れている。こずえの分析お見事だ。

腑に落ちない顔をしている関崎に、こずえは残りのポテトチップスをすべて指で掬い取った。三枚、口もとまで持っていったまま言い切った。

「学校側も、グレーゾーンのまま、なんとか人の噂も七十五日で片がつくよう祈ってるようね。杉本さん側の噂も消さず、かといって渋谷さんが犯人だというのも証明せず。生殺しのまま、みな卒業してもらえることを祈ってるというわけ」

——完璧だ。

鋭い読みを披露した後は、ただひたすら食い気に走っている古川こずえ。一気に三枚食いきった。

関崎はしばらく頷きながら聞いていた。おもむろに一言切り出した。

「古川、ひとつ聞きたい」

「なによ」

「その、杉本、さんはなんと言ってるんだ」

杉本梨南の苗字に、「さん」をつけて呼んだ。上総の耳にはどことなくひっかかる音に聞こえた。

「私が正しいことはわかる人にはみな、わかっているし、無理に騒ぐ必要なんてない、ってね」上総にも同じことを話していたようだ。どうやらこずえも杉本と直接話をしたらしい。考えられないことではないのだが、やはり出し抜かれたようで臍を噛む。

「でも、佐賀さんに何か言われた時にはかっとなっちゃたらしいけどね」

やはり一戦交えたのだろう。きっと、丸め込まれたのは杉本の方だろう。なんとかしてやりたいが、できない一学年の差だ。こずえと関崎、ふたりが全く別のルートで杉本のことを語っているのが、妙にいらだつ。言葉にも、出さないようにしているのに、ぎざぎざしたものが浮き出てしまう。

「つまり、わかる人にわかってもらえれば、いいのか」

「立村、そう言ってたってことだよね」

思わぬ切り返しに戸惑ってしまった。杉本梨南のことをよく知っているのは上総なのか、それとも他の連中なのか。もちろん上総以上に杉本を見ている奴はいないと断言したいところだが、女子たちにはどうしてもかなわない瞬間もある。女々しいが、それも悔しい。

もちろんそんなことを言うわけにもいかない。

かわりに関崎がどんどん突っ込んでいってくれた。

「じゃあ、古川は結論としてどうもって行きたいわけなんだ？」

「結論ねえ」

とつとつと、クラシック音楽のテンポで語る関崎。

「事情は今の説明でいたい把握した。つまり、古川としては、現状の噂をそのまま流しておいて、七十五日の噂消滅まで何もしないでおこう、そう言いたいんだな」

「露骨だねえ。でもそうさ、その通りだよ。渋谷さんがこれ以上手首をかみそりで切らなくなるまでは、とにかく杉本さんにがまんしてもらうしかない、そう判断したわけよ」

——やっぱり流れは杉本に罪を押し付けるってことか！

黙っているわけにはいかず、上総も参戦した。

「杉本はそうしたらひとりだけ惨めな思いをしろってわけか！」

なだめるようにこずえが上総に首を振った。永年の付き合い、お守りされているのがなんともいえず居心地悪い。関崎に気付かれてなければいいのだが。

「違う違う。だから、誰か杉本さんをかばってあげられるような場所をこしらえてやるのよ。斬り込み隊長はあんた、立村ね。今、私が聞いている限り、杉本さんには新しい友だちがいるって東堂から聞いてるよ。はたからは危なっかしいらしく見えるけど、けっこう楽しそうだって。あの子たちは少なくとも杉本さんのことを嫌ったりしないし、こんなくだらないおねしょ騒ぎになんて耳傾けたりしないよ。だから、それでいいじゃないってこと。立村が杉本さんのためにやってあげたことと一緒によ」

つい一週間ちょっと前、霧島から何も聞いていなければ、こずえの言葉も頷けただろう。藤沖の事情を知らないままでいれば杉本に、「風の噂も七十五日」と言い聞かせ続けただろう。しかし、陰謀説をここまで聞かされてしまい、かつ杉本梨南のあまりにも酷い扱い予定計画には、何があっても頷くわけにはいかなかった。

「俺が杉本の同級生だったらまだなんとかできるさ。だが今はどうしようもないだろ？ 今の杉本の友だちも、俺の知る限り、かなりとんでもない女子らしいと聞いている。もちろん東堂が気に入っているくらいだからそれはそれでいい人だとは思うが」

不良娘・桜田についてももう少し情報を仕入れておいたほうがよさそうだ。

「しょうがないよ。立村、あんたはこういう顔しててもついているものついてるからしょうがないけどさ」

言われた後で下ネタだと気がついた。もちろん反応なんてするものか。

「女子っていうのはね、本当に信じてくれる人がひとりだけでもいれば、ちょっとくらいの辛い思いはがまんできるもんなんだよ」

こずえはゆっくりと、上総に語りかけるように続けた。

こういうのりって苦手だ。どことなく、お姉さん気分で語られるとなんだか上総自身が、できそこないの弟に格下げされているような気がしてならない。しかも目の前には関崎が興味深げに観察しているのだ。こっぴどかしいったらない。知らん振りをした。

「こういったら変だけどさ、あれだけ杉本さんがいじめられて来て、先生たちにも無視されて、たったひとりで戦ってきて、それでめげずに青大附中へ通って来てるのはね、たったひとり、は

っきりした味方がいたからなんだよ。立村、あんたはそれ、わかってるよね」

「だからといって、ありもしないことを叩かれて噂を七十五日待てというのは、人間としておかしいだろう？ 七十五日ったら、何ヶ月だ？」

即、関崎が答えを出してくれた。暗算だろう。

「二ヶ月程度だ」

悪いがこれも無視させてもらう。

「学校側は、夏休みもあるしすぐに話は立ち消えになるだろうと思っているからそんな流暢なことが言えるんだ。だが、杉本はもともといろいろな不利な立場に立たされる女子だってこと、古川さんも知っているだろう？ 佐賀さんが生徒会長に立ってからはなおさらだ。青大附属に高校以降もずっといる渋谷さんを大切に守って、どうせ公立に出て行く杉本なんかどうだっていい、って思ってるのか？ 杉本のプライドもなにも、ずたずたにしてもたいして問題ないと考えているのか？」

「杉本さんはそんなに弱くない、だからあえてそう私は提案してるんだよ。立村は杉本さんのことをか弱いと思いついでるけどさ、そんなくだらないことで壊れないよ。女子の方が強いんだよ。こういう時はさ」

「古川さん、それは間違っている、杉本は」

「何もあんた、そうやって女子を下に見たがるのやめなさいや」

「そういうわけじゃない！ もし杉本がそのことで反対にスーパーの屋上から飛び降りたらどうするんだよ。その時、責任取れるのか？ 絶対に杉本は死ぬような子じゃないから、罪を擦り付けました、予想外でしたって開き直るつもりなのか？ 今、たった今、杉本がどう感じているか、古川さん、百パーセントわかるわけもないのにさ」

「そんなに弱くない子だってあんたのほうがいづつも理解してるはずだよ。そんな弱虫だと思われると知ったら杉本さんきっと、立村の顔面ひっぱたいてついでに大事なところもぶったぎってとんずらしちゃうよ、それくらい想像つくでしょうが」

「違うんだ、古川さん、最初から話を聞いてくれ、つまり」

——古川さんはわかっていないんだ。佐賀生徒会長が本気で杉本を叩きのめしたら、今度こそ杉本はもう立ち直れないかもしれないくらい、傷を負うってことを。

いきなりルーム内に強烈な砂嵐音が響いた。鈍いものを叩きつけるような音、と同時にキーンとハウリングも。

関崎がこつん、とガラスのテーブルをマイクで叩いていた。

真顔で上総とこずえにマイクを向けた。

「直接、杉本さんにどうしてほしいかをどうして聞かないんだ？」

完全に外部の人間として無視してきたのだが、やはり入ってこられるとどうしようもない。関崎にはかなわない。このまま相手にしなかったら、こいつはまた何をしでかすかわからない。今度は演歌にこぶしきかせて歌われるかもしれない。想像つかないのでまずは黙った。

そんなこと思われているとも知らずに関崎は続けた。

「だいたい話はつかんだ。立村、古川。お前たち二人の言い分はよくわかった。だが、結局一番ないがしろにされているのは、杉本さんじゃないのか？」

同じハウリングのような音が、身体中に響き渡った。

突きつけられているマイクは、ナイフのように見える。

みぞおちをぐっと突かれたらこんな衝撃を受けるのかもしれない。かろうじて答えた。

「関崎、それは俺に対して言ってるのか？」

上総にしっかり真正面に向いて、関崎は頷いた。

「そうだ」

——ふざけるな！ 関崎、お前にそんなこと言われる筋合いなんてない！

叫びたい、マイクを引たくって思いっきり殴ってやりたい。

でもできない。身体がこわばりすぎて、動けない。

「第三者の目から見ると立村、お前は杉本さんの立場を代弁しているように見えるが結局は古川の言う通り、藤沖へしっぺ返しを食らわせているように思える。女子たちの件はおいといても、藤沖に対してはもっと、話を聞いてやるべきだと俺は考える。それと古川、お前も杉本さんからいろいろ話を聞いてるといって、結局何を彼女が求めているのかが、正直はっきりしない。周りはいろいろ取りざたするが、学校なり周囲なりの意志ばかりが働いて、本来杉本さんがお前らにどうしてほしいのかがさっぱりわからない。まずは、それを確認すべきじゃないのか」

交互に上総とこずえの顔を見やりつつ、とつとつと関崎は語った。

「でもさ、そんなのわかりきってることじゃないのさ。女子からしたら、恥ずかしい噂なんてさっさと忘れてほしいに決まってるじゃん。杉本さんだって本当は白黒つけたいじゃん。でもそうしたら」

言いかけたこずえに、関崎は反論できぬほどきっぱり断言した。

「それはお前らの思い込みだぞ。もしそれが外れていたらどうするんだ」

こずえだけではない、上総にも。

「俺ならまず、杉本さんの要望を聞く。その上で、俺がどうしてほしいかを訴える」

そんなことは、上総自身が何度もやっていることだ。何も知らない癖に、正論ばかりだ。

上総は関崎に問うた。答えによっては許す気などない。

「関崎なら、どうしてほしいと、あいつに言うんだ」

ためらうことなく関崎は答えた。

「人も死なせずにすんで、プライドも守られる方法を、一緒に考えてほしい、とだ」

——そんな方法、あるのかよ。

平然と言い放つ関崎に、どう伝えればいいのかのさ。

この正論を、当然のごとく目の前に差し出そうとする関崎に。

杉本梨南は本当に、関崎のことを。

——関崎のことを、杉本は今でも、この瞬間においても想っているのに。

杉本の欲しいものを持っていない相手なのに、どうして。

上総の耳にはただ、具体的提案がずらずらと流れていくだけだった。関崎乙彦の提案は、きっと菱本先生や貴史、美里なら納得するに違いない。目の前のこずえもきっと乗り気だ。上総が受け入れられないだけだった。そういうもののほとんどは杉本だって嫌いははずだ。自分を思われていなくとも、感じる感覚だけは同じだという自負があった。でも、関崎の言葉なら。たったひとり、杉本梨南の支えであるこの男の言葉なら。

——どんなに合わない感覚であっても、杉本は関崎の言うことなら、受け入れるのだろうか。辿り付いたひとつの結論。天井に回りつづけるミラーボールの破片を見上げた。一瞬だけ曇った。

「ただ、彼女にも、すべての事情は伝える必要がある。藤沖が毎日見張りをしないといけないほど渋谷という女子が追い詰められていることなどは必ずだ。その上で、これから先ベストな方法を取りたいのだが、いかがだろうか、と持っていく」

「ベストな方法ねえ」

「もちろん、その方法でも渋谷という女子が傷つくのかもしれないだろう。だが、人間、誰だってあったかい気持ちはあるはずだ。人前で寝小便の布団をさらすような真似はしないだろう。立村、そんな女子じゃ、ないんだろう？」

かつて、杉本梨南から葉牡丹を差し出されて想いを打ち明けられた、たったひとりの男子。

そいつを目の前にして、答える言葉などなかった。

「方法だったら、たとえばだ。俺ならまず、藤沖、立村が立ち会う中で女子同士の対面をさせて、その上で話し合いをさせる。もし必要だったら彼女たちの友だちを同席させてもいい。とにかく、とことん話し合わせる」

「どつぼにはまるよそんなことしたら」

「人間同士、心があるはずだ。そんなことで壊れたりなんかしない。その場所をあえて、学校の外なり、人目につかないたとえばこういうカラオケボックスとか、そういうところに設定する。そこでばれないように話をすれば、まずこれ以上酷い噂は広がらない。その上で互いに納得した声明文を発表するなり、そのまま七十五日を待つなり、それぞれの価値観で判断すればいい。あとは、女子同士で決めることだ」

裏のないまっすぐな表情で、関崎は止めを刺した。

「本来信頼するとは、そういうことじゃないのか、立村」

隣で古川こずえが心配そうに覗き込む。気付かれたくはなかった。

「信頼、ねえ。立村、あんたどう思う」

かろうじて返すのがやっとだった。

「杉本自身の、判断か」

もし杉本が他の男子に言われたとしたら、即つっぱねることを確信している。

何も知らない無責任な発言として無視するだろう。

それが杉本梨南の矜持だ。

でも、たったひとり、そのプライドを翻させることができる奴が、目の前にいる。

本人は特に杉本に対して何かを感じるでもなく、一応人称に「さん」はつけてくれるけれども、ただの下級生としか思わずに案を提示しようとする。

杉本にとっては、たったひとりの「救い」であるというのを、本当にこいつは気がついているのだろうか。

上総は俯いた。目を閉じた。何かが激しく渦を巻いていた。振り上げるところがわからないこぶしを膝に置いた。こずえが話し掛けてくるが、それすら耳に入らない。

「私は、関崎の案、なるほどなって思うけどさ。話せばわかってくれる子だとは、思うよ」

「筋は通すからな」

——理不尽でも約束は守る、それが杉本梨南なのだ。

「私ら先輩たちがわたわたするよか、直接杉本さんにどうしてほしいかを聞くのは、確かに早道だよな。あの子、学年トップ今だに守ってるしさ。賢い子だからどうしてほしいかは答えてくれると思うよ」

——佐賀さんや新井林のような友だちに本当は囲まれたくて、でもそれは決して許されない。そして今は関崎のことばかり考えて、それすら受け入れてもらえない。誰も、気付かないんだろう。どうして俺しかその答えが見えないんだろう。どうして、関崎は、気付こうとしないんだろう。杉本が欲しがっているのはそんな、奇麗事の正論なんかじゃないというのに。

マイクに目が留まった。きっと関崎には人並み以上の音感が備わっている。一生杉本梨南と一緒に歌う機会なんてないだろう。本人すら意識していない音程の外れ方を、憧れの関崎に聞かせる必要なんてない。関崎はひとりで、いや誰かと一緒に仲良く、「砂のマレイ」を熱唱していればいいのだ。

上総はそっと財布を取り出した。あとで割り勘にするのも面倒だ。千円あればこずえがうまくなんとかしてくれるだろう。

千円札を一枚、ガラスのテーブルに置いた。関崎に告げた。

「時間、まだあるだろう。関崎、もう少し歌っていけ」

こずえと一緒に関崎が、はっとした表情で上総を見返した。何かを言いたそうだった。心配そうなその表情が、なお重たかった。こずえがすぐに返事した。

「ああわかったよ。あとでもっかい電話で連絡するよ」

戸を閉める際、上総は思い出した。杉本梨南がこよなく愛したオペラの題名だった。

——ローエン格林か。

ローエン格林関崎の言葉なら、いくさおとめ杉本梨南は素直に矛を収めるだろう。

どんなに理不尽な言葉であったとしても。

それに気づいているのは、今のところ上総と、佐賀はるみだけのはずだった。

机に向かい、引出しから取り出したる手帳。

ページをめくればすべてがドイツ語で綴られている。

誰にも読まれないう、万が一見られてもすぐには内容が理解できないように。

上総は机の上にそれを開き、ボールペンを握り締めた。

一瞬、ボールペンの先を紙の上に留め、黒い点をこしらえた。

書き始めたらあとは、時が止まった。。

——自殺未遂をした女子のためになぜ、杉本が犠牲にならねばならないのか。僕には理解ができない。もちろん不幸な事故だったのだろうし、一番辛い思いをしているのは当事者の彼女だろう。しかし、だからといって全く関係のない杉本がなぜ巻き込まれなくてはならないのか。もっと別に、彼女を守るために方法があるはずだ。

たとえば学校側で、誰か友だちに頼んで彼女を守るように指示をするなど少し考えるだけでもいろいろあるはずだ。すでに藤沖がなんらかの形で絡んでいるわけだから、他の女子たちに指示をして、決していじめないように守るという手もあるはずだ。

生徒会役員同士のごたごたについては霧島の言い分もわからなくはない。相当霧島も彼女に責められたり嫌がらせされたりしたのだろう。女子の考えていることは殆どわからないが、霧島ももう少しやんわりと縁を切る方法はなかったのだろうか。露骨に彼女の失敗をあげつらい罵倒する以外にまだ、要領よく遠ざけることはできたはずだ。

たとえば、佐賀さんに頼み込んで他に交際相手がいるなどと説明するのも一つの手だろう。霧島が女子に人気のあることは、僕も聞き知っている。ひとりかふたり、誰かと付き合ってしまったら既成事実が出来上がるわけだから、彼女も納得したのではないだろうか。

僕の視点からすると、この出来事で彼女を守る方法はいくらでもあるはずだ。

なのになぜ、杉本にだけ、罪をかぶせようとするのかが何度考えても納得いかない。

学校サイドもおそらく、将来いなくなるであろう杉本のしでかしたことと決め付けておけば、犯人探しも収まるしもともとなかったことにもできると考えたのだろう。

だが、このままでいいとは思えない。

杉本はここできちんと、真実を学校内できちんと表明し、そういう事実はなかったのだと言い切る必要がある。このまま杉本が恥をかかせられる格好で卒業させられるのだけはなんとしても避けねばなるまい。

同時に、彼女の度重なる自殺未遂も防がねばならない。

古川さんは杉本が濡れ衣させられっぱなしを受け入れない限り、彼女の精神状態が落ち着くことはないと話していたけれども、僕はそう思わない。両立させる方法はあるはずだ。かならずあるはずだ。いくらでもあるはずなのになぜ、誰も気付こうとしないのだろうか。

限りなく英語にそっくりで、でも前置詞や動詞の置き場所は後回しになるドイツ語。

一気にここまで書いて、一本の糸を吐くように息をついた。

——そうだ、ふたりとも助かる方法、いくらでもあるのにさ。

関崎の脳天気な歌声が今だに耳に残る中、上総はボールペンを置いた。窓は網戸のみで十分風が入ってくる。目の上がなんとなく熱くなるのを感じ、目じりを押した。

——やはり事実関係をすべて洗い出さないといけないのかな。

本当のことを言えば、杉本さえ守られれば事情を突きつめて知る必要はないと思っていた。しかし、これだけ話が大きくなるとそんな流暢なことも言ってもらえないだろう。杉本が潔白である以上は、誰が犯人でどのようにして杉本の泊まり部屋に例の布団を持ちこんだのかまで調べ尽くさないと納得できないに違いない。杉本梨南だけではなく、上総自身もそれは強く主張したいことのひとつである。

——さもないと、ほんのほころびひとつから。

佐賀はるみが知恵をつけて藤沖たちが立ち上がる。いろいろ藤沖にも思うところはあったらしいが、それこそ上総にはどうでもいいことだ。もし藤沖が渋谷名美子をかばいたいのであれば、その出来事が実際にあったことと認めた上で、彼女を守る方法を考えるべきではないだろうか。全く関係のない杉本から引き離す形で問題を処理することは、いくらでもできるはずだ。それをさせないで、一番安易な方法……杉本梨南に罪をかぶせる……のを選ぶのは、思慮不足としか思えない。

——もちろん、それが一番わかりやすく丸く収まる方法であることは認める。

杉本がしでかしたと、と決め付けられれば周囲の対応も楽になるだろう。

嫌われ者がやらかした失敗なのだから、多少軽蔑されてもかまわない。

ひとつやふたつの失敗じゃないのだから、嫌ってもかまわない。

どうせいなくなるのだから、無視しても構わない。

そういった空気が杉本の周囲を囲んでいるのは感じている。

——でも、そうはさせない。

安易な発想ですべてを片付けさせはしない。

上総が手帳を閉じ、読み返さずに引き出しへしまい込んだ時、居間の電話が鳴った。

受話器を取ると、つい数時間前まで剣呑なやり取りを繰り返していた女子の声。

——立村？ 本人？

「何か、あったのか」

まさかとは思いますが、密室で関崎が熱唱しすぎて酸素が足りなくなったとかそういうことでも起こったのだろうか。もちろん電話の向こうはこずえである。やけに重たい声なのは、何か異変の予感が漂うのだが。

「あるよ。悪いけど立村、明日なんだけどさ、朝六時半に学校まで来ることができる？」

いきなりわけのわからないことを言う。

「行けるわけないだろう、何時に出ろって言うんだ」

——杉本さんがね、六時半から学校始まるまでの間に話をしたいって言ってるのよ」

「なんでいきなりそんな話になるんだ？」

どうやら関崎とは関係がなさそうだ。上総も予想が外れて言葉が揺らぐ。

電話の向こうでは、疲れきった声がさらに重たく語りかけてくる。

——さっきさ、関崎のオンステージを堪能してからあいつを追い払って、それから杉本さんに電話をかけたのよ。いたよ。話つけたのよ。

「話をつけるってどういうことだよ」

文字で綴った後だけに、杉本への対応に関してのみ、きっちりと答えが出ている。揺らがない。

——私たち外野がああだこうだ言っても話は進まないでしょうが。一度きっちりと杉本さんに、その提案をまず持っていけばどうかなって思ったのよ。

「悪いが古川さん」

上総はきっぱり断った。

「俺はそんな話し合い、出る気なんてさらさらないよ」

——杉本さんがいるっていうのに？

「あたりまえだろ、そんな朝早く誰が行ける」

——関崎が朝五時半からバイトしてるの知らないの？

言葉に詰まる。まさに事実。苦学生の生活を知らぬわけがない。

「関崎と俺を一緒にするのはまずいと思うよ」

——まあね、持久力、肺活量の差ははっきりしてるよね。でも一刻も早く面倒なことは片付けたほうがいいよね。あんたさ、期末試験の準備してるの。英語はともかく、理数課目。

「関係ないだろ、そんなこと」

——数学なんて、中学の時の狩野先生みたいに手取り足取り腰取りしてくれるわけじゃあないんだからね。私だってできたら期末試験前に終わらせたいよこんなこと。みんな同じこと、思ってるんじゃないの？

関係ないだろ、舌打ちしてしまう。おそらく次回数学が平均点以下だったら即、赤点決定だろう。父はともかく母がうるさいのは目に見えている。

上総がしばらく黙り込むと、こずえは勢いを取り戻しいつものパワーで畳み掛けてきた。声が少し低めなものもあって、聞き取りやすくはある。

——それ、杉本さんも同じこと考えてるよ。私たちは高校生だから中学の状況がわからないけど、どっちの道を選ぶにしてもすっきりしないと勉強に専念できないじゃん。男子だったらすっきりするためにエロ本があるし、夜の一発抜けば爽やかな朝が迎えられるかもしれないけど、女子にはねえ、そんないい方法ないんだから。

「早い話、杉本にそのことをすべて伝えたのか。つまり、その、すべて濡れ衣を着たままでいてくれって。杉本はそんなこと了解するわけないだろ！」

電話をがっちゃり切りたかった。

——時と場合による、って言ってたよ。

切ることができなかった。聞くしかなかった。結局上総はいつも、姉さん役のこずえに頭があがらないのだ。

——杉本さんはね、自分が納得したいだけなのよ。

こずえの言葉が低く響く。

——自分が何も悪いことしているわけがないって自信があるし、それは自分が気付いていればいいことだからって思ってるよ。ただあんたがさ、とことん戦えって命令してからどうもその考えが変わったみたいね。

「俺が悪いのか？ 正論伝えただけだろうが」

——まあね、正論だよ。ただクラスの女子たちの前で、堂々と「それをした人は他にいとみなわかってるんでしょう」とか言われたら、もう二度と渋谷さん、外に出られなくなるよ。そうだ、あんたに言い忘れてたけど、もしもさ、杉本さんが渋谷さんをずったずたに傷つけて再起不能にしたとしたら、次の瞬間藤沖がどう出るかわからないよ。

「藤沖がか」

——そう。明日、藤沖をとっつかまえて取り調べするつもりだけど、やっぱりあいつは本気だよ。さっきも言ったよね。あんたが卒業間際に杉本さんのために、スケベなチンピラ顔してとことん女子を罵った話。理由がわからないわけじゃないし裁く気なんてないけど、もし同じことを杉本さんにされたら、あんた理性飛ばずにすむわけ？

どういうことだろうか。最後の評議委員会で佐賀はるみに対し、佐川の存在を臭わせるような発言で動揺を誘った時のことだろうか。こずえはあの現場にいなかったはずだから、おそらく美里か貴史から聞いたのだろう。

——それにさ、立村、あんたは今、なんの役つきでもないじゃん。

次の言葉に、ぴりりと鼻の奥が痺れた。

こずえの言葉は全く驚くところなし。

——藤沖は評議だし、元生徒会長だよ。あんたもよく知ってるよね。附属生にとって、一番のステータスは過去の委員会経験だって。関崎はわけわかんない顔してたけど。もし藤沖が本気で怒って、杉本さんを粛清しようなんて思ったらどうする？ 生徒会役員、そうだね、佐賀さんを筆頭にいろいろいるからね、ほら、あんたの天敵・風見さんって子もいるじゃん。その他よくわからないけどいろいろいるからさ。最近霧島があんたに近づいてきてるのだって、もしかしたらそのあたりが理由かもよ。

ちん、と響いた鈴の音のようなもの。ちょうどてっぺんで響いたように聞こえた。

——やはり、霧島は、生徒会からの刺客か。

想像はしていたし、期待もしていなかった。なのになぜ、目の奥がまたちりちりと痛くなるのだろう。

——恋する男が一番やっかいだったのは、私もうちの父ちゃん通じてよおくわかってるからね。驚きやしないけどそれで周囲に大迷惑かけられるのは、悪いけどごめん。藤沖は今、彼女を守りたくてなんないのよ。守ることに目覚めちゃってるから、もう一般常識が通じないのよ。あんただって自覚なかったでしょ。あ、いまもか。

「俺と藤沖を比べるのはやめてくれ」

——だって、似すぎてるじゃん。あ、電話切っても私はハブだからとことん掛け直すから覚悟しな。とにかくね、これ以上ごたごたを長引かせることは、杉本さんにとってもちっともプラスになんないと私としては判断したわけ。

「だから俺をあんなところに呼び出して」

続く言葉は上総も同感だった。

——関崎おとひっちゃんのオンステージを堪能したってわけよ。

ふと、「おとひっちゃん」との呼び名に顔が半分緩みそうになる。

佐川がよく、関崎のことを「おとひっちゃん」と呼びかけていた。

青大附属でそのあだ名を使ったことは、今までなかった。

「関崎を二学期の合唱コンクールで活躍させるべきだというのは俺も理解した。けど、今の話とは別だろう？ 関崎をなんで古川さん、呼び出す必要があったんだ？」

上総の疑問はやはりそこに留まる。

杉本の想い人だからか。

——あいつ、藤沖の様子が変わってことに気付いてたのよ。それがきっかけ。

「関崎がか？」

——そ。意外でしょ。関崎ね、藤沖が千代紙細工の修学旅行土産グッズを持ち歩いているのにまず驚いててさ。

右手を握り締めた。手相の三角州に一度埋まった千代紙のリングの感触が甦る。

——次に、立村と藤沖との間を心配してたね。余計なお世話だとは思うけどさ、どうも関崎の奴、あんたにもう少しくラスに馴染んでいただきたいと思ってるみたい。それとできれば、藤沖ともう少し、人間らしい会話を交わしてほしいってね。

しつこいようだが、余計なお世話だと思う。

藤沖にも、また今は上総にも、無視をしあうちゃんとした理由があるのだから。

——まあ私も、妙だとは思ってたよ。藤沖がしょっちゅう、評議委員会さぼって中学校舎に行くからね。さらに中学校舎であの、いがみあった渋谷さんと帰ってるんだよ。おかしいと思うよね、普通はさ。

関崎の心情を汲み取れないわけではない。外部生ゆえに、附属生同士の間関係のゆがみがやはり、醜く思えるのだろう。だが、それはそれで自分たちが納得済みのことだ。口を出される筋合いはない。

——しかし、関崎が気がついていたとは思わなかったな。

何にも考えていなさそうな関崎が、藤沖のかすかな変調を読み取ったとはまず信じられなかった。単細胞のシーラカンスと呼ばれていた関崎だが意外な一面だ。

古川こずえはゆっくりと、上総の内面に語りかける。

——いったん杉本さんにも話を聞いて、それから次に、霧島捕まえて生徒会事情について聞いたわけ。関崎をひつつれてね。関崎もあまり人の色恋沙汰に首突っ込みたくなかったようだけど、あんたのためだよ、立村のために、ってね。その男気はわかってやんな。ほらほら、余計なお世話だって言いたいんでしょ。わかってるよ。けどあんたもいいかげん元服式終了のお年頃なんだからそのあたりも、黙っててやんな。

「知らなければいくらでも黙っていられたさ」

ぶつける。受け止めるこずえは懐が広い。

一方の上総は、再び出てきた霧島の名に、息を止めてしまっている。自分でも気がつかないうちに、息を呑んでいるのが情けない。

——ゆいちゃんのこともある、私もさ、霧島にはしょっちゅう連絡取り合ってたわけ。なんかあいつって、立村ほどじゃあないけど、うちの弟に似てる箇所が結構あってさ。

「弟だらけだな」

皮肉を言うが全く介しない。

——だから、生徒会事情とか結構聞いてたわけよ。将来、関崎とも顔を合わせる機会あるだろうし、杉本さんの件であまり関係なくても、顔合わせはしといたほうがいいと判断したのよ。

先読みが早い。確かに、もしも上総が評議委員の座についていれば、関崎を後輩たちに紹介しておいただろう。こずえにアドバイスしたことあったらどうか。覚えていない。

——霧島はねえ、佐賀さんにべたぼれだから、渋谷さんのことなんて眼中にないわけ。だから相手にしなかったけど女子にとってはそんなことであきらめられるわけないよね。

「古川さん、妙に実感筆ってる」

——でしょでしょ。とにかく、霧島から生徒会事情と、杉本さんがシロだってことをはっきりさせて、関崎に本当のことをすべて話して。

「ちょっと待てよ。本当のこととはどういうことなんだよ」

——つまり、修学旅行のおねしょ事件で流れた、杉本さんに関するデマは全くの嘘ってこと。それと、藤沖の彼女がしちゃったってことと、だから藤沖が懸命にナイトになろうとしてるってこと。関崎はちゃんと、理解してくれたよ。

こずえは繰り返した。

——関崎は、杉本さんが潔白だってこと、確信してくれてるんだよ。

上総にはその言葉が、すべてだった。

声が出なかった。

——ちょっと、立村どうしたの。

何十回、何百回杉本梨南に伝えても、上総の言葉では信じてもらえない。  
関崎ならば、一度ささやくだけですぐに通る、その現実。

「つまり、そういうことか、古川さん」

——ちょっとお、泣いてるのあんた！

泣いてるものか。片目だけをこすり、あえて平静を保ちつつ上総は確認した。

「関崎が信じているならば、杉本は喜んで罪を被るとでも言いたいのかよ！」

——何怒ってるの、あんた少し落ち着きな。私はただね、杉本さんが何をしてほしいのかを考えてるだけよ。立村が言うようにどんどん叩きのめすのもひとつ、だけどそうしたら杉本さんは、また嫌われてしまうんだよ。また別の形で噂が流れるんだよ。杉本さんは一度失敗した人を許さずに叩きのめす、人間としてしてはならないことをした人だって。そういう噂が流れたら、関崎が今度どう思う？ 関崎の性格はあんたもよくわかってるでしょうよ。

「あいつは、まっすぐな性格だからな」

——汚いやり方やいじめのようなことをする女子は、あいつ大嫌いだよきっと。

上総は居間に下がったシャンデリアを眺めた。

母の好みで無理やりとりつけられ、一度上総の家を訪れる客人はみな、啞然とする代物だ。震度五以上の地震がきたらその段階でガラスの破片と水銀が部屋一面広がりそうなほどのどでかさだった。

受話器を握り締め、そのシャンデリアを見据える。

どこかから来る未知の世界の宇宙船のようなものに見えてきた。

耳に響くこずえの言葉と一緒にシャンデリアの光がところどころ揺らぐようだった。

——だからさ、一刻も早くだよ！

力をこめて古川こずえが訴える。

——これ以上誰も傷つかないですむようにするため、先輩の私たちが一肌脱ぐのよ。杉本さんもプライドを傷つけられず、渋谷さんも死なずにすんで、藤沖が評議委員会の仕事をちゃんとやってくれて、立村、あんたも。

もし言葉が続いていたら「いいかげんに俺にかまうな！」と怒鳴っていただろう。

ぱたと、言葉を留めた。

——とにかく、明日、六時。高校の校門で待ち合わせ。さあ、さっさとあんた風呂場でいい女の子のエロ本で一発抜いて、すっきりして寝なさいよ。早起きしてもらわないと、ほんと困るんだからね！

答えを待たずにこずえの受話器を置く音が、こちり、と聞こえた。

——俺だっていくらでも、人を傷つけないですむ方法くらい考えられるさ！

不覚にもまた、口籠もってしまった自分が情けない。泣き虫だった自分がまだまだ居座って

いる。涙のつぼをいったいどこで押されてしまったのだろうか。上総は左手でもう一度目を拭いた。泣いてしまうなんて男らしくないと、もちろん育てられてきたのに、自分の意志とは別のところで潤んでしまうのが止められない。

天井のシャンデリアをにらみつけ、部屋に戻った。開け放った窓からカーテンがかすかに揺れている程度の風。引きちぎれそうな勢いでカーテンを閉めた。

本棚に立てたままの本を一冊、取り出した。

「キャリアOL」の、霧島から預かったグラビア写真集だった。

——悪いが俺の好みじゃない。

ページをめくらず、そのままカバーを裏返しにし、もう一度袋に戻した。

——もう、話すことはなくなるだろう。早めに返したほうがいい。

やたらと甲高い声で、「女子なんかと付き合うのは、時間の浪費ですが、能力のある女子ならば話は別です。たとえば……」などと一方的に演説しまくる霧島の話は、黙って聞いている分にはいやではなかった。しかし、そこに別の目的があるのならば、もうこちらから願い下げたほうがいい。杉本の敵になるであろう相手ならば、今だけ先輩としていい顔をしていたとしてもあとで叩きのめすはめになる。勝ち目はなくとも、ざらつきは残る。

——いずれ、敵になるんだったら、早いうちに離れたほうがいい。

鞆にしまい込んだとたん、また勝手に瞳がうるんだ。

——最近霧島があんたに近づいてきてるのだって、もしかしたらそのあたりが理由かもよ。

こずえの鋭い答えを、どうして上総は今まで気付かずにきたのだろう。

机の引出しからもう一度手帳を開き、ドイツ語で殴り書きした。

——懐かれたことをそのまま受け入れた僕が、愚かだった。

夜が日ごとに寝苦しくなっているのは、ただ夏の気配が部屋に居座っているだけではない。瞼を閉じたまま意識がもうろうとしたまま朝を迎え、上総は自動的に身支度を整えた。

——朝六時半とか言ってたな。

父がすでに起きて、コーンフレークに牛乳をかけて混ぜ合わせていた。わざわざ干しぶどうと蜂蜜もトッピングしている。トマトを脇に置いたまま、

「おはよう」

いつもの挨拶だった。上総は口籠もりながらその一言をごまかし、テーブルに向かった。

「先生、お元気か」

いきなり思い出したくもない話題を振られて、自分の食事……同じくコーンフレークだが……にむせた。牛乳を一気に飲み干した。

「人のことは興味ない」

「麻生先生はいい先生だからな。お前も少し考えろ」

——何が考えろだ。

上総は完全に無視したまま、スプーンでコーンフレークをかきこんだ。父の手元にある袋にはいったままの干しぶどうをひったくり、適当に放り込んだ。

「はちみつもあるぞ」

「甘いのは好きじゃない」

「ああ、それとだな、上総。来週母さんが泊まりにくるから、その準備だけたのんだぞ」

「また来るの？」

うんざりしてくる。爽やかな朝の目覚めが吹っ飛ぶ。つい先週さんざん部屋を片付けるという名目でかき回していき、罵倒するだけ罵倒して去っていったあの母がだ。

「悪いけど、期末試験もあるから母さんの相手はしてられない」

「しないとご機嫌斜めなんだよなあ」

確かにその通りではあるのだが。暫くスプーンをくわえたまま上総は考え込んだ。

「たぶん、七月下旬に例のゆかたざらいがあるんだろ。それに俺がまた手伝ってことになるんだろ？」

日舞の簡単なおさらい会の一種で、お弟子さん全員がおそろいの浴衣姿で舞うちょっとしたお食事会だった。毎年上総も、母の命により荷物運びおよび片付けの手伝いをさせられていた。もっとも、

「今回は『おちうど』の座敷でやる程度だから、そんな手伝いいらないと思うけどさ」

食事は『おちうど』内でまかなう形になるはずだ。

「母さんにもいろいろ考えることがあるんだらう。とにかく、覚悟はしといたほうがいいぞ、それと、見られたくないものは隠しておいたほうがいい。いろいろあるんだらう」

毎度のことだ。危険なグラビア本やらなんやらはすべて引き出しの中に押し込んである。常識を知らない母のことだから、うっかり日記を見つけられたらしゃれにならない。そのために上総

は毎日、日記の文章をドイツ語で綴っているのだ。保身ともいう。英語ならともかく、ドイツ語を母が読解できるとは思えない。

深めの皿に残ったうっすらとした牛乳を、スプーンで掬い取り、上総は食事を終えた。

「もう行くのか」

「朝、バイトしている友だちがいるから、そいつに会う」

別に説明なんか父にする必要はないのだが、つい口に出てしまう。父は小さな声で感嘆の意、「おお」を呟いた。

「バイトをしている子がいるのか」

「古本屋で」

もちろん関崎のことである。

「学校の許可はもらってる」

「偉いなあ」

偉いも何もあるものか。なんだか自分を貶められたような気持ちになり、早朝から腹が立つ。自分の小遣いくらいもちろん自分で稼ぎたいけれども、そんなことが許されないことくらいわかっている。つつい、言い訳が口をついて出る。

「うちの学校は学費を稼ぐとかそういった理由がなければ、アルバイトを許してないんだ。友だちは外部生だから、うちの学校の学費を稼がないといけないからであって」

「ああ、上総、お前には卒業までアルバイトなんかさせる気ないから、そんな言い訳しないでいい」

父は話を強引に断ち切った。

「学生のうちは、勉強のことだけ考えていけばいい。社会に出たらいやというほど、仕事漬けになるんだからな。学べるうちに、学んでおけ」

——父さんの説教なんか、聞きたくないさ。

聞こえなかったふりをして家を出た。「ふり」しかできず、「聞き流せない」自分がいやになる。

まだ気温はさほど上がっていないようだった。自転車のペダルを踏んでも居心地悪い汗が流れてこない。むしろさらりとしたパウダー状の風がまとわりつくようだった。父との不毛な会話が切り替わり、すぐに別のことへと思考が動く。

——杉本は本当に来るのだろうか？

昨夜の会話がどこことなくぎこちなかったのを思い出し、また鬱陶しい気持ちになる。

——古川さんがどういう説得をしたか想像つかないけど、杉本があっさり無謀な条件を呑むとは思えない。

一晩置いて考え直してみたけれども、やはり杉本梨南にとって不利な提案であることは否めない。もちろん、古川こずえの言う通り、「関崎は信じているから」の一言で素直に頷く可能性は高い。だが、それを受け入れたところで杉本梨南になんのメリットがあるのだろうか。

——修学旅行の失態を否定しないで押し付けられたまま流す。こちらが黙っていれば、向こうだっていくらでも捏造できるわけだからな。

楽天的に考えすぎているんじゃないだろうか。

視点がどうしても、自殺未遂を繰り返しているらしい渋谷名美子に向かっているのはしかたのないことだと思う。こずえの言う通り、一番大切なものは人の命だろう。

だが、杉本梨南の名誉と今後はどうなるのだろうか。

嫌われ者はこれ以上嫌われても、なんとも思われぬのだろうか。

さらに気になるのは生徒会内部の動きだ。

——俺が単純だったゆえに読みきれなかった、霧島の動きだが。

鞆の中には、例の「キャリアOL」のグラビア写真集を押し込んである。今日、もし奴が現れたら押し付けて黙って去るつもりだ。こずえや関崎と接していることに気付いていたら、上総もそうそう霧島を受け入れることはしなかつただろう。生徒会副会長でありながらなぜ、落ちぶれた元評議委員長に近づいてくるのか？ そのあたりの疑問をもっと深く考えるべきだった。

——俺を通じて、藤沖サイトの考えおよび杉本の弱点を探りにきたと考えれば、確かに話は通る。誰もまさか、興奮して鼻血出したところを見られて、それで懐きにくるなんて行動は、まずありえないことだろう？ 俺も最初はそう考えていたけれど。

胸の真中辺りに、拳骨くらいの重みがくる。

——俺はしっかり騙されたというわけか。

先輩として後輩を面倒みた経験は、あまりない。評議委員会の頃も、もちろん下級生の世話をする機会がなかったわけではないが、くどくどと人生相談されたり、一方的に甘えられたりとかそういうケースは殆どなかったと断言してよい。第一想像できやしない。順位立てしていけば上総の弟分に当たるのは新井林健吾のはずだが、奴が霧島のように家庭事情やらなんやらをべらべらまくし立てる姿は絶対にありえない。

——もう、信じない。

ようやく校門が見えてきた。自転車から降りてまずは高校へと向かった。六時十五分過ぎ。まだ女子ふたりの姿は見えなかった。

しばらく上総が自転車を置いた後校門をうろうろしていると、続々と運動部朝連に参加する連中が、Tシャツとジャージ姿……中には短パンも……で現れた。顔見知りの奴もいるが、あえて顔を伏せたままにした。みな、何かかしら用があって早朝登校することもざらなので、そのあたりはみな、大人の顔して見逃してくれる。

ふと見やると、グラウンド奥で奇声を上げる集団もちらほら見かける。

単にストレス発散しているのかと観察してみると、どうやら演劇部の発声練習らしかった。

「あ、え、い、う、え、お、あ、お！」

「か、け、き、く、け、こ、か、こ！」

——演劇部なんてうちの学校にあったらどうか？

上総の知るかぎり、確かなかったような気がするのだが。

背伸びして、さらに向こうを眺めようとした時、声をかけられた。

この一週間ほど、聞きなれた年下の声。

「中学では現在、演劇部が設置されておりませんが、現在外部生にあたる方々が同好会を結成されておられるようです」

またかしこまった、少しトーンの高い響きが耳に残る。上総は振り返った。

霧島が、片腕にブレザーを抱える格好で一礼し、上総の真後に立っていた。

「こんな朝早くに」

「立村先輩こそ、なぜこんなにお早く」

あっさり霧島は答え、かすかな微笑みを浮かべた。

やはりこれは怪しい。

——第一、俺が六時半に古川さんたちと話をすることを、なぜ気付いているんだろう？

理由は簡単、生徒会の裏工作担当者だからこそ。

そしておそらくは。

「例の事件で話し合うべきことがあったからだけどさ」

静かに答えた。霧島の反応を見た。

「例の事件、ですか」

「そうだ。生徒会を絡めた、修学旅行関連の話だけど」

歯切れが悪い。霧島の瞳を覗き込む。やはり姉弟なのかもしれないと思う。色白の、指で触ったら破れてしまいそうな肌も、日本人離れしている少し薄茶色の瞳も、唇の上品な薄さも、すべてが霧島ゆいに瓜二つだった。それでいてこいつはとことん姉を憎んでいる。その理由を一通り理解はしたつもりだが、じゃあなぜ上総にその話をしたがるのか、そのわけが読み取りきれしていない。

「決着をつけられるのですか！」

心なしか、霧島の口調にきらめきを感じた。

興奮と言うにはやはり何か違う。わざと押さえているわけでもないのだろうが、雲から日が薄く広がった風な輝きに近い。しかし「決着」とはどういう意味合いなのだろう。

「俺はつけたいと思っているけれども、そうなる则ちこれ以上君と話はいできないだろうな」

視線を逸らさず、上総は鞆から袋に入った本を取り出した。

「これ以上俺に近づいていると、生徒会側でも誤解するだろう。この本は適当に処分すればいい。もう来ないほうがいい」

「僕は、お伝えすべきことがあってお伺いしているのですが」

——やっぱりこいつ何考えているかわからないよ。

霧島は受け取ろうとしなかった。

「君が伝えたいこととは、本当のところ何なのかわからない」

上総も今は退くつもりなどなかった。

「この一週間ほどいろいろ情報提供してもらい感謝しているけれども、それによって君になんのメリットがあるのかとうとうわからなかったんだ。俺以外にも上級生はいるだろうし、君のことだから天羽とか難波とか更科とかとも話はしているんだろう？」

今まで「お前」と馴れ馴れしく呼び捨ててきたが、あえて「君」としゃちほこばってみる。

「だったら俺よりも、そちらと話を進めたらいいだろう、俺と話をしても何も徳になることはない。評議委員長だった頃ならまだ別だが」

「お言葉を返すようですが、立村先輩」

しばらく拝聴という顔でじっと耳を澄ましていたようだが、霧島はたてついた。

「まず、僕は先輩のお話を聞きにきたことは一度もありません」

「じゃあこの一週間は」

何が楽しくて朝から上総を追いまわしているのか、その理由を明確にしてほしい。

「僕が情報を提供するためにお伺いしたのです」

なんの情報提供なのか？ 少なくとも霧島家の姉弟げんかやのれん事情を提供してほしいと伝えたことは一度もない。あえて口には出さずに霧島の言い分を聞く。

髪の毛をさらさらに整えた気品に満ちた、いわゆる貴公子たる霧島。

動ぜず続けた。

「立村先輩がこれから先巻き込まれるであろうご事情を、僕は生徒会副会長の立場から見通しておりました。中学だけならともかく、高校に至るまでトラブルの火の粉が飛べば一大事、僕は生徒会役員としてかつ、高校進学された先輩たちのために、ご報告させていただいたわけです」

ずいぶん堂々たる態度である。きっかけがエロ本の鼻血事件とは、もう霧島の奴、すっかり頭の中からとっばらっているようだ。もちろん自信を取り戻したらそれはそれでいいだろうし、何も知らない上総だったら素直に受け止めるだろう。

しかし、本当の目的はなんなのだろう。

——やはり、佐賀生徒会長および藤沖の差し金なのか。

こずえの言うのを信じるならば、そうとしか判断できない。

かといって露骨に「俺に汚いやり方で取り入ろうとするとは不屈きな奴だ！」と怒鳴りつけるのも、上総には性に合わなかった。たぶん貴史や新井林だったらそのくらい罵倒して当然と思うだろうが、その言葉を発した瞬間の霧島の表情を想像するたび、ぎゅっと胃が締め付けられるように痛くなる。

——やはり、はっきり言ってやろうか。

自分の唇を前歯で軽く噛んでみた。

「あららあんたら、何やってんの、こんな朝っぱらから！」

迷いはそれこそお天気な女子の声によって吹き飛ばされた。

「立村、こんなとこで何してんのさ。それに霧島、あんたもまあ、ねえ」

いつのまにかふたりの側に近づいてきたこずえが、スカートのひだを少しつまむようにして、風の中に入れるような仕種をした。男子の前でやるものではない。

「あ、ああ、今行くから」

急いで答えると背中をはたかれた。文句を言う前にこずえは霧島の前でポケットに手をつっこみながら溜息を吐いて見せた。初対面どころか、すっかり馴染んだ雰囲気だった。

「古川先輩もお早いですね。昨日はどうも失礼いたしました」

霧島は貴公子風に慇懃な礼をした。かしくまった仕種を茶化すことのできるこずえ。

「なんか最近立村にやたらと張り付いてるけど、なんかあったのかねえ」

探りを入れる発言にどう答えるか、上総は横目で観察した。

貴公子は全く仮面を外さなかった。

「実は、先日先輩が街で落とされた本がございまして、それをお返ししたかったのです」

——俺が本を落とした？

仮面が崩れたのは上総の方だった。右手に抱えた紙包みを鞆につっこむべく一歩下がろうとするが、がちり片手でこずえに腕を押さえつけられた。これは最悪のパターンではなからうか。

——こいつ、何言い出すんだ？

「へえ、立村が落としたんだあ。で、どんな本？」

「男子同士の事情もあるので、申し上げられません。そうですね、立村先輩」

なんと霧島、とんでもない大法螺をふきはじめた。

「霧島、ちょっと待ってくれ、何を言いたい」

上総の制止も一切気にせず、貴公子はいつもの甲高い声で説明しつつ紙袋を指差した。

「僕はその内容を知ってますが、先輩以外の人にお見せするつもりはありませんので、早朝にお渡しする手はずを整えた次第です。が、先輩にはまだ僕なりにその本のことでお話ししたいことがございますので、またこれからもお伺いさせていただきます。古川先輩、そういう事情ですので、今後僕が高校校舎へお伺いする際には、必ず立村先輩を呼び出していただけますでしょうか。よろしく願いいたします」

一礼し、ちらと上総を見つめた。

強気な口調の奥で、怖がるような視線が刺さった。姉のゆいも同じ眼差しを見せていたように記憶していた。それと重なった。やはり弟だ、と言葉がよぎった。

「では、また明日、改めて」

こずえにしたのと同じ礼をした後、霧島はそそくさと校門へ駆け出していった。

——どちらにしても、また逢いにくるつもりなのか。

今まで感じたことのない、奇妙な肌触りの風が半そでの腕にからみついた。

こずえがさらに手首を握り締めた。色気はない。

「杉本さんは今、自転車置き場にいるよ。けどさ、その前に」

「頼むからいいかげん、その手を離してくれないか」

できるだけ刺激を与えないように頼んだつもりだったのだが、こずえは聞く耳持たずに上総の手首を振った。持っている指先の紙袋がずり落ちそうになる。

「さっき霧島が言ってたねえ、曰くありがた本を落としたってねえ」

「関係ないだろ、今しまいたいんだ」

「こんな朝っぱらに待ち合わせて本を渡さねばならないような内容ってことは」

「だからどうでもいいだろ」

ごまかしたいのだが、相手が悪すぎた。なにせこの方は。

「杉本さんにも、美里にも言わないから、ほら、見せてみ」

「いやだと答えたら」

「じゃあ実力行使だね」

上総が次の言葉を発しようとしたとたん、こずえは紙袋の下のみくいとひっぱり、すぼりと抜いた。しっかり押さえていたつもりだったがうかつにも、袋を本よりも一回り大き目のものにしてきたのが間違いだった。するりと本が地面へと落ちた。あせるよりもまずは拾う。隠す。願わくばこずえの目が一瞬だけ曇ることを祈るのみ。

——いや、もう遅い。

取り繕う間もなく、こずえは黙って上総の隠す様を観察し、ふうっと息をついた。

「あーあ、だからねえ男子ってのは」

しゃがみこみ、ひょいとその本を手を取った。

「何するんだよ」

「もうばればれだしいじゃん。それにしても、あんたってばこういうタイプが好みだったわけ？ 年上の、『キャリアOL』なんてのがさ」

「事情があるんだ、関係ないだろ」

言い訳したくともできない。第一霧島はなぜあんな、大嘘ついたのか理解に苦しむ。ほんのわずかに上総が油断したのを見逃さず、いかにも正当な理由がありげの言い分を提示して去っていった。あの堂々たる態度では、こずえも本当のことを見抜けまい。

——ばらしてやろうか、例の一件を。

ちらと頭を掠めるもすぐに打ち消す。

それができないのが、上総の弱み。

楽しそうにページをめくりしゃがみこんだままのこずえに、上総は背を向けて立ち上がった。もう勝手にしろ、である。

「あのさ、立村。この件は杉本さんにも、もちろん美里にも言う気ないけどさ」

「別にしゃべりたければしゃべればいい」

鞆を肩からひっかける格好で諦めの言葉をぶつければ、こずえは首を振って袋に入れ直した。

「しかし、まさかゆいちゃんの弟に、エロ本持っているところ見られちゃったとはねえ。先輩としてもう、頭上がらないんじゃないの。とんだとこであんた弱み握られたってわけよねえ。ど

うすんのよ。なんで立村のことを霧島があんな詳しく知っているのかって変だとは思ってたよ。けどねえ、下級生にばかにされるようなへまやらかして、ほんとあんたどうすんの」

ほら、さっさと鞆に入れて、とばかりにこずえは上総の鞆をひったくり、素早く詰め込んだ。「とりあえず今日は抜き打ちの持ち物検査もなさそうだから、うまくごまかすんだよ。いいね」  
ありがたいことにこずえはすっかり、霧島の作り話をそのまま信じてくれたようだった。下ネタ女王とはいえ、上総の好みが「キャリアOL」の真っ赤なスーツを着た、紐でしばかれるような女性ではないということを、把握してはいない様子だった。しばらくはそのまま誤解させておくしかないだろう。真実の「鼻血事件」を上総が暴露する気にならない限り、今のところは。  
——とりあえず、か。

杉本梨南の待つ教室へ、まだ青みのたりない空のもと上総はこずえと共に歩いた。

——また明日も来るんだろうな、霧島は。

これで霧島も、第三者たるこずえにまで上総訪問の了解を得た格好となる。いくら上総が追っ払ったとしても、簡単に退散しそうにない。しかも上総の「弱み」を握った形に持っていくとは恐れ入る。目的が何であれ、今の上総には霧島を突き放すことはできそうになかった。

——もし決定的な証拠が見つかったらそれはその時だけどさ。

佐賀はるみ生徒会長の差し金なのか、それとも。

上総にはまだ、「それとも」の続きが見つかりそうで、見つからなかった。

——霧島は明日、俺にどんな顔して話をするつもりなんだろうか。想像つかないな。

言い訳して謝るのか、それとも正当化して一方的にまた家庭の歴史を語りつづけるのか。どちらにしても、上総はただ黙って霧島の話に聞き入るしかないだろう。上総が霧島にしたことというのは、この一週間、それしかなかった。

とりあえず例の写真集は鞆の中に深く押し込み、こずえに従って向かった先は、なんとA組の教室だった。

「うちの教室で、まずくないのか？」

「ないよ。だってあんたが杉本さんにちょっかい出してるの、周知の事実じゃん」

こずえにあっさり返され、一言もない。

「中学で声をかけるといろいろと差し障りがあるし、早朝デートしていたんだってことにしておけば丸く収まるじゃん。それを見つけた私があんたたちにエロ事指南してたってことに」

「断るそれは」

冗談じゃない。顔を背けてシャツの襟を軽く直す。

「あんたにそれ言われる筋合いないよ。自習してるくせにねえ」

全く間の悪いところ見られたものだ。まあ、下ネタ女王の永年付き合いあるこずえ相手だったのが救いといえれば救いなのだろうが、それでもあまり知られたくはない事実でもある。

「言っとくけど、あれは俺の趣味じゃないからな。事情があって」

「言い訳するのもたいがいにしなよ、立村。なあに高校生の健全な欲求隠してるの。朝っぱらからばりばりだったってのがばれたからって、そう焦ることないじゃんよ。さっきも言ったでしょうが。私は美里にも杉本さんにも言わないからって」

完全に誤解されている。かえって裏読みしてほしくないという気持ちはあるのだが、「キャリアOL」のハイヒールに踏まれて妄想する自分をイメージしてほしくないという強い希望も持っている。だがしかし、こずえにそんなこと訴えるより考えねばならないことがたくさんある。上総はすぐに頭を切り替えた。

——そんなことより、杉本は。

教室の扉を開け放したまま、杉本梨南がこずえの席に腰掛けていた。廊下から三列目、前から三番目。三という数字に囲まれた席だった。

すうと立ち上がり、しゃんと背中を伸ばし、上総たちへゆっくりと九十度の礼をした。

太目のお下げに編み込んだ髪が、揺れず、二本の編み縄に見えた。

「杉本さん、お待たせしちゃってごめんねえ。ちょっとこいつが遅刻してきやがってさ」

「立村先輩にしては珍しいですね」

いつもの棒読みで杉本は上総を射た。きつい眼差しではあるけれども、どこか柔らかに見える顔立ちがずれているように見えた。黙っていれば杉本は、ぼんやりしたタイプと思われるのではないかとさえ思う。

「時間通りで来たんだよ、ちょっと用事があっただけであって」

言い訳しようとする、こずえににやりと笑われた。余計なことを言われてはかなわないので黙ることにする。

「とにかく、時間がないんだよね、だからさっさと進めるよ。立村もほら、ここに座んな」

てきぱき指示を出すこずえが指差したのは、後ろから二番目の関崎が座る席だった。

「ここじゃ遠すぎるだろ」

「いいの、あんたはここに座ってな」

お姉さんの言うことには逆らえない。しかたなく上総は言われた通りに腰を下ろした。こずえだけが立ったまま杉本の脇にしゃがみこみ、そっと顔を見上げた。

——こういうのもなんだけど、女子に対してはこの人、やさしいよな。

足を組む格好で女子ふたりの会話に耳を傾けた。関崎の机には悪戯書きもないし机の中には置き教科書もない。きわめてシンプルだ。

「昨日も電話で話したことなんだけどさ、私は杉本さんの味方だってこと、わかってるよね」

「疑ったことはございません。清坂先輩もそうおっしゃってくださいます。ありがたいことです」

棒読み口調で、こずえを見下ろす格好で杉本は言う。

「でしょ。美里もねえ、杉本さんのこと心配してるし、で、ご存知の通り突っ走っちゃったりするわけなんだけどさ。とにかくうちの学年の女子たちはみな、杉本さんが無実だってこと承知してるのよ。まあねえ、男子についてはねえ」

「今更わかりきったことです」

言葉を濁すこずえに、きっぱり答える杉本。表情に曇りはない。朝のまだひんやりした空気が漂う教室内に、ぴりりと響く。

「けどさあ、佐賀さんもずいぶん汚いことするよねえ。いくらなんでもさ、元親友に濡れ衣着せようとするなんてさあ。しかも生徒会役員をかばうってことでだよ、ちゃんとした証拠があればあるのに、ねえ」

——古川さん、ずいぶん昨日の話と違うことになってないか？

初めて知る事実が多すぎて、言葉をはさみこむことはできない。

この場では無理に会話に加わる必要なしと判断し、上総は聞き役に回った。

しかし、予定が狂いそうな予感がする。

——清坂氏が、杉本をかばっていたのか？

——やはり佐賀さんが杉本に何かちょっかい出したのか？

霧島から聞いた話には、先導しているのが藤沖であって、佐賀はるみは仕方なくそのフォローに回っているだけだということだったが。となると上総の読みは概ね当たっていたことになる。やはり糸を引いていたのが佐賀はるみだとすると、相当これはやっかいなことになる。勝ち目がない。

こずえの話で、また一枚、皮がむけていく。

「つまりさ、佐賀さんは渋谷さんをかばいたくてなんないんだろうね。渋谷さんがおねしょしちゃった時、あの子同じ部屋に泊まっていたんでしょ。よく気付かなかったよねえ。気付かないふりしてたのかなあ」

「私は存じません」

「確か三人部屋だったんだよね。佐賀さんと渋谷さんと、あとほら、マッシュルームみたいな頭した女子、ええっと」

「風見さんのことですか」

上総は目を背け、椅子の背に腕をかけ持たれた。

「そうそう、あの子生徒会役員じゃないのにさ、ずいぶんでしゃばってない？ 私もなんかなあ、変だなって思ってたけど」

「風見さんは渋谷さんと小学校が一緒だそうです」

「あれれ？ けど風見さんは確か品山じゃあ？」

——余計なこと覚えてるよな。

こずえの記憶力が憎たらしい。知らん顔を決め込む。

「いえ、五年の時に棚氷小学校へ転校したそうです。そこで渋谷さんと出会ったとか」

「ふうんそうかあ。どっちにしても仲良しってことには変わらないよね」

「私には関係ありません。ただ」

言葉のトーンがそこだけかすかに下がった。

「ただ？」

上総もその響きに視線を戻した。杉本はほんのわずか、俯いていた。

「ふたりで佐賀さんの取り合いをしているように見受けられます。どちらも自分の親友にしたがっているような言動が見られます」

「親友ねえ。女子三人集まるといろいろ面倒だもんね」

妙なところで納得しているこずえ。よくわからないが女子の世界はそうなのだろう。

「なんかひとりを独占したがつちゃう子が出てきてさ、外されたちゃった子がやきもち妬くんだよね。面倒だったらありゃあしない。別に三人でしゃべっていらればそれでいいけど、ねえ」

「そうですね」

杉本は言葉少なく答えた。

「これも噂だけどさ、やたらとくつついてるんでしょ、渋谷さんが佐賀さんにべたあっと。それで佐賀さんが藤沖と相談して、なんとかせねばってことで杉本さんと呼ばい止めて」

「はい。その通りです。当然私は突っぱねました」

——さっさと話を進めてしまえばいいのにな。

どうも、こずえのやり方にまどろっこしさを感じる。男子としてはこういう場合、結論として「杉本梨南に今後の判断をゆだねさせる」という目的があるのだから、すばっとそのことを告げた後に判断材料を与えればいいのに、と考える。しかしこずえをはじめとする女子の考えは真っ向から異なるらしい。とにかくくだらだら話を続け、その後でやっと「実は」と持ち出す。無意識に爪を弾いていた。こんなことすると母にもものすごい勢いで怒鳴られるのだが。

「私には身に覚えのないことです。それをいかにも、私がしでかしたかのように決め付けられて説得されるのは不愉快です。しかし、この前古川先輩がおっしゃられたこともごもつとも思われます。渋谷さんにあてつけがましい行為をされるのはたまったものではありませんから」

「ああ、手首を切ったとかいう奴ね」

「どこを叩いても私からは埃が一切出ませんので、無理に無実を主張する必要はないと考えております。しかし、佐賀さんが生徒会一団を率いてむりやり事実を捏造しようとするのだけは許せません。なんとかしてただいま、渋谷さんと直接話をするべく、交渉しようとしているのですが」

交渉している、のではない「しようとしている」のだ。

「捕まらないんだ？」

「その通りです。彼女のクラスを訪問して直接話をしようとするたび、誰かかしらから邪魔をされます。学校の帰り道に待ち伏せようとしても藤沖先輩に追っ払われます」

「ちょっと待てよ。お前それ言ってなかつただろ？ 藤沖がそんなことしたのか！」

考えるより先に上総は叫んでいた。しゃがみこんでいたこずえが思いっきり顔をしかめて首を振った。黙っているという合図だろうが、知ったことじゃない。席を蹴って杉本の前に向かう。

「藤沖にそんな無礼なことされたのかよ」

「はい。先輩よりお許しをいただいてから毎日お話をと伝えるのですが、『近づくな』の一言で蠅の如く」

言葉が出てこなかった。今までこずえとの対話で現れ出た事実はもちろん驚くことも多々あるけれども、少なくとも杉本の力量でなんとか処理ができるものと判断していた。しかし、藤沖ともあろうものが、年下の女子に対して自分の恋人……断言していいだろう……に手を出させないために、杉本を蠅扱いするとは。断じて許せることではない。

相変わらず杉本の脇にしゃがみこんでいるこずえを一瞥した。

「古川さん、そういうことまで言われて黙っているとは言えないよな」

「なあにあなた一人でエキサイトしてるのよ。だから男って単純よねえ。ねえ、杉本さん、そう思わない？」

その言葉には反応せず、杉本が上総に答えた。

「男子はしょせん、私を嫌うのが常識ですから、今更驚くこともありません。さっさと消えてしまえばいいと思うだけのことです」

お下げ髪はそのまま真っ直ぐ、揺らがないまま。

——なんでそんなに冷静でいられるんだろう。

二年前、三年前の杉本梨南を知っている。

自分なりの正義を貫くためには、たとえわずかに傷ついても後悔しない。

むしろその痛みすら誇りを持って受け止めていこうとする。

勝ち目のない戦いを仕掛けつづけ、結局正しくやさしい人たちの元で白旗を無理やり揚げるはめとなり、哀れみのもと今の場所で蹲っている。

欲しくてならなかった「価値」は、親友であってほしかった女子のもとへ一緒に持っていかれてしまい、今はただ指をくわえて我慢しているだけ。懸命にそ知らぬ振りをして、周囲からは

丸見えだから、可哀想なおばかさんとだけ、囁かれやさしく包まれる日々。

戦っても戦っても、杉本梨南は誰一人、勝利を得ることができなかった。

「価値」を手にすることができなかった。

上総が懸命にその「価値」を手渡そうとしても、その輝きは杉本の求めているものとは程遠く、諦めのもとに受け取られるだけ。上総は受け取ってもらえただけでかまわない。ただ、ほしいものだらけの中学に、中途半端な「価値」だけ与えられて取り残された杉本が、それだけで満足しているとは思えない。

だから、とことん叩きのめしてほしかった。

「価値」そのものの姿でもって、何も持っていない杉本梨南の誇りすら奪おうとする連中を、堂々たる正論のもとで成敗してほしかった。

なのに、それすらも「やさしい」人たちは許そうとしない。

どちらも傷つかないようにと言いながら、結局は杉本梨南の一人負けだ。

これ以上、黒星をつけたくないのに。善意の先輩たちと暖かい教師たちの思いやりで、杉本梨南ひとりだけ、突き落とされていく。

「立村、ほら、席に戻んな。私の話はまだ終わっちゃあいないんだからさ」

動こうとしない上総をしっしと手で追い払う仕種をし、こずえは次の段階に入った。

「杉本さん、どうして藤沖がそこまで渋谷さんをかばうかわかるよね」

「同情しているからでしょう。それか私を嫌いなのか」

凍った声。こずえは首を振った。

「違うよきっとね。単純な話、好きになっちゃっただけだよ。好きだからこそ、かばいたいと思うし、関係ない人のことなんか目に入らなくなったってだけ。まあ、そんなこと言ってもね、杉本さんがしっしってされる正当な理由になんかなんないけどさ」

「私はそう言うのに慣れております。だからそれはどうだってよいのです。ですが」

その時、上総をじっと、黒い瞳で見上げた。潤んでいたように見えたのは気のせいかな。

「立村先輩私は、イエスカノーかをはっきりさせたいのです」

口をつぐんだのはこずえの方だった。そうされたら困るわけだ。

「先日も申し上げましたように、私自身が真実を知っている以上、他の人たちがどう判断しようが知ったことではありません。ですが、その濡れ衣を押し付けようとした張本人である渋谷さんとその周辺にいる人たちには、はっきりとそれが嘘であることを告げたいのです」

「杉本、その周辺にいる連中というのは、生徒会役員か」

上総も畳み掛けた。そうだ、当然そうでなくてはいけない。

「そうです。私は修学旅行が終わってからいきなり佐賀さんに呼び止められ、あの事件は私の仕業なのだということをなじられました。同時に真実を告げるようにとも勧められました。当然私は真実を告げましたが、佐賀さんは信じようとしませんでした」

——やはり佐賀会長が絡んでいたのか。

「杉本、学校側からもいろいろ言われていたのだろう？」

「いえ、特に。ただ真実を曖昧にしようとしている気配は感じておりました」

「そうか」

あの面倒見の良すぎる青大附属中学教師陣が、杉本梨南の件に関しては追い出す方にのみ力を入れ、留め置くことには一切無視という態度がいかに違和感あるか、上総はよく理解している。

「つまり無視されたということだな」

「そういうことになります」

こずえを見下ろす格好で上総は、方向転換した。

「学校と生徒会ぐるみの工作を許すことが、俺はどう考えても納得いかないんだけどな。たとえ誰かが自殺しそうだとか言ったとしてもだ」

「立村、あなたの意見は耳がタコになるほど聞かせてもらったよ。だから今更これ以上話をすることはごめんだね。私は杉本さんに判断をしてもらいたいのよ。関崎だって言ったじゃん。杉本さんに意見を聞けって。杉本さんが何をしたいのか。単に事実関係を全校生徒の前で認めさせて渋谷さんを土下座させたいのか、それとももっと別の条件なのか。立村は一方的に杉本さんの考えを独裁者的に同じ方向へむけさせようとしているけどさ。けどそれは違うんじゃないの。あなたはあなたでいいの。杉本さんも杉本さんでいいんじゃないの？」

痛いところを突かれた。

関崎の言葉だった。

カラオケボックスで熱く歌い上げた後に語ったことごと。

「俺ならまず、杉本さんの要望を聞く。その上で、俺がどうしてほしいかを訴える」

「人も死なせずにすんで、プライドも守られる方法を、一緒に考えてほしい、とだ」

決して口はうまくない。が、その口からもれだす言葉は、重たかった。

その後に関崎は提案した。杉本に直接意志を確認し、その上で渋谷とさしで話をする機会を設けよと。

そのために今朝からこんなことしているわけだ。

杉本の意志を確認するという建前で、本当は誘導するために。

その魂胆が見え見えで、それでも止められない。

「古川先輩、ひとつお聞きしてよろしいですか」

杉本がいったん立ち上がり、スカートをきれいに押さえながらしゃがみこんだ。裾につかないように器用にひだを整えた。こずえと向かい合った。

「あの方がおっしゃったのですか。あの方がご存知なのですか」

杉本は決して「関崎さん」とは口に出そうとしなかった。

含みを持たせてこずえも答えた。

「そう、実はさ、昨日関崎がね、ちょこっと話、しててさ」

——あのカラオケボックスの不毛な会話をばらそうってのか！

上総が割り込もうとするのを顔見ずに手だけでこずえが制し、そのまま続けた。

「やはり杉本さんのこと心配しててさ。私も最低限の話をしてさ、んでわかったんだけど」

杉本の肩をそっと抱くようにして、こずえは立たせた。自分も一緒に立ち上がった。椅子に座らせ、杉本の前髪を指でさらりと梳いた。かがむように正面からこずえは囁いた。

「関崎は、杉本さんが潔白なんだって信じてくれてるよ」

にっと笑った。杉本の瞳と、その唇がふっと膨らんだように見えた。

取り残されていく。

女子ふたりの会話に挟まれて、上総の周りの空気が透けて行く。

今までずっと側にあったはずの杉本梨南のぬくもりが、こずえの方へ流れていく。

七時過ぎ、太陽の熱でだんだん温まり始めからでは、決してない。

もといた席に座った。関崎の椅子だった。

こずえのやさしい説得が続く。

「とにかく杉本さんは、渋谷さんとさしで話をして、白黒つけたいわけよね」

「はい。それは譲れません」

「そりゃあそうだよ。でも、全校生徒の前で土下座させるつもりはないんだよね」

「させても結局疑われることは変わりありません」

「そっかそっか。だったら、この件、二対二で話をつけるってのはどう？」

「二対二、ですか」

「そ。杉本さんと渋谷さんが顔を合わせて、実際何が起こったのかをすべて確認して、その上でこれからのことを話し合うってのはどう？ そうすればまず すっきりするだろうし、知っててほしい方面、たとえば生徒会連中にもその話し合いを終わらせたと伝えておくだけでも違うしさ」

「でも学校側は？」

「学校側はただ、渋谷さんにこれ以上手首を切らせないようにしたいだけなんだから、こちらからそうしなくてもいいと安心させる話をしておけば丸くおさまるよ。ばっかばかしいよね。何もおねしょしちゃったくらいでそんな小細工しなくたってさあ、保健の先生に謝っておけばよかったのにね。そうしたらちゃんとうまくごまかしてきたのにねえ」

杉本はしばらく、こずえのしたいように身を任せていた。

髪の毛を撫でられたり、ほつれ毛を直されたり。リボンを触れたり。

女子同士でないとできないことを、さりげなくされていた。

上総は関崎の席からそれをただ見つめるだけだった。

「私は話し合いを持ちたいのです。それだけです」

「その後で暴露するとかそういうことはしたくないわけよね」

「私を信じてくださる方がいらっしゃればそれで結構です」

「大丈夫だよ」

もう一度、杉本にこずえが断言した。

「関崎は、杉本さんのこと、信じているよ」

——関崎が、どこまで信じているか証明できるっていうのかよ！

怒鳴りたいのを耐えた。

「本当ですか」

「もちろん、だよ、立村？ ああ、教えるの忘れてたけど立村の座ってる席、関崎のとこだよ」

即座に杉本の目が上総に向いた。

体中を駆け抜ける血が、瞬間はじけた。

向けられた表情に一瞬だが上総の見たことのないものがよぎっていた。

——杉本が、笑っているのか？

今まで杉本が笑っているのを上総は見たことがなかった。

一度だって見たことはなかった。

たぶん、今もあれは顔の筋肉のふとした緩みに過ぎないのかもしれない。

すぐにいつもの鉄火面に戻り、軽蔑するような眼差しで上総を射たけれども。

——杉本ってあんな風に、笑うのか。

その笑みを向けた相手は上総であって、上総ではない。

幻で片付けるしか、ない。ふっと息を止め、目を閉じた。不意に眠気が襲ってきた。

上総は関崎の席から離れ、鞆を自分の席に置き直した。

ちょうどこずえの右隣にあたる席だった。相変わらず女子同士の和み合いを続けているふたりに声をかけた。

「話し合いもう少しかかるだろ。何か飲み物買ってくる」

無表情のまま、上総に「いえ、結構です」と答えた杉本。

「ちょっと待ちなよ、あんたがいなくちゃ何もなんないでしょうが」

「俺が喉渴いただけだから、関係ない」

全く意味のない言葉で言い返し、上総は教室を出た。窓に差し掛かる緑色の陰が廊下にまだら模様を形作っている。ほんの数人出入りするだけの生徒玄関を横目に、上総は自動販売機でオレンジジュースを三本買った。すぐに持っていく気はなかった。

——どうせ話し合いなんか、あってないようなものだ。

こずえの切り札「関崎は信じているよ」を出されたらすぐに結論が出るに決まっている。

杉本がどんなにかたくなな態度を崩さなくとも、葉牡丹の鉢植えを手渡したかの関崎を見つめ

たら最後、すべてのカードが真っ白に染まる。どんな理不尽な要求であってもだ。

あの微笑を見せる相手が一人である以上、しかたのないことだ。

すでに周知の事実をまだ杉本は知らない。おそらくこずえも教えはしないだろう。王子さまの夢を思う存分描かせて、いつかそれが壊れるまでは風船を膨らませてゆき、やさしく正しい人たちの手に守られ、卒業と同時にほじけるのが落ちだろう。

——どうせ、何言っただって結果は一緒なんだからさ。

三本の缶ジュースでもって、熱っぽい指先はようやく冷えてゆく。

——知らぬが花だ。関崎なんかどうせ、B組の静内さんと、なのにな。

悪態を吐いてみる。

原因なんかどうだっていい。何もかも、誰も彼も、もううんざりだ。

麻生先生が関崎を呼び止め、脂ぎった顔を近づけて高笑いしているのを横目に、上総はさっさと学校から飛び出した。委員会活動もなく、部活動も一切関係ない。身軽なことが今は心地よかった。

もっとも今週から一週間は期末試験前ということもあり、強制的に部活動と委員活動は休みとなる。中学とそのあたりは変わらないようだ。完全に夏の陽射しがじぐざぐにささる時期へと差し掛かり、上総は羽織っていたジャケットを脱いだ。校門を出てからはネクタイも外した。抱えて自転車を押しながら、どこへ行くか考えた。

もちろん、期末試験勉強をするつもりなんてない。

「立村先輩、もうお帰りですか」

背中からまたひんやりしそうな声がする。誰かは言うまでもない。上総は振り返った。作り笑いするつもりもない。鞆の中に押し込んだ……幸い、発見されなかったが……「キャリアOL」のグラビア写真集を叩きつける気力もない。ただ、うっすらと熱い。

「今朝のことを気にせず話に来るのはいい度胸だな」

皮肉ってやった。そのくらい言ったっていいだろう。それだけのことはしたのだから。

霧島は素早く上総の前に立ちはだかった。

上着こそ着ていないが、ネクタイはしっかり締めたままだ。涼しげな振る舞いあっぱれである。汗すらかいていないように見える。

「先輩が僕に対して、訳のわからないことをおっしゃるから仕方のないことです」

「話の内容がわからないわけないだろう」

「まるで僕が、何も理解できていないようなことをおっしゃるのですから、当然のことでしょう」

なんと霧島、全くもって反省だにしていない。

いいのだろうか、それで。

根本的に何か間違っているような気がする。

「理解できないのならしなくてもいい。悪いが俺は今日急いでいるんだ。霧島、お前もこれから生徒会があるだろう。こんなところで油売っていいのか。佐賀さんに文句言われたりしないのか」

「佐賀会長は僕のやりたいようにやらせてくれています」

爽やかに霧島は言い放った。かすかに笑みすら浮かべている。

本当にこいつ、何を考えているのか全く理解できない。いや、なんとなくそういう言動に出る理由が上総には掴み取れていないわけでもないのだが、かといってそれを受け止めるのがややこしい。それに百パーセントこいつが上総を慕ってまとわりついているとも思えない。事情がいろいろあるのだからなおのことだ。

「どちらに行かれるのですか」

「どこでもいいだろう。どうでもいいがこれ以上訳のわからない振る舞いを続けるなら、俺にも考えがあるからな。いいかげんにしろ。それとだ」

今朝の出来事からすべてが繋がり、気が立っていた。吐き出すように言い放った。

「なんで俺が趣味の合わない写真集のことで女子に誤解されなくちゃならないんだ」

「申し訳ございません」

即、謝るが涼やかな霧島の顔からは、申し訳なさが全く伝わってこない。

むしろ、計算済みといった余裕すら感じる。明らかに上総の方が劣勢だ。

「ですが、僕のはったりを古川先輩は信じましたね」

「ああいう場で信じない方がおかしいだろう」

「予定通りです。僕の方が真実に近いと思われたのです」

——全くこいつ、俺にけんかを売っているんだろうか。

そうとしか思えないのだが、上総はそれを買うつもりなどない。

むしろ、さっさと遠ざけて穏やかな時間を過ごしたい。

「霧島、悪いが今日は本当に用事があるんだ。また明日詳しく話そう」

まずはこのお坊ちゃまから離れることだけ考えた。それでも気になる疑問はある。つい口からこぼれた。

「だがなんで、俺にそうくっついてくるんだ」

「簡単です」

自転車にまたがり、ペダルを踏む寸前に聞こえた言葉。

「立村先輩の言動が、面白いからですよ」

——俺の言動が面白いだと？

あやうくぷつりと切れる寸前だったが、勢いよく遠ざかろうとペダルを踏んだ後だけにそれ以上の言葉をぶつけることはできなかった。明らかに霧島は、上総を下に見ていると判断するしかあるまい。

——こっちが下手に出ればいったいあいつは、何言い出すんだ！

誰かとすれ違ったかもしれないがそんなの気にしていられなかった。とにかく漕ぐ。漕ぎ続け頭をからっぽにし、最後は一気にぶちぎりたい。

空の雲は細く、長く、やがて消えていった。青空一色だった。

——なんであんな奴をかばってしまったんだろうか。

思うものの、それは後悔ではない。単なる舌打ちのみ。

——俺だって霧島の立場とか考えて、あえて黙っているってのに、なんでいきなり仇されるようなことされなくちゃなんないんだよ。あれでもう、古川さんには頭、ただでさえ上がらないのにもう俺は、尻に敷かれるはめになるわけだ。

——それに俺の言動が面白いとかわけのわかんないこと言ってるけどさ、こちらとしては相手のことを思いやっつつもりなのに。なんだよいったい、散々こけにされてさ。なんで俺が二年も

下の下級生におもちゃにされなくちゃなんないんだよ。馬鹿にするならすればいいさ。慣れてるさ、けどなんで、わざわざ俺にかまってくるんだろう。

十字路で東西南北、どちらに進むか考えた。

真っ直ぐ走れば自宅へ一直線だし、右に進めば青潟駅、東に進めば公立高校・青潟東高校がすぐそばだ。もちろん南……もと来た方向に戻るつもりなどない。

上総は時計に目を走らせた。

まだまだ三時半を回ったばかり。霧島をあしらうつもりがあしらわれてむしゃくしゃしてかなり時間が経ったような気がしていたけれど、まだまだ余裕がありそうだった。

後ろにくくりつけたかばんはしっかりおさまっている。

——青潟東か。

左側、東側を眺める。ジーンズとTシャツ、またすねを出した女子たちのホットパンツ姿も見受けられる集団が路に溢れている。青潟東高校は私服通学の学校と聞いている。肩からポストンバックを抱えた男子と、ポシェットをぶら下げたワンピース姿の女子たちも入り乱れている。ちょうど、南側から乗り付けてきた青大附属生とは十字を切る格好となる。

——本条先輩、いるかな。

細い銀縁めがねに髪の毛をつんつんさせた本条先輩の近影。すぐに浮かんだ。

先月、アパートに泊まりに行き、以来、連絡を取っていなかった。

もっとも他の連中、特に元評議委員会OB連中からすると、

「一ヶ月に一回しつこく会いに行くこと自体、男としてはあまりないことじゃねえのか」

との認識だが。

——青潟東も期末試験近いだろうし、先輩も今は部活やってないから暇だろうし。うちにいるかな。

本条先輩に頭のチャンネルを切り替えたたん、さっきまでぐたぐた煮えたぎっていた霧島の言葉も消え去った。どうでもよくなった。じゃあ行こう。本条先輩を迎えに、青潟東まで自転車を進めてみるか。

青潟東は青潟市内でもっとも学力レベルの高い公立高校である。もともと青潟の場合、いわゆる「公立王国」と呼ばれるほど公立高校への進学願望が強く、私立進学は一部を除き「滑り止め」扱いされていた。もっとも実際は、校風に憧れてとか、特定の資格を取りたいとか、男子もしくは女子恐怖症とか、様々な理由によって選択することも多いはずなのだが、青潟の一般的基準ではそうなされていた。

青潟大学附属高校だけは、青潟市の唯一「目標として」進学すべき私立の学校とされていた。入学試験の難解さもさることながら、中学でほとんどの生徒を獲ってしまうのでどうしても高校の外部生入学は数を絞らざるを得ない。関崎のように中学でしくじって高校で再チャレンジして見事合格、というのは例外中の例外である。

どちらにしても、青大附属に一度入学したら、自分から外に「出たい」と考える生徒は殆どい

ないものと思われる。本条先輩の選択を知るまでは、上総も疑うことなどなかったのだ。

——本条先輩はどうして、公立を選んだんだろう。

家庭内、および家族の事情が一番の原因と聞いているし、今の上総は納得できている。

しかし、その後の本条先輩がどのように苦悩したのか、道を踏み外したのか。

すべてを理解できては、まだいなかった。

元青潟大学附属中学の伝説的評議委員長だった本条里希は卒業とともにいったん消え、現在はその辺にどこでもいる不良っぽい公立高校生に変貌しているという事実を上総はまだ、把握できていなかった。本条先輩自身からも話を聞かせてもらってはいるし、受け入れたつもりではいるのだが、それでもやはり受け入れられないところが残っている。

実際、落ちこぼれた本条先輩の学校生活を目にしていないからだろう。

本条先輩至上主義と揶揄される上総の視線ではあるけれども、どうしても本条先輩が青大附属時代の本条里希と異なることを、信じられないままている。それを証明するつもりも今のところはなかった。

ただ、

——本条先輩の行ってる学校ってどんな感じなんだろうな。

単純な好奇心は日ごろより持っていた。

——本条先輩をないがしろにする学校なんだから、きっとみんな見る目がないんだろうな。

最近はさらにもうひとつの疑問が頭の中をよぎる。

——本条先輩を受け入れられない学校なんだから、はたして杉本が来年入学した時大丈夫なんだろうか？

もちろん、合格したらの話だが。

まだまだ先ではあるが、杉本梨南が青大附属中学を追い出されて青潟東高校へ進学した場合、どういう生活が待っているのかを考える義務はあるように思う。上総なりにその判断を否定するつもりはないけれども、ただ杉本を両手広げて迎えてくれるような学校にはどうしても思えなかった。もちろんそれは先入観でしかないのだろうが、上総にはやはり、一度、青潟東高校の概要をつかんでおく必要を感じていた。

——杉本が仮に青潟東へ進学したとしても、大丈夫なように準備をしておいたほうがいいに決まってる。たぶん誰もそんなこと考えてないだろう。考えているのは俺だけだ。悪いが関崎も他の連中も、杉本が出て行くことくらいは頭の隅に置いているかもしれないけれどもその後のことなんてどうだっていいと決め付けてるさ。

どちらにしても、一度は青潟東に行かねばなるまい。

ついでに本条先輩と顔を合わせれば、それに越したことはない。

流れでまたアパートにもぐりこんでもいいわけだ。

上総はそのまま右に曲がった。東に向かった。私服の群れがあふれ出る青潟東高校へ自転車のハンドルを切った。

下校時間帯の真っ只中、自転車を無理やり突入させるということがいかに無謀かは上総もよく

承知している。当然押すな押すなの大混雑。それでもなんとか交通ルールを遵守する形でたどり着くことができた。青潟で一番広い公園を通りぬけ、すでに花も実も終わった桜並木を潜り抜け、ようやく三階建ての薄黄色い建物を発見した。校門らしきものは確かにあるのだが、道路と繋がってはいわゆる「門をくぐりぬけた」感覚はない。むしろ「門の脇を通った」だけ、といった感じだろうか。

グラウンドだけは広かった。校舎自体は薄いショートケーキを思わせるような建物で、その奥いっぱい黄色いグラウンドが見通しよく広がっている。ただその奥に何があるかは見通せなかった。たぶん更衣室か器具を置く場所くらいはあるのではないかと思うのだが、見た感じ丸い葉っぱの木々が縁取り模様のように並んでいるのが見えるだけだ。

舗装されていない路を自転車でがたごと漕ぎつつ、ようやく本当の校門に辿り付いた。入り口には「青潟市立青潟東高等学校」と札が掛かっている。

上総は自転車から降りて、まず流れる下校の群れに知っている顔があるかどうかを確認した。本条先輩を見落とすことはまずないと思うのだが、一緒にいる女子がもしいたなら、あえて野暮は言わず知らん振りをするつもりでいた。女子に不自由しない本条先輩のことだ、あれから詳しいことは聞いていないけれども全く何もないなんてことはないだろう。

女子たちがみなスカートやらキュロットやら華やいだファッションなのに対して、男子はおしなべてみなジーンズにTシャツ、ポロシャツばかりだった。襟のボタンをひとつ外したとはいえ、まだ制服姿の上総が立つ場所だけ、やたらとしゃちほこばったように思えた。

——やっぱり、目立つよな。この格好だと。

同じ高校生とは思えない空気の違い。上総は自転車を留めたまま目で人の波を追った。

明らかに同じ部類とは思えない誰かが通った。

ぴんとアンテナに響いた。

上総がその方向に目を向けると、生徒玄関らしき出入り口から水色のストライプシャツを羽織ったジーンズ姿の男子が、もうひとりの男子と一緒に現れた。

この学校の生徒で、今のところシャツを着ている連中はひとりもいなかった。

——まさか？

自分の本条先輩に関する直感の鋭さに笑いたくなる。青大附中時代もそうだったが、上総は本条先輩の声はもちろん、足音や歩き方、その他周囲の雰囲気だけで本条先輩の存在有無を感じ取ることができた。他の評議連中が気付かなくても、上総だけはすぐに勘付きそこから、「本条・立村ホモ説」が囁かれるようになったのも今は昔だ。

まさか外でも同じ直感が働くとは思わなかった。

——なんだ本条先輩、学校でも友だちいるじゃないか。

何がひとり孤独の高校生活なんだろう。大嘘だ。

だったらまあいいか、声かけてみよう。

上総が近づこうとし、自転車を押そうとした時だった。

——あいつ、どこかで見たことあるような気がする。

本条先輩と背丈は同じくらい。真っ赤なランニング一枚に、腰からは蛇の皮ベルト。さらには首に黄色いスカーフまで巻いている。どう見ても浮いているのは見え見えなのだが、そいつは本条先輩と肩を揺らしながら歩いている。上総の前まできたのだが、しゃべりに夢中になっていてどうも気がついてもらえない。

道路沿いを歩いている本条先輩と、その一方で取り残された格好の上総と。

その間に入るやたらとけばけばしい男子ひとりと。

しかもその顔に見覚えがあると、例のアンテナがぴんぴん言っている。

——誰だろう？

少なくとも上総とは友だちづきあいを好んでするタイプではなさそう。目の前をゆっくり、全く意味をなさない言葉を発しつつ馬鹿笑いしている。本条先輩がそいつをにやけながら眺めているのが妙に癪に障る。

「本条さんさ、今日も例の彼女のところ行くんですか」

「悪いが彼女じゃねえよ。こちらとしても少しやらねばなんないことがあるっての」

——しかも女性がらみの話をしているときた。

上総の知る限り、本条先輩が今、誰かと付き合っているという話を聞いたことはない。もちろん言うこともめったにない。あるとすれば何人斬りの自慢話程度。過去の恋愛話を聞いたのは確か、上総が卒業間際の頃だったし、それはすべて終わったことのはずだった。

いや、そういう話をするのは決して珍しいことではないと理解はしている。

しているのだが、どうもこのランニング男と語るのがむかつくだけだ。

なんでか自分でもわからない。

かといって割り込めるわけもない。

結局気付かぬうちに二人は、恋愛話をたらたら続けながら上総の前を通り過ぎていった。一切こちらに目を向けようとしなかった。本条先輩の青潟東高校生活は決して悪いものではなさそう。ということだけは確信した。

——なんだ、たいしたこと、ないじゃないか。

別にいいのだ。恋愛話なんぞ別にしたくもない。

先月泊まりに出かけた時も、美里や杉本の話なんて全くしていない。

具体的なスケベ話こそ本条先輩主導で勧めるにしても、上総はただ聞くだけ。

そんな話よりも現在の青大附属高校がどういう状況に置かれているかとか、中学の生徒会事情とか語るべきことは山のようにある。

本条先輩がたまたま友だちと、デート話のおのろけを楽しんでいるから割り込みたいと思ったわけではない。断じて、決して、絶対に。

折れ曲がるような太陽の陽射しが全く感じないくらい、身体が冷えていたなんて関係ない。

歯を心持強くかみ締めた。

自転車を支える両手で、ブレーキをぎっちり握っていた。

「おいおい、何またべそかいてるんだよ、まったくもう、なあ」

どのくらい立ちすくんでいたのだろう。ほんの十秒ほどだったはず。

不意に頭がふわりと熱を持って揺れた。いや揺らされた。

「本条先輩」

「なあにが先輩だ」

今度は額を手の甲ではたかれた。本条先輩はめがねを指先で直しながら、もと来た路に向かい誰かに呼びかけた。

「悪い、総田、また明日にするわな。彼女とよろしくやっどくれ！」

「よっしゃあ」

また訳のわからない返事が返ってきた。総田と呼ばれた連れはさっさと姿を消し、あとはまばらに続く青潟東高校の生徒たちが川となり流れるだけだった。

上総は本条先輩をまじまじと見つめた。さっきは気付いていないはずだったのに。振り返って上総がアホ面したまま立ちすくんでいたのを発見したのだろうか。

「先輩、あの」

「あいつはお前と同じ歳だってのに、この差はなんなんだよ。まったく立村、お前ときたらなあ」

腹を膨らませて、ふっと吹いた。肩を怒らせ、すぐに落とした。

「女子よりタチ悪いぞ。やきもちってのはな、女子がかわゆく妬いてくれるから許せるもんであってだ。俺は悪いが男同士でいちゃつく趣味、今のところはねえぞ。里理とは違う、勘違いすんな」

しつこく頭をはたきつづける本条先輩。リズムカルにひっぱたく。

「そんなつもりじゃないです」

「もうお前の思考パターンは読めてるから、怒る気にもなれねえよ」

口で言うほど怒ってはいないようだった。さっきの総田とかいう男子と話している時と雰囲気は変わらない。ただ、面白がって頭をはたくのはいいかげんやめてほしかった。

「お前、中身は丸ごと女子と同じだな」

「どういうことですか」

気色ばみ上総が尋ねると、本条先輩はつらっとした顔で答えた。

「妬きもち妬きの甘ったれ、全く変わってねえよ」

「失礼です、それは、訂正してください」

わめくうちに顔へ一気に血が昇る。

「俺はそんな変なこと考えたわけじゃ」

「新井林やら南雲やら相手に、ずいぶんお前、ジェラシー燃やしてただろ」

「ジェラシーって、嫉妬ですか」

当たり前のことを問い返すと、本条先輩は呆れ顔で首を振った。

「とにかく、まず、食うぞ。ラーメン食うか」

さんざん言いたい放題馬鹿にされて、それでもくっついていく自分。

——勘違いしてるのは先輩のほうだよな。誰がジェラシーだよ。男子に妬きもちやいて何が楽しいって言うんだ。本条先輩、変だよ、どうしてそんな発想になるんだよ！

言い返したくても、口にしようとするについ小声になる。本条先輩が耳ざとく聞きつけた。

「なんだ、文句あるなら言ってみろ」

「なんでもないです、ただ、あの」

「あのってなんだ」

「さっきの、一緒にいた奴、高一なんですか」

仕方なく答えると、本条先輩は一拍黙った。

「あいつのこと覚えてねえのか？」

顔だけ見覚えあるけれども、それが誰なのかわからない。上総は頷いた。

「いいかげん人の顔見て、ついでに目をしっかり見て覚えろよ。水鳥中学生徒会副会長の総田って、お前何度も会ったこと、あるだろ？」

また上総の顔を覗き込み、本条先輩はにやりと笑った。

本条先輩が自転車を留めた。さっき上総が青湊東高校に向かう際曲がった十字路だった。

「なんか食うだろ。ラーメンでも腹ん中入れるか」

「まだそんなに空いてないからいいです」

「相変わらずお前、食わねえなあ」

あきれたように本条先輩は呟き、空を見上げた。

「じゃ、少し腹ごなしにボーリングでも行くか」

「やったことないです」

今度は本当に啞然といった風。本条先輩は上総を振り返り、まじまじと見つめた。

「一度ぐらいはあるだろ」

「いえ、ないです」

「じゃあお前何やって遊んでるんだ？ カラオケか、それともバッティングセンターか」

「卓球場です」

嘘ではないが、そうしょっちゅう出かけているわけでもない。得心したのか本条先輩は頷いた

。

「お前の唯一勝利を手にするスポーツったら、それしかないわな」

事実なので何も言わない。次に続く言葉も予想通り。路肩につけた。

「そんな得意ならなんで卓球部入らないんだ」

「体育系の部活動には関わりたくないからです」

「まあな、それはそうだ」

あまり突っ込まずに本条先輩は再び頷いた。

「悪いが俺はお前のストレス解消に負けを食らうほど、落ちちゃあいねえからな。さ、行くぞ。

今日はボーリングだ。とことんしごかれるろ！」

貴史や南雲たちとはよく遊んでいるが、大抵は互いの家にもぐりこむか外でぶらぶら歩くかのどちらかだった。小遣いの問題も絡んでいるのだが、もともと上総がスポーツを好まないのも影響しているのだと思う。

天羽たちからはしょっちゅう、元評議同士でボーリングやカラオケに誘われたりもするのだが、あえて断っている。第一、ただボールを転がすだけなのに、どこが面白いというんだろうか。ちなみにカラオケボックスへはよく出かけるが、マイクには触れない、いや近づかない。密談するのに良い場所だから利用するだけのことだ。

「ほんとお前の遊び方見てると、ほんとに女だわ」

本条先輩は同じことを繰り返した。かなりかちんとくるが、本条先輩のお言葉には基本として逆らうつもりはない。口を尖らせて、

「本条先輩とは違いますから」

言い返すに留める。

「そういうところがガキなんだ。ったくなあ。まず靴履きかえろ、それからボールを適当に選べ」  
本条先輩が連れて来てくれたのは、巨大なボーリングのピンが屋根に突っ立っている建物だった。かなり広そうに見えるが、自転車置き場から一階を覗き込むとパチンコ屋らしく、ひっそり静まり返っている。ボーリング場は階段を昇った二階以降らしい。

「ただいま改装開店中なんだろな」

「どういうことですか」

「んなこと、お前にゃ、関係ねえだろ」

言われたとおり入り口で自分のサイズに合った専用シューズに履き替えた。すべりずらいよう、底が分厚いのが足の裏から感じられる。本条先輩がさっさと自分のボールを選んでいる間、上総は二段に分かれたボール置き場の前で適当にボールを弄っていた。三角形に三つの指穴が空いている。人差し指と親指と中指を最初、つまこんでみて持ち上げてみる。やたらと重たいのもあれば、軽いのもある。

「先輩」

「どうした？」

とっくの昔に藍色のボールを選んだ本条先輩が上総の声に呼ばれて近づいてきた。

「これ、どう選べばいいんですか」

「あ？ ああ、お前やったことねえんだもんな。ってかなんて持ち方してるんだ！」

思いっきりはたかれた。指をつつまこんでいたボールを引ったくられた。

「あのなあ、立村。ボーリングのボールってのは、こうやって持つもんだ」

片手でボールを支え、中指と薬指を上の方の二つ穴に突っ込み、

「人差し指なんか使ったら折れちまうだろが。まずこうやって持ち、だ」

親指を残りの一つ穴に入れた。

「ま、最初はこのくらい軽いほうがいいな。とにかくやってみろ」

言われた通り上総は、中指と薬指、そして親指で持ち直した。残った指を広げるとなんとなく安定した感じで投げられそうだった。

「じゃあ、まずボールをラックに置いとけ」

言われた通りにするしかない。本条先輩がすべて場所を選んでいて、投球場、と言えはいいのかわからないが、奥に十本ピンが並んでいるところみるとここで転がすんだらうか。

「あのな、レーンって言うんだ、常識だろ」

「すみません」

まるで知らないのが非常識、とも言いたげな口調だ。

「やったことありませんから」

「そう開き直るんじゃねえ。ま、まず見てろ。俺がお手本を見せてやる」

上総をまず、アプローチと呼ばれるワックス塗りの投球場所へと連れて行き、

「ボーリングってのはな、こうやってやるんだ」

一歩片足を引き、軽く助走、その後振り子運動そのものにボールを持ち上げ、

「そりゃあっ！」

気迫に満ちたその表情でもって、勢いよく投球した。まっすぐ、真中を猛スピードで転がりぬけるボール、やがてピンの前でほんの少し、右に曲がった。

——外れる？

上総の目の前で曲がったボール。まず左のピン。その後一秒遅れて他のピンが、またその脇のピンが、という風にたらたらと倒れ始めた。吸い込まれるのがあつという間だったボールに比べ、ピンの倒れる速度が妙に遅い。気がつけばすべて倒れきっていた。

「ストライク、ですか」

「その言葉は知ってたか」

「はい、常識ですから」

言い終わる前に本条先輩にげんこつでごりごりやられた。

「あのな、そういう時は『さすが先輩、ナイスっすねえ！』くらい言え！ 南雲だったら言うぞ。派手に拍手なんかして、俺に抱きついてチューくらいするぞ」

「そういう趣味ないです」

もちろん褒める時は褒めるけれども、たかがボーリングのストライクくらいで拍手を求めるほど本条先輩は軽い人間ではないと上総は思う。

「南雲とは違いますから」

休憩所……本条先輩からは「ボーラーズベンチ」と呼ぶことを後で聞いた……へ戻り、上総は自分の借りてきた黄色いボールに指を入れた。習った通り、人差し指は使わずに中指と薬指、最後に親指の順番で。

「まったく、なあにいいいじしてるんだよ。ほら、こっち来い。次はお前の番だ。おっと待て、隣が投げ終えてからにしるよ」

そういうルールらしい。言われるまま上総はさっきの投球場……正式名称「アプローチ」へと向かった。

「まず、まっすぐ前を見ろ」

腕をひっぱられ、されるがままに中央へ立つ。

「何も考えるな。まず、真正面のピンを見ろ」

次に本条先輩は、上総が持っているボールをつつき、一步後ろへ下がるよう指示した。

「その腕を腰あたりまで上げろ。お前右ききだな」

「はい」

「それじゃあ、右足から四歩でこのラインまで行け。決してはみ出すんじゃねえぞ。そこでこうやって、振り子の気持ちで腕をこうやって投げる」

「振り子の気持ち、ですか」

「そういうことだ。おっと、投げるってのは落とすことじゃあねえぞ。ほら、まずはやってみろ。身体で覚えろよ」

上総は本条先輩の言った通り、四歩、右足から助走し、言われたとおりに投げた。

投げたというよりも、レーンに落とすといった方が正しかった。静かにころころ転がっていくが、まっすぐイメージしたはずなのにいつのまにか左へと溝へ落ちてそのまま吸い込まれて

いく。ピンは全く動かないままだった。

「やんやお前、ガーターやってるんじゃないよ！ ほらこっち来い。もう一度投げてみろ」

「え、二回連続でもいいんですか」

ルールなんか知らない。今度はあきれろそぶりも見せずに本条先輩が説明してくれた。

「ボーリングってのは、二回投げて、そこできっちり片をつけられりゃあいんだ。いいか、次は右に立って、少しゆるゆる投げてみろ。投げるって言うか、転がす方がいいかもな。こうやって、右腕をだな……」

本条先輩が直接腕を取り、身体から教え込もうとしてくる。

上総もそれをそのまま受け入れて、言われるがままに投球動作を行う。

助走は緩めに、腰を低くして今度は静かにレーンへと流す。ボールはひよろひよろ揺らぎながらも斜めに転がり、かろうじて奥へ吸い込まれる寸前にぱちんとピンを倒していった。しかもそのピンが、隣、また隣と重なっていき、右の一本を残すのみ。

「よし、初めてにしては上出来だ。要領は分かったな。じゃあ次は俺だ。よっく見てろ」

本条先輩は肩を叩きながら上総をボーラースベンチへ連れていき、座らせた。

「こういうのは慣れだからな。まずは俺の言った通り、やってみろ」

最初はとにかく適当に投げていた。転がすといった方が近いだろうか。

本条先輩のように髪を振り乱し、ラインぎりぎりまで爪先立ちで投げるのもひとつのやり方だろうが、自分にそれは向いていないともわかっていた。右端に向かってわざと斜めに転がしてみたり、真っ直ぐのようにしつつもぎりぎりガーターを滑らせたり、なんとなく直感に任せてゲームを進めていくうち、少しずつ勘がつかめてきた。

——ただ、まっすぐ投げるだけでは意味がないんだ。

流れているのか、それともすべらないようにぐにぐに曲がっているのか、それはわからない。ただその滑り具合がどこかひっかかり、するする進まない。見ていて重たい。

一番ゆるく投げたボールが、初めてのストライクを演出した。

ピンがゆっくり、順番に倒れるのを上総は黙って眺めていた。

「よっしゃあ！ ストライク取ったな」

「はい」

食い入るように背中から見つめられていたことに、振り向いて初めて気付く。

本条先輩が手招きして上総をボーラースベンチへと誘った。

「もうちょっと、嬉しそうな顔をしろ」

「はい」

「燃えねえのか」

問われても困る。全く、燃えない。炎になれない。

「大抵の男は、もっとガッツポーズしたりなんかするだろうが」

「する気にならないだけです」

上総はそれだけ告げ、コーラを一口飲んだ。

「勝負師にはなれねえなあ」

「なる気ないです」

「そのだるさはいったいなんだよなあ。まあいいさ。お前もこれからそんなだるだるなこと言っ  
てられなくなるからな」

そのまま本条先輩は立ち上がり、腕をぐるぐる回しながらレーンへと向かった。

——そうだよな。

なぜか、運動関連の行事に熱くなることがついでない。

こうやって本条先輩に連れられていろんな遊びを教え込まれてきた。

ボーリングに留まらず、中学時代はバッティングセンターやスケート、その他さまざまな遊び  
場での時間つぶし。泳ぐのは嫌いだけでも本条先輩の命令には従うしかなく、夏は毎週プールに  
引きずり込まれたりもした。同じ球技でもテニスやバドミントンでは勝ち目がなかったが、唯一  
卓球では本条先輩を叩きのめすことができた。

でも、つまらないのだ。

——勝っても、それがどうしたっていうか。

また気合の一声を挙げ、レーンに勢いよく投げ込む本条先輩を眺めた。

上総が手からボールを離す時とは違い、進む方向からしてしっかり目標を定めていることがよ  
くわかる。それでいて、直線に投げすぎない。決めるところは決める。

——本条先輩もそうだけどさ、なんでみんな勝ち負けに拘るゲームが好きなんだろう。

こういう性格を本条先輩は「女だな、まったく」と表現するのだろう。自分でもわかっている  
。だからといって自分自身を勝負好きのエキサイティングな性格に変えることなど出来はしない  
。本条先輩はきっと、南雲や天羽のような、いやさっき一緒に連れ歩いていた総田のようないか  
にも勝ち負け大好きといった男子をひいきにしているのあろう。

本条先輩の投げたボールはレーンを走り、一本残したまま吸い込まれていった。

二投目の準備に取り掛かる。

「一本か……まあ見てろ」

ゆっくり顔の前にボールを挙げ、祈るようにひとつ頷き、そのまま本条先輩が左脇からたらん  
と落とす。ゆっくり、ゆっくり進んだボールがやがてピンを弾く。派手な音が響いた。

——何をやるにも、派手だよな、先輩は。

それでも数回ストライクを経験すれば自信らしきものも感じられる。

二ゲーム行い、圧倒的大差で負けをくらった上総を本条先輩は覗き込み、まずさっさと支払い  
を済ませた。上総が半分払おうとする間もなかった。

「そろそろラーメンも腹ん中入るだろ」

「はい」

「じゃ、食うぞ」

どうやら本条先輩は相当飢えていたとみた。腹が減っている時は大抵人間狂暴になる。言われ

る通りにした。自転車で本条先輩の向かうラーメン屋ののれんをくぐった。駅前のくねった路沿いに並んでいた。お世辞にも綺麗とは言えない。

「ここはな、安い割にうまいんだ。特にとんこつがな。お前何がいい」

「しょうゆ」

きっぱり答えた。どうでもいいがどうしてそんな濃い味のものを食べたくなるんだろうか。

「おっちゃん、とんこつとしょうゆ一丁！」

カウンターではなく、テーブルに座った。それほど混みあっているわけではないが、それなりに人はいた。本条先輩の真向かいに座り、即出てきたラーメンをすすった。味が少ししょっぱすぎるような気がした。

「うまいだろ」

「はい」

味覚は個人の問題なのであえて何も言わなかった。

「それにしてもだ立村」

「はい」

ラーメンがのびないうちに勢いよく麺にかぶりついていると本条先輩が顔を覗き込んだ。

「俺以外につるむ奴、いねえのかよ」

「つるむことが好きじゃないです」

短く答えた。でないと、噛み切れない。

「わざわざうちの学校にまで愚痴るってのはどういうことだ」

「まだ愚痴ってません」

失礼なことを言うものだ。上総は改めて言い返した。

「たまたまこっちに来たかったから寄っただけです。先輩の学校がそんな酷いところかも確認したかったし」

「またそうやって言い訳するんだな」

意に介さずひたすらラーメンをすすりつづける本条先輩に、頭の中がしょっぱくなる。

「してません。俺はただ、期末試験一週間前だから先輩も暇かなと思って遊びに誘いに来ただけです」

「読みは正しいな」

さらりと流される。こういう時南雲や天羽だったらどう切り返すのだろう。想像がつかない。本条先輩が上総のお守をするためにしかたなくボーリングへ連れ出したのか、今こうやっている間も実はいやいやなんじゃないだろうか。塩気で身体がいっぱいになりそうだ。なんとか平らげて、スープをちりれんげでかき回した。行儀悪いと言われてもしょうがない。

「俺だって友だちと遊ぶことはありますよ。天羽とか、南雲とか、羽飛とか」

「ああ、お前のことをがきんちょと思って、面倒みる形だなあいつらは」

なんてことだ。完璧に本条先輩は上総を他者からみても「弟」だと決め付けている。

断じて抗議したい。ちりれんげを器に沈めたまま言い返したい。

「手のかかる弟だからあいつらも苦労してるだろうよ。これじゃあ後輩が懐かないわけだ。新井

林で懲りただろ」

冗談じゃない。上総が「弟」として見られて構わないのは本条先輩だけである。

「新井林とは価値観が違っただけです」

きっぱり答えた。

「別に懐かれなくてもいいですけど、まとわりついてくる奴は後輩でもいます」

「ほお、どんな風にだよ」

スープの汁まで平らげた本条先輩は、額にかいた汗を手の甲で拭い、面白そうに上総を見つめた。

「こっちは迷惑してますが、二年下の男子が最近しつこく俺に話し掛けてきます」

当然、頭に思い浮かべるのは王子面した霧島の、おごり高ぶった平家みみたいな姿である。

「評議の奴か？」

「いえ、違います。ただたまたま面倒みることがあって、それ以来、毎朝俺に一方的な話をしにくるんです」

生徒会の問題はもちろんのこと、霧島家の家庭事情、役立たずの姉であるゆいの存在価値の有無について、その他愚かな女子たちのレベルについてなどなど。上総はただ、相槌を打つしかない会話。

「へえ、そりやおもしろいな」

「おもしろくなんかないです。あんまりうるさいから、なんでそんなに俺にくっついてくるのか聞いたら、言動がおもしろいからとか言いやがって！」

言っではみたが、聞いた瞬間と比べると腹も立たなかった。

「いくら追っ払ったってくっついてくる、その理由がわからないな」

本条先輩はしばらく笑いをこらえるように唇をぴたりと止めていた。

やがてゆっくりとにんにく臭い息を吐いた。

「そういう奴を黙らせるにはだ、まず第一に、どっか運動できる場所に連れて行く。たとえばボーリング場でもいいだろ。そういうところで思う存分暴れさせろ」

人差し指を立てて、くいと曲げた。泥棒の意味と一緒に。

「そうすりゃ、男同士なら伝わるもんだ。お前に教えたことなかったか」

「それは、そうですけど」

——また俺のことを「女だな」とか言うんだらうな。

「そりゃそうだ。俺もお前にだけは、言葉で話さないとだめだとは思ってたからな」

いったん目を逸らし、指先で山椒の瓶をつつきながら、

「だが、お前みたいに面倒な奴は男じゃそうそういないだろ。立村、お前も自分ひとりの視点で決め付けるんじゃないねえ。いいか、お前以外の一般的男ってのは、もっと単純なんだ。むしろしゃしたらまず、食べ物と腹ごなしで十分にストレス発散できる生物なんだよ。お前みたいなのは例外なんだ。お前のことだからいきなりとっつかまえて、説教かましたんじゃないかねえのか？ お前がいつもされてるみたいに、だ」

その通りと言わざるを得ない。「おちうど」へ引っ張っていたのは事実だ。

黙っていると本条先輩はさらに畳み掛けた。

「お前の得意な卓球でもいい。とにかく思いっきり叩きのめして、その後でここのとんこつラーメンでもおごってやれば、大抵のいざこざは片付くものなんだぞ」

「信じられません」

——そんな単純なことで、霧島が大人しくなるわけないのにさ。

「ま、そうだな。立村にはそんなことしても効果がないのはよくわかってる」

本条先輩の独り言を上総はあえて聞かない振りをした。

ごちそうさま、そう一声本条先輩は言い放ち立ち上がった。

追う上総に本条先輩はきっぱり告げた。

「いいかげんお前も、弟卒業して兄貴になれよ」

上総は聞かない振りをした。

情報伝達係の古川こずえから、話し合いの場を用意した旨連絡が入っても、上総はすでに驚かなかった。

「さっきさあ、色ボケした関崎からいきなり電話がかかってきたのよ。なんでもさ、外部三人組のヒアリング訓練を、視聴覚教室でやりたいから、そのために教室を取っておいてほしいって」「視聴覚教室を借りるということか？」

青大附中時代はよくあることだった。こずえの首がおそらく電話の向こうでぶんぶん振られているだろう。

「それはそうだけどね、たださ、視聴覚教室って広いじゃんよ。広いから、たった三人のために教室一室借りるなんてできないじゃん。うちら内部生だったらそのあたりいろいろ考えるけどね、相手があの」

「関崎ならな」

妙に納得してしまった。

つまり、関崎は外部三人組……静内さんと名倉を含む……同士で、来る期末試験英語対策として、ヒアリングの大特訓を行いたいと思いついたらしい。そのあたりの情緒的な事情は聞きたくないで飛ばすとして、とにかく関崎は例のごとく麻生先生の元へ、

「視聴覚教室を試験前日貸してください、って頼み込んだらしいのよね。無理じゃんそんなの。あっさり断られたわけよ。そしたら次の瞬間、頭のシナプスが別の方向に繋がったみたいで、いきなり私のところへ電話をかけてきたのよ」

転んでもただでは起きない関崎乙彦。決して誰も驚かない。

「麻生先生から、教室を貸してもらおう条件として『十人以上の面子を揃えて、再申請しろ』って言われたらしいのよ」

「十人というと、だいたい委員会の一学年分の人数か」

単位としてはそう計算したくなる。上総でもそのくらいの暗算はできる。

「そう、だったら委員会用に借りるという荒業だって使えるじゃん」

「委員会に入っていればの話だけだな」

上総からしたらこういう場合どうするか。まずは誰か、評議委員会か規律委員会かそのあたりで話の分かる奴を集める。名前をずらっと書いてもらい、その場で申請する。

「関崎は規律委員だろ。そこから考えなかったのか？」

「美里がいるじゃん、南雲もいるじゃん、どうすんの。無理。それに何よりもあいつの本音は、静内さんにいいかっこしたいだけだってわかってるじゃんねえ」

——やはり、あいつは静内さんをか。

こずえが男女間のことに敏感なのは承知しているが、即答で上総と同じ判断を出すとは思わなかった。やはり関崎の心で生きているのは静内菜種しかいないらしい。同じ外部生同士の繋が

りは附属生には想像のつかない何かがあるんだろう。

「とにかくよ、静内さんに男前なところ見せたい関崎としてはいかなる手段を使っても、視聴覚教室を借りたいと、そういうわけ。それも他の奴の手助けで、じゃなくて、自分の考えたやり方にみんなが賛同してくれて、俺ってすごいだろ、って自慢したいのよ」

「ああ、わかるわかる」

上総もそのあたりはわからなくもない。ひとつ訂正するならば、その「俺ってすごい」自慢は関崎だけのものではない、男子一同かならず腹からぶら下がっているものだ。ただそれが皮を被っているか引っ込んでいるかどうかは人それぞれだが。

「関崎曰く、この機会に残りの七名を集めて、合同ヒアリング大会を行ったらどうって提案をしてきたんだよね。つまり、関崎たち外部チームがヘッドホンつけて愛のA B C Dを勉強している間、視聴覚準備室の中で修学旅行おねしょ事件チームが集結して、話し合いをするのよ。ほら、準備室って視聴覚教室にいったん入ってからでないと、もぐりこめないじゃない？ つまり関崎たちが三人、門番になってもらえば、他の人たちに気付かれないようにして心行くまで話し合えるわけよ。放送禁止用語、ばしばし、ピー音なしでOKよ」

放送禁止用語とはいかなるものか。こずえの語彙についてはこれ以上突っ込みを行わないことにした方がよさそうだ。

「つまり、どういうことなんだろう」

「密室会議が可能だと、そう言いたいわけよ。関崎は」

こずえは素早く話をまとめた。

「自分は気心知れた外部生トリオ組んで遊んでられるし、立村たちは話し合いを他の人たちに気付かれないようにできるし、密室ですべて片付けばあとは一件落着。どうこの名案、ナイスじゃない」

しばらく考え、上総も同意した。

「そうだな、俺は賛成だ」

あっさり答えるのが、正直口惜しくもあるのだが、しかたない。

人間関係の微妙なやりとりは、やはりこずえに任せておけば間違いない。

「悪いけど、これから他の連中に同じこと伝えておくからね。また明日の朝、関崎と打ち合わせしようよ。それと、藤沖も」

「わかった」

一言だけ重たい名前が頭に残った。藤沖、まだ真正面からぶつかっていない、事件の関係者。

こういう時はさっさと寝るに限る。試験勉強なんて考えずにベッドへもぐりこんだ。

本条先輩と話をもししていなければ悶々と頭のモーターを回しっぱなしだったかもしれないが、自分の考えたくない出来事が間近な時は、そんなことないことに決め付けてしまえばいい。恋人が病気になりばたばたした時も、部活動で挫折しても、本条先輩は結局あっさり復活している。それもこれもみな、「都合の悪いことはすべて忘れる」ゆえの強さなのだろう。

すぐに目が覚めた。青大附属に籍を置くようになりはや四年目。上総の体内時計は完全なる朝型にセットされている。目覚めるのは大抵五時か五時半くらい。六時半には自転車を漕いでいる。別にラジオ体操をするわけでもないけれど、突然走りたくなった。

——まるで関崎じゃないか。

よりによって宿泊研修の朝に、担任をたたき起こして朝のジョギングに誘うようなことをしたいとは思えない。ただ、今朝部屋の中に滑り込んできた風のやわらかさで、どこか目覚めてない感覚が息吹いたような感じがした。

午前様の父はまだ部屋の中。

上総は素早く水色半そでのパーカーに着替えた。首にひっかかるフード部分をひっぱって整え、髪の毛を指先でぬらした。靴を履くのも用心しつつ、水を一杯飲み干し外へ出た。

まだ夏休みまで間があるはずなのに、どこからか不思議な音楽が流れて来ている。

ラジオだろうか。腕時計を覗き込んでみたが、まだラジオ体操には早い。

音の聞こえる方へまず駆け出してみた。

自転車の音が響くのはおそらく新聞か牛乳配達かのどちらかだろう。

上総の家の周りには、それなりに建物が連なっている。ほとんどが似たような二階建てであり、また平屋建てでもある。ただ似過ぎていて初めて来る人は迷うらしい。

——天羽が思いっきり迷って、轟さんに引っ張ってこられたことあったな。

今は昔の物語である。

早朝散歩するような物好きは幸いいなかった。

だから、少し、欲が出た。

——川べり、走ってみようか。

軽く足首を片方ずつ回してみた。準備体操までするつもりはない。

スニーカーの紐を締め直し、上総は歩いて川のサイクリングロードまで坂を登った。綺麗にオレンジ色の道が舗装されている。四年前と殆ど変わらないこの道は、そのまま真っすぐ走っていくと大きな橋にたどり着く。渡ってしまうと全く青潟市とは別の方向に進んでしまい、奥に見えるはすべて山、山、山。たぬきやきつねが飛び出す危険性あり。

橋を渡るつもりはなかった。まずはそこまで、ゆっくり走ってみようと思う。

決して足が遅いわけではない。中学三年秋の体育祭ではクラス対抗リレーの選手に選ばれたこともあるのだ。もっともその選抜理由としては、「本来出るはずだった陸上部の男子が、地元の中体連大会に参加してしまい自動的に次点の上総が繰り上がった」だけのこと。

本気で一位を狙いたがる貴史と、同じくらい早いのにやる気が薄かった南雲が中心のメンバーだった。一年、二年と同じ面子で、毎年一位を獲っていた。そんな中に上総が紛れ込んだわけだから、ちんたら走るわけにはいかなかった。

貴史には、

「立村、お前もっと本気出せよ！ 手、抜いてるんじゃないよ、怪獣に襲われた気持ちでぶっとばせよ！」

喝を入れられるし、お気楽な南雲も、

「りっちゃん、もう少し、足を動かしたほうがいいと思うよ。たぶん、スタートから問題あると思うんだ」

とおっとりした助言をいただくし。ありがたいことなのだが、やはりしんどい。

どちらにしてもリレーで一位を獲りたいのだ、という本音を知り、諦めて上総は最後の手段に出た。元陸上部の、当時水鳥中学生徒会副会長の関崎に電話をかけ、三日間徹底的にトレーニングしてもらった。単に五キロマラソンを毎日させられただけではある。それでもなせばなるもの、とりあえずは自分の役目を果たすことができた。

関崎が青大附高を受けたがっていることに気がついたのもこの頃だった。

委員会とは別の場所での接点が出来て、上総なりに一息ついた秋の日。

予想通り関崎とは同級生と相成ったけれども、今、こんなに悩まされる存在になるとは思わなかった。

——高校の体育祭もやはり、やるのかなりレー。

義務は果たしても、参加したくはない。

一キロ走ったところでまず一息ついた。

やはり、長距離ランナーには向いていない。もともと朝一番、むしように身体を動かしたくなっただけなのだから、無理に橋までかける必要はないのだ。誰に命令されたわけでもない。

——このまま、歩いて戻ろう。

少しだけしゃがみ、水面を眺め、背中をすりぬけていく自転車の音を聴いた。

甦っていくいくつかの記憶が、角張った石ころのように転がり出し、傷をつけてゆく。

目の前の光景は、これ以上思い出したくない物語を自動的に紡ぎ出すだけのこと。

まだ雪の残る道端と、分厚いコートと、そして自転車。

指先で温度調節できるボタンを押すことができれば、その段階で一気に引き戻されるあの日の光景。

本条先輩と同じ、「見なかったこと」にして背を向けるつもりだった。

離れるつもりだった。

時計の針が六時を回ろうとしていることに、気がつかないふりをするつもりだった。

橋の向こうから自転車の軋みが再び響き渡る。

——この時間は、浜野が自転車を漕いでくるはずだ。

突然突き当たった、角張った石ころのような記憶。

「浜野」という名すら、この数ヶ月忘れていた。去年の秋、藤沖といざこざを起こした際の発端となったのも、「浜野」という名から生まれたものだった。

風見百合子が上総を、他の生徒たちの前で罵倒し、言い返すことなく項垂れたきっかけも、

やはり「浜野」の名からだった。

ずっと忘れていたはずだった。

忘れようとしていたはずだった。

意識の奥に追い込んで埋め立てたはずだった。

なのになぜ。こんなところへ来てしまったのだろうか？

橋の向こうに住む浜野は、小学生の頃からこの道をつきつて通っていたはずだった。その際に上総も無理やり連れられて、このサイクリングロード脇の坂から転げ落ちるように命令されたことがあった。たったひとり、できないと泣くと、無理やり腕をひっぱられて転がされた。誰一人、周りの奴らは止めなかった。怪我はしなかったけれども怖くて泣きじゃくると、浜野は坂を降り、近づいて来て、

「立村、立てよ、甘ったれるんじゃないねえ！」

遊び仲間たちの前で、言い放ったものだった。

浜野と決して顔を合わせないように、上総は極力登校時間をずらすよう心がけてきた。

逃げているわけではない。ただ、顔を見たくないだけだった。

今までは最低限のすれ違いですんだ。浜野という奴がガキ大将にしては几帳面で、決まった時間に新聞配達のパイトをしていることを、上総は親経由のうわさで耳にしていた。新聞配達ならば必ず自転車を使うはず。そして、このサイクリングロードを使うはず。

——俺はなんで忘れてたんだろう？

こんな時間に、川の見えるサイクリングロードになんか、来てはいけない。

朝六時。

どんなことがあっても、近づいてはいけない時間帯。

どうしてそれを忘れていたのだろうか。

家に戻ろう。三十分あれば朝飯も平らげられる、急げばシャワーも浴びることができる。

ここで滞ってはいけない。

身震いし、全力で逃げ出した。

——逃げられるだろうか。

上総が気がつくのは、遅かった。

軋む音、再び。すっと止まった。

自分の足も、動かなかった。

脇に、すすと、人の気配がする。

一歩も動けなかった。すべての感情を消し、能面のまま上総は横を向いた。

逃げようとしていたことだけは気付かれなくなかった。

「立村か」

こんなに接近されたのは、小学校以来だった。振り返るとそこには、完全スポーツ刈りの浜野

が硬い表情で上総を見下ろしていた。もちろん自転車にまたがったまま、籠と後部座席に新聞をくくりつけていた。

答えられない。ぴくりともできない。

「久しぶりだな」

ああ、くらいは言い返したい。それすら喉が動かない。ただ乾いていく。

しばらく無言のまま見返していた。浜野は自転車のハンドルを握ったまま、じっと上総をねめまわしている。普段着なのが意外なのだろうか。それとも何か、また因縁をつけにきたのだろうか。それこそ風見百合子の言う通り、「サッカーでオリンピックに出られるはずの逸材に傷をつけた」故の恨みを抱えているのだろうか。何よりも、まだ杉浦加奈子と付き合っているのだろうか。奴本人への疑問や状況への問いは溢れかえっているのだが、それを口に出して尋ねる気には全くなならない。それこそ本条先輩と同じく、一瞬のうちに瞼でシャットアウトしたい。でもできない。動こうとしない。

——何か、言えよ、答えろよ。

自分を叱り飛ばしてみても、金縛りは解けない。ふつう金縛りとは寝ている時になるものだが、すっかり目の覚めているこんな時に同じ状態になった場合、なんと呼べばいいのだろうか。

「連絡は行ったか」

全く思ってもみない言葉を、浜野は口にした。声変わりの終わったがりがりした声だった。

「この夏、同窓会がある。今度こそはお前も来い」

首を振りたい。なのに動かない。舌も、足も、頭も、何もかも凍りついたままだ。

そんな上総の様子を浜野はもう一度観察するように、腰をかがめた。もちろん自転車に乗ったままだ。目と目が近づき、その後昔ならば一発ひっぱたかれるようなアングルに自分がいる。

「美子先生が会いたがってる。お前、一度も、小学校の同窓会に来てないだろう」

上総は目の玉だけ動かすように、浜野の姿を見返した。白いTシャツの胸には小さなスポーツブランドのマークが刺繍されている。半そでシャツにジーンズ。仕事をするための格好だとよくわかる。

「また、連絡する」

ここまでの会話はほぼ十秒にも満たなかった。その間、上総は瞬間接着剤を両足に塗られたような状態で立ちすくむだけだった。そのまますりぬけていく自転車とインクの残り香でむせそうだった。まだ向こう側からは誰も来ない。サイクリングロードにはまだ、誰も走ってこない。

口の中から妙なかちかち音が聞こえた。足首から上が奇妙な震え方をしている。一步、足を踏み出そうとした瞬間何かに躓いた。草の生えている場所だったので転んでも痛みはあまり残らなかった。ただ目の前の視界が、高さ低くなり全く見知らぬゴミや草木が飛び込んできた。また立ち上がろうとするが、足が歩き方を忘れたようだ。また転んだ。今度は両膝からがくんと落ちた。また別の自転車が猛スピードで上総の背を走り抜けていった。浜野ではなかった。

——同窓会なんて出る気ない。

少なくとも小学校の同窓会なんて。いじめられて、嫌われて、仲間意識の強い連中に囲まれて

息苦しかったあの時代、しかも最後は傷害事件まで起こしてしまったあのクラスメンバーと顔をあわせたいと、一瞬だって思ったことはない。

同窓会の案内も毎回、送られてくるけれども返事も出さずに捨てていた。たまたま知らなかっただけと言いつげができるからだった。

——なんで俺は、あんなところに。

上総は繰り返し呟いた。ゆっくり、足に動き方を思い出させるため、足首をもんでみた。そこからゆっくり、後ろ手を付いて立ち上がった。もとにすぐもどった。不意を突かれただけ、少し驚いただけ、そう決め付けたい。頭ではそう思う。でも、

——なんで、また俺の前に現れるんだ。

——あれだけ、接点を持たないようにしてきたのに。

はっと気がつく。走った後の汗が冷たくはりつき、震えが止まらない。

小学校の卒業式直後の出来事だった。

さんざん馬鹿にされた、とんびのコートを羽織ったまま自転車に乗り、浜野と対峙した場所があの川べりであり、サイクリングロードだった。

決着をつけた後、上総の耳には浜野の怪我および状況について途切れ途切れにしか入ってこなかった。あえて耳栓をしていただけともいえるだろう。母がそのあたりの面倒な事情をすべて片付けてくれたらしいと想像はつく。しかし、上総自身は一切品山の同級生たちと接点を持たずにきたので、何が起こったかどうかは青大附属を通じて入ってきた情報以外、知ることはなかった。

——サッカー部のホープだった浜野が、卒業式間際の取っ組み合いのけんか……若干意味は異なるにせよ……のとばっちりで足に怪我をし、その後後遺症が残った。

そんな大惨事だったとしたら、上総も全く知らぬ存ぜぬでは通せなかったはずだ。

母がどのように、浜野の家族と話し合ったのかはもう知る由もない。

ただ、毎日品山の道を自転車で走り抜ける際にまとわりつく、カッターでつけられたような切り傷の痛み。それだけが鬱陶しかった。

——嫌がらせをされたのはこちらの方だ。逃げ隠れなんてする必要なんてない。

——いや、向こうの「善意」を「悪意」と取ることしかできなかった自分が悪いんだ。

両極端を振り子のように揺れ動きつつ、あえて上総は静観することを選んでいた。

自分の持つ物事への「感じ方」が間違っているとあらゆる人々から指摘され続け、その声を遮断するには、口を閉ざすしかなかった。

そうなんだろう、あれは「いじめ」ではなかったのだろう。

浜野は、年少の頃から上総を、品山の子どものたちの仲間に入れようとして苦心惨憺していたのだから。その行為が誰の目から見ても当然の善意であることだとはみな理解していたはずだ。ただひとり、上総を除いては。

——理解できなかった自分が悪い。

その一言だけを飲み込んで、四年間上総は青潟大学附属中学へ身を隠していた。

ほころびが目立ちはじめ、すでに周囲からは本性がばれていることも気付いていたけれども、それでも最後まで白を切り通すつもりでいた。

——なのに、なぜなんだろう。

自分でも、今朝なぜあの時間帯、あの場所に向かったのか理解できなかった。

確かに先日の本条先輩とのボーリングをきっかけに、なまっていた身体を動かしたくなったのは本心としてあった。高校入学後降りかかった面倒な出来事を、まっさらにするには身体からすべて出してしまうのが一番だと、無意識のうちに感じ取っていたのかもしれない。

——けどそれならば、自転車で別方向へ走っていったって同じことだったんだ。

なぜ、あの時、あえて走りたかったのか。

なぜ、あの時、浜野が自転車で川べりを走っていることを知っていながら、その場所へ向かおうとしたのか。

——まるで、俺の方からあいつに会おうとしたかのように、だ。

こんなこと、貴史だったら「そんなこと気にすることねえよなあ」と笑い飛ばすに違いない。南雲だったら「りっちゃんは真面目だねえ」くらい言うかもしれない。本条先輩だったら「だからお前は女々しいっていうんだよ」とはたかれるだろう。

考えること、そのものがおかしいのだ。

何もなかったことにできない自分がいて、ほんのささいなことに激しい恨みを抱えてしまう、そのこと自体が「間違っている」と人はいう。「間違っている」と思うなら直しなさい、直せば周囲は受け止めてくれる、そう言いやる。

上総にわかっていることはひとつ、「そうしたくない」それだけだ。

どんなに四方から自分の価値観を押しつぶす壁が押し寄せてこようとも、上総は決して自らの感性を否定されたくはない。どんなに善意であっても、どんなに心優しい心の持ち主であったとしても、上総は決して、

——浜野を憎んだことを、後悔はしない。

のだ。

シャワーを浴びて学校に向かった。道すがらまた浜野をはじめとする連中に目をつけられるのではとひやひやしたが、取り越し苦労だったようだ。陽射しが首筋を焼き、もやもやしたままの頭が強引に後ろへひっぱられたような感じがする。青大附属へ向かう時は、足から一気に目覚めてきくるのが常だった。品山から青大附属までは目に見えない橋が掛かっている、いわゆる「三途の川」に似た縁切りを、短い区切りで行ってくれるようだった。

とはいえ、

——古川さんにこれから顔合わせるんだよな。

さっきの浜野との一件もからみ、正直気が重い。

古川こずえにしても、上総がいつも思うのは、

——何が楽しくてこうも、人の世話ばかり焼きたがるんだろうか。

これにつきる。もちろんこずえも「下ネタ女王」の皮を被った善意の塊だというのは、三年間話をしてきた上総も理解している。そのくせ女子にしては珍しく、その「善意」にあとくされがない。先日、霧島にすっぱぬかれたエロ本の件にしても、さほど尾を引いているようなところはない。こずえではないけれど「もし美里に見られたらどうするの？」はまさに名言。こずえだから許されて、ネタを提供してもよいと諦められるなにかがある。

だがしかし。

——杉本と藤沖の面倒を見て、外部生の関崎をからかって、女子たちのことも目配り気配り

して、俺にまで声をかけてくる。

そこまで手広く青大附属内で世話焼き姉さんを務める理由というのはどこにあるのだろう。

もちろん、人のことだから気にすることはないのだろうが、最近上総にはこずえの言動にどことなく疑問を感じつつあった。それがどこ、と問われると「なんとなく」としか答えられないのだが。

上総は自転車を置き場につけ、教室へと向かった。

まだ朝八時を回ったばかり。でもそれなりに誰かはA組にいるだろう。

「立村、ちょっとちょっと」

考えていればいつのまにか引き寄せられてくる。世話焼き大好き人間古川こずえは朝一番、「昨日何人分の写真で、ストレス解消したかしらないけどさ、ずいぶん生氣のない顔してるねえ」

「余計なお世話だ」

軽く流しておくつもりだった。こずえもそのあたり、男子の気持ちをわきまえているようで、「例の件だけど、とりあえず私の方で話を進めておいていいね」

「了解した」

「あと、それとさ、藤沖の方にも」

いったん言葉を切った。

「あれ、なんか立村、納得いかなさそうな顔してるけど、言いたいことあったら早めに言っちゃいな」

「そういうわけじゃないよ」

どうせ、こずえの裁量ですべて事が進むのだから、上総が口を出すべきことではないような気もした。

「またあとでぐたぐた言われても困るからね。まあいいか。とにかく、藤沖も電話でその話乗ったって言ってたから、あとは私が関崎に説明するだけ。立村が英語の勉強をしたいというのは自然なことだし、そのおこぼれを頂こうと関崎たちがくっついていくってのも自然な展開でしょ。まあね、麻生先生に疑われなければあとはいいんだけどね」

ひたすらべらべら喋りつづけているこずえを、上総はふと、遮った。

「古川さん、あのさ」

「はいはいなあに」

「試験勉強、してるの」

とっぴょうしもない質問だとはわかっている。ただ尋ねずにはいられなかった。

「まさか、今回の期末は捨てたに決まってるっしょが。あんたも、関崎も、藤沖にも付き合わせるよ。いやとは言わないでしようねえ」

「捨てる以前の問題だからいいけど、ひとつ確認したいんだ」

諸問題を通り越し、上総はこずえへ真正面に向き直った。

この体勢、非常にしんどい。

こずえは目を逸らしたりしないから。

「なんで、古川さん、そんなに人の面倒を見たがるのかな」

「はあ？」

言われている意味がわからないとばかりに、こずえが首をぐるっとまわした。

「私のことを言ってるわけ？」

「そういうこと」

じっと見据えてみた。下ネタ女王古川こずえ相手にはしづらいこと。

「杉本をはじめ俺たちからんだ話なんて古川さんには全く関係ないのに、なぜわざわざ情報を集めてくれるのかなってさ。前から不思議に思っていたんだ」

言葉に出してみたことのない、じくじくした違和感の出所がどこなのか、上総にはわからなかった。見えない感情に色づけてみれば「なんとなく」としか言いようがない。

「ほお、ずいぶん生言うじゃん、我が弟よ」

からかい調子で答えるこずえ。大抵このパターンで遮られるのが常だった。

「今気付いたから」

「あんたたちがばたばたやってるからしかたなく、腕まくりしたくなるってだけなのにねえ。立村、私のやることになにかご不満でもあるわけ？」

「不満じゃないよ。ただなんとなくさ」

するっところてん状態に言葉が滑り出した。

「古川さんって、家族の話とか基本的にしないだろ。弟のことはしょっちゅう俺に似てるとかなんとか言うけど、ものすごく抽象的な言い方しかしないなとか」

「美里と比較して言ってるんじゃないの？ ばかくさいこと言いなさんな」

さらに流そうとするこずえ。普段だったらそこで引くのが上総の答え。

「比べているわけじゃないけどさ」

かちんときたのは確かのように。こずえの目つきが少しだけきつくなった。

「ただ古川さん、いつも自分のことには首つっこまれないように、用心しているような気がしたんだ。気のせいだったらいいけど」

朝の光は魔力だ。

ところてんがつるつるすべりだすように、今まで堅くこわばっていたものがこぼれてくる。つい一分前には頭をよぎっていなかった言葉。こずえに感じていたひとつの疑問を、四年目にして濃縮して告げたようでもある。

喉仏に隠していたのかもしれない、溜めていた言葉。別に「溜まっている」はスケベなネタだけではないのだと思う。例えれば意識の中に隠し持ったカメラのフィルムが、ある時突然一気に現像されて差し出された、そんな感覚にも似ている。

「あんたも少し頭さっぱりさせたほういいんじゃないの？ ったくばっかばかしい」

一瞬言葉が詰まったようだが、ほんのわずか口を閉ざしたに過ぎないこずえ。やはりこの話題

は関係ないと流すつもりらしい。

「もともとあんたは弟分扱いされるのがさだめ。なんだからそりゃあね、お兄ちゃんお姉ちゃんにめんこめんこされるのがしんどいのはわかるけどねえ。八つ当たりじゃん、今の言い草ったらねえ。ほらほら、あんたの方こそ、人のことより自分の身の心配しなさいよ。そんなに構われるのがいやだったら、もっと大人になって、駄々こねないで、周りを安心させなさいよ。もうねえ、羽飛だってあんたのこと、心配してしょっちゅう私に電話かけてくるんだよ。美里だってそうだよ、みんなあんたのことをねえ、立村」

あえて上総は何も言い返さなかった。こずえの口の回りが速いことだけ頭の隅に留めた。

「わかった、俺が悪かった」

「わかりゃあいいのよ」

話が一段落ついて、こずえがさっさと校舎へ戻るのを見届けた。

——今朝から変だ。

浜野と鉢合わせしてしまったこともそうだし、あの下ネタ女王古川こずえに対してかなり生意気なことをぶつけてしまったのもまたひとつ。今までの自分なら決してしなかったような言動を、今朝、二回もやらかしてしまっている。

——でも、見えるんだ。

小声で呟いた。もともと人の言葉を深く受け止めすぎる傾向があるのは上総のくせと認識していた。考えすぎと片付けられるようなことだし、こずえに対しても今までは、単純ながらも面倒見のよいあねご肌タイプ女子としか認識していなかった。

なのに、今、この朝。始業チャイムが鳴る前の時。

——やはり、古川さんは、どこか変だ。

——どうして誰も気付いてないんだろう。

貴史へ永い片思いを続けていることを指しているのではない。むしろ、その恋心はまだ人前にさらけ出しているわずかな生の感情に思える。ほとぼりしたその気持ちを、青大附中時代の同級生たちは笑いつつ応援し、貴史に苦笑いさせたりもしていた。素直で、背中を押したくなる気にさせられるのは、あくまでもこずえの姿が自然に見えたからだった。

——でも、今の古川さんは違うだろ。

そう思わずにはいられない。

なぜこずえは、人の仲介役を買って出る時に、あれだけ目を輝かせているのだろう。

なぜこずえは、口、手、足、すべて使いこなして後輩たちや同級生たちの世話焼きを楽しんでいるのだろう。ふつうだったら避けたいことのはずなのに、思えば何か女子関連のトラブルやら恋愛関係の泥沼審議の際には必ず、こずえが絡んでいる。決して主役にはならないけれども要のポジションは死守している。

美里が修学旅行中、体調を崩した時もそうだった。

卒業式間際、美里と貴史とのトラブルで上総がE組へ逃げ込んでいた時も。

そして今回の後輩たちの事件についても同じく。

共通しているのは、どの居場所においてもこずえは傍観者のまま。

人の面倒を見つづけていれば、自分のことに首を突っ込まれずにすむ。

その一方で、上総を含めて誰も、こずえの家庭事情について語る奴はいない。

もちろん上総がこずえに話した通り、しょっちゅう弟との比較で下ネタトークをかましてくることはある。しかし、それだけだ。他の連中のように両親の話とか、話題としてよく出てくる勤め先の肩書とか、そういう話題が溢れる場所には決して入ろうとしなかった。

理由を突き詰めるべきか、正直、上総にはわからない。

単なる趣味の問題と片付ければそれまでだ。

ただ、こずえのあけっぴろげな態度の裏に透けたものを、上総は見つけてしまった。

まだそれは「もの」であって、どういった感情なのか、掴み取れないままだけど。

簡単な言葉でたとえるならば。

——古川さんも、ほんとうは。

続けて「淋しい人なんだ」そう続けようと思った。できなかった。

いつもの上総の考えすぎだ、神経が今朝の浜野の一件でささくれあっているだけだ。まさかあの、「下ネタ女王様」が、どこぞの弟分と同じように、見られたくない自分の傷を隠すために額から襟足いっぱい白塗りしているなんてこと、あるわけがない。古川こずえに限って、裏表なんぞあるわけがない。

そろそろ裏表のはっきりしすぎた性格の霧島が、朝のご挨拶をしに現れる頃だ。英語科A組の教室に入ろう。

——あいつ、俺の言動が面白いとか言ってたな。冗談じゃない、今日は具体的にその理由を突き止めてやるからな

まず深呼吸し、上総は素早く自分の「仮面」を被り直した。

あいつにだけは言い負かされるわけにはいかない。

本条先輩から助言された通り、とことん「兄貴分」を演じてみせる。

もう「弟」とは呼ばせない。

——留め金、触ったら、火傷しそうだな。

自転車置き場に放っておいた皮の鞆が、いつのまにか熱をもっていた。恐るるべし黒皮の威力。直下日光をもろに受けている。こずえと話をしているうちに、勝手に太陽が金具の部分までエキサイトさせてしまったかのようだ。

柄の部分は触っても問題なしだ。上総は指先で用心深く摘み上げ、腕時計を覗き込んだ。

だいぶ時間が経ったように思えたのだが、実はたった五分くらいしか進んでいない。

ということは、

——余裕で、あいつが絡んでくるな。

あれだけ大法螺吹いた後でどの面下げてくるものやら。

——なんだかあいつ、俺の登校時刻を見計らったようにやってくるよな。

最初のうちは偶然だろうとたかをくくっていたのだが、この前のように朝六時台という通常では考えられない登校時刻であっても顔を出すというのはいったいどういうことだろう。もしかしたら自宅に盗聴器を取り付けられているかもしれない。上総の住所自体知らないだろうしありえない妄想ではあるけれども、こうも追いかけられるとふざけた発想をしたくもなる。

上総はずっしり重たい鞆の柄を握り直した。

どういう根性しているのか見当つかないが、一応先輩である上総に恥をかかせておいてそれでも顔を出したいと言い放つ霧島のことだ。逃げるつもりはないだろう。

——だったら、こっちから迎えに行ってみるか。

もちろん中学校舎に顔を出す気はなかった。

霧島の顔を覗き込んでみたい気は大いにするが、他の生徒会メンバーと鉢合わせして気まずい思いはできればしたくない。いや、それ以上に、

——杉本も朝早いからな。

妙な勘繰りされて、またわけのわからない展開に持ち込まれるのは避けたい。杉本梨南の勘が鋭く、また滑稽なほど深読みされたあとフォローするのは、慣れている上総でも大変だ。

まず高校の校門まで戻り、次に雑木林にもぐった。

夏真っ只中でありながら涼しさをかこえる場所。

それを狙ってきたと言われてもしょうがない陽射し。まずは一息ついた。いくら時間があるとはいえ、遅刻だけは避けたいもの。自転車で高校校舎までのこのこやってきて、その後即、中学校舎へ戻るのならばおそらく、林を横断してきているのは明白だ。そう考えるならば、林の中で耳を澄ませていれば奴を捕まえることはたやすい。ついでに言うなら、霧島にとっても話をつけた後、すぐにとって返すことができるのだから好都合なはずだ。なによりも。

——誰にも気付かれずにすむから、言いたいこと言えるしな。

あとは上総と同じことを考えている輩がないことを祈ればよい。

自転車特有の、油を欲しがらる悲鳴のような音はまだか。

側の樹木に持たれて、呼吸を整えた。

「僕は最初からあなたを先輩と思ってませんよ。慣例でしかたなく『先輩』と呼び習わしているだけです」

てっきり自分に呼びかけられたのかと思った。

頭の上で寄り添い合う葉のすれるざわめき、時折聞こえる鳥の鳴き声。しかし人の言葉はよく通す林の中。上総は呼吸を浅く、細くした。

——霧島か？

疑いはない。独特の甲高い声も、空威張りに似た早口なしゃべり方も、ここ数週間聞きなれたものだった。かすかに聞こえるだけなのに、なぜかはっきりと聞き取れるのは自分の耳に刷り込まれたからなのか。

「なんで僕が謝らねばならないのですか？ 僕は真実を申し上げただけです。誰かが口火を切らない限り、嘘が通用してしまいますからね。そのどこが、間違っているとおっしゃるのですか？」

——似てるな。

何に？ その答えが脳裏に走る前に、霧島の嘲笑する言葉が連なる。落ち着いて聞き取る気持ちでいられるのは、それが幸い自分に向けられたものではないと理解しているからだ。まずは霧島と話をしている相手を確認しなくてはなるまい。下手に上総が顔を出せば、今度はそいつにまで「実は僕、立村先輩が例の怪しい本を買っているところを目撃しまして、それで」などとわけのわからないこと言われる可能性、大である。身を隠したほうがよければ逃げよう。一歩踏み出し、小枝の隙間から覗き込む。

思ったよりも遠くにいる。

太い木々の、二本ほど向こう。

——あれは、まさか。

ひとりではない、霧島はふたりを相手としていた。

上総も盗聴することに、即、決定した。

「こんな木陰で話をしろなんて、ずいぶんやましいこと考えているようですね、おふたりとも。それなら堂々と生徒会室までいらっしゃればよろしいのではないですか？ 僕はいつでも準備が出来ておりますがね」

陶器人形にも似た伶俐な顔立ち。誰もあの顔から鼻血たらしたところは想像できやしないだろう。

「いいかげん、覚悟を決められたらいかがですか、渋谷先輩？ 藤沖先輩も」

——あいつ……何を。

霧島相手に何度思ったろう。

「あいつ、何考えているんだ？」なるフレーズ。

今までは自分に向けられていたから考える余裕などなかった。

相手が違うなら、考えられる。集中した。

三人とも上総がすぐ側まで近づいていることに気がついていないようだ。霧島の得意ぶった演説をまずは拝聴したかった。用心深く隠れ直した。

「霧島、お前の言い分は正論だ。それは男としてよく理解している」

「理解されてらっしゃるんですけど、認めようとなさらないのでしょうか。さらに言うなら、うちの会長を口説いて無理やり悪事の片棒を担がせようとなさるのは、なんででしょう」

明らかに藤沖と分かるいかつい白シャツ姿の男子。三人固まっている中で、拳骨から親指を上突き出している、頭の出方だった。表情は読み取れない。

「渋谷先輩、何度も言うようですが、僕はあなたのでかしたことに興味はありません。最初から、どうでもいい人のことなど、関心を持つ時間そのものが無駄です」

次の標的にされた女子は見なくてもわかる。黄色いヘアバンドで額の前髪を留めていた。ヘアバンドの位置が以前はまるまるひたいを出した上だったはず。今は前髪を押さえる格好で眉をすべて隠している。俯いているだけだ。律儀に霧島が、藤沖、そして隣の渋谷のまん前に移動し、人差し指を突きつけながら糾弾しているのはくせだからだろうか。機械仕掛けを思わせた。

「僕は最初申し上げましたよね。生徒会室できちんと話をつけましょうと。それがだめなら次は中庭で、それでも敷居が高いのなら百歩譲って藤沖先輩付き添いのもと高校校舎でいかがですか。僕なりにそれは善意で譲歩させていただいたのですが、最後には人気のない場所でここですか？ 要するに陰で片をつけたいわけですね。たくさんのギャラリーに囲まれることもなく、真実をつまびらかにすることもなく、先輩という名の威厳でもって塗りつぶそうとするわけですね」

——「つまびらか」だとかやたらとしゃちほこばった言葉使いたがるのって、なんでなんだ？ 大袈裟というかなんというか。

自分にも覚えがあるこの、爪先立ちのくせ。

霧島と同じ年頃だった時期、確かに自分はやらかしていた。特に本条先輩相手に。よくぶん殴られないですんだものだ。感謝したくなる。

「そんなに焦る理由なんてあるのですか？ 僕を黙らせるために、口止め料でも用意するつもりなのですか？」

——今度は「口止め料」ときたよ。

事情が事情でなければ、きっと笑い出していたことだろう。観客であれば目の前のふたりも大受けしたいところだろう。そうできないのが、「真実」の重みだ。気取った言葉で責めたてているその「真実」が、渋谷には否定できず、藤沖もかばいきれないからこそ、止めることができないというわけだ。

再び風が、頭上の木漏れ日を揺らめかせた。ざわめきだけでは隠せない会話が続く。

「とにかくですね、僕としては藤沖先輩のご提案を呑むわけには参りません。『真実』である

以上、きちんと覚悟して受け止めていただきます。生徒会側としても、うちの会長には申し訳ありませんが渋谷先輩を何事もなかったかのように受け入れるつもりなどございません。もし再び、書記としてお戻り願うとすれば条件はひとつだけです」

「条件、って？」

か細い女子の声。半年も経っていない最後の評議委員会の際、上総に「いいかげんにしてください！」などと金切り声で叫んでいたヘアバンドの女子が同じ口から発したものとは思えなかった。

「全校生徒の前、および、今回の事件において一番迷惑を被られた杉本先輩の前で、土下座することですよ。渋谷先輩、あなたのでかしたことそのものではなく、そのことを隠して人に罪をなすりつけようとした、その行為を認めなさい！」

とうとう命令形まで使い出した。

——霧島は、嘘を言わない奴だな。隅から隅まで本当のことを言いたがるんだ。

やはり、似ていた。誰かに。

「霧島、お前の正論は分かっている。だがそれでも、理解してくれ」

「しつこいですね。いったいおふたりの間に何が起こったか存じませんが、僕は黙る気などありません。事実をそのまま伝えるのみです」

藤沖が、突き出した親指の先で指相撲するように頭を上下させている。

「先日のように土下座されても無駄ですよ」

言い放つ霧島は、わざわざ藤沖の前に立ちはだかり、

「この前おっしゃいましたね。うちの姉と同じ思いをさせるべきではないと。ありがたいことです。あのごくつぶし女が青大附属から追い出されたように、渋谷先輩が同じ目に遭うのではとご心配のご様子。はは、全くもって笑止、笑止ですよ。ご安心あれ。青大附属の教師たちは学業不振と殺人未遂以外、せっかく獲った金づるの生徒を追い出したりしませんよ。たとえ何があろうとも、恥を背負ってこれからの約三年半の青春を青大附属で過ごしていただくことになるでしょうね。まあ、せいぜいがんばってください」

突如、しゃがみこむ気配がした。服の激しくすれる音。

——渋谷さん、倒れたのか？

思わず姿を見せてしまいそうになり上総の方が慌てて身を引く。

「どうしたんだ」

藤沖の堅い声に、戸惑いを感じる。

「はいはいなんですか」

笑いを含んだような霧島の返事。

「そう、そうすれば、私、これ以上、嫌われないですむの？」

「馴れ馴れしい言葉を使わないでください」

撥ねつける霧島の足元に、手が伸びていた。つかんでいた。止める藤沖を振り切るように、ぎゅっとストラックスの裾を引っつかんだ。

「私、土下座します、いくらでもします、だから、許して、お願い、許して」

「何を勘違いしてらっしゃるのですか。汚いですから放してください」

馬鹿丁寧な口調だが、その奥に蔑視。遠目で観察している上総にもそれは伝わる。

「お願いだから、これ以上、嫌いにならないで、私」

「ご安心ください。これ以上、嫌いになることはないですよ。いいかげん放してもらえませんか、尾崎紅葉の『金色夜叉』やるはめになりますよ。文学史、ご存知ですよ」

——蹴り飛ばしたいんだな、つまりは。

「僕は出会った最初の瞬間から、あなたのことを嫌いでしたからね」

もはやこれまでと、渋谷を助け起こしたのは藤沖だった。これで霧島は「金色夜叉」の貫一を演じずにすんだ。

テレビドラマか映画か演劇か。作り物の世界を見せ付けられているように思えて、その一方で演じているのが自分の身近な知り合いだという事実。

繰り広げられている三つ巴の口論を、他人事のように眺めている。

——対決したら、杉本の圧勝だな。

腹の底に広がる何か。不思議と穏やかに感じる。濡れ衣だとか、学校や生徒会から嫌がらせされ続けているとか、杉本梨南にはなにかと不利な情報ばかり流れていた。学校側が鬻ぎ承知で渋谷名美子をかばうつもりだと聞いた時には、自分が杉本の助太刀をしようといきり立ったりもした。それもこれも、杉本が圧倒的 不利だと思い込んでいたからだった。

なんのことはない。

——こんな人を相手にするのか。

馬鹿にしているつもりはなかった。

万が一、佐賀はるみ生徒会長と対峙するのならばまた話は変わってくる。すでに勝負付けのすんだ相手だし、やわらかに防禦されてしまえば杉本はもう手も足も出ない。

だが、渋谷名美子になら。

——申し訳ないが、俺も霧島と同意見だ。

杉本が本気を出せば、もうペしゃんこにつぶれてしまうだろう。

たとえ藤沖やこずえが懸命に丸く治めようとしたところで、杉本は容赦しないだろう。

嘘つくことを潔しとしない、いくさおとめの杉本梨南ならば。

刃をまみえずとも、「真実」だけを言い放てば、それだけで終わる。

改めて霧島のつんととがった狐顔を眺め遣る。

汚いものをみるかのように渋谷をにらみつけ、これ見よがしにスラックスの裾を払っている。仕種ひとつひとつが落ち着いていて、どう考えても健康な中学二年男子の言動とは思えなかった。これは浮くだろう。生徒会役員副会長という肩書を踏まえて考えても、同学年の男子たちに共感を持たれるタイプには思えなかった。

——女子にはもてていると聞いているけどさ。

——あいつに友だち、いるのかよ。

あの甲高い口調でいばりくさったものの言い方をするようでは、おそらく周囲からも煙たがれているのではないだろうか。例の鼻血事件をきっかけに、上総も霧島を注意深く観察してきたつもりだが、今まで同学年の男子たちと肩を並べて談笑している姿を見かけたことがない。たまたまなのかもしれないが、つい不自然に感じてしまう。

——友だちがいれば、まずは朝、教室で馬鹿話でもするだろうにさ。

自分の恥とも言える現場を押さえつけられたにも関わらず、あれからずっと伝書鳩のごとく上総の元へ通いだしたその理由とは。

泣いたり笑ったり威張ったり嘘ついたり忙しくしながらも、いまだ上総を追い掛け回している理由とは。

人を挑発するような言葉を投げかけつつも、その間際にふと、上総の様子を伺うような目つきをする理由とは。

ほんのわずかな隙間に、答えがするりと忍び込む。

——あいつは。

こずえについさっき使おうとした言葉を、今度は自然に感じる事ができた。

——淋しいんだ。杉本と、同じなんだ。

合わせ鏡を覗き込んでいるかのようなようだった。今まであえて意識せずにはきたけれども、霧島の口調といい振る舞いといい、いわば「受け入れられている杉本梨南」のごときもの。成績優秀ながら人の神経をきりきりさせるような言葉遣いをするところもそうだし、さんざん罵倒しつつも結局は上総の側から離れない……杉本は絶対に否定するだろうが……ところも同じだった。

杉本も、霧島も女子から受けよく、男子から鬨感を買っているところがまるっきり一緒。

どうしてこんな単純なことに気づかなかったのだろう。

本条先輩には「兄貴分になってやれ」とか言われたけれども、要するに杉本と同じ扱いをして差し支えないという、ただそれだけのことだ。か細い声で助けを求めている、あの声を霧島も裏声で呼んでいた。それを聞きつけた上総が手を無意識のうちに差し伸べてしまった。実はそれだけのことだった。

——もし、あいつが杉本と同じパターンだとしたら。

瞬時に結論を出した。

——霧島、墓穴掘るぞ！

ためらわなかった。上総は木陰から一步前を出た。声を出す前に三人が気付いたようだった。いきなり霧島が背中を反り返らせたように見えた。藤沖が助け起こしたばかりの渋谷を手でかばうようにして、改めて上総を見据えた。

「霧島、こっちに来い」

言葉きつく、歩きながら呼びかけた。顎をきつくひいて、肩をこわめに怒らせた霧島は、  
「立村先輩ではないですか」

上ずった声で空威張りした。本人はそう思っていないだろうが上総にはもう見え見えだった。  
「今、いらしたのですか」

「ああ、お前がいつまで経ってもA組の教室に来ないので、妙だなと思って迎えにきたんだ」  
「それはそれは」

果たしてこいつは、先日のこずえについて大嘘を覚えているのだろうか。観察するつもりでいたのだが、なんのことはない、もう顔に後ろめたさがまるまる現れている。ごまかしているのだろうが罪悪感たっぷりといった本心は、腹を突き出すくらいに反り返っているその背筋に現れている。悪いが、ほんとうにこいつ、間抜けだ。

「悪いけど、今の話全部聞かせてもらった」

次に藤沖に伝えた。隣でしゃくりあげている渋谷には目も向けなかった。レディファーストとは違うかもしれないが、女子に不必要な恥をかかせる気はない。

再び霧島に近づいた。どんどん肩甲骨があがって行って首を短く見せそうな感じあり。知らぬ人からすれば堂々たる態度なのだろうが、上総にはもう、嘘をついた後小さな子どもがきょとときょと目を動かすのと同じに感じる。

「霧島、今日はこれでやめとけ。あとは関係者がすべて片付ける」

「関係者、ってそれは」

言いかけた霧島を制するのはたやすかった。

「まずは期末試験が終わるまで待て」

「期末？」

小声で、決して目の前のカップルには気疲れないように曖昧な言葉遣いをするよう勤めた。

「そんな悠長なことしている暇なんてないでしょう、立村先輩も杉本先輩に対して」

「お前が協力してくれたお蔭でなんとかなる。感謝する」

「でも、それだけでは困るんじゃないですか。僕は先輩のために」

「ああわかってる。それはよく理解している。でもな」

霧島にしか聞こえない声で伝えた。究極の囁き声だ。

「この前の写真集の件をばらされたくないんだったら、まずは黙れ。お前に悪いようにはしない。あとで、ゆっくり話そうな」

両目、しっかりと見据えた。

「期末まで、待てるな」

霧島の返事を待たず、改めて藤沖に向き直った。

「古川さんから聞いてるだろう。期末試験前日、視聴覚教室での話し合いの件だ」

返事はない。黙って上総を見返している。毛むくじゃらの片腕で、渋谷を背に追いやっている。ヘアバンドで押さえられた前髪の下、その表情は読み取れない。

「すべてはそこで決着がつく。俺も杉本の付き添いだ」

もう一度霧島を手で招いた。さすがに近づいては来ない。場をわきまえているようだ。  
「どういう判断をするかは杉本の胸一寸だし、俺も口出しするつもりはない、ただこれだけは伝えておく」

真上をよぎる雲で足元が一瞬暗くなる。目眩がする。  
「どんなに隠したところで、明るみにされない事実はないんだ。それは俺が実体験から一番よく知っている」

最後に霧島に向けて、言葉を発した。  
「お前と一対一で話したい。期末が終わったら俺から直接連絡する。それまで待ってろ」

霧島の反応がどのようなものか、確認はしなかった。上総は背を向け、急ぎ早に高校校門まで走った。さすがにそろそろ週番の規律委員に捕まりそうな時間帯だった。南雲が週番ならば見逃してくれるかもしれないが、関崎だったら遅刻の違反カードを切られる恐れありだ。ぎりぎり生徒玄関の戸が閉まる寸前にもぐりこみ上履きに履き替えていると、その後ろから藤沖が駆け込んできた。どうやら、この日は多少の遅れを大目に見てくれる規律委員が週番だったようである。最も玄関から近い一年A組の教室に向かい、改めてふたりで並んで入った。藤沖と肩を並べる格好で教室に飛び込んだのは、初めてだった。

驚いた風に関崎がふたりを眺めていた。  
席脇を通り過ぎた時に聞こえてきた。  
「藤沖、おはよう。立村と来たのか」

席についた藤沖に話し掛けている様子だった。藤沖がどのような返事をしたのか上総には聞き取れなかったし、盗み聞きする気もなかった。もう勝負が決したものについて、しつこく追う必要も上総にはなかった。

関崎が上総に、きわめて菱本先生ばりに声をかけてきたのは、昼休みすぐだった。

C組で貴史や天羽たちとまた花札でもやろうかと腰をあげ、教室を出て行こうとする間際だった。わざわざ背中から

「立村、古川から聞いたと思うが」

そう呼びかけられたら立ち止まらないわけにはいかない。

上総は振り返り、まず関崎の瞳奥を探ってみた。何かが見えるわけでもない。隠し事ができない奴なのだとは伝わってくるがそれだけだ。

「わかっている」

聞かれるまでもなく、例の一件ということは知っている。短く済ませたい。

「そういうことだ。とにかく、場所は整えた。あとは関知しない」

わざわざ視聴覚教室使用の名目をこしらえてくれたのはありがたいことだが、できればそっと気付かぬように応援してもらいたかった。とは口が避けても言えない。

「とことん藤沖と話せ」

全く裏表のないシンプルな表情。悪意もなければ作り笑顔もない。上総には意識してこしらえないとできない顔に思えた。

「関崎、お前」

——だから何を言いたい？

半分口から出かかった言葉を遮られた。やはり例の中学時代担任にそっくりだ。進化している。鬱陶しいほど暑苦しく語るのも、やはり原本たる菱本先生に近いものがある。

「話し合えば半分は片付くことだと俺は思う。いいか、立村、お前たちが本音をぶつけ合っている間、俺は一切他の連中を準備室に近づけたりしない。いわば門番だ。俺と一緒にヒアリングをやってる連中にも事情は一切説明していない。だから、もし声が聞こえてもその事情がどういふところから来ているのかはわからないはずだ」

まくし立てる関崎に、上総はかろうじて切り込んだ。

「俺が言いたいのはそういうことじゃない」

「どういうことだ？」

——そういうことじゃなくて、なんだ。

具体的に何が、と問われると答えられない。上総の弱さだ。

男子同士とのぶつかり合いでは、ここで説得力ある答えが返せないと、負けとなる。矛先を変えるしかない。

「関崎、お前は、誰の味方なんだ？」

言葉に詰まる関崎に畳みかけた。

「杉本の立場が悪化するかもしれないのに、そんなこともわからないほど、関崎、お前馬鹿じゃないだろ？」

全くもって勘違いもいいところだ。関崎はきわめてシンプルに、「語り合って殴り合って抱

き合ってハッピーエンド」といった答えを引き出そうとしている。ある程度事情を知っているはずであり、互いの遺恨をそう簡単になくすことなんてできやしないと少しは把握しているはずなのに、だ。

——布団に地図事件の濡れ衣を着せられた杉本が、そう簡単に犯人を許せると思うのか？ お前なら許せるのか？

悪いが上総は絶対に、許せない。

あとでしっぺ返しを喰うのを承知の上で、憎み続けることを選ぶ。

本当はそんなことじゃなかった。

杉本のことを持ち出せば、時間稼ぎができる、そう読んだだけ。

とっくに上総は、関崎の気持ちに杉本が存在しないことを知っている。

それでもなぜか、関崎が目の前にいる時は蒸し返したくなる。

葉牡丹を押し付けられて辟易している関崎の、みじめったらしい顔を覗き込んでやりたかった。裏表なんてない、一年A組英語科の新たなるヒーロー候補、関崎乙彦から裏を引っ張り出してやりたかっただけのこと。さぞ迷惑しているであろう、杉本梨南からの純粋な想い。はたして露骨にしっしと追っ払えるものなのだろうか。

上総の泥ついた感情を読み取ったのかはわからない。全く表情を変えずに関崎は、一呼吸置いて、芯の通った深い声で囁いた。小声で周囲には聞き取れない。しかし、上総の鼓膜には分厚く広がるその声音。

「立村、一度しか言わないから聞け」

一歩近づき、

「お前が大切にしている相手を奪うつもりは一切ない。俺が今後関わりたいのは立村、お前自身であって、側にいる他の女子たちには関心がない」

関崎はやっぱり好漢だった。

やはり、崩れなかった。

裏表のありすぎる上総には、太刀打ちできなかった。

——関崎はこんな奴だったのだろうか？

目の前で真摯に訴える関崎に、上総は心の中問い掛ける。

——もっと口下手で周囲からはシーラカンスだとか、融通利かない堅物だとか、いろいろ言われてきた奴だったのに、なんで今は。

よっぽど青大附属の水が合ったのか。いや、それだけでは結論が出ない。

上総の知っている関崎はこんな奴じゃなかったのだ。

どう考えたところで、水鳥中学時代の関崎はこんなに女子たちから好かれ惚れられ追いかけられるような性格ではなかった。まっすぐ過ぎて、他人とぶつかり合ういわば杉本梨南にそっくりな気性が、上総には付き合いやすいところでもあった。そんな奴だったのに今では、

——外部生同士とかたまっていろいろやってるしな。

すでに周囲では、公認されつつある関崎と静内との交際。

どう考えても上総の知っている関崎乙彦とはほど遠い。純情一途な関崎が、こんなに受けのよい軽い言動を繰り返しているこの現実には、上総はまだ慣れることができなかった。

——杉本は、関崎がこんな奴だと気付いた時、どんな反応するだろう。

まだ、杉本梨南の中では、完璧な王子様なのに。

——たったひとりの、ローエン格林なんだよな。

幻なんかぶっこわしてくれればいい。

その一方で、幻霧散のあと、取り残された杉本梨南を思う。

青大附属から追い出される自分を支えているのは、今のところ関崎の存在のみ。上総の力はまだ及ばない。だからまだ、壊れないですんでいる。でも関崎がもし、静内との交際をおおっぴらに公開しだしたらどうなるのだろう。

それ以前に、関崎は、B組の静内と本気で付き合うつもりがあるのだろうか。

どうしても確認したかった。

「B組の人とのことも、そうなのか」

——付き合っていないんだらう？

そう問い掛けるつもりだった。声が上ずり、うまく発音できないのは上総の重苦しい想いが喉にきたからか。言い直す前に関崎が即、答えた。

「その通りだ」

ということは、まだ付き合っていないということだろう。

——だったら。

杉本梨南の後姿がふっと浮かんだ。ポニーテールが静かに揺れるだけだった。

「わかった、ただ、関崎、ひとつだけ約束してくれないか」

上総は顔をあげた。喉がまた震える気配がする。

言葉が、うまく排出されない。やっそこぼれた。

「B組の女子とは、彼女の前では、まだ付き合わないでほしいんだ」

「彼女」とは、杉本梨南のこと。杉本のことを「S h e」で呼んだのは初めてだった。

杉本の叶わない恋を応援する気はない。関崎にも選ぶ権利があるのだ。葉牡丹の花を好きになれないのが関崎たるゆえんなのだからしかたない。

だが、たかが恋愛沙汰で、杉本の未来を壊すこともしたくはなかった。

今、青大附属から来春追い出されようとしている杉本がたったひとり支えにしている存在が関崎なのだ。その関崎へ向けた想いでもって、必死に歩いていこうとしている。不条理な濡れ衣にもめげず、関崎が信頼してくれるというよりどころによって懸命に青大附属生活を続けている。

そのよりどころがいつぽっきり折れるか、わからない。

折れても知ったことじゃない、そうみな、割り切っているように見える。

杉本のしがみつく細い柱が、実は割り箸レベルの脆いものであることを、上総はひとり、気付いている。

杉本梨南にほしいものを何一つ与えられない上総だからこそ、わかること。

——せめて杉本が、この学校から出ていく日までは、どんなことがあっても気付かせてはならない。

関崎がどう思おうと、上総は決めた。

——杉本が卒業し、青湊東に入学し、解放されるその日までは、全力で隠す。

そのためには何をすればいいのだろう。どう関崎に伝えればいいのだろう。

上総は関崎の答えを待った。関崎も、首を傾げることなくただ黙って頷いていたが、

「いや、俺は清坂にも全く興味がない。話すこともない」

全くピントのずれた言葉を返してきた。戻ってくるはずの道筋ではなく、明らかにずれた脳のどこか一部分を刺激され、上総は言葉を失った。

——清坂氏と？

想像してなかった、わけではない。

気付いてなかった、わけでもない。

ただ、不意をつかれた。杉本梨南ではないもうひとりの女子の名に、上総はバランスを失った。

——関崎、お前、やはりそうか。

失言とは全く思っていないような関崎の様子、それに上総はどう答えるべきかわからなかった。裏を探ることすらできないその性格に、上総は何か激しいものが燃え盛るのを感じた。

——清坂氏のこと、やはり気付いていたのか。

ずっと杉本梨南の濡れ衣問題にかまけていて、もうひとつ片付けなくてはならないことを忘れていた。現在の一年B組において、静内菜種と対決姿勢を取っていて、しかも男子の一部まで敵に回してしまった清坂美里の支えも、もしかしたら関崎相手なのかもしれない。

煮詰まった東堂がらみの問題については、すべて貴史に任せてある。だから、心配はしていなかった。その件は放っておいてもいいだろう。しかし、貴史に頼めないこともある。決してあいつは気付いていないだろう。

——関崎は清坂氏の好意を、杉本のものと同じく、迷惑がっている。

その真実を、どう伝えればいいのだろう。

しかも、関崎の気持ちは美里のライバルである、静内菜種に注がれている。本人たちがどう定義しようが関係ない。はっきりしているのは上総と縁のあったふたりの女子が、同じ男子を想い、ふたり一緒に振られようとしている事実である。同時に、一番辛い時期に、誰よりも支えてほしい人から相手にしてもらえない現実を受け入れなくてはならない。

——清坂氏には、羽飛がいる。

少なくとも杉本梨南よりは救いがある。そう信じたかった。

関崎の後ろにまわって「だーれだ！」などとわけのわからないことをしているのは古川こずえだった。本当は何か文句のひとつでも付けたかったのだが、そうもいかない。

その光景に改めて、関崎乙彦墮落の兆しを感じずにはいられない。これから先、関崎がこずえの打ち出す下ネタに乗ってくるようなことでもあれば、完全に上総は見切るだろう。面倒くさそうに首を振って払っているところみると、まだそこまではおちていないようだ。

こずえは上総と関崎を交互に見ながら、すばやく言い放った。

「関崎、悪いけどねえ、例の件、期末試験前日をお願いするよ。立村、あんたもね」

「期末前日？」

「あんたたち、今回の期末は悪いけど捨てて。期末試験前日しか視聴覚教室が空いてないのよ。表の理由が理由だから、試験前日でも構わないだろうってことになっちゃったけど、その点、許して」

とっくに決まったことなので驚きはなかった。関崎だけが初耳だったようで、真剣な顔して「期末前日？」と問い返している。たまたま言葉が重なっただけなのに、上総の顔を見て頷くのはなぜだろうか。

答えるのも面倒でこずえに質問しようとする、肩越しに突っ立っている藤沖と目と目が合った。この日の早朝、霧島に屈辱を浴びせ掛けられた後遺症がありありと残っているようだった。傷といえるものが、無言の空気に溶けてまわりついている。風が吹きぬけたのに、なぜか通りが悪く感じる。

気付いているのかいないのか、こずえの口がまわる、まわる。

「期末試験前日の放課後、たぶん部活動の連中もいなくなるだろうし、いたとしても上の学年の人だけだからさほど噂にはならないよ。あんたたちが視聴覚教室に籠ってA B C Dやっている間に、私と立村、藤沖が彼女たちを伴って準備室に入る。話し合いが終わるまで悪いけどあんた、静内さんといちゃついてOKよ。誰も来ないように見張ってもらえればいいからさ。あと、ひとつだけ。美里にだけは、絶対に、言うんじゃないよ。ややこしいことになるからね」

——古川さんも、清坂氏の気持ちを、気付いているな。

主に関崎に向けた話題だったはず。その後、こずえは上総の耳元に囁いた。

「あんたも一緒だよ。美里にはもらすんじゃないよ。美里が口を出したらまとまるものもまとまらなくなるし。それと、羽飛にもだよ。あのふたり、悔しいけど運命共同体だからさ」

「言うわけないだろ」

こずえに頷いて、秘密を守ることを誓った。

美里には貴史とこずえという強い味方がいる。たとえ関崎がばっさり振ったとしても、自分のライバルとくっついたとしてもとことん崩れていくなんてことはないだろう。

——けど、今すぐ、知らせる必要はない。

かつて美里の想われ人だった、上総の判断だった。

美里が放課後A組の教室に飛び込んできた時、こずえの口調が少し身構えたように聞こえた。ほんのわずかだが、朝から昼下がりまでたっぷりこずえの声を聞き流している上総には、その違和感がしくりと刺さる。

「こずえ、ねえねえ今日、一緒に図書館で勉強してかない？」

「ごめん、今日はさ、藤沖たちとちょっとクラスのことので打ち合わせあるんだ」

手を合わせてにっこり笑顔なのはいつものことだが、かすかな壁を感じる。

ちらっと上総にも目を向け、何か問いたげに首を傾げた。思わず上総も首を振りたくなる。

「えー、試験前なのに？」

「そうなのよ、面倒なクラスよねえ」

——もっともだ。本当に面倒なクラスだよな。

最近思うのだが、美里の髪型が少し上向きのふたつ分けなのは何か心境の変化でもあったのだろうか。あまり中学時代はそういう髪型にしてくることなどなかったのにだ。高校に上がってからやたらと目につく。女子の髪型なんてどうでもいいことだが、頬から下を全部見せる形で美里の顔を観察すると、どこことなく幼く見える。中学卒業後たった三ヶ月で若返る……わけもないのに、不思議なものだ。

こずえが素早く荷物をまとめ、

「でさ、でさ、でさ」

何やら話題を替えようとしていた。これから例の視聴覚教室にて行われる話し合いを、美里に気付かれてはならないという一点でのみ、みな意見一致していた。おそらく美里の正義感強く一本気な性格をみな、承知していたからだろう。ただでさえ美里は杉本梨南のことをかねてより可愛がっている。もし、渋谷名美子とタイマン勝負させるなどと聞いたら最後、

「私も付き添うよ！ 杉本さんひとりじゃ可哀想すぎる！」

とか言い出しかねない。こずえの判断は正しい。

「この前ねえ、すっごくカッコいい男子の水着写真みつけてさあ」

「やだ、何言ってるのよ、こずえ！」

話を逸らすにしても、まさか「男子の水着写真」で美里が乗って来ると思っているのだろうか。耳だけしっかりこずえ方向に固定し、上総は正面を見据えた。

「いかにもボディビルで鍛えてますって感じでさあ、カッコいいのよね。むきむきしてて、もっこりするところはしっかりしてて、サポーターきついだろうなあってね」

——何が楽しいんだ。

予想通り美里は、露骨に首を振るだけで興味を示さなかった。それはそうだろう。男子ならともかく、女子たちが男子の裸なんぞ見て興奮するなんて考えられない。

「ま、うちのクラスの男子たちには、ちよいと傷ついちゃう内容だからさ、美里もっと詳しく聞きたかったら、廊下行こうよね」

「なによ、そんなの聞きたくない！」

——ああ、清坂氏を迫いやるための口実か。

立ち上がり、半ば強引に美里の腕をひっぱっていくこずえを見送った。まだ騒いでいる美里の声がはっきり聞こえる。

「ねえねえ、そんなことより今日、関崎くんも？ 一緒に話、するの？」

——やはり関崎か。

上総もちらと関崎を覗き込む。ひとりだけではなく、数人がおもしろげににやにやしながらかつ崎へ視線を送っている。どうやら上総以外の男女ともに、美里の発言と関崎との接点を勘付しているらしい。こずえはさっさと切り上げるつもりらしい。

「そりゃ、規律だからね。ちょっといろいろとA組同士で準備があるのよ。またさ、帰ったら電話するよ」

「え、学校じゃあだめなの？ 少しくらいなら私、待ってるよ」

「時間かかりそうだし、先生たちに見つかったら今度はいろいろと面倒なことになるしね。ほら、明日の期末試験ってことでいろいろ言われるよ。とにかくあとで電話するよ、じゃあね」

しつこく「あとで電話」を繰り返したのが効いたのか、美里は諦めたようだった。

「しょうがないよね。わかった。必ず電話してよ！ ね！」

こずえはA組の教室に戻ってきた。大きな溜息をついた後、上総の席に近づいてきた。

「じゃあ、あんたは先に視聴覚教室。しつこいようだけど美里には気付かれないようにしなよ。まかりまちがっても中学校舎に杉本さんを迎えになんか、行くんじゃないよ。気付かれたら面倒だからね。杉本さんにも連絡してあるから、あんたが心配しなくてもいいよ」

言われなくてもそのつもりだった。上総は立ち上がった。後ろの席を確認すると関崎が無言で顔を見上げていた。大きく構えているようにも見える。藤沖が背を向けて椅子の背もたれに座っている。倒れない程度に力を抜いているようだ。器用な座り方するものだ。

言いたいことがないわけではない。しかし、内密にことを運ばねばならぬのも事実。

上総はこずえに目で了解の意を伝え、教室を出た。期末試験一日前。本当ならば即、自宅で机に向かい、数学1の問題集と格闘しなくてはならないはずだった。

——羽飛、ちゃんと清坂氏に何か話、してるのかな。

全く気にならないわけではない。特に自分と親しいふたりの女子が、よりによって視線通り越して関崎を見つめている現状に、まったく心が凧いだままというわけではない。

ただ、美里には貴史がいる。いるはずだ。

東堂とのいざこざがその後どうなったかはあえて聞いていないが、それでも貴史のことだ、いくらでもフォローの仕方を知っているだろう。親友と恋人のぎりぎりふくらんだラインの点にいる貴史と美里、おそらく自然に任せればなるようになるだろう。

そんなの確認しなくてもいいことだ。

廊下に出て、まず図書館に寄ることにする。こずえに厳命された通り、中学校舎まで杉本を迎えにいけない以上、時間つぶしはここがベストだ。

「立村くん、まだ帰らないの？」

入り口で呼び止められた。やはりいたようだ、美里の声だった。

かすかに何かの香りが漂う。ぴんときたのは、上総が今まで感じたことのないものだったから。果物系のおいだとは思うのだが、どこか甘い。美里っぽくない。

「清坂氏、あのさ」

いきなり「何の香水使ってるの」などと確認するつもりもない。ただ香りの質がどこかひっかかる。上総の疑問符に気付くことなく美里は尋ねてきた。

「A組ってそんなに忙しいの？　しょっちゅうなんか、話し合いしてるよね」

「そうか？」

「だって、この前だってこずえってば関崎くんと藤沖くんと三人で真面目な顔して話してたし」

事情を知るだけにこずえの腹づもりは想像できなくもない。

でも美里には言えない、それもわかる。

美里は首をかしげながら上総に問い掛けた。

「そりゃあ、評議委員だからクラスのことと一生懸命になるのはわかるけど、こずえってば忙しいよね？　そう思うよね、立村くん」

「確かにそうだよな」

いや、こずえの場合自分でわざと忙しくして、隙間を覗き込まれないように埋め込んでいるだけのようにも見える。美里の前ではあえて口には出さなかった。合わせるだけに留める。

「この前の日曜だって、本当は私のうちで遊ぶ予定だったのに、クラスの揉め事で仲裁に入るからキャンセルになっちゃったし。その前の土曜だってそうよ、彰子ちゃんへ暑中見舞い書こうって約束してたのに、やっぱりだめになっちゃったし」

——要するに、古川さんは清坂氏の相手をする暇ないってことだな。

あまり美里の日常については自分から触れないようにしてきたが、改めて気付く。美里の友だちは中学時代と比較して、激減しているのではないだろうか。附属上がりの友だちはたくさんいたように見えたけれども、実はこずえを中心とした仲間に交じり合っていただけ。美里のぶつかりあうような友だちは、

——まさか、あとは羽飛くらいしかいないのか？

くらりとめまいがする。一本道を走っていて透明なのれんにいきなり頭をつっこんだようだった。美里がさらに愚痴るのを聴いた。

「だから久しぶりに三年D組の同窓会、やりたいよねってこの前貴史とも話してたの。けどこずえと話をする暇ないから全然進まないの！　貴史は貴史でC組のみんなと盛り上がってるし。部活ふたつも掛け持ちしてるし。なんだか中学が懐かしくなっちゃうよね。どうしてこんなにみんな時間ないのかなって。規律委員会だって週番と服装検査くらいしかすることないし、退屈、ほんっと！」

「清坂氏」

話を遮ってみた。美里が慌てて口を押さえる。

「ごめん、立村くん、こういう話嫌いだったよね」

「そうじゃないよ、ただ」

そう思われるような発言はたぶん、中学時代していたはずだ。

「今日は俺も用事あるから時間取れないけど」

たった三ヶ月しか経っていないのに、美里の不満うっぶんすべて穏やかに受け流せる。

「聞くだけでよかったら、いつでも話、聞くよ」

また、甘く何かが薫った。美里のまとった香りだろうか。

美里はしばらく黒目を大きくしたままでいた。

「立村くんが」

「俺が？」

「そんなこと言うなんて、信じられないよ」

笑いでもない、嫌味でもない、素直な戸惑いだけが浮かんでいた。

「どうしちゃったの？ びっくり」

「どうもしないけどさ」

すぐに美里はいつもの元気いっばいな笑顔に切り替えた。明らかに作り物っぽく見えた。

「ありがとうね。でも、大丈夫。それより立村くん、杉本さんとは最近、会ってるの？」

いきなり杉本梨南の話を振ってくるのはやはりなにか、勘付いているからか。見破られるわけにはいかない。かぶりを振った。

「話はたまにするけど、試験前だしな」

「落ち込んでない？」

「杉本がか？」

こずえから得た情報によると、美里は例の修学旅行事件に巻き込まれた杉本を、男子らの前で懸命にかばったという。B組規律委員の相棒である東堂と険悪な仲となるきっかけもそのあたりと聞いている。だったら上総にも何か言ってくるかと思っていたが、そのことに触れたのは今が初めてだった。

あくまでも知らないという前提のもと、上総は言葉を選びつつ答えた。

「いろいろあるらしいとは聞いている」

「やはり？」

「でも今の杉本なら乗り越えられると思うんだ」

厳密に言うとは違う。杉本梨南の、鎧に覆われたもろい瞳を上総は知っている。

「なんでそう思うの？ だって立村くん、いつも杉本さんは本当は弱いんだって言ってたじゃない」

「杉本が、自分を強いと思って欲しがってるから」

たとえ弱くても、強いと思ってほしい。そう願っている杉本梨南の想いを見つめている自負はある。

「だから、そう思うことにしてる」

美里はしばらく、人差し指を唇に当てながら考え込んでいた。爪が陽射しで光っている。

「立村くんをそこまで変えられる杉本さんって、ほんと、すごいよね」

頷きながら独り言、その後で、

「ありがと。けど、大丈夫。今、聞いてもらってすっきりしたからもう平気。私のことよりも杉本さんの話をもっと聴いたほうがいいと思うもん。気、遣わせちゃって、ごめんね」

作りこんだ風に見える笑顔を貼り付けて、手を振った。

「じゃあね、試験終わったら貴史たちと一緒にどっか行こうね。こずえも混ぜて」

図書館には寄らずまっすぐ廊下を突き進んで行った。視聴覚教室の前を通り過ぎ、奥の階段を下りていくのが見えた。きっと視聴覚教室の中に関崎たちがいるなんて思ってもいないのだろう。これから上総もそこに向かうことも、おそらく気付いていない。

「うわあ、ぎりぎりセーフ！ やばかったよね、美里にばれるとこだったあ！」

入れ違いだった。反対側の図書館側階段を駆け上がってきたのはやはり、古川こずえだった。さっきまで漂っていた甘い香りとは違う。単なる汗か。でも男子更衣室に漂うような脂くさは感じない。やはり女子っぽい。上総は廊下突き当たりの音楽室を指差した。

「あちら側から降りていったけど」

「あれ、あんた、見てたの」

「さっきまで話してたんだ」

「やっぱり杉本さんを職員玄関に置いてきて正解だったってことよね」

こずえは大袈裟に両手を組み合わせ、階段に向かい顎でしゃくった。

「さあさ、今度はあんたの出番だよ。お待ちかね。今さ、杉本さん、絶対生徒玄関から入らないって言い張っててさ」

「なんだそれって」

またわけのわからない理屈をこねているようだ。いつものことだが確認はしておきたい。図書館を出入りする生徒たちに聞こえぬよう、上総はこずえを階段の手摺りまで連れて行き、小声で尋ねた。

「『私は中学生ですから、高校を訪れるとすれば客として入ることになります。ですからきちんと規則を守って職員玄関から入ります』とか、もうがんとして私の言うこと聞かないのよ。しょうがないから、立村を迎えにいかせるってことで納得させたってわけ」

「なんで俺が迎えに行くって納得するんだ？」

「さあ、わかんないけど。杉本さんなりに納得する理由があるんだろうね。私も、立村が迎えに行った方が万が一美里に知られた時、言い訳できるしいんじゃないのって思うしね。立村と高校校舎内でデートしているってことにできるし。まあ、藤沖たちは人気が少なくなった頃を見はからって、ふたりで現れる予定らしいけど」

中学校舎まで杉本を迎えに行くなと厳命したこずえの考えがようやく読めた。

「俺と鉢合わせしたらしゃれにならないという考えからだな」

「ようやくわかった？ 当たり前じゃん。いわば藤沖と渋谷さんは、あんたと杉本さんに裁かれるわけよ。そんな二組のカップルが顔合わせたら、火花ばちばちじゃん」

だから別々に集合させたというわけだ。納得した。

「わかった。職員玄関だな」

こずえの返事を待たず、上総は階段を駆け下りた。二段飛びで下りられるところは下りた。鞆を置き忘れてきたことに気がついた。大丈夫だろう。こずえがちゃんと視聴覚教室へ運んでくれるだろう。

あわただしい生徒玄関と比べて、職員玄関は静かだった。遅刻で生徒玄関を閉められしかたなくこちらから入り……上総は幸いまだ、遅刻の経験はない……週番の規律委員たちに違反カードを切られる。そういう場面でしかあまりかかわりのない場所だった。

杉本梨南はすのこの前でスリッパだけ用意し、靴を履いたまま黙って立っていた。

こずえから聞いてどういう状況かは大体想像していたが、やはり読み通りだった。

事務室の男性が杉本に声をかけている。

「入校者名簿に名前を書いて」

「はい、ただいま」

相変わらずの堅い口調で杉本は、まず返事をし、手渡されたノートに書き込んでいた。すぐに戻し、改めて上総を見上げた。一礼した。

「失礼いたします」

「早く、行くぞ」

短く指示を出した。校則厳守は当たり前、たとえ生徒玄関からあっさり上履きを履き替えて入れれば構わないとわかっていても決してしない。面倒な手続きが必要でも、やはり職員玄関から入ることを選ぶのが杉本梨南たるゆえん。一応、在校生がだれか一人迎えに来れば、難しいこと言われずに入ることができるのだが、大抵そんな面倒臭いことをしながら、みな生徒玄関からもぐりこんでいる。実際先生たちも見逃しているようだが、そんなことを決してしない杉本であることを、上総は一番よく知っている。

久しぶりだ。夏服に着替えた杉本は、襟元のリボンを綺麗なちょうちょ結びにし、頭てっぺんまでポニーテールの結び目を上げ、肩には白いショールを羽織っている。見るからに折り目正しい雰囲気さを漂わせていた。もともとふわりとした顔立ちではあるのだが、いつもは目つきだけが強烈すぎて、一瞬のうちに崩壊してしまいそうに見えた。しかし今は、かち、かちときっちりした中にもどことなくやわらかいものが見え隠れしていた。いつもとは違う。

杉本はすぐに靴を脱ぎ、布の手提げを取り出し中に入れた。上靴に履き替え上総に付き従った。すれ違うのはほとんどが上級生だったが、評判芳しくない杉本のことはかなり知れ渡っているらしく、陰でこそこそ話をしている連中もいた。杉本は全く意に介せずすすと歩いていく。

「杉本、いいか」

「はい」

音楽室側にあたる階段を昇りながら上総は話し掛けた。またすれ違ったのは二年生の女子たち。きちっと立ち止まり礼をする杉本へ、二年の女子先輩たちはどこかのやんごとなき方々のごとく片手を振って下りていった。

「言いたいこと、聞きたいこと、全部遠慮なく言えよ」

「そのつもりで参りました」

「忘れるな、今の杉本には、そこまでの権利がある」

「はい」

杉本は短く答えると、またすれ違いの三年女子ひとりに、九十度近い礼をした。その三年女子先輩もまた笑顔で会釈を返してきた。

「いざとなったら俺が助太刀する、けど」

「その必要はございません、私はひとりで大丈夫です」

予想していたその言葉を上総はすんなり受け入れた。

「わかってるさ」

——強いと、思われたがっている。本当は一瞬のうちに壊れそうなのに。

階段踊り場の陰に杉本の姿がくっきり映る。ポニーテールが小さく揺れる。

期末試験前の、比較的人気の少ない三階廊下。

音楽室にいつもなら集っている吹奏楽部の練習演奏も聞こえない。

反対側奥の図書室にもあまり出入りする気配はない。

「杉本、ここの奥の部屋だ。誰も来ないから安心しろよ」

「承知してます」

こずえもすでに杉本へ説明済みなのだろう。上総は視聴覚教室教卓側の扉を開いた。

鍵は開いていた。すでに客人がいた。

教卓のど真ん中、かつまん前。三人、なにやらお菓子を摘みながらげらげら笑っていた。

背中で杉本のこわばった吐息を感じる。何が起こったか最初わからなかった。

関崎が隣の女子と楽しげに肩を寄せ合ってしゃべっている。女子の後ろにもう一人いる。見るまでもない。外部三人組勢ぞろいだ。

——しまった！

すぐに勘付かなかった自分の鈍さを呪った。

杉本の顔を振り返って確認する勇気がなかった。

——先に古川さんに伝えておくべきだった。俺のミスだ。

認めざるを得ない。立ちすくむしかなかった。杉本が一步、前に進み出た。改めて息を呑みそのままだ動かなくなった。スイッチの切れた人形、そのものだった。

せめて三人が後ろの席で語り合っていたのならのなら、杉本も気付かずにすんだらうに。よりによってど真ん中で、しかも思いっきり関崎と目が合ってしまった。上総のまん前にいる杉本も当然、視線がかち合っているはずだ。

——杉本は絶対に会わないって決めてたじゃないか！

関崎を想う一方で、決して青大附属中学を卒業するまではどんなことがあっても顔を見ることはしない、そう誓っていた杉本梨南だった。

卒業して、自由になって、その時初めて関崎に想いをぶつけて受け入れてもらう、そう信じている。その日まではどんな偶然であろうとも、関崎の顔は見ない、会わない、そう誓っていた。中学の頃一度だけさりげなくすれ違うチャンスを作って合わせようとしたことがあったけれども、あの時たしか佐賀はるみに計画を見抜かれ阻止されたはずだ。杉本にもえらく怒られた。

あれから一年が経ち、上総も今では無理に関崎の顔を見せようなどとは思わなくなった。当たり前だ、興味を持ってもらえない男子の顔を無理に見たって不毛なだけだ。関崎が望まないのだからそれならさっさと忘れてもらうのが一番だ。

そんな時にいきなり、予告もなく目の前に、関崎が現れたとしたら。

想い焦がれてやまないであろう、関崎がいる。

——杉本、見てるんだろうな。

巨大なカーテンでくるむように、準備室まで連れて行きたい。冬場着ているシャーロック・ホームズばりのとんびのマントが欲しかった。なぜ、関崎がいることに気付かなかったのだろう。いや、それ以上に、なぜ。

——よりによって、静内さんと話している真っ最中に。

一番、笑顔たっぷりに語っている関崎を見られるのが、静内という時のはず。

上総もそれは気づいていた。

だからこそ、見せたくなかった。関崎にも何度も念を押した。杉本の前では頼むから静内と語らないでほしいと願った。付き合う付き合わないは別として、見せたくなかっただけだった。なのに。

——俺のまわした手は、みな、意味なかったのかよ。

「杉本、入るぞ」

行くしかない。全身をマントにして、包めるだけ包みたい。でも包みきれない。

夏の風は必要以上にすべてをさらけ出していた。じっと見つめる関崎、そして静内ともう一人の男子。外部三人組は机に英語の辞書と教科書を広げたまま、黙って上総たちを目で追っていた。

——見るなよ、これ以上見るな。

その祈りすら無駄だった。

関崎ときたら、いきなり静内と密着するようにかがみこみ、なにやら囁いているではないか。もちろん笑うような非常識なことはしていないが、何かを噂しているのは事実だ。まさか、自分の追っかけ女子なのだと思えるようなことはないだろう。しかし、この場で、いくらなんでも杉本の目の前で、

——付き合っているようなこと、するなよ。

杉本は人前で決して泣いたりしない。罵ったりしない。ただ、

——黙って、飲み込んで、壊れていくんだ、それが杉本なんだ。

くるみよののないすべて。これが現実だ。そう伝えるしかない。

杉本が関崎の座る席の前でいきなり立ち止まった。

「杉本？」

声をかけようとしたが無視された。じっと関崎だけを見据えた。九十度、頭を深く下げた。じいっと見つめた。関崎が礼を返し、何かを言おうとするのを、杉本はそそくさと歩き去ろうとした。両手で頬を覆ったのは、照れなのだろうか。上総には読めなかった。考えている間もなかった。鞆を取り落とした音が響いた。上総の足元に落ちた。

くるめないのなら、囁くだけだ。

肩をぴたりと杉本に寄せた。

窓辺から聞こえる木々のざわめき、同じさざめきですべてを覆いたい。

「大丈夫だ、杉本」

もう一度囁いた。

「関崎にはまだ、付き合っている相手はいない」

目の前にはB組の静内がいる。美里と何かトラブルの多い人と聞いているがそんなのはどうでもよかった。ただ、上総の知っている事実だけを伝えればいい。

「あの人は、関係ない人だから」

静内とは付き合っていない、と関崎も何度も言い切っていたではないか。

——あいつの口から出た事実を、そのまま伝えてどこが悪い？

杉本は決して嘘を許さない。だから上総も関崎から出た事実を伝えよう。

例え目の前で、静内の表情が引きつったとしても。関崎が不可解に思ったとしても。

手から滑り落ちた杉本の鞆は、即座に上総が拾っていた。

杉本は頬から手を外した。自分の思わぬ仕種に初めて気がついたらしい。すぐにかちりと表情を冷たく戻した。上総をちらと見上げ、

「申し訳ございません」

鞆を受け取った。

そのまま何も言わず視聴覚準備室へ向かった。

隠されていた頬はすでに桃色のパウダーをはたいたかのようなだった。上総の記憶に甦るものを思い起こし、繋がった。果物の名だった。

——桃か。

桜桃。やわらかな産毛で包まれたその色は、今の杉本の肌によく似ていた。

関崎の名だけで微笑ますことができ、その表情ひとつで見たことのないしぐさを引き出せる。今更気がついたことでないけれど、そのたび上総は心で呟く。同じ言葉を繰り返す。

——関崎だけか。

杉本を視聴覚準備室へ押し込んだ後、上総は後ろ手できつく戸を閉めた。

視聴覚準備室はほこりが溜まったままだった。

「毎日掃除してないのでしょうか」

入って戸を閉めたとたん、暑苦しさでむせそうになった上総を横目で見つつ、杉本梨南は掃除道具の収まっている場所を探し当て、素早くほうきを抜き取った。

「今から掃除しますが換気のために戸を開けてはいけませんか」

「いいよ」

——関崎の声が聞こえても平気ならな。

上総は入り口の冷房スイッチを探し、適当に押した。一気に涼しくなったから、たぶん効いているのだと思う。ちらっと杉本と、同じ背丈ほどある長ぼうきを眺めた。

「掃除なんかなくてもいいのに」

「いえ、礼儀です」

戸を開けるかどうか迷っていたようだが、結局締め切ったまま杉本は綿ぼこりを集め、ちりとりですくい取った。そのごみをどこに捨てるか考えているうちに、次の客人が到着した。

「杉本さん、立村に迎えに来てもらったの？ ふたりきりで、襲われたりしなかった？」

「失礼なこと言うなよ」

言い返しても無駄。軽口叩くような場ではない。上総は杉本からちりとりを引ったくり、

「これ、どこに捨てればいいんだ？」

尋ねた。

「ご苦労だねえ、掃除なんかしてるんだねえ」

「この辺のごみ箱か」

「いいよ、その辺にほっときな。それよかこの部屋、パイプ椅子って何脚くらいある？」

奥の机に収まっているのが一脚、その他放置されているのが一脚。合計二脚。こずえは返事を待たずに指差して数え、

「ちよいと待ってな」

素早く三脚分、視聴覚教室から運んできた。最後の一脚は藤沖が静々と押してきた。

もうひとり、渋谷名美子を一緒に連れてきた。

「立村、悪いけど椅子を並べてよ。まず、一対一で相撲の取組みみたいにして、行司が私、その両隣にあんたらが座りな」

すでにこずえは準備を整えていたようで、ひとりちゃっちゃと席を整えていく。てっきり円座で話をするのかと思っていたのだが。藤沖もいつものしゃばりを控えているのか、渋谷の後ろでただでくの棒状態で突っ立っている。杉本だけがいそいそとこずえの手伝いをしているのが面白い。相変わらず感情のない声で、

「古川先輩を挟む形ですね。相撲というより将棋や碁の対局のようにですね」

などと確認している。確かに取組みというよりも対局と言った方が、これからの会話には繋が

るような気がする。

「全く、こういう時って男子、全然つかいもんになんないよね。ほらよく言うじゃん、立会い出産の時、付き添った旦那がショックのあまりそれ以降立たなくなるってさ。それに近いよね」

「全く話が繋がってないだろ」

こずえは意に介せず、杉本をまず戸口側に座らせた。

「藤沖、あんたは私の左隣、立村は右隣に来な、それと渋谷さん、あんたは」

言葉を切り、きっぱりと告げた。

「杉本さんの真正面に座りなさい。今日はどういうことか、わかるよね」

絶句しているのか、身動きできず身体をこわばらせているようだ。藤沖が異議を唱えた。

「一対一はないだろう。俺が隣に入るとかそういう風にしろ」

「ばっかだねえ藤沖、今日なぜわざわざ、大嘘ついて視聴覚教室借りたっていうのよ。関崎たちのヒアリング訓練のためじゃあないんだよ。こういう時しか杉本さんと渋谷さんが本気で話できないじゃん。外で、誰かが聞いているかもしれないとこでさ、修学旅行でおねしょしちゃた話とかそんなこと口に出せないでしようが。いい、ここはね、今から事実だけを全部ぶつけていく場にするからね」

こずえの意図するものが見えなかった。

「古川さん、その、事実だけぶつけるって意味がわからない」

思いっきりはたかれた。蹴りでなくて助かった。

「あのさ立村、何度も話し合ったでしょが。杉本さんも渋谷さんも、双方納得する形でこの問題にピリオドを打つ、そのためでしょうが！ 私と、ふたりの保護者たる立村と藤沖」

「私は立村先輩に保護者になってもらいたくありません。反対です」

即、杉本が反論した。もっとこずえに対しては嘔みつきはしない。こずえはあれでも女子だからだろう。すぐに機嫌を取るような口調でこずえは受け答えしている。。

「ごめんごめん、言葉の綾よ。こう言うのもなんだけど、一番口の堅い先輩ふたりってとこかな。つまりさ、ばれちゃまずい話をするわけでしょう。そのためには絶対口外しない相手でないって証人になんないじゃん。立村ならさ、杉本さんの不利になるようなことばらしたりしないよ、そうだよ、あんた」

失礼だが、全くもってその通り。上総は梨南に向かって頷いた。言葉は発しない。こずえは次に、藤沖へ投げかけた。

「あんたもそうだよ。わかってる？」

「当たり前だ」

藤沖はこずえに向かって言い返した。席にそれぞれ着いてから、なぜか藤沖と渋谷、ふたりとも顔を合わせようとしなかった。渋谷がトレードマークの黄色いヘアバンドを前髪にかぶせ、ぴたりと押さえていた。眉も目の半分も隠れ、覗き見ている感じに見える。

「だが、並び方に難はないか」

やはり同じ疑問を感じたらしい。藤沖が食い下がる。

「せめて俺が隣にいくとかだな」

「藤沖、うるさい。これ以上しつこいこと言ったら、殴るよ」

明らかに差別だ。上総にははたいてきたこずえだが、藤沖には口頭のみだ。

「私を含めて高校生三人組は、立会人であってそれ以上の何者でもないんだからさ」

全員曲がりなりに席に着いた後、こずえから再度の申し渡しがあつた。

「今から杉本さん、渋谷さん、私が言った通り言いたいこと腹かちわって全部しゃべっちゃいなさいよ。けどここで話したことは全部、この場限りで終わらせること。それは約束できるよね」

杉本が直角に向きを替え、「はい」ときっぱり返事した。

渋谷は項垂れたまま、肩を震わせている。手首にハンカチを当てるような仕種をしているのがやけに目立つ。

「それともうひとつ、立村と藤沖。これから彼女たちが語り合っている間、口出ししたくとも絶対に割りこまないでちょうだい。今回はあんたたちでなくて、杉本さんと渋谷さん、ふたりのための話し合いなんだからさ。ただ聴くだけに徹しな」

「だが、誰かが舵を取る必要があるだろう」

「それを私がやるのさ、行司軍配」

珍しくこずえは笑わずに言い放つた。

「あくまでも男子ふたりは立会人だからね。それは守りなよ」

反論一切許さぬ態度だった。男子二人も、女子二人も、黙らざるを得なかった。

——けどさ、時と場合によるだろう？

上総は杉本の、きちんと背を伸ばして正面を見据えている姿を見やった。

ちょうど上総から見て直角の位置に椅子がくる。

立会人というよりも弁護人の意識をもって本日来たわけだが、こずえの認識とは若干異なるらしい。いつもならば気兼ねなく「それは違うだろう？」そう反論したくなるのだが、こずえのかなり生真面目……めったに見かけない……な口調には待ったをかけられてしまう。

——もっとも、今回に限っては、杉本が有利だしな。

今までは杉本梨南イコール悪者扱いをされてきて、その陰で上総が懸命にかばい、そのかいなく敗れ去るケースがほとんどだった。もちろん今回も全くその可能性がないわけではないのだが、正真正銘無実であり本来の白黒はついているはずだ。話し合うべきはその白と黒をはっきりさせた上で、今後の展開を協議する、それだけだろう。物言いをつけるというよりも、どのように観客へ説明するかへの相談、行き着くところはつまりそこだ。

ならば杉本へできる限り有利な展開を引き出せるように努力するのみだ。

「杉本さんさあ、まず、何を聞きたいか教えてよ」

男子連中に呼びかける声とは違いざっくばらんにこずえが問い掛けた。

「はい、よろしいですか」

白い羽織りのショールを滑らせて畳み、膝に置いた。背筋を伸ばしてこずえに頷いた。上総の方は見なかった。すぐに真正面から渋谷を見据えた。

「修学旅行の四日目夜に何が起きたかを、渋谷さんの口から一部始終聞かせていただきたいの

です」

杉本の言葉には迷いがなかった。肩をひくつかせて渋谷が顔を上げ、前髪を透かす格好で何かを言おうとしている。あえて渋谷の方を見るつもりはなかったのだが、それでも自然と彼女の身動きにひきつけられてしまう。上総も凝視した。一緒に藤沖の顔も覗き込む格好となった。

——動揺、するよな。

「ごめんなさい」

一言、発した。こずえも、杉本も、藤沖もみな、渋谷名美子の口許へ注目している。

両手で顔を覆いつつ、それでもかすかに目だけは覗いているのが上総にはわかる。

——様子見してるのか。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

三回繰り返し、渋谷は噴き上がるような声でうめき、自分の腕で身体を抱きしめた。

「許して、お願い、許してください、私、私」

そのまま椅子から滑り落ちると同時に、両手を床につけ、激しく背中を震わせた。四つんばいの格好で、腹から泣き声をあげる渋谷の姿を、上総はまた冷静に観察していた。

——こうやって、許してもらおうとしているのか。杉本へ濡れ衣を着せたことを。

——杉本は、許すのか？

「もう、いいだろう、だから」

口を挟もうとする藤沖をこずえは再び遮った。

「あんた、さっき私が言ったこと忘れたの？ 立会人は口を出すべからずって」

「だが、そんなしゃべることのできる状態じゃないだろう！」

言葉荒く言い返す藤沖にこずえは屈しない。無視して杉本に問うた。

「杉本さん、今の要求はさ、ちょっと可哀想かなって気はするけどね。ほら、女子だけならいいけど、ここには思春期性欲野獣ばりばりな男子がふたりもいるじゃん。こいつとこいつ」

無視した。なんで上総も野獣扱いされるのか納得いかない。

「そんな奴らの前で、いくらなんでもさあちょっと、まずいんじゃないかって思うんだよね」

「古川先輩のご心配は理解してます」

杉本も身動きせず、首だけこずえに向けて答えた。動じていない。

「さっき古川先輩が仰った通り、ここで話したことを他の人たちに暴露するつもりはございません。また、その秘密を守ってくださる方々が集まっていることも承知してます。ただ、この場だからこそ確認したいこともあるのです。私は事情が全く飲み込めぬまま巻き込まれたわけですので、実際にどのようなことが起きたのかを、当事者である渋谷さんから聞きたいのです。事実を聞いた上で、私は今後の判断を考えたいと思います」

「事実って単純じゃん、渋谷さんが布団に地図描いちゃったってことだけじゃん」

——古川さん露骨だな。

事情が事情でなければとりなしもするのだが、今回上総は黙っているつもりだった。当たり前だ、行司役古川こずえの厳命に逆らう気などない。ましてや杉本の有利な展開に運ぶためならば、当然のことだ。

杉本は落ち着いた口調のまま、こずえを見返した。

「私が知りたいのはその後の事実です。渋谷さんがどのような夢を見て失敗されたのかとか、なぜ前もって保健の先生にその有無を報告して夜中起こしてもらおうよう手はずを整えなかったのかとか、そういうことはどうでもよいのです」

「まあ、そりゃあ、そうだよな」

合いの手を受け流し杉本は続けた。

「私の個人的調査によりますと、まず四日目夜に同室だったのは佐賀さんと風見さん。そのうち佐賀さんはその失敗の事実を噂になるまで知らなかったと言い張っております。また、私が粗相をしたという噂はどうやらC組の女子たちから流されてきたようです。そう考えるとどうも風見さんが何かを企んだのではと思われます」

「私、それは、わかんなくて、ただ」

はいつくばったまま、渋谷がうめく。霧島の前でぼろぼろになり壊れていく姿を知るだけに本来ならば、もっと同情とか哀れみを感じてもいいはず。少なくとも今までの上総だったら杉本に、もう少し手加減しろくらい言うだろう。

——俺は口出しする権限がない、立会人なんだから。

杉本の言いたいことがすべて流れるのを待つ。

改めて杉本は、渋谷に向き直った。

「事が起こった際、なぜ渋谷さんは、保健の先生の所へ報告に行かなかったのですか？ まずあの場でシーツを私の部屋のものを取り替えるなんてそんな小細工で、ばれないと思ったのですか？」

「ごめんなさい、ごめんなさい、許してください！」

何一つ具体的な返事をせず、ただ土下座するだけの渋谷がいる。

「許す許さないはこれから決めることです。私は真実を知りたいのです」

クーラーの送風が弱まったのか、少し汗ばむ。ハンカチで首を拭きたいのを我慢する。

「私はただ、なぜあなたが、風見さんから噂を流すよう指示をしたのか、その理由を伺いたいのです。ですが明朗な理由などを説明することは今のあなたには難しいでしょうし、ならばなぜ風見さんがすべてを取り仕切って私の濡れ衣計画を立てたのか、その舞台裏を知りたいのです」

——話し言葉じゃないだろう、今の言い方。

杉本にとっては日常的口調も、他の連中には違和感ありありだろう。藤沖も四角い顔を引きつらせている。さぞ、黙っているのはしんどいことだろう。ふたたびこずえが一呼吸つかせようとする。

「うん、うん、わかるよ。納得いくところまで話してもらわないとどうしようもないってのはよくね。けど、それを今の渋谷さんに求めるのは辛いよ。思い出したくないことをさあ、いきなり単刀直入に尋問したりしてもさ」

「そうしない限り、私は要求を呑みません」

ぱちり、と一気に撥ね返した。

「私に学校側が要求してきていることは、渋谷さんの不始末を私がしたことにして、今まで通り

の日常に戻らせてほしいという話です。正式な申し入れはございませんが明らかな大嘘を誰一人否定しようとしないうところを見るとそうでしょう」

ここまで一気にまくし立て、きつい眼差しで藤沖をにらんだ。

「学校側、および生徒会側がなんらかの事情で渋谷さんを守ろうとし、生贄に嫌われ者の私が差し出される展開を望んでいるのはわかっています。先日も佐賀さんに、まるで私がそういうことをしてしまったかのように説得されました」

「佐賀さんが？」

謝罪以外の言葉を渋谷が発した。両頬がてかてかひかっている。声も詰まる。

——やはり、生徒会長にやられたか。

予想はしていたし驚くべきことではない。霧島から得た情報を通じて覚悟はしていた。上総はただ黙って聞き入るのみだった。黙ってられないのはこずえひとり、藤沖も顔をしかめたまま口を閉ざしている。

「あの佐賀さんがあ？ 失礼なことするよね」

「はい。まるで私が今までそういう癖を持っていて隠していたかのように決めつけました。それこそどうして前もって申告しておかなかったのかとか、私なら可能性としてありうるとか、聞くに堪えない酷い言葉を投げつけられました。幸い、桜田さんがその場におりましたので私の代わりに追い払ってくださいましたが」

ここまで一切杉本は上総の顔を見ようとしなかった。

——杉本の新しい親友なら当然のことか。

しかし、いつなのだろう。

「杉本、それはいつなんだ」

こずえのにらむ目を無視して上総は尋ねた。やっそこっちを見てくれた。

「修学旅行終了の一週間あとです」

「俺にあれをくれる前か」

言ってしまった後で「あれ」はないだろうと舌打ちする。「あれ」は現在、自宅の机引出しに収まっている。千代紙細工の小さな指輪。杉本に会って修学旅行の様子について確認した段階で気付くべきところを見逃していた自分が情けない。

「はい」

「なんで俺にそれ、報告しなかったんだよ」

「私個人の問題をなぜ、立村先輩にお話しなくてはならないのですか」

直角に、少し後ろ目に杉本は首を回しきっぱり答えた。

「もっと早くわかればもっといい方法取れただろ、こんな大事になるまえにさ」

まだ言い募りたいことはあったのだが、隣のこずえのにらみつけられしかたなく飲み込んだ。

「あーあ、立村も痴話げんかしたいんだったら終わってからにしてよ。話戻すよ」

——真面目な話、してるだろう？

非常に密接な状況確認のはずなのだが。

だんだん部屋の空気がばさついてきたようだった。喉の奥がちりちりしてきた。上総は小さく

咳払いし、怖いこずえの指示に従った。

「今の立村の話にも関係するんだけど、佐賀さんが杉本さんに言いがかりをつけてきたってことはどういうことなんだろうね。杉本さんがまるっきり犯人と決め付けてきたのか、それとも渋谷さんの事情を知ってその上で濡れ衣を着せようとしたのか、か。そのあたりについてはどうなの、渋谷さん」

「……ごめんなさい」

また、同じ謝り文句を繰り返すようだ。渋谷の直角側で見守っている藤沖も、かすかに頷いている。まさかとは思いがふたりで口裏合わせて「とにかく謝り倒して逃げ出そう」とでも思っているのか。その辺は上総も読みきれない。杉本が理路整然と話の要求をしてくるのと比較して、とにかく頭を下げるだけ、実のある言葉を殆ど発しようとししないのは不思議だ。

「謝るんじゃないくてさ、つまり、佐賀さんはあんたのおねしょのこと知ってたの？」

いらだったのかこずえの口調も詰問調だった。

「ごめんなさい、私」

「ごめんは聞き飽きたの。イエスカノーか！」

「悪い、古川、俺が答える」

四つんばいで何度も腕立て伏せのように頭を下げる渋谷を見かねたのか、藤沖が割って入った。クーラーが入っている部屋とは思えないほどの赤い顔が重苦しいほどだ。上総は横目で様子を伺うだけに留めた。見たくもない。

「あんたに答えられたってねえ」

「まず、例の質問だが」

ちらと、渋谷に視線を走らせ藤沖は断言した。

「佐賀は騒ぎになるまで何も知らなかった」

「なんでそう言いきれわけ？」

「生徒会室で直接佐賀に聞いた。全く気付かず当日の夜は寝入っていた」

「なんかさそれ、直接部屋にもぐりこんで観察でもしてないとわかんないよね。誰かさんと違って」

こずえの視線がほんの少しだけ笑って上総を覗いたようだった。

——勝手に言えよ。

ちょうど一年前、似たような事件をやらかした盟友なのだから、しかたない。

上総には「黙ってる」と一方的に制止したこずえだが、藤沖に対しては基準を甘くしているらしい。しばらく話を続けさせていた。不公平である。

「じゃあ杉本さんの言う通り、おねしょシーツとふとんをすり替えたのは風見さんということよね、どうなの、渋谷さん？」

質問は渋谷に向けられているのだが、返ってくる言葉は「ごめんなさい」だけだ。代わりに藤沖が口を出してくる。

「つまり、小学校時代から知り合いの風見が面倒を見た、ということだ」

「ああそうなの、風見さんって渋谷さんと同じ小学校なんだ？」

——五年までは品山小学校らしいけどな。

思い出すのもきつい記憶が、藤沖の声と風見の名前で呼び起こされる。なぜか先日顔を合わせた浜野の自転車姿までひっぱり出されてくる。

「そうだ。いろいろ事情は知っていたらしい。それで修学旅行の時もできるだけ同じ部屋になるように手配してもらっていたようだ」

「私、おねしょには詳しくないんだけどさ、修学旅行の時ってきちんと先生に申告して、真夜中起こしてもらおうという約束事があったような記憶あるんだけど。さっき杉本さんが言ったようにさ」

どうもこずえも、渋谷に直接話をさせることには消極的らしい。

自殺未遂を繰り返しているという不安定さを考えると仕方のないことなのだろうか。

渋谷の這いつくばる姿を杉本は静かに見下ろしている。

「古川、平気でそれできるか。俺ならできない」

「まあねえ、中学になっておねしょが直らないってのは、口に出せないことかもね。けどさ、あえて誰とは言わないけどさ、うちのクラスでいたよね立村。おねしょが直らなくて宿泊研修に行かないとか言い出してさ、結局参加したって奴」

「ああ、いたな」

さすがに武士の情けで名前までは出さなかった。医師になるため専門の高校へ進学した水口は元気だろうか。奈良岡彰子と仲良く過ごしているだろうか。夏休みどんな顔して青湊に帰ってくるだろうか。少しだけ心がほころんだ。

「じゃあ報告しないで参加して、失敗しちゃったってことかあ。で、風見さんが全部始末してくれたってことかあ」

考え込みながら整理していたこずえの様子が、はたと変わった。

横顔の頬骨が斜めに上がっていく。

「ちょっと待ってよ、つまりこういうこと？ 渋谷さんが盛大な地図を描いてしまった後で、風見さんが後片付けして、その後で部屋のシーツとふとんを入れ替えたってわけ？ ってか、そんな余裕、朝、あったの？ どう考えたってそんな時間ないよねえ。立村、私らの時、早朝六時にロビー集合でなかったっけ」

えらいことになった修学旅行五日目朝のことはよく覚えている。急いでシャワーを浴び身支度をしたところ笑顔の南雲にお迎えされたあの日のことを。仕方なく頷いた。

「そうだよね、ってことはよ、みんなが部屋を出た後、風見さんが大慌てで戻って入れ替えしたということ？」

渋谷がかすかに頷いた。

「ちょっとちょっと、それって何？ じゃあ最初から、あんたたち杉本さんにおねしょっ子の濡れ衣着せようと企んでたってこと？ 私、てっきりなんかの誤解がもとでそういう噂が流れちゃったと思ってたけど、それってそれって」

慌てているこずえが、何度も渋谷に問い掛ける。

「悪いけどそれが事実だったら、私は公平な判断できないよ！ あたりまえじゃん！ それで風見さんが杉本さんのしでかしたってことにしようと噂を流したんだよね。学校側とか生徒会側とかそういう問題以前に、裁かれるのは風見さんとあんた、渋谷さんじゃん！」

声のトーンが上がる。こぶしを作っているのが隣で見えていてわかる。

「それで自殺未遂をしたりして同情引いて、最終的には杉本さんに罪をかぶってもらおうとこうやって集まらせたってことなわけ？ 藤沖、悪いけど私、これ以上乗れないよ。立村の味方に立つわけじゃないけど、話が違いすぎるよ」

「古川、違う、話を聞いてくれ」

どすの利いた声で、藤沖がいきなりこずえの椅子を無理やり直角に向けた。その腕力に上総は密かに驚いた。

「たくましいねえっていつもなら褒めるけど、聞く耳持たないよ」

「違うんだ、今回の件、本当はあいつも」

言葉を切り、じっと渋谷に目をやった。その視線は杉本にまで届いていないようだった。

「風見の、被害者なんだ」

上総はすべてを冷静に見通していた。だから身体を動かさずにいられた。

様子だけは伺うけれども、それ以上追うつもりはなかった。

——なんで今ごろ気付いているんだろうな。

最初から誰かの企みだと気付いていなかったのだろうか。それ自体信じられないが、嘘をつかないこずえのことだからたぶん本当なのだろう。純粹に、自殺しそうな渋谷を救おうと考えていたのだろう。あえて杉本に不利な条件を呑んでもらおうとしたのもそのあたりが理由だろう。しかし、風見が一枚絡んでいると言う話にここまで激昂するとは思わなかった。

——どちらに転ぼうが、形勢は杉本有利だ。

今まで一度も、絶対的多数を味方につけて戦ったことのない杉本。

もしかしたら生まれて初めて、正々堂々と勝利をおさめられるのかもしれない。

ルール違反ももちろんしていない。誰から見ても間違いなし。

——杉本、まっすぐ、そのまま行け。

言い合いが続く中、上総は机の引出しに埋もれた小さな千代紙細工の感触を、手の平に甦らせていた。

上総は腕時計を覗き込んだ。まだここに来てから十五分くらいしか経っていない。

目の前で繰り広げられている出来事は、いわば阿鼻狂乱だというのに、なぜか他人事のように眺めているのが自分でも理解できない。いつもだったらそれぞれの登場人物に対し感情移入して分析していくというのに、今はただ冷静に見下ろしつつ座っている杉本梨南のみと心を合わせている。一切上総の顔を見ようとはしないのに、見えない紐を互いに握り締めているような感覚に捕らわれている。

——なんであいつ「渋谷も犠牲者だ」とかわけのわからないこと言うんだろう。

藤沖の言葉にひっかかりつつ、上総は黙ってこずえの仕切りを待っていた。

この場は古川こずえが行司軍配を執り行っているのだから口出しはしない。

すすり泣きつつも藤沖に向かって激しく首を振る渋谷、しかし声は出さない。鼻水が流れるのか何度も手の甲で口許を抑え、すすっていた。

「この場で言うぞ」

藤沖の繰り返す確認台詞を撥ね返そうとしているようだ。

「言わないと誤解されたままだ。俺は言う」

必死に押しとどめたいのだろう。かぶりを振る仕種は、藤沖の繰り返す言葉に比例して大きくなり、最後には身体全体を揺らして、激しくしゃくりあげた。

「渋谷さん、言いたいことあるなら、自分でまず、言いな」

こずえが見かねたのか、渋谷を諭した。

「さっきから渋谷さん、『ごめんなさい』か『許してください』しか言わないじゃん。それだけじゃだめなんだよ。もちろんしんどいことだってのはわかってるけど、あんたが杉本さんに今までしたこと考えたら当然、我慢しなくちゃなんないことなんだよ。それに藤沖も」

ゆでダコ状態の藤沖をも、たしなめた。

「あんたもさ、渋谷さんをかぼうのならもっとやり方考えないとだめだよ。今の話でさ、風見さんが一枚かんでたってことはよくわかったし、そこから杉本さんの濡れ衣騒動へ発展していったのも理解できる。もともと風見さんは杉本さんのこと嫌ってたからね。ついでに立村も相当、ねえ」

——俺の顔をそう見るなよ。

もちろん口には出さない。

「けどどうということよ。その、渋谷さんも犠牲者ってのは聞き捨てならないよ。どう考えたって今までの展開じゃあ、渋谷さんと風見さんのタッグで行われた修学旅行完全犯罪じゃん」

「犯罪と呼ぶな！」

荒い言葉で遮る藤沖だが、こずえは冷静に交わした。

「とにかく、人として、やるべきではないことをしたのは事実でしょうが。でも弁護士藤沖として

は言いたいことがあるんだよね」

「そうだ。理由がある」

「渋谷さん、そういうわけだけど、このまま藤沖の口から聞いたほうがいいのか？ それとも自分自身で語る？ 杉本さんがそうして欲しがっているようにね」

「どちらも、私」

ここで言葉を詰まらせ、渋谷は再び泣き伏した。

杉本はずっと黙りこくっていた。

基本姿勢は変わらない。背を伸ばしたまま、じっと渋谷ひとりを見下ろしていた。

おそらくこれこそ最大の処罰ではないだろうか。被害者からじっとにらみつけられる恐怖を、渋谷は今味わっているのだ。だから声も出ないのだろう。おびえるしかないのだろう。見方によってはこれをリンチと表現する人もいるだろうが、これまで杉本が与えられてきた罵倒の数々に比べればささいなことと、上総は思う。

——ある程度明らかにされないとな納得できないよな。

藤沖が言う「渋谷も被害者」の意味はなんとなくわからないでもなかった。

去年の段階で、渋谷と風見、そして佐賀はるみの三人が仲良しトリオを組んでいたらしいというのは知っていたし杉本からも聞いていた。生徒会がらみで杉本が最大の屈辱を浴びせられたこと……たとえば音痴だとか……もやはり、この三人がいたからだとも聞いている。

仲良し三人組。

どこかの誰かと同じ立場だったとも考えられる。

——善意で、渋谷さんの失敗をごまかそうとした、そのことが重荷だったと言いたいのか。

想像つかないわけではないのだが、だからといって杉本に罪をなすりつけようとしたことをひっぺがえすようなものとは思えない。

「渋谷は、風見にすべてを知られていたんだ」

とうとう藤沖が口を切った。耳を覆ってさらに首を振る渋谷の姿は、以前舞台上で観た人形振りの狂いにも似ていた。しかし声は出さない。身振りだけに留まっている。

「小学校から一緒ならね」

「前から知っていたのは、風見だけだった。だからこいつは、逆らえなかったんだ」

——逆らえなかった、といっても実際は守られたわけだろう？

こずえが受け答えし、あえて後輩ふたりには何も言わせない方針で進めるつもりらしい。

「ええとつまり、はっきり言っちゃえば、渋谷さんのおねしょ癖のことを風見さんは唯一知る人だったってことなのかな」

——そんな露骨に言っているのか？

敵方の上総でもかなり恥ずかしく感じる台詞である。こずえは一切気にしないで進めていく。

「でもさ、かばってあげたってことはいいんじゃないの。それのどこが被害者、犠牲者なのよ。同じ穴の貉に思えるけどさ」

「小学生女子の考えていることはわからんが、風見は渋谷の秘密を知ってから、わざと親友面して近づいてくるようになったらしい。そうだな、渋谷」

ひくっとしゃくりあげ、頷くような仕種をする渋谷に、上総はどうもねばっこいものを感じる。何が、というわけではないのだが、素直にその動作からくる言葉を受け取れない。

「本当はそんな深い付き合いをするつもりなどなかったが、弱みを握られてしまっては逃げられない。しかたなく風見の求める友情を培ってきたわけだ」

「だいたい、話が読めてきたよ」

まっすぐ、どことなく感情を平らにしたような口調でこずえが相槌を打つ。

「つまりさ、ほんとは友だちになんかなりたくなかったのに風見さんに一方的ラブコールされてしまい、しかたなく親友の顔してたってことかあ」

ちらっと上総の顔を横目で見るのには、いいかげんにしろと言いたくなる。

「青大附属にも一緒についてくれるし、そりゃあ大変だわ」

「だが、風見なりに思いやっていた節もある」

いきなり渋谷が座り込んだまま、涙目で藤沖を振り返りにらみつけた。その目つきの変わる瞬間を思わず捉えて、背筋が寒くなる。理由はない。

「クラスは別々だが、風見はあの脳天気な性格であつという間に友だちをこさえ、そのルートから渋谷を紹介して交友関係を広げていったようだ。今だから言えることだが、生徒会関係の行事に参加してきたのはまず風見が最初だった。用もないのに生徒会室にたむろい出して、それを放っておけずに中へ入ると、ついでに渋谷もついてきた」

——ついでに、ってどういうことだろう？

初めて杉本が、渋谷から目を逸らし藤沖の話に耳を傾け始めた。その合図はわかりやすい。まっすぐ背を伸ばしたまま、約四十五度席をずらすのだ。その変化に気付いたのかこずえがすぐに会話を藤沖へ促した。

「つまりさ、生徒会に入るきっかけを、風見さんが作ったってことなのかな」

「そういうことになる」

首を振り、違うと言いたそうな渋谷の様子だが、なぜかものを言わない。藤沖に対して抗議の態度こそ示している。しかし、発しないのが上総には解せない。

「渋谷さん、反論したいなら口を使いな。返事がないから先にいくよ。けど、それは女子同士のうわしき友情の現れでしかないじゃん。女子ってそうだよ。そことどうやって繋がるのよ。被害者だとか犠牲者だとか」

沈黙が流れそうになるのをこずえひとりで留めているような気がする。

上総はあえてどのような工作もしなかった。

ただ、杉本の様子だけを伺っていた。

空調が効いていた部屋だが、やはり密封されているせいかほこりっぽい臭いが広がってくる。誰かに聞いたことがある。カビくさい、とも言う。喉が渴いた。むせそうになるのを喉の真中で止め、話に耳を傾けた。

「なるほどね、渋谷さんってさ、一年上から見ててすごいしっかりしてるように見えてさ、なんてっかとおつきにくそうな感じがしてね。こういったら失礼かもしれないけど、お高く止まっているようだよ。藤沖、あんたもしょっちゅう文句言ってたじゃん」

「俺もそう思っていた」

面と向かってそこまで言うか、と正直思うが当然上総は黙っていた。

「だが今になって気がついた」

「何をさ」

「そうさせていたのは、風見だったんだとな」

——影の功労者か。

藤沖が何度か咳払いをし、額の汗を拭った。抗議を諦めたのか渋谷は両耳をふさぐようにして俯いた。それはそうだ、自分の内面を丸裸にされるようなものだ。聞きたくないに決まっている。

「風見なりに努力して、渋谷を守り立てようとしていたのはわかるしけなげだとも思う。だが反面、渋谷の方ではその善意で息が詰まりそうになっていたのだろう。本来ならば追っ払いたいところ、友情という名目であれやこれやと世話を焼かれ、しかもすべてがポイントを押しさえている。実際風見は見た目馬鹿に見えるが結構賢い。今回の出来事でも、俺と佐賀との間を取り持とうとしたのは風見だし、決して悪意があるようには見えない」

「へえ、ずいぶん風見さんのことひいきするねえ。男尊女卑野郎だったあんたがねえ」

皮肉るこずえを一瞬黙って見据え、藤沖は頷いた。認めた。

「そうだ。俺は、渋谷を基準にして女子を判断していたからだ。風見や佐賀を知ればそうは思わなかっただろう」

言い切った瞬間、再び激しく渋谷が床に突っ伏した。全身からすすり泣きが溢れ出す。

今度は杉本も一切無視したままだった。

——露骨だな。

どちらにも言えた。杉本にも、渋谷にも。

——演技しているの見え見えじゃないか。

藤沖の冷静な弁明はまだ続いた。

「俺は決して風見を責めるつもりはない。今回の一件にしても双方から事情聴取を行った」

「へえ、事情聴取ね」

だんだん冷えていくこずえの声が少し怖い。

「風見なりに渋谷をかばって行った行為とはいえ、人間としてすべきことではない。ましてや人に罪をなすりつけるとは言語道断。俺も確かにそれは思う。だが、善意が悪意にすり変わることもあるわけで、渋谷にとって風見の言動は嫌がらせとして映っていたようだ。風見が懸命に渋谷の面倒を見ようとすればするほど、渋谷は追い詰められていったというわけだ」

「そういうことね。藤沖、あんたが渋谷さんを被害者とか犠牲者とか言うのはそのあたりに原因があったわけかあ。だいたいわかってきたよ。要するにさ、押し付けがましいってことよね。友情の現し方がさ」

底から響く渋谷の泣き声と、その真上の空間で交わされる藤沖とこずえの対話は、どこことなくどこかで観たギリシア悲劇のように思えた。白い布で身を纏い、ずらりと舞台上に並んだ登場人物が、朗々と台詞を謳い上げる。こんなのどこが面白いのかと、観た当時まだ就学前だった上総は感じたのだが、その記憶だけは鮮やかに残っていたようでぴたぴた合わさっていく。

——芝居だろ？

問い掛けたい。

——なぜ、こんな白々しい演技をして、同情を引こうとするんだろう。

上総は藤沖を観察した。同じ地平にしながら、自分ひとりが客。杉本すらも舞台道具のひとつに見えた。

藤沖の性格を上総はまがりなりにも読み取っていたつもりだった。

少なくとも、

——同情買うような話をする奴じゃない。

男子たるもの、強さ、そして辛抱強さ。それを美点とする男のはずだった。

硬派で曲がったことが大嫌い、だからこそ、上総と袖を分かった。

その理由が理解できるだけに決して恨んだりはしなかった。

杉本に対しての行動に関しては許しがたいものこそあれど、それでもまだ上総の心中には藤沖の価値観を受け入れる隙間を残しておけたはずだ。この場で話し合いを持つことに賛同したのもその「隙間」があつてのことだ。

——なぜなんだ。

上総は目でその質問を固め、眼光で飛ばした。いわゆる「ガンをつける」に近い。

無視された。藤沖は語ることに夢中で、上総の様子を伺うことすら忘れていたようだった。

——渋谷さんが風見さんの善意に窒息しそうになっていたのは理解できるさ。同じ立場だったらさぞ地獄だと思うよ。けど、そのことを明らかにして、何になる？ 少なくとも俺はそんな白々しい話を聞かされたって聞く耳なんて持たないさ。

言葉の積み木で組み立てて思う。なのに、なぜか苦しいのはその積み重ねた積み木の「隙間」から吹き込まれる言葉の毒だろうか。足元に這いつくばって全身ひくつかせている渋谷も演技しているようにしか見えないのに、ぐさぐさと目に見えない針が突き刺さってきて動けない。宿泊研修の夜に見上げた、千本の針を思わせる夜空、あの星空が静かに攻め立ててくるかのようだ。なぜこんなに苦しいのだろう。なぜこんなに息が詰まるのだろう。

こずえがちらと上総に視線を送った。逸らす間もなくじっと射られた。

「あんたは黙ってな。最終的に判断するのは、杉本さんなんだからね」

小声で囁き、また藤沖に向き直った。

「じゃあさ、藤沖としてはどうしてほしいのさ。つまり何？ 風見さんのせいはずたずたになった渋谷さんを救いたいだけなの？ けどそれは私らが判断することじゃない。被害にあった杉本さんが決めることだよ。そんなにまでしてなぜ、藤沖は渋谷さんを守りたいの？ そのことまであんたの口から言わない限り、誰も納得しないよ。私も、立村も、もちろん杉本さんも」

全身汗だくの藤沖は俯いた。喉を詰まらせたようになんども手でさすった。

——さっきまで立て板に水状態だったってのにな。

「もう二度と、誰も死なせたくない。それだけだ」

空調の音が唸り声に聞こえた。

「もう二度とって、誰か死んだのか？」

「立村、あんた黙りな」

「尋ねただけだよ、一言か二言しゃべったっていいだろう？」

上総は立ち上がった。パイプ椅子が後ろにずれた。

「さっきから一方的にしゃべりやがって、いったい何が言いたいんだよ！」

こずえの制止などもう聞く耳持たない。ちょうどこずえの前まで一步踏み出し、藤沖を見下ろした。立ち上がりず俯いたままの藤沖に今までがまんしていた言葉ですべて砲撃した。

「藤沖、今の話がすべて本当なら、もちろん俺は同情する。大変だったとねぎらう気持ちもある。けど、その話をここでぶちまけることに意味なんてあるのかよ！」

果てしない水鉄砲のように、勢いよく言葉が発射されていく。留められないその理由がわからない。

「善意の顔した悪意、それがどんなにしんどいことか、もちろんわかってるさ。相手が自分のことを思ってしてくれていることだから、受け取らなくちゃならないことだってさ。そんなわかりきったことをなぜ、関係ないところで、赤の他人のまえで暴露する必要があるんだ？ 藤沖、今の言葉でお前、渋谷さんを殺していることになるって気付いたこと、ないのか？ こんな、女子にとって絶対に知られたくないことを俺みたいな男子どものいるところでぺらぺら聞かされて、感謝するとでも思っているのかよ！」

——違う、俺はこんなこと言いたいんじゃない、そんなんじゃない。

ほとばしる言葉の洪水を押さえられない。しかも何を叫んでいるのか、連なる言葉はすべて、突っ伏している渋谷をかばうようなもの。本来なら杉本にめった打ちに遭わせてやりたい相手のはずだ。どんどん恥ずかしい過去を男子どもの前で暴露してもらった方が好都合、杉本のためにもよいこと尽くめのはず。勝者でいられるはず。

——けど、なぜ叫んでしまうんだ？

頭の中とは違うところで、言葉の製造機が激しく作動している。忘れられていた倉庫から物が運び込まれてきたかのよう。このまま違う言葉ばかりぶつけていたら、せっかくの有利な立場から外れてしまうというのに、なんでだろう、どうしてか上総も心の中で手をこまねくしかない。

「俺が言いたいのは、そういう余計な援護射撃なんかやめろってそれだけだ。今、杉本が言っただろ。杉本の要求だってひとつだけだ。渋谷さんの口からはっきりと、直接、事実関係を述べてほしいという、それだけなんだ。それも露骨な事実を知りたがっているわけじゃない。なぜ、杉本を生贄にしようとしたのか、その理由だけだ。そうだろ、杉本」

背中をじっと射る視線、それが杉本梨南だとは気付いていた。背中がちくつとする感覚は気のせいじゃない。上総は振り返らず、ただひたすら藤沖を責め続けた。

「藤沖、今、これ以上死なせたくないって言ったよな」

ふっと顔を上げた藤沖の目が赤かった。

「だったら、これ以上茶々をいれるのはやめろ。ふたりと、行司軍配を握り締めている古川さんにすべて任せろよ。こうやって藤沖が説明すればするほど、恥の上塗りをされている相手のことも考えろ」

さらに続けようとしたとたん、膝の裏をちよんとつつく誰かの指の感覚あり。

誰がやったかは明白。思わずふらつく。床に座り込むのだけは避けられた。

「立村、言いたいこと言ったなら、もういいでしょう」

いつのまにかこずえが、上総のずらしたパイプ椅子を元の位置に戻していた。

「あなたの言う通り、私も悪かったよ。藤沖の気持ちもわからないでもないけどさ、ちょっと露骨過ぎとは思うよ。悪いけどあそこまでぺらぺらしゃべっていいのは、お互いしっぽりぬっくりやっちゃった後くらいだよ。やることやった間柄ならさ、しょうがないにしても、そこまでの関係がないのに暴露ってのはまずいかもよ」

相変わらずのやんわりした下ネタで話を締めようとしたのだろう。こずえが軽く交わそうとした。突然藤沖と渋谷が顔を見合わせ、何かを相談しあうように首を振ったり手を揺らしたりし始めた。

まず上総が、次に側にいた杉本が気がついた。

——どうしたんだろう、やはり付き合ってるのか。

想像はついたし驚きはなかった。

むしろ、次の杉本の言葉に全身が硬直した。

「そういう間柄なのですね」

理解するのに約、五秒。こずえが確認するまでの間だった。

「杉本さん、なぜ、そうシンプルに、核心に突っ込むのよ、もう、笑っちゃいけないのに笑っちゃうじゃないのよ！ 今杉本さんが言ったことってさ、『あなたたちもう、お互い乳繰り合ってるんじゃないの』ってことと一緒にだよ」

茶化すこずえの笑い声を打ち消すかのように、杉本はきっぱり言い放った。

「古川先輩の意味する通りです。私はそのような事情ならば、藤沖先輩の援護射撃の理由を理解します」

「杉本、ちょっと待て、お前何を言いたい？」

上総の問いにはこずえが答えた。

「ばっかだねえ立村。いかげんあなたも男女の機微ってものを学びなよ。相変わらずあなたガキなんだから」

ゆっくりと、藤沖と渋谷を交互に眺め、最後に藤沖へ確認するように問うた。

「藤沖、あなた、渋谷さんに責任とる覚悟で、やったんだね」

返事はなかった。

無言の肯定サインだと、男女の機微を知らない上総にも理解できた。

泣きはしなかったが、渋谷も顔を上げられずに俯くだけだった。

再び空調の音が響き、教師用機の電気器具のライトが黄色と赤に何度も点滅した。

上総は杉本の顔をそっとのぞきこんだ。目が合った。

今度は杉本も無視をせずに上総をじっとにらみ据えた。いつもの瞳だった。

中学卒業後の春休みをきっかけに男子連中の多くが「初体験」を済ませたらしいという噂をよく耳にしていた。隠しておけばいいものを、なぜかみな、嬉々として報告してくるのが上総には理解できなかった。一人で結果を出したならともかくも、なぜたっぴりとリアルな身振り手振りで説明しようとするのだろう。お相手となった女子がその後どういう目で見られるのか、こいつら想像つかないのか？ たしなめてしまうこともある。

もっとも上総が直接報告を受けたのは、天羽と南雲のみだ。噂話に留まる程度の武勇伝については、この三ヶ月かなり聞かされたものだった。ちなみに今現在、貴史からはその手の話を伺うことなどない。おそらく最愛のアイドル・鈴蘭優へ操を守っているのだろう。

——それにしても藤沖と、この人が。

なぜこんな狭い部屋の中で、クーラー風の乾いた臭いをかいでそんなことを聞かされなければならないのか。しかも渋谷を除いてあとのふたりは沈着冷静に見守っている。本来罵倒を繰り返すはずの杉本も藤沖の行動を認める発言までしている。

——なんで話が逸れていくんだ？

元に戻したい。ただいま水入り。こずえも涼しい顔で足を組み直して見守っている。

さすがの「下ネタ女王」もどこで取り直しさせるか考えているようだ。

——けど、いつだよ、いつ、どこだよ、どこ。

想像がつかなかった。

——駅前のホテルに連れ込んだのか？ まさかそんな金掛かることするわけないよな？ それとも自分の部屋なのか？ どちらの家だったんだ？ 親のいる家でそんなことできるのか？ 藤沖は渋谷さんを送り迎えしていたという話だったけど、目的はそれだったのか？ 藤沖に付き合い相手がいたという話は聞いたことないし、ということはやはり、初めてだったのか？ 合意の上なのか？ それに、いったいつだったんだ？ 修学旅行が終わってから今日までそんな経ってないし、あつという間にそんなこと、できたのか？

みじん切りの思惟がすさまじい勢いで飛び交う。

目の前にいるふたりが認めている「やった」という言葉を受け入れられない。上総は唾に味がつくくらい奥歯をかみ締めた。

藤沖は言い返さず、こわばった表情で渋谷を見下ろしている。額から汗が流れているのが不可解だ。クーラーがこれだけ効いているというのにひとりだけだるまストーブ状態で座っている。その斜め下で完全に蟄蛙状態でうつ伏して顔を隠している渋谷。さらに正面から冷静に伺う杉本がいた。

——どんな顔して、どんな格好で。

腹の中に太陽がでんと居座ったかのよう。上総の奥底を頭から腰、足元まで激しく熱した。瞬きの合間に言葉がよぎる。

——先にしやがって。

自分が発すべき言葉ではないと、自覚はあった。口を閉ざしていた。

取り直しの一番はこずえの裁量に任される。居心地の悪い沈黙を気楽に破ることができるのはこずえしかいない。迷走している四人を交通整理してくれる。

「ま、一通り、出るところまで出たね。杉本さん、とりあえずどうする？」

杉本にまず声をかけた。本来被害者としての立場だが、空気のだよみからはかろうじて逃れている表情だった。上総も杉本に視線を向けた。例のふたりを見ないようにした。

「私の要求は満たされておりません」

「はあ？」

間抜けっぽく声を作り、こずえが尋ね返した。

「まだ知りたいことあるのはわかるけどさ、やっぱし、やばいよ、これ以上いやんばかんそこはだめよ、的展開はさ」

「古川先輩、違います。私の申し上げたいことは全く別のことです」

無機質に「あいうえお」の束が転がる。杉本でないと発することのできない口調だった。

「私はただ、渋谷さんから事実を直接伺いたかっただけです。最初に申し上げたはずですよ」

「まあ、そうだよな」

「しかし渋谷さんは謝る以外、何も語ろうとしません」

「確かにねえ」

今度は渋谷にも声を掛けようとしたこずえだが、すぐに杉本から止められた。

「古川先輩、それはいいのです」

「だってさ、聞きたいんですよが」

「いえ、話せないのでしょう」

杉本は椅子から立ち上がった。こぶしを軽く握るようにして、真上から渋谷を見下ろした。渋谷も顔をあげようとはしなかった。ただ泣き声は立てなかった。聞いてはいるらしいと見て取れた。

「今、藤沖先輩のおっしゃることがすべて事実とするならば、そのことをすべて渋谷さんの口から話していただきたかったのです」

「いやそれはさあ」

上総の言いたかった相槌をこずえが代わりに打ってくれた。

「無理だよ、自分からはねえいくらなんでも。立村がぶち切れたように、本来内緒にすべきことだったんじゃないかって気も正直するよ」

ちろ、と藤沖をにらんだ。杉本は上総に少しだけ目を留めた。その視線を受け止めたら全身が火照っているのを見抜かれそうで慌てて逸らした。

「今のお話でだいたい事情は理解いたしました。渋谷さんは自分の不始末を自分で片付けることができず、それをお友だちに文字通り尻拭いさせたわけですか」

杉本にしては露骨な物言いだった。苦笑いするこずえ。だんまりを決め込む藤沖と渋谷。

「まあ、ほんっとの尻拭いよねえ」

嫌味に聞こえる。

「よく理解しました。渋谷さんは風見さんと佐賀さんに守られて、最後には藤沖先輩を味方につけないと、生きていけないのですね」

——生きていけないとは、それまづい言い方だろう？

はらはらするが杉本相手ならばそれはいつものことだ。

「本来ならばきちんと事前に申告し、夜中に起こしていただくかもしくは先生の部屋と一緒に泊めていただくかして、夜尿症回避策を講じるべきところ、それを怠り、事に至れば今度は人に後始末を押し付ける。どういうことでしょうか。私には全く理解できません。だから佐賀さんが私を犯人に仕立てあげようとしたのですね。風見さんならともかくも。人間として最低ではないですか」

「待って、違うの」

この部屋で初めて渋谷が反論した。顔を上げて、首を振った。顔はぬれたように光っていた。

「佐賀さんは、本当に、知らなかったの」

息絶え絶えに、必死に搾り出すように訴えた。

「佐賀さんは、今でも、私のことを無実だと信じているの、だから、私」

「これだけ証拠が挙がってもですか」

冷酷そうに聞こえる杉本の返事に、渋谷が食らいついた。その背後で藤沖はぐっと俯いている。明らかに渋谷の訴え……むしろ願いに見える……を否定しているように感じられた。

「だから、佐賀さんだけは、本当に知らないの、今でも、本当に、だから、だから」

再び顔を俯けしゃくりあげ出した。前髪は動かず、目はほぼ隠れたままだった。

——佐賀さんが今だに信じているってどういうことだろう？

なぜそこを力強く訴えるのか、そのわけがわからない。上総は藤沖だけを様子見した。女子の意味不明瞭な言葉よりも、男子の分かりやすい行動を観察したかった。

こずえが声をかけた。

「佐賀さんに、ばれてほしくなかったってことよね」

肩を震わせ、両手をついたまま、渋谷は黙って頷いた。

「そっか。さっき言ってたね、佐賀さんには知られたくなかったって。なのに佐賀さんのいる部屋でおねしょしちゃったからばれるのは時間の問題。だからなんだね」

「何がだからなのですか」

上総と同じ疑問を杉本はシンクロして尋ねてくれた。

「杉本さん、きっとさ、大好きな友だちに軽蔑されたくない、その一心で渋谷さんは隠したんじゃないかって思うんだよね。だから必死に嘘ついたんだよね。全校生徒に隠したかったというよりも、佐賀さんにだけは気付かれなくなかったんだよね。それと、霧島にも」

「霧島にも」のところだけ、力が籠っているように聞こえた。

「渋谷、いいかげんに諦めろ」

藤沖が口を切った。

「この前も話しただろう。もう佐賀も霧島も、すべてを知っている」

激しく被りを振り、藤沖に背を向けたままの渋谷。椅子から立ち上がった藤沖は後ろから回るようにして、そっと肩に片手を置いた。顔を覗き込むことはしなかった。

「もう隠してもあのふたりには無駄だ」

「だって、だって、違うって」

肩に手が乗ったとたん、また身体が震え出したようだった。杉本が仁王立ちで見下ろす先、上総とこずえが椅子に腰掛けたまま見つめる先、藤沖と渋谷だけが語りつづける。

「あのふたりにだけは、真実を話せ。あのふたりは条件を呑めば、黙ってくれる」

震えが止まった。さらに藤沖はとつとつと言葉を繋いだ。

「俺が今日、ここでお前を連れてきたのは、諦めさせるためだ」

「諦めさせる？」

こずえが問い返した。そちらには答えなかった。

「どんなに霧島を誘っても無理だ。霧島は佐賀に惚れている。だから諦めろ。だが、佐賀を味方につけて霧島を黙らせてもらうなら、できる。霧島は佐賀の言うことなら素直に聞くだらう。暫くは我慢するんだ」

膝をつき、正座した。杉本に向かい合った。

「今回の件は、渋谷と一緒に謝りたい。申し訳ない」

手をついた。一度腕をつっぱらせるようにして、床に額をすりつけるようにして頭を下げた。

「謝っても許してもらえないことではないと承知している。だが、いま渋谷は」

半そで、ハンカチで隠していた渋谷の手首をいきなり握り、引き寄せた。身をよじる渋谷をにらみつけ、ハンカチを取り去った。白い包帯で覆われていた。

「このままでは死ぬかもしれない。どんなに周囲が彼女の失敗を受け入れたとしても、立ち直れないかもしれない。どんなに霧島や佐賀が許したとしてもだ。これ以上、周囲の冷たい視線に耐えられる女子じゃないんだ」

「本当にそうみたいですね」

冷やかに杉本は答えた。感情に揺らぎはなかった。

「犯人になってくれとは言わない。ただ、この事件については口を閉ざしてほしい、それだけだ」

「ずいぶん都合がよろしいですね」

また杉本が冷たく返す。全くもってその通りだと上総も思う。

「俺は、ただ、もう見たくないんだ」

吐き出すように、藤沖が俯いたまま、その名を告げた。

「霧島の姉のようなことには、もう二度と、なってほしくない、それだけだ」

——霧島さんのことか！

「藤沖、あんたまさか」

演技でない驚きの声はこずえだった。

「ゆいちゃんのことをあんたまさか」

答えの代わりに藤沖は小さく頷いた。

繰り返し「死なせたくない」そう訴える理由の核はそこだったのか。

「霧島先輩のことを」

杉本も言葉を詰まらせた。可愛がってくれた霧島ゆいのことを、杉本は西月小春と同様慕っているはずだった。今まで話題として「霧島」が現れたのは弟のこのことのみだった。しかし今、姉が浮かび上がった。

「俺はもしかしたら、霧島の姉のことを早い段階で救うことができたかもしれない。退学させられる前に生徒会長として何か手を打てたかもしれない。西月や清坂が教師たちに抗議を行おうとした際になぜ協力を申し出なかったのか。今も、後悔している」

ゆっくり、渋谷が身を起こした。顔を上げ、何度も顔をこすり、振り返り藤沖を見上げた。目が合ったようだった。ヘアバンドのゴムが眉間のところまで降りていた。

「俺がしようとしているのは、霧島への償いだ」

声を震わせ、唾で言葉を示しつつ、続けた。

「ゆいちゃんの方？ それとも弟の方？」

「両方だ」

短く答えた。

口を尖らせて、そのくせびくびくしながら様子を伺い、怒られそうになると大嘘こいて逃げ出して、一夜明ければまた知らん顔して近づいてくる。霧島ゆいの弟はそんな奴だった。上総は霧島の整った顔を思い出した。渋谷を罵倒している時のいきり立った表情と反して、年上お姉さんのグラビア写真を眺めている時は鼻血まで噴いている。そんな霧島を藤沖はどういう視点でとらえていたのだろうか。

「生徒会役員としてこれから普通に接してもらえるよう霧島には頼み込むつもりだ。佐賀ともその路線で話がついている。学校側もそれなりにフォローを考えているようだ。ただそのやり方が露骨すぎて杉本に迷惑を掛けてしまったことについては一言もない、申し訳ない」

再び手をついて頭を下げる藤沖を、杉本は冷たく高みから射た。

一切動じていないように見えた。

霧島ゆいに関する言葉が出てきた時だけだろう、揺れたのは。

可愛がってくれた女子の先輩たちには心から感謝を捧げる杉本の性格はよく知っている。

「藤沖先輩、それならばお伺いたしますが」

言葉を切って、上総に向かいかすかに頷いた。何の意味かはわからなかった。

「私は濡れ衣を着せられたままでいるというのですか」

「違うよ、杉本さん」

慌ててこずえが止めに入ろうとした。上総は即座に手で制した。条件反射だった。腕を思いっきり払われた。

「私は、佐賀さんに修学旅行の後も疑われました。私ならば、そういうことがあっても不思議ではない、私ならば隠してしまう可能性だってある、そう堂々と言いつけられました。今のお話です

と真実を佐賀さんは知っているとのことです」

「事実だ」

短く、また藤沖が答えた。

「そうですか。ならば、佐賀さんからも、謝罪していただきたいのです」

「佐賀さんに？」

また顔を覆って泣き出す渋谷を杉本は無視した。

「唯一の条件です」

——唯一の、ってどういうことだ、杉本？

問い掛けたくて声を出しかけた。ここはとことん、罵倒し、叩きのめし、再起不能の荒技をかけて上等だ。もっとしつこく条件を重ね出ししても文句は言われまい。

「そうです。もちろん全校生徒の前では申しません。第三者の立ち会いのもと、きちんと謝罪していただきければ、私はすべて水に流しますが、いかがでしょうか」

もう一度杉本は上総に視線を送った。横目で、細く流した。

「水に流す、ってことは、杉本、お前」

恐る恐る問い掛けると杉本は唇をきつく閉じたまま、目だけで頷いた。上総にしか分からないかすかな肯定の意だった。

「佐賀さんが私に頭を下げるなら、渋谷さんの真実については、何も言わずに通します。それが条件ですが、お答えくださいませ」

きっぱり言い放った。杉本の放った言葉には、誰もが言い返せなくなるような重たい響きが詰まっていた。小さな鉛の飛礫を投げつけたかのようなようだった。

「佐賀に謝罪させるということか」

杉本は頷いた。それ以外微動だにせず答えを待っていた。藤沖もまた、渋谷をじっと見つめた後、一呼吸置いてゆっくり答えた。

「わかった。俺が立ち会う。佐賀とは話をする」

「本当ですね、お約束していただけますか」

上総は椅子から立ち上がった。

「杉本、お前がされてきたことを、そんなことだけで片付けて、本当にいいのか！」

横から手首をひっぱるこずえを振り払った。パイプ椅子が斜めにずれたのは勢いだった。驚かず、右向け右の要領で杉本は向き直った。

「はい、その通りです」

「お前、してもいないことをしたことにされて、変な目で見られて、馬鹿にされて、なのになぜその程度のことで許せるんだよ！」

「立村先輩、仰る通り渋谷さんをはじめとした人々の、私に対する仕打ちはそう簡単に許せることではございません」

「なのになんで許してしまうんだよ！ 杉本、今までさんざん酷い目遭わされてきたんだろ。殺してやりたいくらい憎いだろ。なのに、佐賀さんに謝ってもらうだけで、我慢できるのか。佐賀

さんが土下座してくれれば、今までのことをすべてご破算にできるものなのか？」

「立村先輩、私は許したわけではないのです」

一步、前に出て両足揃えて立った。「きょうつけ」の姿勢だった。

「これ以上話をしようとしても、渋谷さんには無駄なのだによく理解しました。この人には何を尋ねても、ご自分の言葉で話そうとする意欲を感じません。修学旅行前まではさんざん私を佐賀さんたちと一緒に馬鹿にしていたくせに、いざ立場が逆転するとただ泣きじゃくってすべてを他の人たちに押し付けようとなさいます」

くい、と首を曲げて渋谷をねめつけた。視線を合わせてもらえなかったようだった。すでに渋谷と藤沖は顔を合わせて何か無言の会話をしているようだった。

次に杉本が身体を向けたのはこずえにだった。合わせてこずえも立ち上がり手を差し出そうとした。もっとも杉本は気付かなかったようだった。

「古川先輩、ご安心ください。私は人殺しなどするつもりはありません」

「杉本さん、あのね」

「霧島先輩や西月先輩のように辛い思いをさせたいとは思いません」

「そうか、そうなんだ」

肯定しつつもこずえの言い方には戸惑うような不安が混じっていた。

「藤沖先輩はまるで私が弱い者いじめをしているように思われたようですが、そんなことをするつもりはありません。愚かな男子たちや教師たちに疑われようが何しようが私には関係のないことです。私の絶対無実を信じてくれている人がいるのですから、そんなこと気にするつもりもありません」

「そうだよ、杉本さん、さっきからさあ立村がおろおろしちまってさあ」

こずえが余計なことを言うものだから、ぴっしりと叩きのめされてしまった。上総の顔をにらみつけ、首を一振り。

「いえ、立村先輩は私を百パーセント信頼していただけませんでした。最初に仰いました」

「立村、あんたほんと」

答えられない。事実だ。歯噛みしたいくらいだ。上総の顔をじっと見据え、

「立村先輩は、私がそういうことをしてしまう可能性を捨てきれないとはっきりおっしゃいました。現場にいたわけではないのですからしかたないそうです。ですから私を無条件で信じてただけたわけではないようです」

「杉本、違う、ちゃんと俺、あのあと言っただろ！ 事実がどうであれ俺はお前の味方であると話したろ！」

言い返すが全くもって杉本、聞く耳を持たぬようだった。

「それはかまいません。立村先輩が信じなくとも、私を百パーセント信じてくださる方がいらっしゃることを、教えていただきましたから平気です」

「あいつのことかよ！」

名前は出せなかった。

視聴覚教室にてひたすら仲よしの女子と肩並べて英語のヒアリングに勤しんでいる奴の顔がち

らつく。戸を開けばその脳天気な面がすぐに目に入ってくる。きっとここでの会話は聞かれていないだろう。しかし杉本もその相手のすぐ側で、名を聞いて頬を赤らめたくはないだろう。可能ならば、無理やり杉本を引きずり出してそいつの席に連れて行き、「本当に杉本のことを百パーセント信じているのか証明してみろ！」とどついてやりたいところだ。

——俺は、無条件で杉本の潔白を信じたわけじゃないさ。証拠がないんだ、当たり前だろ。

——けど、白黒関係なく、味方であるって伝えたじゃないか！

——万が一、嘘をついていたとしても、嫌いにならないって言ったじゃないか。

——それでも、だめなのか？ 奴でないと、意味がないのか？

——百パーセント信じているなんて、どうやって数値出したんだよ！

杉本はこっくり頷いた。

「あのお方が信じてくださるのならば、私は他の愚か者に何を言われようが生きてゆけます。私の真実を貫けます。そこでおどおどびくびくしている渋谷さんのように、誰に守られなくてもその、信頼だけで胸を張って歩いてゆけます」

そこまで言い切った後、杉本はさっと戸を手で示した。四本指を揃えて美しく指した。まだ地べたで這いつくばっている二人に言い放った。

「これ以上、おふたりに話すことはございません。藤沖先輩、佐賀さんの件はどうぞよろしくお願いたします。では、お帰りなさいませ」

最後まで杉本の言葉ぶりは、かたくなすぎるほど感情が押さえられたままだった。

「杉本さん、私」

支えられて立ち上がった渋谷が、戸に手をかけようとしてそっと呼びかけた。

「ごめんなさい」

「お詫びの言葉は十分いただきました」

冷やかに杉本が返す。次に藤沖が黙ったまま、ふかぶかと頭を下げた。

「約束を守ってくださいませ」

戸を開け、よろよろしながらふたりが出て行った。視聴覚教室の生ぬるい空気が忍び込んだ。椅子を畳んだのはこずえだった。立ちすくんだまま動けなかったのは上総だった。手伝い、ほうきをまた持ち出そうとしたのは杉本だった。

「なんで掃除したがるんだよ！」

「ここ、綿ぼこりがひどいので」

教師用机の下を指差した。上総は素早くほうきを取り上げた。

「こんなことするより、もっと話すことがあるだろ」

「お話したいことはすべて語らせていただきました」

パイプ椅子を片付け終えたこずえが近づいてきて、上総からほうきをひったくった。

「杉本さん、今日は、杉本さんが一番強かったよ」

「本当ですか」

「うん、かっこよかったよ。男前だったよ」

今まで封印してきた笑みを浮かべ、杉本のポニーテールに触れた。

「それにしてもさ、すっごく長くなったよねえ、杉本さんの髪。つやつやしてる」

「ありがとうございます」

「杉本さんには辛い決断だったかもしれないけど、あのふたりは心底感謝しているよ。いい、杉本さん、もし何かこれから酷い目に遭ったら次回からは私たちが守るからね。風見さんのことは私も知らなかったから何も言えないけど、でもあれはひどいよ。佐賀さんだけじゃなくてさ、風見さんにも土下座させるべきじゃん？」

「いえ、いいのです。あんな人と話をすること自体、無駄です」

杉本はポニーテールをひとつりし、鞆をぶら下げた。

「それでは私も、これから期末試験の勉強がでございます」

「待てよ！」

荒っぽく上総は前に立ちはだかった。

「話は終わってないだろ！」

「何を話せというのですか」

きりきりとまた気色ばむ杉本に、上総は言葉を飲み込んだ。そのわずかな隙間を縫ってこずえはいきなりスラックスのベルトに手をかけようとした。何考えているんだ、慌てて身をよけた。そういう趣味じゃない。

「杉本さん、立村ね、どうもジェラシーで頭がかあとなっちゃったみたいなんだよね。ま、向こうには関崎たちもいるし、押し倒されたりはしないと思うから、せっかくだし少し立村と話してっただ方がいいよ。杉本さんと違って立村の奴、明日の期末試験全部捨ててるからさ。そうだよ立村？」

「捨ててないよ」

「まったく、あんたさ、藤沖に童貞卒業されたからってそんな青ざめてるんじゃないよ。なんだろうね、男子ってほんっと馬鹿ってか、アホだよ。言っとくけど杉本さんに変なことするんじゃないよ！」

「失礼なこと言うなよ」

すでにこずえはいつもの「下ネタ女王」の顔に戻っている。その奥で生真面目に行司軍配を振りかざしていたこずえの姿は消えていた。上総はその顔に何か、隠されていないかを読み取ろうとした。ずっと部屋の中で感じていた、こずえの見えない企みのようなものが浮かんでいないのかを探そうとした。杉本を、こずえの目的通り説得しきってしまったその技がどこからきたのかを確認したかった。杉本の、一番弱くてほしがっている部分をどうやって突いたのか、その理由はやはりこずえにあるような気がした。

「古川さん、それよりまだ聞きたいことがあるんだ」

「悪いけど私もお先！」

きっぱり断られた。ショートカットの髪をぼりぼりかきながら、スカートを膝上まで持ち上げ、ぱふぱふ仰いだ。中は見えない。観たくもない。

「明日の試験しくじりたくないからね。詳しい話はまた後で。それと立村、今日のことしつこい

ようだけど、美里にも誰にも話しちゃだめだよ。あ、それと本条先輩にもさ！」

——別に俺、清坂氏にも本条先輩にも話す気ないのに。

勢いよく戸を開け放したまま、こずえは視聴覚準備室を出て行った。楽しげに向こう側の関崎たちと「うわー、彰子ちゃんのクッキーって美味しいよね」などと語っている声が聞こえた。やはり、こずえが企み人という上総の直感は間違っていたのかもしれない。

「杉本」

「はい」

「この前、言っただろう。お前には叩きのめす権利があるって。とことんやり返していいって言っただろ。どうしてそうしなかった？」

答えようとして、言葉に詰まったのか杉本は黙った。上総が続けた。

「関崎がお前のことを信じているからか」

「立村先輩がそう仰いました。古川先輩もです」

「俺は関崎が百パーセント杉本のことを信じている、とまでは言わなかった」

「でも、信じていただけているとは伺いました。立村先輩、先ほども申しあげましたように、私は平気です」

「本当に、いいのか？ 何度も聞くが」

「私が真実しか述べていないことは、私が一番よく知っております。ですからあの頭の悪い男子たちや、話をゆがめようとする生徒会の女子たちが何を言おうが」

杉本梨南の顔が少し赤らんだ。

「私はまっすぐ真実を貫いて参ります」

上総をじっと、力いっぱい見据えた。

「先輩にこれ以上、ご心配いただかなくても結構です」

なぜ、杉本はあんなにあっさりと許してしまったのだろう。せっかく、強気で罵倒できるたった一度のチャンスだったのに、杉本はなぜ、佐賀はるみの謝罪のみで許せてしまったのだろう？

そこまでして佐賀に認めてほしかったのだろうか？ 自分がかつて裏切った佐賀に土下座させたいという願いが、渋谷たちに押し付けられた冤罪をも上回るものだったのだろうか。理解できなかった。

完璧な勝利を杉本にはおさめてほしかった。

願わくば全校生徒の前で、自らの潔白を証明させてやりたかった。

佐賀はるみに奪われた杉本梨南のプライドを少しでも取り戻させてやりたかった。

もしこのまま、事実が曖昧なまま幕を引くとなると、学校側はもとより、杉本を嫌う男子連中たちが都合よく解釈し、不利な方向へ物事を持っていかせようとするだろう。事実無根として言い返せるならばまだしも、今の話し合いでは一切何も事実を伝えない条約を結ばされてしまったようなものだ。さんざん泣いて泣いて同情をひこうとし、いちゃついた関係の藤沖には援護射撃をさせ、結局自分の身を守った渋谷名美子を、どうして許せるのだろう。

「これから周りが、誤解を煽り立てても杉本は言い返す権利がなくなるんだぞ、それを受け入れ

られるのかよ！」

「はい、かまいません。私は、あの方が信じてくださっていることを知ってます。それで十分です」

「高校の奴らが杉本を信じて、中学の奴らが嘘を信じたらどうするんだよ。だから俺が言った通りに」

——どうして、叩きのめさなかったんだよ！

言葉を遮られた。

「完璧な方に私の真実を認めていただけたのです。それ以上何も必要ございません」

杉本はくるりと回れ右をし、開いている戸から出て行った。二歩、歩いたところでいきなり足が留まっていた。

——関崎が、いたのか。

戸の向こうを眺めはしなかった。ちらっと覗き込んだ時に杉本が人形のような歩き方でもって関崎に近づこうとし果たせず、一礼した姿を目にはした。顔を覆って姿を消したところまでは見えていた。それがどうしたというのだろう。知ったことではない。

——完璧な奴の前では、杉本は杉本でなくなってしまうんだ。

椅子に腰掛けようとした。クーラーと外からの柔らかい空気とが交じり合い目眩を感じた。うまく座れず床に尻餅をついた。杉本が気にしていたのがなぜかよくわかる。灰色の綿ぼこりだらけだった。立ち上がれなかった。

——あんなの、杉本の判断じゃないだろう？

鞆を脇に置いた。膝を抱えた。膝のとがった部分に頭を落としこんだ。

——関崎も、佐賀さんも、ちっとも完璧じゃないだろ？

——けど、完璧な奴らが認めて、頭を下げてくれれば、それで間に合ってしまうくらい杉本は単純な人間だったのか？

杉本は佐賀に謝罪させることができると、舞い上がっているようだ。関崎が信じてくれていると思込みはにかんでいる。欲しくてならなかったものが手に入る、そのためならば自分がおねしょ事件の犯人として疑われることなんか些細なことなのだろう。これから先、ずっと疑われて軽蔑されたとしても、平気なのだろう。

それに、

——佐賀さんもまさか、本気で謝るとは思えない。

杉本の求めるような形で、適当に頭を下げるかもしれない。そうやって機嫌をとっておけば丸く収まることを佐賀はきっと見抜いているに違いない。杉本が惜しいのは、自分を認めて、勝者として扱ってもらえることだろう。佐賀がそんなことをするとはどう考えても思えない。もちろん杉本の機嫌は取るだろう。しかし、その目的は渋谷のしくじりを隠すためのことであり、杉本梨南をかつての親友として受け入れるということではないはずだ。

——そんなことにも気付いてないのか、杉本は！

目先の利益に目がくらんだ。そうとしか思えない。これからのあと半年以上、「修学旅行の夜

におねしょして、人に押し付けようとした犯人」としての色眼鏡を、本当に杉本はやり過ぎして  
いけるのだろうか。

——関崎だって、しょせんあいつは静内さん相手だろう。

その事実気付く日が遅れてくれればいいと今までは思っていた。しかし今は違う。早く現実  
を突きつけてやりたかった。「完璧」な男子は誰も、杉本本人に興味など持たないのだと、教え  
てやりたかった。藤沖が渋谷さんを守ろうとしたような行為は決して、ありえないのだと。ポニ  
ーテールの髪の毛を解いてやり、ブラウスのボタンが飛びそうな部分に手を触れたいとは、決し  
て思わないのだと。

頭の中がぐちゃぐちゃだ。腹の底に埋もれた太陽が熱く、再び上総を焼く。

デリカシーなく踏み込んできた足音に、上総は首だけ動かした。

「立村、終わったか。話し合いは、できたか」

大股に上総の前へ立ちはだかったのは関崎だった。ずっとヒアリングの特訓をしていたとは思  
えない。静内たちといちゃついていたのだろう。その姿を杉本にも見せつけることができたのだ  
ろうか。入る時に静内についての説明をあえて「関係ない人」などと言ってしまったが、今なら  
別の形で説明する。「時間の問題」と。

適当に頷くと、関崎はほっとした風に肩を揺らした。

「ならよかった」

「よくない」

——こいつ何考えてるんだよ。

繰り返し感じる関崎ののんびりぶり。さっき杉本を見つめた時に気の利いた言葉でも口にでき  
たのだろうか。できるわけない、とは思うが、どうだろう。

ぐっと喉が詰まってくる。咳き込みそうになる。声が低くなる。ひっかかる。

——何にも考えていないんだろうか。

これからどれだけしんどいことが続くか、杉本だってわかっているだろう。なのに、このとて  
つもなくポジティブなこの男ひとりのために、

「嘘をつかせて、真綿で首を締めるような真似して、これが話し合いなのかよ！」

誰を責めているでもない。決して関崎相手ではない。ただ、誰かにぶつけないとこみ上げてく  
るもので醜態さらしそうだった。予感がする。

気付いていない関崎は、やはり不思議そうに尋ねてきた。

「お前さっき、終わったと言っただろ？」

「不平等条約を呑まされただけだ」

「不平等条約とは日本とアメリカのあの条約か」

——こんな奴と杉本は、あんなことこんなことしても、平気だと思えるのか？

——渋谷さんと藤沖みたいに。

叫びたい。でもできない。声を殺すしかなかった。

「そんなこと違うのはわかっているだろう！ 関崎、お前はどうかんだ？」

確認してやりたかった。嘘か真か、本当に関崎乙彦は、杉本の味方であろうとしているのか。その証明をしてやりたい。言葉が溢れ出し、止まらない。

「お前だけは、杉本を信じてやってくれたか？ 俺が知っている情報はすべて両サイドから提供した。その情報を比べてみて、やはり、杉本の言い分が正しいと判断したか？」

即座に、関崎は首を振った。とつとつと、上総のペースに飲まれぬようにゆっくりと答えた。

「俺は、信じるもなにも、事情を理解できていない。だから、彼女が思っているように、彼女の真実を信じているわけではない」

——やはりそうだよな、やはり、杉本の幻なんだ。

ほんの少しだけ頬の筋肉が動きそう、次の瞬間すぐこわばった。

関崎はじっと、上総に熱く、伝えた。

「立村、お前は信じていると伝えたんだろう。それで十分じゃないか」

身体がびくっと跳ねたようだった。いつのまにか立ち上がっていた。

——伝えたけど、伝わらなかったんだ！ それが答えだ！

「十分なわけないだろう！」

綿ぼこりがスラックスの裾にまつわりついた。払う気などなかった。

——俺じゃ話にならないんだって、前からお前に言ってるだろ！

叫びたい、わめきたい。そこで身をもみながら泣きじゃくっていた渋谷のようにつっぱしたい。それができない、だから逃げる、それしかない。

あくまでも鈍感な関崎は、そっと上総の横顔を覗きこんだ。

「お前大丈夫か？」

「痛いだけだ」

すべてが痛い。頭からつま先までが熱く、破裂しそうだ。これ以上関崎と語っていると自分をコントロールできなくなりそうな予感がする。高校生にもなって赤んぼみたいに足をばたつかせて泣きじゃくるなんて、やらかしてしまいそうなほど全身に水分が詰まっている。風船を割った時のようにすべてが溢れ出しそうだった。

——家までは、見せるもんか。

杉本が「完璧」と信じる男の前でこれ以上情けない自分をさらけ出したくはない。

関崎はそれ以上上総に声をかけてこなかった。それだけは感謝した。

炎天下の羽毛めいた空気を自転車でかきわけ、帰路に着いたのは夕方過ぎだった。

玄関に飛び込み倒れ込む。

——まだ、冷たい。

靴を脱ぐだけでもまた汗が流れる。全身汗だく、というよりも水びたしといったほうが近い。這いつくばって部屋に向かい、もう一度起き上がってドアノブをひねった。締め切りの窓までたどり着くため立ち上がろうとして、足首からこける。二回転んでやっと開け放った。

夕暮れではない、まだまだ青い空が真上に広がる。

かすかにゆるゆるしたやさしい風が流れてくる。上総は空を見上げたままベッドによじ登った。制服はもちろん脱ぎ捨てたいところだが、シャツのボタンやネクタイを外すことすらしんどいのは何故なのか。だるすぎる。

——なんか、飲み物ほしいな。

飲み物なんて悠長なもんじゃない、氷を丸のままがりがりかじりたい。

なんとか台所までたどり着き、今度はグラスいっぱい氷を詰め込み、あとはひたすらほおばった。少し溶けたところを一気に噛み砕き飲み乾す。まもなくすぐに次の氷を放り込む。またかじる、飲み込む、ほおぶるの繰り返しで頭が痛くなる。それでもやめられない。氷皿は当然空になった。

——いくら冷たい氷噛んでも、ぜんぜん身体が冷えない。

目眩と頭痛と、頭だけやたらと熱い。

上総は居間のソファーにもたれ、しばらく目を閉じていた。考えなかった。

「上総、どうした」

揺り起こされたのはすでに部屋が藍色に染まった頃だった。

「誰？」

「おいおい寝ぼけてるのか」

夢も見ず、いつ眠ったのかも当然覚えていない。父が帰ってくる時間帯というのはだいたい午前様のことが多いのだが、今日は早かったらしい。部屋のシャンデリアが一気に部屋をまばゆくした。上総が頭を無理やりもたげて居間の掛け時計に目をやると、針は九時のところを差していた。

「夕飯は済んでる、お前はどうか」

「食べたくない」

簡単に答えた。本当に、いらぬ。

「いいかげん制服だけでも脱げ」

「すぐ寝る」

「風呂は」

「いい、明日で」

本当はシャワーを浴びてからだのべとべとぬるぬるを流したいところだが、頭の重さはそれ以上のものだった。身体が持ちそうにない。眠すぎる。

父はネクタイを外してソファに投げかけた。

「氷、もうないのか」

「食べた、悪いか」

父がいつもお茶に氷を三つばかり放り込み一気に飲みするのは習慣だと知っている。わかっていたけど食べざるを得なかった。だったらここは謝るべきところだろう。しかしそんなこと、考えたくもない。

「おい、食べたって、腹壊すぞ」

あきれた声で父はつぶやき、台所に向かった。ソファに横たわったまま水道の水が流れる音を聞いていた。たぶん氷皿に水を張り直したのだろう。こういった細かい家事の担当はいつもなら上総なのだが、とてもだがそんな気力などない。

「氷がないのは我慢しろよ」

グラスに水を汲み、テーブルの上に載せた。水道の水をそのまま汲んだほうが冷たいのは分かっている。母がいるころなら決して許されなかったろうが、父子家庭四年目の今ならば平気で飲み乾せる。口をつけた。ぬるかった。

「もっと冷たいのは」

「だから、言っただろう。氷がないんだ」

おだやかに父が言い放つ。

「お前が食ってしまったからだぞ」

「しょうがないだろ、暑いんだから」

身体のだるさと気味悪い汗のべたつきとがからまって、いらだってしまう。

「暑いたってな、氷そんなに食ってどうするんだ」

ビール瓶と自分用のグラスを携えて父はゆっくり、真向かいに腰掛けた。

紺色のポロシャツを捲り上げてまずは栓を抜いた。

「つまみはないな」

「そんなの知るかよ」

これもまた父子家庭となってから変わったことのひとつだ。もともとアルコールをあまりたしなまない父だったのだが、母が出て行ってからはこうやってちょびちょびとひとり晩酌を楽しむことが増えた。もっとも上総にそれは関係のないことだったので気にもしていなかったのだが。どんなものを食べてきたのか知らないが、父は楽しそうにコップへ口をつけ、

「やはり夏にはビールが一番だ」

ひとりごちた。

——喉が渴いた。

ぬるい水道水でもいい、とにかく水分がほしい。上総は身体を半ば起こして、一気に飲み乾した。当然グラスは空になる。向かいには父が微笑みながらビールを口に運び、上総を見つめて

いる。自分の息子を見ていて何、楽しいのだろうか。第一明日、期末試験を控えているくせにこうやってごろごろしている息子のぐうたらさに腹など立たないのだろうか。もちろん上総も勉強しなくてはならないことくらい承知しているけれども、身体が動かないのだからしょうがない。着替えたいのだが身体が重たすぎる。なによりも喉がからから、水、氷、冷たいものがとにかく欲しい。

目の前のビール瓶にはまだ半分以上残っている。水滴がたらたら落ちているのが横たわった上総の目にも見える。冷たそうだ。

「父さん」

「なんだ」

「その、ビール瓶、貸して」

「お前未成年だろう」

「飲むわけない、吐きたくないし」

背中を起こし、上総は手を伸ばした。父がまた呆れたように眺めている。

「どうしたいんだ」

「冷たそうだから」

自分でわけのわからないことを話しているという認識はある。あほらしいと父が一蹴してくれればもちろんそれでいいのだが、何故かわざわざ手元に持ってきたではないか。よくわからない人だ。受け取る自分も自分だと思う。

「いいかげん、部屋にひっこめ」

黙って頬に当てて冷やしてみる。だいぶ楽にはなったが、抱えているのがしんどい。

「お前、風邪引いてるんじゃないか」

「そんなことない」

「いつも夏に入るとお前ぶっ倒れるだろう」

「倒れたくて倒れてるんじゃない、明日試験だし」

思わずビール瓶に口をつけたくなる。さすがにひったくられた。

「上総、いいかげん今夜は寝ろ。身体壊したらお前、試験どころの騒ぎじゃないぞ」

残りのビールをグラスに注ぎ、父は一気に飲み乾した。

「ずいぶんとぬるいな」

結局だらだらしているうちに十時半過ぎとなり、試験勉強なんてできず、それでも無理やりシャワーだけは浴びた。いつもだったらさっさと部屋に籠るのだが、身体が重たくて動けなかったからしかたなく居間でごろついていただけのことだ。

「明日、熱が下がらなかつたら、学校休みなさい」

「試験すっぽかしてどうするんだよ」

休みたくたって休めないのに、父はまた脳天気なことを言う。

「追試があるだろう」

「追試になんかなつたら、順位から外れてしまうからいやだよ」

「そんなに試験が好きなのか？」

別に好きなわけではない。ただ、中学入学以来一度も奪われたことのない英語トップの座から陥落するのだけは避けた。理数科目はともかくとして、英語の試験だけは意地でも受けた。

「英語だけじゃなくてな、別の科目にも力入れたらどうなんだ」

のんびりした口調の父を部屋から追い払うと、上総はすぐに着替えて横たわった。

もう、何も考えなくなかった。いつもならば頭に張り付くであろういくつかの出来事も映像も、熱で蒸発してしまったかのようにだった。

こずえから視聴覚教室での話し合いを提案された段階で、すでに期末試験を捨てていた。とはいえ英語だけはトップを守りたかったので一通り目通しはしておきたかった。目が覚め、枕もとの大きな目覚まし時計を覗き込んだ瞬間、意識が途絶えた。すぐに引き戻されたのはその側にさっぱりしたお茶の葉の香りが漂っていたからだった。

——あれ、誰か、いるのか。

頭をもたげたいのだが、少しでも動かすときんと鳴り響くものがある。

肩から下がやたらと冷たくて、額から奥が熱せられたかのように熱い。

——起きなくちゃな。

もう一度身体を浮かそうとして、また時計の針を追う。

今度はしっかりと目に焼きついた。昨夜目覚めた時と同じ、九時のところに針が直角で留まっていた。

もう、とっくに試験は始まっている時刻である。

「上総、あんた何やってるの」

声ではっと気がついた。お茶の香りの正体は、やはりあの人だ。

袖のない黄色いワンピースに白いスカーフを折り目正しく折って巻いている。

「母さん、なんでいるの」

長い髪をくるくると真上で巻き上げているところみると、これから何かの会があるのだろう。それにしても服装が簡単すぎるのが気になる。いやなよりも、なぜ朝っぴらから母がいるのだろう。しかも、すでに登校時刻を過ぎているというのに起こそうとしない。上総もさっき時計を確認した段階で即、諦めたし恨み言を言うつもりはない。身体が動かないのだから、もうどうしようもない。

「昨日の夜よ、和也くんから電話が来て、上総が毎年恒例のあれだから面倒みてくれって頼まれたのよ。しょうがないじゃないの」

言いながら母は、小さなテーブルに湯気のたった飲み物をマグカップに注いだ。

「ほら、飲みなさい。漢方の薬。あんたの夏風邪はね、あったかいものを飲むのが一番なのよ。和也くんあきれてたわよ。あんたが取り付かれたかのように氷をばりばり食べてて、あやうくビールまで飲まれそうだったってねえ。何があったか知ったことじゃないけど、自分の体調くらい自分でコントロールするようになりなさいよ」

——こんな暑いのに、なぜ、熱いもの飲まなくちゃなんないんだ？

問い返したいが、気力が続かない。いきなり背中がぞくぞくしたかと思うと、全身から骨のがちがちいう音が聞こえそうなほどこわばった。母には気付かれたいくなかった。

「麻生先生には電話で今日休むからと伝えておいたから、とにかく寝てなさい」

「試験だけど」

「何馬鹿言ってるの。身体壊したら元も子もないでしょうに。麻生先生も了解してくれているわよ」

——俺のことを一切無視しているわけだしな。さぞクラスは平和なことだろうな。

一年A組、おそらく関崎も藤沖も、元気に試験問題に取り組んでいることだろう。一時間目は確か英語の試験だったはずだ。追試の場合順位には含まれないはずだから、これで今回科目別順位においてのトップ陥落は確定だ。

——俺のたったひとつのとりえもなくなるってわけか。

上総は母に背を向け壁を見つめた。

あの長い一日。そして一夜明け今。

ひとり、布団に蒸されながら身体を丸めている。

いつもだったらきっと考えていただろう。荒れていただろう。どうしようもなく泣き喚いていただろう。親相手とはいえ醜態をさらけ出さずにすんだのはひとえに熱のおかげだ。風邪ならば多少不機嫌でも不思議ではない。英語学年トップを明け渡す悔しさを紛らわしても変とは思われない。

「ほら、だいぶ冷めたから薬を早く飲みなさい」

珍しく放っておいてくれた母だが、さすがにしびれを切らしたのか上総を促した。

「苦いのは我慢しなさいよ。あんた、子どもの頃は砂糖が入ってないと飲めなかったけど、今なら平気でしょ。平気よね」

——砂糖なんて誰が入れるっていうんだ。

かなりむっとして、上総はもう一度寝返りを打った。意地でも全部飲んでやる。

脇で母がしてやったりとばかりに、マグカップを差し出している。

枕に背、腰を支えてもらいながら上半身だけ起こし、受け取った。やはり漢方薬は苦かった。もちろん、そのまま一気に飲み乾した。すぐにベットにもぐりこんだ。

「水が欲しい」

「はいはい」

また穏やかに母がマグカップに注ぐ。てっきり冷たい水と思っていたのだが、口をつけてみるとやはり生暖かい。

「もっと冷えたのないの」

「冷たすぎる水は身体に悪いってこと、あんたも覚えておきなさい」

「けど、喉が渴いたんだ」

さらに言い募ってみるが、あっさり無視された。

「上総、いいかげんあんたも赤ん坊から卒業しなさい」

「飲みたいものを要求してどこが悪いんだよ。病人なんだ」

「まあそうね。今回あんたは本当に風邪引いてるみたいね」

また生ぬるい水を注ぎながら母は呟いた。横顔を見たらやはりしっかり、頬の横に赤い頬紅をはたいた跡が残っていた。本格的化粧、ということはやはり、これから出かけるのだろう。さっさと出ていけばいいんだ。そうすればあとは死んだように寝ていられる。いらいらしないですむ。冷たい水も昨日の夜こしらえた氷も好きなだけ飲める、食べることができる。

「悪いけど今日は一日、うちにいるから覚悟しておきなさいよ。あんたが仮病使っているようだったら出かけるつもりできたけど、相当酷いようだし」

いつものとがった言い方を控えているようだった。何か母にも心境の変化があったのだろうか。少し自分でも戸惑っている。それこそ「上総、あんたが悪いのよ！ 風邪ひくなんてたるんでいる証拠じゃないの！ いいかげんあんたも自分に責任を持ちなさいって言ってるのわからないの！」などと罵倒されるのが大抵のことなのに、珍しい。

「いいよ、寝てれば直るから」

「直るわけじゃないの。病人かどうかは顔見れば一発よ。私があんたの仮病を見破れなかったことあったと思う？ その私があんたは具合悪いって断言してるのよ。ほら、黙って寝なさい。今りんご剥いてくるから待ってなさい」

——母さん、何か、あったのか？

上総が唾然としている間に、母は本当にりんごとフルーツナイフを持ってきて枕もとで剥き始めた。今までこういう風な行動をすることは、めったになかったはず。記憶になかった。

丸く、綺麗に、S字型の赤い皮を剥き終え、切り分けた一片をそのまま上総の口に押し込んだ。かじりとり、そのまま動物のように食べていた。

「やっぱりね」

溜息交じりの憂い顔もやはり、めったに見ないものだった。

「上総、食べながらでいいから、聞いてなさい」

「なんだよ」

冷たいりんごがさくさくして気持ちよかった。黙ってされるがままに噛んでいた。

「これから、あんたの手に余るようなことがあったら、たとえ真夜中でもいいから和也くんか私を頼りなさい。これは命令よ」

——この人、何か悪いもの食べたのか？

上総は口にほおばったりんごを飲み込むのも忘れ、ぽかんと母の顔を見上げていた。

だんだん身体が漢方薬の効果からか暖かくなってきた。同時にふと眠気に襲われそうになる。まさかとは思うが母の言葉は夢の中で語られているかのようだった。ありえない言葉だった。

椅子に腰掛けたまま枕もとに侍っている母の視線はそのまま、まっすぐ上総を見下ろしていた。

。

「あんた、小学校の修学旅行前日におねしょしちゃって、パニック起こして不参加になったこと覚えている？」

——何言い出すんだこの人。

よりによって昨日の今日においてだ。タイムリー過ぎる。身体を強張らせて身構えた。

「真夜中に泣きながら私のところに来て、『もし修学旅行中にやっちゃったらどうしよう』とか大嘘言ってたことあったわよね」

——大嘘？

もちろんその通りなのだが、気付かれていないはずだ。状況証拠なども念入りに用意して演技したわけだ。決してばれていないはず、なのだ。

母の口調はなだらかだった。

「さっき私も言ったでしょう。あんたが本当に具合悪いのか、それとも仮病使っているのかくらいは簡単に見通せるって。あの時もまさか、一度もそんな粗相しでかしたことないあんたが、なんで六年になっていきなりって思ったわよ。部屋の中も確認して、いきなり玉露の香りが漂ってきた時もね。なんでそんな見え見えの大嘘をつく必要があったのか、そこが私にはわからなかったのよ。でも、上総」

言葉を切り、ゆっくり確認してきた。

「あんたは、そういう形でしか、SOSを出せない子だったのよね」

上総は目を逸らして背中を向けた。

「あの時に、あんたが辛い思いしていることに気付くべきだったのよね。気付いたのは悪いけど、卒業式後」

背中がぴくっとする。母の言わんとすることから耳をふさぎたかった。しつこくりんごを噛みつぶけた。

「あんたがまさか、浜野くんに決闘を申し込むようなこと、考えているなんて思っていなかつたらね。さすがの私も、驚いたわよ」

——当たり前だろ、気付かれないようにしてたんだ。けどなんで気付いたんだよ！嘘だろ、嘘だろ、嘘だろ！

今になってなぜ、そんなことを言い放とうとするのだろうか。

理解できなかった。

倒れてる今だからこそ、止めを刺すつもりなのだろうか。

歯をかみ締めた。口の中が重くなる。

「もう二度と、あの時のような失敗をあんたにはさせたくないのよ。上総、わかるでしょう。あんたはいつも自分をひとりぼっちだと思い込んでいるようだけど、和也くんや私をはじめ、麻生先生、菱本先生、狩野先生をはじめとした先生たちもみんな、あんたのことを気にしている。いつも嘘ばかり言って自分をごまかして、ひとりで自分を守ろうとしているあんたのことがみな、心配でなんないのよ。そして最後には脱走したりわけのわからないこと口走ったりしているあ

んたのことが、いとおしくてならないのよ。上総、あんたには小さな親切余計なお世話に映るかもしれない。それは仕方ないことだけど、もし何かに追い詰められた時にはまず、私たちが思い出してほしい。それだけは忘れないで」

——やはり母さん、何か変なキノコ食べたんだ。

上総はゆっくりと口の中のりんごを飲み込んだ。聞き流しておけばいい。

「わかった」

その一言だけを告げた。

「それより、りんご、もう少し食べたい」

薬の効果か、眠気とともに空腹感も湧いてきた。上総が身を起こした時、机の上に広げられたままの手帳が放置されていることに、初めて気が付いた。

——あれ、あの手帳、まさか。

引き出しにしまい込んでおいたはずだ。すべてドイツ語で綴っているあのノート、万が一親に見られても大丈夫なはず。まさかドイツ語をいくらなんでもあの母が読めるとは思えない。心の奥底を綴った日記、どうしようもないやりきれなさや本心を綴ったノート、でも決して誰にも読まれない……ドイツ語が堪能な人を除けば……はずだ。

視線の先に何があるのか気がついたのか、母は溜息をわざとらしくついた。

「あのねえ、上総。どうしてあんた、ノートをああ開きっぱなしにしとくわけ」

「あ、あれ、ドイツ語の勉強用ノートだから」

適当に言いつくろったつもりだった。

「ばかね、上総。私も和也くんも、大学時代第二外国語がドイツ語だったこと、知らないでしよう」

「第二外国語？」

言われた意味がすぐに理解できず戸惑った。その空白を縫うように母の返事が返ってきた。

「ふたりとも、ドイツ語すらすら読めるのよ。私もそうだけど、和也くんもね。あんたが必死に隠していることの殆どはみな、私たちも知っているってことをもう少し意識しなさい」

「まさか、母さん、あんた日記、読んだのかよ！」

広げっぱなしにしていた以上、何も言い返せなかった。

抗議するだけの力も出なかった。

——あのノートを読まれていたのかよ！ 最低だ！ プライバシーの保護って観点ないのかよあの人には！

一瞬だけでも親らしい暖かさを感じて、胸が詰まった自分を上総は恥じた。冗談じゃない、やっぱりわが母時辻沙名子は、筋金入りの悪党だ。誰がそんな奴、信じるものか。追い詰められたって誰が、あんな大人を信用するものか！

「少し寝てから、言いたいことあったら言いなさいよ。私はいつでも、受けて立つわ。今夜は泊まっていくから、抗議したいならいつでもどうぞ」

やはり、今までとは違う。母は余裕しゃくしゃくの態度で  
上総に微笑んだ。

初日の試験を休むはめになったのはやはりショックでふてくされていた上総だが、二日目ともなるともう開き直るしかない心境で横たわっていた。

熱も初日の三十九度近くから、三十七度にまでなんとか下がった。

「あなたの風邪は移るもんじゃないからね」

——別に帰ったっていいのに。

泊まっていた母が、今度は熱いおかゆを用意して枕もとに置いてくれた。

正直、もう少し喉越しのよいもの……たとえばそうめんとかゼリーとか……を所望したいところだが母には通じない。

「上総、早く身体元通りにしてもらわないと、来月のゆかたざらいの時に困るのよ。男手が足りないんだから」

——結局人足かよ。

だいぶおなかもへってきたし、冷ましながら食べればそれなりに美味しい。たぶん冷凍庫に残っていたシーフードミックスを混ぜてこしらえたものだろう。えびやほたてが舌に馴染んで甘い。

「まだ、残ってる？」

「ああ、おかわりね」

やはり母の態度は少しやわらか過ぎた。おかゆのように。

さらに山盛りで茶碗に盛られた、シーフードおかゆを上総は一気に平らげた。

「明日は学校行くから、もう来なくていいよ」

「あなたに言われなくても、明日は仕事なの」

枕に頭を乗せ、天井を見あげたまま上総は尋ねた。

「なんの仕事してるの」

「ちょっと、いろいろあるのよ」

珍しく母は言葉を濁した。

「踊りの関係？」

「まあね」

今日も袖のない鶯色のワンピースだった。髪の毛はやはりひとつにまとめて背中に流している。爪は透明のマニキュアのみ。それでもすぐに仕事を始められる格好ではいるようだ。

「たいしたことじゃないんだけど、ちょっと来月大きな会の手伝いで青湊を離れるのよ」

——ということは夏休み、母さんと顔を合わせなくてよい。

ほっとするのもつかの間、即座に母は繋いで言う。

「できたらあなたにも、手伝いたのみたいのよね。賃金はむわよ」

「悪いけど断る」

「いい小遣い稼ぎになると思うわよ」

——胃に穴があくのはいやだよ。

罵倒しあいで、いつもなら母を宥めてくれる父もいないとなったら。

母は無理じいする様子もなく、水さしと上総の食べ終わった食器をおぼんに載せ、部屋を出た。やはりおかゆ状態としか、見えなかった。

試験科目は初日が五教科、その後残りの教科……音楽や保健体育……を二日目に行う形式となっている。英語科の場合はさらに英会話とヒアリングを含めた試験が待ち構えているので普通科の生徒と異なり拘束時間が長い。英語科の生徒たちのみこの日は弁当持参だ。

——と、なると、もうそろそろ終わったころかな。

二度寝してもう一度目を覚ますと、巨大目覚まし時計は十二時五分前を指していた。

だいぶ熱がひいたとはいえ、やはり頭はそれなりに痛い。寝すぎたせいかもしれない。たぶんこの調子で試験を受けても全教科……下手したら英語も……追試間違いなしだし、それなら休んで正解だったのだ。そう思うことにしていた。

——今回の試験は誰がトップだろう？ やはり轟さんかな。

特待生こそ諸般の事情で外されてしまったとはいえ、やはり頭脳抜群の轟琴音はそれなりにがんばることだろう。上総からしたらやはり、たかが古本を拾って売る程度のことでヒステリックに騒ぐ意味がわからない。天羽たちが轟を懸命にかばいたがるのもよくわかる。彼女は自分で道を切り拓こうとしているだけ。一方的な正義で物事を計るのには疑問符が付く。

——さすがに今年一年学年トップを取ったら、特待生、取らせないわけにいかないだろうな。

たとえ正義感の強い輩に邪魔をされたとしても、そのあたりは堂々と切り抜けていくであろう、そんな気がした。

——それにしてもあの場で仕切ったのがもし、轟さんだったらな。

二日前の壮絶なぶつかり合いとその結末に思いを馳せ、上総は枕もとの水さしからコップに注ぎ、一気に飲んだ。やはり水はぬるかった。窓から指す暑苦しい光りでぬるんでしまったようだった。

——もし、あの場で轟さんが行司だったらどちらに軍配を挙げただろう。

いくら同情を乞うような言動を渋谷名美子がしたとしても、きっと轟ならば動じなかつただろう。公平にすべてを処理してくれたのではないかと、思わざるを得ない。また杉本も、渋谷を許すなどと血迷ったことなど言わなかったのではないだろうか。

こずえが悪いとは思わないが、まず先に結論ありき、でもっていかれた感はある。

藤沖の立場を鑑みた結果とはいえ、やはり上総には納得いかない。当事者の杉本が決断したのだから、上総も受け入れなくてはならないのだが、やはりなんというか、

——あのふたりにしてやられた。

その心持ちは消えない。

——きっと古川さんは、最初から杉本の単純でおひとよしなところを見抜いて、そこを刺激するような展開で持ってったんじゃないか。藤沖がいきなり霧島さんのことを語り出したり、渋谷さんが犠牲者だとかわけのわからないことを言い出したのも、それは杉本の気持ちを動揺させるためなんだろうし。杉本は一方的に罵倒されれば刃向かうが、同情を乞われると弱いんだ。そ

れに、佐賀さんの。

そうだった。佐賀はるみ。最大の弱み。

——佐賀さんに謝ってもらって、溜飲を下げただけだったんだ。

杉本梨南にとって、何よりも欲しいもの。

それを手に入れるためならば、多少の傷などものともせず。

そんなおめでたい杉本の性格を逆手に取った、この結末。

——本当に、それでいいのかよ！

それだけではない。

——俺が最初から信じてないって、言っていないだろう？ 俺、なんか間違っただこと、言ったか？ そりゃもちろん、俺は現場にいない以上百パーセント信じることはできないとか言ったけど、それは当たり前のことだろう？ それ以上に事実がどうであっても味方だって言ったこと、杉本、聞いてなかったのか？

良かれと思い最初に伝えたことが、どうやら杉本には違った形で伝わっていたようだった。

——最初から嘘でもすべてお前を信じる、って言ったほうがよかったのか？ けど、それは、無理だろ？ 嘘じゃだめだろ。だから、ああ言ったのになんでだよ。

また熱が上がりがうさそう。ぬるい水でもよい。全部飲み干した。

日記のノートはすぐに机の奥へ隠し鍵をかけた。人の日記を盗み読みするとは最低の親だが、予想できなかったわけではない。だからドイツ語で綴ったわけなのだが、全くもって甘かったとしか言い様がない。

——次回からはフランス語を勉強して書くか。それともアラビア語か。

やけっぱちで思う

どちらにしても、明日以降の英語科へ向かう足どりが重くなるのは確かだろう。

すっかり抜け落ちた数学の公式、化学の元素記号、世界史のローマ帝国建国前後、などなど拾い集める気力もない。

上総はそのまま横たわった。クーラーをかけて寝るか、窓を開け放したままにするか迷ったが、どうしてもかび臭くなりがちなので少々暑さを堪えることにした。

——それにしても、藤沖はどんな顔して、したんだろう。

熱にうなされた夢の中で、時折ちらつく記憶だった。なぜか先日の視聴覚準備室での出来事を巻戻すわけではなくて、藤沖と渋谷がふたりきりでいったい何を……という妄想のようなものだった。もちろんリアルに観るわけではなく、肌をくっつけあう雰囲気のみで目が覚めるのだが、全身が汗びっしょりになり眠れなくなる。

——信じられないが、事実なんだよな。

上総の知る中で、おそらく女子とはそう気軽に付き合う性格ではないと思っていた藤沖が、よりによって後輩とそういう関係を結んでいたとは、今だに信じられなかった。むしろ上総や杉本梨南を言いくるめるためにそういった芝居を打っただけと判断した方が自然にも思える。そう割り切って受け止めればよかったのに、なぜ動揺してしまったのだろうか？ 思えばその事実を聞いた瞬間、上総の中でバランスが崩れてしまったような気がする。

——俺もなぜ、あんなこと聞いたくらいで自制心を保てなくなるか、だよな。

渋谷の口から謝罪以外の言葉を引き出すことさえできれば、完璧に杉本は勝利できただろうに。どんなに杉本が満足したところでこれからの半年間は「修学旅行四日目夜におねしょしてしまった杉本さん」のレッテルを貼られるはめになる。それをはがそうとしても、言い訳も証明もできないのならば、もう無理だ。

自転車の軋む音が家近くできりきりと聞こえた。

まだ、夕刊が届く時間帯でもないのに。すぐにチャイムが鳴った。誰かが訪ねて来たのだろうか。上総は横になりながら、目を閉じた。寝ているふりをしておくに限る。

玄関口でなにやら受け答えする母の気配を、ドア越しに感じた。

「あらいらっしやい。ちょっと待っててね」

どうやら上総の関係らしい。親しげな口調で話し掛けているところを察するに、おそらく青大附高の誰ぞが直接見舞いに来たのではと想像する。自分のパジャマがかなりよれよれで汗をかいていることに気がつき焦る。二日目だし、夏の盛りだし、いくら病人とはいえこのままで人には会えないだろう。誰か、にもよる。

——まさか関崎と古川さんなんて言わないだろうな。

可能性はある。

——天羽と轟さんと難波なんて組み合わせかな。

まだこちらの方が気も楽だ。

——あとは……。

「上総、起きてる？」

一応ノックをし、母が入ってきた。腕に畳んだ浴衣、片手には六角形に畳んだ兵児帯を携えている。浴衣自体は白地に紺の地味目幾何学模様が施されているもので、おそらくだが日舞流派のおそろい用だろう。一言で片付けるならば、旅館か病院で用いられるたぐいのもの。

「女物で悪いけどあんた、これに着替えなさい。そんなだらしない格好だと人前に出られないでしょう」

「誰か来たの？」

母の口許にかすかな笑みが浮かんだ。目がやたらとぎらついているのは気のせいだろうか。身構える。こういう時の母は、何かを企んでいるか見抜いて攻撃してくるかのどちらかだ。

「羽飛くんと美里ちゃんだけど」

なぜ、美里に対してだけ「ちゃん」付けするのかわからない。普通、苗字で呼ぶものじゃないか。つっこみたいが、何故か言葉を飲み込んでしまう。ベッドに浴衣と兵児帯を投げて渡された。

「少し居間でジュース飲んでもらってからあんたの部屋に連れてくるから、早く脱ぎなさいよ。あ、それと、羽飛くんだけよ。美里ちゃんは私がこれから『聖少女』に連れて行って、抹茶ケーキセットをご馳走するから、そのつもりでいなさいよ」

「え？」

言われた意味がわからない。現段階で貴史と美里がふたり、玄関でお見舞いに来てくれたというのは理解した。たぶんあのふたりなら、どちらも上総の家に来たことがあるから不思議ではない。しかしなぜ、美里だけ母が連れ出さねばならないのか。

「なんでそんな面倒なことするんだよ」

「あんなねえ、自分の部屋にエロ本何冊隠してるの！」

いきなり甲高い声で言い放たれた。窓を開けっ放しにしていたことを後悔した。たぶん、玄関のふたりには……主に美里……聞こえていないと信じたい。クーラーにすればよかった。

「失礼だな、親でも侮辱罪にあたると思うけど」

「隠すならもっと賢くやりなさいよ。なんで参考書のカバーやら『グレート・ギャツビー』の函の中やら、そんな一発ではれるようなところに『キャリアOLの危険な夜』とかいったものつこんでるのよ。それも一冊二冊じゃないでしょうが。全く、そんな野獣めいた部屋にね、お年頃の可愛い女の子を入れるわけにはいかないのよ！」

——この人、親として認めたくない……！

やはり、本性見たりのこの瞬間。

日記を盗み見されていた段階で気付くべきだった。

まさか、勝手に本棚までチェックを入れられているとは思ってもみなかった。

熱なのかそれとも滾る血なのか区別がつかぬ。かろうじて発した。

「親子といっても他人だろ！ 人のプライバシーを侵害する権利ないよな！」

「その言葉、自分でしっかり生活費を稼ぐことができるようになってから言いなさい、上総。あんたはまだ親の保護下にあるひよわな未成年なのよ、そのくらいわかるわよね」

「基本的人権は守られないってわけかよ！」

「権利ばかり主張するんじゃないの、あんたには親に従う義務がまだあるのよ。この家に住んでいる限りあんたはまだ、親の言うことに耳を傾ける義務があるし、もっというならあんたが何を考えているか馬鹿なことをしでかさないか目を光らせる義務と権利が私たち親にもあるの」

——酷い言い草だ。

こぶしを思いっきり握り締めたまま、身体を起こして上総は布団をひつつかんだ。

「だからって、人の本棚を弄ることはないだろう？ 本棚は自分の脳みそだって父さんだっていつも話してたじゃないかよ！」

「まあねえ、一応は脳みそかもしれないけれどもねえ、ただ真っ赤なスーツを来た派手なお姉さんの映像は入ってないはずじゃないの、あんたと違って和也くんの場合は」

「悪いけどその本は俺の趣味じゃない。母さん世代には興味なんか無いよ」

きっぱり言い放ってやった。

「あれ、俺の後輩に頼まれて預かってるだけだから。趣味悪いよな」

思いっきり嫌味を混ぜてやった。

例のグラビア写真集をもし見つけたとしたら、あれは霧島の趣味で選んだものであって上総の好みでないとはっきり伝える義務がある。母の眼をじっとにらみ据え、ベッドに座ったままぶつけてやる。母の表情が眼からどう変わっていくかを観察すると、

「上総、あんたねえ、ほんとおめでたい男ねえ」

「何？」

「勝手に決め付けて、言い訳するのは見苦しいわよ」

「誤解は早めに解く方がいいに決まってる」

「悪いけどなんで、私世代に興味ないってわざわざ言い切る必要あるのよ。あんたのお年頃ならば、美里ちゃんのような可愛い子がタイプでしょうにねえ。年増に興味ないってそう断言してどつぼに嵌るって勘違いもいいたこじゃないの」

あっけにとられて黙る上総に、母はベッドの浴衣を指差し、背を向けつつ告げた。

「五分後に羽飛くんを連れてくるから急いで着替えなさい、まったく口ばかり達者になっちゃて、頭はまだまだ子どものくせにねえ」

——勝手に決めるなよ！

一時だけでも「様子が変わったのか？」と不安を覚えた自分を笑ってやりたい。やはりこの人は、母親で烈女であることに変わりない。母がいなくなったところで大急ぎ、パジャマから浴衣に着替えることにした。着方は知っているが、襟から広げてみて愕然とした。

——これって嫌味かよ。あの人っていったい。

浴衣の袖が腰近くまで長いままだった。

ひとえにこれは、女ものをそのまま持ってきたに違いない。

——仮にも自分の息子だぞ。舞台上で女踊りやるわけじゃないのに、正気かよ。

それでもぱりりとした糊の利いた浴衣は、肌にひんやりと気持ちよく馴染んだ。襟をしっかりと首筋にくっつけ、前をかきあわせ、いそいで兵児帯を締めた。さすがに丈は揚げをしなくても問題なく着られた。こんな幼稚園女兒のお祭り格好でいるのなら、ベッドに入ったままの方がやはり、よさそうだ。

着替え終えてウエットティッシュで額と首筋をふき取り待っていた。丁寧なノックの後で母に連れられて貴史が入ってきたのと同時に立ち上がった。

「お前、なにその格好」

あっけにとられた後、大爆笑するのは止めてほしい。せっかく労をねぎらおうと思ったのになんなんだこの態度は。ベッドの端に座り直すと同時に母がリンゴとサイダーを一本、置いて行った。

「羽飛くんもいつもありがとう。このボケ息子がまた馬鹿なこと口走るかもしれないけど、もう熱もだいぶ下がっているから遠慮なく喝を入れてちょうだい。私はこれから美里ちゃんと女の子同士のお茶会してくるわ」

「え、あの、どこへ」

戸惑うのも無理はない。貴史がどもりながら母に確認する。

「喫茶店だよ」

上総が口を挟む。

「あ、でもあいつも顔出したがってるし」

貴史なりに気遣いしてくれているのか言い返そうとするのだが、あの時辻沙名子に太刀打ちできるわけもなく、あっさりかわされた。

「男子は男子同士で語らってもらった方がいいのよ。一時間くらい家空けるからどうぞゆっくりね。それと上総、飲み物足りないようなら、地下室のジュース自分で持ってきなさいよ」  
——いったい何考えてるんだか。

ここで母に逆らっても碌なことはない。むしろ美里にとっても和風喫茶「聖少女」のあんみつセットを御馳走してもらった方が嬉しいのかもしれない。目配せしてまずは貴史を黙らせ、上総はサイダーの栓を抜いた。冷えたままの瓶で手が少し濡れた。

「しかしなんで美里だけ、なあ？」

玄関の戸が閉まる音を聞きつつ、貴史は上総の机から椅子をひっぱりだし、ベッドの脇まで引きずってきて座った。ちょうど日のあたる位置。汗びっしょりかいてきたんだろう。制服のシャツはよれよれだった。二つボタンを外している。

「誰もいないんだからさ、脱げば」

「じゃあお言葉に甘えて」

貴史は緑のランニング一枚となり、一気にサイダーを飲み乾した。

「今日は部活、休みなのか？」

「まあ、そんなとこだ」

バスケ部に限らず、運動部の練習は試験が終わればすぐ行われるはずなのだが。あえて細かいことは問わず、上総は最初の質問に答えた。

「野郎ふたりが待ち構えている部屋の中に女子ひとり置いとくのは危険なんだってさ、あの人の持論」

「はあ、俺たちって狼扱いされてるってことかよ」

「そう、何考えてるんだか」

「もっともだ、俺も美里には立たねえよ」

——今、なんと言った？

全く狙ったわけでもない、ただ自然にするっと出てきた貴史の言葉。

息が止まる。

こういう話、別に初めてというわけでもないのに。

上総の沈黙に、貴史も最初目を丸くしていたが、すぐに頷いた。

「ああ、そっか。お前の立場ならな、まあそう思われてもじゃあねえか」

「別に、俺もそんなつもりないよ。誤解されて不愉快なのは俺も同じだ」

「そういうんじゃないで、やっぱしさ、お前は美里のこと、それなりに意識したこともあったろ。まあ、俺くらいになればガキの頃からああいう付き合いだからな、乗りが違うだがない」

思い当たる節がないわけではない。だから答えられない。中学時代まがりなりにも「両思いのお付き合い」を美里と経験した上総にとって、結末がどうであれそれなりの気持ちを持って余したことは確かにある。ただそれが、美里にとって欲しい感情だったのかどうかは別だろう。修学旅

行四日目夜、美里とふたりきりで過ごした時、自制の掛け金を外さぬように膝を抱えてこらえた記憶は今も生々しく残っている。もちろん、その高まった気持ちはすでに手放していると言い切りたいのだけれども。

「でもなんで、わざわざ見舞ってくれたんだ？」

「当たり前だろ、長い付き合い」

青大附属生たちはこうやって、風邪をひいて休んだりなんなりするとすぐ声を掛け合って見舞う習慣があった。ただ同じクラスの連中が殆どであって、他クラスの場合は遠慮してしまうことが多い。英語科のクラスメートが来てくれるとは思っていなかったのだが、貴史と美里の組み合わせというのもちよっとばかり予想外だった。

貴史は膝に手を置いて、大きく溜息をついた。

「しかしあちいなあ。なあ立村、今度プール行こうぜ」

「泳ぐのは苦手だからいい、それより」

氷のまだ溶けていないサイダーをなめながら上総は尋ねた。

「東堂の件も含めて、結局清坂氏うまくいってるのかな、B組で」

「ああ、やっぱし聞かれると思った」

膝を二回、ぱりぱり叩き、貴史はにやりと笑った。

「だから今日、お前の顔でも見て気晴らしするつもりだったんだがなあ」

——俺の顔が気晴らしになるんだろうか？

疑問はあるが、せっかく話してくれるのなら聞いておきたかった。

「東堂が美里を嫌っちゃったのはもうどうだっていいんだがなあ」

声を低くした。誰に聞かれているというわけでもないのだが。

「それよか、女子同士のなんたらかんたらがまあいろいろあるみたいだぞ。相変わらずな」

——確か静内さんとのトラブルがあるとかないとか。

関崎の彼女候補ナンバーワンと噂される、静内菜種のことだろう。

髪を束ねた清楚な感じの、あまり目立たない女子に思えた。そんな癖のあるタイプには思えない。

「美里曰く、『何にも言わないのに、静内さんの周りがみな女子の仲間たちで固められてる。磁石みたい』だと。露骨な嫌がらせをするわけじゃあないんだが、美里がどうしても悪目立ちしちゃうんだろうな。小学校と同じパターンだったの」

「そうなのか」

「他の連中からも、美里に近づくと碌なことねえよ、って感じで見られちまってるようだな。とにかく面倒なことになっちまってるらしい」

だいたいそんなところだろうとは思っていた。外、A組から見てもそう感じるのだから、しょっちゅうしゃべりあっている貴史ならばなおのことだろう。

「立村、正直どう思う？」

いきなり問われて上総も戸惑った。どう思う、と言われてすぐに答えられるわけではない。答

えはあってもそれを貴史に言うことはできない。

——清坂氏は関崎に夢中だということを、羽飛、気付いているんだろうか。

読めない答え。口に出せない問い。

美里のことを誰よりも理解しているはずの貴史が、揺らぐ思いに気付かないわけがない。そう断言したくなる一方で、この脳天気な言動たるや、なんだろう？ 美里のことを心配しているということは理解できるのだが、その理由を探ろうとしない。勘付かない。

——俺から見てもあからさまなあの態度を、どうして羽飛は気付こうとしないんだろう。

このまま黙って見ていたら、明らかに美里は手痛い失恋を被ることになるだろう。

それも、クラスの天敵たる静内といちゃつかれる可能性だってある。

ただでさえクラスから孤立寸前の美里にとって、痛手にならないわけがない。

——それに、清坂氏は見た目よりもずっと弱いかもしれない。

美里の傷口は、思ったよりも深いように思えた。かつて自分の側であだこうだと騒ぎ立てていた頃の美里とは違う。言葉を控えるようなそぶりが見える。

——仮にそうなったとして、羽飛はどうするつもりなんだろう。

幼なじみを心配しているだけのようにも見える。いいかげんアイドル鈴蘭優ファンはやめて現実目に向けた方がいいのではとも思う。誰もが本来ならばベストカップルとして認めるべきふたりなのだから、素直に一緒にいればいいのにと感じる。

「あのさ、羽飛」

質問とは食い違う答えを返してみた。

「今、誰かと付き合う気、あるのか」

あっけに取られた顔でしばらくひょっとこ状態に変化した貴史、その表情が笑えた。思わず吹き出しそうになると、思いっきりはたかれた。

「お前なんも聞いてなかったろ！」

「いや、なんとなく。相変わらず鈴蘭優を追いかけるよりも、そろそろ生身の」

「悪いが俺は生の女子に幻想なんぞ抱いてねえよ」

ひとりで大笑いしだした。椅子をくるくる回して足をぶらつかせた。

「やんや、目が回るぞ今の発言。立村、お前からそんな質問食らうとはなあ」

「真面目に聞いたんだけど」

「お前も知ってるだろ？ 俺と美里がガキの頃からそういう目で見られてたってこと。それを否定するのにすげえエネルギー使ってたってこともな」

確かに。事実がそこにあるのだから仕方がないといえば、仕方がないのだが。

「悪いけどな、もしここでだ。美里がベッドの上で水着姿で寝ころがってたとしても、俺はびた一文手をつける気はねえよ。だって、くらくらこねえもん」

——本当か？

自然の衝動を否定するその言葉には、上総から疑問符がつく。

「やっぱりなあ、お付き合いするんだったらそれなりに、こうやってだ」

いきなり貴史が押し倒してきた。病み上がりの身体にはやめてほしい。第一、そちらの趣味はない。貴史は笑いながら上総の肩をぽんぽん叩いた。

「こうこなくちゃ、嘘だろ？ 悪いが俺もそっち趣味はないけど、お前どうなの。本条先輩ともしや一線越えたとか」

思い切り膝で急所を狙ったがはずれた。ひょいと逃げられた。

「言っていることと悪いこと、あるだろ？」

「悪い悪い。俺だって好みはちゃんとあるんだってこと」

上総は身を起こしてはだけた裾を直しながら溜息を吐いた。

——どちらにしても、羽飛が清坂氏と友情以上の付き合いを考えているわけじゃないってことだな。

もし貴史が美里のことをそれなりに想っているのなら話は簡単だ。

あっさり美里をくどいてもらえばいい。

しかしその気持ちがさらさらなければしかたない。友情でもって支えるしかない。だが上総からすると、やはり貴史の気持ちがまだ読みきれない。

「じゃ、もしも清坂氏が別の奴と付き合ったらどうする？」

こぼしそうなグラスをテーブルに置いた。

「お前とより戻すんでなくてか」

上総は首を振った。まず、もう、ありえないことだ。

「たとえば誰だよ」

「誰って、わからないけど」

関崎の名は出さなかった。どうやら貴史、本当に見当つかないらしい。

「あいつの面倒見られる奴ってそういねえだろ」

「面倒みるかどうかは別として、もしそういう相手がいたとしたら、もし清坂氏がひとりになってしまったとしても、たぶんめげないですむんじゃないかって気はするんだ」

「じゃあ立村、お前がそれ適任じゃあ」

「ないよ」

今度はきっぱり否定した。はっきり言っておいた方が話、ごたつかなくてすむ。

「たぶん清坂氏ももう、望んでないよ。俺とは中学三年間で懲りたる」

無言で貴史は上総を見つめた。

「本当だよ」

「まあいっか。でもな、俺からすると美里ってそんな誰が好き彼が好きって女々しいことでふらふらする女子じゃねえと思うんだがなあ」

——羽飛、お前、やはり気付いてないんだな。

近くにすぎるとたぶん、感じないのだろう。

上総は言葉を飲みこんだままでいようと決めた。

貴史が話にならないとすれば、上総はただ見守るしかない。

関崎に玉砕覚悟でぶつかっていき、こなごなに碎け散り、B組で孤独となるであろう美里を。たぶん、美里は上総と違い、孤独に慣れていない。杉本のようにすべての連中から嫌われる経験をそうしていない。誰かが必ず味方でいてくれると信じている。

——羽飛だけでも味方ならな。

今の上総が杉本の側にいる距離よりも、貴史と美里の間は想像以上に広いように思えた。

男子同士で昼間話すことといえば、最近のテレビ・ラジオの音楽番組情報かスポーツ関連のことばかり。上総と貴史もその例に洩れていなかった。といっても上総のその方向への関心は偏っているのだから、まずは一方的に貴史の話聞くのみとなる。

「お前なあ、最近、英語の歌詞翻訳とかしてやんねえの」

「あまりないな」

「中学の時は、まず立村にLP渡して、その歌詞全部訳してもらったのが俺らD組男子のパターンだったんだけどなあ。ま、英語科ならそんなことしねえでもいいか」

「そういうこと」

一部の男子連中からは「自動翻訳機」とあだ名されていた上総も、英語科に進学してからはずっとその稼業から足を洗っている。貴史の言う通り、みな英語にはそれなりの自信を持っているクラスメートが揃っているし、頼み頼まれるような気軽さを感じない。となれば得意技を封印せざるを得ない。

「へえ、もったいねえな」

「もっとも天羽とか難波とか、あのあたりからは頼まれることもあるよ」

元評議委員仲間たちからのお声がかかりはある。上総は頷いた。浴衣の襟が少し緩んでいるが、汗を少しかいていたこともありそのままにしておいた。貴史はベッドの上でこしかけ、とうとうランニング一枚でごろっと横たわった。

「俺もあんまり人のこと言えねえけどな」

「なんだよ」

残りのサイダーを瓶ごと勧めた。貴史が受け取るため身を起こした。ラッパ飲みのポーズで空にした。

「ほんっとに立村、お前委員会に戻る気、ねえの？」

「ない」

何度も同じ返事をしている。きっぱり、すっぱり答えた。

「部活にも入る気、ねえの」

「全くないよ」

「じゃあ、何してるわけ」

「何も」

言いかけ、首を左右に動かしてみた。肩こりのポーズとも言う。

「担任にもなんも言われねえのか」

「全く。ありがたいことさ」

言い放つ。担任の麻生先生からは見事な無視をかまされている。いつかしびれを切らして上総が謝りにくるであろうとの読みかもしれないが、そんなのとっくに見抜いている姑息な技だ。三年間無視には無視でやりかえすのが、上総のしたたかな報復のつもりだ。

「お前がうっとおしいと思うの承知で言うけどな」

「話だけは聞くよ。聞き流すかもしれないけど」

今の上総は、そのあたりをうまく流すコツを身に付けていた。いや、その「つもり」だった。かつての自分が中学時代の担任でかつ天敵の菱本先生、および今隣にいる貴史や美里にいらいらさせられていた頃とは違い、お互いの空気をうまく切り離す技を習得したと思っている。

「大人だなあ」

茶化す貴史の言葉を、それこそざる状態にして上総は聴いた。

「菱本先生の家にな、先月の終わり、美里連れて行ったんだよ。子ども、すっごくでっかくなってた」

「ああ、カンガルーのポケットのだな」

幕切れの後味の悪さを思い出しつつ、さらりと答えることに勤めた。

「で、まあ、夏休みだし三年D組のクラス会やるかってことになってな」

「いいんじゃないか。俺は出る気ないけど」

「お前の答えはわかってる。それよか、菱本先生が言うにはな」

貴史も承知してくれたのありがたい。話の続きを聞いた。

「できるだけ早い段階で、将来の目標を決めた方がいいってありがたーい、お説教を食らったってわけ」

「そうか」

「そうそう流すなよ。で、美里はどうかわからんけど、俺なりに考えてまずおっきな目標を掲げたわけ」

ずいぶん「～わけ」と続ける貴史の口調。どことなく、古川こずえの口癖に似ていた。

「鈴蘭優の追っかけを極めるわけじゃなくてか」

まぜっかえすと思いきりはたかれた。

「あのな、お前、俺をまるっきりあほと思ってるだろうが！」

「悪い、悪い」

貴史に向き直るため、ベッドの上で正座した。

「その、大きな目標とは？」

どうせたいしたことではないだろう。中学時代からそれなりの夢を抱いていた奴らはもちろんいたし、そのうちの数人は目標に向かうべく進路をそれぞれ選んでいった。奈良岡や水口のように医学を志し青大附属から飛び出したものもいるし、金沢のように美術の道をまっすぐ突き進む奴もいる。花森なつめのように三味線修行のため転校した女子もいる。

ただ、今の段階で具体的な職業名を出せと言われても、正直、困る。まずは大学に進学してから考えても遅くないのではないだろうか。仮に上総自身、自分の得意分野で職業を選べと問われても、どう返事をしたらいいかわからない。語学が得意だからといって外交官だとか通訳だとか翻訳者とかそのあたりしか思い浮かばない現在、どう答えたらいいのだろう。

——そんなわけのわからないことを無理やり答えさせようとするあの担任、何考えてるんだろう。

方向違いかもしれないが、むしろに菱本先生に対して腹が立つ。

「俺、バスケ部やめて美術部に専念しよかって思ってるんだ」

「え？ お前今、なんて言った？」

菱本先生への苛立ちは次の貴史の発言によって、一瞬のうちに吹き消された。

正座したまま、思わず両手をついて貴史の顔を伺った。

——冗談、言ってるのか？ バスケ部を続けて美術部をやめるなら話、わかるけどさ。

貴史も正座して、両手を膝に置き、もう一度言い放った。

「美術関連の仕事がしたいから、そちら方面の勉強しようかって思ってるんだ。けど運動部やっていると時間ぜんぜん取れねえし、そんなバスケも面白くねえしってとこで、そう決めた。今日、キャプテンに退部届け出してきた」

そう驚くな、とばかりに貴史は上総へ、空のラムネ瓶を手渡しにやりと笑った。

——もともとバスケ部では期待されていたと噂には聞いていたのに、なんでだろう？

中学時代に何度もバスケ部から誘いが来ていたにもかかわらず、三年間帰宅部で通っていた貴史のことだ。もちろんそれなりにこだわる理由があったのだろう。しかし、中学卒業を境に、思い切って今まで逃げてきたことに立ち向かう覚悟を上総に手紙で書いてよこした。そのひとつがバスケであり、もうひとつが美術だった。

美術に興味を持つようになったきっかけが、修学旅行中の出来事だとは聞いている。それを境に人呼んで天才少年画家・金沢と共に行動することが多くなり、かなり影響を受けたとも言う。美術がかならずしも素晴らしいものなのか、上総には全く理解できずじまいだし、語り合うには足りないことも承知している。ただ、あくまでもそれは貴史にとって二番目の興味に過ぎないと高をくくっていた。むしろ、身体をばりばり動かすバスケットボールに打ち込む方が自然な姿に思えた。

——美術部って何するんだろう？ 絵を描いたり凧を揚げたり粘土をこねたりするだけだろう？

想像が全くつかない。「美術部」と呼ばれるキャンバスの中に、貴史の姿がどういう位置付けになるのかすら、思い浮かばない。

「まあなあ、前からバスケは性に合わねえと思ってたんだ」

上総の握り締めたラムネ瓶の口をぽんぽん叩きながら、貴史は語った。

「ゲームやってる時はいいんだ。準備運動してる時もまあ、かったるいけどそれはそれだ。てっきり上級生に締められると思ってたけどそんなこともねえし人間関係も良好、平和な世界ではあるんだわな」

「やめる理由はないんだな」

「ない。ネガティブな理由はひとつもねえ」

「ならなんで」

「だから最初に言ったろ。時間ぜんぜん取れねえって」

「羽飛、ひとつ聞きたいんだけどいいか」

上総は問い掛けた。

「反対にバスケ部を続けて美術部をやめるという選択肢はなかったのか」

「ねえなあ」

少し天井を見上げて腕組みし、喉仏を動かしつつ貴史は答えた。

「だってな、バスケにしる運動するだけなら、学校の部活以外でもできるだろ。たとえば町内会のクラブチームとかさ、結構あるんだぞそういうところ。町内会ならいろんな学校や学年、それぞれ社会人の人たちもいっぱいいるし、そこでやればいいことだしさ。俺、結構町内会の活動好きだし、すげえ腕の人も近所の人の中にたくさんいるし」

「試合に出たいとか思わないのか？」

「あんまりな、出て、どうするって気もするし」

「勝ち抜きたいとかそういう気も、ないのか」

「全然、ねえなあ」

——こいつの球技大会で見せた熱い闘志を知っているなら、今の理由は絶対に信じられない。

のほほんと答える貴史を観察しつつ、上総は首を傾げつづけた。とはいえ、このままでは納得できる返事が戻ってくると思えない。話を逸らしてみることにした。

「美術部に専念するとしたら、いったい何をするつもりなんだ」

「まずは、いろんな美術展を観ることだろうなあ」

指を折りながら語り始めた貴史。どうやら本気のようにす。

「金沢にも言われたけど、まずいいもんをたくさん観ないと目が肥えないって言われててな。青潟の美術館やデパートに来るイベントはすべて観るくらいの気迫がないとやばいそうなんだ。となると、時間、ねえだろ。どう考えたってな」

確かにそうだ。運動部の放課後は試験休み以外ほとんど練習に費やされるはずだから。

「それから、美術関係でどういう仕事があるかをまず、調べねえとまずいだろ。俺は観ることが好きだけど作る方はあんましだし。ということでそのあたりもいろんな人たちにインタビューして聞いて回るつもりなんだ」

もっともだ。上総も美術関連の仕事というと舞台照明や背景画などの大道具作り、美術館員などしか思い浮かばない。調べたいというのはごもっともだろう。

「こういうことに関しては金沢が結構詳しいしな。けどそのためには軍資金も必要だってことで、まずはバイトが先決だ。そっちの時間工面もしねばなんないってこと。さあ、どうだ、納得したか！」

「参りました、おみそれしました」

——バイト、どうやって見つけるんだろうか？ それ以前にどうやって許可もらうんだろう？

一応、青大附属ではバイト厳禁のはずなのだが。そのあたりの疑問も上総はあえて飲み込んだ。

貴史の汗かいた顔がつやつやてかり、しかも肩から腕にかけて力瘤までこしらえているその姿、まったくもって嘘とは思えない。どうやらこれは、本気と認めざるを得ない。

片手の瓶をテーブルに置いて、もう一度上総は貴史に向き直った。

「部活やめた理由はよくわかった。けど、その道を選ぶ決め手となったのは、どこなんだ」

適性を考えれば圧倒的にバスケットを代表とした運動部の方が舞台としても最強に思える。美術の道もまんざら悪いとは思わないが、そこまで熱くなるものがどこにあるのか見当がつかない。どうしても裏を探りたくなる。

上総の掘り込む問いに、貴史の答えはあっさりしていた。

「そりゃあ、わくわくする方を選んだんだよ、あたりまえじゃん！」

「わくわく、って？」

「俺の顔みりゃあ、わかるじゃん！」

——確かにそうだが……。

裏表のない貴史の性格、知らないわけではない。だから信用せざるを得ない。

「立村、なあにそう不思議そうな顔して俺の方見るわけ？ そりゃあまあ驚くとは思ったけどなあ。とにかく、俺は将来の道を選んだってわけなの。わかったか？」

「じゃ、美大を目指すとか」

「そんなわけねえじゃん！」

おずおず尋ねたがあっさり笑って返された。

「俺が目指すのは芸術系のお仕事であって、芸術家じゃねえの！ だから青潟大学にも進学するつもりに決まってるだろ。まあ経済学部か商学部かそのあたり考えてるけどな」

——羽飛、もう、すでに、学部まで絞ってるのか。

「あたりまえだろ、ビジネスとしてこれから考えていくわけなんだしな」

——早すぎる。

ハイテンションのまま笑い続ける貴史に、上総はただ言葉を失った。

同じ経験を上総は二年前、したことがある。

確かあの時は年末、花森なつめが退学すると決めた瞬間に立ち会ったはずだった。

事情はもちろんいろいろあるにせよ、一歳年下の花森がきっぱりと決めた姿を上総は絶句しつつ見守った。自分の将来を年下の女子中学生が選び取る姿にまぶしさを覚えつつ、その一方で早すぎる決断に不安を覚えたことも事実だった。

将来の自分、全く想像などつかない。

一年後の、英語科に所属する自分の姿すら曖昧なままだというのに。

三年後、七年後、十年後、自分が生きていることすら考えられない。

それを夢や希望に満ちた将来として位置付ければ言い訳などいくらでもできる。

見えない将来だからこそ、楽観しつつ歩めばいいとも思う。なんとかなるさとも開き直ることができる。そのために勉強して将来の道を開いていけば、選択肢は広がるはずだ。

でも、その一方で。

——確固たる目標を見出してる奴もいるんだ。

——よりによって、あの羽飛がだ。

なんにも考えず、鈴蘭優のコンサートのことばかり考えていたような脳天気な貴史が、「わくわくするから」の一言でバスケットをやめ、美術関連の道を選ぼうとしている。しかも、画家を目指すのではなく、それにかかわる道をとということで、きわめて現実的な方向を模索しようとしている。

蘇る激しい痛みを、上総は心臓近くで受け止めた。

——俺は、いったい何をしてくてるたんだろう？

「もう一本、持ってこようか」

ふらつきつつベッドから降り、上総はゆっくり部屋を出た。部屋中をまばゆく照らす太陽として貴史が寝転がっている。側にいると生焼けのまま自分がこげてしまいそうだ。

ラムネと一緒に氷皿をそのまま運んできた。台所で二個口に放り込みがりがり噛み砕いたので喉の渇きは若干癒えた。ついでに指先もぴんと張った感覚が残った。まだ母たちは戻ってきていないようだった。一時間以上経っているはずなのだが、女同士盛り上がっているのだろうか。また妙はことをふきこんでいないだろうか、母も、そして美里も。

「羽飛、開けるか」

身を起こしてにやにやしている貴史に瓶ごと渡そうとしたが、手を振って断られた。

「喉渇いてないのか」

「それよか、こっち、こっち」

ひょいと立ち上がり、ベッドから降りて貴史が手招きする。

「どうした」

カーテンをひっぱり、いったん影を溜め、ふたたび手招きを続ける。表情が読めなくなった。

「何やってるんだよ」

近づき、隙間から覗き込もうとするがじらされる。

「まあまああせるなよ」

「わざとらしいな」

別に無理強いしているわけではないのだが、いかにも気を持たせる態度がわけもなくいらだつだけだ。

「まあ待て。あらよっと！」

手を離れた上総の前で、貴史が一気にカーテンを引いた。

まばゆくて視界が白く溶けて見える。

「立村くん」

呼びかけてきた声が誰か認識した。

その姿を見出す前に、上総は乱れた襟を片手で直していた。

部屋の窓からよじ登りもぐりこむなら簡単なことだ。ふだんからやっている。

貴史をひっぱり上げたことも何度となくある。

一年前だったら平気で、窓辺から顔を出している美里に向かって手を差し伸べただろう。

面白そうに上総を見上げている美里に、貴史が話し掛けている。

「おいおい、何食ってきた？」

「あんみつとオレンジジュース」

——それって組み合わせ、まずくないか？

あっけらかんと答える美里に、上総はまだ話し掛けられずにいた。

「で、さっきまで、何の話してた？」

「いろいろね。けど、変なこと話してないからね、安心してよ立村くん」

——誘導尋問で何話したか覚えていない可能性もあるな。

安心はできない。曖昧に微笑んでごまかす。ふたつわけにした髪の毛がやたらとつんつんして目立つ。

「それはどうでもいいけど」

白いブラウスの襟元に赤いリボンが揺れている。目を細めてみるとまばゆい光がさえぎられる

。

「うちの親とはどこで別れた？」

「お店の入り口で。先に帰るってことにしたの」

「じゃあなんでここに来た？」

「貴史を迎えにきたの」

あっさり過ぎる、でもわかりすぎる答え。

「そうか」

上総は即、決断した。

「羽飛、悪い、すぐ帰ったほうがいい」

「はあ、なんでだよ」

「あの人が清坂氏の考えを読まないわけがない」

「……読まない？」

「とにかく即、逃げたほうがお互いの身のためだと思う」

「納得いかねえなあ」

「とにかく、靴を持ってくる」

立ち上がると同時に貴史が腕を引っ張った。

「いいだろ、そんな隠さねえでも。お前がこれから母ちゃんに罵倒されるのは想像つくけどな」

シャツを羽織り直し、上総の肩を浴衣から軽くもんだ。

「美里に礼のひとつくらい言ってやれよ」

横目でもう一度、上総は窓辺をにらんだ。

——わざわざこんな僻地まで見舞いに来てくれたんだよな。

貴史に諭されなくてもそんなことくらいわかっている。

だったら自然にやさしくありがとうくらい言えばいいだけのことだ。

「なんでそんなに慌てるの？」

きょとんとした顔を覗かせる美里にかける言葉が見つからない。

「話の内容によっては出入り禁止になるかもしれないから」

「大丈夫よ立村くん。私、聞かれてまずいこととか話してないもの」

「清坂氏がそう思ってなくても、向こうでは何考えてるかわからないんだ」

貴史を部屋から出そうとするが、入り口で面白そうに覗き込むのみ。まずは貴史を玄関まで押し出して、スニーカーを靴箱から出してやった。廊下や居間の気配からして、まだ母は戻っていないらしい。

「今日は、ありがとう。また、学校で話したいことがあるから、その時にしよう」

「いや、こっちこそどうもな。俺もすっきりした」

貴史もだいぶ状況を把握してくれたのだろう。母に関する追及はほどほどにとどめ、上総に笑いかけた。

「なんか、すっきりするようなこと、俺、したか？」

「バスケ部やめたこと話したの、お前が最初だ」

「え？ でも」

とっくに美里をはじめ他の連中には報告済みと思っていたのだが。

両手をぶらんとぶら下げた上総に、貴史は肩をすくめて首を振った。

「美里には言ってねえよ。古川に言いつけられてみる、今度は尋問されちまうぞ。おなごふたりに詰問されてみる、たまったもんじゃあねえ」

それでもいつまでも隠しとおしておけるとは思わないのだが。

「ま、とにかく、これから関係者に一挙にばれるだろうな。とりあえず今度の土曜にでも、情報収集第一弾ということで中学の駒方先生とこに行ってみよう。お前もそのとき、よかったら来いよ。E組時代世話になったんだろ？」

軽やかに話しつつける貴史の口調には、何一つ悔いのようなものは感じられなかった。

——バスケが嫌いだったわけじゃないのに、なんで。

大好きなことをあきらめたというような悲壮な決意もない。貴史の顔にあるのは、全身からほとばしる躍動感のみだった。今にも顔に並んだ目鼻口が浮き上がって踊りだしそうな感覚に、上総はくらくらとめまいを覚えた。

貴史を追い出した後、部屋に駆け戻る。まだ美里がいるはずだ。窓辺に取り付いた。

「清坂氏、今から羽飛が来るからさ」

「なんだか笑える、立村くんそんな慌てちゃうなんて」

なんとなくだが母は美里のようなきっぱりはっきりした女子を好んでいるような気がしていた。だからあまり心配はしていない。ただ上総のどうしようもない高校生活がばれている可能性はゼロではない。

「大丈夫なのに。私、立村くんとは友だちだって前から言ってるじゃないの。そのことくらいよ。付き合ってたことだって話してないし」

「ああ、そうか」

美里の口からはっきりと「付き合ってたこと」と過去形で出てきた段階で、ひとつの区切りがきちんとついたので感じた。互いにもう、「友だち」以外の何者でもなく、ましてや「恋人」でもなんでもない。別に親にそのことを説明したことなんてないが、今度揶揄された時にはさらりと交わせばよい。

「でもね、私は立村くんにとって大切な友だちだよ。それは変わらないよ」

「ありがとう」

やっと礼を述べることができた。顔が自然とほころぶ。

「清坂氏、ひとつだけ確認していいか」

「なあに」

「羽飛とはこれからも、友だちのままでいいのか」

つい口から転がった言葉に上総も戸惑った。そんなこと、言うつもりじゃなかったのに。

「立村くん、どうしたのいきなり？」

ぽかんとしたまま、美里が首をかしげた。同時にふたつ分けの髪の毛の先が揺れた。

「みんな友だちでいいじゃないの、あたりまえじゃないの」

どう返事をしたらいいのかわからず言葉を飲み込んでいるうちに、貴史の脳天気な声が響き渡った。しまった、騒ぐなと伝えておけばよかった。近所に母がうろついている可能性大なのに、だ。

「おーい、美里こっちこっち、行くぞ！」

「わかったー！ じゃあね、顔見ることできてよかった。また学校でね！」

全く動じる気配もなく、美里は上総に手を振って去っていった。友達に向ける笑顔いっぱい。あの笑顔が一年前は息苦しく迫られるようなものだったことを、上総は思い出した。穏やかに、そしてやわらかな日差しとして今は上総に降り注いでいた。

カーテンを閉めた。一気に薄暗い部屋の中、そのままベッドに横たわった。

いやな風邪っぽい熱はひき、その代わり妙に身体が火照るのを感じる。

——羽飛にとって、清坂氏は友だちでしかないのか。

——清坂氏にとっても、そうなのか。

ふたりが以前から「男女の友情」というスタンスを一切変えず、どう考えても恋愛関係としか思えない言動を繰り返していたことを上総は知っていた。貴史に懸想するこずえも、もし美里が相手ならばあきらめるとすらい放っていたくらいだ。卒業間際に何をとち狂ったか貴史に告白したという奈良岡彰子も、奪うつもりなどさらさらなく、美里相手ならば応援すると言ったとか言わないとか。南雲経由の情報にも有る通りだ。

——もしも、ふたりがそういう気持ちならば、一番それがいいと思っていたんだけどな。

美里が仮に関崎への気持ちを押しえられないままだったとしても、もし貴史がそれ以上の想いを秘めていたとしたら、無理やりにでも方向転換させて傷を浅くさせるという手もある。関崎の態度がどう考えても静内菜種しか見ていないこの状況を変えることはできない。ならばせめて、とも思うのだが。

——そういう気持ちがもし羽飛にあれば、バスケ部か美術部かの選択を、清坂氏に話さないってことはないだろう。

男子にとって、進路の選択は……もちろん女子にしても同じだろうが……かなりのエネルギーを要するものだ。その重さゆえに上総もまだ決断の段階に至っていない。決める時は自分で判断するもの。しかし、美里との長い付き合いを考えれば一言二言なんらかの相談はしそうな気がする。

それを一切せずに、今だに話していないという事実。

どうなのだろう。これは。

ふたりの言う通り、「大切な友だち」以上のなにものでもないのかもしれない。

上総にはそれ以上、答えを見出すことができなかった。

——友だちが、このまま黙って傷つくのを見守るだけなのか。

先が見えすぎる、ゆえに何も口に出せはしない。

玄関から騒がしい物音がする。まだふたりが消えてから十五分くらいしか経っていない。あえて寝たふりを決め込んだ。誰が、一人息子を獣扱いするような母と正面から顔を合わせたくなるものか。廊下を勢いよくつつきってくる母に耳をふさぎ、上総はベッドにもぐりこんだ。やっぱりノックせずに入り込んできたものである。

「上総、狸寝入りするのはやめなさい」

あきれ声で母が枕元に近づいてくる。怒ってはいない様子だった。無視してそのまま、うつぶせの体勢を変えずにいた。頭をいきなり枕に押し付けるのはやめてほしかった。

「何するんだよ、病人を起こすなよ」

「まったくねえ。まあいいわ。もう氷もすっかり溶けてるし。それよかあんた、美里ちゃんに振られたみたいねえ」

——やっぱりとんでもないこと話したんじゃないのか？

死んでも顔なんか出せやしない。返事はしない、眠れる物体になる。

今度は、手で頭を撫でまわされる。

「まあそれはいいことよ。美里ちゃんみたいにしっかりしてて、賢い女の子ならあんたみたいな優柔不断のとんまなんかにはふさわしいわけないものねえ」

——さっさと出て行けよ。人を物笑いにして何楽しいんだ。

あとで美里にしっかりと問いたださねばなるまい。熱がかあっと上がる。

「ほんとは、美里ちゃんみたいな子の尻に敷いてもらってあんたが成長してくれれば一番いいんだけど、人様のお嬢さんにそこまで要求できないわ。全く情けないわよ」

どうやら母が美里のことをお気に入りなことだけは確かのようにだった。

「でもね、上総。自分にそっくりだからといって、おんなじタイプの女の子にのめりこむのはやめておきなさいよ。杉本さんとか聞いたけど」

「母さん、何言い出すんだよ！」

思わず飛び上がった。母の手を振り払い怒鳴る。まさか、杉本の話まであんみつをはさんで飛び交ったというわけか。もちろん杉本の事情については美里の知っている範疇のみの話題だろうから、それほど深い内容で問い詰められたわけではなさそうだが、しかし、わからない。

母はラムネ瓶二本と水のたまった氷皿を片手に、上総を見下ろした。

「どうやら凶星、ってところかしら」

にらみつける自分の目が、力入りすぎて痛かった。

「警告したから覚えておきなさいよ」

驚く様子もない。母は微笑みさえ浮かべながら上総に告げた。

「お互いの傷をなめあっているままじゃ、ろくな大人になれないってことよ」

英語科の生徒が英語の追試を受けるというのは非常に珍しい。日曜日の朝から昼下がりまで教室にひとり残されている姿は自分でも情けないものがある。真夏の太陽が照りつける中、麻生先生の嫌がらせなのかクーラーは一切掛かっていない。窓は開け放たれているので風が全く入り込んでこないわけではないのだが、それでも自然と額に汗が滲む。救いなのはその汗が、

——油汗でないことだよな。

机の上には、追試開始後五分後にひっくり返してしまった答案が一枚載っている。

見直しもすでに終わっている。いつも通り、完勝だ。

教卓に向かい、パイプ椅子であくびを繰り返す麻生先生をちらりと見やり、上総は答案を提出してさっさと教室を出ようかと考えた。予定通り試験制限時間五十分を消化するまで席についているのもばかばかしい。

「先生」

「なんだ」

短い返事だが、それでもまだ普段よりはましだ。通常、麻生先生は上総の存在を視界の中に入れていない。授業中指名する時も決して上総を当てたりしない。

上総は座ったまま答案と麻生先生の顔を交互に見ながら伝えた。

「答案を提出したいのですがよろしいですか」

「まだ四十分ある。見直ししろ」

——することなすぎ。

日曜日ということもあり、当然廊下を通る気配もない。通常ならば各科目ずつ全クラスの追試対象者が集められるはずなのだが、今回上総は期末試験を丸々休むはめとなってしまったわけだ。しかも英語科、カリキュラムが違う。しかたなくこのようなイレギュラーなやり方で追試を受けざるを得なかった。

——この四十分をせめて、物理か数学にまわしてもらえればな。

叶わぬことを思い溜息をつく。

もともと期末試験は最初から捨てていた。例の修学旅行における一件のためだ。

だからというわけではないけれども、苦手科目の教科書……主に理数関係……は一切めくることなどなかった。自分の成績順位なんて英語を除けばどれも下位どんぐりの背比べのようなもの。公式を暗記し直したとしてもたかがしれている。

とはいえ、やはり空白の多すぎる答案を提出してしまったのはまずいだろう。

あれじゃあ、おそらく追々試を受けるはめになりそうだ。

脂臭い麻生先生と一対一、これじゃあ居眠りこくこともできやしない。

病み上がりの上総には特段何か変わったことがあったわけでもなかった。

貴史と美里には改めて礼を伝え、C組の元評議野郎チームには試験内容をコピーさせてもらい、またこずえからはいつもの下ネタトークをぶつけられるといったところだ。ありがたいことに

今のところ、関崎や藤沖からはその後の状況についての報告を受けていない。

もう、先日の段階で話が終わっただけ。

杉本梨南が藤沖と渋谷名美子の願いを素直に聞き入れ、これ以上余計なことを言わないということだけでけりをつけたあの一件。もうどうでもよかった。わざわざ中学へ足を運んで杉本を捕まえて、「お前本当にいいのか？」と問い詰めたい気持ちはおおいにあるのだが、余計な奴と顔を合わせてしまいそうでそれもまだ果たせていない。

肩肘をついて、消しゴムをシャープの先でつついて遊んだ。

ケアレスミスさえなければおそらく、満点を取ることのできる答案だと確信している。

かといって満点とっても、英語順位トップ陥落したという事実は翻らない。

ちなみに今回明け渡した英語トップの座に君臨したのは、同じ英語科の片岡司だった。

上総とは全く口を利かない奴である。点数を見たところ八十点代だったようなので難しいとされる設問ではあったのだろうと思われる。

——この程度の問題で、トップから落ちたとなったら笑いものだよな。

上総は指でシャープを回してみた。最初は指から滑り落ちたが、すぐに指先が馴染んでくるくる回せた。目の前で麻生先生が怪訝そうに見ているが、そんなのどうでもよかった。

頬にさらさら、風が触れる。

——頭を切り替えよう。

シャープを操りながら、上総は窓辺を眺めた。一階の教室から見える芝生は気持ちよいくらいりりしい緑色だった。

これから先、杉本が選んだ道についてつべこべ文句を言う権利がないことくらい理解していた。ベッドの中でひっくり返っていた間それはよく考えた。

——でも、本当にあれでいいのか。

——関崎が信じてくれるからといってそれだけで、濡れ衣着せられっぱなしで、耐えられるのか。

一方で敵となる藤沖と渋谷は仲良く過ごしているようだ。確認こそしていないが、上総にこれ以上文句をつけてこないところみるときっとそうなのだろう。こちらにも口出しする気などさらさらない。中学生徒会のことでもしかしたら、佐賀生徒会長のからみもあって杉本に火花が飛ぶとでもなれば話は別だが、もうことはすでに終わったのだ。これ以上、何を言うつもりもない。

ただ、

——関崎だけは何も考えず、好き勝手に過ごしているわけだよな。

すっかり一年A組のサブリーダーとして活躍中の外部生、関崎乙彦に思いを馳せた。あいつはこの三ヶ月間で生じたモテモテ旋風についてどう考えているのだろうか。全く女子から受けの悪かったらしい中学時代を経て、現在杉本梨南と清坂美里、そしてもしかしたら静内菜種の恋心を手玉にする……いやいやそれは間違いだろうが……といったその態度。おそらく何も考えていないのだろうが、あまりに外部に影響が強すぎる。

——もし、関崎が中学と同じ状態で過ごしていたら。

上総は確信する。

——決して、あいつの気持ちだけを頼って自分の不利な条件を飲んだりしなかったはずだ。

「立村、その『浪人回し』やめろ」

気持ちがぱつと切れた。麻生先生がやぶ睨みで上総の指先を見つめ、こう発した。

「浪人回し？」

初めて聞いた呼び名だ。指先を止めた。麻生先生は指差しながら、身体は教卓に向けたままだみ声で続けた。

「そういう回し方をしていると、注意怠慢となり、必ず浪人すると言われているんだ。試験勉強もしないでくるくる回し続けているだけで賢くなったようなつもりになるそうさ」

初めて聞いた。「浪人回し」という呼び名自体、いわゆる受験浪人のことを意味するとは思わなかった。上総の脳内では「浪人」イコール時代劇の素浪人をイメージするのみだった。

「すみません」

余計な口答えなどするつもりもない。上総は静かにペンケースを開いてしまい込んだ。

「それとだ」

手の甲で額の油を拭き、ふたたび麻生先生は上総をにらんだ。

「なぜお前は、人に何かを教えてやろうとしないんだ」

「え？」

いきなり突拍子もない質問を投げかけられた。

「今回の試験問題が易しいのはよくわかる。だがなぜ、他のクラスメートにお前の持つ優れた読解力や、ヒアリングのコツなどを教えてやろうと思わないんだ？」

全く理解し難い、発想の飛躍だ。もともと麻生先生とは罵倒されるか無視されるかのどちらかで、諭されることは殆どない。中学時代の菱本先生とは違い、とにかく無視を決め込まれる。その一方で親受けはかなりよいらしい。両親がやたらと麻生先生を褒めているのが、正直不気味ではある。

「聞かれませんか」

きっぱり答えた。それこそ濡れ衣もいいところなのだが。もともと上総は中学上がりの普通科連中には、リーダーの訳文や問題集の答えなどを用意してやっていた。英語科内でも、一部のよく話をする奴にはそうしたりもする。麻生先生はどうも、英語科の中で上総が自分ひとり利を独り占めしているように見ているらしい。英語が曲りなりにも得意な奴同士、誰が上に立つかを競っているような環境の中、助け合う必要がないようにも今は思える。尋ねられたらもちろん、喜んで協力するつもりではある。

が、説明するつもりもない。

「片岡は懸命に、他の男子連中にアクセントの違いやら、英会話のコツなどを説明していたぞ」

——聞かれたからだろ。

もちろん返事はしないでおく。片岡はどちらかいうと藤沖、関崎と仲がよい。特に関崎への甘ったれぶりは傍目からもあきれられるほどだ。おそらく偏った見方をしているのであろう。クラスで

目立つふたりに片岡が説明すれば、きっと全クラスメートに協力しているのだと思い込んだのではなかろうか。

上総は黙って解答の裏に指で文字をなぞってみた。とにかく指を動かしていないと待ち時間、何をしていいかわからない。

それ以上麻生先生も何も言わず、ただ遠くから聞こえてくる運動部の稽古状況に耳を傾けていた。たぶん陸上部か、サッカー部かだろう。

——羽飛、本当にバスケ部に未練がないのかな。

ペン回しも咎められ、仕方なく答案の裏にドイツ語で悪戯書きをしているうちにやっと制限時間がきたようだ。麻生先生が教卓をげんこで叩くと、

「回収する、出せ」

ぶっきらぼうに急かした。速攻、手渡した。内容を確認した後、すぐに赤ペンで採点に入り、上総の読み通りの点数を右上に書き込んだ。

「満足か」

返しながら、また吐き出すように言い放つ。こう言った手合いに答える必要などないと上総は思う。頭を下げて鞆につっこんだ。

「それとだ」

追試はこれで終わり、さっさと教室から出ようとする上総に向かい、麻生先生は呼び止めた。珍しい。振り返ると、

「この一学期はお前のやりたいようにやらせてきたが、二学期からはこんな甘ったれた了見は通用しないから、そのように考えろ。わかったか」

また訳のわからない言葉を投げかけてきた。何が「お前のやりたいように」なんだろう。聞き流すのが一番だとは思うのだが、やはりひっかかる。あえて問わず無視して出ようとする、再び声がかかる。

「二学期に入ってから改めて話をするが、立村、お前にはしばらく規律委員の関崎と組んで、その手伝いをさせるつもりだ。これは命令だ。関崎、および評議の藤沖も了解していることだ。覚悟すると同時に、あのふたりへ感謝しろ」

——感謝だと？

上総は振り返った。影が長く伸びていて、麻生先生の教卓に届きそうなのがわかる。

「委員になれとは言っていない。関崎の、下働きになれと言っているんだ」

「下働き？」

発した言葉の響きに、少し荒れを感じた。

「元評議委員長には屈辱だろうがな」

朝から五時間目までの間、初めて麻生先生は顔を緩めた。軽蔑の入り混じった笑いに見えた。

誰もいない廊下を突き進み、すぐに生徒玄関へと降りる。

すのこで靴を履き替え、閉まったままの戸を開ける。

すっかり太陽も南中からほんのわずか、傾いているようだった。夏特有の跳ね返るような空気が一気に上総を焼こうとしている。表皮はそのままに、奥まで蒸し焼きにしようとする、悪意すら感じる。

——関崎の下働き、な。

あえてあの場で口答えしなかったのには、他にも理由がある。

附属生同士のネットワークをどうやら麻生先生は甘く見ていたようである。C組の連中たち... 主に天羽・難波・更科、そして貴史に轟琴音、ついでに南雲も忘れてはなるまい.....を通じて情報がいろいろ集まってきてはいた。ただ、上総は最初からその話に乗るつもりなどさらさらなかったから、聞き流してきただけのことだった。

——俺を、規律か保健か、そのあたりの委員に押し込もうという手か。

陰でいろいろと動きがある、とは耳にしていた。元・評議委員チームたちからも、もしそんな話が出てきたら絶対乗るようと、勧められたりもしている。天羽は特に強く推して来る。関崎が好きになれない以上、対抗馬として上総を推したい、その気持ちもわからないわけではない。

——もちろん俺はもう、委員に戻るつもりなんてないさ、けど。

なぜ、「関崎の下働き」なのか。

しかもあの先生は、

——何が「元評議委員長には屈辱だろう」とか言うんだ？

ここでかっとなれば、おそらく麻生先生の思う壺だろう。だからあえて落ちなかった。

むかついても、動かない。しっかり中学評議委員会の中で身に付けてきた。本条先輩に仕込まれてきた。たかが三ヶ月程度担任持っただけの教師に首根っこ押さえられるような真似は、絶対にしない。

——俺と関崎を無理やり一緒に組ませて、その上でどちらがリーダーになるかを決めさせようともいうのか。上下関係をしっかり叩き込もうという手だな。

「元評議委員長」の上総に屈辱的な思いをさせ、あわよくば頭を下げてクラスに馴染むよう持っていくというのが計算というのが見え見えだ。麻生先生はこれで上総が陥落するとでも思っているのだろうが、そうは問屋が下ろさない。

ただ、手袋を投げつけられたという記憶だけが残るのみだ。

その意味が、じわりとしみてくるだけのことだ。

自転車置き場に立ち寄り、すっかり熱せられたサドルに座り全身焦げそうな思いでペダルを漕いだ。どういう結果が出るにしても、期末試験が終わればあとは夏休み。宿題や自由研究などは少々面倒だが、頭に来る連中の顔を見ないですむのはかなり嬉しい。

特に誰か知り合いと顔を合わせることもなく、比較的空いている車道をスピード上げて走り抜けた。いつもなら通らない商店街をくぐりぬけるか、それともいつも通りの国道をつきついていくか、少し迷って自転車から降りた。

——どうしようかな。商店街でなんか買ってくか。サイダー一本飲み乾したい気分だしな。

結局、自転車を押し、アーケードをくぐることにした。さすがにお客さんの多い日曜日、勢い

よく潜り抜けることはしない。めったに通らない近道だ。歩いていってもあつという間に出口が見え、もう一度自転車を漕ぎ直した。だいぶ道も先へと進む、その時だった。

いきなり、後ろから自転車が追いかけてくる気配がする。軋む音と同時に、かすかな熱が空気ごとぶつかってきた。はずむボールのような感触だ。

しかたなく歩道の脇に留め、改めて振り返った。

「……お前、なんでここにいる？」

息を切らせてくっついてきたのは、若草色のヨットパーカーを羽織りぴちぴちのジーンズをはいた男子だった。顔をじっくり見るまでそいつの名前を思い出せなかったのは、やはり制服とのギャップが大きすぎたからだろう。こいつの私服姿を上総はこれで二回、観たことになる。

俯き、その男子は前髪を派手にかきあげた。

「今、うちの前、お通りでしたから、御挨拶ただけです」

「霧島、お前のうちって」

言いかけてすぐ、納得した。そうだった。霧島姉弟の自宅は商店街の近辺だったはずだ。門構えこそ派手ではないにしても、青潟ではそれなりに老舗と聞いている。「霧島呉服店」の前を、上総は通り過ぎたのだろう。見かけなかったのは意識していなかっただけ。

——見られたのは、こいつが意識してただけだ。

上総は観念した。試験前に約束していた決着を、まずは青潟大学附属中学・生徒会副会長・霧島真相手にまずはつけなくてはならない。

ついでに、例の「キャリアOL」グラビア写真集を返してきっちり引導を渡さねばなるまい。

上総なりに考えた結果、霧島の件も結論は出ていた。

——霧島の兄貴分には、俺より関崎の方がふさわしい。

「ちょうどよかった」

上総もそれ以上、霧島に尋ねなかった。ただ誘った。

「ボーリングでもやるか。話の続きはそこでしよう」

レールをひいてやるだけのことだった。

決してわざとガーター連発したわけでもなければ、いいかげんに手を抜いたわけでもない。本条先輩に連れて行ってもらったボーリング場に、冴えない私服姿の霧島を引きずり込んだのはいいのだが、まず自分に合ったボールがどのくらいの重さなのか覚えていない。あぶなくボーリングシューズに履き替えるのを忘れていて係員に怒鳴られるわ、隣のレーンで投げている人が終わらないうちについ転がしてしまい、

「なんだよあいつ、常識ねえ奴」

などと聞こえるような嫌味まで言われる始末。

「本当に」

男子のたしなみでそれなりにボーリング経験があるという霧島は、すっかりいつもの調子を取り戻したようだった。あきれ果てた顔で上総の醜態を眺めている様子だった。

「先輩は常識を御存知ないようですね」

「仕方ないだろう」

なにせ二回目なのだから、初心者と見ていただきたいところだ。あえてそんな弱みをばらすことはしない。なんとかゲーム終わり、席でまずは缶ジュースを飲み乾した。

「しかもネクターというのは、どういう味覚なんですか」

たまたま炭酸抜きの飲み物がオレンジジュースかピーチネクターしかなかっただけのことなのだが、それも霧島にはお気に召さなかったらしい。ちなみに霧島が手にしているのはお上品にも紅茶の紙パックだ。ストローをすする仕種からして、繊細な気品を感じる。

上総は黙って缶を専用ラックにひっかけた。

——ちょうどいい頃合なのかもしれないな。

いわゆる「溝掃除」の連続だったのもかえって、これから霧島に語るべき内容を考えればふさわしいものなのかもしれない、そんな気がしていた。

——こいつがいったい何を考えて俺に付きまってくるのかよくわからないが。

いや、気付いてないわけではない。

同じ学年におそらく味方となる友だちがほとんどいないのだろう、とは読んでいた。

賢すぎて、外見も整いすぎて、しかも肩書が生徒会副会長。女子たちからは王子様扱いされているが、男子たちからはおそらく受けもよくないだろう。嫉妬まではいかないにしても、ちょっと面倒くさいタイプの男子として距離を置かれているのではないだろうか。

短い付き合いの間に、霧島を観察してみて見えてきたことがたくさんある。

ある意味、霧島という奴は、

——杉本に似てるんだ。

男子で、杉本梨南のように異性受けが悪いわけでもなく、後ろ盾もしっかり存在している。全くの相似体とは言い難い。けれども上総にぶつかってくるその行動パターンも、眼差しも、すべては双子のように似通っている。そして、それを読み取ることができたのが、たまたま上総ひと

りだけだったということだった。

はたして霧島自身、わけのわからない言動を取っていることについてどう考えているのだろうか。そのあたりも本当は尋ねてみたいのだが、きっと奴には理解できないだろう。今霧島が上総を追いかけている格好が、かつて本条先輩を追いかけてきた時のポーズにそっくりだから、上総ひとりが気付いているだけのこと。

——このままなら、俺が霧島の面倒を見ることになっても不思議ではない。

上総は、休み中、ベッドの中で考えたことを改めて認識した。

汗がだらだら流れる中、霧島の今後についても思いをめぐらせた。

本条先輩は、上総のことを特別な後輩として目をかけるようになった時、どう考えたのだろうか。一方的に張り付いてくる上総を邪険になどしなかった。あっちへ行けなどと罵倒したりもしなかった。そのように受け止めてやるのが青大附属の先輩後輩の関係であるといえるだろう。本来ならばそろそろ上総も、そういう時期にきたはずなのだ。

——けど、やはりこれはまずい。

上総の思惑など知らぬようで、霧島は一方的に甲高い声で喋りつづける。

「立村先輩、いいですか、青大附属の制服姿でプレイするのならば、当然ルールにも精通しているべきではないでしょうか。それに、なんですか、ボールの重さも把握されてらっしゃらないとは。ボールの重さによって投げる形も変わってきますが」

「わかったわかった。俺が悪かった」

さすがにネクタイの結び目を緩めたくなくなった。ボタンもひとつ外した。

「頼むからどこかの誰かと同じようなことを言うなよ」

「それはどなたでしょうか」

しゃちほこばって霧島が問い返す。

——まさか杉本なんて言えないだろう。

このあたりももちろん、無視で返した。

「とにかく、僕は先輩の言動には恥ずかしさを感じます」

「そうだな、恥を知れと言いたいんだろうな」

一言一言にいらだっているようだったら霧島もこうくっついてくることはなかっただろう。

「よくわかりですね、だったら」

「そうだよ、霧島」

ラックに入れっぱなしのネクタイ缶を取り出し、上総はテーブルに置いた。さっきのゲームスコアをプリントアウトしたものが、出しっぱなしで丸まっている。それを指で伸ばしながら上総は告げた。

「いいかげん、俺に張り付くのはやめてもらいたいんだ」

霧島の表情がいきなり強張った。王子然とした顔立ちが一瞬、般若に見えた。

予想していたことなので無視して続けた。

「俺はもともと後輩と接するのが得意なほうじゃない。お前もそのあたり、過去二年間の生徒会がらみ事件で聞いていただろう。さらに言うなら俺は生徒会関係者から蛇蠍の如く嫌われている。評議委員会に泥を塗った元委員長として、おそらく直属の後輩たちからも恨まれているはずだ」

「知ってますよ、そのくらいは。僕が青大附中生徒会副会長だということをお忘れなく」  
すぐに般若の面をしまい込んだ霧島は、つんと済ましたまま切り返した。

「ならなぜ、しつこく付きまとう？」

「好奇心、ですよ」

「好奇心？」

「なぜ、立村先輩のような人がうちの学校に合格できたのかとか、よくあそこまで恥をさらしておきながら平気な顔して出入りしていられるのかとか、傍目からは決して賢く見えないのになぜ他の先輩たちに一目置かれているのか、いくつかの謎を僕自身の目で解明したかったから、それだけのことです」

ずいぶんなことを言う。すでに杉本梨南によって二年間分の免疫有り。溜息のみだ。

「僕なりにいろいろな先輩たちの背中を眺めてきましたが一般的に評価の高い人に関して言えば、単純に買いかぶられてらっしゃる方が殆どでした」

「たとえば？」

「天羽先輩、そして今回の藤沖先輩です」

きっぱり言い放つその態度、上総しか目の前にいないことを幸いと思うがいい。

他の同期連中の耳に入れてみる、即、弾劾裁判、即、鉄拳制裁のお呼び出しだ。

「きつい言い方だな」

「僕は人をたくさん見る機会をもっておりましたから、当然です」

唇の右端をくい、と上げた。頬の皮がひきつっているのが不自然だった。

「それでも僕は自分の立場をわきまえてますから、先人に習うべく先輩たちに学ばせていただくことブラッシュアップを続けてきました。ですが、みな、男子の先輩たちに関してはくだらないことで足を踏み外し、頭の悪い女子に現を抜かすといった体たらくぶり。呆れはてて声も出ません。青大附中の委員会活動においては先輩が後輩をしっかりと教育する制度が非公式に確立されていたと聞いておりましたが、僕にはまったく手本とすべき方を見出すことができませんでした」

——ここから俺を褒めちぎるのか？

流れとしてはそうなるだろう。だが奴の性格を考えるとそれは考えにくい。

普段ならシャツにネクタイをきっちり締めて、折り目正しく正論を並べ続けるだろうが、いかせん今の霧島は、なんとも言えずやぼったいお坊ちゃんである。顔が端正だからみっともないとは思わないが、いかにも虚勢張りまくりといった格好に笑いを禁じえない。

「そうだな、俺たちの世代が、委員会そのものを破壊したようなものだからな」

「『大政奉還』ですか」

「霧島の言う通り、以前は先輩が後輩を一对一で教育するような制度があったね。ただそれは決

して無理強いするものではなかったんだ。委員長候補を一年の段階で選んで三年の春に指名するというやり方でうまくいかなかったのが、俺たちの代の評議委員会だ。結果として生徒会のような民主主義の方針で成功しているのだから、それはそれでいいことじゃないのか」

さて、どんな反応をするか。

見守ることに徹した。

何を伝えたいかではなく、どのように自分を見せたがっているのか。

そこを確認したい。

「お言葉ですが、僕は自分を磨くことに興味はありますが、無条件に尊敬するつもりはありません」

霧島は自信たっぷりに言い切った。また唇の端がくいと上を向いた。

「僕が立村先輩の言動に興味を抱いたのは、これから先輩のしでかす出来事を反面教師にしたいだけのことです。めったにいらっやいませんからね、あれだけ女子たちから総すかんを喰いつつも、しっかり味方を集めて生き延びてらっしゃる方は、そうそう見かけません」

「褒めてもらって嬉しいよ」

皮肉を一刺し、言ってみる。気付こうともしない。

「先輩が果たして何を考えて、たとえばガーターを連発するような非常識なやり方をしたがるのか、なぜご自分の不利になる行動を取られるのか、なによりもなぜ、それでありながら味方を作っていけるのか。非常に僕にとっては参考にさせていただきたいことばかりでしたからね。僕は人を尊敬したりなどしませんし、ましてや先輩の価値観一色に染まりたいとは露とも思っておりませんが、学びたいだけです。どこかの小説にもありましたね。『向上心のない者は馬鹿だ』と」

「ああ、漱石の『ころ』だな」

教科書に載っていたり、休み中の課題図書として並んでいれば誰もが読む作品だ。

よく、仲間内でギャグのかましあいに使った一節だ。

その後の展開のことなど考えずに。

「霧島、その台詞を言われたKはどうなった？」

不意を突かれたのか、霧島はぽかんとして黙った。

「『先生』に言われた『K』は、自殺しただろう」

「それは」

何かを言いかけた霧島に上総は畳み掛けた。

「言葉は真実だ。けど、ぶつけられた相手にとっては死にたくなるほど痛い言葉であることも確かなんだ」

とっさに思いついた言葉を一気に連ねただけだった。意味もない。

霧島は言い返さなかった。

上総は身動きせず、霧島の顔を伺った。

なぜ上総をしつこく追いかけてくるのかその理由を確認したかった。

後腐れなくけりをつけようとしても、ねばっこく離れようとしなない。

今だに「キャリアOL」のグラビア写真集は本棚に隠れているし、とうとう母にも見つかってしまう始末。さっさとちり紙交換に出してしまってもいいのだが、霧島のものである以上処分にも困る。

口走った霧島の、もっともらしい自己庇護の言葉を鵜呑みにする気はなかった。

自分を必死に高みに置こうとあがいているその姿が、こっけいにも見えるしぽきんと折れそうで怖くもなる。

こういう時期に、誰かひとりでも味方がいれば、なんとか乗り越えられる壁だが、よじ登る方法を霧島は見つけられずにいるようだ。かつての上総が本条先輩ひとりに頼りっきりで、手を引いてもらったのと同じように、本当だったら誰かが手を差し伸べるべきだろう。

霧島自身が、男子にしては珍しく自分からその助けを求めている。

同年代、また一学年上の先輩連中、教師たちにも頼らず、いきなりすれ違った上総を捕まえてなんとかしろと叫んでいる。助けの求め方が分からないのだと、今の上総ならすぐに気付くだろう。なにせ、杉本梨南を見つめつづけてきたのだから、同族を見破るのは簡単だ。

——俺が、本条先輩みたいに霧島の面倒を見たほうがいいのか。

——だが、俺ではだめだ。別の奴の方がいいんだ、そうでないと霧島は。

上総は霧島に、もう一度告げた。

「悪いが俺は後輩に馬鹿にされて喜ぶタイプじゃないし、なによりもこういう付き合いが面倒なんだ。本条先輩と違って、あまり人に興味持たないんだ。それに、損するよ、俺にまわりついていたら近い将来、かつての俺と本条先輩みたいな『立村・霧島ホモ説』をでっち上げられるだろう。本条先輩は俺とつるんでいても見下されることはなかったが、霧島、お前の立場を考えるとこれから先、えらく不利になるだろうな」

「そうですね、僕もそんな趣味はありませんし、おっしゃる通り馬鹿にされることでしょう」

「わかっているなら、いかげん誤解を招くような言動は避けたほうがいい。単に珍獣を観察したいというのだったら、それなりに柵の前から覗き込むとかすればいいだろう。どうせ俺はこれからは鬻盛を買っていこうし、自然と情報も中学に流れてくるだろう。その情報だけチェックして、それこそ『反面教師』にすればいいさ」

「そんなに僕に観察されてまずいことでもされてらっしゃるのですか？」

さらに食い下がる霧島、ハブだ、本当にしつこい。

「隠し事はないが、俺自身が面倒なだけだ。むしろこれから成長株となりそうな先輩にくっついて、そこからのし上がる方が本当はいいんじゃないのか？　悪いが俺は、霧島に何も付加価値を用意できないし、むしろ大損するよ」

ふたたび霧島の目つきが釣り上がった。唇が両端持ち上がり、顎が一瞬二重になる。

「その、成長株とは、たとえばどなたですか」

「たとえば、そうだな」

上総はゆっくりと答えを伝えた。

「関崎あたりかな。あいつは先生たちからも男女問わずクラスメートからも、結城先輩からも高く評価されているね。外部入学者だから目立たないかもしれないが、たぶん二学期以降は関崎の天下になるだろう」

「関崎先輩ですか」

「知っているだろ」

「お話したことはあります」

口籠もるように霧島が答えた。

「なら話は早いな。俺に今までしてきたように、少し関崎を捕まえて話をしてみればいい。俺みたいに間抜けなことはしでかさないだろうが、必ずこれから、お前のプラスになるはずだから」

立ち上がり、缶と一緒に鞆を抱えた。

「俺の話はこれだけだ。それと例の本だけど」

まだ片付いていないことを伝えた。

「もしいらないなら、こちらで処分していいか」

「どういうことですか」

触れられたくない一点に針を刺してしまったのか、霧島がおどおどと尋ねる。この表情の変化がすべての答えだと、上総は思う。

「俺もこれ以上、抱えていたくないからな」

上総はこれ以上説明しなかった。余計な説明をしまえばまた何かひっかかってくるに違いないし、それに答えるだけの語彙も自分にはない。

ボールを返そうと持ち上げたたん、霧島がまた甲高い声で叫んだ。

「まだ、ゲームは終わっていません」

「いいだろう、もう話は終わってるんだから。それに支払いも」

すでに受付で終わっている。

「いえ、まだ、一ゲーム残っています。僕は立村先輩のお話を伺いたいわけではなく、ボーリングをしたくて今日、ここに来たのです」

すでに自分のボールを三本指で支え、上総の返事も待たず、霧島は助走をつけて一気にボールをレーンに転がした。真正面からスピードを上げて転がりつづけるボールは、真中の一本だけ倒し、そのまま最奥に吸い込まれていった。

「次で、すべて倒します」

わざわざ上総の目の前に近づいてきて、宣言した後すぐにボールを持ち替えた。

予告通り霧島は二度目の勝負でこなごなにピンを飛ばし、ストライクを決めた。

「ボーリングというのは、こうやるものなんですよ、先輩」

薄笑いを無理やり浮かべ、霧島は上総に向かい、レーンを指差した。

「さっさと投げてきたらいかがですか」

目はやはり強張ったままだった。答えず上総がまっすぐボールをレーンに流した時、静かに腕から何か伸びていくような感触を覚えた。ゆるゆる、時々曲がりながらもピンに辿り付き、

一本、二本と倒れ、最後にすべてが飲み込まれるのを上総はじっと見つめた。ストライクだった。

——いいかげんに投げただけなのに、あっさり決まったな。

振り返り霧島に視線を投げた。一文字に唇を結び、冴えない格好できちっと両手を膝に置いて待っている様子だった。

言いたい放題わがまま放題の霧島には、誰か上からがっしり押さえるような先輩をあてがって、高校入学までにしっかりとお灸を据えておいたほうがいいのだ。関崎あたりなら適任だろう。こういう弟分を仕込むのはお手のものだろう……佐川の一件など……し、間違った価値観をしっかりと是正するだけの力を持っている。

——関崎ならこいつを張っ倒すだろうな。

今のうちにそのくらいしごいておかないと、霧島はこれから先、地獄を見ることになるだろう。もしそうなったとしても、上総には何もできない。霧島自身がまだ自覚できない、吹雪いた気持ちの揺れを見守ることしかできない。

——距離を置かないと、杉本と同じ思いを霧島にさせることになるんだ。だから。

これ以上、犠牲を出したくはなかった。

関崎とは殆ど会話を交わさぬうちに終業式の日がやってきた。

夏らしい気温上昇に伴い、授業中みな干からびた状態で伸びているのに、休み時間に入ったとたんエネルギーをすぐ充電してしまうそんな奴ら。上総も例外ではなかった。もっとも、エネルギーを蓄える時間は学校にいる時ではなく、むしろ放課後だったけれど。

「ちよいとさ、立村、あんた知ってた？」

春夏秋冬、まったくエネルギー切れのない古川こずえが声をかけてきた。

「羽飛がさ、バスケ部やめて美術部一本にするんだって！」

「ああ、聞いた」

驚くのも無理ないだろうとは思いますが、そんな女子たちと大事件に仕立てることででもないだろう。上総は机の上でうつ伏したまま返事をした。

「将来の方針らしいな」

「あれ、あんたやっぱり知ってたの」

やっぱり、という副詞にちょっと驚く。

「いやさあ、立村には話してるかなとか思ったんだけどね。あんたら親友じゃん。天羽や難波たちに聞いたけど知らないっていうし、美里もついさっき聞いたばかりだって言うし」

「タイミングの問題じゃないか」

そうそう報告しなくてはならない事項とも思えない。たまたま期末試験後すぐ、貴史が見舞いに来てくれたからふたりきりで語る時間ができただけのこと。

「まあいいけど。けどさ、バスケ部みんな命がけで引き止めたらしいよ」

「だろうな」

特に、中学バスケ部キャプテンの新井林が残念がっている顔が目につく。

「あいつやっぱり適性あるもんね。ただうまいとか、シュートが早いとかそういう問題じゃなくてさ、華があるわけ。女子たちがバスケ部の練習見学に来る光景なんて今までなかったってよ。あの、低レベルなバスケ部がだんだん注目されてきつつあるのは、羽飛のおかげといってもいいくらいなんだけどねえ」

「そんなに人気あったのか」

上総は顔を上げて尋ねた。机をたたかれて上半身慌てて起こした。

「当たり前じゃん！ ったく羽飛の引き止め工作もいろいろ始まってるとよ。ほんと大変なんだからさあ。いつのまにか今度は美里が糸を引いたとかいう話になってるし、とぼっちりったら半端じゃあないよね」

——清坂氏にもとぼっちりか。

実際のところは貴史も美里に内緒で退部届けを出したはずだ。それでもありもしない噂が流れているということは、やはり、そういう目で見られているということだろう。

「とにかく、羽飛にはバスケ部復帰を強く希望ってところよ。評議委員会だってそれほどばりばり燃えてるわけじゃあないしさ。ほら、立村、あんたからも言ってやんなよ」

「人の選んだ道に口出しする必要はないはずけどな」

貴史なりに、将来の道を見据えて選んだのだから、あとは見守るのみだ。それこそこずえの言う「親友」としての義務だろう。

「あのさ、立村、あんたそうやってクールにしてるけどさ」

こずえは何かを言いかけて、一瞬黙った。

「まあいいよ。それよか立村、とりあえずこれからC組グループと一緒にカラオケ行くけど、本当に今日来ないわけ？」

「当たり前だろう」

あっさり撥ね退けた。再び上総は机にうつ伏した。

——こんな目眩の酷い日に、耳がつんざくような絶叫なんて聞きたくないだろ？

終業式も、一学期最後の挨拶も滞りなく終わった。麻生先生がひとりで夏休み中の注意事項について語っている。

「海に行くのは構わないが、ウニとかあわびとか勝手に獲るなよ。密漁になるからな。それと当然のことだが水泳禁止地域には決して入るな。溺れたら終わりだぞ」

毎度のことだが、あまりにも幼稚な注意。それに加えてなんで小学生相手の注意書きプリントを配られるのだろうか。しっかり「密漁禁止」とある。

——そんなことする奴いるのかよ。

「俺が高校の時は、密漁こそなかったが、通学路付近の梨畑で梨を盗んで退学になった奴いたぞ。しゃれにならないからな、わかってるんだろうな」

「梨、獲っちゃいけないの？」

あまりにも情けない声が聞こえる。声変わりがまだ微妙に終わっていない片岡の発言だ。

さすがに怒鳴ることもできなかったのだろう。麻生先生はあっけらかんと受けた。

「自分んちの畑なら、梨でもりんごでもみかんでも、さくらんぼでもOKだ、わかるな、片岡」

「え？ 先生、さくらんぼって、ほんとにいいんですか？」

にやにやしながらつつこむのはやはりこずえだった。上総も予想はしていた。下ネタ女王たるもの、ここで押さないわけがない。

「チェリーボーイを食べちゃっていいんですかあ？ それってやっぱり、校則違反じゃん、ねえ」

「古川、頼むからもう少し乙女心を持ってくれないか」

完全に汗でぐっしょりの額を、首に巻いたタオルで何度も押さえつつ麻生先生は返した。

「自分の物か？ それ考えてから言え。ったく一学期最後の最後まで古川は古川だな」

舌を突き出してみせ、こずえは親指をぐいと上げてうなづいてみせた。

下ネタ女王さまはやはり留まるどころを知らなかった。

その他生活面の注意も続き、いつのまにかおしゃべりが始まっていた。もう麻生先生も注意をせずにたらたら続けている。

「宿題がたんまりあるだろう？ それをまずは計画的に片付けろ。遊びたい気持ちはやまやまだろうが、ここで手を抜いたら最後、蟻地獄の二学期が待っているというわけだ。もちろん、夏休み中の講習会にはきっちり参加しろ。それとだ……」

後方の席では関崎、片岡、そして藤沖の三人が声を潜めて話をしていた。こずえも他の女子たちと夏休み中の予定について語らっている様子だった。みな、この一月、たっぷり遊ぶつもりらしい。

——自由研究、どうしようかな。

一応、すべての生徒には「自由研究」が宿題として与えられている。もちろんプリントなどの大量の宿題もどっさり用意されているのだが、これは誰かかしらが担当して答えを写しあえばそれですむ。しかし、自由研究についてはもう、個人的な趣味で構わないとのお達しが出ている。

——なんか、原書で訳せるもの、探そうか。

毎年自由研究のネタといえば、上総の十八番、原書和訳である。

パターンが決まっていると言われればそれまでだが、一番楽にできることだし、他の生徒たちにはそれほど簡単なことではないらしいのでそれなりに差別化はできる。ちなみに去年は「グレート・ギャツビー」の後半部分の和訳を提出した。それなりに褒められた。

「……自由研究だが、お前らの中には英語の原書と和訳でお茶を濁そうとしている奴もいると聞く。まあ悪くはないんだが、このクラスの連中に限り、それは御法度にする」

——今、なんて言った？

上総は首を伸ばして麻生先生の顔を覗き込んだ。一瞬目が合った。攻撃だとすぐに理解した。「曲りなりにもお前らは英語科だ。中学時代それなりに英語が得意だったろうし、何よりもひとりでちゃっちゃと進められるもんだから、楽ではあるだろうな。英文の和訳は」

——ああそうさ、楽だよ、すごく。

唇をかみ締め、上総は次の一手を待った。追試時の「浪人回し」から始まる上総への攻撃には正直むかむかするが、今更何を言っても変わるわけではない。

——俺が毎回英文和訳で点数を稼いできたのが面白くないってわけだよな。

「だが、自由研究をたったひとりで片付けるのははっきり言うがもったいないぞ。なあ、関崎？」

当てられた関崎は模範生らしく、

「はい、そう思います」

朴訥ながらもはっきり答えた。

「いろんな視点から物事を見るきっかけとして、まずは最低三人以上が集まり、それぞれの意見を戦わせた上で和訳を提出するのだったら俺はおおいに大歓迎だ。だが、ひとりだけが訳をこしらえて、他の連中がそれを丸写しする形式のやり方なら、俺はためらうことなく突っ返すぞ。ということでだ、英語科限定ルールとして、自由研究は三名以上が集まって行う、それを決まりにしよう」

ざわつく教室内。だがそれは決して怒りの籠ったものではなかった。

「先生、それって、他のクラスとか、先輩とか、中学の後輩ちゃんたちとも繋がってやっていい

「んですよね」

こずえが即、質問した。

「もちろんだ」

「なあんだ、じゃあ、楽じゃん。ねえ、藤沖」

藤沖に話しかけていた。意味ありげに弱い笑いがくっついている。

「ああ」

小声で藤沖も答えた。他の連中がどこまで理解しているかはわからないが、例の事情と若干絡み合っていることだけは伺えた。中学の後輩たちも一緒に自由研究できる、ということはすなわち。

——渋谷さんと一緒の時間を持つことができる、というわけか。

人のことはどうでもいい。なんだか頭が痛くなってくる。

もちろん声をかければすぐに三人くらいわらわら集まってくるだろうし、麻生先生の要求する「みんな仲良く一緒に」といった内容の自由研究をでっち上げることはたやすいだろう。

しかし、こうも強引に、しかも露骨にいやがらせをされるとは思わなかった。上総がもともと人と群れるのを嫌っているのは、菱本先生あたりから申し送りされているのだろう。得意技を封じ込んで、百パーセント実力を発揮できなくすれば、英語限定学年トップ……もっとも今回は落ちたが……の上総はぐうの音も出まい。そう読んだのだろう。

——しかし、どうしたらいいか。だよな。

このまま言われた通りにしてしまった方がいいのか、それとも。

まだ一ヶ月まるまる夏休みが待ち受けている。その間にでも、いい方法を考えよう。少なくとも麻生先生の先制攻撃にそのまま平伏すことは考えてはいない。

——目には目を、歯には歯を、だ。

ハムラビ法典の一節を心の中で唱え、上総は腕時計を覗き込んだ。

「じゃあ、まずは終了だ。夏休み中、羽目、外し過ぎるなよ。ああ古川、さくらんぼ食いすぎて腹壊すんじゃねえぞ」

「先生、すごい今、エッチなこと口走ったって気付いてないでしょう？」

「はあ？ どこがエッチなんだ？」

「私、これでも乙女百パーセントだからね」

報復を決意した上総とはまた別世界が、麻生先生とこずえとの間でやりとりされていた。

ホームルームが終わり、上総はさっさと教室を出ようとした。その前にひとり、ものすごい勢いで扉を蹴飛ばして出て行く奴がいたので目で追った。藤沖だった。

すでに他クラスはホームルームも終わりのんびりみな語らっている様子だった。

まずはC組に向かい、本日午後のお誘いに参加できない旨詫びを入れた。

こずえにも返事した通り、さすがに上総も体調がしんどすぎて、カラオケボックスでわめく声に耐える自信がない。

「やっぱし無理か」

まず天羽が上総の全身を眺めやり、溜息を吐く。

「悪い、この埋め合わせはまた今度な」

それよりも、一人男子が足りないような気がする。机に天羽があぐらかいて座っている。その横で轟さんがぐるりと見渡し、上総に問い返した。

「ああ、難波くん探してるの？」

「あいつも、カラオケに来るんだろ」

「いや、それがなあ、トドさん、話してやりい」

天羽と顔を合わせ、にやにやしながら轟さんが続ける。

「難波くんはまず、ご飯の前にやることがあるからね。ひとつぱしり、ゆいちゃんの学校に行っちゃった」

「霧島さんの学校か」

「そう。難波くん、とにかくゆいちゃんを守るため日々戦ってるからね」

詳しいことは聞いていないが、上総の知る限り難波は、卒業以降周囲の好奇な視線にもめげず、霧島さんを見張っているという。卒業間際のトラブルも関係しているのもあるだろうが、それ以上に弟の霧島の言動に相当腹を立てているらしい。確認はしていない。ただ天羽たちが弟である霧島に何らかの制裁を考えていることは読める。

上総が霧島に弱みを握られている、といった言い訳を果たして奴らは信じているのだろうか。そのあたりも正直怖くて聞けない。

「よお、立村、今日やっぱし来ねえの？」

背中から首を軽く締められるような気配がした。貴史だった。

「せっかく、品山のカラオケボックスなのになあ」

「ごめん。あと誰来るんだ？」

「ええとだな、俺だろ、美里だろ、天羽だろ、難波だろ、更科だろ、あと古川だろ」

結構な豪華メンバーだ。

「やっぱさあ、こういう時でないとなあ好きな歌歌えねえだろ。お前も来ればいいのに」

「女子はふたりだけなんだな」

美里をきちんと仲間に加えているところが思いやりだろう。

「しゃあねえだろ。あいつも今行くところ、ねえんだからさ」

——相変わらずなんだな。

美里のことも何かと気になる。あれから直接確認したわけではないが、美里とクラス女子たちとの関係は悪化したままだと聞く。特に静内さんとは天敵状態らしい。かつては上総をクラス内に馴染ませようと心を砕いていた美里が、今は一人ぼっちなのは今まで想像だにしていなかった。

——やっぱり、羽飛は気遣ってるんだらうな。

上総は教室をもう一度見渡した。南雲の姿が見えなかった。

「あれ、南雲は」

「ああ、あいつな」

天羽はまたにやけながら「トドさん、説明よろしく」と振った。すぐに受けた轟さん。

「一こ上の先輩いるじゃない。水菜さん。彼女とさっさと出て行ったよ」

「ああ、あの人だな」

現在、南雲の正式な彼女として認定されているのが、二年生の水菜さんだった。焼けぼっくいに火がついたとか、奈良岡彰子に振られてから荒れた南雲を水菜さんが慰めたとか、いろいろな話が出ている。上総が水菜さんについて南雲から教えてもらったことはひとつだけ。もう、それなりの関係だという点だけだ。

一通り話をつけた後、上総は教室を出た。

「立村、もし飛び入りしたいんだったら、電話よこせ。ほら、カラオケボックスの電話番号。トドさんよろしく」

「あいよ」

天羽の求めに即答える轟さん。手早く電話番号のメモを手渡してくれた。

「それにしても轟さん、天羽の秘書みたいだな」

礼を言って受け取った後、上総は改めて轟さんを褒めた。

「まあね。もっとも、天羽くんって人使い荒いけどね」

この一学期において、新しい名コンビとして名前をとどろかせそうなのは、天羽と轟さんのふたりじゃないだろうか。恋愛うんぬんとは別に、なんとなくそんな気がした。完璧なツーカーコンビの完成を見ているようだ。果たして天羽の彼女である近江さんはどう思っているのか、少し気になった。

メモを手帳にはさみこみ、すれ違ったこずえと少しだけ話をした。

「あんた、あれ、まだ中学に行ってなかったの」

「これから」

一応は顔を出しておくつもりでいた。見抜かれていたのが情けない。

「杉本さんによろしく言っておいてよ」

「わかった」

あえて態度に出さないようにしていたのだが、どうもこずえは上総がこれから中学校舎に向かい、杉本梨南と話をしようとしていることを見抜いていたようだ。

「あれからあんた、杉本さんと一対一で話、したの」

「してない」

言い切ったとたん、しゅうと風の引きつる音が聞こえた。カーテンが翻って日の光に溶けた。

「じゃあ、まだ聞いてないんだね」

「何をだよ」

「杉本さんが、佐賀さんに頭下げさせたこと」

——ああ、交換条件の件だな。

渋谷名美子のおねしょ事件を通じて、杉本が交換条件で口を閉ざすことにした理由はそこだ

った。もっとも上総からしたら、たかがその程度の譲歩でもって屈辱を受け入れられる杉本の気持ち、理解できるようでできないままだ。どうしてもそのあたりが自分の中で整理できず、今日まで一切連絡をとらずにいた。

「本当に、あの人が謝ったのか？」

「藤沖と私が証人を見てたよ」

ということは、本当なのだろう。腹のうちは分からないが。ただ生徒会長である佐賀のことだ。自分が頭を下げて丸く収まるのなら、いくらでも「梨南ちゃん、ごめんなさい、許してね」くらい言うだろう。

「しかしよく頭、下げたよな」

「まあね、計算づくだろうけど。人もいない場所だし」

言葉少なく、こずえは佐賀はるみの様子をまとめて伝えた。

「あいつは、どうだった？ また余計なこと言わなかったか？」

目を閉じ、こずえは頷きながら答えた。

「杉本さんは気付いてないよ。素直に受け入れて満足したみたい。わかればいいのよって顔してたよ。すぐ、桜田さんと手と手を取り合ってどこかでお祝いしてたよ」

「お祝い？ 文句も言わずにか」

「そう。でもまあ、杉本さんはあれから堂々と振舞ってるしね。何を言われてももう大丈夫って顔してるよ」

そうだろうか。本心を見抜けるわけではないのに。上総はあえて受け流した。こずえの言葉はまだ続く。

「しょうがないことだけど、可哀想なこと、したなって思うよ」

今更、何を言うのだろう。杉本を追い詰めて無理やり不平等条約を飲ませたくせにだ。

黙っていると、こずえは片手を振りつつ代弁した。

「杉本さんは自分を振った佐賀さんに、ごめんなさいを言ってほしかっただけなんだね。どんな犠牲を払っても、その一言だけが欲しかったんだね」

上総しか今までは気付いていなかった事実を、今になってこずえが勘付いたことは喜ぶべきことだと思う。だが、あまりにも時間がかかりすぎた。手遅れになってしまったことも数多い。もし、少しでも早く、上総以外の誰かが気付いていたら、杉本梨南はプライドや友だちや味方をこんなにも失わずにすんだだろう。いや、佐賀はるみにここまで嫌われずにすんだだろう。無力な自分に目眩がする。

「杉本は佐賀さんに認めてほしかっただけなんだ」

B組の教室入り口で分かれる時、上総はこずえに同意した。

「俺は前から知ってたよ」

こずえに言い残し背を向けたとたん、熱い太陽の雫が降り注いだ。暑いはずなのに、激しい寒気が骨の奥から響いてくる。わけがわからなかった。

——前から俺は気付いていたのに、何もできなかった。

中学校舎へ移動する間に、上総の中から水分は完全に搾り取られていたようだった。できるだけ涼しい道を選んで歩いたつもりだったが、自転車という子分を面倒みなくてはならない以上体力を消耗してしまったようだ。

——暑いな。

ありふれた一言を思いつつ、上総は中学校舎の自転車置き場へまず向かった。突き当たりの窓からよく出入りしたものと、正面から校舎一階の大きな窓を眺めた。大きく開け放たれているし、もぐりこもうと思えばたやすくできるだろう。そうしないのは、うっかり知り合いの誰か……まずは中学の教師たち、および生徒会連中、杉本梨南や霧島たち……と顔を合わせたら最後、何を言われるかわからないからだ。当然のことだ。

かといって、職員玄関にへこへこ歩いて、来客名簿にサインするのも面倒だ。

夏休み中に洗濯するため、上履きを持ち帰っておいたのは正解だった。上総は中学生徒玄関から突入することにした。目的はひとつ、杉本梨南を捕らえるためだ。

——用事があるのだから、当然、会いにきたっておかしくないはずだ。

きっぱり心で断言した。

——藤沖は渋谷さんのことがさぞ心配なんだろう。今だに付き添い続けているんだからな。難波も本当によくやると感心するよ。中学時代はあれだけ罵倒しあっていたのにな。

恋愛感情という把握しきれないものを通じて行動している二人の男子に驚く。それも一切甘い世界とは縁のなさそうな奴らだったのに、ふとしたきっかけでいきなり踊り出してしまおう、それが奇妙だった。

ただ一緒に語りた、側で励ましたい、上総が杉本梨南に望むものはそれだけだった。とりつかれたかのようにべたべた張り付いていたいとかそういうわけではない。なのにこずえを代表とする附属中学出身者軍団は、「立村は嫌われ者女子に魂を抜かれている」などとほざくのだ。非常に、心外だ。

久しぶりに歩く生徒玄関までの砂利道を、上総はふらつきつつ進んだ。

——杉本の今の状況を確認しておく義務だって、俺にはある。あの問題に付き合った立場としては当然だよな。

繰り返し、言い聞かせる。

どうも藤沖と同じような扱いをされることに、上総は耐えられないものを感じていた。例の事件を通してそれぞれの後輩思いが溢れたわけだが、どうしても藤沖と渋谷名美子のカップル……あえて「カップル」とかぎっこをつけたいくらい……と同一視されたくない気持ちが見え隠れしていた。

——あのふたりはやることやってるんだからしょうがないのかもしれないけどさ。

昼間思うべきではない言葉が浮かび、慌てて消した。

——けど、あいつらのせいで杉本がとぼっちりを食ってるってわけなんだ。一応、藤沖付き添

いのもと佐賀さんがあやまって、杉本は溜飲下げたみたいだけどさ。でも、言い訳を今後一切しない以上、杉本は結局、事件の犯人扱いされて青大附中を追い出されるんだ。

ちゃんと、今日これから、杉本梨南を探して会う理由は、ある。

——まだ教室にいるかな。それとも中庭かな。

なぜか「帰ったのかな」とは思わなかった。自分の勘には信頼を置いている。少なくとも杉本梨南に関しては、だが。

上総以外にも数人、高校生や大学生の姿を見かけた。

以前はあまり出入りすることなかったはずなのだが、上総の代が卒業したあたりから中学との交流が活発になってきたようだった。もし本条先輩が公立に進ま ず青大附高へ進学していたらまた、話は別だったかもしれない。中学生が大学にもぐりこむのは日常だったけれども、高校へは何故か足を運んではいけないようなムードもあったし、これも時代の流れなのだろう。

——杉本、いるかな。

一度、ぐるりと見渡してみる。一階廊下、あとは図書館。思い当たる場所をしらみつぶしに当たってみようかと思いつく。その一方、二階の生徒会室付近には 近寄りたくないという本音も隠れている。さて、どの階段から昇ろうか。階段踊り場の窓を見上げ考え込んでいたら、いきなり右肩が重くなった。

——誰かいるのか？

振り返った。全身に張り付いていた汗が瞬間、凍った。

「……あ、あの」

死んでも目の前でにやりとしているこの男を、「先生」とは呼びたくない。

冗談じゃない。なぜ、天敵・菱本が上総の肩に手を置いて、微笑んでいるのだろうか。

「よお、立村、久しぶりだな。元気か」

「お久しぶりです」

夏の風、身体は氷柱。同じく強張った返事をするのみだった。卒業式後、もう二度と顔を合わせたくないと思っていた、うっとおしい熱血男。三年間担任が変わらないという青大附中の制度を無理やりにでも改正させたくなくなった理由がこの男だ。上総以外の連中からすると、極めて生徒思いの暖かいハートの持ち主で、全く何を考えているか分からない狩野先生と比較して人気度もかなり高いという。そいつらには喜んで自分のクラス籍を譲ってやりたいとかねがね思っていたものだった。しかも最後の最後、卒業式の英語答辞を巡るとたばた劇には、正真正銘の殺意を感じたものだった。あの瞬間、上総がマイクを直球で壇上から菱本先生に命中させてやっても、きっと後悔はしなかつたらう。

——見たくない奴に会ってしまったか。

でも大丈夫。ちゃんと用事があるから抜け出せばいい。

「用事がありますので、失礼します」

「ああ待て待て。もうお前の彼女は帰ったぞ」

——彼女？

とっくに血色なんて上総の顔から失せているだろう。

いくらなんでも「彼女」という言葉を教師たるもの、口に出してよいものか。

生徒にもプライバシーというものがあるはずだ。いやその前に、決め付けるような浅はかさにあきれ返る。いったい誰を意味しているのか。問い詰めてやりたい。

白いワイシャツにカーデガンを肩から羽織り、下手したら大学生のような顔つきで菱本先生は続けた。

「今日は、早めに終業式が終わったんだ。その後、希望者は午後から講習会に参加することになっている。学外のセンターで模擬試験を受けることになっているんだ」

——杉本、そんなこと何にも話してなかったぞ？

唇を動かしている自分に気付く。菱本先生は調子よく語りつづける。

「今年からな、できるだけ公立高校向けの模擬試験を力試し用に受けさせるよう三年たちに勧めているんだ。附属高校に進学することが決まっても自分の順位が青潟内でどのくらいの位置にあるのかをチェックしておくのは必要だしな。また、将来の進路について考えるきっかけにもなる。ということでだ、お前の大好きな杉本はそちらに参加しているはずだ」

——お前の大好きな？ この男、全く成長してないな。

いつも菱本先生と対峙する時、片手のこぶしが大きくなる。

振り上げてぶん殴れば、こぶしもしっかり解放されるだろう。

しかしそれができないのは上総のモラル意識がしっかりしているからのこと。

——日本に、殺人許可証がないのが残念だと、これほど思ったことはない。

無理にでも静かに押し込めて思わざるを得ない。

側に貴史でもいれば知らん振りして背を向けて去ることができただろうに、よりによって今日は一人だ。すれ違った他の高校生、大学生も残念ながら上総との付き合いは全くない。

「いい機会だ、時間はあるだろう。ちょっと付き合え。車で連れて行きたいところがある」

万事休す。どうやら菱本先生は本日、終業式にも関わらず早めに帰る予定らしい。手には大きなショルダーバックの紐がぶら下がっていた。

「いえ、僕は用が」

「いや、いいだろう？ 俺も今日は早上がりだ。いい機会だし品山まで乗っていけ」

「いえ、僕は別に結構です。自転車なので」

「こんなくそ暑い中、自転車で品山まで漕ぐのはしんどいだろう。つべこべ言わず、まずは付き合え！」

もう一度、今度は両肩に暑苦しいおもりがどすんときた。

——こいつの両手には、鉛が埋め込まれているのかよ！

袋のねずみ、その言葉を上総は思い出した。

確かに楽ではある。何度か逃げるチャンスを伺おうとしたが、さすがに菱本先生、上総とのバトルに慣れっこになっているのか、決して手を緩めようとしない。気がつけばあっという間に深い緑色の車前に連れ出され、トランクに自転車を詰め込まれ、最後には助手席に座らせられる羽

目となった。本意ではない。

すっかり熱せられた車内には、ガソリン臭さと蒸し風呂臭さとが同居している。煙草臭さだけはなかったのが救いだ。一発で酔っ払うだろう。それでも唇をかみ締め耐えるしかないのもまた事実。上総は窓を開けて無理やり外の空気を吸った。クーラーをかけようとはしなかった。

「どうだ、高校には慣れたか？」

——十分俺の噂は伝わってるだろう？

「なんとかやっています」

無難な言葉でごまかした。鼻歌歌いながら菱本先生はさらなる質問を繰り返してくる。

「羽飛と清坂がこの前うちに来てな、お前のこと心配してたぞ」

——やっぱりあいつら余計なこと言いやがったのか！

一応、貴史からその報告は受けている。確か同窓会を企んでいるとか聞いた。何も触れずにすむことはないだろうと思っていたので、上総を話の肴にされたことに関しては甘んじて受けようと思う。しかし、なぜこうも、勝ち誇ったような尋ね方をするのかが理解できない。

「相変わらずクールに構えるのもいいが、もう少し気持ちをクラスメートにぶつけたらどうなんだ？ 話によると、お前のことを応援している同級生がいるようだな。確か、ほら、公立から来たという、なあ」

——なにが「なあ」だよ。

誰を指しているのかはいやでもわかる。それよりも驚いたのは、なぜ外部生の関崎についてこうも情報が早く回っているかということだった。信じられない話だ。中学と高校とでは、情報交換がかなり盛んなのだろうか。当然かもしれないが意外でもある。気を付けたほうがよさそうだ。

気持ちを引き締め外を眺めていると、いつのまにか品山の国道沿いまでいたのに気付いた。自転車よりももちろん早い。ゆっくりスピードを落とし、ロードサイドのファミリーレストラン駐車場に車を留めた。びっちり込み合っているように見えるが、それでもかろうじて場所を押さえることはできた。

「まあいい、食えよ。遠慮すんな。立村とは卒業式の後もう少し話をしたかったんだが、さっさと帰っちゃったからなあ」

——永遠に話したくなかったからだよ。

罵倒許可証を所持していない上総には、さすがにそこまで口に出せない。

一礼して車から降り、胃の重たい状態で店に入った。一階のみはかなり広いファミリーレストランのようだった。親子連れが殆どだったが、極めて運のいいことに窓際の席がちょうど入れ違いで空いていた。すぐに案内された。

「俺はなあ、運がいいんだよ、どんなに混んでいる店でもな、俺が行くとすぐに座れるんだ」

——何がそう自慢してるんだか。

上総は黙って案内された席に腰を下ろした。昼ご飯を食べていないので当然空腹のはずなのだが、車に揺られたせいか食欲が失せている。一方的に菱本先生がステーキ定食を二人前注文したのは何か嫌がらせでもしたいのだろうか。教師運最悪の上総には、不愉快きわまりない。じり

じりに熱い鉄板のまま、顔に押し付けてやろうかとすら思ってしまう。

「いやー、腹、減ったよなあ」

あえて答えず、水だけ飲んだ。

「喉も渇くよな。そうだ、立村、どうだ。麻生先生がお前のことを心配してたぞ、入学してからすっかり元気を無くして、大丈夫だろうかってな」

——麻生先生？ ああ、第二の天敵か。

黙って顔を見るだけにつとめた。そこまで中学と高校の情報交流が行われているのならば、さぞろくでもない情報が集まっているのだろう。上総が言い訳したところでどつぼに嵌るのがおちだろう。能面をかぶってやろうと思う。

「オリエンテーション後にもな、にお前の父さん母さんと、麻生先生と、俺と四人で話をしたんだがな、全員なんとしてもお前に素晴らしい三年間を与えてやりたいという点で一致したんだ。まあ、その後は麻生先生がいろいろと気遣ってくれているようだが」

——何考えてるんだ？

一言、それにつきる。上総はコップの水を飲み乾した。ウェイトレスがすぐに水を足してくれた。まだステーキランチは来ない。こう言ってはなんだが、菱本先生が勝手にメニューを選んだ以上、ここの食事代はおごってくれるものと解釈していいのだろうか。

ざわめく子どもたちのおしゃべりが店内のBGMと入り混じり、ちょうどいい厚手のカーテンとして遮断されている。だから菱本先生も遠慮なく喋りつづけられるのだろう。

「立村、この前、羽飛からも聞いたが、お前は麻生先生のことを誤解しているんじゃないか？」

答えない上総に業を煮やしたのか、菱本先生はお得意のお説教をとくとく語り始めた。別に誤解しているつもりはない。ただ事実、上総のことをあの先生は露骨に無視している、とただそれだけのことだ。

「いえ、してません」

「いや、確かになあ、麻生先生も思い悩んでいると思うぞ」

信じ難い言葉を平気で言い放つ菱本先生を、上総は完璧に軽蔑目線で見据えた。

貴史がいったい何を吹き込んだのかはわからない。聞き出そうとも思わない。また貴史に上総が、麻生先生について愚痴ったことがないわけではない。教師運の悪さを呪っただけだが、やはり貴史からするといろいろ考えることもあったに違いない。

悪いが、上総は菱本先生のこと三年間、ありのまま観察して来て、思いっきり嫌いになった、ただそれだけのことだ。

「いい機会だから話しておくが、麻生先生がな、なぜお前に対して厳しいのか、その理由はひとつなんだ」

——浪人回しをするとか、英語の能力だけで威張るとか、さんざん嫌がらせしておいてか？

もちろん尋ねることはせず、上総は菱本先生の鼻だけにらみつけていた。

ずっと二人の前に、ライス皿とじゅるじゅる騒いでいるステーキの盛り合わせが差し出された

。相手に互いひとこと断ることもなく、すぐにナイフとフォークを脇の籠から取り出した。まずは肉を一切れ切り刻み口に押し込むと、さっきまで車酔いの感覚が残っていたにも関わらず、すぐにすっきり消えた。食べたたん、空腹だと気付いた。

「麻生先生はな、お前の御両親から、厳しくしてほしいと頼まれているんだ。これもすべて、お前への愛情から出たことなんだ。きっと麻生先生は卒業まで言うこともないだろうが、俺が説明する分には問題もなからう。ほら、熱いうちにさっさと食え」

二口目に押し込んだステーキの肉が、どうしても噛み千切れない。

ひたすらガムを噛みつづけるような気分だった。

——あの、親たちがまたたくらんだのかよ！

ぞっとする。吐き気がする。もちろん、読めないわけではない。やりかねない。

「先生、あの、それは、いつ」

なんとか喉に流し込み、二杯目の水を飲み乾し、上総は尋ねた。

天敵に「先生」と呼びかけねばならない屈辱を、なぜ耐えねばならないのだろう。

こんな、訳のわからないことを勝ち誇ったかのように言い放つのが許せない。

「やはり、知らなかったんだな」

わざと間を持たせて、焦らせようとするその小手先テクニックに勘付き、さらに部千切れそうになる。しかしここで切れてはなるまい。話を聞きだすにはまず、黙ること、これが必勝法だ。上総が言い返さなかったのを、動揺しているためと勝手に勘違いしてくれたようだ。

「そうなんだ、麻生先生に俺は、お前のことをしっかり申し送りしておいたんだ。いろいろ誤解されやすい奴だが、真面目でひたむきで人望もあった、自分に自信さえつければ、あとは少しずつ好転してくるだろうとな。これは、駒方先生や狩野先生も話してたぞ」

——ああご苦労さん、褒めて褒めて、あとはけなしておわりかよ。

「その時な、お前のお母さんがな、言ったんだ」

「母が、ですか」

嫌な予感がした。確かにそうだ。父も母も、何か妙な口調で麻生先生を褒めてなかったか？

てっきり自分の息子の担任だからあがめているだけかとたかをくくっていたのだが、どうやらそこには裏があったらしい。

単純で隠し事のできない菱本先生は、若々しい食欲で一気に全皿、平らげてしまった。まだ上総が噛み切れない肉に四苦八苦している間に、今度はデザートまで注文している始末だ。

「そうなんだ。お前のお母さん曰く、今までお前がずっと友だちに対してしてきたことを、今度は自分がされることで相手の気持ちを学べ、とな」

「そんなこと」

「そうなんだよ。麻生先生も最初は驚いたみたいだな。俺もさすがにそれは残酷だと反対した。だがお前の母さんはおれなかった。とにかく、相手の気持ちを実体験で感じさせることが一番大切だということで、だな」

「それで、麻生先生は」

「そうなんだ、麻生先生は、あえてお前を無視するふりをしていただけなんだ。そして、陰で見守りつつ、立村、お前の方からしっかり話し掛けてくるのを待っているんだ」

——こんな、ネタ晴らしして、何が楽しいんだこのうざったい熱血教師は！

かみつづけていた上総は、一気に口の中のものを飲み下した。

もう一杯水が欲しかった。

——何を勘違いしてるんだ、あいつらは！

余計なことを口走った母。二人の子どもである上総は両親が通常の親たちと比べてかなり変わった価値観を持っていることに気付いていた。そしてその発想が飛び抜けすぎているだけに、かなり反感を買っているであろうことも。特に母の発想は、上総に理解できるものではない。

——普通ってわけじゃないけど、絶対あれ変だ。

よりもよって、自分の子どもに対し教師へ、

「あの馬鹿の根性をたたきなおしてください！」

と罵倒するのはどういうことなんだろうか。

上総は最初から麻生先生の攻撃をかわしていくつもりだった。無視しつづけるなら上等、こちら相手になんかしない、そう決めていた。しかし今の話が本当だとするととんでもない勘違いを上総がしていたことになる。

麻生先生が上総を無視してきたのは、単に滝壺へ仔獅子を突き落とした親獅子の振る舞いと  
同じ、とでもいうわけか。

いや、なによりも、許せないのは。

——そういうことを、なぜ、俺にいきなりばらそうとするんだらう？

——機密問題だろ？ それを何故、そんなことを！

アイスクリームの皿を、残っている液体まで丁寧に掬い取り、満足そうににやけている菱本先生を上総は、決して許さないと誓った。ついでに、母親顔をしつつも陰で策を練って上総の足元を救おうとする母にはもう、何も言うまいと決めた。

上総がだんまりを決め込んでいたのは、元担任のあたたかい打ち明け話に感動していたからだ。おめでたさ腹いっぱい菱本先生にわざわざ自宅まで車にて送っていただいた。お礼を言わねばならないのが吐き気するほどむかつくが、人間としての礼儀だ、しかたない。

「ありがとうございました」

「夏休みはいい機会だ。直々羽飛から、同窓会の誘いが来るだろう。お前も来るな」

首がちぎれるほど横に振りたかったが、これも恩師に対してすべきことではない。あえて耐えた。

「じゃあな、今度遊びに来いよ」

——それはあんたの葬式だ。

毒を身体から発散しない自分の顔、これぞポーカーフェイス。

車が走り去った後上総は、すぐに台所へ直行し、氷皿半分の氷を一気に口へ放り込んだ。

むりやり噛み砕いた。

菱本先生がなぜ、いきなり、両親と麻生先生との間に結ばれた秘密を暴露したのかそのあたりが解せない。本当なら卒業までとことん騙してくれればよかったのだ。そうすれば上総も一切反応することなく、麻生先生を無視することができただろう。もともと担任教師なんてどうだっていい存在だ。菱本先生のように無理やり心へ割り込んでこられるようなことをされるよりは何万倍もましだ。

——しかし、うちの親にはどう言い訳するつもりなんだ？

飲み込んだ氷の冷たい喉越しに、少しずつ理性を取り戻す。部屋に戻り、制服を脱ぎ捨てた。そのままベッドに横になる。

——種明かしをした以上は、報告するよな。

少なくとも隠しておく意味などない。もうばれてしまった以上、麻生先生はわざとらしい非情教師の仮面を被る必要はないわけだ。母の指示に従って、本来心温かい中年教師の笑顔を封じてきただけなのだから、当然だ。

夏休み中にうまく自分の心を整理して、二学期以降笑顔で英語科一年A組に居座れとのお達しだろうか。たまたま見つけておせっかい焼きの菱本先生の本能が炸裂したのか。その辺は想像しない限りわからない。

ただ、はっきりしているのは、

——その手には乗らない。

上総の確固たる決意、そのものだけだ。

しばらくまどろんでいた。味はともかく満腹感だけは味わえる食事だったこともあり、自然と瞼が重くなる。宿題はたんまりだが、夏休み前日にさっそく手をつけるほど上総は優等生ではない。考えないですむ方法はただひとつ、ひたすら眠ることだけだ。できれば夢も見たくはない。

やわらかい発信音が、窓辺から聞こえてきた。

普段なら部屋の戸を締めっぱなしにしているのに、居間からの音は聞こえてこないのだが、窓を思いっきり開けているせいかかすかに響いてくる。

——電話か。

シャツ一枚でまずは起き上がり、受話器を取った。

「はい」

時計を見あげると、まだ二時を回ったばかり。ということはまだ、三十分しか寝ていないということになる。

——立村か？ 関崎だ。

太い声が、背後から響く風のような物音を押しつぶすように聞こえてくる。中途半端な睡眠だとやはり、頭がうまく働かない。一度頭の中で相手の発言を繰り返し、確認する。

「関崎か」

——そうだ。

「何か用か」

クラスメートの関崎という「事実」は理解できる。用事があるからかけてきたのだろう。電話線は繋がっていても熱せられた頭の回線がまだ届いていない。

——お前と直接話がしたい。

「いきなり言われても」

思わず言葉が飛び出した。一方的な要求を突きつけてくるのはなぜなのか。思考の準備が整っていないうちに重たい言葉を押し付けてほしくない。今、話したいのなら電話でもいいだろう。忘れ物でもしたのか、それとも青大附高の宿題量に恐れをなしたのか。

上総の返事を全く聞いていないと見える。関崎はとつとつと要求を突きつけてきた。

——いや、お前の家の側まで来ている。

家の側というのは、つまり品山に、ということか。

たまたま用事があって来たというわけではなさそうだ。だんだん口を動かしていくうちに、状況が飲み込めてきた。これは今までの関崎行動パターンに沿った、本能での押しかけ要求に違いない。予約なしで飛び込んでくるという、非常に迷惑極まりない行動だが、関崎の中では「友情の現れ」と解釈されているのだろう。

——この前のカラオケボックスの近くまで自転車で来た。だから、これからお前の家に行きたい。住所録は持っている。

住所録を持っていることと、家に押しかけることとイコールになるのだろうか。

おそらく関崎の考えではそうなのだろう。

非常識じゃないかと文句を言いたいところだが、似たようなことを別の相手に対してしたことのある上総にはつっぱねられない。誰とは言わないがたとえば、杉本梨南とか。

過去の行動に戒められつつ、上総は答えた。

「来るのは構わないが」

それしか言いようがない。間髪入れず、関崎が重々しく返事をした。

——わかった。じゃあ今から行く。

もうこういう場合、諦めるしかない。受け入れるしかない。別に上総は関崎が嫌いなわけでもないし、露骨に縁を切りたいたいとも思っていない。ただ、適度な距離がほしいだけなのだが、そのあたりを理解してもらうには外部生という壁が高くそびえているこの現状。

だがしかし、住所録だけで本当にたどり着けると思っているのだろうか。

念のために尋ねてみる。

「ただ、行き方本当にわかるのか？」

やはり速攻で関崎は答えた。

——品山駅まで行くが、そこまで迎えに来てもらえるとありがたい。

「わかった」

読み通りだ。少しだけ溜飲が下がった。「青潟の秘境」と一部生徒から揶揄されている品山地区をなめてもらっては困る。いくらスーパー外部生頭脳に関崎であっても、そうやすやすと上総のホームタウンを我が物顔で歩いてもらいたくはない。いや、歩けるわけがない。

あまりだらしのない格好で外に出るのもいやなので、水色のパーカーをひっぱり出して羽織った。暑くても腕をさらしたまま歩くことに、なんとなく抵抗があるのは昔からのこと。自転車で日陰の多い道を探して走った。コンクリートで固められた道の方が早く駅に到着するのはわかっている。急いでいたらもちろんそちらを選ぶだろう。

——関崎は何を考えているんだろうか。

時間をかけてゆっくり漕いでみる。

——俺の顔を見て、何を話すつもりなんだろう。

全く想像していないわけではなかった。

考えられるとすればまずは、麻生先生に追試の際言われたこと、

——後期評議委員に選ばれる予定の関崎に付き従い、僕になれ。

その旨、当の本人関崎から申し渡されるのかもしれない。

もしくはその流れにおいて、規律委員に押し込もうとかそういったことを考えているのかもしれない。藤沖が応援団結成のため評議委員を降り、その後釜に関崎が入るとなると当然、規律委員の座が空席となる。そこに収まって服装検査やら季刊誌の「青大附高ファッションブック」を編集するのか、その辺を勧めようとしているのか。

——もちろん、規律委員会が悪いわけではない。知り合いもいるし。

南雲もいるし美里もいる。まあ、東堂についてはこれから少し考える必要はあるだろうが、少なくとも居心地の悪い場所ではなさそうだ。

だがこうやって陰から手を回されることをありがたく思えるほど、今の上総は人間ができてはいないのも事実だった。ただでさえ、猛烈に脳内が沸騰している状態の今、関崎に何を話せというのだろう。いや、何を聞けと言うのだろう。

駅前に到着した。

昼下がり、鈍行しか止まらない駅前。繁華街などもちろんなく、いかにも家に戻っていない学校帰りの男子高校生連中がたむろっているだけだ。一応、品山駅前にはファーストフード店が一軒建っているので、自然とそこがたまり場となる。上総は決して立ち寄りたりしなかった。小学校時代の同級生と顔を合わせる可能性もあるしそれ以上に青大附属の制服を着ているだけでガンつけられないとも限らない。危うきに近寄りたくはなかった。

まず駅前脇の自転車置き場に無理やり滑り込ませ、駅の入り口に向かった。戸は開け放たれていた。汽車が通り過ぎた後なのか、人気はあまりなかった。誰か降りていれば、すぐに見つかるはず。

待合室を見渡すと、背を向けたまま自動販売機を眺めている男子がいる。

白いTシャツに、デニムジーンズのさっぱりした格好で首をひねっている。

——喉が渴いたのか。

学校から直行したわけではなさそうだ。てっきりジュース一本買うつもりなのかと思いきや、考え直したのかいきなり男子トイレへ向かおうとする。時間つぶしのつもりなのか見当もつかない。とりあえず上総は直感に任せて一本、コーラのボタンを押した。缶ではなく、瓶で買うことにした。

派手な音。すぐに取り出し、立ち止まった男子の背に呼びかけた。

「関崎、これ」

振り返った関崎に、上総は瓶を差し出した。最初に上総の顔を、次にコーラ瓶へ目を移し、関崎は黙って受け取った。すぐに礼を言われた。

「ありがとう」

この男、とにかく礼儀はきちんとしている。何かがあると必ず礼を欠かさない。

——確か、杉本にも、葉牡丹を受け取った時、礼を言ったらしいな。

隣に腰掛け、コーラ瓶の口を開け、一気に煽った。炭酸なののがぶ飲み平気のようだ。

口を片手で拭い、上総に手渡そうとする。まだ半分ほど残っている。白い泡がたっている。

「お前も飲めよ」

「いい、いらない」

きっぱり断ってしまい、あわてて訂正しておいた。誤解は避けたい。

「人が口をつけたもの、食べたり飲んだりするの、苦手なんだ。いや、別に、関崎が汚いとかそういうわけじゃない」

「だいたい想像はつく。わかった。全部飲ませてもらう」

気を悪くした風でもなく、関崎は穏やかにその半分を飲み乾した。

「この時間はあまり人がいないのか」

「この駅からは、あまり乗らない。急行の停まる本品山駅まで自転車で行ってそこから乗るパターンなんだ」

人気のない駅を不思議に感じたのか、関崎が質問してくる。

ごもつともだ。簡単に説明をしておくとな納得したのか、しばらく黙って瓶の口をなめていた。自転車をどこに置いてきたのかそれとも車で来たのか、その辺がわからない。まだ顔が赤らんでいるところみると、おそらく自転車だろう。かなり根性かけて漕いできたのだろう。ご苦労なことである。

——けど本当に、なぜ来たんだろう。

わざわざ、こんな品山くんだりまでよくも、がんばって漕いできたものだ。

もちろん質問されたら答えるしかない。だが、最初から不利な体制のままお人よしの顔をするつもりもない。まずは、こちらから様子を伺ってみるのが得策だろう。本条先輩からの教えでもある。

——まずは、先手を打て。ジャブを繰り出せ。その後、相手の要求をうかがえ。

本条先輩の言葉は、上総にとってバイブルだ。当然、それに従わせていただく。

「関崎」

「なんだ」

呼びかけると関崎は、瓶を両手で持ち、心なしかほっとした顔を見せた。

「聞いていいか」

「ああ」

「関崎はこの前の、あの女子と、付き合っているのか」

地面にとんがった音が響いた。鈍音だった。慌てて関崎が腰をあげ、コーラ瓶を拾っている。初対面の時から関崎乙彦という奴は、きわめて分かりやすい感情表現をする男だった。

手を差し伸べ、コーラ瓶を受け取った。

どうやら、最初のジャブは急所を直撃したようだ。先手必勝、本条先輩はやっぱり正しい。

座り直し、関崎は耳を火照らせたまま問い返した。

「あの女子というのは、誰のことだ」

「視聴覚教室で、隣にいた、B組の」

上総はそこで言葉を切った。

やはり本条先輩のお言葉その二だ。

——露骨に答えを言うな。様子見段階では匂わせろ。もし答えが外れていたら一気に相手が有利になっちまう。確信するまでは小出しにしろ。

関崎の見事ゆでダコ状態を見れば、露骨に言い切ってしまうてもいいような気がするが、やはり本条先輩の教えは守るべきだと思う。

「付き合っていない。いないが、友だちだ」

「本当に、それだけか」

「ない。あいつは面白い、いい奴だ」

「あいつ、か」

もう答えは出ているのに、なぜ隠すのだろう。

第一、女子に対して「あいつ」などという二人称を使うこと自体が、答えだ。気付いていない

のか関崎は、露骨に言い訳をする。

「別に青大附属では珍しくないだろう、そういう友だち関係は」

「そうだな、確かに」

「なら、これから先、付き合うつもりはあるのか」

「わからん」

曖昧な答えを、きっぱり答える関崎。ここで手を引くつもりは全くない。

藤沖も早い段階で、関崎の恋人候補として挙げていた。

その女子の名をあえて出さずに問いつづける。

「なぜ、そう思う？」

「先のことはわからないからだ」

やはり優柔不断な台詞だが、即答する。そこまで言い切れる根拠とはどこにあるのかわからない。どう次の一手を繰り出していけばいいのだろう。汗がこめかみに滲んでくる。

——何が、先のことはわからない、だよ。そのくせ杉本に対しては。

考える間もなく、次の言葉がこぼれてしまった。脳のどこかが緩んでしまったようだった。

「なら、杉本とこれから先」

言いかけた瞬間、言い切ることを許さない勢いで拒否された。

「ない、去年の二月に話したことは、変わっていない」

「先のことはわからないだろう？」

「わからないが、これは俺の確信だ」

頬の辺りに何か、鋭くちくちく刺してくる感覚が走る。蚊に刺されたのだろうか。かゆみはない。横目で関崎がじっとにらみつけてくるのだけ感じた。

「そうか。杉本に対しては、変わらないのか」

「それは去年話したはずだ」

関崎があらゆる言葉でもって、何度も自分をあきらめさせようとしていたことを、上総は決して知らないわけではなかった。わかっている。でも、杉本は諦めていない。屈辱をも、関崎から受け入れられることを信じることによって乗り越えている。

その力を与えられるのが今は、関崎だけだ。

どんなに関崎のスペースに杉本梨南の居場所が存在しないとしても、「可能性あり」のランプがついている限りは諦めずに生きていける、杉本梨南にとっての関崎はそういう存在だった。

——杉本にとって価値のある奴からでないと、命綱にはならないんだ。ただの、蜘蛛の糸でしかないんだ。

どんなに上総が心を砕いたとて、杉本にとっては役に立たない。

上総の与えた言葉をすべて集めても、関崎の「信じている」という言葉にはかなわないのだ。

それと同じく、関崎が「受け入れてくれる」という可能性を信じることにより、杉本は来年三月の公立高校入試に向けてがんばることができるのだろう。

たったひとつの命綱が自然と断ち切れようとしている。関崎が誰と付き合おうとももちろんそれは自由だし、杉本の想いを受け入れられないというのも当然のこと。だが、その願いが受け入

られないという事実を、今の段階で気付かせてしまったらおそらく杉本は木っ端微塵に壊れるだろう。

さっき、関崎が落っことしたコーラ瓶と同じくらいの強度を、杉本が持っていると思ったら大間違いだ。どんなに理不尽と分かっている、伝えずにはられない。それしか上総にはできることがみつからなかった。

「俺が関崎にこんなことを頼むのは、間違っているかもしれない。だが、頼む」

上総は瓶を足元に置いた。

「これから先、お前が誰か他の女子と付き合った場合、できる範囲でいい、杉本の前に見せないような付き合いにしてくれないか」

さすがに「付き合うのをやめろ」という権限がないのは、上総も承知していた。

特に表情も変えず、関崎はたんと問い返した。

「前に見せられないとはどういうことだ？」

何度も繰り返した説明を、またここで語らねばならない。

「杉本は、来年の三月で青大附属から出て行く。予定通り、公立高校試験を受験して、他の学校に進学するはずだ。もう青大附属には戻ってこない。でもせめて、公立の試験が終わるまでの間、杉本をこれ以上不安にさせたくない」

一気に言い切った。すでに台詞と化したその言葉がどう響いたかを知りたい。

「どこの高校を受けるんだ」

「青潟東。本条先輩の進学先だ」

「立村、つまり俺に来年の三月まで、静内と付き合うなど言いたいのか」

関崎は、彼女の苗字を今日初めて、口にした。

——まずい、本気か。

警報ランプが点滅する瞬間、頭上に衝撃が走った。思いっきり叩かれた。関崎は鼻まで紅潮させ、立ち上がり外を指した。

「ちょっと来い！ 外で話すぞ！」

完全に激昂させてしまった。ジャブのつもりが急所を直撃してしまったようだ。

ここは人気のある場所にて冷静にさせたほうがいい。うっかり外で、あの高校生連中の前で修羅場になってしまったらしゃれにならない。本条先輩の教えその三、

——相手がぶっちぎれたら、とにかく自分のホームから動くな。少しでも落ち着かせてか次に進め。これはな、女も一緒だぞ。まずは宥めることだぞ。いいな。

「いや、外はまずい」

落ちついて交わすつもりだった。だが関崎の怒りは収まる気配がない。

「こんな薄暗いところで話していたら、いつまでたっても埒が明かないだろうが！」

——やはりこいつにとって静内さんという人は。

上総は確信した。

「話をするだけだ。お前がなんでいきなり、静内に対してわけのわからないことを言ったのか、その理由を論理だてて聞きたいだけだ」

腕をひっぱられ、強引に立たされ、引きずり出されながら答えを受け入れた。

——特別な人なんだな。

あの、視聴覚教室内で見た時、杉本の様子に動揺した静内さんという人の気持ちを推し量ればおそらくそういうことなのだろう。

あとは時間の問題と笑っていた藤沖の言葉もさもありなんだろう。

このままでは、自動的に、誰からも応援される外部生カップルが誕生する。

同時に、ひとりぱったり救いの糸を断ち切られ、すべてを失う女子が現れる。

どんなに代用品を用意してもどうにもならない。

上総自身が、杉本にとって関崎の代用品になんてならないことくらい、最初から分かりきっていること。そんなことを考えることすらおこがましい。

——だったら、どうする？

上総の脳裏には、巨大なタイムウォッチの針が回り始める様子がはっきりと映っていた。

——先の一手を俺は、どう打っていけばいいんですか。本条先輩。

さすがの本条先輩も、そこから先のノウハウは教えてくれたためしなかった。

うまくごまかして早々にお帰りいただくか、それとも開き直ってとことん言いたい放題ぶちまけてやるか。そのどちらかを選択しようと、外の陽射しに頬を向けた時何かがちりちりと燃えるような音が聞こえた。もちろん、空耳だ。

——あいつらは。

息が詰まったようで、声が出ない。同じものがつま先にもしこりのように溜まっている。

じんわりと焼けてくる。関崎が上総の腕をつかんだまま、げげんな顔で振り返る。

「どうしたんだよ」

そのままひっぱろうとするのを、抵抗せずただ動かずにいた。

自転車置き場に足を向けたまま、土という名のフライパンにあぶられたままでいた。

かつて、同級生だった連中なのか、それとも上級生なのかは読み取れない。

小学時代の知り合いはできる限り顔を認識しないよう心がけている。

それでも見えてしまうのは、ランニング一枚に暑苦しい黒のボンタン姿で、かかとを踏んづけている野郎たちだ。臍どころか下手したらその下までずるずるに見えてしまうかもしれないのに、あぶなっかしい格好でしゃがみこむ姿は、決して真似したくなかった。額を真四角にそりこみ、ついでに眉も落としている。

典型的な「不良」スタイルだが、なぜか青大附属には見かけないタイプの集団だった。

——たぶんやっていることそのものは本条先輩の方がもっと派手だ。

せせら笑いたい。しょせん、見た目で脅したところでちっとも怖くなんかないと言い放ちたい。それができれば今、足がすくんで動けないなんてことはないだろう。なぜ動けないのか、なぜ、勝手に足が駅に戻ろうとするのか。一步、後ろに足を引いてしまう。真っ黒焦げになる前に屋根のあるところへ戻りたかった。

「立村？ どうした」

関崎が腕を放し、尋ねてくる。

「なんでもない」

「なんでもなかったら、外に出られないなんてことはないだろう」

面倒くさそうに首をひねり、ふっと視線を駅前の自転車置き場辺りに置いた。

勘付いたのか。意外と敏いのか。上総は目を逸らした。声だけ聞いた。

「あいつらと何か、因縁でもあるのか」

なぜ関崎は、直球ですべてを問おうとするのだろう。もっと確認すべきことはあるというのに。その確認すべきこととは。

「自転車はあそこに置いたのか」

これからどうやって、家に向かえばいいのか、それだけのことなのに。

関崎はあっさり答えた。わざわざ指差した。

「ああ、鍵もかけてある」

「家に、まず案内する。自転車で行こう」

——ということは、あそこに寄らねば帰れない。そういうわけだ。

骨まで黒焦げになりそうだ。上総は大きく息を吸い込んだ。関崎と視線を同じ場所に落とした。たむろう十人ばかりのボンタン連中を無視するしかない。

また、耳にちりちりと、何かの燃える音が聞こえる。

——あいつらは、俺のことを覚えている。

忘れていないわけがない。かろうじてあの十人の中に浜野がいないことだけは確認できた。もし仮に浜野がいたとしたら、ここで立ちすくんでいる上総を見つけて何もしないわけがない。関崎が側にいても関係ない。親しげな振りをして同窓会に誘うだろう。勘違いした関崎が、浜野に対して友好的態度を取らないとも限らない。たぶん、上総は両サイドから挟み撃ちされて完全に黒焦げ状態となるに違いない。

——浜野がいなければ、たぶん大丈夫だ。

もともと浜野がひとりで仕切っていたようなもの。奴が命令しなければ、他の連中が一方的に上総へちょっかいをかけてくることはないだろう。もう三年も経ったのだし、忘れられた因縁をもって迫ってくることは、まずない。

そう、信じたい。

なのに、焦げてしまった自分の内側には、その信じる言葉が届かない。

焦げていく。すべてが黒く、沈んでゆく。

万事休す。

不意に腕が上総の肩に回ってきた。筋肉質の引き締まった腕は自分のよりもはるかに太かった。

「立村」

耳元に囁いてきたのはやはり、関崎だった。

「自転車、取りに行くか」

上総の背中を片方の手で強引に押し出すようにし、続けた。

「なにかあったら、俺が加勢する。堂々と取りに行け」

——お前何もわかってないくせに、何言うんだよ！

いったい何が起こったというのか。関崎は無理やり上総を自転車置き場へ、身体ごと引きずっていった。足を引きずるようにして上総はふらふら歩いていくしかない。視線をあえてボンタン連中から逸らしつつ、上総は関崎のするがまま従い、身体を強張らせていた。

なめらかに動き出すのは、心のことばだけ。

——なんで、なんで関崎、そんなことをするんだよ！

誰も上総たちにちょっかいを出してこなかった。他の連中がどういう顔をして上総を覗き込んでいるか知りたくもなかった。

——お前に加勢なんかされたくない。なぜ、俺をそんな扱いしようとするんだ？ 何を聞いて、勝手に俺の家に来ようとするんだ？ なぜ。

自転車を漕ぐ一瞬前に、もうひとりの名前がこぼれそうになった。

——なぜ、お前は、あの菱本と同じように暑苦しいものを押し付けようとするんだよ！

とっくにステーキランチは胃の中で消化されすっきりしているはずなのに、またおかわりが別の形で運ばれてきた、それが関崎乙彦という男として、品山の立村上総宅へギフトとして送られてきた。そんな感じだった。

品山駅からは近道して草むらを通ることにした。来た道とほぼ同じだ。どうせ家には誰もいないし、たぶん冷蔵庫には飲み物の他簡単に食えるものも残っているだろう。

自転車を並べて走りつつ、関崎がいきなり上総に話し掛けてきた。

「外でいい」

——外？ 何言ってるんだこいつは。

「暑いだろう？」

言われた意味がつかめず上総が尋ね返すと、

「夏だから、暑いのが当然だ」

またわけのわからないことを言い切った。何が「外でいい」んだろうか。どこか行きたいところでもあるのか。いや、それはないだろう。関崎は最初から家に来ると話していたではないか。それともふたりで何か、運動でもしようなどと馬鹿なことを口走るのだろうか。悪いがジョギングはこの炎天下お断りだ。

——しかし、関崎にしては珍しいな。

意味不明なことを口走ったことが、こいつの場合あまりないはずだ。厳密に言うと話の方向が間違っていることは結構あるのだが、脈略のない説明はめったにしない。しかし今の「夏だから、暑いのが当然だ」と開き直られても困る。

上総はいったん、ペダルを踏む足を緩めた。

ちょうど小路角に「品山小学校」のたて看板がひっかかっていた。文字は白地に黒ででかでかを書いてあるので読めるが、かなり古いものでペンキの皮がはげていることを上総は知っている。そこの小路をつきればあとは家まですぐ側だ。夏の草むらは青々として、ふくらはぎあたりまで細い葉の先がつんつんひっかかってくるのを感じる。

まだ乗っている上総の脇に自転車をひっぱってきて、関崎は降りて、きちんと留めた。

「ここで話したいことがある」

こう言い切る関崎に、何も言い返すことはできない。しかたなく上総は頷いた。

「話は聞くよ」

即座に関崎の口からは、繰り返し聞かされた言葉があふれ出てきた。予想していたことではあるけれども、こぼれる言葉はフライパンに注がれる油のようなもの。

「単刀直入に言おう。俺は、立村、お前に復活してもらわないと困る」

——言いたいことあるなら、さっさと見えよ。

聞き流せばなんとかなるだろう。用意していた言葉も上総にはちゃんとある。

「復活するとは、つまり、お前に英語科の運営する立場、つまり、委員に戻るべきだということだ。それは、俺ひとりが考えていることではない。藤沖も、古川も、それと他の連中も、あと麻生先生もだ」

わざわざ説明されなくてもそのくらいわかる。

麻生先生の件だけひっかかる。まさか、麻生先生のわざとらしい悪役ぶりを見抜けなかったのは自分だけだとか言わないだろうか。そうだとしたら、かなり、不愉快だ。

「まさか、それはないだろう」

知らん振りを決め込んでおいたほうがよさそうだ。適当に流した。とたん、すぐにつっかかってきた。

「お前がそういう声を聞こうとしないからだ！」

——そういう声？ ああそうか。俺ひとりが馬鹿だから何も気付かないだけだと思い込んでるのかよ。

事実、菱本先生に暴露されるまでは、麻生先生の言動が芝居だとは思わなかった自分である。笑われてもしかたないとはわかっている。理解していることと受け入れていることとは違うという、ただそれだけだ。

どこまでも熱い、関崎乙彦。一度言葉を切ると、こぶしを作り、揺らしながら訴えてきた。

「とにかく、後期以降このまま英語科の平のままでいることは、許されないと思え」

「関崎」

かなりむかつくので、まずは一言言い返してやらないと気がすまない。

「そんなことを伝えるために、品山まで自転車を漕いできたわけか」

嫌味だとわかるだろうか。言った後で様子を伺う。やはり読み通り、関崎はさらりと受け止めるだけだった。あっさり納得して答えた。

「ああそうだ。一番のテーマはこれだ。お前がいろいろ事情を抱えていて、そのためにしかたなく身を潜めているということは、この一学期でよくわかった。藤沖からも、古川からも、その他いろいろなところからも話は聞いている。だが、外部生の俺からしたら、だからといってこのまま元評議委員長だったお前が、このまま何にもしないで過ごすのは間違っているように思う」

「間違っていないさ」

「いいや、間違っている！」

——よく、断言できるよな。そうきっぱりと。

何度も、耳にたこができるくらい聞かされたその言葉。

——元・評議委員長だったら、自由になれないとでも言うのかよ。

関崎は真面目で、先生・先輩たちからの覚えもめでたく、クラスメートからの信頼も厚い。たった三ヶ月ちょっとの間に、三年間評議委員会で積み上げてきた上総の地位をあっさり奪ってしまったではないか。恨みはしてないし、むしろ自分にとっては楽なので構わないが、それでも炎天下の下、踏ん反りかえって説教されるのは面白くない。当然、真面目に聞きたいとも思わない。

じろりと見返すと、関崎はさらに言葉を連ねた。

「立村、お前なら今の英語科のクラス状況がどういうものかわかるだろう？」

——もちろん、俺がいなくても自然と動いていくからな。

「藤沖は後期、評議委員を降りるかもしれないと話している。応援団結成の準備だそうだ。自然と男子評議委員のポストが空くはずだ」

とっくに天羽たち元・評議委員チームから得ている情報である。もっというなら、クラスメートの噂話に耳を傾けていればいくらでも入ってくるものでもある。附属生なら当然のごとく、でも関崎のような外部生にとっては大事に思えるのだろう。

知っていることだけでも伝えておいた方がいいだろう。

「もう関崎に後釜は決定していると聞いているが」

「もし推薦されたら受ける覚悟はある」

「そうか」

本人がやる気まんまんならば、何も言う気はない。

——ただ、とぼっちはノーサンキューだ。

関崎は上総の顔を食い入るように見つめた。すでに顔と首筋は汗でぐしょぬれだ。髪の毛もシャワーを浴びたように濡れている。

「だが、あくまでもそれは仮定の話だ。知っているだろうが俺は、バイトで授業料を稼がねばならない立場だし、仮に評議委員を受けたとしても百パーセントこなせるかどうかはわからない。もちろん努力はする。手抜きはしない。だが、それをひとりで背負うというのは難しいと知っている」

「古川さんがいるだろう、それに」

「女子と男子とでは違う。まだ、後期改選は先のことだし、藤沖の応援団の件もまだ時間がかかりそうだとは聞いている。だが、仮に俺が評議に立った場合、外部生の立場ですべてを把握するのは不可能だ」

いつものことだが、関崎はいつも「外部生」を引け目に思うような言い方をする。

できそこない元・評議委員長よりも高く評価されていることを気付かないでもないだろうに。いくらでも周囲の友だちが、先輩が、先生が教えてくれるに決まっている。

なのに、まだ使用済みの評議委員長に拘ろうというのはなぜだろうか。

裏がある、とは思わない。ただ、単純すぎる。

「だから、あえて、頼みたい。俺と一緒に、英語科のために立ち上がってほしい」

笑いたくなる。たまに天羽が冗談めかして使うならまだしも、真顔で「立ち上がれ」とは。

どうしても関崎の言い分を受け入れたくない。

「なぜ？」

冷たく問い返した。全くもって関崎の情熱は冷めることを知らない。上総のぶつけた氷球をさらりと除ける。

「お前には、それができるんだということが、俺にわかっているからだ！」

——お前には何もわかっていないんだ。

——俺がかつて、どれだけしくじってきたか、どれだけ人望失ってきたかってことを。

関崎が訴える幻想の立村上総は、もう、現実の上総のもとにはいない。

役立たずで、嫌われ者で、しかも臆病者。

保身のためには人を傷つけることなどへとも思わず、汚い手段を使ってでも懸命に生き残ろうと努力しつづけ、最後の最後で真実を暴露された裸の王様。笑えばいい。そのことを藤沖たちから聞いていないわけではないだろうし、上総も何度か関崎に話したつもりだ。それでもなお、関崎は上総の力を過剰評価しようとする。

——麻生先生が言う通り、二学期以降は俺が、関崎の僕になるしかない。

もう覚悟はしていた。A組の連中も納得するだろう。

無理に規律委員に押し込まれなくてもかまわない。関崎の肝いりで、などと枕詞がつく繋がり  
はもうたくさんだ。

「関崎はまだ、俺について本当のことを知らないからそう言えるんだよ。俺にそういう権利がないことは、すでに藤沖や古川さんから聞いているんだろう？」

「ああそうだ。噂だけは聞いている」

憎たらしいことに、あっさり認めた。嘘を言わない性格、それは本当だ。

炎はまだまだ燃え盛っている。だんだん自転車のサドルが熱してきた。ハンドルも同じだ。

——これで乗ったらえらいことになるだろうな。

「しかし俺は、実際この眼で見て、感じたことしか信じない。立村、俺は一年前、うちの中学の図書準備室で見た、あの場面を忘れてはいないんだ」

まっすぐぶつけてきていた関崎が、軽く左に首を傾げた。視線を斜めに向けた。すぐに戻した。

「この前の一件で、やはり立村は変わっていないと確信した」

——確かに、俺は変わっていないよ、関崎。

自嘲したい。全く変わっていないのは自分の方だ。

——全く成長してないってことさ。

言い返そうとした時、関崎が思いがけない奴の名を口にした。息が止まった。

「さっき霧島と話をしてきたが、あいつもお前の復活を願っているようだ」

——霧島が？ あの、とことん俺を物笑いにして、わけわからない八つ当たりしてくる、あいつがか？

それ以前に、なぜ、

——なぜ、関崎とあいつが話をしたんだ？

かゆくなるほどの熱が、頬によぎった。すぐに思い出した。関崎の弟分になれとあおったのは上総の方だった。

「まさか」

笑うしかない。顔を引きつらせるしかない。

——そうだった、俺はあいつに、関崎に懐けと命令したんだった。

「あいつは正直、視界が馬なみに狭すぎるところもある。俺も二年前はそうだった。だが

そんなあいつがお前のことを評価しているのはすごいことだ。だが、そんなのはどうでもいい。俺はお前が密かにいろいろ動いていて、天羽に俺のことを嫌われないように頼んでいたり、規律委員会の中で俺が浮かないように南雲へアドバイスをしてくれたりとか、いろいろ話を聞いている。俺が授業中ぶっ倒れて保健室に運ばれた時も、お前真剣な顔をして、轟さんを誤解しないようにと懸命に訴えていただろう？ 正直そのことも納得はしていないが、俺からしたらそこまで幅広く手を回して、学校の中でうまく俺が生き抜いてこれるようにしてくれた手腕に感服する」「皮肉か？」

関崎はきっぱり否定した。

「違う。俺はあてこすりなんかしない。裏表はない人間だ」

——裏表がない、か。

関崎をあらわす分かりやすい言葉ではある。刺いっぱい言葉を丸め投げ返した。

「裏表、あって悪いのか」

飛礫はあっさり、関崎に身をかわされ飛んでいってしまった。

「さっき俺が言った、いろいろな噂は、お前の悪口だけではない。立村、お前が俺や他の連中のためにどれだけ陰で尽くしてくれているか、そういうことも混じっている」

「尽くしているわけじゃないさ」

「お前がどう言おうが、俺からしたら相当すごいことをしている。もし俺がそのことを知らないままだとしたら、すべて今までの出来事は自分の人徳だと勘違いしていただろう。もし俺が立村の現在の姿をそのまま信じていたとしたら、後で俺は人の見る目がないことをいやというほど思い知らされていただろう。中学時代から、立村を知っていてよかったと改めて思う」

——やっぱりそうだな。

おそらく関崎は気付いていない。

麗しき友情の現れのように聞こえるその言葉は、実を言えば今の上総を切り裂いているということを、知らないままでいる。

——中学時代、評議委員長だったあの頃の俺は、幻だ。

——あの時の色眼鏡を、関崎はまだ外せないだけなんだ。

もし関崎の目に映る自分が本物だったら、上総は何を手に入れていたのだろう。

——本条先輩からの高い評価、新井林からのまじりっけない尊敬の念。

それだけじゃない。

こめかみがつんと痛くなる。

中学二年、二月。中学校舎生徒玄関ロビーで、関崎は鉢植えを受け取っていた。

その差し出される手で感謝の言葉を告げていた。

阻止しようとしていた自分には、その鉢植えがどんな花だったのか覚えていない。

ただ、もし関崎の認識する立村上総でいられたら、その鉢植えは自分が受け取っても不思議ではなかったはずだった。それが答えだった。

「違う、関崎。中学時代の俺は、幻想だ」

「幻想？」

感情のままぶつけたりはしない。

論理的に納得がいく説明をしようと思う。

関崎には、そういう説明をしないと、たぶん納得してもらえないだろう。

「俺は、青大附属に入る資格なんか無いんだ」

しっかり、ゆっくり、上総は語った。

「関崎、もう知っているだろう？ 藤沖からも聞いているだろう？ 合格取り消しになるようなことをやらかしたにも関わらず、周囲に隠蔽してもらってなんとかもぐりこんだ人間だってことをさ」

藤沖を初めとするまっすぐな人々から軽蔑された、ひとつの出来事を。

「隠蔽だと？」

振り返り、道なりに手を揺らした。方向を示したつもりだった。

「さっき通ってきたサイクリングロードと、川べりを見ただろう」

「ああ、見たが」

「あのあたりで俺は、同級生を一人、再起不能の怪我をさせた。すでに誰もが、そのことを知っている」

「誰もって誰だ」

「青大附属の同級生ほぼほとんどと、品山小学校の卒業生なら、すべてだ」

「謝ったのか」

やはり、関崎も同じ痛みをつぼを突いて来た。

——本当は、俺が土下座しなくてはならなかったってことだよな。みな口を揃えて言うようにさ。

なぜ、土下座なんてしなくちゃなんないのか、そう言い返すことすら許されない。藤沖にも杉本にも、みな軽蔑された上総の逃亡劇を、やはり関崎は理解しれくれなかったのだろう。

関崎は上総を真正面に見据えた。もう髪の毛は汗の粒でいっぱいだ。

「馬鹿野郎！」

——やはり、関崎は、俺とは別世界の人間なんだ。

腹の底から怒鳴った一声を、上総は受け止めた。一方的にこぶしを振り上げながら、上総の目を追いかけてつわめく様子を冷静に観察する余裕があった。

「どういう理由があるにせよ、まずは自分のしでかしたことに対して頭を下げるのが礼儀じゃないのか？ 立村、お前四年間も、何もしていないのか！ なぜ、なぜ謝らないんだ！」

「謝りたくないからだ、悪いか」

「悪い、絶対に悪い！」

両手で肩を押さえ込まれ、激しくゆさぶられた。

「立村、お前がなぜ、そんな卑屈におどおどしているか、その理由、わかるか？」

揺らされているのは肩だけなのに、頭からつま先までシャッフルされる。

「お前、本来自分がすべきことを片付けてないからだ！」

——こいつ、何を言い出すんだ！

気が遠くなりそうだった。急速に頂点まで達したとたん、何かが突き抜けた。

「どういうことだよ！ 何も知らないくせに、なんで勝手なことを言い出すんだ！」

がまんしてしよう。言いたい放題言わせて置こう。どうせ関崎にはわからない。そう決め付けようとしたのに、関崎は遠慮なく核心に近づいてくる。上総があえて口にしなかった一点を突き刺そうとする。

しかも、揺るがない。今の上総は蝶の標本で真中を貫かれた格好のまま羽根をばたつかせているようなものだ。

「ああ、俺は何も知らない。噂だけだ。だがさっき、駅から出てくる時、なんでお前、不良スタイルの連中の前で足がたがた言わせてたんだ？ あいつらがお前 のしでかしたことを知っているから、怖いのか？ 相手に再起不能の怪我をさせたとわかっているんだったら、まずは頭を下げて、土下座しろよ。それもしないで、ただ怖がって、青大附属で震え上がっているだけか。何もしないで、ただたびくついているだけか！ それで、ずっと四年間、ごまかしてきたわけか！」

勝手に納得すればいい。わかっている、なぜか口に素直に出てこない。吐き出す言葉で関崎の顔にへのへのもへじを書いてやりたい。

「わかっただろう、そういう人間が、俺だってことをさ」

「そうやって、また、またまた、逃げるつもりか！」

サイレンに似た、蝉の声が一直線に響いた。

上総と関崎、ふたりしかいなかった。

空の青さも、身を焼き尽くす太陽も、関崎のためにだけ備わっているように見えた。

すべてを味方につけているのは、関崎ひとりだけだった。

関崎は上総の頭を無理やりつかむようにして、正面に向けた。

「行こう」

「どこに」

「その、怪我をさせた相手のうちにだ」

「なぜ」

想像つかない言葉の、鋭い針に、息の根が止まった。。

「俺と一緒に、そいつの家の玄関先で、土下座して謝ろう。相手がどういう反応するかはわからない。半殺しにされるかもしれない。それでも、青大附属で今だにおどおどびくびくしているよりは、何千倍もましだ。なにかあったら、その時は俺が全力で守る。お前が、過去の間違いをきちんと認めて、まっすぐ立っていこうとする、そういう男なんだということを、証明する。藤沖がわけのわからない怒り方をしたのは、単にお前が人を怪我させたことを隠したからじゃない。

謝らなかったことが許せなかっただけだ。あいつもお前がきちんと筋を通して、すべきことをしたら、きっとわかるはずだ。そういう奴だろう？ だから、今、やるべきことをやりに行くんだ。そいつの家、どこなんだ！」

もうだめだ。

同じ日本語を遣っているはずなのに、関崎の発する言葉は上総に届かない。

英語よりもドイツ語よりもフランス語よりも、上総の知る限りの言語よりも、関崎の言葉は遠すぎる。

意味がわからないわけじゃない。理屈が通っていないわけじゃない。悪意を感じるわけじゃない。ただ、受け止めたくない。それだけだ。どんなに関崎の言葉が正しくとも、上総は死んでも浜野を正当化する理由を認めたくはない。

認めたら最後、すべてがこなごなに砕け散る。

土下座して謝ったらすべて、今までの道が腐って融けてしまう。

誰もいない。ふたりきり。

自転車に無理やり、引きづられそうになるのを懸命に振り切った。叫んだ。品山駅からきた草むらの道を見やった。光の反射なのかすべてが淡い色に揺らいでいた。危うく消えてしまそうな色だった。

「何も知らないくせに、勝手に決めるなよ！」

視界が薄赤く染まった。目の前にいたはずの関崎が見えなくなった。聞こえるのは蝉の声と関崎の焦りだけだった。ボールが跳ねたような感覚で膝をついたところまでは覚えている。関崎が懸命に語りかけてくるのは聞こえてきている。

「立村、おい、熱にやられたのか？ 立てるか？ 歩けるか？ 吐き気がするのか」

立たせられたことも覚えている。

「……それほどでも」

「ここからお前の家まで、どのくらいかかる？」

「三分もかからない」

突然支えられてた関崎の体が低く下がるのを感じた。倒れそうになり思わず捕まった。

薄目を開けてみると、関崎がずっと背中を差し出しているのが見えた。

——関崎？

問う言葉が見つからないまま、そのまましゃがみこんだ。ぶっきらぼうに関崎が地面をたたきつつ命令してきた。

「おぶされ」

付け加えた。

「行き方だけ上で案内してくれ」

「関崎、それは、自転車は」

「そんなのあとで引っ張ってくる。三分程度ならすぐに持ってこれる」

「関崎、いい、いいよ」

「日射病にやられてぶっ倒れる奴なんて陸上部ではざらだ、介抱するのは慣れている。安心しろ。立村、住所だけ言ってくれ。あとはわかる」

——何もわかっちゃいないんだ、関崎は。

善意の塊、武骨な天使、天に突き刺す炎。それが関崎乙彦だ。

誰よりも友情を大切にし、守ろうと心を砕こうとする。

その善意ゆえに、上総の奥に潜む深いものを、細い針で突き刺そうとする。

正しくて暖かくて愛に溢れているからこそ、その針を抜き去ることができない。

どんなにそれが痛くて血まみれになっても、感謝というばんそうこうでもって覆うことしか許されない。こちらから射し返すことは、人の心としての罪になる。

「品山町……」

肩にしがみついた格好で上総は、関崎の背に頼った。

自分の住所を唱えながら、汗まみれのシャツに張り付いた。

悔しいことに、関崎は全く上総の重みを苦にせず走っているようだった。

ナビゲートしながら、上総は関崎のお荷物として背負われていた。

あっという間に目の前には白く見ゆる我が家なり。

「ここかお前の家は」

関崎の問いかけに頷いた。近所の誰かに見られたら何事かと思われそうだが、さしあたって知り合いとはすれ違わなかったのが幸いだ。裏道通ってきて正解だった。しかし、

——しまった。自転車置きっぱなしだ。

滑り降りながら気がついた。二台の自転車を野っばらに放置しているのはやっぱりまずい。鍵をかけていなかったはず。盗まれても文句は言えない。

——無理してでも、自転車引きずってくればよかった。

つい、身体の中に詰まった炭のようなものにいぶされて、関崎におぶさってしまった。

あのままではもう身動きも何もできなかった。軽々と上総の指示通り歩いていく関崎に対して、上総は何も言い返すことができず、シャツ越しにまた奴の熱い血潮を感じるはめとなった。

——とりあえず、母さんがいなくてよかった。

何言われるかわからない。ささやかな安心感。ひとつでも無理して、よかったことを見つけ出して、初めて関崎に告げることができた。

「ごめん」

顔を合わせることにすら惨めな気分だ。振り返った関崎はまず、立村邸を唇丸くして眺め、両手を掲げてひと伸びした。

「当然のことをしただけだ。

全く何も考えていないような顔して言い放った。

きっと、本当に腹の中には何にもないのだろう。労うように上総を覗き込み、声低く、

「それよりお前大丈夫か」

気遣いまでしてくれるときた。頷くしかなかった。鍵を開けておいたほうがよいだろう。パーカーのポケットをまさぐり、鍵を取り出した。なくしたらそれこそ事だが、ちゃんと収まっていた。

まずは関崎を家に招きいれ、それから自転車を取りに戻ろう。

うまく鍵穴に先が納まらない。なんとかドアノブをぐるぐる回した。不思議そうに関崎が覗き込み、手を差し伸べようとする。お断りだ。質問で遮った。

「家に、来るだろう？まだ、話すこと、あるんだろう」

「まあな」

まだまだ語り足りないのだろう。あんな炎天下で喋らなければよかったと思うが、後の祭りだ。関崎は太陽のエネルギーによってパワーアップする、ソーラーシステムエネルギーみたいな男だと、いまさらながら気がついた。だから、

——藤沖も元気になったってことだな。

——杉本も惚れたってわけだな。

——清坂氏も、一目置いたってことだな。

方向転換するしかない。窓を開け放し日陰で語るのが一番の我が身防禦の方法だ。

ひまわりが一面に咲き誇る暑苦しい花壇に一瞬視線をやり、関崎を促そうとすると奴は即、首を振った。

「まだやることがある。立村、お前は横になってろ。その前に水分補給しろ」

「やること？」

「そうだ、自転車を取りに行くんだ」

「あとで俺が取りに行くよ。少し休んでからでも」

「いや、いい。そんな遠くはないし、今歩いてきたことによって道は完璧にマスターしたから迷わない」

関崎が自信たっぷりに言い切るその意味がわからず首をかしげると、

「まずは水分補給だ。それ以上に優先すべき事柄はないんだ。俺は元・陸上部だ。俺の言うことを信じろ、立村」

はたしてその論理に整合性はあるのだろうか？

もう少し頭が働いていれば喝破しようとも思えただろうが、身体がまた激しく水分、いや氷を求めている以上何も言い返せない。

「わかった。悪い」

「遠慮するな」

関崎が扉を閉めるのと同時に、上総は玄関のたたきにそのままへたり込んだ。

上半身の空気と対照的に、下半身だけがひんやりしてくる。冷たかった。

——振り回されっぱなしだよな。

台所に這ってゆき、例によって氷皿から残りの氷を口に放りこんだ。

ガラスポットには麦茶が冷えたまま用意されている。一気に飲み乾した。

サイダーは切らしているが、かわりにラムネ瓶が並んでいる。どうもこのラムネというものは、中身こそ普通の炭酸飲料なのだが、飲む際にころころした玉がビンの口をふさぎ、飲みづらいことこの上ない。だから大量に手付かずのまま残っているのだろう。

いやみではないが、関崎に渡したらどんな顔をするか見てみたい気もする。

上総は部屋に戻った。ベッドが寝乱れている以外はたいしてちらかっているわけでもない。片付ける必要もなさそうだ。まずはシーツと薄い夏布団を整え、レースのカーテンをまるごと開放した。外からは丸見えだが、そんなこと知ったことではない。

関崎が上総に対して、説教をかましにきたことくらい見当はついている。

その話の半分以上はすでにフライパンの上で熱く聞かされた。

要は上総に対して、元・青大附中評議委員長の誇りを持ち、規律委員の座を用意したいという申し出の提案だけなのだ。本当に関崎は余計なところに首をつっこみすぎる。

事情を知らないからそんないいかげんなことが言えるのだろう。現に関崎が、上総の失脚したきっかけを粒さに見つめていたら、そんなこと軽々しく口に出せるわけがない。

しかも、よりによって、

——なんであいつの前に土下座しなくちゃいけない？

青大附属上がりの連中にも本当のことは話したことがないはずだ。

ただ隠し切れずに真実だけが一人歩きしただけ。

伝えるしかなかった事情だけ理解してほしいと思ったのが間違いだった。

まさか関崎がひとり憤って、「俺も付き合うから謝りにいけ！」などと叫ぶとは思わなかった。考えられないことではない。ただ、猶予もなく、それこそ小学校のクラス名簿を強引に部屋から探し出し、上総を引きずって浜野の家へ連れていきそうな勢いだったのも事実だ。

——何もわかってないんだ、関崎は。

口に出してはっきり言い切ってみる。

——あいつは何も、気付いていないんだ。

たった三ヶ月しか青大附高のことを知らないのに、今や我が物とばかりに歩き回り、余計な口出しをし続け最後には、上総のプライベートスペースにまで入り込もうとする。関崎の頭にはそれが友情の表れとして認識されているのだから、仕方ないと諦めざるを得ない。しかしもしもだ。仮に関崎が、自分自身の出来事として押し付けられたとしたら、そんなに冷静な対応ができるものなのだろうか？ いくら間違っていることとはいえ、無理やり謝罪させようと考えられるものなのだろうか？ もしそうなら上総も諦めて項垂れるしかないが、自分自身に当てはめて考えようとしなない関崎の一存を、そのまま受け入れる気にはさらさらなれない。

窓から身を乗り出した。部屋のもわりとした重たさが、流れ込む風でだいぶ安らいだ。

水分補給は正解だったらしい。

上総はベッドに座り込み、一考した。

——関崎は、何もわかっていないんだ。

そのことを証明したい。

何一つ事情を把握していないくせに、なぜ関崎は上総を引きずりまわそうとするのだろう。

おそらくこのままでは、関崎のペースにはまり、一年後期は規律委員に納まり、麻生先生の見守る中クラスに馴染んだふりをするようになるだろう。藤沖が応援団結成に重心を置くのならば、邪魔する奴もさほどいないだろう。委員会活動も貴史や美里、天羽たちから耳にするところによれば、たいした活動も行われていないとのことだ。

このまま、関崎のひっぱる方向へ進んでいけば、すべて丸く収まる。悪者ぶっていた麻生先生も納得して上総に普通の態度を取るだろう。

流されるならそれでもいい。

でも、せめて一矢報いたい。

何秒目を閉じただろうか。

まだ、関崎は戻って来ていない。腕時計を覗き込んだ。こんなことだったら素直に、天羽たちと一緒にカラオケボックスに籠る方を選べばよかったのだ。そうすれば関崎とも連絡がつかなかっただろうし、思い出したくもない過去を引っ張り出されることもなかったろうし、何よりも菱

本先生のおごりによるまずいステーキランチを食わされることもなかっただろう。体力が続けば本当ならば、例のカラオケパーティーに飛び入り参加したいほどだ。

ちゃんと、電話番号も轟さんからもらっている。

確か、手帳に挟んだはずだ。

上総は鞆を開けて中を捜した。すぐに見つかった。分かりやすい小さな文字で、数字が羅列されていた。

——確か、品山の、あそこだよな。

こずえを含めた三人で、例の件について語り合ったあの場所だ。貨物列車用のコンテナを改造した部屋と聞いている。わりと、すぐ側だ。天羽も難波も、関崎に機会があれば一言言ってやりたいと思っているはず。敵方として呼び寄せようか？ あいつらなら上総の家への道筋もわかっているし、カラオケボックスから自転車で十分くらい漕げばつくはずだ。

——十分か。

女子でも漕ぐことできる距離。

——カラオケメンバーの中に清坂氏もいるのか。

確か一緒に女子チームの美里とこずえも参加予定と、天羽も話していたはずだ。

貴史もC組メンバーの一員として混じっているし、不思議ではない。

そして美里は、上総の家に来たことがある。

中学二年のクリスマスイブに、「恋人同士」の付き合いとしてふたりきり、居間で過ごしたことがある。もちろん何も起こらず、食事をしながらプレゼント交換した程度のことだ。いや、そんな昔のことじゃない。期末試験後、すぐに見舞ってくれたじゃないか。

上総は窓辺から覗き込もうとし、すぐにレースのカーテンを閉めた。

——清坂氏は関崎と一対一で話をしたこと、あったんだろうか？

——気持ちを伝えたことはあるんだろうか？

関崎には興味をもってもらえず、美里ひとりが空回りしている、そういった実情を上総はずっと目にしてきた。よりによってクラスのライバルである静内菜種が一步、関崎とのつながりを強固なものにしている。この状況をはたして美里はひっくり返すことができるのだろうか。仮に幼なじみの貴史が側にいたとしても、奴の性格上恋愛感情を受け入れることはないだろう。今の貴史が夢中なものはひとえに、鈴蘭優と美術部のことだけだ。いくら親友の美里であっても、恋心が滑り込む余地はなさそうだ。

——「付き合っちゃおうか」で、俺の時は付き合ったんだよな。

中学二年の六月。水無月。ふたりきりだった。交際宣言をしたのがなぜか上総の方からだったのでかなり、みんなに騒がれた記憶が残っている。

——もし清坂氏が関崎に「付き合っちゃおうか」と持ちかけたら、あいつならどんな顔するだろう？

閃いたものがある。

——関崎の慌てふためいた顔を見たい。そのためには。

電話番号のメモを手にも、上総はそのまま居間へと向かった。受話器を取り、そのまま番号を押す。店の名で名乗られ、天羽を呼び出すことに成功した。しゃがれた声で天羽が受けた。

——おい、どうした立村？ やっぱ、お前も、飛び入りするつもりか？

「そんなつもりじゃない。それより、悪いけどさ、清坂氏呼んでくれないか」

電話の向こうで何故か息を呑む気配がした。

——清坂ちゃんとか？ なんだよそれ。今、女子チームのデュエット曲で盛り上がってるんだよなあ。ほら、知ってるか？ ほらほら、あれ、あれだよ。

「ごめん、俺は歌謡曲に弱いんだ」

美里とこずえがどういう歌を歌っているかなんて、正直どうだってよかった。

「それよりも、早く電話口に出してくれないか？ 急いでいるんだ」

——どしたの、立村ちゃん？

上総は黙った。

しばらく沈黙が続いた。天羽の返事が返ってくるまで口を閉ざしていたら、

——もしもし、立村くん？

いきなり美里の声に切り替わった。あのカラオケボックス内の電話で受けているのだろうか。それにしても誰も歌っていないのが妙だ。

まさか、部屋の中でみな聞き耳立てているなんてこと、ないだろうか？

もし美里だけに語りかけるのならば、内緒にしてほしいと伝えた上で、関崎がいることを告げるだろう。その場ですぐ上総の家に呼び寄せるだろう。そのまま、関崎と対面させるだろう。だが、関崎を敵視する天羽が側にいて、下ネタ女王のこずえが目を光らせていて、極めつけは貴史がお目付け役として控えている以上、最低限のことしか伝えられない。

「清坂氏か」

——どうしたの？ 気分、だいぶよくなったの？

「あとで説明するよ。それより、悪いけど今からすぐ、俺の家に来てもらいたいんだ」

言葉が途切れた。上総の言葉にすぐ反応しない。

——どうして？

早くしないと関崎が自転車を二台ひきずって戻ってくる。それまでに電話を切りたい。

「理由はあとで話す。とにかく、一刻も早く来てもらいたいんだ」

——だめだよ、立村くん。

「え？」

拒絶されるとは思わなかった。頭が重くなるのを感じた。

——だって今、立村くん部屋にひとりなんですよ。まずいよ、やっぱり。

「そんな、変なこと言ってるつもりないけど」

——立村くんがそう思わなくても、周りの人が誤解するじゃないの。ねえ、こずえと一緒にじゃだめ？

悪いがノーサンキューだ。即答する。

「いや、理由があってどうしても清坂氏だけに来てほしいんだ。今すぐに。来ればわかる。俺の家への行き方はわかるだろ？ 俺と違って」

——方向音痴じゃないもんね。わかるよ。けどね。

小声で、少しくぐもった声がかすれる。歌い終わった後なのか、それとも受話器にあたる口の部分を、手の平で覆って聞こえないように気遣っているのか。

ゆっくりと、ささやき声で返事が来た。

——せめて、貴史じゃあ、だめ？

貴史のことを失念していた自分に呆れた。そうだ、ふたりセットで呼べばいい。

——ねえ立村くん、貴史に代わろうか？

「いや、いい。俺もそれがいいと思うんだ。今すぐ、羽飛と来てほしい。けどさ、羽飛だけだからそのところは承知の上で。まかり間違っても古川さんは連れてくるなよ」

——立村くん、本当に、何を考えてるの？

「とにかく、一刻も早く来てほしいんだ」

言い含め、貴史とは話しをせず、受話器を置いた。

すぐに玄関へと走った。どうやら自転車を二台、ひきずってきたようだった。一方の自転車に乗り、その片方の手で上総の自転車を支える格好だ。

焼けて真っ赤な赤猿状態の関崎を迎えに降りた。

関崎の顔をまっすぐ見つめ礼を伝えた。

「ごめん、ありがとう。それと今、家には誰もいないから」

ゆっくり話すつもりだった。美里と貴史が玄関口に立つ前にすべて終わらせるつもりだった。

「あ、ああ」

玄関から廊下、壁紙、柱を「すげえな」「豪華だな」などと呟きつつ関崎がきょろきょろ眺めている。部屋に入ってから突っ立ったまま本棚を眺めて、

「お前こんなの読めるのか？『赤と黒』とか『現代版源氏物語』とか」

などと質問してきた。今に始まったことではないので、あっさりとしつつ答える。

「一応、親に逆らえないから読んだよ」

簡単に返事に止めた。

関崎のぎらついた眼差しと握りしめたこぶしから見て気合は十分、さらに熱く話の続きをしたい所存のようだ。見て取った感じ、しばらくは黙って話に聞き入った方が得策だ。

美里たちが現れるまでは甘んじよう。

もし美里だけだったら、二人きりにして、とことん語るべきことを語らせようと考えていた。貴史がお邪魔虫としてくっついてくるのは予定外だがしかたないだろう。女子ひとりで、昔の彼氏宅へ行けるほど美里も子どもではないということだ。

——なんとかしてふたりきりにしたいところだな。羽飛にはこの辺りの事情をどう話そうか？

上総の知る限り、関崎と貴史も今までは膝を交える語り合う機会がなかったはずだった。  
これから上総が美里にさせたいことを、貴史にどう説明すればいいのだろう。  
何よりも貴史は、  
——関崎に対する清坂氏の行動を、羽飛はがまんできるのかな。  
時間は限られている。上総は部屋の戸を閉め、関崎に座布団を勧めた。

座布団を尻に引き寄せた関崎は、早速上総に質問を浴びせ掛けた。

そうとう溜まっていたに違いない。適当に相槌を打ち、聞き流した。

「立村、野球とか、やらないのか」

「やらない」

「サッカーもか、陸上もか」

「嫌いだからしない」

「どうせ部活をしないのなら、運動部に入るという手もあるのにどうして」

「集団活動が嫌いなんだ。サイダーがあるから持ってくる」

貴史にも天羽にも美里にも、よく言われたことだ。

その場を離れば消える言葉。何も気付いていないのか関崎は脳天気に応えた。

「ありがとう」

上総の思惑など、全く想像などしていないかのように。

冷蔵庫からラムネ瓶を取り出した。やたらと飲みづらい瓶で、グラスに注ぐ時には偉く難儀するものだった。たださっぱりしていて今飲むにはちょうどいい。氷をグラスに三個ずつ落としてそのまま部屋に運んだ。

すっかり我が家同然にくつろいでいる関崎に、

「まずは飲めよ」

そう促した。グラスも一緒に机の上へ置いたのだが

「ああ、ありがとう」

コルク栓を器用に指で外し、からりと音をさせてラッパ飲みし始めた。どうやら関崎には、グラスに入れ換えるという頭がなかったらしい。半分ばかり一気に飲んでいる。しかもスムーズにこくこくと吸い込んでいる。不思議だ。質問しなくなった。

「器用だな」

尋ねつつ、上総もまずは座り、片膝ついたままコルクをワイン用の栓抜きで無理やりはずした。どうも口をつけて一気に飲み乾すというのが苦手で、一度グラスに入れ替えたい。ちょぼちょぼ溜めるには時間がかかりそうだった。

瓶を持ったまま片手で口を拭い、関崎が問う。

「どうやって今まで飲んでたんだ？」

余裕ありげなその言い方にちらといらだつが我慢する。

「なかなか出てこないだろう。サイダーが」

「そういうのはガキの頃にみな習うだろう？」

「誰に習うんだ」

「友だちとかだ。あとはうちの兄貴とかその友だちとかいるだろう？ 立村、お前駄菓子屋で見たりしなかったのか？ あんこ玉でくじを引いて当たったら煙の出る紙もらったり、メンコ集め

たりしただろ？ 習うもなにも、そんなの常識だろう」」

——お前の常識で俺を計るなよ。

「そんな友だちなんていないからわからない」

グラスを見つめた。答えと同時にひょいと玉が、瓶の首真中に納まった。あっという間にグラスの縁すれすれまで満たされた。

この違和感はどこから来るのだろう。

何を話しても平行線に終わる。

菱本先生のようにむかつき百パーセントの野郎だったら無視するか懇懇にお引取り願うかどちらかですむ。問題は関崎の全身からあふれ出るものがみな善意の塊という事実だけだ。いくら上総が偏った見方をしていたとしても、関崎を悪人扱いはできない。だから扱いに困る。友情めいた熱を感じるから、火傷してしまう自分の痛みを伝えられない。

このまま語り合っていけば、断然正しいとされる関崎の言葉に頷かされてしまい、上総はさっきのラムネ瓶と同じくちょぼちょぼとにじみ出るものをなめるしかないわけだ。

いい奴だからこそ、拒否できない。

拒否のしかたがわからない。

同時にどのようにこの体勢をひっくり返せばいいのだろう。自分のスペースに引きずり込んだのだから、あとは言いたいことをすべて言い放って追い払えばいいのだろうか。しかし、真剣にぶつかろうとする関崎を交わすことも、正しいとは思えない。

かつて、貴史や美里に対してしでかした過ちを、ここで繰り返す気はない。

——清坂氏、まだかな。

美里の到着を待ちわびつつ、もうひとつすることを見つけた。

——しつこいかもしれないけど、清坂氏が到着する前にこれだけは確認しておこう。

一対一、向こうが切り出したくないことは、こちらが持ち出せばそれでいい。

先手必勝。

上総は正座した。足を崩して半分あぐらをかき格好でいる関崎に向き直った。

「関崎、この機会に聞きたいことがある」

驚くそぶりも見せず、関崎も上総に沿う形で足を直した。

「なんだ」

「聞きづらいことかもしれないが、重要なことなんだ」

一気に切り出した。関崎の反応はやはりどこかずれていた。

「俺は隠し事をしない人間だ」

それはよくわかっている。まともに取り合っているのは身が持たない。すぐに上総は答えた。

「なら、信じる」

呼びかけようとしたが、言葉が途切れる。舌がもつれる。

「だからなんだ。言いたいことあるならはっきり言え」

落ち着いたまま、なんでも来いとばかりに自信ありげな返答だった。そこまで言うのなら、も

う遠慮はいらない。一気に突き刺そう。何度も尋ねたその質問の答えを、しつこく問うた。

「あの、静内さんとは付き合っていないんだらう？」

すでに答えは関崎の口から、言葉を変えて同じものを聞いている。

もうふたりの気持ちは同じものだが、いわゆる「付き合い」とはまだ遠いものだということだ。かつて上総と美里が同じ意思確認をし、一年半もの間「付き合い」という言葉に振り回された過去を忘れてはいない。ただ関崎としてはさほどその状況で困ったことに巻き込まれてはいないようだ。時間の問題、とも言える だらう。

鼻をすつとすするようにし、関崎は低く、きっぱり答えた。

「今は付き合っていないが、それ以上もそれ以下もない」

——少し、答えがずれたか？

違和感を感じた。問い詰めた。

「今は、ということは将来は」

付き合う可能性がある、そう持っていきたいのだから。上総が再度問うと、さすがに関崎もかちんときたようで、吐き捨てるような答えを返してきた。

「そんな先の見えないことを断言するほど、俺は無責任ではない」

そこまで言い放ち、ぐいと上総を睨みつけた。

「俺も立村に聞きたい。なぜ、この前の視聴覚教室でお前は、俺と静内との関係を勝手に邪推するような言い方をしたんだ？」

——しまった、やぶへびだ。

舌打ちするが取り返しがつかない。言いつくろうのみ。

「そんな言い方をしたつもりはない」

「『俺と静内とは付き合っていない』などと話していただろう？ もちろんそれは事実だが、人に話すべきことでもないだらう。第一俺は立村に、そういう話をしたことは殆どない。たまたまそれは事実だったが、これから先勝手に事実関係を捏造されるのは俺としては不愉快だ」

「それは俺が悪かった。申し訳ない」

さらに文句を言いたそうな関崎を黙らせるには、まず謝るしかない。不本意であろうが自尊心がずたずたになろうが、一方的な関崎のお説教に持っていかれるよりはましだ。すぐに自分のフィールドに持っていかねば。こちらがしたいのは確認だけなのだ。

——関崎が、静内さんと付き合う可能性だけだ。

「なら改めて聞きたい」

無理やり仕切り直そうとした。力技だ。

「これから先、関崎が静内さんと付き合う可能性は何パーセントくらいある？ 大体でいい。七十パーセントか、それとも」

言い終わる前に即、反撃された。倍返しだ。

「だからそれが邪推だと言うんだ！ 立村、お前仮に友だちに対して、『お前は俺のことを親友だと思っているのか？ 親友になる確率は何パーセントくらいか？』とか聞くか？ そんな阿吽

の呼吸でもなければわからないようなことを、なぜ聞きたがるんだ」

——それは、清坂氏が。

口には出せない。関崎が睨みつけるがごとく問い詰めてきた。

「それに第一、俺が静内と付き合うかどうかを知って、立村になんの利益がある？」

しどろもどろとはこのことだった。慌てると碌な言葉が出てこないのは承知しているが、弱みを見せたら男として負けだ、黙るわけにはいかない。知らん振りして冷静にかわす振りだけでもしなくてはまずい。

「変なことを聞いてしまって申し訳ない。俺は決して関崎に口出しするつもりで聞いたんじゃないんだ」

どもりそうになるのをごまかしつつ上総は持ちこたえた。

「あの、妙なことを言うようだけど、杉本に対してその、気持ちがないということは」

——何、俺は馬鹿なこと言ってるんだらう。杉本のこととは違うだろ？

表面上冷静沈着を演じるとかならず、こんなところでしくじってしまう。

すべてにおいて、自分は詰めが甘い。

答えやすい質問を投げかけて何になるというのだから。

杉本梨南に対する関崎の答えは全くぶれがなかった。静内の件とは違っていた。

「その通りだ。変わらない」

力強く言い切り、漬物石をずんと置いたような重みを加えた。

「わかってる。関崎の言いたいことは、理解しているつもりだよ。無理に杉本の気持ちを受け入れてくれとは、決して言っていない。ただ、もし関崎が本気でこれから静内さんと付き合いたいというのだったら、俺は杉本にきちんと事実を伝えるし、そうでなければまた」

——しどろもどろになってどうするっていうんだ、だからなんでそんなことを！

今、確認すべきことはひとつのはずであり、すでに関崎から言質を取ったも同じこと。

すでに美里に、勝ち目はないということ。

「立村、何度言ったらわかるんだ！」

怒鳴りちらす関崎を観察しつつ、上総は黙って聞いていた。

「そんな未来のことなんかわかるわけないだろう！ 第一俺にそんなことを考える暇があると思うのか！ 俺はまずクラスの今後とお前の復活と藤沖と片岡の平和と、とにかくたくさんのことを考えなくてはならない立場なんだ。さらに言うなら、奨学金狙いの成績アップの方法やら、バイト先の売上にどうやったら貢献できるかとか、うちの親のすねをこれ以上かじらない方法はあるかとか、そんな付き合う付き合わないの問題を考えている暇なんてない」

「それならば、付き合う可能性はないんだらう」

一言が倍返し。

「だから言っただらう！ もしかしたら別の恋愛沙汰に巻き込まれている可能性だってゼロじゃないわけだ。数限りないパラレルワールドの中の選択肢の中にあるわけで、それが全くなくなるわけじゃない。いや、ありえないとは思いますが俺が何かの拍子で別の誰かに惚れて速攻深い関係になる可能性だってないわけじゃあない。つまり、何があっても不思議ではない。藤沖があの、寝

小便したという女子と付き合ったことも、半年前の俺たちならまず思いつかないことだが、実際そういう未来はやってきた。俺にそれを見通すことはできない。お前に勝手に決め付けられたくはない。俺の言いたいのはそれだけだ！ 立村、俺のことはどうでもいい。お前の方こそ本当はあの女子と」

立ち上がった。関崎がもっともらしい理屈をこねて、恋愛沙汰から離れようとしている姿はどこかこっけいに見えて、同時に息苦しかった。こちらからすれば、気持ちは丸見えだというのに、隠すことすらしない。

——関崎は何もわかっちゃいない。

一年前に同じ道を通った上総には、沈黙でいくらでも反撃することができた。

そうだろう、確かに関崎は、誰とも付き合う気がないと言い切っている。

想いは静内のもともかもしれないけれども、「付き合う」という形には持っていく気がしないというそれだけだ。もちろん静内の気持ちも考えねばならないが、とりあえずは誰とも付き合うことは考えていない。もちろん、杉本とも美里とも、だろう。

——もし、関崎が本気で静内さんと付き合うと言い切っていたとしたら退くしかない。でも。

曖昧なままごまかそうとする関崎の態度に、上総は勝機を見いだした。

「もう一本持ってくる。関崎、悪いが、もう少しここにいてくれ」

腰をあげたとたん、地面が揺れたようで足がふらついた。弱い地震だろうか。

手を出すと、さっきまで怒鳴っていたのを忘れたかのように、すっとラムネ瓶を差し出した。残りのラムネを、完全に溶けた状態の関崎用グラスに注ぎ、空にした。

ラムネ瓶を流しに置いた後、時計を確認した。もう二十分近く経つ。

そろそろ美里とプラス一名が到着するはずだ。冷蔵庫を覗き込み、まだ十分ラムネが並んでいることを確認した。もうひとつ氷皿から氷を摘んだ。指先が凍りにひつつく。急いで口に押しこみ、がりりと噛んだ。

——関崎は誰とも今のところ、付き合う気はない。

本心がどうであれ、その言葉に嘘はない、そう信じよう。

もう美里や杉本が入り込むスペースなどないだろう。関崎がもし心を許すとすればそれは、たぶんひとりだけだろう。

だけど、やはり、とも思う。

——ならば、一度だけ、きっぱりとけりをつける機会があったっていいはずだ。

美里が関崎の入学後、どれだけ想いを募らせてきたのか。関崎はきっと気付いていないだろう。いや、気付いていたとしても即座に切り捨ててきただろう。もちろんそれが男子としての思いやりなのかもしれないが、このままではいつまでたっても美里の気持ちは引きずられたままだ。

杉本梨南には来年卒業する時まで黙っていてほしい。

でも、これから三年間いやでも付き合わねばならない美里には、早い段階で引導を渡してやってほしい。もしくは今後のことをはっきり、思いやりと共に伝えてほしい。

かつて上総はそれをせずに、一年半美里の月日を無駄にしてしまった。

もう、二度と同じしくじりはしたくないし、させたくない。

引っ張られるようなかすれた音が聞こえてきた。

自転車のタイヤが油さし忘れてきいきい言うような声だ。

——来たか。

上総は玄関の鍵を開けた。黙っていればふたりともすぐに呼び鈴を押すはずだ。

ラムネ瓶を取り出すのはその後でよい。

自分の部屋からは物音ひとつ聞こえてこない。

気付いていないのだろう。

気付かなくてもよい。呼び鈴が鳴り終わるのを待ち、上総はすぐ玄関へ向かった。戸を開けると顔を熱気で撫でるような空気と一緒に、

「おーい」

先に貴史が手を振った。パステルグリーンのさっぱりしたTシャツにジーンズ姿というのが、妙に好青年ぽくて笑えた。

「ずいぶんめずらしい格好だな」

思った通りのことを口にすると、貴史はにやりとした。

「やっぱり学校の制服でいくわけいかねえし、暑苦しい格好したくねえだろ」

「何言ってるの。洗濯終わったのそのシャツしかなかったって言ってたくせに！」

お邪魔虫ではあるが、それはそれでいい。それなりに話すこともあるだろう。その隣に美里がいた。全身鮮やかなひまわり色、ほんのりと肌が赤味を差しているのは日焼けしたせいだろうか。改めて美里の姿を眺めた。

「いったん、家に帰ってから集まったのか？ その、カラオケに」

「うん、そうよ。立村くんも元気になったんだったら、一緒に来ればいいのにどうして？」

首を振った。

「入れば」

「おじゃましまーす」

なぜ呼び寄せたのかその理由を説明していないからなおのことだろう。戸惑うように何度も見回している。すぐに玄関たたきのどでかい靴に目を留め、

「あれ、誰か来てるの？」

「ああ、来てる」

「だあれ？」

「俺たちの知ってる奴か？」

貴史がわざわざ靴にかがみこみ、足のサイズを観察している。

「そう、青大附属の奴だけどさ、ちょっと話があってさ」

「なあんだ、そうだったんだ。そう言ってくればいいのに。私てっきり」

言いかけた美里が、すぐに口を覆った。心なしか日焼けが進んでしまったかのようにだった。

「どうした？」

問い掛けると、また慌てて首を振る。貴史が補足説明してくれた。

「こいつ、てっきり立村とふたりきりで貞操のピンチかと思って焦っちゃったらしいぞ。まあお前も男だからそのあたりはなあ」

「貴史の変態！ 何考えてるの！ 立村さんに失礼じゃない！」

靴を脱ぎながら美里は、貴史の脳天を思いっきり平手でひっぱたいた。言い訳ももちろん続けながら、

「そんなんじゃなくって！ 言ってくれたらいいのに。天羽くんたちに聞かれたくなかっただけ？」

「まあそれもあるよ」

関崎がいる、そう言いきってしまったてもよかったろう。言ったからといって美里がすぐに逃げ帰るとは思っていない。貴史もいることだし、何が起こってもまずは穏便に終わるだろう。ただ、もし美里が関崎に告白したいのだったら、やはりふたりきりにすべきではないだろうか。今のところ貴史も美里に対して色気らしきものは感じていないようだし、うまくふたりきりにする方法を考えよう。

「とにかく、今日は羽飛とも話をしたかったしさ」

「へえ、お前にしては珍しいな」

まんざらでもない様子で貴史が上総の肩を組んだ。

あまり人に触られるのは得意ではないけれども、貴史たちには慣れたようだ。

——羽飛にも、今回のことは話しておいたほうがいいかもな。

美里が関崎に全力でぶつかり玉砕したとしても、貴史がいれば、ゆっくりかき集めて明日以降繋ぎ合わせてくれるだろう。それは上総も手伝うつもりだ。ただ、今だけは。

かつて上総に直球で飛び込んできた。受け止めることができなかった。受け止めるだけの器がなかっただけのことだ。美里をずたずたに傷つけた中学三年以降の日々をいつかきちんと償うつもりだった。今は大切な友だちとして、一緒にいられることへの感謝とともに、一学期の間ずっとくすぶってきた美里を解放してやりたかった。

——関崎と一対一できちんと話がすめば、きっと清坂氏は中学時代と同じようにまっすぐ歩いていける。今の状況から解放させられる。俺はそう信じている。

もし関崎が馬鹿なことを言い出したらその時は、上総も黙ってはいないだろう。

何も気がついていないのは、お前の方だと指差して言い切ってやろう。

「清坂氏」

貴史の手をほどき上総は肩を並べ、美里にだけ聞こえるよう囁いた。

「なあに」

「今、この家にいる奴はさ」

「え？」

部屋のノブに手をかけ、開く瞬間耳元に流し込んだ。

「清坂氏の味方だけだから。ちょっと待ってて」

「今、何か言った？」

全く理解していないのは美里も同じのようだった。

「俺が入っていいって言うまで、ここで待っててくれるか」

「なんだよもったいぶって」

貴史の言葉は無視し、美里にだけ言い聞かせた。

「すぐ呼ぶから、五秒だけ」

細く戸を開け滑りこむと、やはり関崎はのほほんと扇風機の風に当たって涼んでいた。

「関崎、あのさ。ちょっと、いいか」

奴は立ち上がろうとする。用はない。押し止めた。

「もう少し、そこにいてくれないか。頼む」

両手で空気をぎゅっと床に押し付けるようなポーズで、動かぬよう指示をした。

戸に向かい、声をかけた。

「入っていいよ」

思い切り開いた瞬間、関崎の口が半開きのまま動かなくなった。

全身、腰を浮かしかけたまま止まっているのが笑えた。

部屋の扉には、美里と貴史が目をまんまるくして突っ立っている。

一声、美里が発した。扇風機の回る音が急にうるさくなった。

「関崎くん？」

隣の貴史もきょろきょろ上総と関崎を交互に見やりつつ、言葉もないままだった。

説明は後でたっぷり行えばよい。上総は三人の驚き顔をつぶさに確認した後、椅子を美里に、貴史を床の座布団にそれぞれ指し示した。もちろん、座れという意思表示である。

「サイダー持ってくるから、少し待ってて」

戸を閉め、まずは一呼吸置いた。

もう一度呟いた。

——今、この家にいる奴はさ、清坂氏の味方だけだから。

美里を見つめて硬直した関崎。

どういう状況になるか、予想はついていた。

——あとは羽飛がちょっと邪魔か。

どちらにしてもあとで貴史には、ゆっくり事情を説明しておかねばなるまい。

関崎ほどではないにしても、驚きは隠せないようだった。

以前から上総も、関崎に美里がほの字らしいことを匂わせてきたけれども、貴史には目だった反応などなかったし、おそらく古川こずえ的ポジションで接してくれることだろう。一応三年間過ごして来て、互いに気心も知れている。心配することもない。

上総はまず、冷蔵庫を覗き込んだ。さっき確認したラムネ瓶が並んでいた。

何本持っていこうか。

関崎にこれ以上炭酸飲料を飲ませて腹をふくれさせてもどうしようもない。

かといって、あの三人がどういう会話でもって間を持たせているかも謎だ。

これもおそらくだが、かなりかみ合わない会話じゃないだろうか。

さすがに上総も、いきなり割り込む気にはなれなかった。

——さて、清坂氏にはなんて言うか。

冷蔵庫の扉を閉め、背中をつけて天井を仰いだ。

息が上がり、シャツを通して伝わってくるひんやり感にしばらく目を閉じた。

家族以外の人間が三人も部屋の中にいる状況というのは、はっきり言って異常な状態でもある。もともと上総は友だちを部屋に入れるのが苦手だった。だんだん慣れてはきたけれど、今最高でも二人だったはずだ。なのに、よりによって今、美里を含めて三人が因縁のある会話を続けている。

腕を組み、足を絡めた。

——なんで俺がいきなり清坂氏を呼び出したのか、分かってないよな。

自分ではすでにどうことを運ぶか決めてカラオケボックスに電話をかけたつもりだったが、肝心要の美里がどう思っているのか、判断しがたかった。単に、規律委員同士友好を深めてほしいだけなのか、それとも好きな男子にアプローチできるチャンスとほくそ笑んでいるのか。貴史というお目付け役がいる以上派手な行動は慎むかもしれない。

そこまで考えて上総は、流し場のステンレスに両手をついた。

「そうだな」

はっきり言葉に出した。

「羽飛の前では、何も言えないよな」

今のところ、貴史は美里の恋に気付いていない。いや、気付いていたとしてもさほど大事とは思っていないはずだ。むしろ、B組で孤立しつつある美里の状況の方が気になってしかたある

まい。それが友情の境界線でもある。

——そうか、羽飛の前では、付き合う話になんて持っていけないわけがない。

美里が貴史に対してどういう感情を持っているのか、上総なりに一時期分析したことがある。まだ自分と付き合ってもらっていた頃のことだ。

最初から上総は、美里と貴史が両想いと思い込んでいたし、なぜ自分にアプローチされてしまったのかその理由も判断しかねていた。とはいえ、上総なりに思索を続けた結果、

——あのふたりは、恋愛沙汰で切れないような、永遠の友情を求め合っているんだ。

との結論に達した。そのために、仲介点としての上総が存在したということだろう。

つまり、三角形のバランスをうまくとることによって、美里と貴史は「男女の友情」を確固たるものに完成させようとしたわけだ。

それに気づいてからは、上総もあえてふたりに「お互い付き合えばいいのに」なんてことは言わなくなった。これぞ余計なおせっかいだ。

だが、しかし。

今回だけは、やはり確認しておきたかった。貴史にきっちり、

——本当に清坂氏が他の男子を選んでも、後悔しないか？

と。

何度もしつこく確認した結果、貴史の台詞にある通り、

「美里なんかじゃ立たねえよ」

の一言で結論が出た。ならば、もうあとは、上総が美里を促すだけのことだ。

——元の交際相手が言うのもなんだけどな。

美里だって、最初上総の家へ来ることを躊躇していた。

上総とは「友だち」以上の何者でもない。

かつてはふたりきりの時を求められていたというのに、この切り替えの早さには恐れ入る。それが女子なのだから仕方ないとはわかっているけど、背中に残った冷蔵庫のひんやり感のようなものが残る。

つまり、お目付け役の貴史がいなければ、もう美里は、「元交際相手」の上総の元へは単独で足を運ぶことなどないということだ。中学時代の激しい想いはもうとっくの昔に、ろうそくの火が燃え尽きるような形で終わっている。

ただ、美里がはたして上総の思惑を見抜いているかどうかは判断できない。

きっとそれはないだろう。

ただ、元交際相手だけにそれなりの気遣いはしているだろう。まかり間違っても元の交際相手を前に、新しい恋人を獲得すべく行動するとは思えない。

——たぶん、無理だろう。でも、清坂氏は今、関崎に向かってそうすべきだ。

上総はもう一度呟いた。ステンレスの放つ光が冷たく溶けて揺れた。

「俺が言うしか、ないか」

改めて冷蔵庫からラムネを一本取り出した。

事が済んでから、貴史としみじみ飲むのもいい。

部屋に戻った時、三人がかもし出していた空気はそれなりに和やかに感じられた。たぶん盛り上がったのだろう。関崎がさぞ頭を抱えたであろうことは、予想がつく。

貴史があきれた風に尋ねてきた。

「お前どこまで買いに行ったんだ？」

——よくわからないな。

質問に答える必要を感じない。上総はラムネ瓶をまず貴史の前に置いた。

美里が貴史をちらっと覗いて何か言いたそうな顔をしている。

指示は、上総から出す。

「清坂氏」

呼びかけてみた。美里は上総を不思議そうに見つめ、あっさり

「なあに」

「ちょっと」

返事した。甘く響くものはなにもない。手招きした。

「なんだろ」

ひまわり色のワンピースを揺らしながら立ち上がった。貴史のラムネ瓶をちらちら見るのは喉が渴いているからだろうか。まあいい。素早く呼び寄せ、まず美里の瞳を見つめ直した。

「なあに」

今度の「なあに」は、少しだけトーンが低かった。それに合わせて上総も声を低くした。小聲で、できるだけ他のふたりには聞こえないようにしたつもりだった。

「これから関崎と一緒に帰れよ。それから」

よく聞き取れなかったのか、美里が顔を上総の喉元に近づけてきた。

「関崎に好きだと伝えておいで」

唇が震えているのがわかる。目を大きく見開いたまま今度は美里が硬直していた。

——そんなに驚かなくてもいいのに。

もう一度ゆっくり伝えた。

「今日はそのために、呼び寄せたんだ。だからこれから」

言いかけた途中で貴史が割り込んでくる。肝心要のことを言い切ろうとしている、いいところなのにタイミングが悪い。

「おいおいなに内緒話してるんだ？ やらしいなあ」

悪いが本日のスペシャルゲストは美里だ。付き添いの貴史、および押しかけ野郎の関崎への対応は後回しになる。そう決まっている。

「関崎と一緒に帰れよ。そうしたらふたりきりになれるから、チャンスも作ることに、できる

だろ？」

声もなく、ただ美里は口を動かしていた。

横に唇の端を引いたような形で、顔を強張らせている。

「だって、そんな、いきなり！ 立村くん、いったい何考えてるのよ！ 私、そんなこと言われたって困る！」

「困らないよ。今までの清坂氏ならまっすぐ、そうしてきたらどう？」

「そんなこと、決め付けないでよ！」

こんなに激しく動揺して食って掛かる美里を見るのは久しぶりだった。中学時代の修羅場を思い出すたび、美里の感情をぶつけられて逃げ出していた自分の幼さに笑いたくなる。押し付けられる気持ちが重すぎて、これ以上話したくない、だから走って逃げ出した。

でも、今ならわかる。あれが美里なのだ。ひまわりの花のように、すっくと立って太陽の光を浴びている、一番似あう姿だ。

B組で女子たちから無視されて、しかたなく別の教室に避難して愚痴っているような梅雨空の明けない日々を過ごす美里は、上総にとっては違いすぎる。

もっと怒鳴ればいい、もっと叫べばいい、そのまま走ればいい。

関崎がどういう意志を伝えようとも関係ない。美里が確かなる美里に復活するためならば、上総は元の恋人だったプライドをさっさと捨てられる。

「だって、そんなことできるわけじゃない！ だって立村くん、そんなことなんで言うの？ いくらなんでも私、そこまで人間として腐ってないよ。私、立村くんの前でそんなことできるわけじゃない！」

小声でのやり取りを関崎は聞き取っているだろうか。

何を意味しているか、理解しているだろうか。

「俺と付き合ったことがあるからか？」

はっきり尋ねてみると、美里は言葉をとぎらせつつもう一度繰り返した。

「だって立村くん、そんなこと」

「だからこそ、だよ、付き合い相手だったからなおのこと」

関崎を見据えた。様子を見守っているだけだった。もう無理やり家からたたき出すしかなさそう。夏の陽射しに焼かれて、芯まで焦げろ、そう願った。

「俺しか言えないだろ！」

聞かれたっていい。上総ははっきり言い切った。関崎の方に美里を振り向かせ、そのまま触れずに指し示した。

「関崎、話は終わった。清坂さんを家まで送ってくれ」

あとは関崎に任せる。今、美里を大輪のひまわりとして咲かせるには、関崎の存在が必要だと、元交際相手の上総は確信していた。

貴史が立ち上がった。上総の前に立ちはだかった。

「立村お前、何を考えてるんだよおいおい、美里も一緒に連れて来いとか言ってたくせに」

すっかり視界の外に追いやっていたせいも、奴の存在を忘れていた。だがもっともだ。美里のお目付け役にはせ参じた貴史にとってこの展開は想像を絶するものかもしれない。きっと話せばわかってくれるだろう。

「これから話す」

貴史相手にはゆっくり説明するつもりだった。もうすでに邪魔者は関崎のみ。

「清坂さんと一緒に帰ってくれ」

促すが、関崎は重々しく、分かりやすい質問を投げかけてきた。

「なぜだ」

なぜ、は簡単だが答えるには難しい問いの言葉、疑問詞だ。あっさり答えた。

「関崎と話は終わった。清坂さんがお前に話があるそうだ」

しつこく食い下がる関崎をあしらうのは骨が折れる。

「俺はまだ言いたいことがあるが」

何をこれ以上説教したいのだろうか。もうたくさんだ。関崎の、上総に対する二学期以降へのお説教はもううんざりだ。

「夏休み後でもいいだろう。とにかく、今は一緒に出ていってくれ」

「その言い方はないだろう？ お前の方から引き止めておいてだ」

「今から羽飛と話をする。聞かれるのはまずいんだ。だから」

暫くぶつかりあった。関崎と話をすると、どんなことを言い返しても終わらない。

側で貴史が「何が理由なんだよ、おい」懸命に問い掛けるのを無視したままでいた。

突破口を開いたのは美里の言葉だった。凜と響いた。

「関崎くん、話があるの。一緒に帰ろう」

——あ、戻った。

貴史がまたおろおろしながら美里に問いかけている。

なぜそんなに慌てているのだろう。

一緒に喜ぶべきだ。

高校に入ってから輝きを失った美里が今、脱皮しようとしている姿なのに。

どうして貴史は気付かないのだろうか。あまりにも近すぎたからだろうか。

好きなら好き、裏表なくぶつかるその美里が戻ってきたのに。

「美里、お前も何を」

「あとで説明するよ。貴史ごめん」

まっすぐ関崎を見据え、美里は戸を開いた。

廊下から、だるまのような丸いかたまった空気が転がり込んできた。暑くはないが、もやっとする。上総はまず関崎を覗やり、次に美里、ついでにしつこく問い詰めようとしている貴史の醜態をも観察した。とにかく説明の時間が必要だということだけは理解した。

もう一度、関崎に向かい伝えた。

「話を、聞いてやってくれ」

小声で囁いただけなので、果たして関崎に聞こえていたかどうかはわからない。押し出さないと動きそうにないので、腕を取った。さっさと玄関で靴を履いている美里の側に連れて行った。でかいスニーカーがでんと玄関のたたきに陣取っている。

万事休すといった風に関崎がかがみこむ。その側で、すでに靴を履いた後の美里がじっと上総を射るような瞳で、立っていた。

「立村くん、ごめんね」

一瞬言葉を切った。

「ありがとう」

まっすぐな眼差しが、上総の瞳をも貫こうとしたかのようにだった。

大きな瞳の奥には、確かな決意の色も読むことができる。

——清坂氏、関崎はきっといい返事はくれない。けどさ。

今の美里をいいかげんに扱うことのできる男子は、いない。

確固たる価値のある美里を、その通りに扱ってくれるだろう。

心の深みにある一点を射す。その瞳を今の美里は供えている。

——中学時代と同じ目を、だ。

それさえ取り戻せば、もう大丈夫だ。

不承不承といった感じの関崎と、しゃんと背を伸ばした美里を玄関で見送った後、上総は部屋に戻った。貴史が部屋から出てこなかったのだけが気がかりだった。

「羽飛、悪かった、あのさ」

話し掛けながら戸を開け、ラムネ瓶に目を向けた。

——羽飛？

コルクの抜けたラムネ瓶が横向きに転がっていた。当然、空だった。。

貴史は自分で抜いたコルクをかじりながら待ち受けていた。

上総は机から椅子をひっぱりだして座り、見下ろした。

口を拭いながら貴史が見上げている。

テーブルの上に置いたままのラムネ瓶を持ち上げて、何度か中のビー玉を鳴らしていた。

「立村、あれ、なんだいったい」

問い掛けるでもなく、ただぽつんと呟いた。答えた方がいいのだろうか。

「そういうこと」

端的に答えてみた。

「そういうことじゃあわからねえだろ」

うんざりした顔で貴史は上総に、ラムネ瓶の口を突きつけた。

「お前はひとりで納得してるし、美里も行っちゃったし、俺だけか？ 何が起こったのか理解できねえままなのは」

「これから説明する」

「ああ、説明しろよ。お前の得意技でねっとりとだ」

まだ関崎と美里の発した熱気は残っているようだった。透明クッションに似たものが、今の上総と貴史の間には挟まっているかに思えた。少しだけ呼吸を整え、上総はゆっくりと語ることにした。

——俺の話仕方ってそんなにねっとりしていたんだろうか。

このあたりの誤解については、あとで解くことにしよう。

「見た通りなんだ。清坂氏は関崎に興味があったけど、なかなか話をするきっかけがなかったよだから、あえて二人きりの機会を用意しただけなんだ」

「はあ？ だからどうしてそんなことする必要ある？」

もっともな貴史の質問だ。当然、前々から決まっていた答えを返した。

「学校だといろいろ面倒なことがあるしさ。羽飛も知っている通り、今清坂氏はB組で大変な思いをしていると聞いている。だから、できるだけ人目につかないところでゆっくり話をしてもらったらどうかな、と考えた次第なんだ」

「おい、ちょっと待てよ」

マイク代わりに貴史はラムネ瓶の口をそのまま上総に向けた。

「俺の聞いたのはそういうことじゃあねえ。俺が知りたいのは、立村がなぜ、そんなことしようと考えたのかってことだぞ。当たり前だろ」

「ああそうか、ごめん」

つまりは上総自身の行動理由を知りたいらしい。あっさり答えた。

「やはり友だちだからだろう」

「美里が、お前とか？」

「そう、それ以上の理由はないな」

もっと深く説明することも可能だが、貴史がそんならだらした理由を求めているとは思えなかった。

「俺も羽飛からいろいろ話を聞いていたから、できれば清坂氏がこれ以上しんどくならないようなこと、手助けできないかなと思っていたんだ。それでたまたま今日、関崎が俺の家に遊びに来てさ」

「どうしてだよ」

「なんか用はあったようなんだ。よくわからないけど」

細かい話はあえてはしよった。

「ふたりだけだと話も尽きるし、そういえば天羽たちのカラオケ大会がこのあたりで行われていることを思い出して、呼び出しただけ」

「じゃあなんで天羽たちも呼ばなかったんだ？」

「本当は清坂氏だけ呼びたかったけどさ」

話がかみ合わず、上総もどう進めてよいのかわからない。とてもだが思いつきで呼び出したなんてことを言えはしない。関崎がなぜいきなり上総の家へ押しかけてきたのかとかも詳しい事情は話したくない。小学校時代のやりきれない記憶でパニックを起こしかけて、そこを関崎の正義派攻撃で突かれたとか、隠しておきたいことはたくさんある。

「おいおいなんでお前そうまどろっこしい言い方しかできねえんだよ」

「俺が悪かった、だから」

「違うだろ、そうやって逃げるのもいつものパターンじゃあねえの」

苛立ちを隠さず貴史がテーブルを平手で叩いた。もちろんラムネ瓶のマイク化はそのままだ。「俺が聞きたいのは、なんで立村が、美里を関崎とくっつけようと企んだかってことだぞ。あたりまえだろう？ お前、仮にも美里とは一夜を共にした仲じゃあ」

「誤解を招く表現はやめろよ」

文字通りの事実ではあるのだが、その裏に潜んだ意味まで重ねるのはできれば避けたい。貴史はもともと細かい言葉の意味を熟考する奴ではない。そのまま続けた。

「そういうお前がなんで愛のキューピットしねばなんねえんだよ」

「やはり見るに見かねてと行ったところかな」

「はあ？」

仕方ない。この辺は素直に答えよう。

「この前、羽飛と話した時にも触れたけど、高校に入ってから清坂氏が関崎のことを気に入ったのはなんとなく感じてたんだ。隣のクラスだし、そういうのはなんとなく伝わってくるしさ。中学時代は俺といろいろあって迷惑かけたし、この機会に応援に回ろうかと思ったのがまず発端なんだ」

「お前そういうこと、なんで先に言わないんだ？」

「てっきりそういうこと、羽飛も知ってるんじゃないかなと」

言いかけて思い出した。いや、話してないはずだ。あえて美里の恋心そのものが自分以外の誰かのもとにあることだけは伝えたが、その相手の名前までは伏せていた。話しながら気がついた

。貴史は知らないはずだ。

「知るわけねえだろが」

「ごめん、気づいてるかなと思った」

でもなんで謝る必要があるのだろう。違和感あり。

「けどさ、羽飛なら清坂氏のことを理解しているからこそ、きっと俺の今回の行動を納得してくれると思うんだ」

あえて自分を正当化してみた。恐る恐るではある。貴史の目つきが険しいのは部屋に入ってきた時から変わらない。カーテンが揺らぎ一瞬日が翳った。貴史の顔にうっすらとレースの影が写って消えた。

「東堂とは羽飛が話し合いを持ったと聞いていたしそのあたりはあまり心配してなかったんだ。B組女子同士のいざこざも、清坂氏ならあっさり乗り越えていくと読んでいた。ただ、味方がだんだん減っていつている状況の清坂氏のことを考えると、ひとりだけで戦っていくのは酷なような気がしたんだ」

「ひとり、かよ」

「もちろん、羽飛が見守っていることは俺も承知しているよ」

こつこつ、今度はラムネ瓶の尻を打ち付けている。

「俺のことはどうでもいいだろ。それよかお前はどうかだよ。仮にも付き合っていたのに、いきなり他の奴にお下がりとして押し付けるのはなんかふざけてると思われても文句言えねえんじゃないか？」

——お下がり？

言われた意味がわからない。お下がり？

「お下がりの意味がよく理解できないんだけどさ。ただ清坂氏と俺とが付き合っていたことがあまりいい影響を与えてないんだなということは気づいていたよ」

「おいおい、またお得意の自己批判かよ」

テーブルに傷がついているんじゃないかと思われるほどの音がする。

「そんなわけじゃないけどさ。ただ女子同士では、清坂氏の相手として俺ではちょっとなんというか、という気持ちはあるんじゃないかと思う」

「お前が勝手にひっこんでどうするんだよ。事実お前らは三年近く付き合ってただろ。やることはまあ、どこまでやったかは置いて」

「やることなんかやってない。それ以上ネタを持ち出すなら話すのやめるからな」

やめても貴史を追い出すのはまず無理だろう。承知で脅してみた。

ここまで一度も貴史は笑わなかった。

「実際俺と清坂氏はいい友だちであれ、それ以上の何かってのはない。ただ誰にもその事実を公表する機会がなかった。よく知らない奴は俺たちがまだ、いわゆるその」

「付き合ってるんじゃないかと思ってるってわけか」

「そう、そういうこと」

頷きながら、一息ついた。心ならずも椅子に腰掛け貴史を見下ろす格好となる。反対のパターンは多かったけれども、こうやって形だけでも優位だと話がしやすいの。

「B組女子もそのことで清坂氏を冷たい視線で見ているというのは、羽飛から聞いた記憶があるな。清坂氏はあまりそういうこと気にしないタイプだからかまわないけど、女子同士の争いはひとつの弱点をとことん突くことが多いと聞いたことがあるし、だったらひとつでもマイナスポイントを外すのがベストじゃないかとも思ったんだ」

「自分をマイナスポイントって決め付けるのかよ」

「そう。そういうこと」

聞き流した。

「本当は誰か清坂氏に新しい交際相手が出てくれば、俺とのことは消えるし、少しは居心地もよくなると思う。最初は俺もそんな差し出がましいことをするつもりはなかったよ。押し付けられるのは個人的にたまったものじゃないしさ」

「でも結局は、キューピットとなったわけか」

「結果的には」

貴史は黙り、すんとテーブルにラムネ瓶を置いた。窓辺に視線を走らせ、

「夏休み前にカップル誕生かあ。ずいぶんとお熱いようで」

「いや、それはたぶんない」

余計な一言が唇から、そうめん一本の細さで滑り落ちた。

——言わねばよかった。

後悔する前に貴史がふたたびラムネ瓶を握るのが見えた。

「おい、今なんと言った？」

「いやなんでもない」

「いいや、お前、『いや、それはたぶんない』とか言っただろ！」

「深い意味はないよ」

「ないならなぜ言った？」

片手にラムネ瓶を持ったまま貴史はゆっくり腰をあげた。烈火ではないにしても太陽熱で焦げそうな臭いはしそうだ。何か上総の発した言葉が発火点となったのか、それもわからない。背もたれに背中をべったりくっつけ上総は答えた。

「羽飛も噂では聞いているだろう。関崎と、もうひとり、時間の問題という相手のこと」

「誰それ。悪いが俺は関崎とは殆ど喋ったことねえぞ」

「ほら、清坂氏と犬猿の仲という女子のこと。確か、静内さん」

「関崎の相手がか」

まさかとは思いが気づいてなかったのだろうか。上総は貴史に見下ろされつつ様子を伺った。立場が逆転している。しかも貴史ときたら使うつもりのなさそうな武器すら握り締めている。圧迫感ありだ。立場が弱くなってしまった。

「たぶん、あのふたりは時間の問題だと思うんだ。俺もそれは感じる」

「ちょいと待てよ立村。つまりお前、全くあてがないとわかっていて、あえて美里をけしかけた

ってことか？」

「結論から言うとそうなる」

言い切ったとたん、貴史の目つきが険しさを乗り越えて激怒の色に染まったように見えた。一瞬の幻であってそれは、単に白目が充血しているだけのようだが、その瞳で見下ろされると上総はどうしても一歩、また一歩引きたくなる。

「なんでよ」

「それが一番いいと思ったから」

「なんでだよ」

「清坂氏にはそれがベストだと思ったから」

「なんでだ？」

「羽飛、お前ならわかるだろ？」

しつこく問い詰められても答えは変わらない。このままラムネ瓶で頭をぶん殴られても不思議のないその目つきが怖い。椅子を心持ち後ろに下げ、貴史から距離を取ろうとするが果たせない。しかたなく上総は答えた。

「正直なところ、俺はあのふたりが付き合う可能性はゼロに等しいと考えている。関崎の性格から考えて、恋愛対象にならない女子と付き合うような軽い真似は決してしない。だから水鳥中学時代はシーラカンスとか堅物だとか融通利かないとか、全校生徒に言われていたらしいんだ」

「お前とどっこいどっこいの堅物同士ってことだな」

——おい、俺と関崎とイコールと思っているのか、羽飛は。

心外だが、この場で文句を言う必要はない。

「俺があえて清坂氏をこの場に呼んで告白をけしかけたのは、付き合わせようと思ったからじゃない。もしそうなら学校内で、一目につきそうなところでも構わないわけだしさ」

「じゃあ理由はなんだよ」

——本当に気がつかないのか？

恋人以上の幼なじみ、そんな貴史がなぜ気付かないのか？ 理解しがたかった。

上総が自分で説明するしか方法がないのか。

一言間違ったら速攻張り倒されそう。

だが、答えなければまた別の制裁が待っていそう。

自分で早く答えにたどり着いてくれればいいのに、その気配すらない。

やはり上総から白状することになりそうだ。観念した。

「中学時代のように、自信のある態度を取り戻してほしかった、それだけなんだ」

「はあ？」

まだわからないのか。いらだたしい。

「清坂氏は自分からまっすぐぶつかっていくタイプだよ。それは羽飛もわかってるだろ。なのに関崎の件についてはずっと様子を伺っているだけだった。もちろん見込みがないならそれはそれでいい。玉砕するのは誰もが避けたいだろうしさ。俺はよくわかんないけど。ただどういう結果にせよ、まっすぐ関崎に話をし、その上で気持ちを整理できればそれはそれでできっとすっきり

するんじゃないかって思ったんだ」

「すっきりさせてどうなる？ 流すのか？ 水洗トイレみたいに」

「そうすれば、うまくいくんじゃないかな、って思っただけさ」

あえてこれ以上は秘めた。

かつての自分がいいかげんなまま美里を翻弄し苦しめてきた罪が、今なら読み取ることができる。清坂氏がどんな想いで上総に告白してきたのか、その上でどういう付き合いを求めてきたのか。気持ちが恋心とは別の友情と気付いた時に、どうして早い段階で軌道修正してやれなかったのか。上総の奥に澱として残っているその悔い。関崎ならばそんなあとを引きずるような恋心を上手に切ってくれるだろう。美里の登場にかなり仰天してはいたけれども、一度決めた想いを切り替えるような真似は決してしない。その点は信頼していた。

「付き合い合わないなんて、俺はどうだっていい」

上総は言葉を締めた。

「友だちとして俺が清坂氏のために一番いいことを考えたらこうなったんだ。わかるだろう？ 羽飛」

わかってもらえると信じていた。

美里のことを一番理解しているのは貴史なのだ。

恋愛感情というものは違う次元で美里を見守っている。将来貴史に彼女ができたとしても、美里との繋がりは全く変わることなく続くような気がする。

同じ絆を上総も、中学三年間のすったもんだの末得た。

おそらく、貴史と同じ目で、色恋沙汰とは関係のない眼差しで美里を支えたいと思っているはずだ。貴史とくっつけば本当はベストだと考えてはいたけれども、その気持ちがお互いになくことは確認済み。だからこそできることがある、そう信じていた。

上総は貴史の顔を見上げた。ちらとラムネ瓶の持ち位置を確認した。

ゆっくりぶらんとぶら下げていた。

「友だち、かよ」

「悪いか」

「ふざけんな。よりによって外部の奴に押し付けやがって！」

「関崎はいい奴だよ。かなり鬱陶しいところがないとはいえないけどさ」

「そういう問題じゃあねえだろ？」

空いている手で上総の肩を揺すぶった。

「立村、いいのか、本当に手放して後悔してねえのか？」

「してないよ。何度も言うけど俺は友だちとして」

「いいかげんにしろ！」

外の物音がかすかに止まった気配がし、すぐに元通りとなった。

貴史の怒号を受け止めたのは、まだ美里と関崎がいた時の熱気がクッションとして挟まってい

たからだろう。不思議なほど上総は落ち着いて貴史の目を見つめていられた。

「あいつが受け入れちゃったらどうするんだよ、後戻りできねえぞ」

素早く貴史は背を向けた。ベッドにこしかけたまま、握り締めたラムネ瓶を膝に置き、何度も口を平手で叩いていた。

「受け入れられたらそれは、間違いなく関崎も清坂氏のことを好いているということだからそれはそれでいいと思うよ」

そこまで答えて、上総は息を細く止めた。

「それだと羽飛、まずいのか？」

もう一度ゆっくり繰り返した。

「羽飛、まさか、まずかったのか？」

返事はなかった。貴史がそのまま怒った顔で窓の外に目をやっている。

——まさか、本当にまさか、羽飛は。

ちゃんと何度も確認したつもりだった。

付き合う気持ちなどないはずと、念には念を入れたはずだった。

美里とは純粹に親友のままでいただけと信じていた。

——まさか俺は、羽飛の気持ちを読み違えたのか？

空のラムネ瓶を口に近づけ、貴史は空気を飲むような格好をしたまま黙っていた。

——まさか、羽飛は、清坂氏のことを、やはり。

まだ断言できなかった。動揺する様をごまかそうとしない貴史の態度は、確かな答えのように思えてならなかった。

「何言ってるんだよ、間違っても何もねえだろ」

しばらく沈黙が続き、やがて貴史は言葉を発した。

「後悔すんのはお前のほうじゃねえのかって、心配してやっただけだぞ」

「しないよ」

窓のカーテンを閉め、上総は背を向けたまま答えた。

もうとっくに関崎と美里は話し合いを済ませ、行くべき道を見出していることだろう。その結果がどうであれ、美里が自分ひとりで選んだことならば間違いはないはずだ。美里にとってもそうだし、関崎にとっても同じことだろう。美里の想いを綺麗に断ち切れれば、またそれはそれで別の展開が待っている。

ただ、ひとつだけ予想外の答えが待ち受けていた。

部屋にそれが籠ったまま、揺らいでいる。

目に見えない重たい空気だけが、まだ貴史の頭の上に浮かんでいるかのようだった。

——そういうことだったか。

もう一度上総は心の中で呟いた。

——言葉と気持ちとは、別なんだ。

カーテンに向かい、陽射しがまだ熱く残るサッシに触れた。網の部分はたいしたことなかったが、やはり鍵のあたりはやけどしそうな感触だった。

何度も確認したつもりでいた。

貴史は美里を「親友」としか思っていないはずだった。

だから上総はためらうことなく、美里を関崎の下へ送り出した。

付き添い人として貴史を呼び寄せることもためらわなかった。

たぶん手を打って大笑いしながら、

「なーんだ、美里を嫁に出すってわけか。こりゃあおもしれえな。どうするんだよ立村、これから俺たち、美里の恋愛相談にしっかり頭悩まされるはめになるんだぞ。どうするおじさん？」

くらい祝いの言葉を述べたんじゃないだろうか、そう思っていた。

今の貴史の様子は、いくら恋愛沙汰に遠い上総にもわかる、

「失恋した男子の典型的な言動」

そのものだった。こういう面を見せるとしたら、アイドル鈴蘭優の恋人発覚かできちゃった結婚事件あたりか……しばらくなさそうだが……だろうと読んでいたのだが、大きな間違いだったようだ。

——やはり、清坂氏ひとりと呼ばい出した方がよかったんだろうな。

たぶん、元恋人の家にひとりでのこのこ来るとは思えないし、こればかりはなるべきしてなったことなのだ。仮に古川こずえが付き添ってきていたらまた別の展開に発展していたような気もするし、誰がどう動かしても、いくべきところはここしなかった。悔いはない。いや、後悔はし

ない。

たとえ、貴史がひとり、一足お先に秋風を感じていたとしても、だ。  
恋愛沙汰については決して慰めごとなど口にしない。  
男子同士の鉄則だ。

「羽飛、ひとつ聞いていいか」

窓辺でカーテンを見つめたまま上総は尋ねた。貴史が「ああ？」といいかげんな返事をしてきた。

「自由研究、どうするつもりでいる？」

「どうも何も決めてるわけねえだろ。これから考えるに決まってる」

「それなんだけどさ、俺と一緒に組んで何かやらないか？」

「お前の方から言い出すのはめずらしいや、なんだよその風の吹き回し」

ようやく貴史も、いつもの軽い乗りが戻ってきたようだった。背中の中のシャツ越しに揺らぐ気配が自然だった。

「ほら、うちのクラスの担任いるだろ。この前の追試で、自由研究は集まって話し合っただけを片をつけろって言い出してさ。俺も本当は、さっさと英文学の原書適当に訳して終わらせるつもりでいたんだけど、どうも面白くないらしくてさ」

振り返ると、貴史はにやにやしながらあぐらをかいていた。あぐらというより、ヨガに近い。

「ああ、立村いつもそうやってたもんな。ひとりでちゃっちゃとやって終わっちゃう」

「けど他のクラスの連中と組んでも構わないみたいだったし、だったら羽飛と、あと清坂氏を誘って何か実験やるのもいいかなって思ったんだ」

——思ってなかったよ、今の今まで。

いいかな、と思ったのはさっきの貴史の姿を目にしてからだった。

それまでは杉本梨南を誘って同じような本の訳でもしようかと思っていたのにだ。

貴史が「どういう風の吹き回しだ？」などとほざくのも最もだ。

窓辺にもたれて、思いついたままどんどん語りかけてみた。頭で余計なことを考えるよりは、口の回るままに勝手なことを語っていた方がよさそうだった。

「うちの担任は俺をとことん叩きのめすチャンスを探しているんだ。つくづくそう思った。俺が泣きついて助けて欲しいがまでは手を緩めずに叩きのめすつもりなんだ。各方面の情報を集めてみて実感した」

「叩きのめすかよ」

「そう、だから俺が得意の英語訳文提出だけで終わらせるのを阻止したんだよ。おそらくだけど担任の魂胆としては、グループでまとまった論文かレポートかを書かせるようなものを作らせたいんだろうな」

「立村、お前本当に、担任と戦ってばかりだよなあ。天羽も難波も言ってるぞ」

第三者の目からみてもそうなのだから、疑うことはない。たとえ母の裏工作と知ったとしても、こちらとしては麻生先生を叩きのめすことにためらいなぞない。

「そうだよ戦い。俺は延々と一学期、麻生先生と戦ってきたさ」

当然言い切った。

「けど、中学時代と違ってそろそろチームワークで戦っていく時期に来たかな、とも思ってるんだ。あの頃俺は、あの菱本相手に無謀な戦いを挑んできたけど、もう勝ち目のない手段は使わない。やるからには勝つ方法でしっぺ返ししてやろうと決めたんだ」

そう、たった今、決めた。

予定変更だ。

もうショックなんかどこへやら、といった風情の貴史に上総は言い切った。

「だから、ベストメンバーで立ち向かおうと考えた次第なんだ。羽飛と、俺と、あと清坂氏と」

「美里？ なんでだ？ あいつ、古川あたりとつるむつもりじゃねえのか。あと、ほら、さっきまでいた、あいつと」

言いかけた貴史に上総は首を振った。思わず笑いたくなるのを唇の端で押さえた。下手に笑ったら貴史を侮辱してしまいそうで怖かった。

「黙ってたらそうなるよ」

カーテンの端を握り、ひっぱった。

「もし関崎のことを言っているんだったら、それはありえないよ。関崎は清坂氏と付き合う可能性、殆どないしさ。振った相手と自由研究やりたがる性格でもない。もっとも清坂氏がどうするかはわからないけどさ」

「まあな。お前の説明聞いている限りだと、美里はこっぴどく振られて泣きの涙で帰ってくるはずだよな」

感情の籠らないさっぱりした声だった。貴史にしては珍しい。

「じゃあ傷のなめあいか」

「なめあいではないけど、とりあえず俺たち三人は事情をすべて知っているわけだよな」

もう、ここまできたら思いつくまま語るしかない。計画変更万歳だ。

「清坂氏は古川さんにも話すかもしれないけど、とりあえず現場にいたのは俺たちだけだ。それは確か」

一気にカーテンから手を離れた。たわんで揺らいだ。影はそのまま残っていた。

「今日のうちにでも、清坂氏に羽飛の方から連絡を入れて、自由研究の準備を早々に行おうと誘ってもらえると助かるな。明日の段階で一度集まって、その上で今後の対策について相談するってのはどうだろう」

「何の相談をするんだ？」

きょとんとして貴史が尋ねた。

「もちろん、自由研究の内容だよ。それと」

言い添えた。

「清坂氏が今後、関崎にどうぶつかっていくかを聞き出して、俺たちふたりがサポートする。というのはどうかなって思ったんだ」

「サポートってなんだ？」

「それはその時考える」

具体的な答えは決まっている。でも、貴史には言えないことだった。

——やはり結論はひとつだ。

余計な説明は一切せず、その後は音楽の話とか夏休み中の旅行についてとか、それなりに盛り上がる話題も出てきた。カーテンを閉めっぱなしにしたせいで、だいぶ部屋は薄暗くなってきたが語る分に不便はなかった。さっきの落ち込み具合もどこへやら、貴史はすっかりいつもの元気印に戻りつつあった。突っ込んでくるのもいつものこと。

「立村、ところで最近ちょくちょく来ているあいつのことなんだけどなあ」

「誰だろう？」

杉本のことだとしたら「あいつ」とは呼ばないだろう。まがりなりにも杉本は女子だ。

貴史はあぐらをヨガポーズからゆったりした構えに変えて尋ねた。

「ほら、霧島の弟。やたらと最近A組に顔を出してるだろ。古川が言ってたぞ」

「ああ、あいつな」

忘れていたあいつのことを思い出した。

「天羽や難波も喋ってたけどな」

カラオケボックスでそれなりに噂情報も流れていたのだろう。耳を傾けた。

「ずいぶんあいつ絡んできてるなあとか言ってたぞ。青大附中生徒会で相当お前に恨みでもあるのかとかな。ずいぶんいい根性じゃねえかって話だ」

「そんなこと言ってたのか」

女子の先輩ではこずえにも懐いている様子の霧島だが、確かに第三者から見ればつかかかってきているように思えるのだろう。實際上総も立場が変わればそう感じるだろう。

「まあな、難波は霧島の「美人の姉さん」の件でいろいろとあるから文句たらたらなのはいいとして、天羽が心配してた」

「何をだろう？」

「立村を叩きのめしたいだけなんだろうってな」

「まさか」

上総は笑いたくなかった。笑いをこらえようとしてやめた。すぐに手を打って腹を押さえて、とりあえず笑った。

「俺を叩きのめして何の得があるんだよ」

「それは思い当たる節ありありだろ？ 天羽も警戒心持ってるみたいだぞ」

否定はしなかった。貴史も生徒会情報についてはあまり興味を持っていなかったのかそれ以上質問してこなかった。上総にとっては好都合だった。

「じゃあな、悪い。これから美里の様子を覗てみるな。あいつもったくなあ、色気づきやがって。まあどうせ振られるんなら次は俺たちの仕事だな」

部屋でしゃべっている分にはしんどさもないが、やはりいったん貧血を起こして担ぎ込まれた

我が身に夕暮れ近くの夏日は辛い。気温が下がったように見えても実は身体が全く冷えた感じが  
ない。まだ全身火照っている。

「そうだね、清坂氏のこと、様子観てもらえると助かる」

気がついたなどとは全く感じさせることなく話したつもりだった。

「結局俺があいつの面倒を見るってわけかよ」

「いつものことだけどさ」

軽く流した。上総も普段ならそれほど気を留める会話でもなかった。

「美里の母ちゃんも神経とがらせてるしな。今日の一件については俺の方からもなんか話しとく  
。下手に落ち込んだり泣かれたりしたら夏休みすげえことになるしな。それよかお前の言う通り  
、自由研究に誘い込んで、その後様子を見る方が安全だしな。お互いにな」

いつも口数の多い貴史だが、この日に限っては妙にテンションが高かった。

——羽飛は気付いたな。

玄関で貴史を見送った後、上総はそのまま台所に向かった。

もうすっかり家の中は薄暗くなりつつあり、蝉の声が高らかに響き渡り始めた。

上総の家近くでは、蝉が元気全開となるのは夕暮れ以降からだった。

空になったラムネ瓶を二本シンクに置いた。関崎と貴史のどちらが口をつけたのかはわから  
ない。ただどちらも同じ薄緑の瓶だった。

——清坂氏が、羽飛にとってかけがえのない存在だってことを。

いや、以前から「親友」ではあっただろう。そう互いに言い習わしてきたはずだ。上総も耳に  
たこができるくらい聞かされてきた。本当なのか、そう問いただしても明確な答えは返ってこ  
なかった。互いに「親友」という名称でもって納得させられてきた。

なぜ上総では許されて、関崎相手だと動揺したのか、その理由まではまだ探り出せない。美里  
の恋心をなぜ貴史が今まで気付かずにいるのかも正直不可解だ。あれだけ美里の日常に目を光ら  
せていた貴史がなぜ、この場で関崎の存在に慌てたのか、明確な答えは出せない。

ただこれから先、上総が美里および貴史をどのようにサポートしていけばいいのか、そのこと  
だけははっきりと答えを見出すことができた。それだけは確かだった。

——羽飛が清坂氏を受け入れる準備をしているなら、それを支える、それだけだ。

夏休みが始まる直前にもらった宿題を、上総は自分のやり方で解くことを決意した。

——あとふたり分の宿題だ。

部屋に戻り、中学時代の元評議委員会連絡網プリントを探そう。その中には確か、霧島さんの  
電話番号が載っているはずだ。弟ならば、電話番号が変更になっていない限り問題なく連絡がつ  
くはずだ。杉本梨南については、既に手帳へ電話番号がメモ済みだ。連絡に支障はない。貴史が  
連絡をつけてくれさえすれば、明日の段階で美里たちと顔を合わせられるだろう。夏休み初日に  
、できれば三つの宿題をすべて片づけたかった。

はたして美里が関崎にどんな言葉で想いを告げたのか、上総は知らない。

同じようにその夜貴史が、美里を捕まえてどのような会話を交わしたのかも想像つかない。

「おーい、立村、これからお前さ、美術館まで来ることできるか？」

午前中ベッドの中でごろごろしていた時に貴史から電話でお誘いを受けた時、上総はすぐ受けた。

「昼前には余裕で着くよ」

「じゃあ、待ち合わせだ。お前言ってただろ、自由研究のこと。俺もちょっと考えてたんだけどな。せっかくミスター英語科の立村がいるのなら原書なんぞもひっぱり出さないとつまらねえだろうとか思ったんだ」

いったいいつから「ミスター英語科」などと呼ばれるようになったんだろう。

「別に原書なんか読まなくていいけどさ」

「美里にもすぐあの後、連絡を入れてな、善は急げってことで夏休み初日早々集まろうというわけ。な、お前も賛成だろ？」

自分から提案したことでもある。思ったよりも流れが早いことだけが気になるが、

「そうだな、わかった。今から支度していく」

「もしかして、お前今まで寝てたのか？」

「当たり前だろ、今日から夏休みだし」

父はさっさと出かけ、母は不在。まだ成績表は自宅に送付されていない。

こんなんびりした午前中をなぜ、急いで消化する必要があるというのだろう。

「じゃあわかった。十一時に青潟市美術館のチケット売り場前で美里と待ってる」

——やっぱり、ふたりでか。

どういう決着がついたのか見えそうで見えない。上総は了解し、すぐに身支度を整えた。

貴史の口からはっきりと、美里への気持ちを聞き出したわけではない。

たぶん貴史自身は自覚してないかもしれない。

上総が見たのは、貴史が言葉以外のボディランゲージでもって、「清坂美里を失いたくない」という強い意志を訴えたというそれだけのことだ。三年来の親しい友人が、明らかにお似合いの女子に対して好意を持っていることに気付いて動揺しているのならば、やはり上総としては助けたいのが人情だった。

——清坂氏もどうだったんだろう。関崎の件は。

自分で仕組んでおいて言うのもなんだが、やはり結果は気になった。

貴史があっさり美里を捕まえて、次の日さっそく美術館ミーティングを行おうと盛り上がっているところを見ると、おそらく上総の読み通り関崎には綺麗に振られた可能性が高い。あっさり受け入れられたらられたでまた。複雑な感情もないわけではないのだが。

——仮に俺の読みが正しければ。

洗いたての白い半そでシャツに、ごく薄い麻のジャケットを羽織った。室内に入るのならば、長袖の羽織ものは必需品だ。

——羽飛は清坂氏を手元に置いておくためになんらかの手段を選ぶだろう。関崎に振られたなら振られたで慰め役かしごき役か。どちらにしても後はあのふたりに話を進めるべきであって、俺の入る隙間はない。

もちろん自由研究という名目で首を突っ込むこともできるが、せいぜい手伝うとすれば貴史の言う通り「原書の翻訳」くらいだろう。その辺はテキストの内容にもよるがちゃっちゃと終わるだろうし、上総はただ貴史と美里の「永すぎた春」を応援するためそこにいればよい。

同じことを一年前も、二年前も、入学したての頃も思っていた。

財布を黒のセカンドバックに押し込み、自転車を漕いだ。

すでに夏休みということもあって、集団で大通りをうろうろしている小学生・中学生を多く見かけた。小学校高学年と中学一年前後の区別は少しつきづらいが、よくよく見るとズボンの丈が短いのが小学生、膝丈までであるのが中学生といった感じにも見えた。上総があまり近づきたくないタイプの連中であることだけは確かだった。

幸い今日は、近所の高校生たち……浜野含む……と顔を合わせることもなかった。

「立村、はええなあ」

「おはよ！ 立村くん」

すんなり美術館にたどり着いた。チケット売り場とはイコールロビーの中。ロビーの中ということはすなわち日陰。貴史があえてこの場所を指示したのは、ひとえに涼しいところで待ちたかったからに違いない。こういうところは頭の働く奴である。

「お前の方が早いだろう」

「まあな、さっきまで美術の本めくったりしてたからなあ」

「そうだよ、立村くん、なんかねえこいつ、人が変わっちゃったみたい。貴史って美術の本観てこんなに興奮するする奴じゃなかったよねえ」

「美里、すげえ誤解を招く表現してるぞ」

「何よ、そんなまずいこと話してないよ」

赤いチェック模様のワンピース、昨日のビタミンカラーとはまた違い、美里の顔立ちがはっきり映し出される色だった。そのままで口を尖らせる。貴史が苦笑する。

「古川がいなくてよかったなあ。まるで俺がすけべイラスト観て喜んでたように聞こえるだろが」

「まあ、ね、裸の人はいなかったけど」

ここだけ小声でもによもによ言う美里。

「いいか美里、俺は純粋に、絵が好きなんだが」

「でもさでもさ、貴史ってば私が話し掛けても全然無視してじゃないの！」

「無視なんかしてねえよ。学んでただけだろうが」

「なあに言ってるのよ！ 立村くん聞いてよ。貴史ってばさ、昨日いきなり電話かけてきて、自由研究を三人でやるから私も来いって無理やり誘うのよ。私だってこずえとやろうかなって思ってたのに、私と立村くんと三人でなくちゃだめだって。いいじゃないの、こずえが混じっても」

「そういう話じゃあねえだろ。だから美里お前振られてるんだろが」

最後まで言い切ることができなかった。美里が貴史の後頭部を平手でひっぱたいたのだ。

「悪かったね！ まだ、振られたって決まったわけじゃありませんよおだ！」

相変わらずのテンポで進む美里と貴史とのやり取りには、なにひとつくすんだ色が感じられなかった。昨日、上総の前に現れた時、美里はビタミンカラーの内側にまだ何かを隠しているように見えたのだが、それが今はない。

——ということは、やはり、関崎は清坂氏を。

「立村くん」

貴史とじゃれあった後、はっと美里は上総に向き直り、うって変わってはっきりした口調で告げた。

「なに」

「とりあえず、言ったよ」

「関崎にか」

「そう、でも、今はだめだって」

「今は、か」

繰り返すと、生真面目に語る美里の表情が強張った。

「そう、今は忙しくて私と付き合う時間ないんだって」

「関崎はアルバイトで忙しいからな。夏休みもそうだろう」

好みうんぬんはともかく、時間的制約を持ち出して傷つけないように断ったのだろう。これも読み通りだった。少なくとも関崎は据え膳食わぬは男の恥などと考えない性格だったようだ。

「そうか」

「以上、そういうことよ、貴史、今の話、聞いたでしょ？」

そのまま美里は貴史に向き直った。悪いが今の発言すべて、公的施設の美術館内で語るべき内容ではないように思う。もっとも美里に何を言っても無駄だとは思ふ。これも三年間の付き合いでよく理解しているつもりだった。

「昨日も電話で言ったけど、私、関崎くんに振られたからって落ち込んでないから！」

語尾を強めた。

「あんたがどういう見方してるかわかんないけど、私、あきらめないんだから。子どもの頃からそうだってあんた、わかっているじゃないの。私、負ける戦なんて絶対しないんだから」

「おいおい、何が負ける戦、だよ。威勢いいばっかで、実は朝まで泣き明かしてたんでねえの？ 顔、おたふくだぞ、おいおい」

露骨にはったりだと上総にはわかる。しかし見事にひっかかったのか、美里は無言で貴史の足

を蹴り付けた。

「あのなあ、お前、女子のくせに本気出して蹴るんじゃないよ」

「あんた、バスケット部やめたんでしょ。だったらもう、怪我を怖がる必要ないじゃないの。ほら、さっさと行くよ」

ふたりともどこへ行くのだろう。

上総は美術館地下に向かう階段へふたりを追った。よくわけがわからないが、おそらく二人はそれなりの会話を交わしたのだろう。美里が関崎を追いかけていたことと、すっぱり振られたことともうひとつ。上総も今、知ったこと。

——負ける戦はしない、か。

——清坂氏には俺もずいぶん、追いかけられたからな。

納得いくまでとことん追いかけて、その後はきっぱりと前を向いて歩き出す。それが上総の知っている美里だった。関崎に対しては正直、災難だと同情する気持ちもあるが、この三ヶ月間青大附高でやりたい放題やってきたのだから、そのくらいは重荷背負ってもらってもいいような気がする。どうせ本命が静内菜種だということはみな知っていることなのだから、しばらくは美里の想いをサンドバックのごとく受け止めていただきたい。この恋いくさ、今のところ上総は、美里を応援しようと思う。美里が関崎の面影なんぞ関係ないと割り切ることでできる日まで、

さて、もうひとり気になる貴史の様子を伺うことにした。今まで上総は知らずにいたのだが、この美術館には地下に画集を中心とした図書館が設置されている。美術の道を歩もうと決めた貴史は、ある時期からここに通り詰めらしい。

美里を追いかけていく貴史を捕まえ、階段の踊り場で立ち止まる。

「どうでもいいんだけど、清坂氏、よく知ってるなここ」

「あたりまえじゃん」

あっさり言い切られた。

「中学ん時からしょっちゅう来てるんだからな」

「そうか、しょっちゅうか」

「お前はあんまし美術なんて興味ねえって顔してるから誘わねかったけどな」

「当たってるな」

中学時代から、特に現代美術のシュールな奴がお好みだったふたりだ。誘われても現在過去未来の上総は避けたいと思うだろう。貴史は機嫌良く頷いた。

「ここは金がかからねえし、何よりも他の連中がうるさくねえしな。学校では茶々入れられて聞けねえこともここだと安心して話ができるってわけだ」

「秘密基地というところか」

「いいこと言うなあ。そう、その通り。じゃ、お前も秘密基地へ行こうぞよ」

ヨットパーカーの襟ごと叩かれ、思わず足を踏み外しそうになる。手摺りをしっかりと押さえた。ついでに貴史の顔を下から見上げると、奴はにやにやしながら素早く美里の背を追っていた。

——秘密基地。

いい響きだ。

上総は立ち止まり、ふたりが仲良く……もっともそれは心外と思われるかもしれないが……図書室へ入っていくのを見下ろした。

——もう、俺が清坂氏にすべきことはない。

一步足を踏み入れれば、すでにそこは貴史の領域だ。

あちらこちら曲がりくねった道ではあるが、やっと納まる場所へ納まろうとしている。

仮に美里がしつこく関崎を追いかけ続け、いつぞやの杉本梨南のようにこっぴどく追っ払われようとしても側に貴史がいれば大丈夫だ。そう信じられる。今度こそ、上総を含めた三角形はきちりした和をもって、均等に納まるはずだった。

図書室は正方形の机に四人掛け。しばらく聞き役に回りつつも、タイミングを見はからって立ち上がるつもりでいた。

「貴史のやりたがってることって私には全然わかんないけど、とにかくアメリカの画家に好きなタイプの人が多いってことはなんとなくぴんときたよ」

「アメリカばかりじゃねえよ。日本人だっている。ただ名前がわからねえだけ」

「金沢くんは知ってるの？」

「ああ、あいつ経由の情報」

上総が黙って紙コップのお茶をすすっている間、美里と貴史は相変わらずのマシガントークに徹していた。いつものことで、以前だったら取り残され感に捕らわれたりもした。今その感覚が全くないのは、話題が異なってもその場にいるだけで共に寄り添っていると感じられたからだろうか。上総は時計を覗き込んだ。

「あれ、立村くん、もう帰るの？」

美里に目ざとく気付かれてしまった。しかたないので頷いた。

「これからもうひとり、会う約束をしようかなと思っているところなんだ」

「へえ、杉本さん？」

以前なら奥に太い弦を響かせるような質問だったはず。今は違う。素直に聞かれているだけとわかる。美里に上総は首を振った。

「昨日の夜掛けたけど、出なかった」

「めずらしいね」

「あんまり夜かけるのも響きかと思って二回目は掛けなかったんだ」

「でもなんでだろうね」

「たぶん、友だちと遊ぶだろう」

杉本梨南とまずは外で一度会い、先日の件の後遺症を確認したかった。しかし、出るのは杉本の母だけだった。さすがに交際相手と誤解されるのはまずいだろうと判断し、上総は一度で受話器を置いた。

「そうかあ。じゃあ改めて誘うの？」

「そんな面倒なことはしない。別の奴と話したいと思ってさ」

アメリカの有名な……上総は名前も知らないが……前衛画家の画集をめくっていた貴史が、ふと顔をあげた。

「昨日言ってたな、霧島の弟のこと」

特に何か裏のありそうな言い方ではない。ただ、気がついたというだけのようだった。美里の方が初耳だったらしく、貴史に張り付いていろいろ聞き出そうとしている。

「え？ 今、ゆいちゃんの弟って言ったよね？ あの、ものすごく美形だけどものすごく性格悪いことで有名な、あの弟くん？」

「すごい説明だな」

全く外れているわけでもないので言葉を慎んだ。美里は上総に問い掛けつつ、時々貴史の読んでいる画集ページを勝手にめくった。

「ゆいちゃんの弟がどうかしたの？」

詳しい事情は告げられないので曖昧にごまかした。

「ちょっと、いろいろ」

「立村、霧島の弟に目、つけられてるんだってなあ。天羽たちが話してたぞ。すげえ弱味を握られてやがるってな」

いったいどういう情報が流れているのだろう。上総は言葉を選ぶのに苦心した。貴史はもともと耳元に口許をくっつけて秘密を語り合うなどということをお好まない。美術書に囲まれた部屋の中で、えらく下賤なことをはっきり言う。

「確かエロ本買ってるって見られたんだろ？」

「誰がそんなこと言ったんだよ」

いつだったか、天羽たち元評議委員たちの前で取り繕う意味もあり言い訳した言葉だった。真実を伝えるつもりなんてないのでそう思われるならそれでもいい。ただ問題は、目の前に美里が目丸くして座っていることくらいだった。

「立村くん、あんたそんな本買ってるの？」

絶句する。首を振りたくても振れない。貴史の足をつま先で探って思いっきり踏む。

「いや、そういうわけじゃ」

よせばいいのに貴史が火に油を注ぐ。

「天羽が言ってたぞ。立村の奴、霧島の弟にエロ本買ってるって見られてから、やたら相手に懐かれてしまって困ってるってな」

「半分当たっているけど半分は間違いだ」

一応、ある程度の訂正はしておくことにした。

「本を買っているところは見られたが、そういう類の本じゃない。単なる写真集だ」

「なあんだ、大袈裟なんだね、天羽くんたちって。そうだよな。いくら男子でもそんな変な本、人前で買うなんて、しないよね」

——古川さんがいなくてよかった。

これ以上話を大きくしないためあえて黙っていた。貴史が隣で、溜息交じりの視線を送ってきた。男子同士ではやはり伝わるものがある。

「でも、どうしてゆいちゃんの弟に懐かれちゃったの？」

「本の内容に興味があったからだろう」

苦し紛れに上総は答えた。

「ふうん、で、立村くんは霧島くんとどうしたいの？」

エロ本話に戻されるよりはましだ。思わず口走った。

「きちんと話をしたい気はあるんだよな。ただ電話番号知らないし、二学期始まってからにでも」

「そっか。わかった。じゃあ立村くん、ちょっと待ってて」

美里は素早く立ち上がり、上総を入り口に手招きした。白いポーチから手帳とテレホンカードを取り出した。

「今から私、ゆいちゃんちに電話するから、その時に弟くんを呼び出せばいいよ」

「どういうこと言ってる？」

「昨日のお返しよ」

状況が飲み込めないまま、美里は貴史を置き去りにし、貴史の手を引いて一階へと戻った。

「だってゆいちゃんと弟くんは同じうちに住んでるよね。てことは、ゆいちゃんちに電話をかけて、呼び出してもらえばいいことだよな。私も久しぶりにゆいちゃんの声、聞きたいし」

「でも霧島さんは」

青大附属から追い出された身だ。いくら美里が強くてもその発想は大きなお世話扱いされるんじゃないだろうか。

「そうだね、ゆいちゃんは会いたがってないかもね。でも、それはゆいちゃんの問題であって私には関係ないもん」

これ以上何も言い返せなかった。確かに上総は霧島ゆい経由で自宅電話番号を知っていた。しかしそこから繋いでもらうことがどうしてもできなかった。

やはり、今も、美里にひっぱられたままだった。

「じゃあ、今からかけるね。いいよね、立村くん」

美里に聞かれた。

「立村くん、今からゆいちゃんに電話掛けるけど、どう言えばいい？」

「どうって？」

尋ね返すと美里は少し間を置いた。

「霧島くんと直接話をしたいので電話口まで呼び出してって言ったほうがいいの？」

「いや、それはまずいだろう」

上総が答える前に、貴史が口を挟んできた。

「天羽や難波からいろいろ聞かされてるぞ。そうとうあの姉弟仲悪いみたいだってな。美里、それ知ってるだろ？」

「まあね、だから聞いているの。立村くん、どうする？」

再度問われた後、上総は答えた。

「ここに来いと言ってもらえると助かるな」

「はあ？」

また貴史が首をひねって呟く。

「ここで何するんだ？」

「電話で話すよりも、直接話す方が早いかなと思っただけだよ」

美里にはその旨、頷いて伝えた。上総の顔を怪訝そうに見つめていた美里も、

「そっか。そうだね、伝言だけ伝えとくってことでいいよね」

すぐに公衆電話へと駆け出して行った。

美術館地下一階の図書室には、まだ午前中というのにかなりの人が席で画集を広げていた。一冊一冊が大判で重たそうなものばかり。中には親子連れも見受けられ、子どもたちが奇声をあげつつ走り回っていた。

「こういっちゃなんだが、高尚なイメージなんてねえよな」

貴史が顔をにやつかせながら上総に話し掛けた。

「どういうことだよ」

「美術だから敷居が高いなんてことねえんだよなってこと」

ふうんと聞き流した。貴史がしゃべりたいだけしゃべってればいい。美術そのものに上総は興味を惹かれなかったし、むしろ美里がここに戻って来てからどういう話をするかに気持ちが向いていた。

「ほら、見てみろよ、あそこのがきんちよども、絵本みたいにめくって騒いでるし」

「なんの本だろう？」

「仏像みたいだなあ」

上総から観ればただの写真集にしか写らなかったのだが、貴史は遠目からも詳しく観察していたようだった。

「ありがたやありがたやと拝んでいる人たちもいるけどさ、子どもからしたら超合金のロボットとおんなじようなもんだよなって、なんかなあ、思った」

「そう、なのか？」

発想が繋がらずどう尋ねてよいのかわからない。上総は頷きつつ貴史の言葉をゆっくり耳に流し込んだ。

「あんな感じでのんきに美術に絡んでいけばいいなあと、俺は最近思うわけなんだよ、どう思う？ 立村」

「それはそれでいいんじゃないか」

返事のしようがない。上総の認識からすれば、貴史がバスケットをやめて美術部一本に絞り込んだという事実に興味こそあれども、その対象となる美術そのものには答えようがないのだ。おもしろく思うのは、今まで鈴蘭優にしか興味をしめそうとしなかった貴史が、いきなりそれこそ「高尚」な美術について語り始めたことそのものだった。

「俺の記憶違いでなければ」

少し熱を冷ますように口を挟んだ。

「羽飛は中学の頃からそれこそそのんきに美術館をぐるぐる回っていただろう。ほら、中学二年の夏、やはり三人でわけのわからない現代美術展を観に行った時、やたらと盛り上がってた。俺はついていけなかったけど」

「あったな、そんなこと」

少しだけ間を空け、貴史は平手に拳固をぽんと納めた。

「宿泊研修の前な。お前あの頃からやたらと美術がわからねえとかなんとか言ってたけど、今はどうなんだよ。少しは、関心あるのか」

「絵が綺麗とかかわからないとかそういう認識だけはあるよ。羽飛や清坂氏から影響は受けた」

「ほうほうそれはよい影響だ」

おちゃらける貴史に上総は一言添えた。

「今日も羽飛は清坂氏と一緒に美術を堪能する予定なんだろう？ そのつもりで、来たんだろ？」

——気付いてないよな、きっと。

言葉の裏に秘めた問いを、さっぱりした貴史は全く気付いていないに違いない。

「ああ、もちろんだ。美里と芸術についてああだこうだつっこみあうのはいつものことだもんな。あいつ、時々とんでもねえこと口走るんだぞ。この前なんてな、『モナリザ』の顔に前髪つけてまゆ毛と付けまつげ描きたいとか言い出すしさ。後ろで聞いてた奴ら、みな瞬間接着剤で地面に靴の裏くっつけられたみたい に硬直してたなあ」

声を出して笑い出した。同時に図書館員の女性にびしりと注意された。

「お静かに願います」

さっきから図書室の中をけたたましく駆け回っている子どもたちには特段何も言うことのないのに、ずいぶんなことである。

「俺だけかよ、ったく」

たいして堪えた風でもなく、貴史は画集を選びに書棚へ向かった。

クーラーのほどよく利いた図書室の中で、上総は手帳を鞆から取り出した。

何かがゆっくりと流れ出している。

決して狙ったわけではないにしても、上総の思惑が自然と実現されてきている。

昨日の関崎襲来に関してもそうだし、霧島との件も同じ事だ。

一学期中なんとかせねばと考えていたさまざまな出来事が、少しずつ動き出している。

貴史と美里との繋がりについては予想外だったが、それでも勝手に当人同士がいいように道を拓き始めている。美術館で三人集おうと思いついたのが貴史というのがすべてを物語っている。かつて、宿泊研修前に貴史と美里が上総を差し置いて盛り上がっている様子を粒さに見つめてきただけに、感慨深いものがある。

——やはりそういうことなのか。

原点に帰る、ということか。

——羽飛が意識しているかどうかは別として、清坂氏と羽飛とはこれから先、もう一度この美術館で語り尽くすことによって、繋がりつづけようとするんだろうな。

たとえ美里の想いが関崎一直線だったとしても、結論は時間の問題、すぐに出るもの。

はたして貴史はそれを待ってから行動するのだろうか、それとも直球勝負に出ようとするのだろうか。わからない。そこまでは読み取れない。上総はそこまで思いを巡らせようとし、やめた。仮に自分がそんな風に掘り下げられたとしたらたまったものではない。

——ここから先は、もう余計なお世話だよな。

いったん開いた手帳を閉じ、しまいこんだ。

階段を降りてくる足音ですぐに気付いた。どたとだではなく、やたらと細かい音が響いた。駆け下りてきたのだろう。美里がテレホンカードを握り締め一度ぐるりと図書室内を見渡した。すぐに貴史と目が合い、走り寄った。

「おせえぞ美里、何しゃべってたんだよ」

顔をしかめて貴史が拳固を振り上げる。もちろん冗談のポーズだとわかりきっている。

「うるさい！ あんたがなんで怒るのよ。それよか立村くん、さっきの件だけど」

上総に向き直り、隣に座った。

「ちゃんとゆいちゃんには伝えておいたけど、霧島くんに伝えてもらえるかどうかはわからないよ」

「それでいい、いろいろ霧島さんもあるだろうし」

「そうなのよ、もう、大変だったんだから！」

力をこめて何度も美里は頷いた。かなり恩着せがましく感じる。

「久しぶりだし琴音ちゃんたちも含めて夏休みみんなで会おうよって誘ったのよ！ そしたらごめんねの一言もなく『私、行かない』しか言わないのよ！ そりゃ、あまりいい思い出がなかったかもしれないけど、私だって久しぶりにゆいちゃんに会いたいんだもん、わかるよね？」

その押し付けがましさが霧島ゆいに嫌がられた理由のようにも思う。永年の美里との付き合いで、余計な口を挟まない方がよいという教訓を得ている上総。

「でしょ、でしょ。立村くんわかるよね！」

「おいお前ずいぶん先走ってねえのか？ 難波にどやされるぞ」

至極ごもっともな助言である。貴史はやはり美里に関して鋭い。

「覚悟してるわよ。難波くんだってゆいちゃんが元気になってくれた方がいいに決まってるし話の内容を聞けば納得するはずよ。とにかく、ゆいちゃん全然乗ってこなくて、しょうがないから立村くんの伝言を伝えたのよ。霧島くん、この美術館に来るようになって」

「おいおい、立村、こんなところに呼び出してどうするんだ？」

今度貴史が突っ込む相手は上総である。重たい美術書……ちらっと覗き込んだところによると丸やら三角やらが大量にちりばめられているデザイン書のようなもの……を抱えたまま、ぐいと身を乗り出している。

「電話よりも直接話した方がいいかなと思ったんだ」

「お前をさんざんおちょくってる相手なのにか？」

「だから、なんだ」

短く、余計なことを伝えず上総は返事した。幸い美里が続きを話したくてうずうずしていた。隣にいるからむりやり会話を分捕ることができるわけだ。

「貴史、あんたは黙っててよ。とにかくゆいちゃんに伝えたけど、やっぱり仲良くないでしょ。ゆいちゃんと霧島くんとはね。立村くんが会いたがってるからって伝えたけど、やっぱりいやだったみたい。伝言はするけど、来るかどうか保証はしないよって」

無謀な頼みごとだったと自分でも思う。霧島弟の、姉に対する憎しみたるや壮絶なものがあった。あの状況だとおそらく、日常の挨拶も交わしていないのではないだろうか。

「ゆいちゃんだって、ちゃんと中学時代は青大附属の生徒だったんだもん、胸張って会いに来てくればいいのに。これ、小春ちゃんにも言えることなんだけどな。天羽くんが仲間に混じっているからあえて小春ちゃんには声かけしなかったけど、私にとってゆいちゃんは、一緒に三年間評議を続けてきた、かけがえのない仲間なんだもん。だから、学校が違うところになっても友達でいたいって思うよね？ 立村くん、どう思う？」

このパターンでおそらく東堂もまくし立てられたのだろう。で、思いきり美里は嫌われたということか。もちろん注意を促すこともできるが、それは自分の仕事ではない。やるなら目の前で話をうんうん聞いている羽飛貴史、お前がやれと言いたい。

「とにかく、伝えたけど、ねえ立村くん、聞いていい？」

「答えられることなら答えるよ」

「なんでそんなに、霧島くんのことを気にするのかなって」

美里が言葉をとぎらせつつ、小声で尋ねた。

「霧島くん、ゆいちゃんの同期を物凄く嫌ってて、難波くんもひどいこといっぱい言われて怒ってるし、天羽くんは霧島くんが入学してきたら叩きのめしてやるとか言ってるよ。悪いけど、高校に入ってきたら、生徒会役員にでもならない限り肩身狭いんじゃないかなって気がするの。立

村くんだってそのこと、知ってるよね。私だってゆいちゃんの味方だから、霧島くんあまり好きじゃないよ。いくらゆいちゃんのことでもいろいろいじめられたとしても、全校生徒の前で悪口言うのって失礼だと思うんだ。でしょ、でしょ」

——やはり、不思議だよな。

自分でも摩訶不思議なのだから当然だ。

説明をしておいた方がいいだろうか。

上総は簡潔に答えることとした。美里に長い台詞を聞かせても、誤解を招いて収拾つかなくなるのが怖かった。

「清坂氏、言いたいことはなんとなくわかる」

「俺には全然わからねえけど」

口を挟む貴史をちらと見て、上総は続けた。

「ただ、霧島さんの方が霧島と比べるとはるかに、味方が多いように見えるんだ」

「味方って、友だちだもん当たり前よ」

伝わらなかったのか美里が口を尖らした。

「今、清坂氏が遊びに誘ったのだからさ、きっと元C組の女子たちだってみな霧島さんを支えようとしているんじゃないかって気がするんだ」

「そりゃ、まあ、そうよね。評議委員だったんだし」

「相棒だった更科だっていろいろ気を遣ってただろ」

「まあね」

「でも、俺の知る限り、霧島にはそういう存在がいるように思えない」

「うっそお！」

今まで注意されなかったが、美里の「うっそお！」には図書館員より厳しい注意がなされた。思いっきりふくれっつらの美里と、一足お先に説教を食らっていた貴史との間に、奇妙な空気が流れた。上総を脇にクッションで押しやるような感覚が残っていた。

「と、いうことは、立村くん」

もう一度言葉を区切りつつ、美里は繰り返した。

「霧島くんを、先輩として、引っ張って行きたいの？ たとえば」

つまらなさそうにふたりを交互に見つめている貴史を無視したまま美里は、名前を挙げた。

「立村くんのことを、本条先輩が引き上げようとしたのと同じように」

——清坂氏、やはり鋭い。

話し始めた美里が頷いた時と同じくらいの大きさで、上総は首を立てに振った。

「俺は本条先輩になりたいのかもしれないな」

これ以上言葉を重ねる必要は感じなかった。美里もすぐに納得顔で、

「だいたいわかった。そういうことならもう、私は口出さないから大丈夫」

答えた後、付け加えた。

「大変だと思うけど、応援するね」

それだけ囁き、美里はすぐ立ち上がった。机を大回りして、貴史の隣に座りなおした。すぐに画集を肩並べて眺めつつ、

「これ、面白いよね、貴史」

すっきりした笑顔で話し掛けていた。

自由研究の話題なんてどこかへ行ってしまふのは織り込み済みだった。どうせ貴史や美里がそんな真面目な話だけで終わらせるわけがない。もちろん場所を考えると大声で騒ぐことが許されないのは、高校生の常識として理解はしている。ということでここは美術館地下一階の図書館。さっそく貴史が、もう一冊ひっぱり出してきた画集を広げてかくかくしかじか講釈している。殊勝に美里も拝聴している様子だった。

「この前な、金沢にひっばられて、水口たちのところへ会いに行ったんだ」

開いたページには少し明るめの画調で橙色の格子模様が果てしなく続いている絵が載っていた。話の内容を接ぎ穂して考えるに、どうやら現代美術の有名な作品らしい。

「金沢くんと？ でもなんで水口くんと？」

相槌を打ったのは美里の方だ。上総も初耳だったので黙って聞き入った。

「ほら、水口、医者になるための学校に行ってるって話知ってるだろ？ で、そこでな、たまたま金沢の好きな画家の展覧会が行われてるってことで俺も一緒に来いと誘われたわけ。せっかく行くなら水口にも声かけねばもったいないだろ？」

「あのさ、それもっと早く、私にも教えてくれたってよかったのに」

かなり不服そうに美里が呟いた。目つきがかなりきつい。

「展覧会だけだぞ？ それも美術館でやるんじゃないで、どっかの家の部屋で見せてもらう感じだったんだぞ。それだけなんだぞ。そんなつまらんところに誘ってどうする」

「だってすいくんがいるってことは、彰子ちゃんもいるってことじゃない？ 彰子ちゃんとお話することだってできたじゃないの。こずえも誘ってせっかくなら」

「やめろやめろ、やっぱり野郎だけで行って正解だったってよおくわかった。立村、そのわけ、大体わかるだろ」

促される。よくわかる。頷いた。さらに美里が納得行かない顔で今度は上総に食い下がる。

「ちょっとちょっと、どういうこと？ ねえ立村くんまでなんで貴史と同じ考えなわけ？」

「同じというわけじゃないけど、やはり女子を連れて行く場面じゃないと思う」

考えつつ、言葉を選びつつ、

「まず、羽飛は絵の勉強のため、出かけたただけであってそれ以外の目的は水口に会うことくらいだろ？」

「それはわかってるけど、でも一日中芸術論かましているわけじゃないんでしょ？」

手元の美術館パンフレットを開いて何度も机を叩いた。あまりやりすぎるとまた、チェックが入るだろう。美里に釣られて声を大きくしないように心がけた。

「清坂氏にはぴんどこないかもしれないけど、男子同士で顔を合わせる時、変な意味ではなく同性でないかわからない話題が出てくること、多いんだ。そうだろ、羽飛」

満足げに腕を組み頷く貴史。ちらっと視線だけ送り上総は続けた。

「女子がいても不思議はないと思うかもしれないけど、やはり、どこかで遠慮するものはどうし

でもあるんだよな」

「別に、エッチな話されても私、平気だよ」

「そういう意味じゃないって言ってるだろ。それこそ人生論とかいろいろ、結構固い話で盛り上がることもあって、正直あまり、女子には聞かれるのが照れくさいというかな。聞かれていたらまぜっかえされてしまいそうな内容のことも出てくることが多いんだ」

「私そんなこと、しないのに」

さらに口を尖らす美里に、上総は畳み掛けた。

「羽飛だけなら問題なかったと思うけど、金沢や水口もいろいろ思うところがあるんじゃないかって気がするんだ。俺もあのふたりと語り合ったことはあまりないけど、将来の方向性がはっきりしているのは共通している連中だしさ。そうだろ、羽飛」

腕を組んだまま、貴史は満足げに頷いた。

「立村、お前ひそかにテレパシー持ってねえの？ ほーら美里、よっく聞いとけ。立村の言う通り男同士でねえと語れない熱い話題だってあるんだぞ。こういう時にはお前がいくらもの申したくても口を出すもんじゃないねえの。いいか、東堂のことで美里、懲りてるだろ？」

美里は黙った。かなり鋭い一撃だったようだ。すでに東堂がらみの問題では貴史がうまく割って入ったはずとは聞いていたのだが、美里に対してどういう処置をしたのかまでは聞いていない。やっぱり言う時は貴史も遠慮なく言うのだ。幼なじみだから遠慮もない。それ以上触れずに貴史は話を締めた。

「まあな、水口情報によると奈良岡のねーさんも元気そうだし、夏休み中には菱本先生もクラス会やりたがっているし、なんか企画は立てる。その時で美里、いいだろ？」

「わかった、悪かったわね。男の水入らずを邪魔してばかりで！」

完全にご機嫌を損ねた美里は、むっとしたまま両手をこぶしにして頬杖をついた。

「それにしてもさっきから気になってるんだけど」

大きな瞳をぎょろっとさせ、上総に尋ねてきた。

「立村くんってさっきからずいぶん、私と貴史の顔見て、楽しそうにしてるよね。それ、なんで？」

何にも考えていなかった。ただなんとなくふたりの話題に聞き入り、時折相槌を打つだけだった。美里の質問は思いっきり不意打ちだった。

「そう見えるか？」

美里だけではなく貴史も大きく共感の頷きを返してきた。

「俺も美里の意見に賛成。いつもだったら早く終わってくれねえかって顔して退屈そうに指弾いたりしてるだろ。それが窓ばかりみているか」

「そんな失礼なことしたつもりはないけど」

心外だ。親にそういう振る舞いは許されざるものとして睨られてきたから、当然だ。

なのに貴史も美里とも大きく首を振る。

「なんとなくそういう感じってのは、あったよね。貴史もわかる？ 立村くんって愛想よく話を

聞いてくれていると思わせておいて、実はみんな聞き流してるってこと多いよね」

「そういうこと。目はこっち向いてるけど、幽体離脱して気持ちが外をゆうらゆうらしているってのが、一番近いかな」

「ふたりともものすごく、俺に失礼なこと言っているって意識あるのかな」

軽く反撃すると、またふたり、シンクロするように首を振る。

「失礼じゃないよ。それ、褒めてるんだよ。褒めてるって言い方が変なら認めてるってこと」

「悪く取るんじゃないよ。要はお前、俺たちの話、ずいぶん楽しそうに聞いてて、こちらとしてはすげえいい気分だなんて、それだけ伝えたかっただけじゃねえの？ 美里、そうだろ？」

最初はおちんときた言葉だったけど、なんとなく貴史たちの和やかな説明に納得させられてしまった。その通りかもしれない、そう思えた。

「いや、清坂氏が怒った顔して俺に話し掛けてきたから、何かつかかりたいのかなと用心しただけだよ」

「そっちの方が物凄く失礼だと思うけど！」

言葉とは反対に、美里の顔に浮かんでいたむっすりしたものは消えていた。

——でも、そうかもしれないな。

すぐに次の話へ進んでいる貴史と美里を交互に眺めやりつつ、心穏やかに聞いていられるのは事実だった。美里の指摘はまったくごもつともと言うしかない。

中学時代からずっとトリオで行動することが多かったけれども、卒業式を迎えるまでは今の心持で過ごしたことは殆どなかったような気がする。出会いの頃は三年以上前で記憶も曖昧だけど、それでもまだ糊のきいた緊張感がどこかかしらに隠れていたようだった。

物心ついてからいつも感じてきたことだし、そういうものだと思っていた。

むしろ「なくなった」時の肩の軽さを知らなかった。

中学二年の夏休み中もこの美術館で、貴史と美里はふたりの世界でひたすらわけのわからない美術作品を指差したり笑ったり駆け回ったりと忙しくしていた。二年前の上総はそのふたりについていけず、疎外感を味わっていたはずだった。あの頃と比べてふたりの性格が変わったわけではないのに、なぜ今の自分がかもし出される空気にほっとしていられるのだろうか。自分でもわからなかった。ただこのままでいたい、そう思った。

——それにしても、あいつは来るのだろうか。

ふたりの会話が、上総の知らないテレビ番組の話題……とりあえず鈴蘭優でも「砂のマレイ」でもないことは理解した……にシフトした段階で上総は、ほんの少しだけ意識を外に向けた。このくらいの「幽体離脱」気分は許されるだろう。

待ち人が現れたのは、それからまもなくだった。

「あれ、あいつじゃねえの？」

上総が振り返った時、そいつはなぜか薄いジャケットを羽織って入り口に突っ立っていた。

——暑いだろうに、その格好だと。なんてこんな暑苦しい格好してきたんだろう？

呟いて気がついた。夏でもジャケットを手放さないのは、かつての自分が心がけてきたことの

ひとつだったから。

霧島はすぐに上総を見つけたらしく、まずしゃちほこばった風に一礼した。急ぎ足でないのは余裕を見せたいからなのか。いかにも青大附中の生徒会副会長の顔をこしらえて、慇懃無礼な態度でもってまず美里に声をかけた。

「清坂先輩、御連絡をありがとうございます」

「ゆいちゃんに頼んでおいたこと、聞いてくれた？」

何か尋ねたのだろうか。上総が口を開けかけるとすぐ霧島が遮った。

「必要最低限のことは確かに」

「そうなの、けどね、霧島くん」

少し気の張った言葉をぶつけようとしていたようだ。美里のこういう発言が飛び出してしまうと、また場が荒れないとも限らない。瞬時に上総は立ち上がった。今の段階では美里には黙っててもらわないと困るからだ。

「霧島、これ」

自分の小さな鞆を片手で引っ張り出し、一步霧島に近づき、腹に押し付けた。

「はあ」

「話は外に行ってからにする」

きっぱり言い放ち、改めて貴史と美里に片手を挙げた。

「また後で連絡するよ。自由研究のことはまた改めて相談するけど」

言葉を切り、今度は貴史を見据えた。美里には今の段階で話すべきことをすべて伝えきった。あとは貴史だけだ。

「羽飛、悪いけどやりたいこととかテーマはふたりで決めてもらえないか。今日の段階でできれば」

「おいおいどうしたよお前」

霧島に対してはほぼ初対面に近い貴史だけに、かなり用心深く様子を伺っているようだった。だが今のところはどうでもいい。まずは伝えるべきことだけ忘れないようにしたい。

「決めてもらえれば俺はそれに従うから。また、明日な」

最後に美里にも視線だけ向け、上総は隣で突っ立っている霧島の脇をそのまますり抜けた。

階段を昇ろうとしたところで、追いかけてきた霧島に呼び止められた。

「なんなんですか、いきなり人に荷物を押し付けるとは」

またかたくなな口調でもって霧島が、上総の鞆を無理やり押し付けようとした。

「僕を荷物持ちにするつもりですか」

「そういうつもりじゃないけど、今日はとりあえず俺の言う通りにしてもらえないか。まず外に出よう」

上総は受け取らず背後の霧島にも振り返らず階段を昇り、出口に向かった。

「何考えてるんですか」

ぶつぶつ呟く霧島の声聞きながら、上総は改めて覚悟を決めた。

——今、俺が本条先輩の立場だとしたらどうするか、だよな。

昼過ぎということでだいぶ人が増えてきたようだった。クーラーの聞いた薄暗い美術館エントランスから出るとすぐ、じんわり身体から汗が噴き出したようだった。

この日初めて上総は霧島に振り返った。

「いきなり呼び出して悪かった」

「何様のおつもりですか。よりによって清坂先輩を使うとは。しかもあの無能な姉などに伝言させるとは。もし間違っただらどうするつもりだったのですか。姉の馬鹿さ加減はよくご存知でしょう。市立美術館をもし市立博物館と言い間違えていたら僕はとんだ無駄足を踏むはめになったのですよ」

甲高い声でまくし立てる霧島の顔を観察した。

——動揺はしているようだな。

霧島とこの二ヶ月ほど接して来てよくわかった。何か予想のつかない出来事が起こりパニックを起こすと霧島は舌鋒鋭く攻撃してごまかそうとする。もしくは冷静沈着なふりをして頬だけひきつらせつつ意味不明な発言をするかのどちらかだ。限りなく杉本梨南に似ている。

——どちらにしてもきちんと話はしないとな。

上総はタイミングを待った。こういうタイプは切り出し方をしくじるとぱたっと心を閉じてしまう。自分もそうだからよくわかる。

「まずはついて来い。それからだ」

「なんですか偉そうに。申し忘れておりましたが立村先輩、先日、関崎先輩と直にお話しましたが」

ぱたと足が留まる。そういえば昨日、関崎もそんな話をしていたような気がする。

「そうか」

険悪なぶつかり合いにはならなかったらしい、そんな感じだったはずだ。

「俺の言った通りだっただろう。関崎はいい奴だ」

「確かに立村先輩よりは賢い方ですね。公立中学上がりには思えません」

一歩ずつ前に進む。肩を並べたくない。横顔を覗かれない。

「そうか」

機械的に答えた。さらにトーン高く霧島は続け、追いかけてくる。

「物事に対して何事にも全力投球されるタイプの方とは前回お話しした時も感じてましたが、あれなら上級生受けもするでしょうね」

自分からみて先輩にも関わらず「上級生受け」と言う始末。

——こういうところが天羽たちのいらだつところなのかもしれないな。

本人が意識してやっていることではないからなおさらたちが悪い。

人を見下すようなその言い方は、現段階ではきちんとした肩書があるから認められているけれども、仮に野に下りて平の生徒に戻った瞬間しっぺ返しを食らうだろう。現に、元評議委員長だ

った上総は中学三年後期でその惨めさをたっぷり味わった。

「僕の見立てでは関崎先輩、確実に上級生たちの庇護を得て、生徒会長に昇り詰めますね」

「生徒会長、か」

いや、それはないだろう。いくら関崎を見込んだとはいえ、それはオーバーな表現に思えた。能力うんぬんの問題ではなく、附属上がりの連中が公立上がりの関崎を受け入れるとは到底思えない。天羽や難波だけではない、仮に評議委員長、「委員」クラスならそれなりに任命されても違和感はないだろう。しかし生徒会長となると今度は附属生たちのプライドが許さないのではないだろうか。

——単に、霧島は自分が生徒会関係者だからその枠でしか見られないだけなんだろうな。

視野が狭いだけなのかもしれない。上総は聞き流した。ひっかかってしまう澱は、霧島が明らかに上総よりも関崎を高く評価しているということだけだった。

「俺の話した通りだろう」

同じことを繰り返し、次の一手を待つ。

「立村先輩、ですが正直、あの人には難点がありますね」

「公立上がりということか」

やはりわかっているのだろうか。用心深く問うと、

「いえ、先輩受けはするでしょうが、後輩受けはしないタイプではないかと判断しました」

「後輩受けか」

少しひっかかる表現だが、さっきひっかかった澱のようなものがするっと取れたのを感じてしまう。やはりまだ、顔を見られたくない。足早に目的地へと急いだ。しっかりと霧島も着いてくるが、息が上がっているのが言葉の切れ切れ加減で伝わってくる。

「その、通りです。関崎先輩は確かに有能でしょうが、結局のところ誰かに使われるだけではないでしょうか。そういう印象を受けました。この前のような藤沖先輩がらみの事件においてもそうです。あれは藤沖先輩が手を回し、関崎先輩の正義感に火を点けたからであって、失礼ながらご自分の意志で行動したものとはどうしても思えませんでした。その点、うちの生徒会長である佐賀先輩の方が自主的に指示を出し行動をされています」

——本当は佐川の指示に従っているのかもしれないが。

この辺は飲み込んでおく。

「もちろん、関崎先輩派につけば僕も安泰でしょう。僕なりに高校進学以降どの派閥につくべきかはよくよく考えております。なにせ僕は先輩に恵まれなかったものですからね。しかしそんなことは高校に進学すれば言ってもらえなくなるでしょう。僕も高校では生徒会でそれなりに権力を握りたい気持ちはあります」

——そこまで言っているのか。この調子だと仮に青大附中の生徒会改選で会長になり損ねたら確実に一歩乱起きるな。

別のところで心配する。一年前の杉本梨南の件で心身ともにぼろぼろとなった上総には、耐え難いことである。二度目は勘弁してほしい。

どちらにしても霧島は野心家であるということだけよく理解した。そうか、そうか。生徒会に

拘りたいわけだ。

——だが、霧島、本当にこのままの性格で高校に入学したら、恐ろしいことになるぞ。まずは杉本の現状をよくよく見ろ。杉本も自業自得と言われればそれまでだが、仮に何事もなければ評議委員長か生徒会長に任命されていたかもしれないのに、あの毒舌で身ぐるみはがれたようなものなんだし。女子同士は言葉だけの嫌がらせですんだけど、男子は怖いぞ。腕力で片がつく世界なのに。それもまさか、気づかないでいるのか？

本当だったらすべてこの台詞を霧島にぶつきたい。

「先輩に恵まれていない」霧島に。

たぶん、上総以外にそのことを伝えようとする相手はいないと思う。仮に霧島をかばったとしたら、たぶんその場で村八分になるだろう。王子様を思わせる端正な外見でもって、女子たちからはアイドル扱いされるかもしれないが、男子の政治世界での鉄則を破る奴には制裁が与えられるはずだ。そんな危険な賭けに出たいと思う奴は、まずいない。

今の霧島に伝えねばならないメッセージはたくさんありすぎる。

姉に対する言動の酷さも、渋谷名美子への残酷な言葉の数々も。

王子様仮面の奥でがたがた震えるしょぼくれた中学生の顔も。

「尊敬する先輩なんかいない」と言いながら、なぜか上総にはわけのわからない理由をくっつけて絡んでくる。「敬意」ではないだろうが、ほんの一言上総が美里に伝言を頼み呼び出しただけで、わざわざきっちりしたジャケットを羽織ってやってくる始末だ。

言葉とは裏腹に、かまってほしいという全身からの叫びが汗と一緒に飛び散っているようだった。それを見出すことができたのは、今のところ上総しかいない。

「ですので、僕はやはり、じっくり観察しつつ時を伺うつもりです。まあ、まず最初に中学の生徒会長としての仕事が待っておりますのでそこから考えるとして、その間に少しずつでも高校の先輩たちとコンタクトを取らせていただこうと思っております。ですが、あまり目立つ方ですと僕の言動が筒抜けになる可能性もありますし、尊敬のできない愚かな先輩と繋がってしまえばまた、今回の渋谷先輩のように余計なことを押し付けられる可能性もあります。ということで現在僕は」

足を速めた。できればそこから先の言葉は聞きたくない。

「立村先輩から情報を頂くことで、高校進学以降の身の振り方を静かに考えられればベストでしょう。どうせ立村先輩は今のところ、野に下りているわけですし、さほど上級生の先輩たちから目をつけられているわけでもないですしね」

——確かにその通りだが。

上総は深く溜息をついた。先が思いやられる。これはもう覚悟するしかない。徒歩五分、もう目的地にたどり着いた。美術館側のゲームセンターだ。

「霧島、悪いが二階の卓球台が空いているかどうか見てきてくれ」

はっきり指示を出した。明らかに戸惑った顔の霧島が、立ち止まった上総の前に回りこんだ。

「どういうことですか？」

「卓球台を押さえてほしい。たぶん空いていると思うが、先に行ってくれ」

「そこまで僕をこき使うつもりですか」

またヒステリックに叫びそうになる霧島を、上総は笑いをこらえつつもう一度命令した。  
「卓球台の受付は一階だ、そこで聞いて予約を今すぐ、入れてくれ」

本条先輩からもらったアドバイスを上総は記憶していた。

——お前の得意な卓球でもいい。とにかく思いっきり叩きのめして、その後でここのとんこつラーメンでもおごってやれば、大抵のいざこざは片付くものなんだぞ。

霧島に対する対応について、聞いた当時は本条先輩の意図するところが全く理解できなかった。ただ「本条先輩だから」意味があるのだろうと聞き流していただけた。

——そうだな、本条先輩も卓球だけは、俺に勝てなかった。

素人卓球のレベルだし、ドライブマンとかカットマンとかそういう専門用語も全くわからない。ただ、他のスポーツと比較して自分には向いていることくらいは感じていた。部活に参加することを勧められたのも一度や二度ではないが、すべて断ってきた。運動部に所属なんてまっぴらだ。それならまだ、委員会活動や生徒会の方がはるかにましだ。

——あの本条先輩ですら、俺には勝てなかったということは。

仮に霧島が、卓球の才能を隠し持っていることでもなければ、まず七割方の力で上総は勝つことができるだろう。卓球部に入っていたという話は聞いたことがない。運動能力は先日のボーリングでもそれなりに感じたが可もなく不可もなくといったレベルのようだ。運動音痴ではないけれども、ずば抜けた能力もない、ということだ。

——俺が確実に勝つことのできるものは、まず卓球だけだ。

英語能力はおそらく学年トップの霧島相手だと、少々心もとない。

だが卓球だけなら、奴を負かすことができる。

つまり負かすことができれば、

——思い切り叩きのめして、その後でとんこつラーメン、か。

自分ではやり方がなんとなく汚いようにも感じるが、あの本条先輩が教えてくれた言葉だ。まずはそれに頼ってみよう決めていた。

おそらく霧島は、なんらかの理由付けでもって、上総にちょっかいを出す権利を欲しがっているのだろう。上総なりに観察して出した結論としては、覚悟を決めて霧島の面倒を見るしかなかろうということだった。天羽や難波にはどう説明すべきか、これから考えねばならないのだが少し頭をひねればなんとかなるだろう。とにかく、霧島が高校に入学してくるまでには不必要なトラブルが……杉本梨南のように言いがかりや濡れ衣まで着せられてしまう可能性大なのだから……起こらないように、手を回す必要がある。

かつて本条先輩が早い段階で上総を見つけ、評議委員会で浮かないようにひいきしてくれた時と同じだろう。こうやって霧島と対話を重ねていくにつれてつくづく思う。

——本条先輩を、俺は死ぬほど困らせていたのかもな。

「親の心子知らず」とはよく言うけれども、その言葉の意味が他人事ではなくよく理解できる。もっとも上総は母や菱本先生の気持ちを感じるつもりなどさらさらないが。

——本条先輩はきっと、俺があんまりにも生意気なことばかり言って顰蹙買っているのをどこかで見抜いていたんだろう。もし本条先輩が俺をかばってくれなかったら、たぶん学校でもまた嫌われ者扱いされていただろうし、早い段階で評議委員から外されていたに決まっている。結局本条先輩のくれたチャンスは生かせなかったけど、今でも俺には先輩の教えてくれたノウハウが残っている。ほら、今だってそうだ。直後には気づかなかった言葉が、霧島に役立つ寸前だ。

しかたなさそうに霧島が受付へと向かった。ゆっくりと中に入り、結果を聞く。

「どうだった？」

受付の女性に冷たく愛想笑いをしつつ、霧島は上総に答えた。

「誰もいないそうです」

「やはりな」

予想通りだ。ここの卓球台は昼間よりも夕方以降の方が、人の入りが多いのだ。

「人気のないスポーツだからでしょう」

「そうでもないと思うが、まずラケットだけ借りるか」

鞆をそのまま持たせ、上総は霧島より先にエレベーターの前に立った。ボタンを押して待った。霧島がまだぶつくさ言っている。

「何が楽しくて、卓球なんですか」

——俺が唯一、お前に勝つことのできるスポーツだからな。

もちろん、これは口にできない。

よく南雲や貴史を相手にストレス解消する場がここの卓球場だった。一階はゲームの電子音で溢れているけれども、二階に昇ると嘘のように静かになる。もともと卓球は防音がしっかりしていないとまずいスポーツなので、きっとそのあたりにも理由があるのだろう。

体育館半分程度の小さな卓球場だが、クーラーがあまり利いていないこともあってずいぶん蒸している。この卓球場が人を集めるにはまず、

「もう少し涼しくならないんですか」

「お前はジャケットを脱いだ方がいい。どうせ下は半そでだろう？」

冗談めかしていうと、霧島はなぜか素直に脱ぎ出した。口先だけ、行動は素直だ。

上総も羽織りものを脱いだ後、ロッカーにしまいこんだ。

「卓球はやったことあるだろう？」

「ばかにしないでください。学校の体育でやりますよ」

「つまり、その程度だな」

念のため確認した。

「そうですよ。立村先輩のように卓球しかできないわけではありませんしね」

早口に、きんきん響く声で霧島は嫌味をひとつぶつけてきた。卓球しか球技大会の際は出番がない上総の立場をよく知っている。

「霧島、一試合する前に賭けをしないか」

上総は霧島の立っている台の反対側に立ち、真正面から声をかけた。もちろんラケットとピン

ポンは持ったままだ。まだサービスしないので台に張り付く格好でいる。適度な距離がネットの向こうに広がっているようだった。誰もいない卓球場。

一番左端の台で上総は続けた。

「一度でも俺に勝てたら、例の本を返してやる」

「例の、本？」

わからないわけがない。言葉にした後で絶句した様子だ。口元がわなないている。

「そうだ、あの本。いくらなんでも俺には年上趣味なんてない。早く手放したいんだ」

ただ、と言葉を切った。霧島は言葉を発せずそのままじっと上総を見返していた。

やはり杉本梨南と同じ瞳だった。

強そうに見せかけて、実はいつ壊れるかを恐れている眼差しだった。

——俺の読みは間違っていない。

確信した。かつて上総自身が本条先輩の前でおどおどびくびくしていた頃の表情と、たぶん同じものはずだ。卑屈なくせに強気でいようとするみっともない自分を、それでも本条先輩は受け入れてくれた。認めてくれた。

本条先輩だけではない、貴史も美里もそうだ。いつも心安らげずおびえていた上総を、長い時間かけて待ちつづけてくれた。だから、ずっと穏やかに今、ふたりの想いを見守ってられる。自分にとって着いていけない芸術談義を繰り広げられても淋しさを感じずにいられる。まだまだ受け入れられない情けない自分がいて、杉本梨南のようにいつのまにか勝手に成長してしまい落ち込んでしまったりもするけれども、今なら次にどのような手を打つべきか考える余裕がある。明日はどちらにしても杉本梨南を捕まえてじっくり話をしたい、そのためにはどうすればいいのか？ その手段を今は前向きに考えられる。

——うまくやり過ごしていく方法さえ知れば、きっと杉本も、霧島も今の俺のように少しは楽になるかもしれない。よけいなおせっかいかもしれないけれども、俺はそれを伝える時期に来たんだろうな。どうせ関崎みたいに賢くないし、羽飛みたいに後輩受けはよくないし、南雲みたいに女子受けはよくないけど、それでもこのふたりだけは、俺の言葉を受け取ってくれる可能性があるはずだ。それに。

霧島自身も、上総の言葉を欲している。それだけは確認したかった。

単刀直入に問えば、プライドが天まで届くほど高い霧島のこと、すぐにヒステリックにわめくに違いない。ならば、答えやすい問いをこしらえればよいことだ。

「何をおっしゃりたいのですか」

霧島が意を決したという風に言葉を発した。

「一方的ではありませんか」

「そうだな、一方的な提案だけど」

唇を少し噛みしめ、残りの言葉を告げた。

「たぶん俺に霧島が勝つことができるとすれば、三年以上かかるんじゃないかな。分かると思うけど、三年というのは、俺が留年せずに青大附高を卒業できる年の分だけ」

「三年間……」

もう一度、霧島が呟いた。

「卒業まで、そんな自信があるんですか？」

「あるよ、今から球を送るからまずためしてみようか」

一步、台から離れた。台から離れたところで打たないとルール違反になってしまう。霧島を手でやはり離れるよう指示し、上総は白い球を手のひらにきちんと載せた。軽い球をふんわり浮かせ、やわらかくサービスした。霧島が打ち返しやすい球を送ったつもりだった。

下から掬うようにして、霧島が拾い上げ上総に球を返してきた。高い位置の、甘い球。まさにスマッシュお待ちしてますと言っているような、わかりやすい球だった。

手加減はしなかった。

回転をつけ、一気に斜め左の区画へと打ち込んだ。

霧島は手を出す間もなく、ぽかんとその球を見つめていた。床に転がった球を拾うことも忘れていたようだった。本気のサーブを決めてしまったから、きっと手も足も出なかったに違いない。上総だって、ああいうサーブを決めるのは、球技大会決勝で卓球部所属者と当たった時だけに限られている。

「たぶん三年間、俺はあの本を預かる羽目になる。いやおうなく、俺はお前に構うことになる。お前がどんなに嫌がっても、俺はしつこく声をかけることになる。生徒会関係者や女子たちはえらく同情すると思うよ。迷惑がられているのに、俺の方から一方的に付きまとわれてるわけだしさ」

暫くふたりとも、黙ったまま向かい合うだけだった。上総は霧島の反応を待った。

あの写真集を返す返さないであれだけもめた理由を突き詰めた結果の答えだった。

だったら、返さなければいい。返さない理由付けをすればよい。

誰に言うでもない、霧島が納得する理由をだ。

自分の本を三年間取り上げられ、返してほしいければ買ってみろ、そう脅されたのならば悪役はあくまでも上総だろう。そして一番勝ち目のない卓球というスポーツで勝負されたのならば、あくどいのもやはり上総の方になる。本の内容および裏事情を一切話さなければ、上総が後輩を脅しているという名目でもって、霧島が上総に付き従わざるを得ないという設定が出来上がる。少なくとも、霧島自身が求めて上総にくっついていくわけではない、そういう形になるし、そうすれば天羽や難波も納得するだろう。

表向きだけでもそういう形にしておけば、上総が何かかしら霧島を呼び出してしかりついたり文句を言ったりする時も違和感なく周囲からは見られるだろう。さすがに本条先輩との時みたいにホモ説なんぞは流布しないだろう。上総が馬鹿にされるのはいつものことだし、この案ならば霧島の高い鼻も折れずにすむだろう。

もっとも卓球の腕以前の問題として、霧島には三年間で片のつく問題がどのくらいあるのか、それを考えるとさらに頭がいたくなるのだが……。

「立村先輩」

声をかけてきたのは霧島だった。もうそこに、不安げな揺らぎの眼差しは見当たらなかった。かわりにしっかりした口調できびきびと答えた。

「わかりました。その賭け、乗りましょう。僕が三年間一度も立村先輩に勝てないなんてばかなことをおっしゃらないでいただきたいんですが、しかたありません。三年間のうちに必ず僕は、立村先輩に勝ちます。絶対に！」

その後付け加えた。

「ただ、僕にまわりついてこられるのでしたら最低限、僕にふさわしいレベルでいていただかないとこれから迷惑します。その点だけはよろしくお願いします。仮にも僕は、生徒会副会長ですから」

「たとえば、どういうレベルなんだろう」

拾い上げた白い球を上総は指先でつまみつつ尋ねた。

言われた意味がすぐにつかめなかった。

「立村先輩、僕にこれからしつこく付きまとうつもりでしたら条件があります」

霧島の声が、ふたりだけの卓球場に響き渡った。

「評議委員会に復帰してください。それから、関崎先輩や藤沖先輩と戦ってください」

——戦う？ 復帰？ 一体何考えてるんだ？

戸惑い声が出なくなった上総に畳み掛けた。

「立場の問題です。僕から先輩に話しかけることができません」

ささやき声のように一言洩れた。

静かな室内だから、すべて上総の耳に届いた。

「でないと、僕が困ります」

「なんで」

きつとした眼差しで霧島は答えた。

「僕はこれから三年間、立村先輩の弟分となるのですから当然です」

自分の深い芯に当たる部分が、ずぶりと刺された。

上総は確かに霧島の兄貴分になろうと心を決めていた。

実質的に杉本梨南も妹分扱いをしているけれども、杉本本人から「私は立村先輩の妹分です」といった申告を受けたこともない。

「霧島、繰り返すけどそんなこと言ったらまた周りから」

言いかけた上総を、突然テンション高くなった霧島に遮られた。

「いいんです。僕さえしっかりしていて、立村先輩が評議委員長に復帰していただければ丸くおさまります。それよりも、どうせ僕が三年間立村先輩に勝てないのならば卓球なんてやっても無駄でしょう。それならばむしろ、場所を移動して今後の青大附中生徒会および、藤沖先輩や関崎先輩との事情についてもっと詳しく教えてください。僕は生徒会副会長として知っておかねばならないこともありますから。そうだ、あと自由研究についてただいまデータを集めているところなんですが、それについて二、三おうかがいしてよろしいですか？」

いったい何が起こったというのだろうか。とにかく上総の目に見えるのは、霧島がひたすら舞い上がっている様子だけだった。なぜこんなにはしゃいでいるのか見当がつかない。ばれたらどうするんだろうか。これだけ気を遣ったというのにそっちには興味を示さず、「立村上総の弟分になる」ということにのみ過剰な執着を持っているようだった。

「では、申し訳ありませんがこのラケットを回収いたします。もうここ出ましょう。こんな不毛な場所で時間をつぶすのはもったいないです。立村先輩はむしろ、杉本先輩の今後についてとかそちらの方にご興味がおありなのではないですか？ 僕はそれなりに情報を持っておりますので、まず場所を替えましょう。どこがいいですか。先輩の御宅はどこですか？」

口を挟む間もない。聞かれたことにだけ返事をするので精一杯だった。

「あ、ああ、品山だ、遠いよ」

「自転車ならばどこでもいけます。立村先輩、せっかくですので先輩の御宅で内密の話をさせていただいてよろしいですか？ もちろん、飲み物食べ物僕が調達していきます。先輩、いかがでしょうか。人に見られないところでの話なら、先輩のご自宅が一番です」

——こいつ、俺の家に押しかけるつもりなのかよ……。

文句を一言言おうとした時、霧島が振り返った。ロッカーから荷物を取り出している最中だった。

「立村先輩、行き方なんですが自転車だとどのくらいかかりますか」

「だいたい一時間くらいかな」

投げやりに答えようとし、ふと霧島の顔に視線が留まった。

「霧島」

「なんですか？」

霧島の端正なつくりの目鼻立ちが、満面の笑顔で覆われていた。

さっきは細い針で刺さっただけだが、今度は正真正銘、心の奥の芯をナイフで貫かれた。

——霧島が、顔を崩すくらい笑ってるんだけどさ、そんなに嬉しいのか？ 本当に、俺の弟分になれることが嬉しいものなのか？

問いたくとも答えてもらえそうにない設問を、やはり心で問い掛ける。

——本当に俺でいいのか？ 嫌われ者の俺で本当に？ しつこいようだけど、選択の危険ありだぞ。

何度も確認してみる。繰り返すたびに心の奥底で震える感情がいとおしくなる。もしそうならば、霧島は上総によってこの満面たる笑顔を得ることができたわけだ。

それを引き出すことができるなら、やたらと手間のかかる弟・妹のふたりをこれからも面倒見ていくのも悪くはないように思えた。

霧島にぐりぐりと突き刺された心の「芯」を、次は上総がやり返す番だ。これから先霧島をどう育てていくか、上総にしかわからない傷を見つけていくか、全くわからないけれどもせめて、本条先輩がしてくれた程度には返したいと思う。今までたったひとり、プライドだけで守られてきたひとりの後輩の道を、少しでも歩きやすい場所へと誘いたい。

——本条先輩。

上総はそっとどこかの本条先輩に呼びかけた。

——先輩が俺を気に入ってくれたのはどうしてですか。どうして俺を評価してくれたんですか。

中学の頃からの問いかけに、本条先輩は答えてくれたことなど殆どなかった。

でも、今ならほんの少しだけ理解できたような気がした。性格とかそういったものではなく、素直に慕われることが嬉しい、本当はそれだけだったんかもしれないと。

——つい一時間前まで、勝手に慕われることなんて重たいだけだと思っていたのに、なんでだろう、今はこんなに懐かれることが気持ちよくてならない。笑顔を向けられることが嬉しい、それだけなのに、本当にあとは性格についても考え方についても腹立つこと一杯あるのに、俺に懐いてくれているというだけで、許せてしまうのはなんでなんだろう。

答えはたぶん、まだ見つからない。でも今は、それでよかった。

「霧島、わかった、俺の家に今から連れていく」

上総は霧島の背に近づき声をかけた。慌てて笑顔を隠そうとし、こけている霧島をあえて見ないふりして流した。

いやでもこれからは上総が見守りつづけることになるのだ。照れ隠ししている相手を見逃してもたいしたことではない。

——終——

## 深を射す

<http://p.booklog.jp/book/78084>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78084>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78084>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ